一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第15集

船越高原Ａ遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

２００１

福岡県教育委員会

一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第15集

船越高原A遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

船越高原Ａ遺跡Ⅰ区第３遺構面全景（東を望む）

浮羽バイパス路線遠景（西を望む）

浮羽バイパス10地点全景（東を望む）

序

福岡県教育委員会では、建設省九州地方建設局（国土交通省九州地方整備局）の委託を受け、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。昭和54（1979）年に調査を開始して以来、９遺跡の調査を完了し、既に一部が一般供用されています。

この報告書は、平成８～12（1996～2000）年度に発掘調査を実施した浮羽郡田主丸町大字船越、吉井町大字長栖に所在する船越高原Ａ遺跡の記録です。本遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれ、自然の恩恵を受けた緑豊かな場所に位置しています。今回の調査では弥生時代から中世までの集落遺跡を確認し、この地で連綿と営まれ続けた人々の生活の新たな一面に触れることができました。

本書が地域文化の研究や文化財愛護思想の普及および学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び出土遺物の整理作業や報告書作成にあたって、多くの方々にご協力・ご助言いただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成13年３月30日

福岡県教育委員会教育長

光安　常喜

例　言

1．この報告書は、平成８（1996）年度から平成12（2000）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現、国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した、一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査の記録で、一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第15集である。

2．本書に掲載した船越高原Ａ遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第10地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字船越・吉井町大字長栖他に所在する。

3．船越高原Ａ遺跡の報告は平成11年度以降、数ヵ年に分けて実施するが、平成11年度はＩ区古墳時代以降の遺構・遺物について報告した。平成12年度はＩ区の弥生時代の遺構・遺物を報告し、平成13年度はII・III区の遺構・遺物を報告する予定である。

4．本書に掲載した遺構図は、齋部麻矢・秦憲二・吉田東明・森井啓次・今井涼子・進村真之が作成した。なお、作成にあたり、飯田澄枝・石橋丸子・大塚弘子・山口由美子らの協力を得た。掲載した遺構図の方位は全て座標北（G.N）である。

5．本書に掲載した遺構写真は齋部・秦・吉田・森井・今井・進村が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は空中写真企画に委託した。

6．出土遺物の整理・復元作業は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。

7．出土遺物の実測は調査担当者の他、平田春美・棚町陽子・久富美智子・若松三枝子・坂田順子・田中典子らの協力を得た。

8．遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子が行った。

9．出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。

10．本書の執筆は齋部・秦・吉田・今井・進村が分担し、編集は進村が行った。

本 文 目 次

序
例言
I　はじめに
1．調査の経過……1
2．調査の組織……1
II　遺跡の位置と歴史的環境
1．地理的環境……3
2．歴史的環境……5
III　発掘調査の記録
1．基本層序……7
2．竪穴住居跡……7
3．掘立柱建物……97
4．土坑……98
5．溝……158
6．ピット・包含層出土土器……176
7．補遺……208
IV　おわりに

図 版 目 次

巻頭図版　1　船越高原A遺跡I区第3遺構面全景（東を望む）
2　浮羽バイパス路線遠景（西を望む）
3　浮羽バイパス10地点全景（東を望む）
図版－1　1　I区第3遺構面東部分全景（空中写真）
2　I区第3遺構面西部分全景（空中写真）
図版－2　1　I区第3遺構面東部分西半（空中写真）
2　I区第3遺構面東部分東半（空中写真）
図版－3　1　37・38・39号竪穴住居跡（北から）
2　37号竪穴住居跡断面
3　40・41号竪穴住居跡・19号土坑（北から）
図版－4　1　42号竪穴住居跡（西から）
2　52号竪穴住居跡（東から）
3　54号竪穴住居跡（東から）
図版－5　1　55号竪穴住居跡（西から）
2　56号竪穴住居跡（東から）
3　57号竪穴住居跡（南から）
図版－6　1　58号竪穴住居跡（南東から）
2　58号竪穴住居跡炉（南東から）
3　60号竪穴住居跡（北東から）
図版－7　1　60号竪穴住居跡炉（北東から）
2　61号竪穴住居跡（北から）
3　62号竪穴住居跡（東から）
図版－8　1　63号竪穴住居跡（北から）
2　64号竪穴住居跡（東から）
3　65号竪穴住居跡（東から）

図版－9　1　66号竪穴住居跡（西から）
　　2　67号竪穴住居跡（東から）
　　3　68号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
図版－10　1　68号竪穴住居跡（北から）
　　2　69号竪穴住居跡（南西から）
　　3　70号竪穴住居跡（東から）
図版－11　1　71竪穴住居跡（南から）
　　2　71号竪穴住居跡土器出土状況（南から）
　　3　72号竪穴住居跡（南東から）
図版－12　1　72号竪穴住居跡炉（南東から）
　　2　73号竪穴住居跡（西から）
　　3　74号竪穴住居跡（南から）
図版－13　1　75号竪穴住居跡（南から）
　　2　76号竪穴住居跡（南から）
　　3　77・81号竪穴住居跡（南西から）
図版－14　1　78号竪穴住居跡（北から）
　　2　79号竪穴住居跡（南から）
　　3　80号竪穴住居跡（西から）
図版－15　1　82号竪穴住居跡（東から）
　　2　83号竪穴住居跡（南から）
　　3　83号竪穴住居跡（南から）
図版－16　1　84号竪穴住居跡（南から）
　　2　85号竪穴住居跡（北から）
　　3　86号竪穴住居跡（北東から）
図版－17　1　87号竪穴住居跡（南から）
　　2　88号竪穴住居跡（西から）
　　3　106号竪穴住居跡（北から）
図版－18　1　2号土坑（東から）
　　2　12号土坑（東から）
　　3　13号土坑（東から）
図版－19　1　14・18号土坑（北から）
　　2　15号土坑（西から）
　　3　16号土坑（東から）
図版－20　1　17号土坑（北から）
　　2　20号土坑（北から）
　　3　24号土坑（東から）
図版－21　1　28号土坑（東から）
　　2　29号土坑（南から）
　　3　30号土坑（西から）
図版－22　1　32号土坑（南から）
　　2　34号土坑（西から）
　　3　35号土坑（北から）
図版－23　1　35号土坑（南から）
　　2　36号土坑（北から）
　　3　37号土坑（西から）
図版－24　1　38号土坑（北から）
　　2　39号土坑（南から）
　　3　39号土坑完掘状況（南から）
図版－25　1　39号土坑土器出土状況（北から）
　　2　40号土坑（北東から）
　　3　46号土坑（北西から）
図版－26　1　49号土坑（南東から）
　　2　54号土坑（東から）
　　3　56・57号土坑（南から）
図版－27　1　60号土坑（東から）
　　2　105号土坑（西から）
　　3　106号土坑（北から）

図版－28　1　117号土坑（東南から）
　　2　118号土坑（南から）
　　3　10・13号溝北断面（南から）
図版－29　1　10・13号溝南断面（南から）
　　2　15号溝土器出土状況（南から）
　　3　17号溝断面（南から）
図版－30　37・41・54号竪穴住居跡出土土器
図版－31　42・55号竪穴住居跡出土土器
図版－32　57・58・62号竪穴住居跡出土土器
図版－33　64・65・67・68号竪穴住居跡出土土器
図版－34　68号竪穴住居跡出土土器
図版－35　68号竪穴住居跡出土土器
図版－36　68・69号竪穴住居跡出土土器
図版－37　70・71・73・74・77号竪穴住居跡出土土器
図版－38　72号竪穴住居跡出土土器
図版－39　75号竪穴住居跡出土土器
図版－40　82・83・84号竪穴住居跡出土土器
図版－41　85号竪穴住居跡出土土器
図版－42　86号竪穴住居跡出土土器
図版－43　87・88・106号竪穴住居跡出土土器
図版－44　2・13・20・64号土坑出土土器
図版－45　17・24・25・27・28号土坑出土土器
図版－46　30号土坑出土土器
図版－47　32・35号土坑出土土器
図版－48　36・37・38号土坑出土土器
図版－49　39・40・42・43・46・59号土坑出土土器
図版－50　47号土坑出土土器
図版－51　47号土坑出土土器
図版－52　60・61・106号土坑出土土器
図版－53　112・117・118号土坑、15・18・24・59・69号溝出土土器
図版－54　13号溝出土土器
図版－55　13号溝、ピット出土土器
図版－56　ピット出土土器
図版－57　包含層出土土器
図版－58　1　出土土製品（1）
　　2　出土土製品（2）
図版－59　1　出土土製品（3）
　　2　出土石製品（1）
　　3　出土石製品（2）
図版－60　1　出土石製品（3）
　　2　出土石製品（4）
図版－61　1　出土石製品（5）
　　2　出土石製品（6）
　　3　出土石製品（7）
図版－62　1　出土石製品（8）
　　2　出土鉄製品
図版－63　1　投弾状小礫（1）
　　2　投弾状小礫（2）

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……4
第2図　調査区位置図（1/2,000）……6
第3図　基本層序模式図（1/40）……7
第4図　37・38号竪穴住居跡実測図（1/60）……8
第5図　37号竪穴住居跡炉実測図（1/20）……9
第6図　37・38号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……10

第７図　39・40号竪穴住居跡実測図（1/60）……11
第８図　40号住居跡出土土器実測図（1/4）……12
第９図　41号竪穴住居跡実測図（1/60）……13
第10図　41号竪穴住居跡炉実測図（1/30）……13
第11図　41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……15
第12図　42号竪穴住居跡実測図（1/60）……12
第13図　42号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……17
第14図　42号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……18
第15図　52・53号竪穴住居跡実測図（1/60）……19
第16図　52号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……20
第17図　54・55号竪穴住居跡実測図（1/60）……21
第18図　54号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……23
第19図　55号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……24
第20図　55号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……25
第21図　56号竪穴住居跡実測図（1/60）……27
第22図　57号竪穴住居跡実測図（1/60）……28
第23図　56・57号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……29
第24図　58・60号竪穴住居跡実測図（1/60）……30
第25図　58号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……32
第26図　58号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……33
第27図　61号竪穴住居跡実測図（1/60）……34
第28図　60・61号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……34
第29図　62・63号竪穴住居跡実測図（1/60）……36
第30図　62号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……37
第31図　62号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……38
第32図　64号竪穴住居跡実測図（1/60）……39
第33図　65・66号竪穴住居跡実測図（1/60）……40
第34図　63・64・65・66号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……41
第35図　67号竪穴住居跡実測図（1/60）……42
第36図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……43
第37図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……44
第38図　68号竪穴住居跡実測図（1/60）……45
第39図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……47
第40図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……48
第41図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……49
第42図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）……50
第43図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/4，1/8）……51
第44図　69・70号竪穴住居跡実測図（1/60）……53
第45図　69・70号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……54
第46図　71号竪穴住居跡実測図（1/60）……55
第47図　71号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……57
第48図　71号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……58
第49図　72・73号竪穴住居跡実測図（1/60）……59
第50図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……60
第51図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……61
第52図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……62
第53図　73号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……63
第54図　74号竪穴住居跡実測図（1/60）……64
第55図　74号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……66
第56図　75・76号竪穴住居跡実測図（1/60）……67
第57図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……68
第58図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……69
第59図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……70
第60図　77・78号竪穴住居跡実測図（1/60）……72
第61図　76・77・78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……73
第62図　79・80号竪穴住居跡実測図（1/60）……75
第63図　81・82号竪穴住居跡実測図（1/60）……76
第64図　79・80・81・82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……77

第65図　83・84号竪穴住居跡実測図（1/60）……79
第66図　83号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……80
第67図　84号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……81
第68図　85・86号竪穴住居跡実測図（1/60）……83
第69図　85号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……84
第70図　85号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……85
第71図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……86
第72図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……87
第73図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……88
第74図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）……89
第75図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/4）……90
第76図　87・88号竪穴住居跡実測図（1/60）……91
第77図　87号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……92
第78図　88号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……94
第79図　106号竪穴住居跡実測図（1/60）……94
第80図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……95
第81図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……96
第82図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……97
第83図　6号掘立柱建物実測図（1/60）……97
第84図　2・12～14号土坑実測図（1/40）……99
第85図　2・13・15・16号土坑出土土器実測図（1/4）……100
第86図　15～18号土坑実測図（1/40）……102
第87図　17・19・20号土坑出土土器実測図（1/4）……103
第88図　19・20・24号土坑実測図（1/40）……105
第89図　24～27号土坑出土土器実測図（1/4）……107
第90図　25～27・29号土坑実測図（1/40）……108
第91図　28・30号土坑実測図（1/40）……109
第92図　28号土坑出土土器実測図（1/4）……110
第93図　30号土坑出土土器実測図.1（1/4）……111
第94図　30号土坑出土土器実測図.2（1/4）……112
第95図　30号土坑出土土器実測図.3（1/4）……113
第96図　30号土坑出土土器実測図.4（1/4）……114
第97図　30号土坑出土土器実測図.5（1/4）……115
第98図　31～34号土坑実測図（1/40）……117
第99図　31～34号土坑出土土器実測図（1/4）……118
第100図　35～37号土坑実測図（1/40）……120
第101図　35号土坑出土土器実測図.1（1/4）……121
第102図　35号土坑出土土器実測図.2（1/4）……122
第103図　36・37号出土土器実測図（1/4）……123
第104図　38～40号土坑実測図（1/40）……124
第105図　38号土坑出土土器実測図.1（1/4）……125
第106図　38号土坑出土土器実測図.2（1/4）……126
第107図　39号土坑出土土器実測図（1/4）……127
第108図　40号土坑出土土器実測図（1/4）……128
第109図　41～44号土坑実測図（1/40）……130
第110図　42・43号土坑出土土器実測図（1/4）……131
第111図　45～47・52号土坑実測図（44・45号は1/40、47・52号は1/60）……133
第112図　46号土坑出土土器実測図（1/4）……134
第113図　47号土坑出土土器実測図.1（1/4）……135
第114図　47号土坑出土土器実測図.2（1/4）……136
第115図　47号土坑出土土器実測図.3（1/4）……137
第116図　47号土坑出土土器実測図.4（1/4）……138
第117図　47号土坑出土土器実測図.5（1/4）……139
第118図　49・54・56号土坑実測図（1/40）……141
第119図　52・57・59号土坑出土土器実測図（1/4）……142
第120図　57・60号土坑実測図（1/40）……144
第121図　59号土坑実測図（1/60）……145
第122図　60号土坑出土土器実測図.1（1/4）……146

第123図　60号土坑出土土器実測図.2（1/4）……147
第124図　60号土坑出土土器実測図.3（1/4）……148
第125図　61・62号土坑実測図（1/40）……149
第126図　61・105・106・108・112・113・115・116号土坑出土土器実測図（1/4）……150
第127図　105～114号土坑実測図（1/40）……152
第128図　115～118・9・10号土坑実測図（1/40）……154
第129図　117号土坑出土土器実測図.1（1/4）……156
第130図　117号土坑出土土器実測図.2（1/4）……157
第131図　118号土坑出土土器実測図（1/4）……157
第132図　10・13a・13b号溝土層実測図（1/60）……159
第133図　10号溝出土土器実測図（1/4）……160
第134図　13号溝西端付近土器出土状況（1/60）……161
第135図　13号溝出土土器実測図.1（1/4）……162
第136図　13号溝出土土器実測図.2（1/4）……163
第137図　13号溝出土土器実測図.3（1/4）……164
第138図　13号溝出土土器実測図.4（1/4）……165
第139図　13号溝出土土器実測図.5（1/4）……166
第140図　15～17・20・172号溝土層実測図（1/30）……167
第141図　14・15・17・18号溝出土土器実測図（1/4）……169
第142図　20・24・25・31・59・60・61号溝出土土器実測図（1/4）……171
第143図　65・66・69・172・173・182・183号溝出土土器実測図（1/4）……175
第144図　ピット出土土器.1（1/4）……177
第145図　ピット出土土器.2（1/4）……178
第146図　ピット出土土器.3（1/4）……179
第147図　ピット出土土器.4（1/4）……180
第148図　ピット出土土器.5（1/4）……181
第149図　包含層出土土器.1（1/4）……182
第150図　包含層出土土器.2（1/4）……183
第151図　包含層出土土器.3（1/4）……184
第152図　包含層出土土器.4（1/4）……185
第153図　包含層出土土器.5（1/4）……186
第154図　包含層出土土器.6（1/4）……187
第155図　包含層出土土器.7（1/4）……188
第156図　包含層出土土器.8（1/4）……189
第157図　包含層出土土器.9（1/4）……190
第158図　包含層出土土器.10（1/4）……191
第159図　包含層出土土器.11（1/4）……192
第160図　包含層出土土器.12（1/4）……193
第161図　包含層出土土器.13（1/4）……194
第162図　包含層出土土器.14（1/4）……195
第163図　包含層出土土器.15（1/4）……196
第164図　包含層出土土器.16（1/4）……197
第165図　包含層出土土器.17（1/4）……198
第166図　包含層出土土器.18（1/4）……199
第167図　出土土製品実測図（1/2）……201
第168図　出土石製品実測図.1（1/2）……202
第169図　出土石製品実測図.2（1/2）……203
第170図　出土石製品実測図.3（1/2）……204
第171図　41号竪穴住居跡出土投弾状小礫実測図（1/2）……205
第172図　出土鉄器実測図（1/2）……208
第173図　43号竪穴住居跡出土鉄器・64号土坑出土土器実測図（1/4）……208
付　図　船越高原Ａ遺跡Ｉ区第3遺構面（1/300）

表　目　次

表　その他の遺物観察表……206～207

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし大分県日田市を経由、大分市に至る産業、経済、観光を中心に利用される重要な幹線道路である。しかし、道路の幅員が狭いため、近年、交通量の増加に伴い混雑が著しくなり、交通事故も増加している。この混雑の緩和を図るために浮羽郡田主丸町を起点とし、現在ある210号線の北側の田園地帯をとおり浮羽郡浮羽町山北までの延長約14km、幅員16～25mの浮羽バイパスの建設が昭和48年度に事業化された。用地買収は昭和52年度から着手され、現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定二車線の供用が開始されている。

浮羽バイパスの建設に先立ち、福岡県教育庁管理部文化課（以下、県教委とする）は昭和47年2月3日付で「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」という文書で建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（現、国土交通省九州地方整備局以下、福岡国道事務所とする）から調査を委託された。県教委では路線予定地内の分布調査を行い、昭和49年に回答し、これに基づき昭和54年度から4カ年に亘って、吉井町塚堂遺跡の調査を行った。

その後、昭和61年４月２日付けで、福岡国道事務所から「埋蔵文化財の分布調査について」と再度、調査依頼があり、県教委では、再び分布調査を行った。その結果、すでに調査の終了した塚堂遺跡を除く、16箇所の埋蔵文化財の調査が必要との回答を行った。発掘調査予定面積は約200,000m²であり、発掘調査は現在、随時協議を行いながら、継続中である。

10地点船越高原Ａ遺跡は平成７年度、試掘調査が行われ、全面に遺構の存在が確認、調査が必要とされた。なお、調査区によっては複数の遺構面が存在する可能性があった。そこで平成８年度に行われる周辺の県営圃場整備事業に合わせ、発掘調査が実施されることとなった。本調査は平成８年度から開始し、現在、継続中である。

調査区を便宜上Ⅰ～Ⅲ区に分け、平成８年度、Ⅰ区の第一遺構面とⅡ区、Ⅲ区の水路となる部分の調査が先行して行われた。平成９年度、10年度は引き続きⅠ区の第二遺構面、第三遺構面の調査が行われた。平成11年度はⅡ区、Ⅲ区の一部の調査を行い、平成12年度はⅢ区の調査を終了している。尚、残るⅠ区に未買収部分があり、未調査である。

2　調査の組織

発掘調査関係者および報告書作成関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方局福岡国道工事事務所（現、国土交通省九州地方整備局）

	平成８年度	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
事務所長	佐竹　芳郎	藤本　　聡	藤本　　聡	藤本　　聡	森　　将彦
				森　　将彦	
副所長	藤浪　元生	兼武征二郎	兼武征二郎	兼武征二郎	兼武征二郎
	緒方　良一	別府　五男	別府　五男	新開幸一郎	田中　義高
建設監督官	松尾　義信	有家　信義	有家　信義	有家　信義	有家　信義

	山川　武春	柴田　智	柴田　智	中島　浩二	
調査第二課長	田中　義高	田中　義高	赤星　文生	赤星　文生	赤星　文生
調査第二係長	靏　敏信	沓掛　孝	沓掛　孝	沓掛　孝	大榎　謙
建設技官	島田　隆一	島田　隆一	田中　博明	柳橋　孝博	松山ひろみ
工務課長	渕　幸一	河野　良行	河野　良行	後藤　昌隆	後藤　昌隆
工務第一係長	黒木　俊彦	梶原　俊之	梶原　俊之	古木　英昭	古木　英昭
工務第三係長	田口　仁	斉藤　啓嗣	斉藤　啓嗣	斉藤　啓嗣	川内　学

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

	平成８年度	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
総括					
教育長	光安　常喜	光安　常喜	光安　常喜	光安　常喜	光安　常喜
教育次長		松枝　功	藤吉純一郎	藤吉純一郎	榊原　英夫
指導第二部長		竹若　幸二	富永　勲		
総務部長				岩本　誠	岩本　誠
文化課長		石松　好雄			
文化財保護課長			石松　好雄	柳田　康雄	柳田　康雄
参事兼					
文化財保護室長	柳田　康雄	柳田　康雄			
参事			柳田　康雄	井上　裕弘	井上　裕弘
課長補佐	清水　圭輔	元永　浩士	城戸　秀明		
課長補佐兼				角　伸幸	平野　義峰
管理係長					
参事補佐兼					
室長補佐	井上　裕弘	井上　裕弘			
参事兼					
課長技術補佐			井上　裕弘	橋口　達也	橋口　達也
					川述　昭人
参事補佐兼					
調査班総括	橋口　達也	橋口　達也			
参事補佐兼					
調査第一係長			橋口　達也	児玉　真一	佐々木隆彦
参事補佐兼					
調査第二係長			佐々木隆彦	佐々木隆彦	児玉　真一
参事補佐		木下　修	中間　研志	中間　研志	
		新原　正典			
		中間　研志			

庶務												
管理係長	黒田	一治	黒田	一治								
事務主査	東	建二	鶴我	哲夫	鶴我	哲夫	吉武	祐二	吉武	祐二		
主任主事			田中	利幸	田中	利幸	田中	利幸	鎮守	俊明		
調査報告												
参事補佐兼							佐々木隆彦					
調査第二係長												
主任技師	斎部	麻矢			秦	憲二	吉田	東明	秦	憲二		
									吉田	東明		
									森井	啓次		
									今井	涼子		
									進村	真之		
技師			吉田	東明	今井	涼子	進村	真之				
			森井	啓次	進村	真之						
九州歴史資料館												
主任技師									斎部	麻矢		

現場作業にあたっては地元田主丸町、吉井町をはじめ、浮羽町、杷木町、甘木市、朝倉町からご参加をいただいた。酷暑、厳寒の中、熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げます。

中野正敏 石橋ヒサ子 大塚ヒロ子 権藤エイ子 原淑子 国武ヒサ子 生野ヤエ子 中野淑子 野口レイ子 中野ヒデ子 福嶋波津子 樋口始 松尾粛朗 重岡和子 古賀ハル子 迫貞子 善孝義 善ミネ子 林多津美 中津留ハツミ 坂本サダ子 宮崎ヤス子 岩橋マサ子 樋口奈美子 樋口幸子 堤忠男 堤利男 堤チヨ子 樋口文夫 佐藤勝子 芳野マキ子 柴山ミネ子 横溝スミ子 江頭敏之 石橋丸子 因間美枝子 飯田澄枝 山本フミ子 山口由美子 飯田尚子 伊藤夏子 伊藤武彦 中川トシ 中川初子 佐藤ツイ子 中川サトキ 矢幡光枝 梶村サツキ 田村フジヨ 梶村福見 梶村美津子 梶村上枝 古賀マサ子 本松幸子 内山アサカ 権藤フミエ 権藤タキエ 田中スム子 中村弘子 大庭孝夫（調査補助員 現福岡県教育委員会）大坪滋 笠由美 河野伸子 安達国光 中西敏 吉松功 岩佐ヨシ子 梶村由美子 比嘉百合野 比嘉えりか 原紀代 河内享子 上村智美 江田裕子 佐藤幸美 高倉君子 古賀道雄 小西みち子 川原康裕 日野譲 樋口祥隆 古賀千佳嗣

II　遺跡の位置と歴史的環境

1　地理的環境

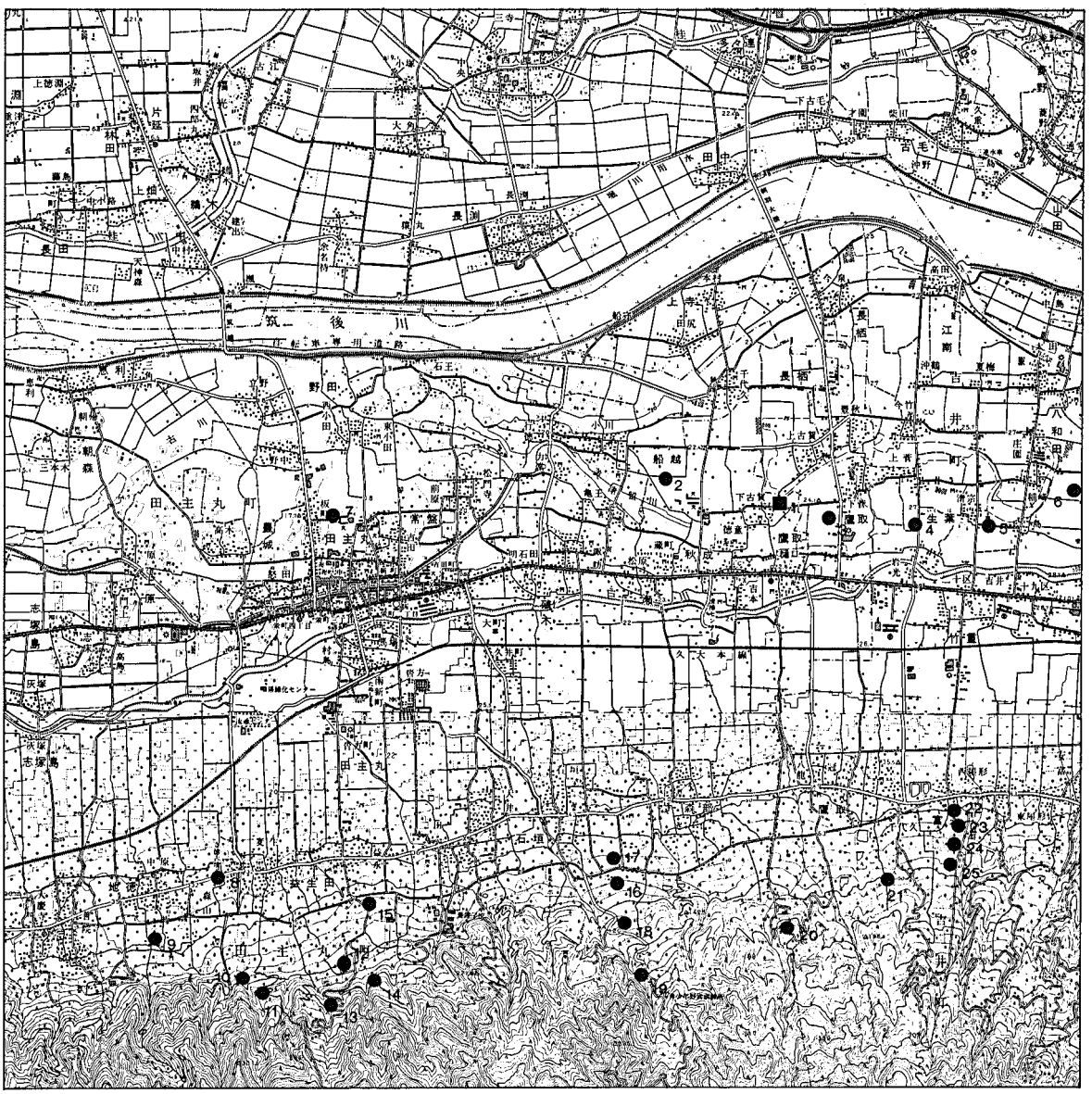
船越高原（FUNAKOSI－TAKAHARA）遺跡は、福岡県浮羽郡田主丸町大字船越および吉井町大字長栖他に所在する。

遺跡の所在する浮羽郡は、福岡県の中央やや南寄りに位置し、筑後川によって形成された広大な扇状地上にある。郡は筑後川の南側に位置し、北は甘木市、朝倉郡、西は久留米市、北野町、南は八女郡、東は大分県とも接する。この一帯は大規模な穀倉地帯で水田耕作が盛んに行われる。また、稲の

刈り入れ後には麦の栽培も行われる肥沃な土地である。この扇状地部分の地域を地元の人は「川辺」と称し、筑後川の恩恵を受けながら生活している。この扇状地の南側には耳納山脈がそびえる。この麓の地域は「山辺」と称され、こちらは県内屈指の果樹地帯として葡萄を中心に多くの果物が生産されるなど、山の恩恵を受ける生活が営まれる。大粒葡萄の代名詞となっている「巨峰」の名は、この耳納連山の麓で生産が開始されたことに由来している。また、久留米藩の蠟生産のための櫨に起源をもつ植木の栽培も盛んである。このように同じ郡内でありながら、「川辺」と「山辺」との大きく異なる生活が営まれている。

江戸時代から近代にかけては天領日田へ貫ける街道として栄え、吉井町に残る白壁造りの建物群は往時の反映を偲ばせ、国の重要伝統的建造物群保存地区となっている。

「川辺」に位置する当遺跡は美津留川の自然堤防上に位置し、周囲より１m程高くなっている。このようなわずかな微高地を利用し、集落を形成している。



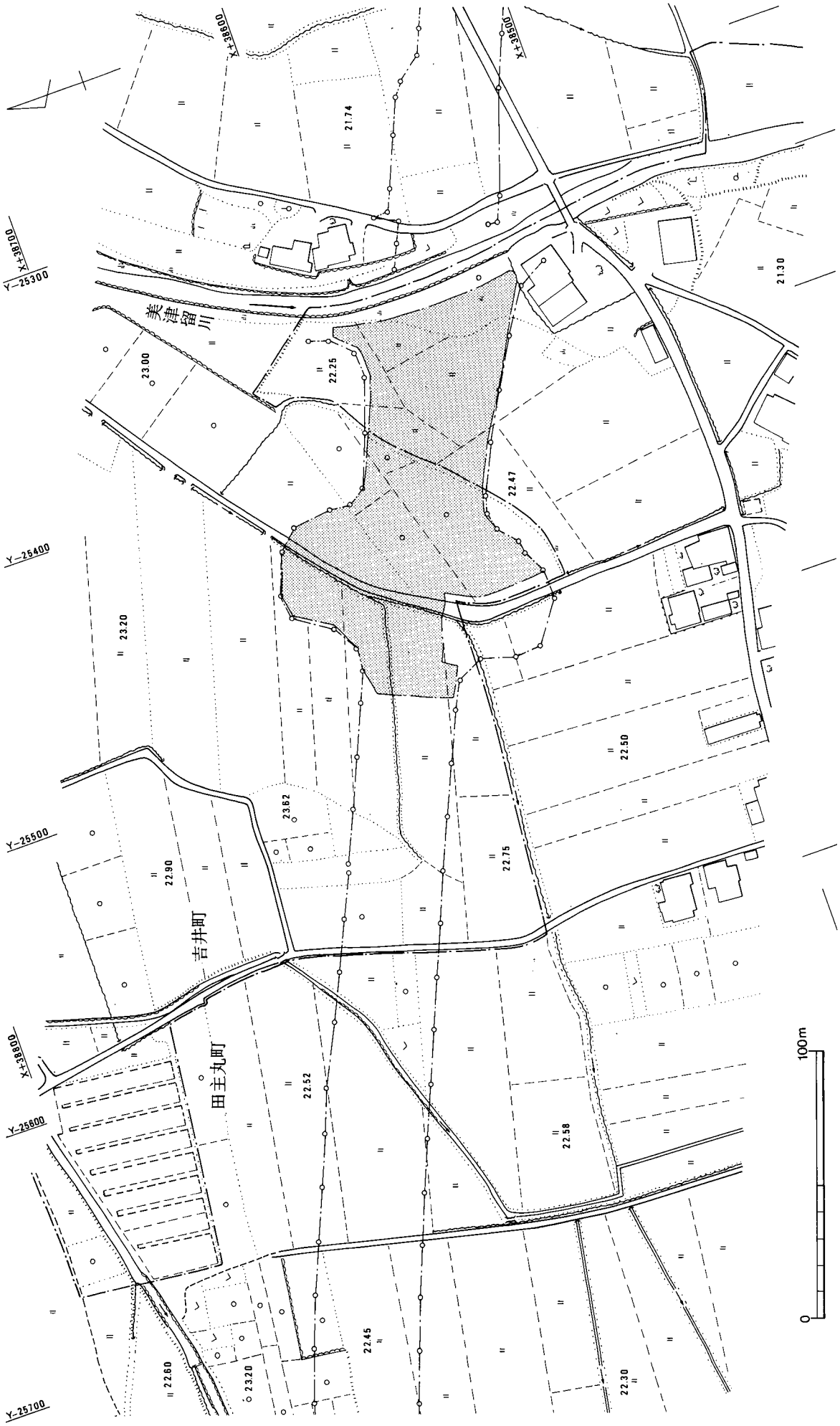
1．船越高原遺跡　6．女塚古墳　11．麦生古墳群　16．大塚古墳　21．千代久古墳群
2．船越二ノ上遺跡　7．水分遺跡　12．益生田古墳群Ａ群　17．大塚古墳群　22．珍敷塚古墳
3．鷹取五反田遺跡　8．寺徳古墳　13．益生田古墳群Ｂ群　18．大塚清長橋古墳群　23．原古墳
4．堺町・大碇遺跡　9．狐塚古墳　14．益生田古墳群Ｃ群　19．森部平原古墳群　24．鳥船塚古墳
5．生葉地区遺跡　10．西館古墳　15．益永古墳群　20．森原古墳群　25．古畑古墳

第１図　周辺遺跡分布図

2　歴史的環境（第1図）

ここでは今年度報告する弥生時代の遺跡について中心に述べてみたい。浮羽郡における弥生時代の水田の検出例はまだ無い。しかし、現在でもそうであるように水田に非常に適した立地であり、発掘調査、表面採集により多くの石庖丁等水田耕作に関する遺物が出土していることなどから、今後の発見が期待できる。常盤遺跡群に属する田主丸町水分遺跡（7）では、板付II式併行期の弥生前期後半の土器が出土しており、報告者はこの地域の稲作の開始時期として考えている。近くの田主丸町日詰遺跡においても、同時期の土坑等が検出されている。また、吉井町大碇遺跡（4）でも前期後半の遺構がまとまって検出されている。浮羽町田島北遺跡では弥生前期末から中期にかけての円形住居・貯蔵穴等が検出されている。吉井町仁右衛門畑遺跡では、弥生時代中期前半の集落が調査されており、大量の土器が出土している。浮羽町北淀遺跡では弥生前期から中期にかけての集落が調査され、石剣が出土している。田主丸町船越一ノ上遺跡では弥生中期中葉から後期前半の集落・墓地が調査されている。吉井町鷹取五反田遺跡（3）では弥生中期後半から後期前半にかけての集落及び甕棺墓群がセットで調査された。浮羽町岩野遺跡では弥生時代中期から古墳前期にかけての甕棺墓・土壙墓・箱式石棺墓により構成される墓地が調査された。浮羽町沖出遺跡では弥生後期後半の集落が調査されている。吉井町千代久遺跡では弥生後期から終末期にかけての集落が調査された。浮羽町日永遺跡では弥生後期の集落が調査されており、広形の銅矛、銅戈一対が埋納状態で検出されている。浮羽町賀茂神社境内遺跡で後期後半の竪穴住居跡が検出された。吉井町塚堂遺跡・浮羽町田島南遺跡では弥生時代終末の集落が調査されている。田主丸町秋成亀王遺跡は詳しい実態は不明であるが甕棺包蔵地として古くから知られている。

地点	町　名	工区と地点名	遺 跡 名	調査対象面積m²	発掘面積m²	調査年度	報告書年度	備　考
1	浮　羽	9工区．日永	日永遺跡	19,000	16,800	S61	H4	
2	吉　井	7工区．塚堂	塚堂遺跡	18,479	17,768	S54～S61	S57･58･59･62	
3	吉　井	7工区．能楽	－	－	－	H6･9	－	
4	吉　井	6･7工区．三牟田	堂畑遺跡	8,400		H8～		
5	吉　井	6工区．新治	仁右衛門畑遺跡	8,400	8,400	H7～H9	H11･12	
6	吉　井	6工区．稲崎A	稲崎遺跡	6,300	1,600	S62	H9	
7	吉　井	6工区．稲崎B	稲崎遺跡	4,900	520	S62	H9	
8	吉　井	6工区．清宗	－	－	－	H1	－	
9	吉　井	5･6工区．上菅A	堺町・大碇遺跡	21,000	18,800	H1･2	H5	
		5･6工区．上菅B	鷹取五反田遺跡	14,000	7,420	H2･5･6	H9･10	
10	吉井・田主丸	5工区．船越A	船越高原A遺跡	25,000	15,000	H8～	H11～	一部未調査あり
11	田 主 丸	5工区．船越B	船越二ノ上遺跡	20,000	18,500	H6～9	H10	
12	田 主 丸	5工区．殖木		19,200				
13	田 主 丸	5工区．常盤	松門寺遺跡	15,000		H11～	H13	
14	田 主 丸	5工区．野田A		14,800				
15	田 主 丸	5工区．野田B	大的・日詰遺跡	10,800		H12～		
16	田 主 丸	5工区．野田C		13,500				
17	浮　羽	7工区．	－	－	－	H6	－	



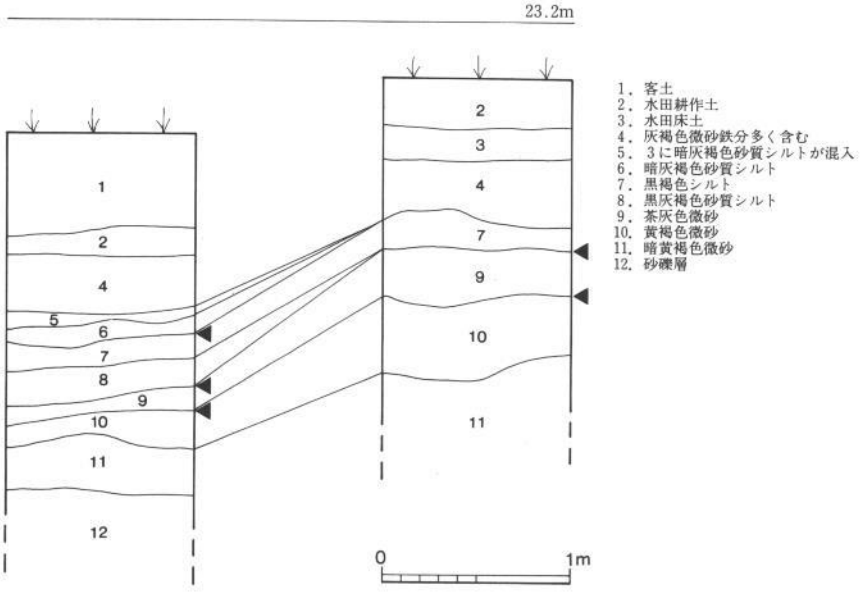
第2図　調査区位置図（1/2,000）

III　発掘調査の記録

1　基本層序（第３図）

船越高原Ａ遺跡は美津留川によって形成された自然堤防および後背湿地上に位置する。土壌の堆積はシルト、微砂、砂礫が基本である。上面の層序・遺構面については昨年度の報告を参照願いたい。

今年度報告する第３遺構面は第10層上面にあたる。黄褐色微砂の上面を遺構面とした。なお、美津留川の橋脚工事ための事前ボーリング調査で第12層以下は粗砂から大きさ数十センチ程度の川原石の層となり、これが地下数十ｍまで続くことが明らかとなっている。



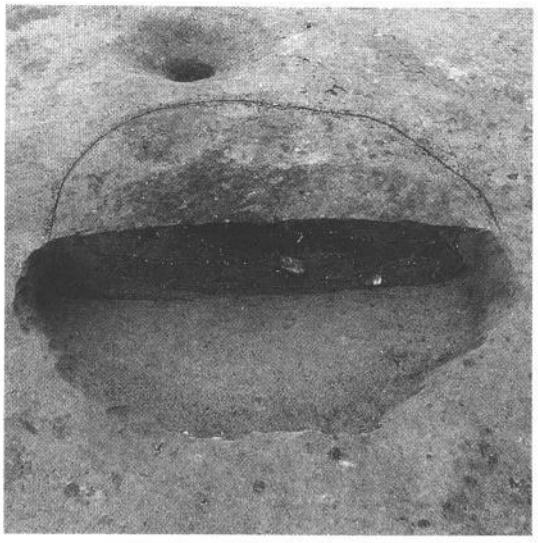
第３図　船越高原Ａ遺跡基本層序模式図（1/40）

2　竪穴住居跡

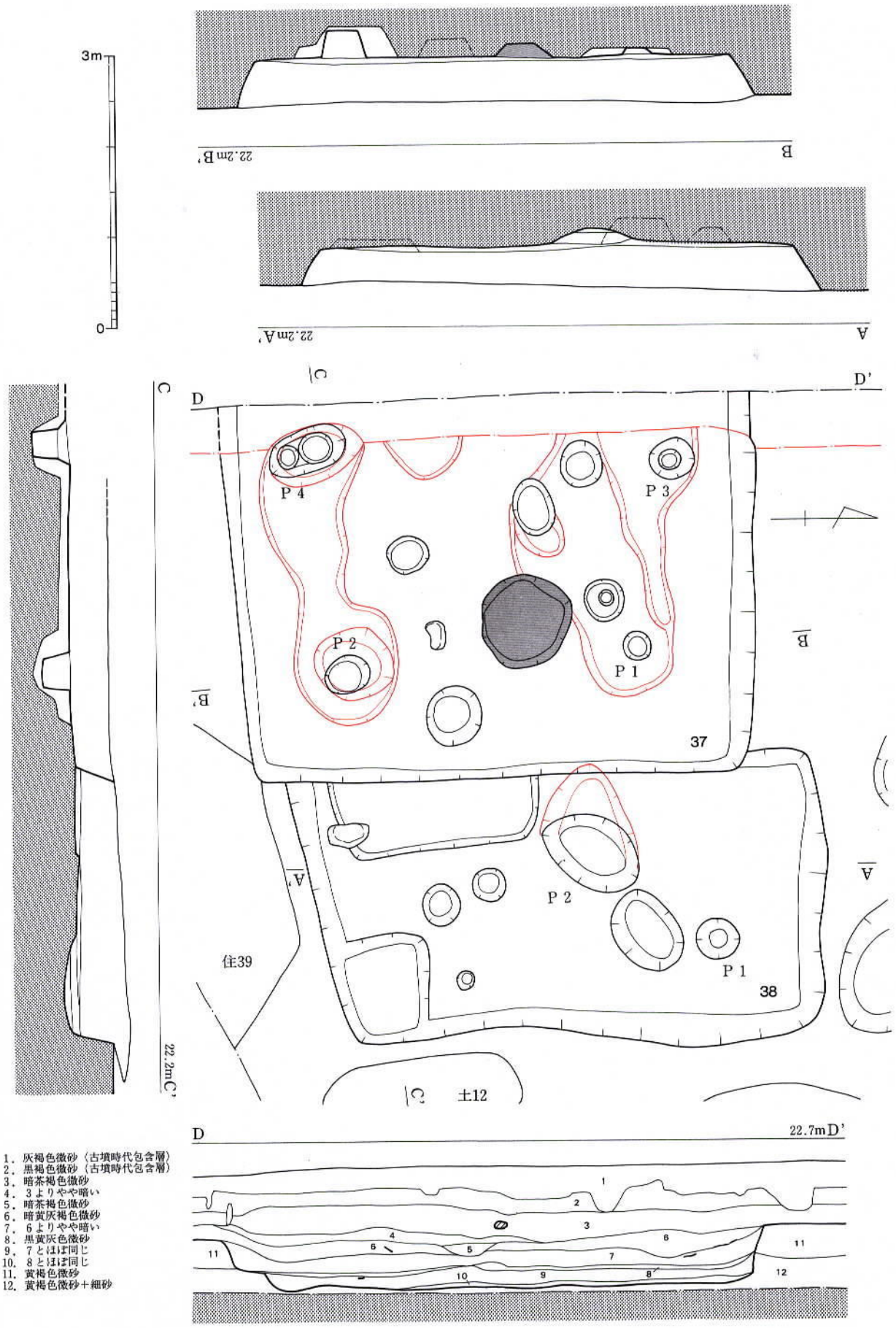
弥生時代中期後半から中期末にかけての竪穴住居跡43棟が検出された。住居の規模は長軸６ｍ程の大型と、長軸４ｍ程の小型に分けられる。大型のものは中央に炉を付設、長軸を東西にとり、その軸上に２本の主柱穴を配する。また、長軸中央の壁際に円形もしくは方形の土坑を付設するタイプのものが多い。小型のものは長軸の方向は一定せず、壁際の土坑もみられない。分布状況は中央部の遺跡の中で最も高くなった部分に集中し、一部が東側部分の一段低くなった部分に存在する。

37号竪穴住居跡（図版３－１・２、第４・５図）

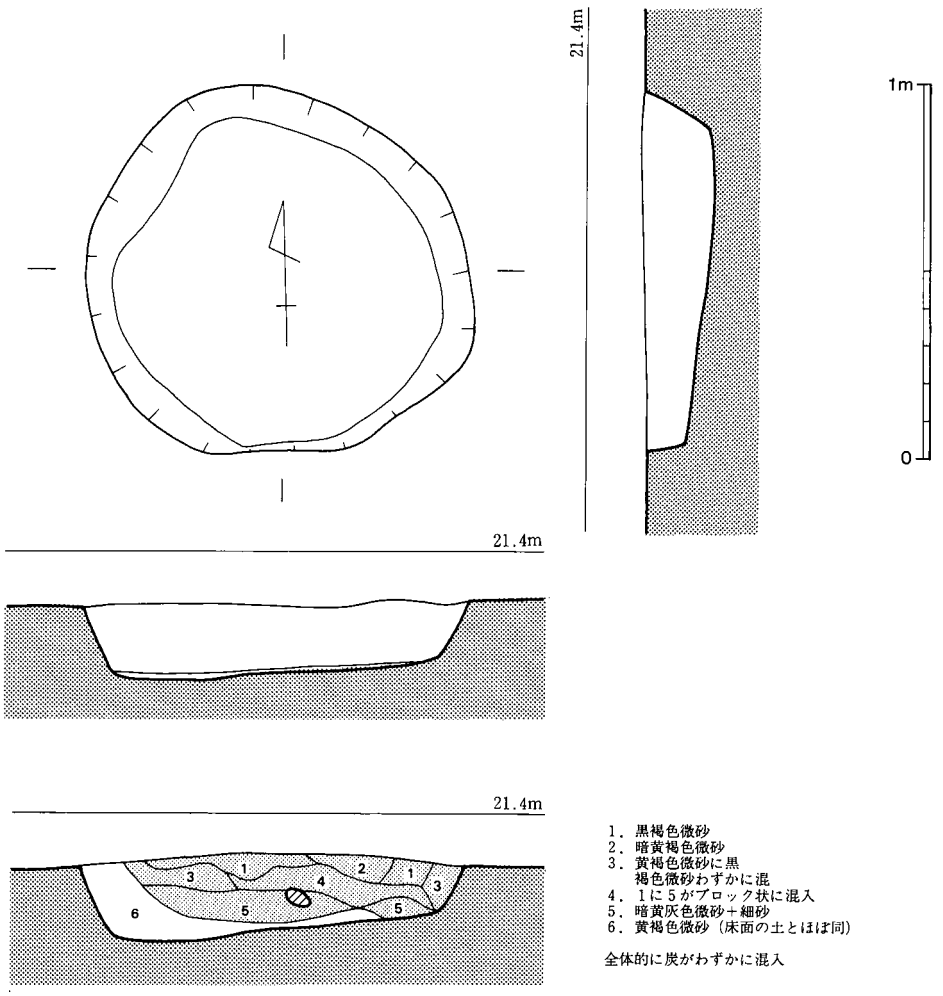
調査区南西端で検出した方形プランの竪穴住居跡である。38号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。西側は調査区外へと続く。東壁長5.3ｍ、南壁長は検出している部分で3.6ｍ、深さは50㎝を測る。土層図を観察する限り、覆土は自然堆積である。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４つを確認したが、北側の２つは径30～50㎝、深さ10㎝程度の不確かなものである。Ｐ１は径60～100㎝、深さ40㎝を測り非常にしっかりしている。また柱痕を確認しており、径40㎝を測る。炉は中央からやや東に寄った所に位置し、径100㎝、深さ20㎝を測る。覆土上層には炭を含んだ細砂が堆積する。遺物は弥生土器が出土している。



37号竪穴住居跡炉



第4図　37・38号竪穴住居跡実測図（1/60）



第5図　37号竪穴住居跡炉実測図（1/20）

出土土器（図版30、第6図）

弥生土器

甕（1～7）1～3･5･6は口縁部を強く外側に折り曲げる甕である。3ははね上げ気味に口縁端部を仕上げる。6もはね上げ気味の仕上げで、口縁下に三角突帯を施す。4は口縁が鋤先状によく発達した中形の甕で、胴部がやや張るものと考えられる。口縁部はわずかに内傾する。7は甕の底部である。わずかに上げ底気味で内外面の調整はハケメである。

丹塗土器

鉢（8・9）8は丹塗の鉢で口縁端部を角張るように仕上げ、外面の調整はミガキ。内面は摩滅して不明である。外面のみに丹塗を施す。9は口縁が鋤先状に発達した大型の鉢か。口縁下に三角突帯を施し、内面の調整はミガキ。内外面に丹塗が施される。

甕（10）10は甕の大きめの底部で外面の調整はハケメで、外面のみに丹塗が施される。

38号竪穴住居跡（図版3－1、第4図）

調査区南西端で検出した長方形プランの竪穴住居跡で、37号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。東壁長5.1m、北壁長3.0mを測り、かなり南北に長い形状である。深さは40cmを測る。床面上で幾つかのピットを検出したが主柱穴になりうるものはない。また南東隅、南西側で不整形の掘り込みを確認した。

出土土器（第6図）

弥生土器

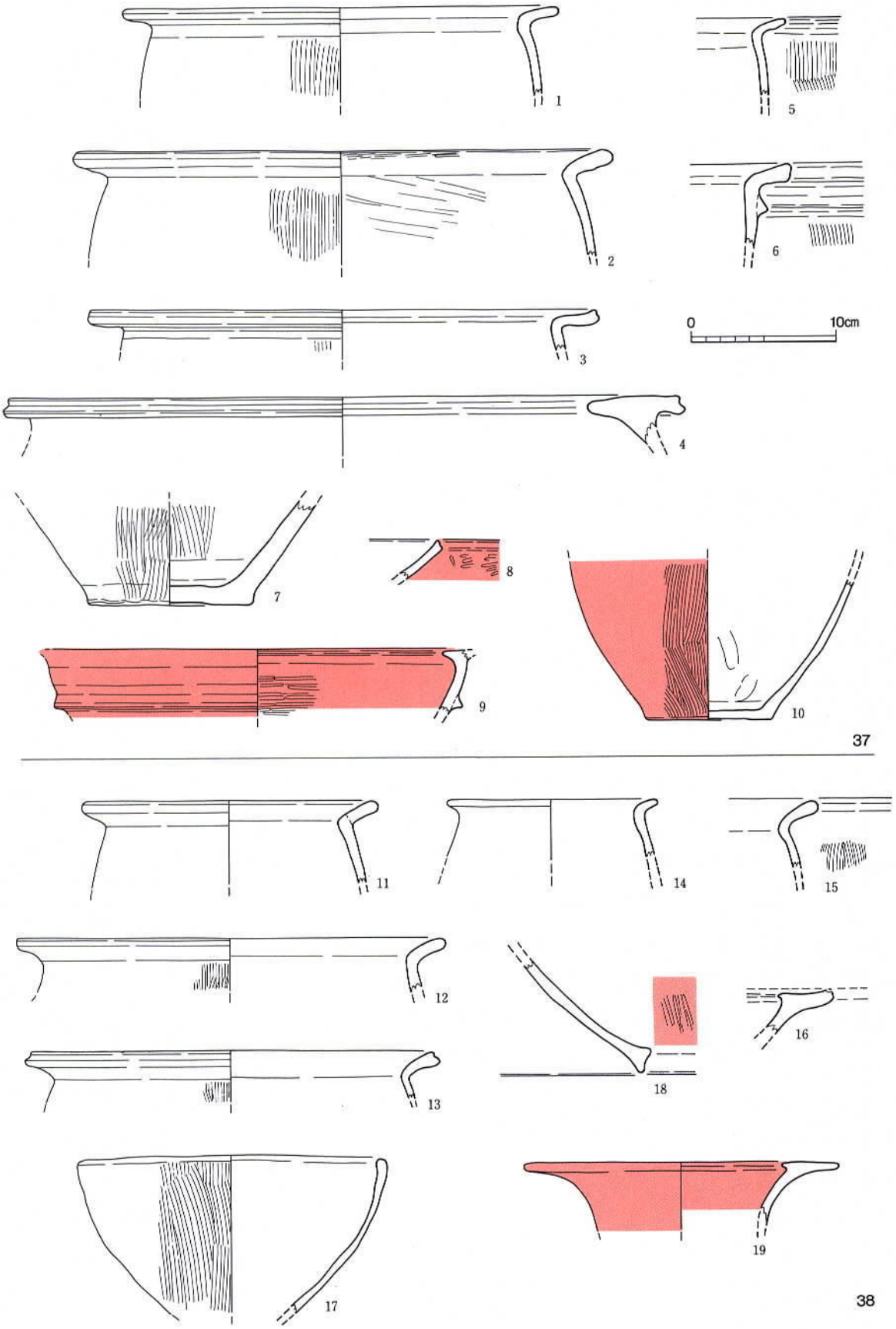
甕（11～15）11～15は甕で、口縁部がやや「く」字型に近い形態である。13は口縁端部を窪む様に仕上げている。その他は丸く仕上げる。

壺（16）16は鋤先状口縁の壺の口縁部である。端部は外側でやや上がり気味に仕上げる。

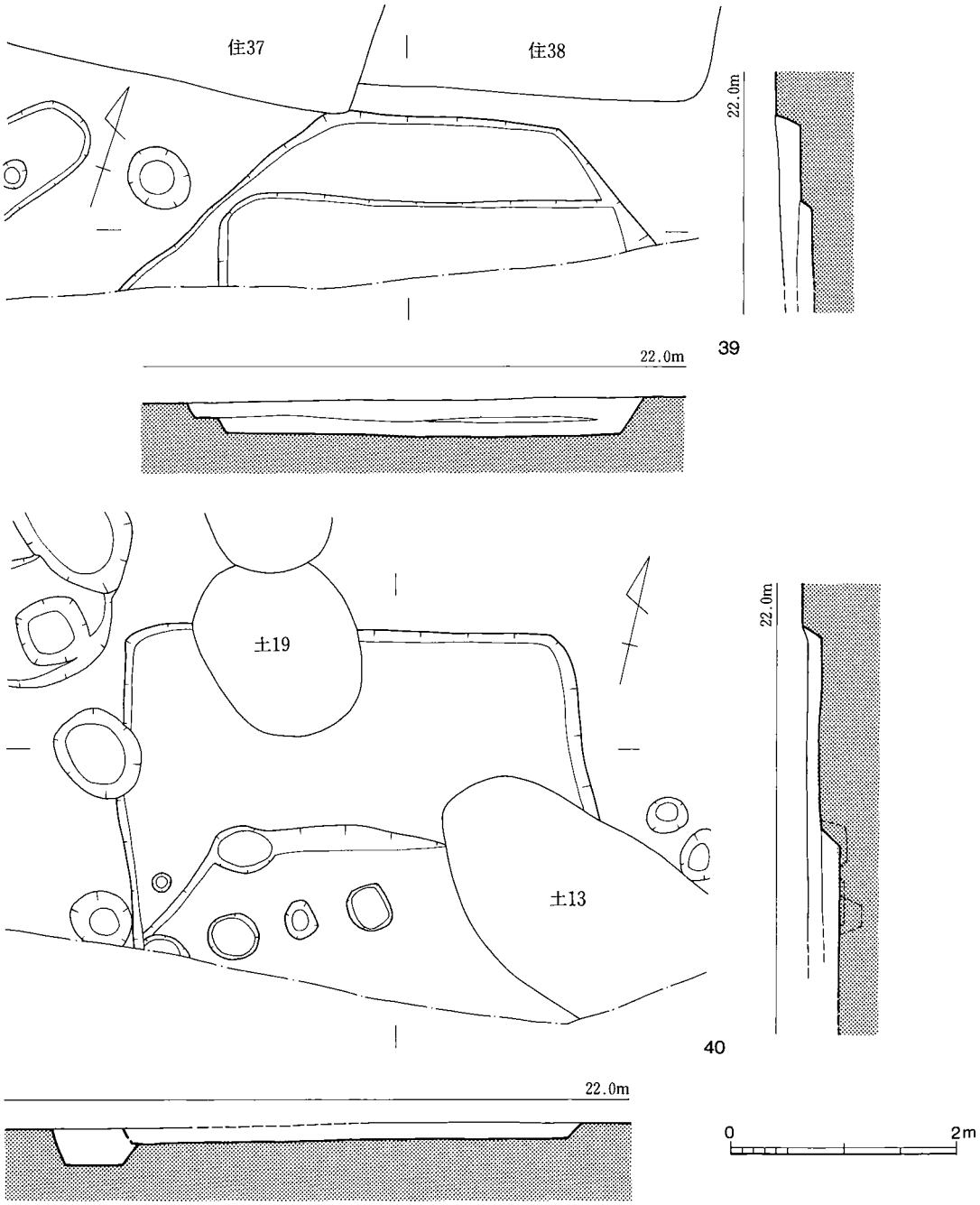
鉢（17）17は口縁端部を丸く仕上げる深めの鉢である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

丹塗土器

高坏（18）18は高坏もしくは器台の脚部であると考えられるが、ここでは高坏とした。外面の調整は粗いハケメで、外面のみに丹塗が施される。



第6図　37・38号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第7図　39・40号竪穴住居跡実測図（1/60）

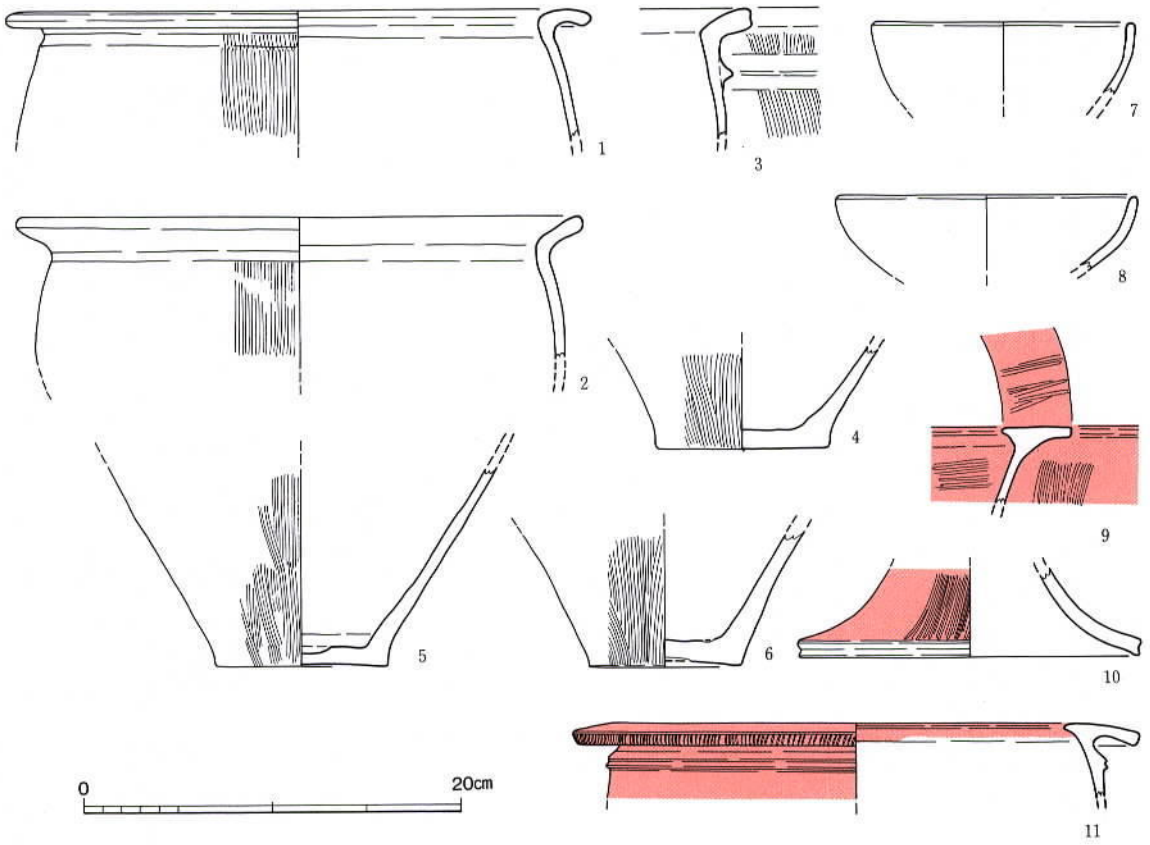
壺（19）19は口縁が鋤先状に発達した小型の壺である。内外面に丹塗が施される。

39号竪穴住居跡（図版３－１、第７図）

調査区南西端で検出した竪穴住居跡である。南側が調査区外へと大きく続く。検出面では不整形をなすが、20cm程掘り下げた段階で整ったプランを検出する事ができた。北壁で3.5mを測り、恐らく南北に長い長方形プランとなるだろう。深さは30cmを測る。床面上ではピット等は検出されなかった。遺物は出土していない。

40号竪穴住居跡（図版３－３、第７図）

調査区南西端で検出した竪穴住居跡で、13・19号土坑に切られる。南側が調査区外へと続くが、南北に長い長方形プランとなるだろう。北壁は長さ3.9mを測る。床面は南側が一段深くなっており、



第8図　40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

深さは北側で15cm、南側で30cmを測る。床面上でピットを幾つか検出したが、主柱穴になりそうなものはない。

出土土器（第8図）

弥生土器

甕（1～6）1～3は甕の口縁部である。1は口縁が外側に強く折れ曲がり、端部はやや下向きとなる。2は「く」字型口縁で、端部を丸く仕上げる。3は口縁端部を角張って仕上げている。外面はハケメ調整でその上から三角突帯を貼り付けている。4～6は甕の底部で6はやや上げ底気味である。

鉢（7・8）7・8は丸い器形の鉢である。口縁端部を丸く仕上げる。摩滅のため調整は不明。

丹塗土器

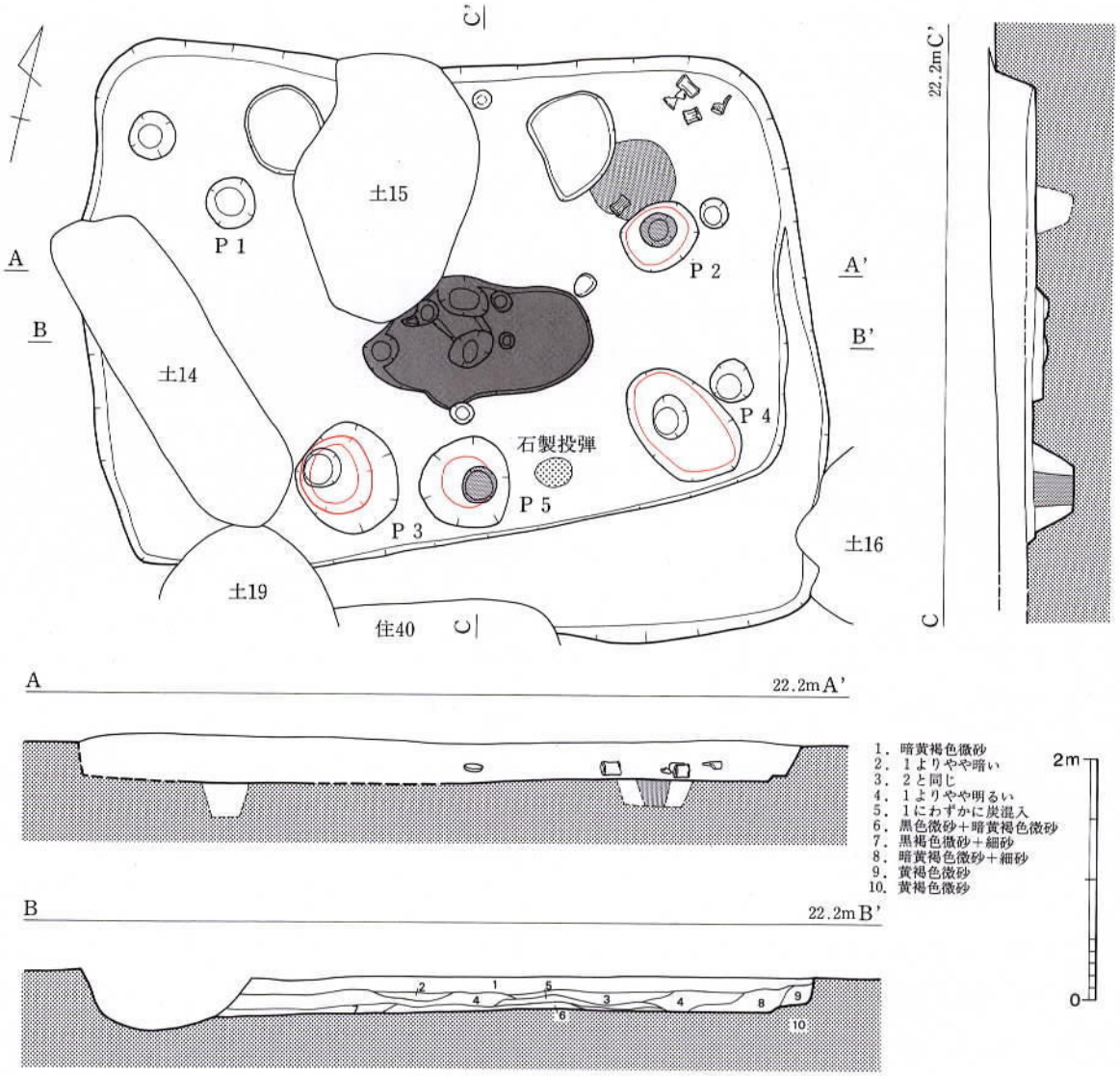
甕（11）11は丹塗の甕である。口縁は鋤先状で内外によく発達し、外面は下方へ垂れる。外側端部には刻目が施される。外面口縁下には、「M」字型突帯が施される。胴部はあまり張らない。外面と内面口縁付近に丹塗が施される。

壺（9）9は丹塗の壺。口縁は鋤先状によく発達し、上端部は平坦面を呈する。外面の調整はハケメ。内面の調整はミガキである。全面、丹塗で口縁上端面には暗文が施される。

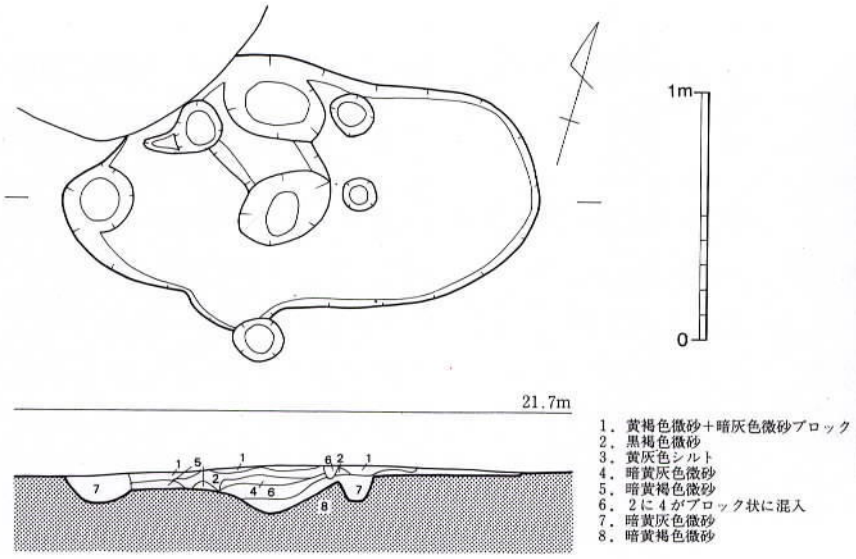
高坏（10）10は高坏の脚部である。脚端部が角張って仕上げられ、外面の調整は縦方向のミガキで丹塗が施される。内面の調整は摩滅により不明である。

41号竪穴住居跡（図版3－3、第9・10図）

調査区南西端で検出した竪穴住居跡で、14～16・19号土坑と重複し、最も古い。平面形は東西に長い長方形プランで、北壁長5.5m、東壁長3.5m、南壁長5.4m、西壁長4.2mを測る。南東側は大きく



第 9 図　41号竪穴住居跡実測図（1/60）



41号竪穴住居跡石製投弾出土状況

第10図　41号竪穴住居跡炉実測図（1/30）

壁が崩れており、検出面でのプランと床面近くでのプランとが大きく異なっている。床面はほぼ水平で、深さは40cmを測る。床面中央では楕円形プランの炉を検出した。長軸190cm、短軸100cm、底面は中央がピット状に窪んでおり、これ以外にも幾つかの小ピットを検出している。深さは東側で5cm、中央で20cm、西側で8cmを測る。炉の覆土は上層のみ炭が混入する。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４つを検出したが、あまり整った配置にはなっていない。Ｐ１は径40cm、深さ30cm、Ｐ２は径60cm、深さ20cmを測る。Ｐ２～Ｐ４で径25cm前後の柱痕を検出している。またＰ５は非常にしっかりしたピットであるが、配置上主柱穴になるとは思えない。北西コーナー付近では器台がまとまって出土した。また南壁付近では投弾状の小礫が多数かたまって出土した。

41号竪穴住居跡土器出土状況

出土土器（図版30、第11図）

弥生土器

甕（１～９）１～７は甕の口縁部である。４は口縁部を外側に強く折り曲げ仕上げる。１～３・５・６はやや「く」字型気味の口縁である。３・６は口縁端部を角張って仕上げる。その他は丸く仕上げている。７ははね上げ気味の口縁である。８は樽型となるであろう甕の底部である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。９は甕の底部で底は薄い。

器台（10～13）10～13は器台である。いずれも口縁部より底部が大きく開くが胴部のくびれはあまりない。外面の調整は縦方向のハケメ、内面の調整は胴部が縦方向のハケメ、上部、下部は横方向のハケメを施す。上下端部付近は横ナデ。

丹塗土器

甕（14）14は丹塗の甕である。鋤先状の口縁はよく発達し、外端部は下方へ垂れている。口縁下には「M」字型突帯が貼り付けられる。内外面ともに丹塗が施される。

高坏（15）15は高坏の坏部である。丸い碗状の形態で、口縁端部は丸く仕上げられる。内外面の調整はミガキ。全面に丹塗が施される。

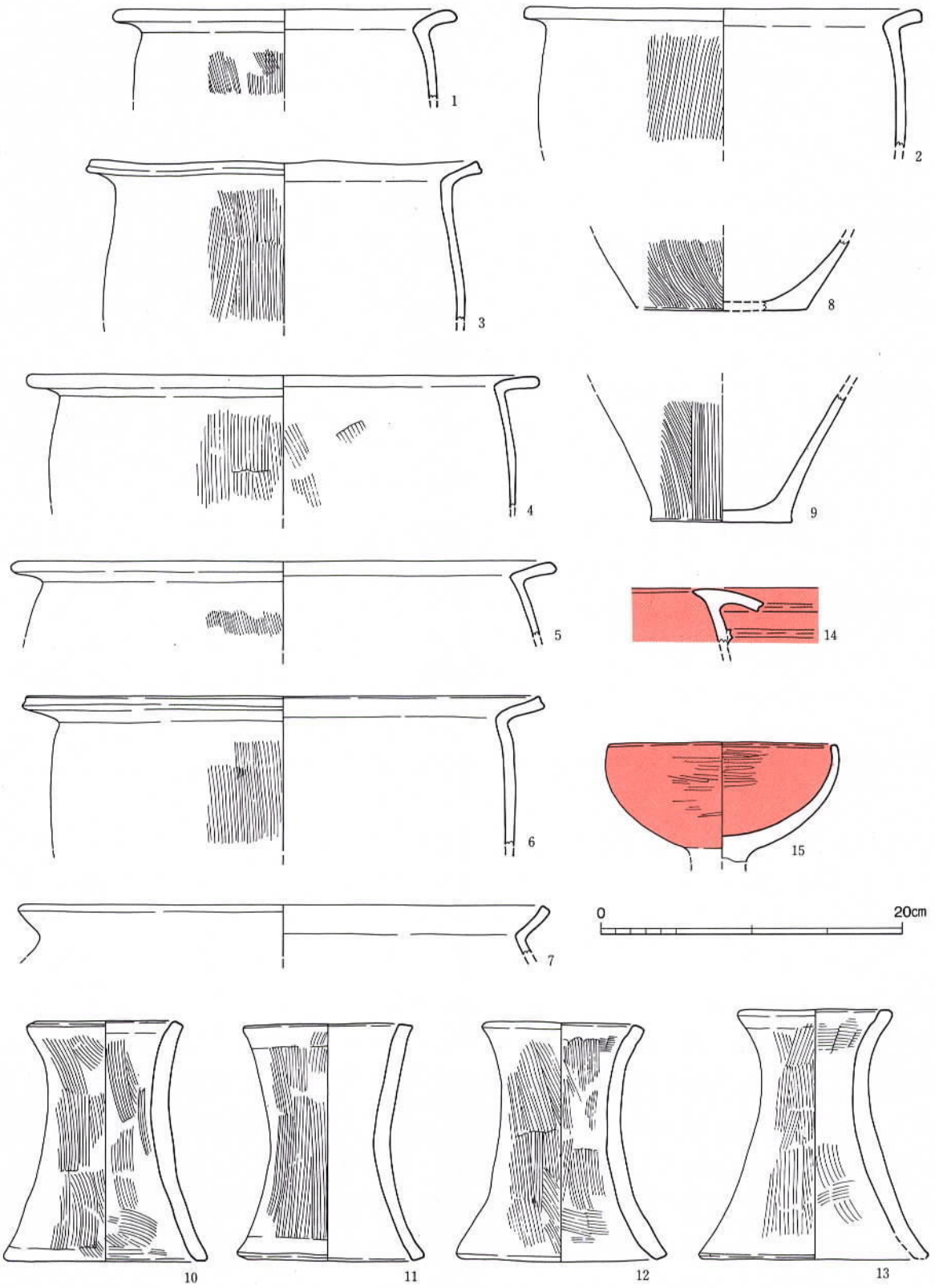
42号竪穴住居跡（図版４－１、第12図）

調査区南端で検出した竪穴住居跡で、南西コーナーが調査区外へと続いている。北壁長4.6m、東壁長3.5mを測り、東西に長い長方形プランとなる。深さは15cmと非常に浅く、また床面が礫層まで達している。床面上で幾つかのピットを検出したが、主柱穴になりそうなものはない。また炉も検出しておらず、果たして竪穴住居跡か疑わしい面もある。床面上では比較的多くの遺物が出土したが、いずれも破砕しており投棄されたものであろう。また、埋土から磨製石鏃が出土している。

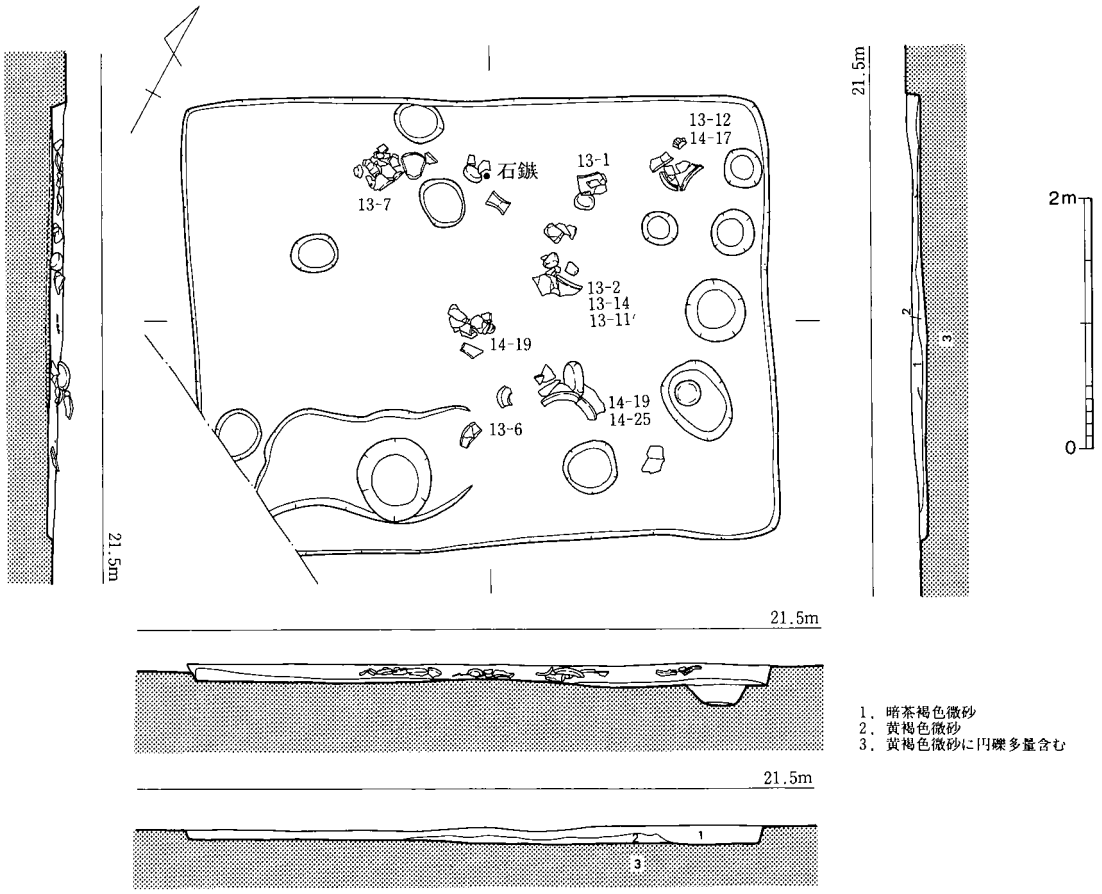
出土土器（図版31、第13・14図）

弥生土器

蓋（１）１は大型の蓋。口縁端部はやや角張って仕上げられる。上部はつまみ状の形態を呈し、内部は中空である。内外面の調整はハケメを施される。外面に２次加熱が見られる。



第11図　41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第12図　42号竪穴住居跡実測図（1/60）

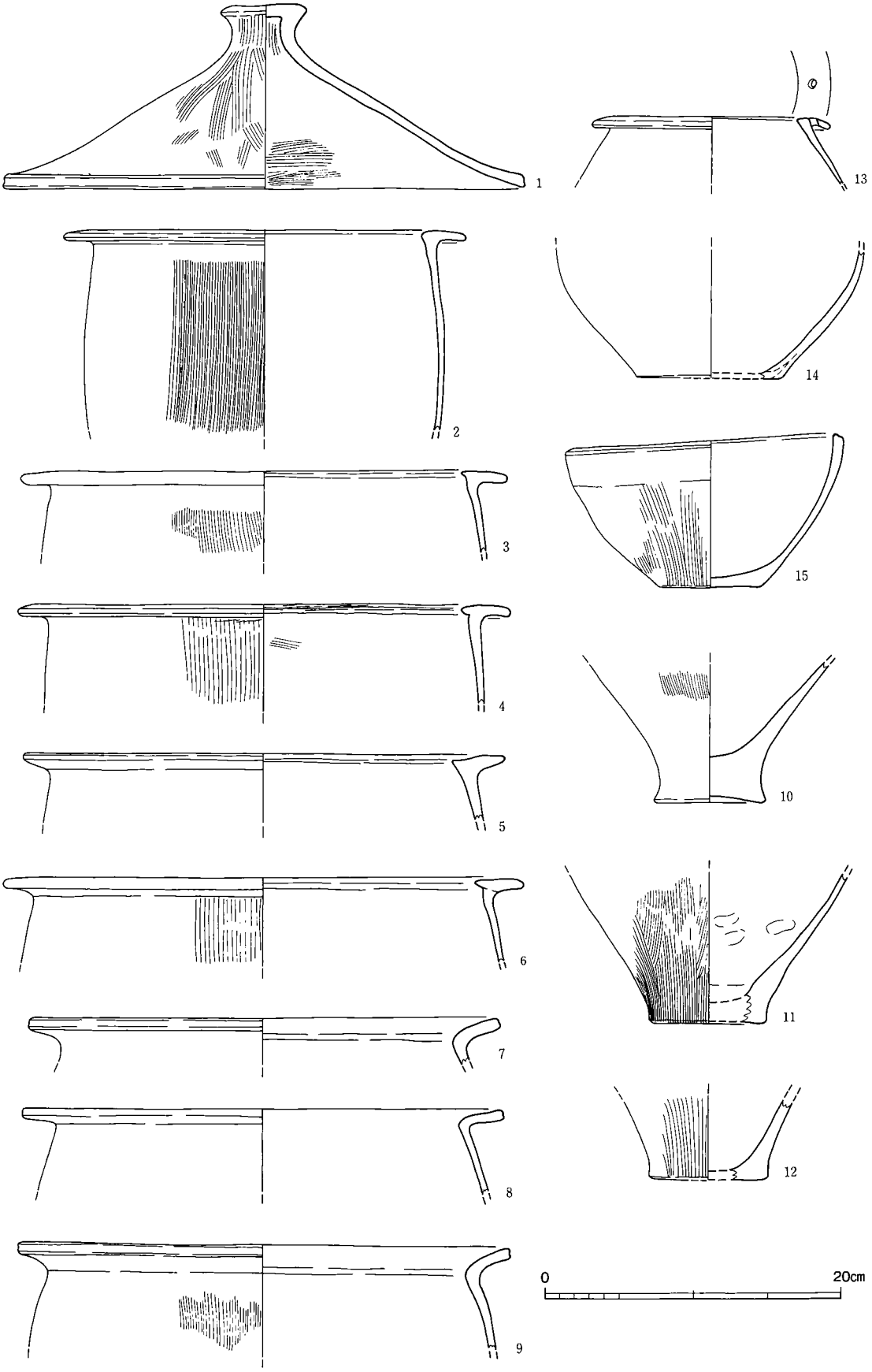
甕（2～12・16～19）2～6は鋤先状もしくはそれに近い形態のものである。2は内側に未発達の口縁であり、外側にやや垂れる。3・4は口縁がわずかに内側に発達したもので、外側にわずかに垂れる。5は強いナデにより口縁上端部に一段、段が付き、わずかに内傾している。7～9・16～18は「く」字型気味の口縁を呈する。いずれも口縁端部は角張り気味に仕上げられる。10～12は底部である。10は上底で、底部は厚く、古い形態を残す。11の底部もやや厚い。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕を残す。底部1/3に黒斑が付く。18はややはね上げ気味の口縁部である。外面の調整はハケメで口縁下に垂れ気味の三角突帯が貼り付けられる。外面屈曲部分付近にはハケメ原体がなで上げられたときの痕が残る。19は中形の甕の口縁である。口縁は鋤先状に発達し、上端部は平坦面を呈す。外面口縁部より下に大きな黒斑が付く。内外面の調整はナデである。

器台（20）20は器台である。上部より下部がわずかに広がるが胴部のくびれはあまりない。外面の調整はハケメ。内面の調整は上部から胴部にかけては成形時の指頭圧痕が残る。下部にはハケメが施される。

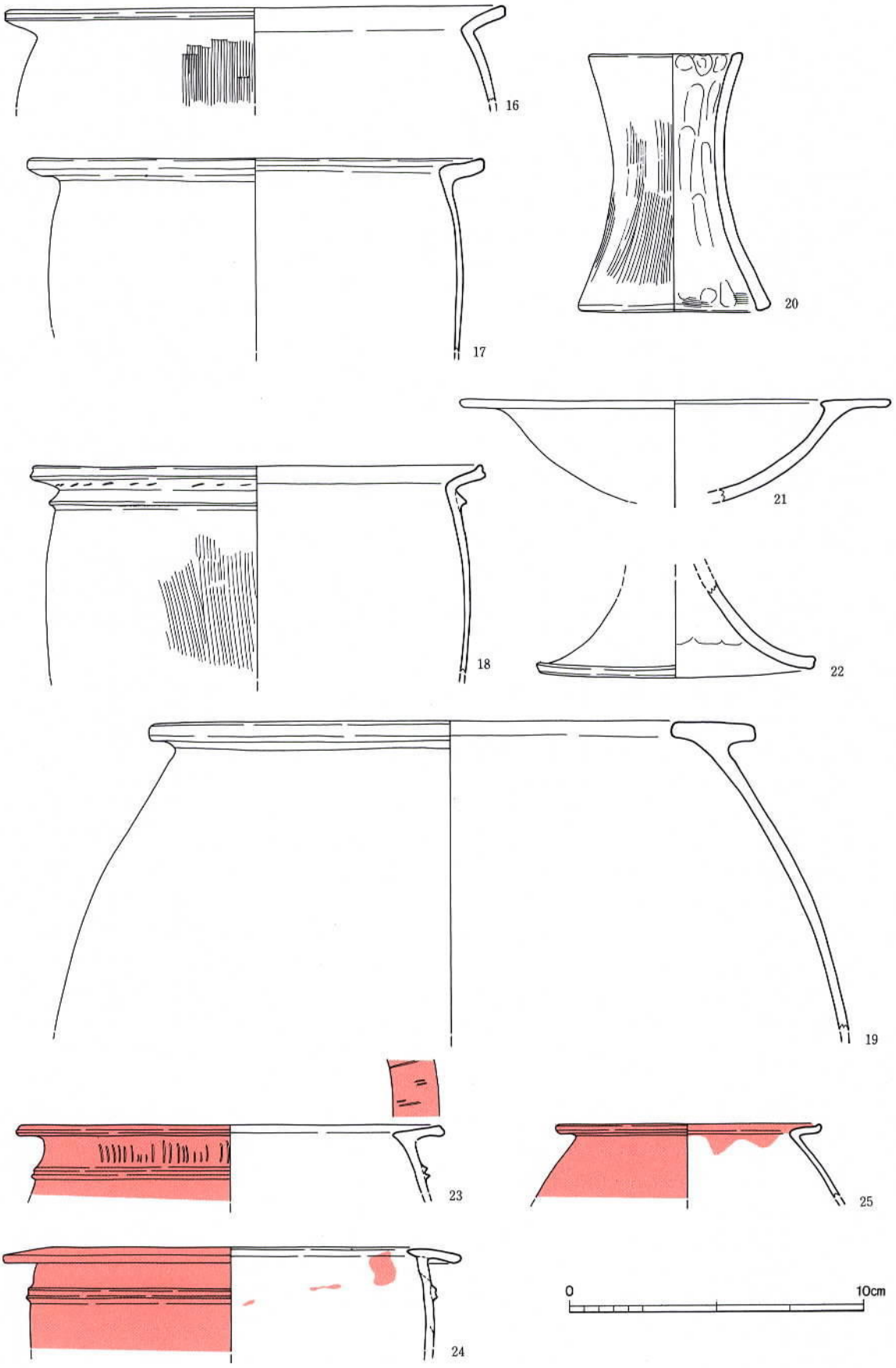
高坏（21・22）21は口縁が鋤先上を呈する高坏の坏部である。内外面の調整はナデか。器面にわずかに化粧土が残存している。22は高坏の脚部で歪んでいる。内外面の調整はナデ。

丹塗土器

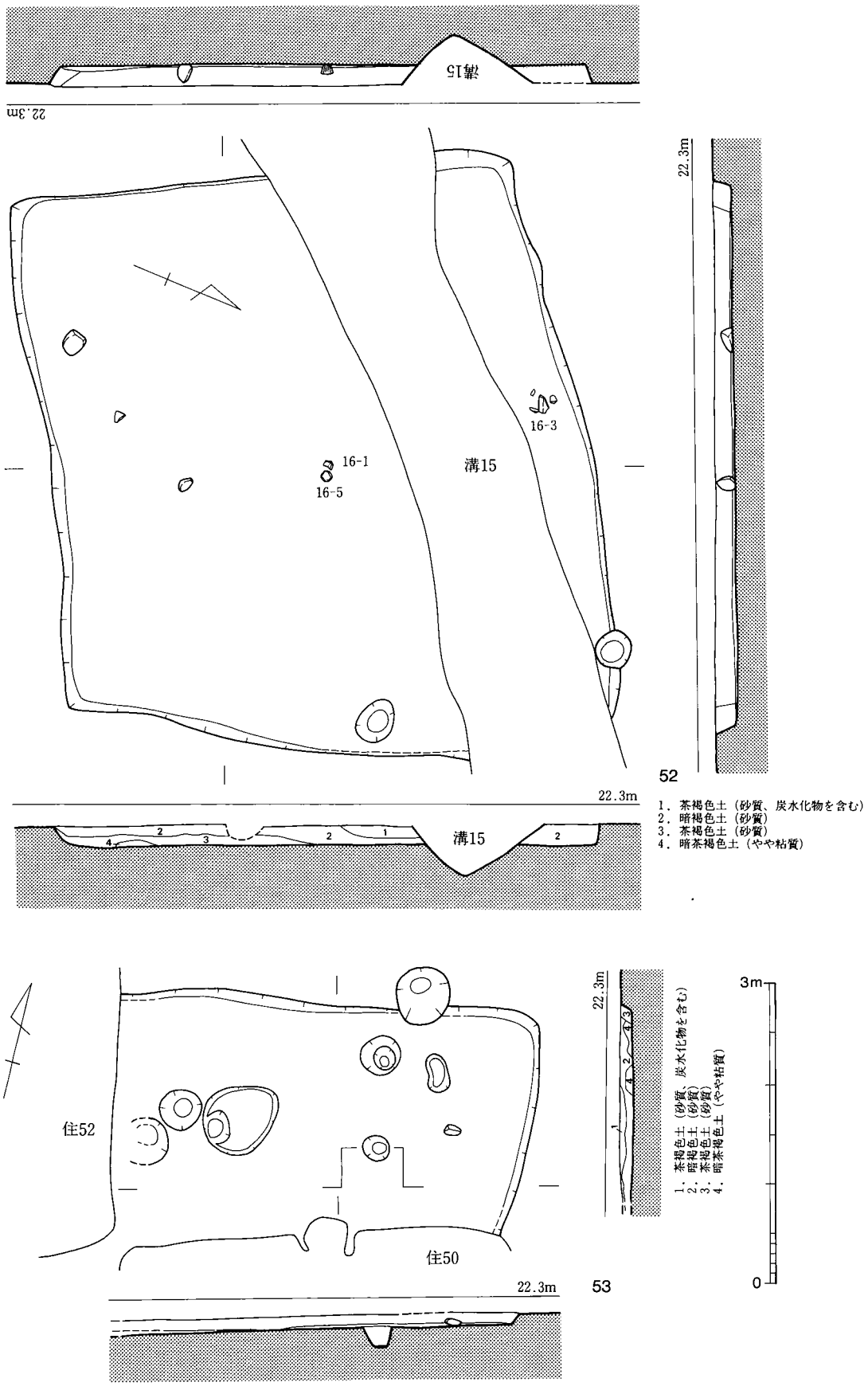
甕（23・24）23は口縁が鋤先状で外側によく発達し、内傾気味である。外面口縁下には「M」字型突帯が貼り付けられる。口縁上端面と口縁部と突帯の間には暗文が施される。外面のみに丹塗が施される。24は口縁が内外方向によく発達し、外側に大きく垂れる。口縁下には「M」字型突帯が貼り付



第13図　42号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



第14図　42号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



第15図　52・53号竪穴住居跡実測図（1/60）

けられる。突帯部分内面には接合時の膨らみがある。外面のみに丹塗が施されるが、内面にも一部付着している。

無頸壺（25）小型の無頸壺である。口縁部がわずかに内傾、端部がわずかに摘み上げられる。外面の調整はミガキか。外面と口縁部に丹塗が施されるが、内面口縁下に丹塗時の垂れが見られる。

52号竪穴住居跡（図版４－２、第15図）

調査区中央付近北よりで検出した。53・61・64号住居、42号土坑、15号溝と重複し、15号溝より古く、その他より新しい。平面プランは南北5.5ｍ、東西5.7ｍのやや不整な方形を呈する。壁の残りは悪く、20㎝程度である。中央部および長軸中央の壁際になにも付設されず、主柱穴も検出できなかった。床面下層の掘込み等も確認できなかった。遺物は床面よりやや浮いた状態で弥生土器がわずかに出土しているほか、投弾が出土している。

出土土器（第16図）

弥生土器

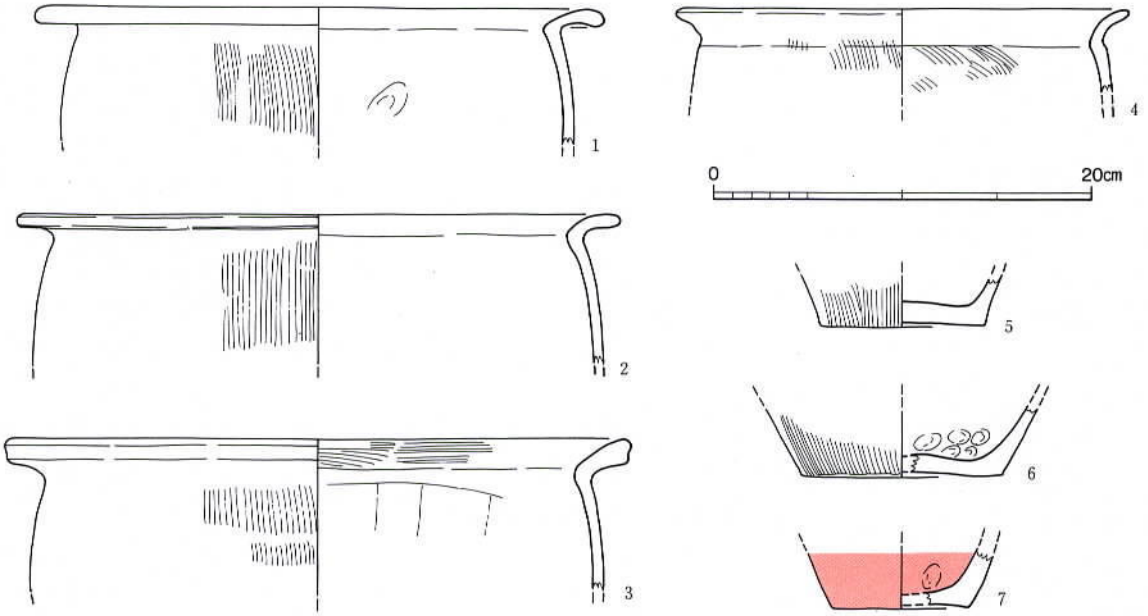
甕（１～６）１～３は逆「Ｌ」字型口縁の口縁を持つ。甕１・２は口縁端部を丸く仕上げられる。３は口縁端部をやや角張って仕上げられ、外面の調整はナデ、口縁部内面の調整はハケメ、内面は板状の原体でナデ上げられている。４は「く」字型の甕。他より新しい形態の口縁部である。内外面の調整はハケメ。５・６は甕の底部である。５は床付近から立ったままの状態で出土。６は樽型の甕の底部か。

丹塗土器

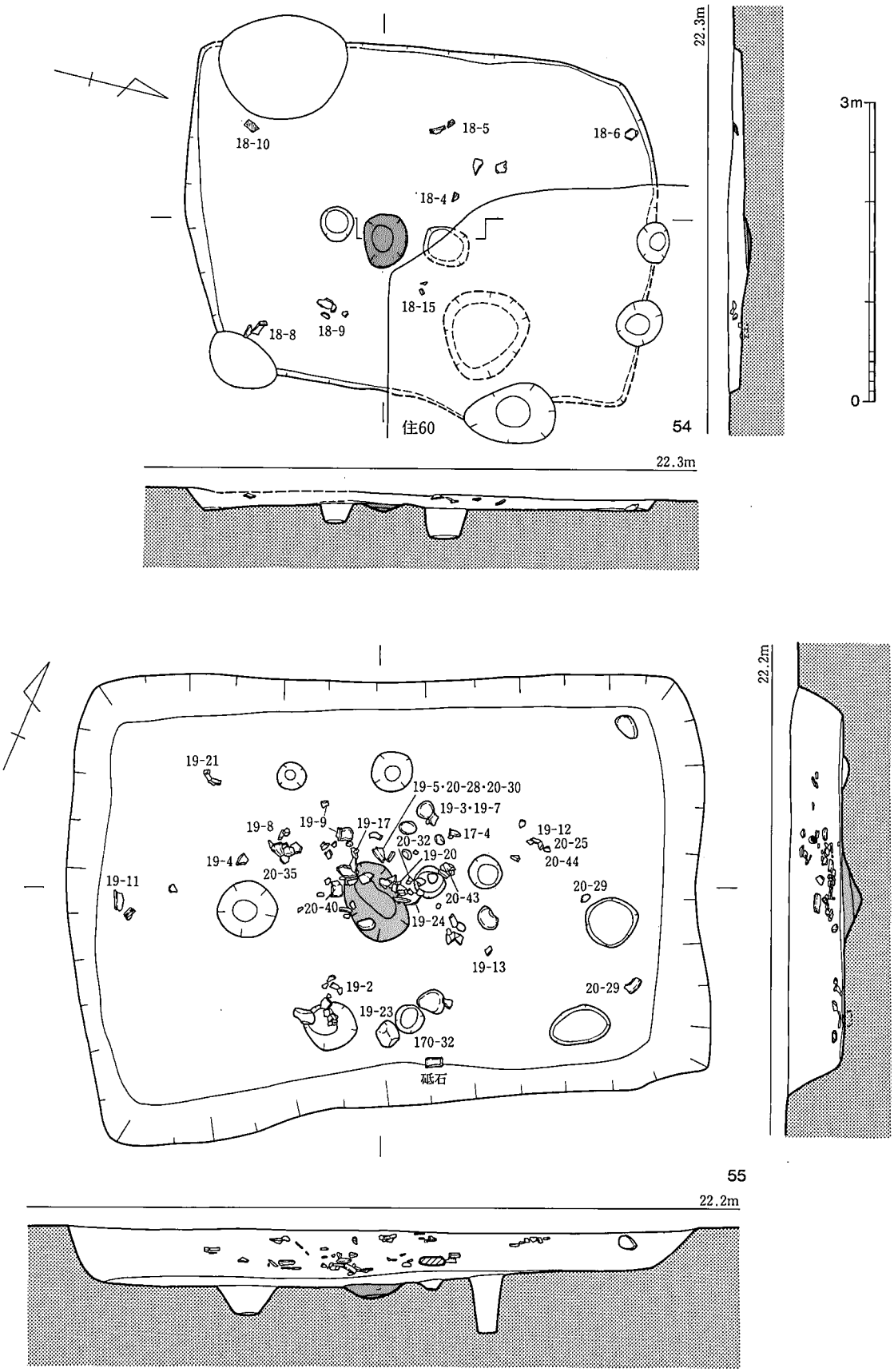
壺（７）底部のみである。小型の無頸壺の底部か。上げ底気味で内外面ともに丹塗を施す。

53号竪穴住居跡（第15図）

調査区中央付近北よりで検出した。50・52・61・63号住居と重複し、50号住居より古く、その他より新しい。平面プランは他の住居と重複し不明な部分もあるが、南北4.0ｍ、東西4.9ｍの方形のプランを呈すると思われる。壁の残りは悪く、15㎝程度である。住居内にいくつかのピットが検出されたが、いずれも主柱穴とはなり得ない。中央部分及び長軸中央の壁際には何も検出できなかった。貼床



第16図　52号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第17図　54・55号竪穴住居跡実測図（1/60）

等の掘り込みは確認できなかった。遺物は出土しなかった。

54号竪穴住居跡（図版４－３、第17図）

調査区中央付近北よりで検出した。60号住居、25号土坑と重複し、その中で最も古い。平面プランは南北4.7ｍ、東西3.5ｍのやや不整な長方形を呈する。壁の残りは悪く、10cm程度である。中央部やや南よりに炉を付設する。炉は楕円形のプランを呈し、10cm程度掘り込まれ、炉内全体が火を受けわずかに赤変している。その両脇には15cm程度の間隔をあけ、長軸上に2本の主柱穴が配される。いずれも柱根は確認できなかった。床面下の掘り込みはない。遺物は弥生土器が床面よりやや浮いた状態で出土している。60号住居との切り合いを間違えたため、遺物が混じった可能性がある。

出土土器（図版30、第18図）

弥生土器

甕（１～９）１～５はいずれも「く」字型気味の口縁部を持つ甕の口縁部である。１～３は口縁端部を丸く仕上げる。１の内面はナデ。２の内面は縦方向のハケメ。３は横方向のハケメを施している。４は口縁端部を角張って仕上げている。口縁部内面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。外側の調整はハケメでそれを切る3条の沈線が施される。全体のつくりは端正で、焼成は良好である。５も角張った口縁端部を持ち、外面の調整はハケメである。その上から三角突帯が貼り付けられる。突帯部分内面には、貼り付け時の膨らみが観察できる。７・８は甕の底部である。７は底部が数片に割れていた。接合を行った結果、色調がまったく異なる。２次加熱を受けた痕跡もないため、焼成時の失敗により割れたもので、埋没過程の住居に投棄されたものと考えたい。８の外面の調整は下から上へのハケメである。内面は板状工具によるナデの原体痕が残る。６・９は樽型になる甕の底部。

壺（10～13・15）10は広口壺の口縁部から肩部である。外面は暗文を施す。内面はミガキが施される。器表面に化粧土がわずかに残存している。11は鋤先状の口縁を持つ広口壺の口縁部。外面に暗文が施される。12は壺の底部である。内面に指頭圧痕が見られる。13は小型の壺の底部か。内外面ともに調整はナデである。15は口縁部が大きくすぼまる壺である。口縁部内側に接合痕が見られる。口縁下には三角突帯が貼り付けられ、突帯部分内面は膨らんでいる。その部分に黒斑が観察できる。外面はミガキ調整を施す。

鉢（14）14は口縁端部を角張って仕上げる鉢。内外面の調整はナデ。

高坏（16）16は鋤先口縁状の高坏の坏部。内外面の調整はナデである。

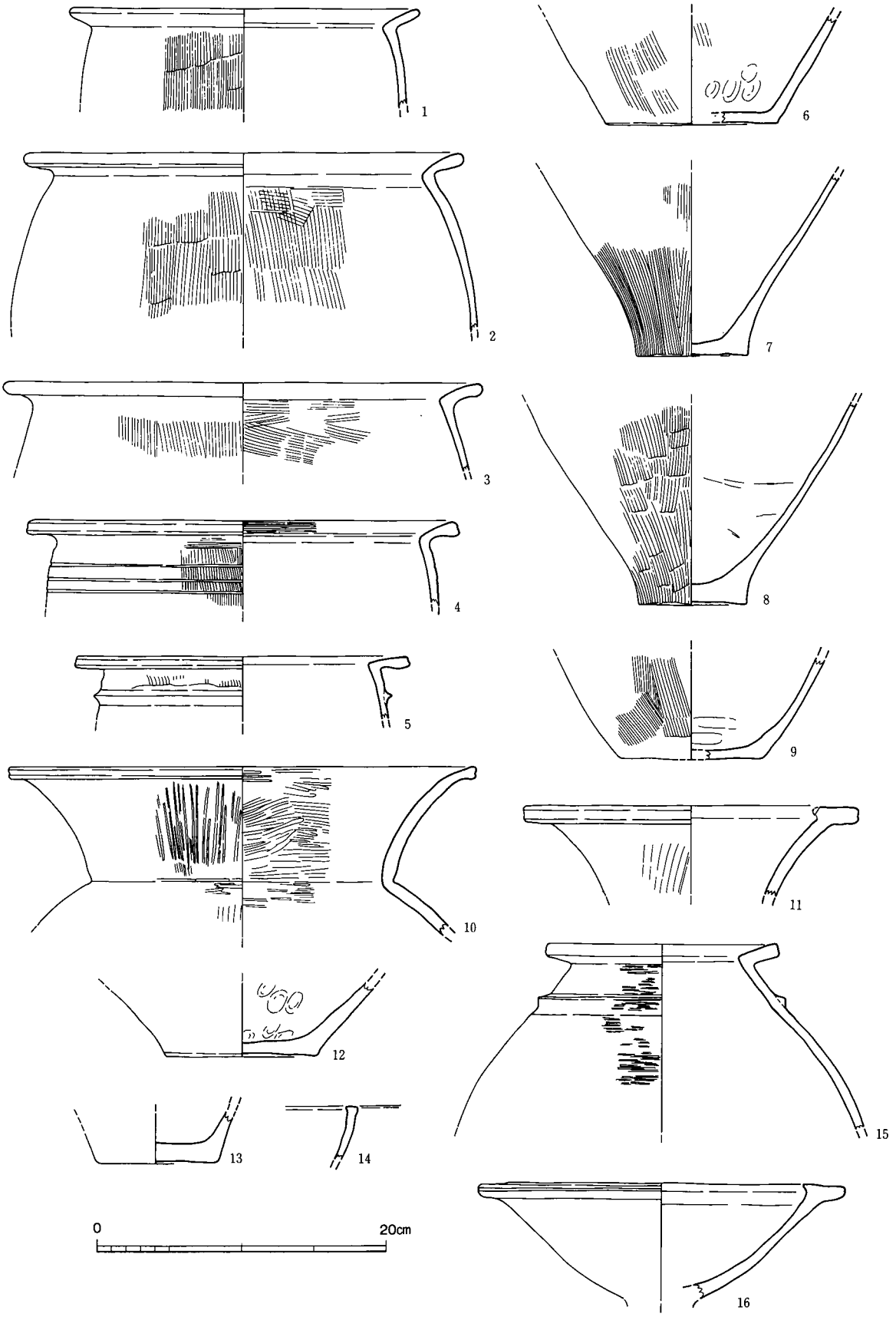
55号竪穴住居跡（図版５－１、第17図）

調査区中央で検出した。41号土坑と重複し、これより新しい。平面プランは東西6.3ｍ、南北4.5ｍのほぼ長方形を呈する。壁の残りはよく深い部分では60cm程あり、壁の立ち上がりはかなり緩やかである。中央に炉が付設されるが、楕円形に15cm程度掘りくぼめられ、内部にわずかに炭化物が検出できる程度で、熱による赤変等は見られなかった。長軸上に炉から約60cm離れ、２本の主柱穴があり、東側の主柱穴は床面から60cmと深く掘り込まれる。いずれも柱根は確認できなかった。長軸中央の壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。遺物は南壁床面直上で砥石が出土している。また、川原石などと一緒に弥生土器が浮いた状態でかなり出土しているが埋没の途中で投棄されたもので住居には伴わないと考えられる。

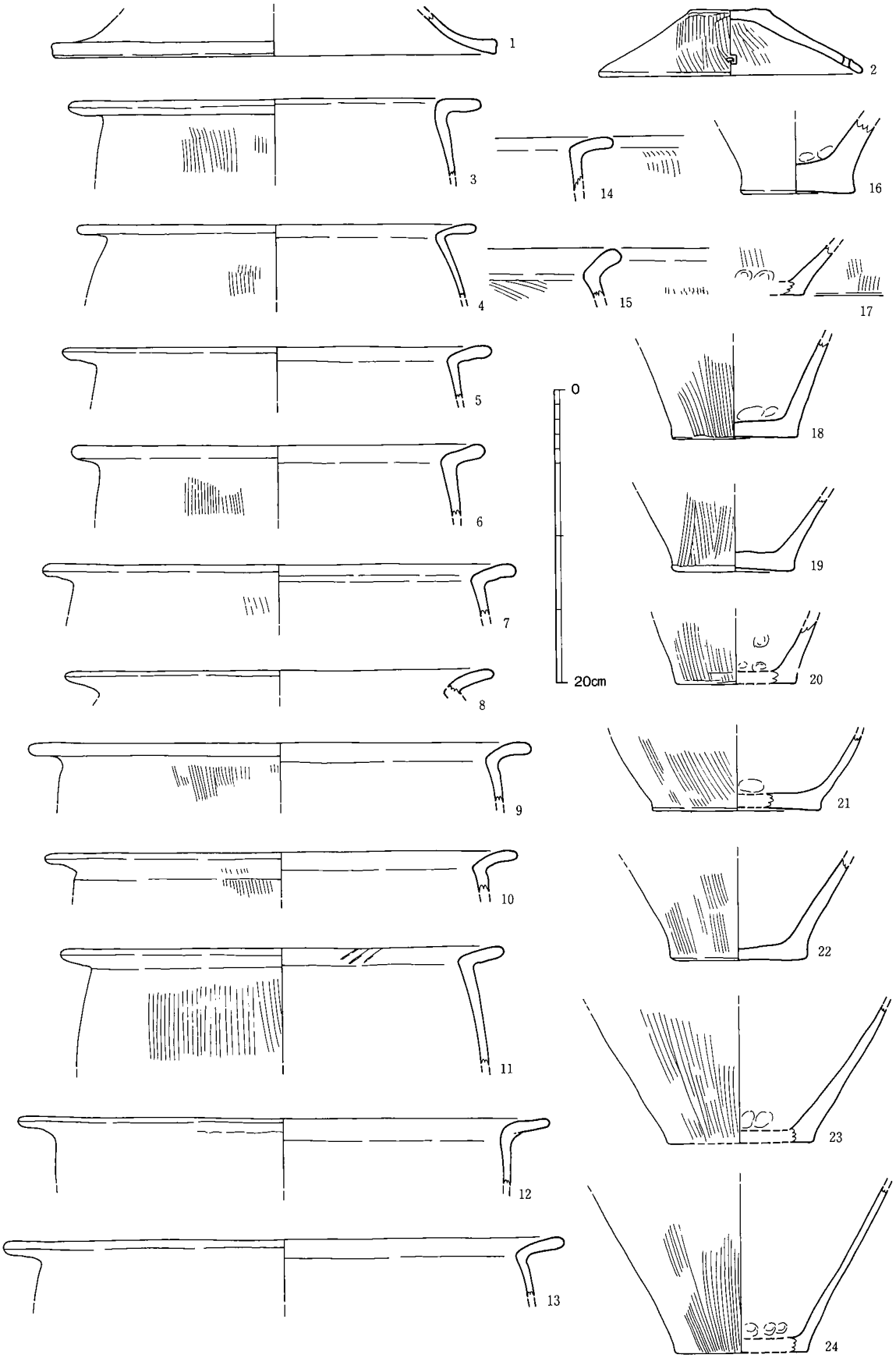
出土土器（図版31、第19・20図）

弥生土器

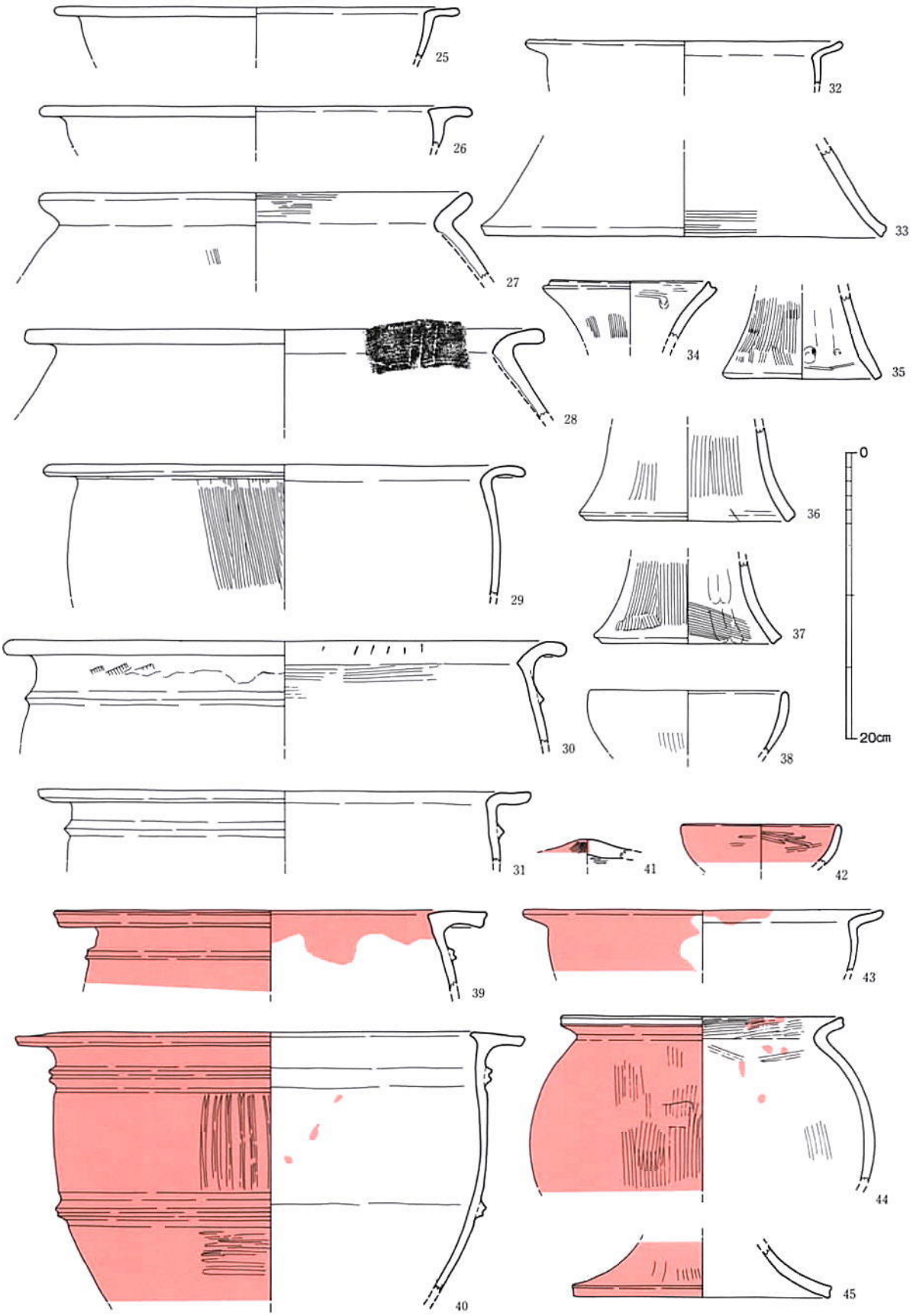
蓋（１・２）１は大型の蓋。口縁部を角張って仕上げ、端部をやや下に曲げ気味にする。外面の調



第18図　54号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第19図　55号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第20図　55号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

整はハケメ。2は小型の蓋。口縁端部は丸く仕上げられる。天上部は平坦で、内外面の調整は粗いハケメ。ハケメの後、口縁部よりやや上に外側からの穿孔が施される。

甕（3～32）3～15・25・27～29・32は口縁を強く外側に折り曲げるものから、「く」字型の口縁を持つものである。いずれも口縁端部を丸く仕上げられる。11は口縁部内面に3本の刻目をもつ。15の内面の調整はハケメである。28も口縁部内側に3本の刻み目を施される。32の口縁端部はややはね上げ気味である。26はやや鋤先状の口縁部をもち、この住居の他の甕の特徴とは異なる。30は内外面の調整にハケメを用いる。ハケメの後、口縁部分の横ナデを行い、口縁内側に6本の刻み目を施す。外側口縁下には下向き気味の三角突帯が貼り付けられ、ハケメをナデ消している。突帯部分の内面は貼り付けにより膨らんでいる。31も口縁下に三角突帯を貼り付けるものであるが、前者よりはややはね上げ気味の口縁を持つ。16～24は甕の底部である。16は他のものより底部が厚く、わずかに上底気味である。内外面の調整はナデで内面には指頭圧痕が残る。21・23は樽型の甕になる底部か。

高坏（33）33は高坏の脚部か。外面の調整はナデ。内面にはハケメが残る。

器台（34～37）34は器台の口縁部である。口縁端部は角張って仕上げられ、胴部にかけて大きくすぼむ。外面の調整は縦方向のハケメ。内面は横方向のハケメで指頭圧痕が残存する。35は器台の脚部。外面の調整は縦方向のハケメ。内面の調整は下端部が横方向のハケメ。それから上は指頭圧痕が強く残る。36の内外面の調整はハケメ。37の外面の調整は縦方向のハケメ。内面は強い指頭圧痕の後、横方向のハケメが施される。

鉢（38）38は鉢である。口縁端部が丸く仕上げられる。外面は摩滅が著しいがハケメ調整がわずかに残る。

丹塗土器

甕（39・40・43・44）39は丹塗の甕である。口縁は外側によく発達し、角張って仕上げられる。口縁下には「M」字型突帯が貼り付けられる。外面の調整はミガキでその上から丹塗が施される。口縁部の付近内面にも意図的に丹塗が施されており、その一部が下側に垂れている。40は鋤先口縁の丹塗の甕である。口縁は外側に傾く。口縁下には一見、「M」字型突帯が貼り付けられる。胴部最大径よりやや下にも同様の突帯が貼り付けられ、いずれの内面も貼り付けにより膨らんでいる。突帯間には縦方向の2～3本が一単位の暗文が施される。胴部突帯より下は横方向のミガキ。外面には丹塗が施され、内面の一部にそれが付着している。43は口縁を外側に強く折り曲げる甕である。外面に丹塗が施され、口縁部内面にその一部がはみ出している。

蓋（41）壺の蓋と思われる。外面は縦方向のミガキ。内面もミガキである。外面は丹塗が施され、その一部が内面に付着している。

鉢（42）口縁端部を丸く仕上げる。内外面ともにミガキ調整で、丹塗が施される。

高坏（45）高坏の脚部である。脚端部を角張って仕上げており、外面の調整はハケメ。その上から丹塗が施される。

56号竪穴住居跡（図版5－2、第21図）

調査区中央やや北東よりで検出された。66号住居と重複し、これより新しい。平面プランは東西5.2m、南北3.7mのほぼ長方形を呈する。壁の残りは深い部分で30cm程あり、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。中央に炉が付設されるが、ほぼ円形に5cm程度掘りくぼめられ、内部にわずかに炭化物が検出できる程度で、熱による赤変等は見られなかった。長軸上に炉から40cm離れたピットを検出したが、深さ10cm程度掘ると礫層となり、主柱穴としては疑わしい。長軸中央の壁際の土坑や貼床等

の掘り込みはない。遺物は土製の投弾が北西部付近で埋没の過程で投棄された状態でまとまって出土している。また、弥生土器も出土しているがいずれも浮いた状態である。

出土土器（第23図）

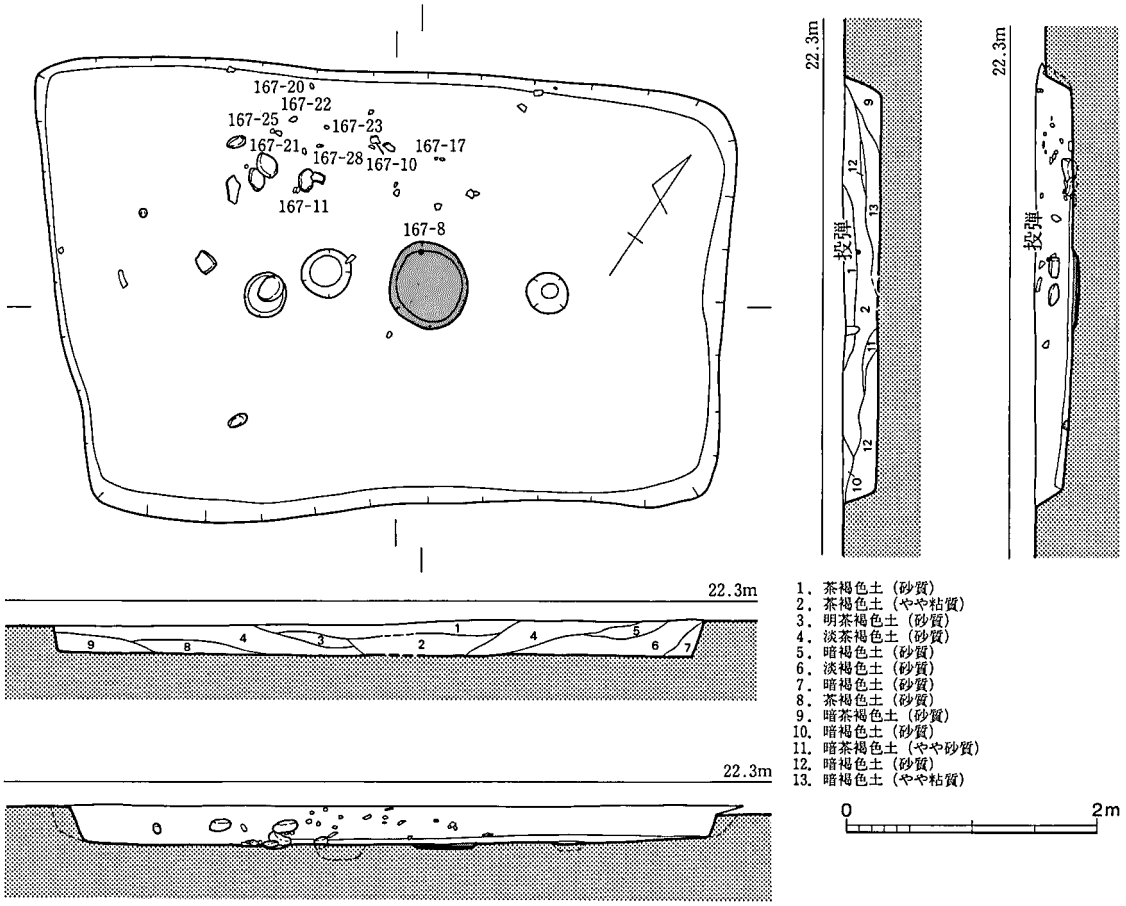
弥生土器

甕（1～8）1～3は口縁部を外側に強く折り曲げる甕である。口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部との境まで下から上への強いハケメが施され、それにより段状になっている。口縁部内側の調整はハケメ。2は口縁部との境までハケメが施され、口縁の横ナデにより、ナデ消されている。3の口縁部内側もハケメが施される。4は口縁下に三角突帯が貼り付けられる。5～8は甕の底部である。いずれの底部も薄い。

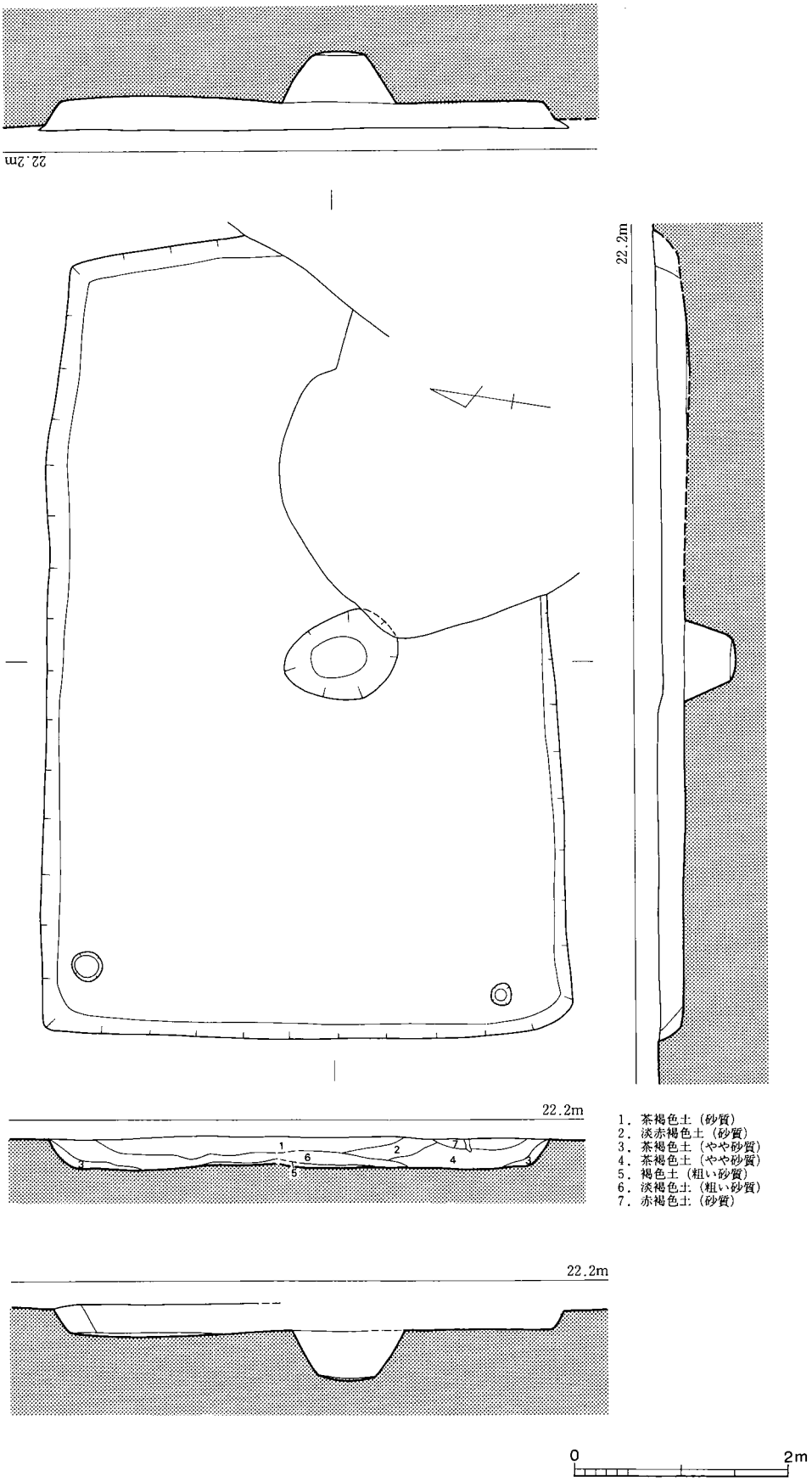
壺（9）9は壺の口縁部。口縁端部を丸く仕上げられ、外面の調整は粗いハケメである。

57号竪穴住居跡（図版5－3、第22図）

調査区中央やや東よりで検出された。15号溝と重複し、これより古い。平面プランは東西7.5m、南北4.9mの長方形になると思われ、集落内でも大型である。壁の残りは深い部分で30cm程度である。壁の立ち上がりは緩やかである。中央に楕円形で深さ約50cmの土坑が付設されるが、炭化物等はまったく検出されず、炉ではないと思われる。主柱穴になり得るピットは確認できなかった。長軸中央の



第21図　56号竪穴住居跡実測図（1/60）



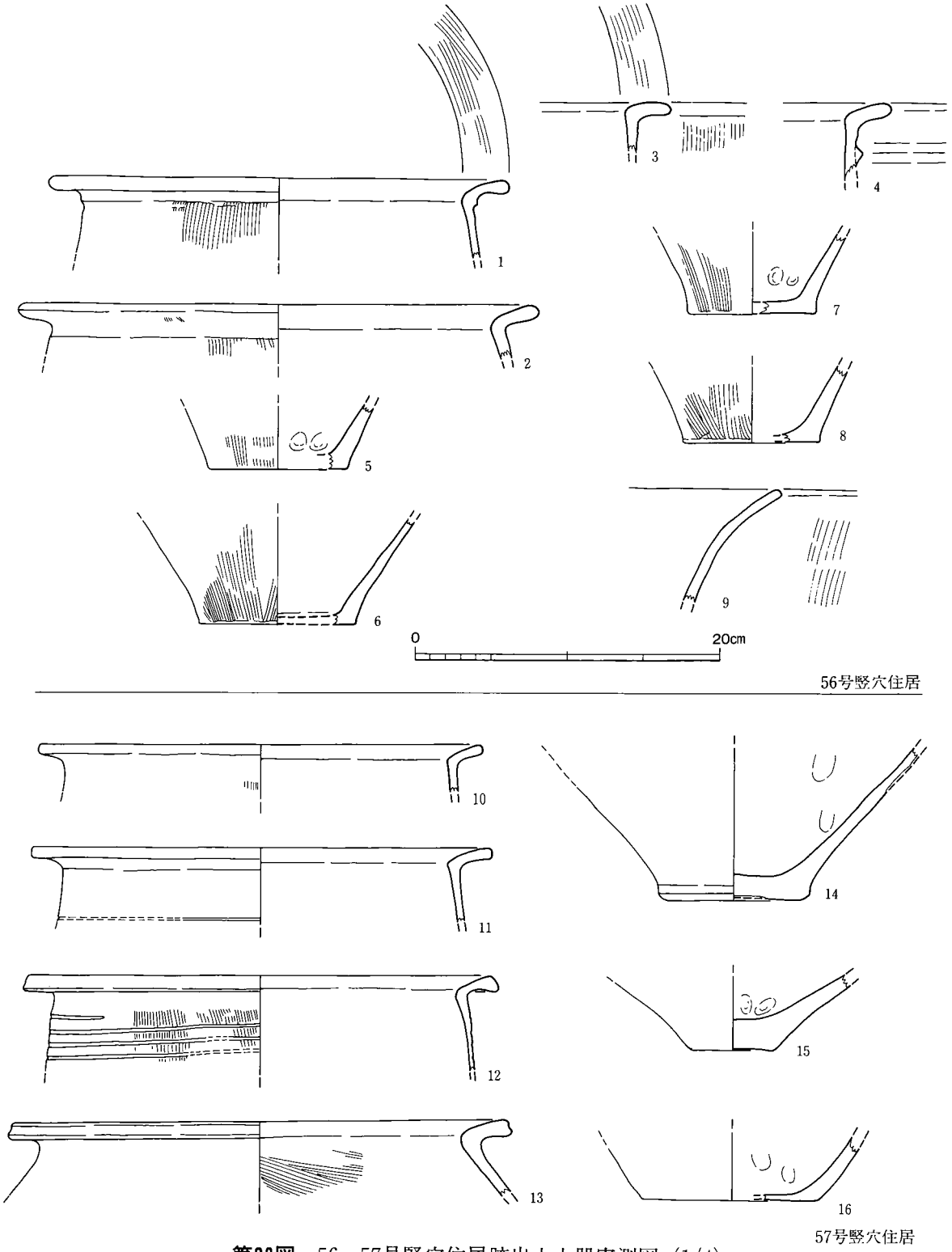
第22図　57号竪穴住居跡実測図（1/60）

壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。西壁両隅に小ピット２基を検出している。遺物は弥生土器が床面からかなり浮いた状態で出土している。

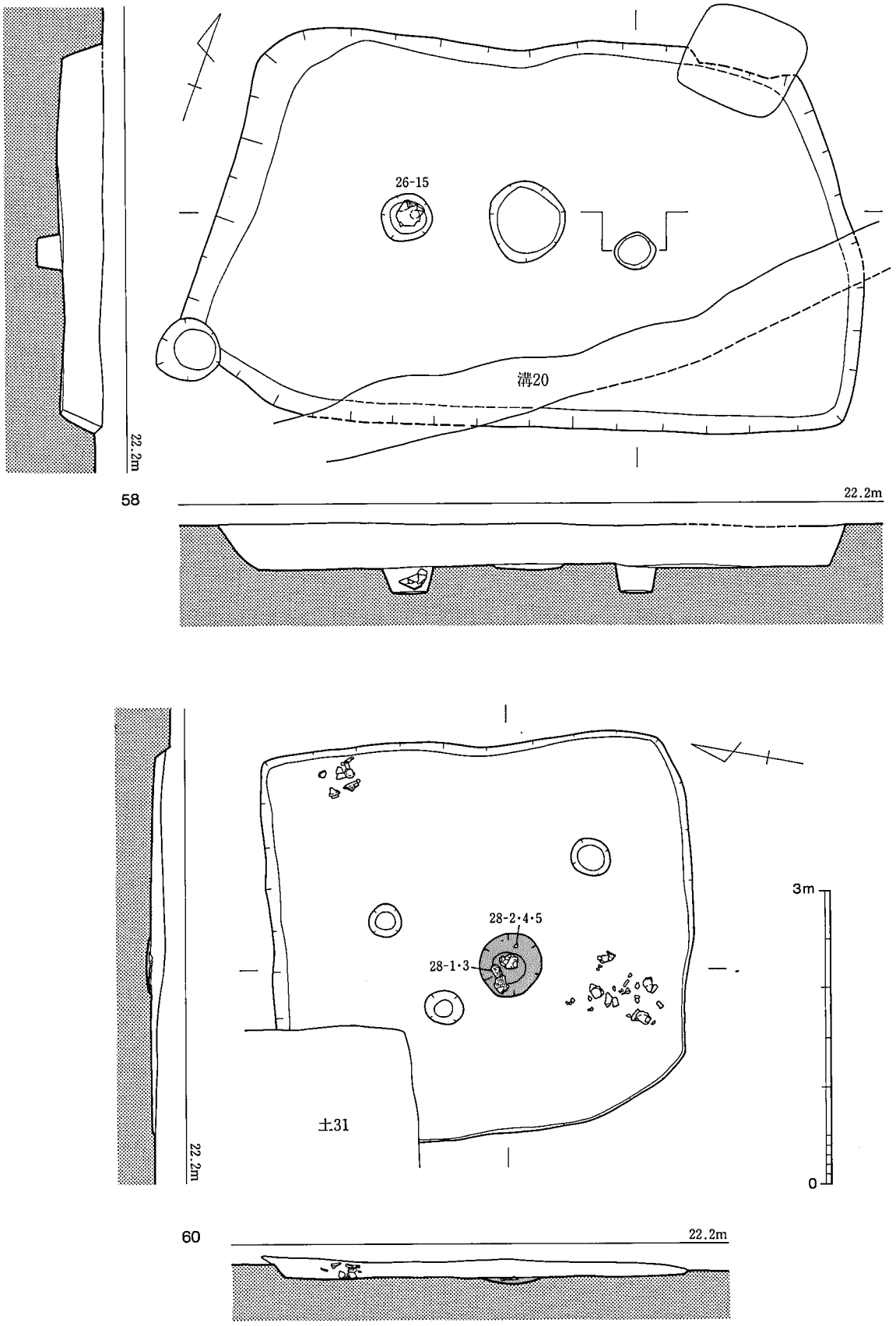
出土土器（図版32、第23図）

弥生土器

甕（10～13・16）10・11は口縁を強く折り曲げられる甕で、端部を丸く仕上げられる。11には口縁下に1条の沈線が施されている。12･13は口縁端部が角張って仕上げられる甕である。12の外面の調整はハケメである。それを切って、螺旋状に見かけ３～４条の沈線が施される。13は胴部が大きく開く



第23図　56・57号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第24図　58・60号竪穴住居跡実測図（1/60）

甕で内面の調整はハケメである。16は樽型になる甕の底部である。内面には指頭圧痕が残存する。

壺（14・15）14・15は壺の底部である。いずれも内面に指頭圧痕が残存している。

58号竪穴住居跡（図版６－１・２、第24図）

調査区中央やや東よりで検出された。103号住居、20号溝と重複し、これらより古い。平面プランは東西7.0ｍ、南北4.0ｍの隅丸台形を呈する。壁の残りは比較的よく、深い部分で約40cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。中央にほぼ円形で深さ５cmの掘り込みがあり、内部から炭化物がわずかに出土しており、炉と考えられる。長軸上、炉から50cm離れた部分に2本の主柱穴を検出した。いずれも深さ30cmほど掘り込まれる。東側の主柱穴内から一個体分の甕（15）が出土している。ピット検出時に柱根は確認できず、甕は主柱を据える段階で入ったものではなく、主柱が抜き取られた後に入り込んだものと思われる。長軸中央の壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。遺物は東側部分から弥生土器が埋没の過程で投棄された状態で出土している。また、埋土から磨製石鏃、不明石製品が出土している。

出土土器（図版32、第25・26図）

弥生土器

甕（１～11・15）１～11は口縁部が外側に強く折れ曲がるものから「く」字型口縁に近いものまである。９以外は口縁端部を丸く仕上げられる。10の口縁部内面には刻み目が施される。11の口縁部内面はハケメである。15は日常用の甕では大型のものである。口縁部は「く」字型口縁に近く内傾する。胴部は大きく開き、最大径の部分にわずかに下を向く三角突帯が貼り付けられる。胴部から底部にかけては大きくすぼまる。口縁部内側と胴部三角突帯の内側には貼り付け時の膨らみ及び指頭圧痕が見られる。内外面の調整はハケメ。外面のハケメは突帯の横ナデに切られる。内面のハケメは内側部分の膨らみ及び指頭圧痕の上から施されている。胴部下半部分及びそれに相対する胴部上半に大きな黒斑が見られる。色調が破片により大きく異なり、焼成時に失敗し、まとめて住居に投棄された可能性が考えられる。

鉢（12）口縁が外面に折れ曲がる鉢か。口縁端部は丸く仕上げられ、内外面の調整はナデ。

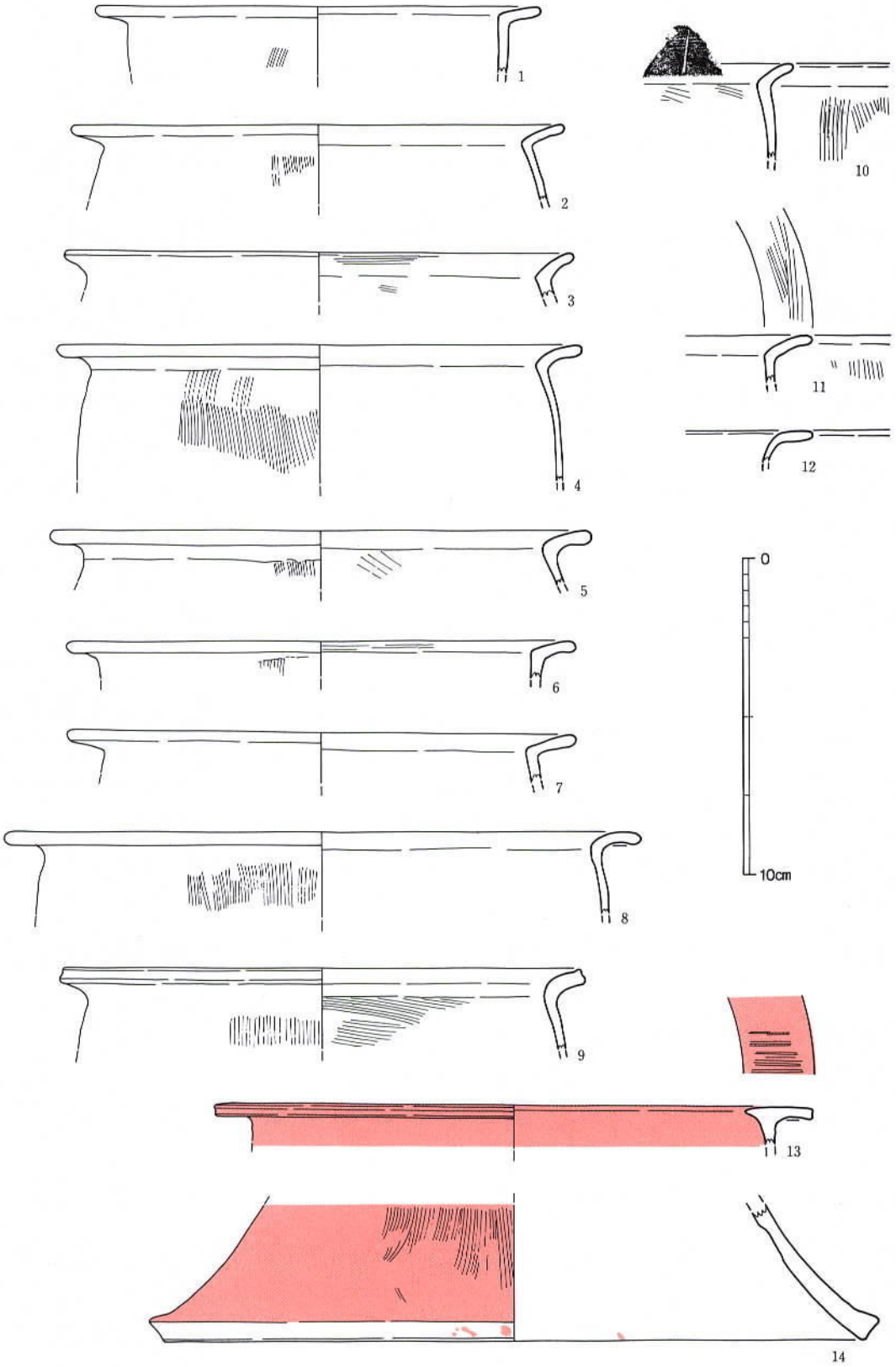
丹塗土器

甕（13）鋤先口縁の甕。口縁部上端は平坦面を呈し、暗文が施される。

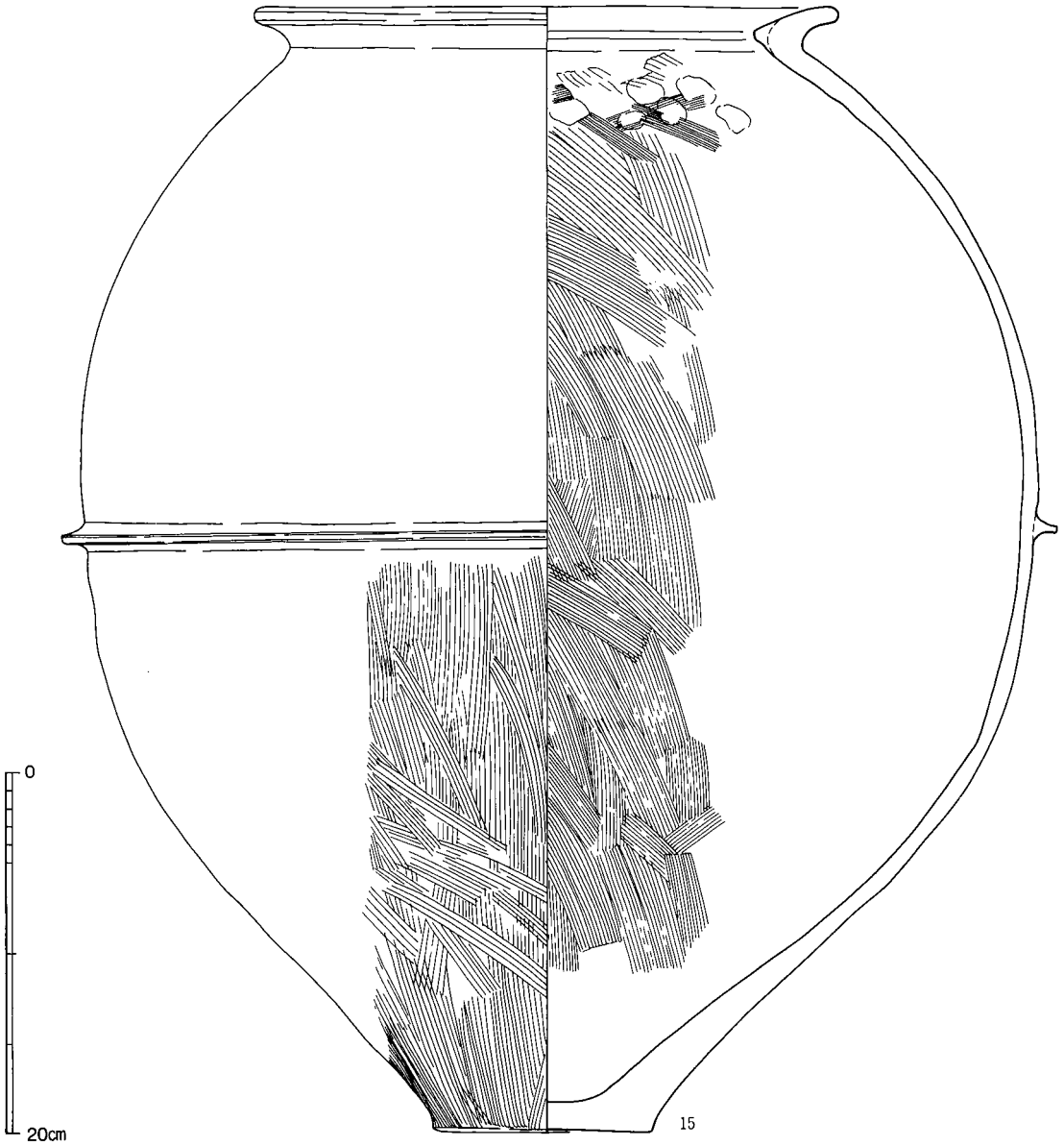
筒形器台（14）筒形器台の脚部である。脚端部は角張って仕上げられ、外面の調整はハケメで、丹塗が施され、一部は内部にも付着している。

60号竪穴住居跡（図版６－３・７－１、第24図）

調査区中央部分やや北よりで検出された。51号住居、54号住居、31号土坑と重複し、54号住居より新しく、その他より古い。平面プランは東西4.0ｍ、南北4.3ｍのほぼ正方形である。壁の残りは悪く深い部分で15cm程度である。中央やや東よりにほぼ円形の炉が付設される。炉は５cmほど掘りくぼめられており、炭化物がわずかに検出されたが、炉床の熱による変化は見られない。内部からは炉内に埋没する状態で甕（１～５）が出土している。平面プランの軸上からかなりずれるが、深さ30cmほどのピット２基が検出されており、これらが主柱穴になると考えられる。いずれも柱根は確認できなかった。長軸中央の壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。遺物は炉以外から弥生土器が北東辺と南西辺からまとまって出土しているが、床面から浮いた状態であり、埋没時に投棄されたものと考えられる。また、54号住居との切り合いを間違えたため、遺物が混じった可能性がある。



第25図　58号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第26図　58号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

出土土器（第28図）

弥生土器

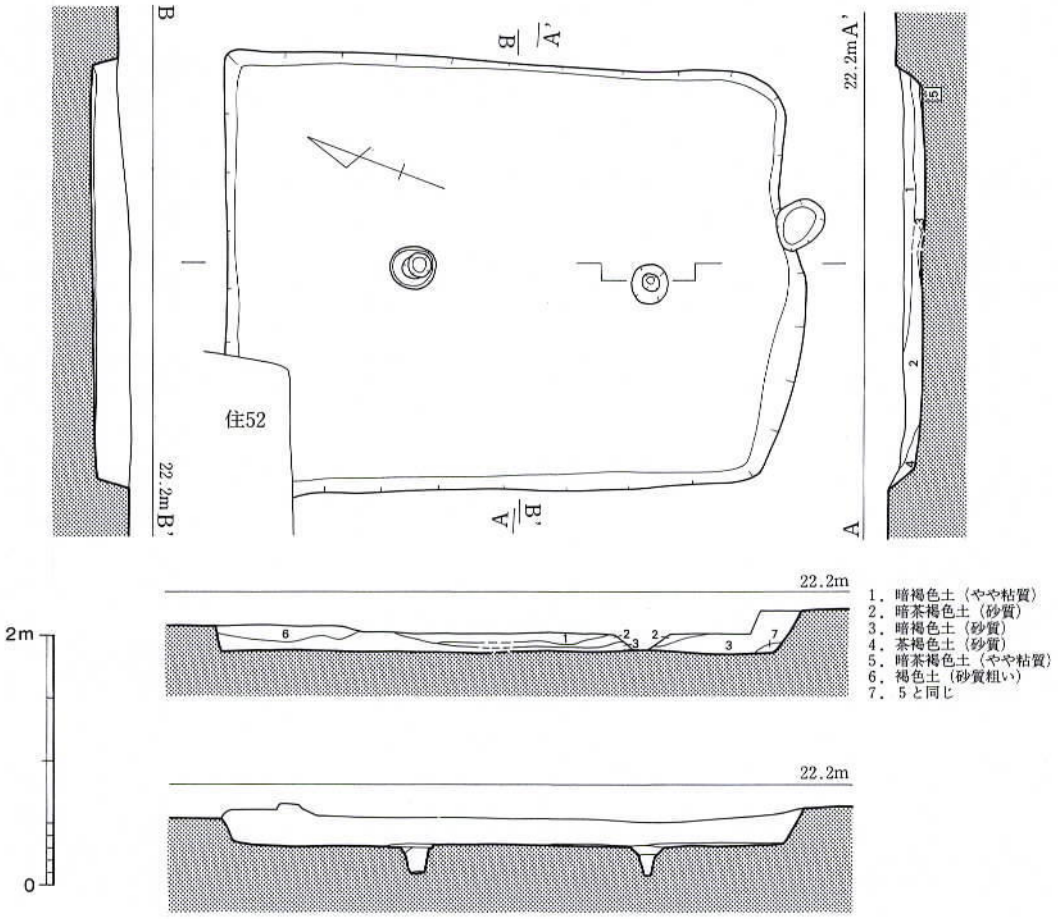
蓋（1）小型の蓋。口縁端部を丸く仕上げている。内外面の調整はナデ。

甕（2～4）2は「く」字型の口縁の甕である。内外面の調整は粗いハケメ。3は中型甕の胴部である。内外面の調整はハケメである。ハケメの上から尖り気味の1条の三角突帯が貼り付けられている。突帯部分内面は貼り付け時の膨らみが観察できた。4は甕の底部である。底面はわずかに膨らむ。

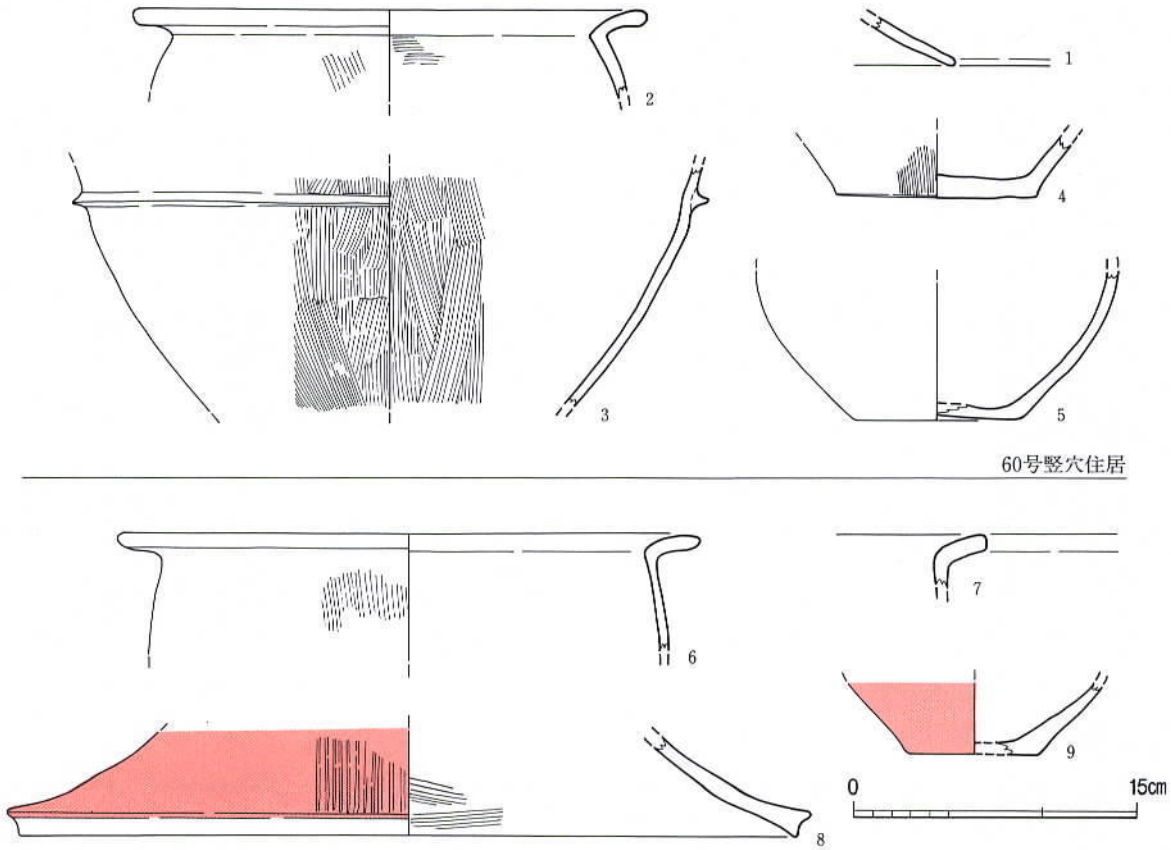
壺（5）壺の底部から胴部である。底部はわずかに上げ底気味で。内外面の調整はナデ。

61号竪穴住居跡（図版7－2、第27図）

調査区中央部分やや北寄りで検出された。50号住居、52号住居、53号住居と重複し、これらの中で最も古い。平面プランは南北4.6m、東西3.4mの長方形を呈する。壁は深い部分で約30cm残存する。中央に炉、土坑等は付設されず、また、長軸の壁際中央の土坑や貼床等の掘り込みも確認できなかっ



第27図　61号竪穴住居跡実測図（1/60）



第28図　60・61号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

た。長軸上に２本の主柱穴が1.8ｍの間隔で検出された。いずれのピットも段を付けた掘り込みで、深さは約20cmである。柱根は確認できなかった。遺物は弥生土器が床面から浮いた状態でわずかに出土している。

出土土器（第28図）

弥生土器

甕（６・７）口縁を外側に折り曲げる甕である。口縁端部は丸みをもって仕上げられる。

丹塗土器

筒形器台（８）脚部のみであるが、筒形器台の脚部と思われる。脚端部は角張って仕上げられる。外面は縦方向の暗文。内面の調整は横方向のハケメ。外面のみに丹塗が施される。

壺（９）９は小型壺の底部。外面のみに丹塗が施される。

62号竪穴住居跡（図版７－３、第29図）

調査区の東南部で検出した。平面プランは東西4.2ｍ＋α、南北4.6ｍの東西に長い方形プランを呈すると思われる。壁は深い部分で約25cm残存する。長軸上よりやや南に炉が付設される。深さ５センチ程度掘り込まれ、内部には土器（14・23）のほか炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。また、その付近からは遺物がややまとまって出土している。炉跡東側に主柱穴を検出している。ほぼ全面に暗褐色砂質土が堆積していた。この暗褐色砂質土を除去した時点で炉、主柱穴掘形を検出でき、床面としたのだが、北壁付近では礫が露出しており、掘りすぎの可能性もある。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版32、第30・31図）

弥生土器

蓋（１）蓋のつまみ部分。頂部はくぼみ、比較的薄い。外面の調整はハケメ。

甕（２～23）２～６・９～12は口縁を外側に強く折り曲げる甕で、端部を丸く仕上げる。胴はあまり張らない。７・８・11は口縁を角張って仕上げる甕。８はつくりがよい。13・23は胴部が大きく張る甕。14～22は甕の底部。14・19・21・22は胴部が樽型になる甕の底部。14は底部に焼成後、外側から穿孔を行う。19は底がわずかにレンズ状を呈する。

鉢（24～27）小型の鉢。器形は丸い。25は口縁端部を角張って仕上げている。それ以外は丸く仕上げている。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。

高坏（28）28は高坏の口縁部。調整はナデ。

器台（30～32）30は器台の口縁か。小片で径は不明。口縁外側に三角突帯を貼り付ける。31・32は器台の脚部。32は外面の調整に二種類のハケメを用いている。

丹塗土器

甕（33～36・38）33・35は口縁を外側に強く折り曲げる甕。35は鋤先口縁。34は胴部に下方へ垂れた台形突帯を貼り付けた甕。外面底部付近の調整はハケメ。38は甕の底部。外面は、ミガキ調整の後、丹塗を施す。

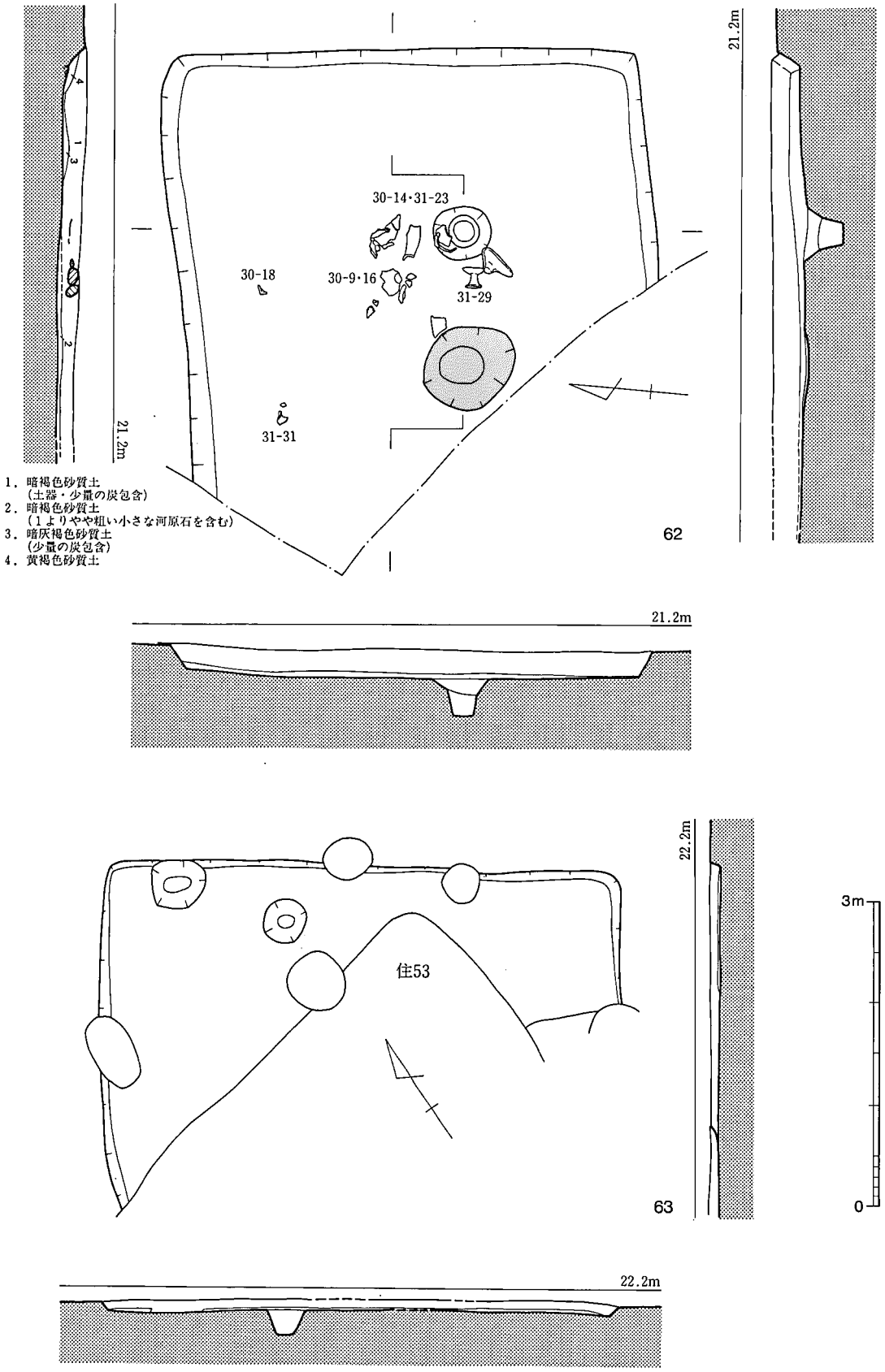
壺（37）37は無頸壺の口縁部。ナデ調整で、内外面ともに丹塗を施す。

高坏（29）浅い坏部に太い脚部を接合する。外面の調整はハケメ。坏部内面はミガキ。

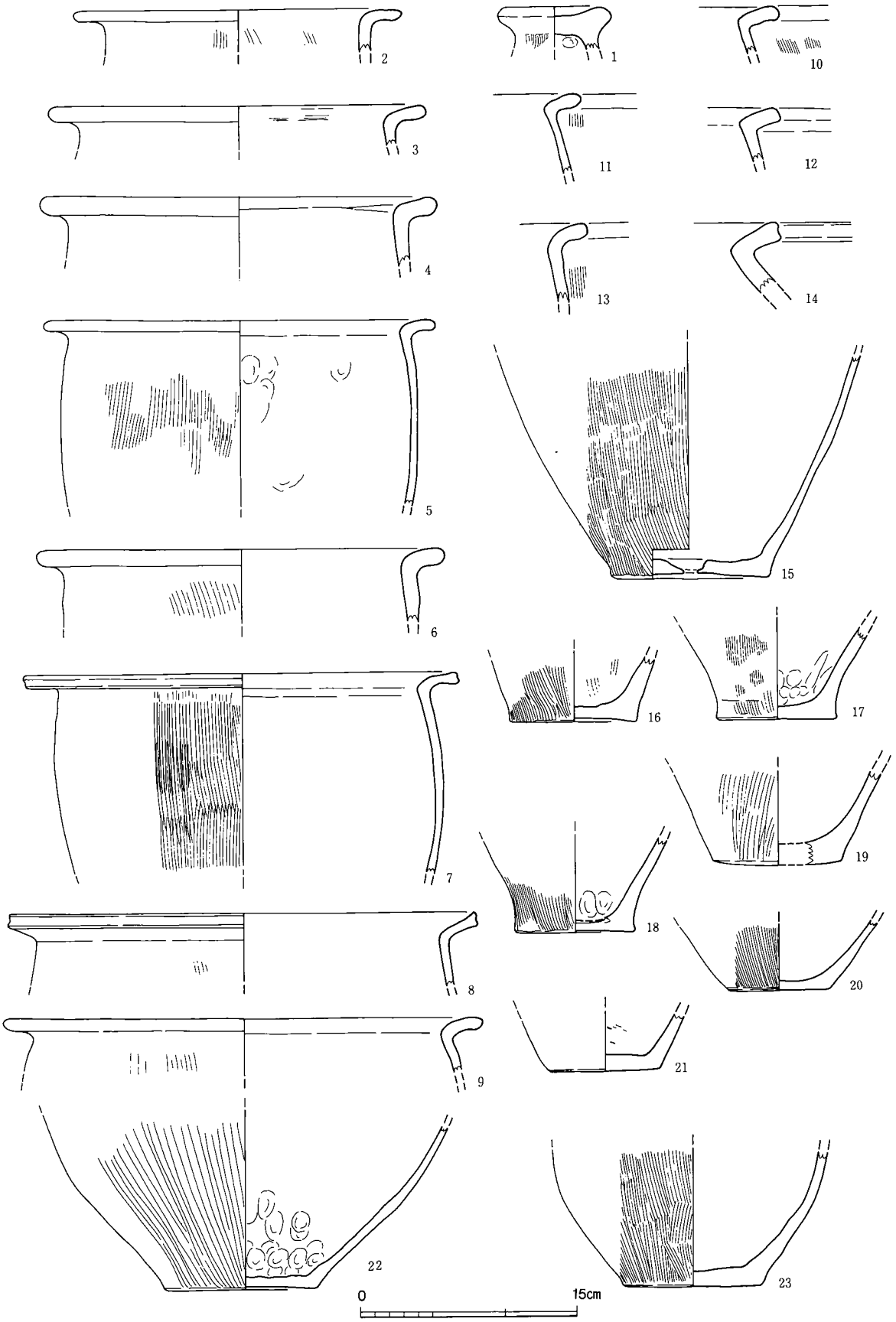
口縁部の二ヶ所に黒斑が残る。

63号竪穴住居跡（図版８－１、第29図）

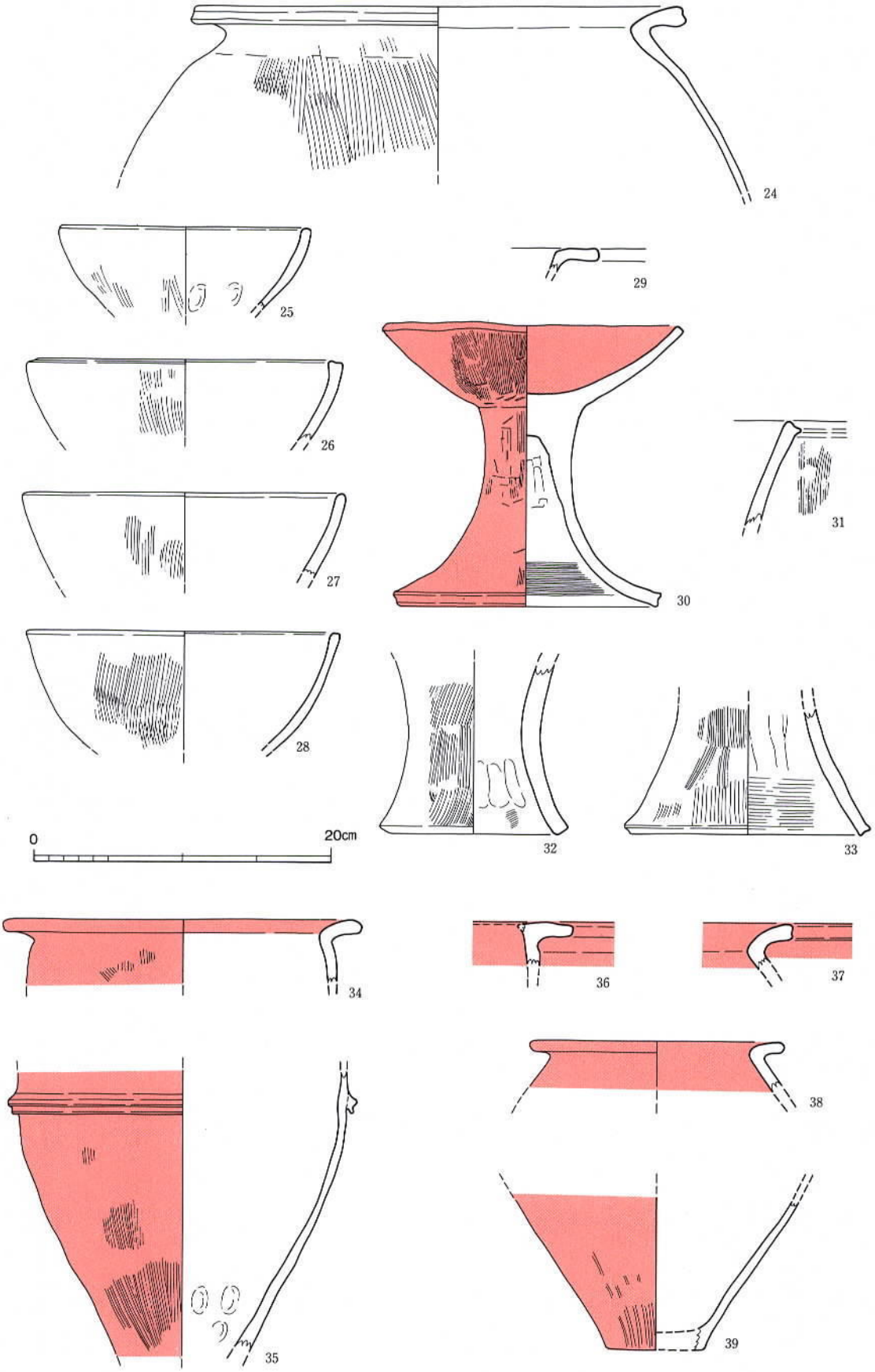
調査区中央部分やや北寄りで検出された。50号住居、52号住居、53号住居と重複し、これらの中で最も古い。平面プランは他の住居に切られるため不明であるが、東西5.0ｍ、南北3.4ｍ以上である。



第29図　62・63号竪穴住居跡実測図（1/60）



第30図　62号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



第31図　62号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

壁の残りは悪く、深い部分でも約10cmである。床面からピットは検出されたが、主柱穴は不明である。長軸中央の壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

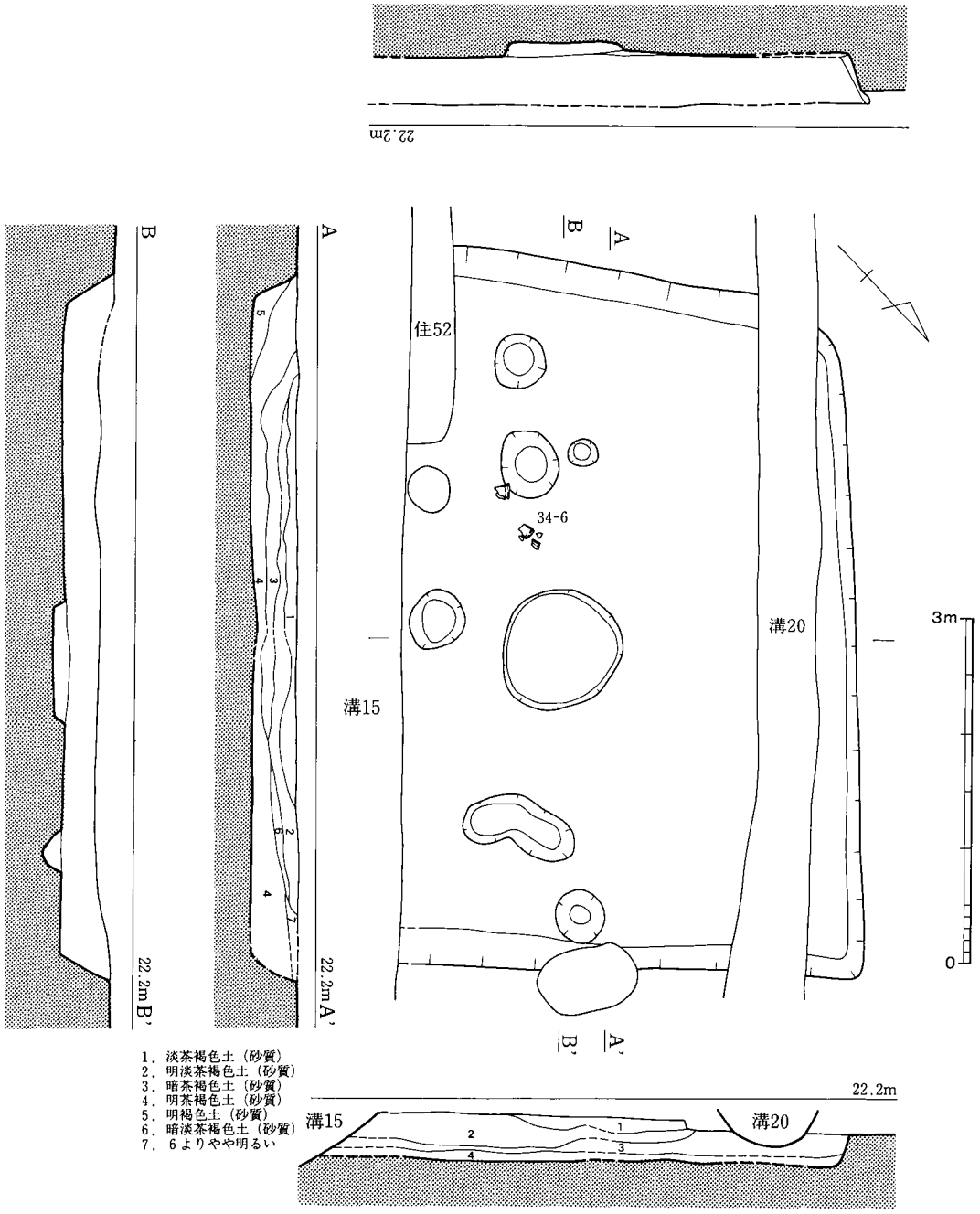
出土土器（第34図）

弥生土器

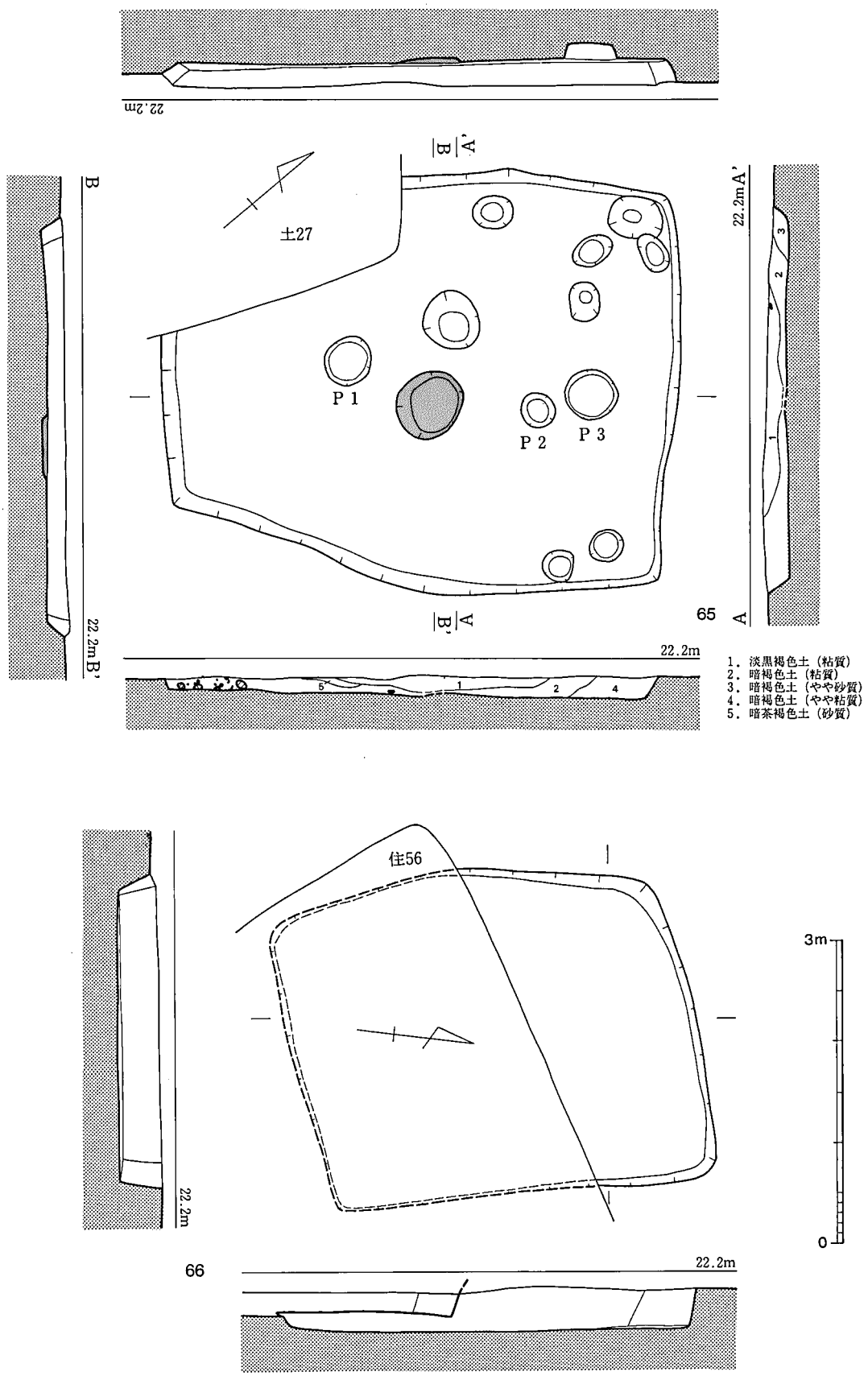
甕（1）口縁部を外側に強く折り曲げる甕。端部は角張っており下へ垂れている。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

64号竪穴住居跡（図版８－２、第32図）

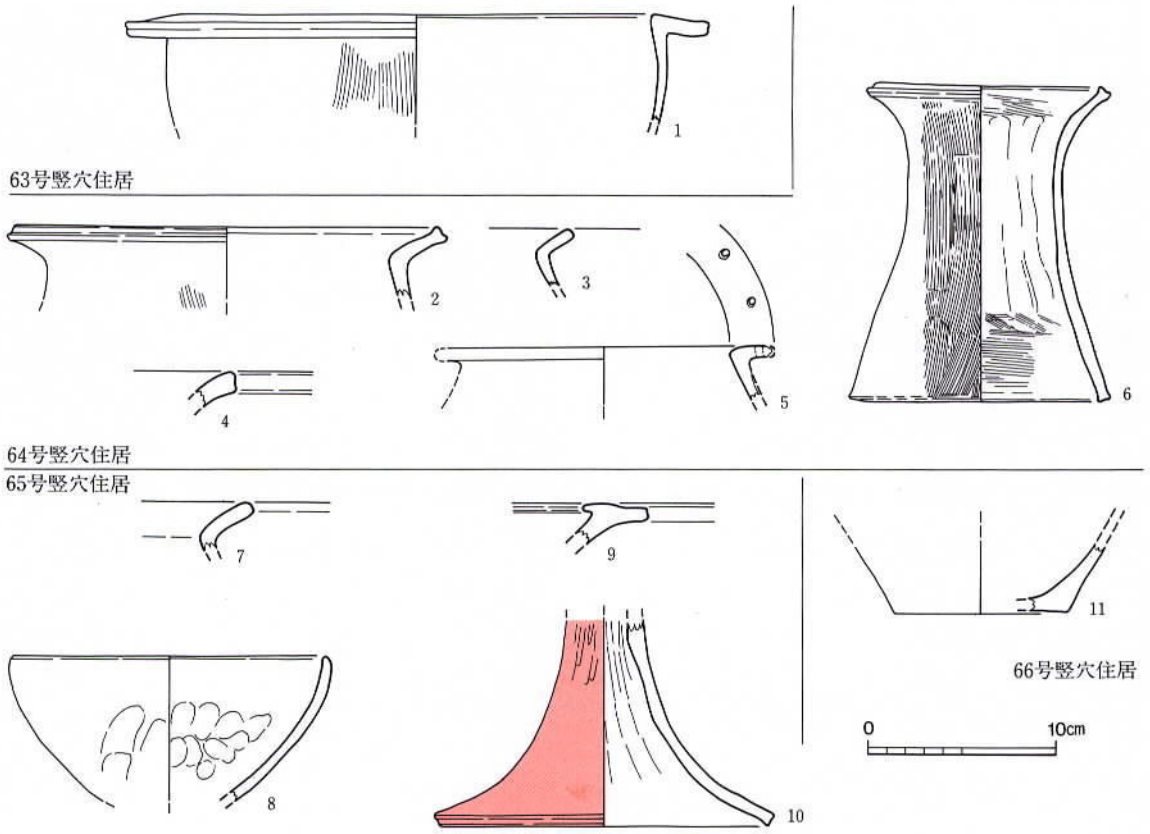
調査区中央部分やや西よりで検出された。80号住居、52号住居、102号住居、15号溝、20号溝と重複し、80号住居より新しく、その他より古い。平面プランは他の遺構に切られ不明であるが、南北6.2m、東西4.0m以上の長方形を呈するものと考えられる。壁は残りの良い部分では深さ約40cmで、立ち上がりは緩やかである。中央に円形で深さ約10cmの炉が掘り込まれる。炭化物をわずかに含むもの



第32図　64号竪穴住居跡実測図（1/60）



第33図　65・66号竪穴住居跡実測図（1/60）



第34図　63・64・65・66号住居跡出土土器実測図（1/4）

の、炉床には被熱による変化は見られない。床面では長軸上にいくつかのピットが検出された。長軸中央の壁際の土坑や貼床等の掘り込みはない。遺物は弥生土器がわずかに出土しているが、浮いた状態である。

出土土器（図版33、第34図）

弥生土器

甕（２～４）「く」字型口縁の甕である。2は口縁端部を角張って仕上げ、わずかにはね上げ気味である。

壺（５）５は小型の無頸壺である。口縁部を強く外側に折り曲げ、端部を丸く仕上げる。口縁部には上から下への2つの穿孔が施される。内外面の調整はナデである。

器台（６）口縁部が大きく開く器台。胴部から底部にかけてはあまり広がらない。上下端部ともに角張って仕上げられ、ナデ調整。外面は縦方向のハケメ。内面は全体に強い指頭圧痕の後、上下端部は横方向のナデが施される。

65号竪穴住居跡（図版８－３、第33図）

調査区中央部分やや東よりで検出された。27号土坑と重複し、これより古い。平面プランは南北5.0m、東西4.1mで南壁が短くなる台形を呈するものと考えられる。壁の残りは悪く、深い部分で約20cmである。中央に円形で深さ５cm程度の炉が付設され、内部には炭化物が堆積していた。炉床は被熱による変化は見られない。床面の南側半分では礫層が露出しており、下げ過ぎの可能性がある。中央長軸上にピットＰ－１～３が検出された。深さ15cm程度と浅いが床面を下げ過ぎていることから、南側はＰ－１を主柱穴と考えたい。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

出土土器（図版33、第34図）

弥生土器

甕（7）「く」字型口縁の甕である。口縁端部を丸く仕上げ、内外面の調整はナデ。

鉢（8）口縁端部を丸く仕上げる鉢である。胴部付近は内外面ともに強い指頭圧痕が残る。

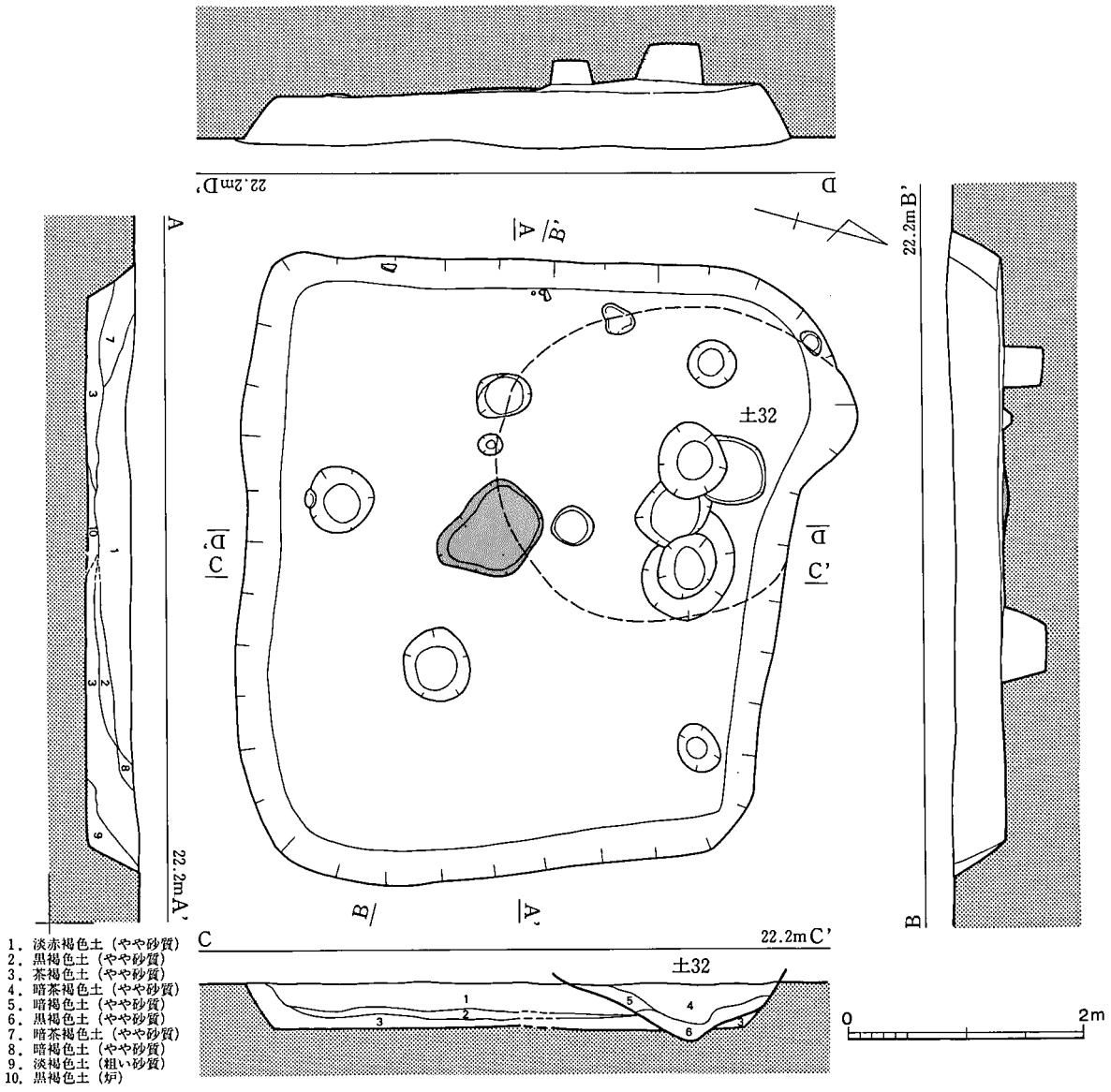
高坏（9）鋤先状に発達した高坏の口縁部である。内外面の調整はナデである。

丹塗土器

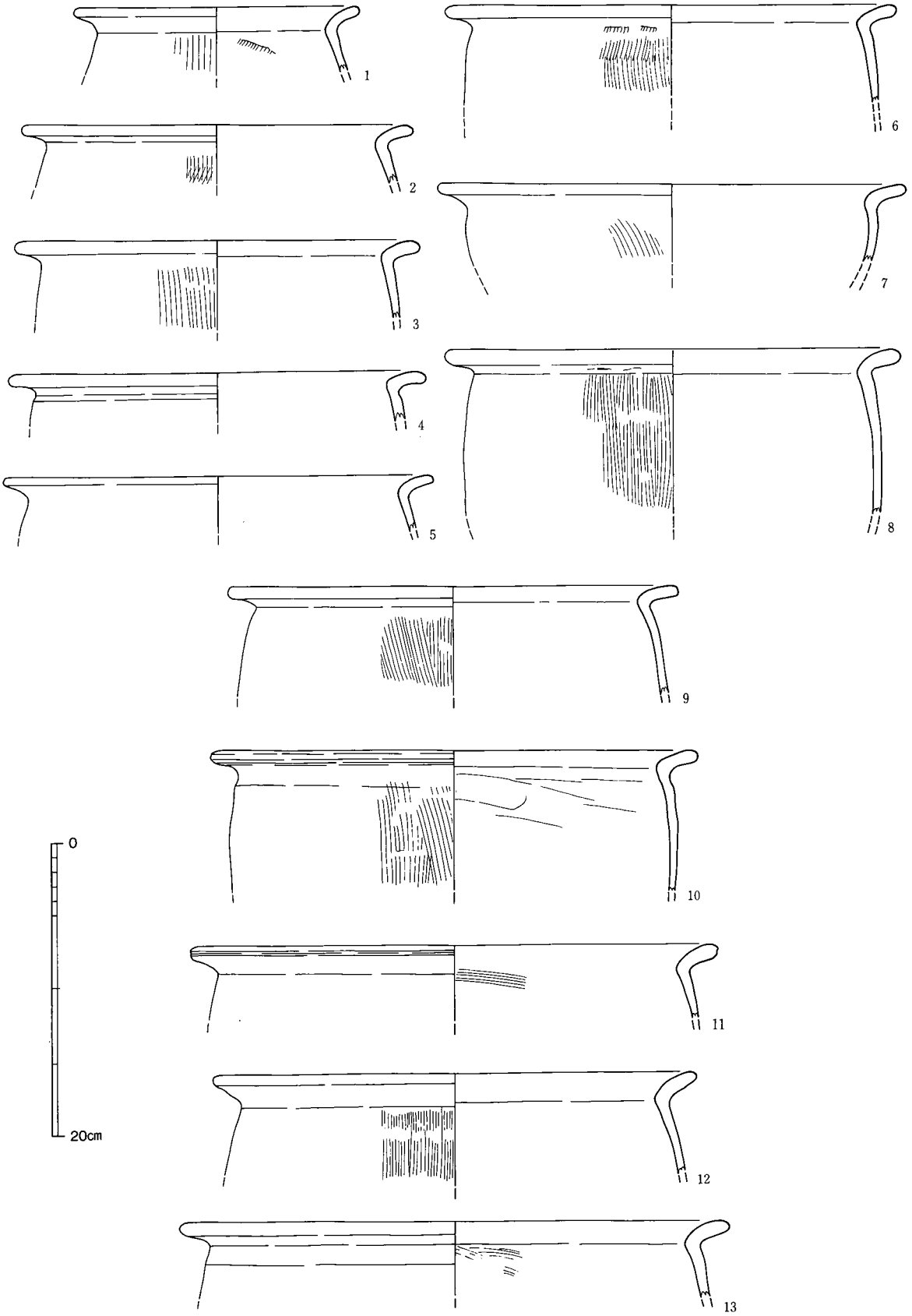
高坏（10）高坏の脚部である。外面は縦方向のミガキ。内面上部は絞り痕が残る。下部はナデ。外面には丹塗が施される。

66号竪穴住居跡（図版９－１、第33図）

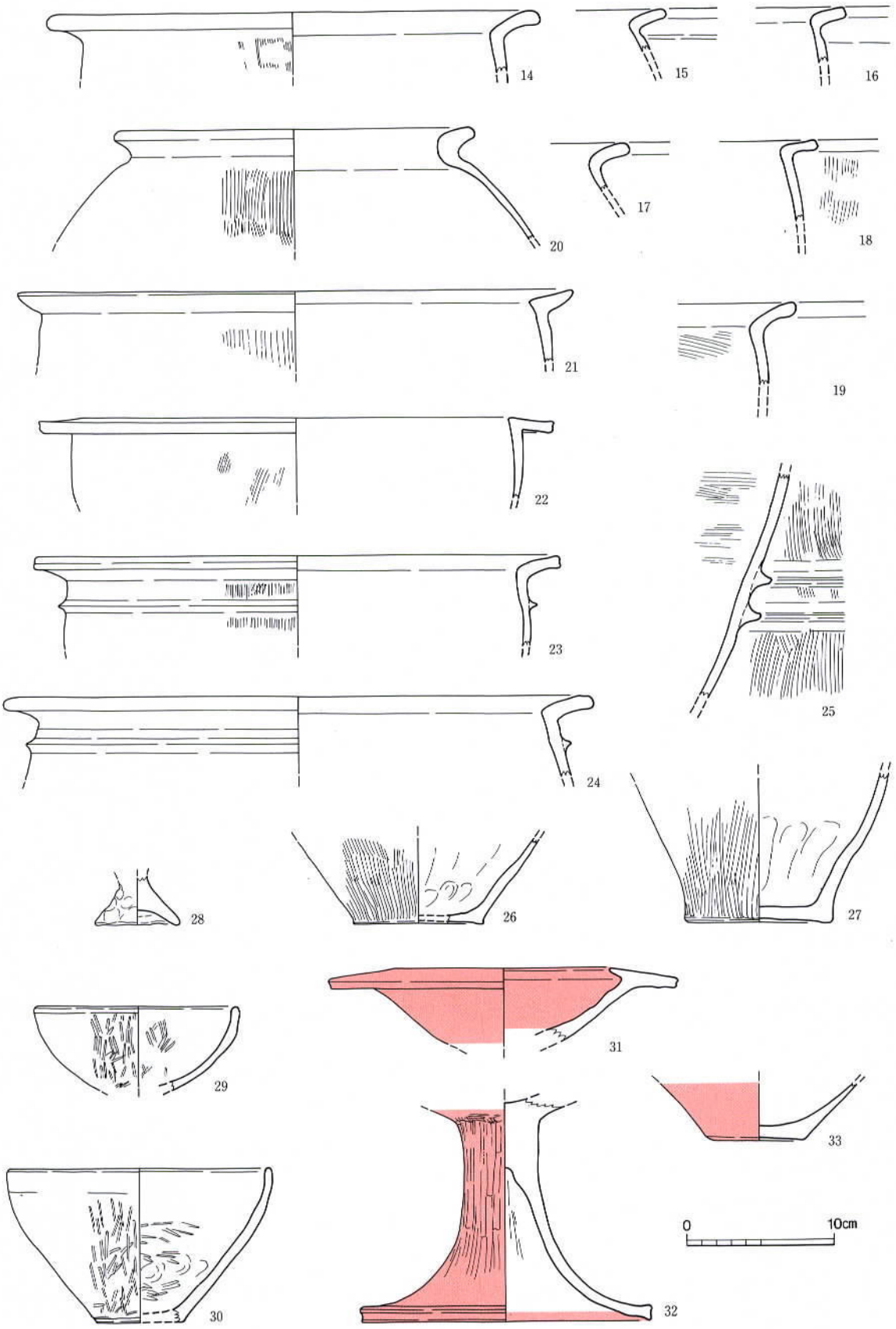
調査区中央部分やや西よりで検出された。56号住居と重複し、これより古い。平面プランは南北4.0m、東西3.1mの隅丸の平行四辺形を呈する。壁は深い部分で約40cm残っており、壁の立ち上がりはやや急である。床面は礫層が露出している部分もあり、やや下げ過ぎだと思われる。床面に付設される炉、主柱穴、土坑等は一切なく、竪穴住居でない可能性も否定できない。遺物は弥生土器がわずか



第35図　67号竪穴住居跡実測図（1/60）



第36図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第37図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

に出土している。

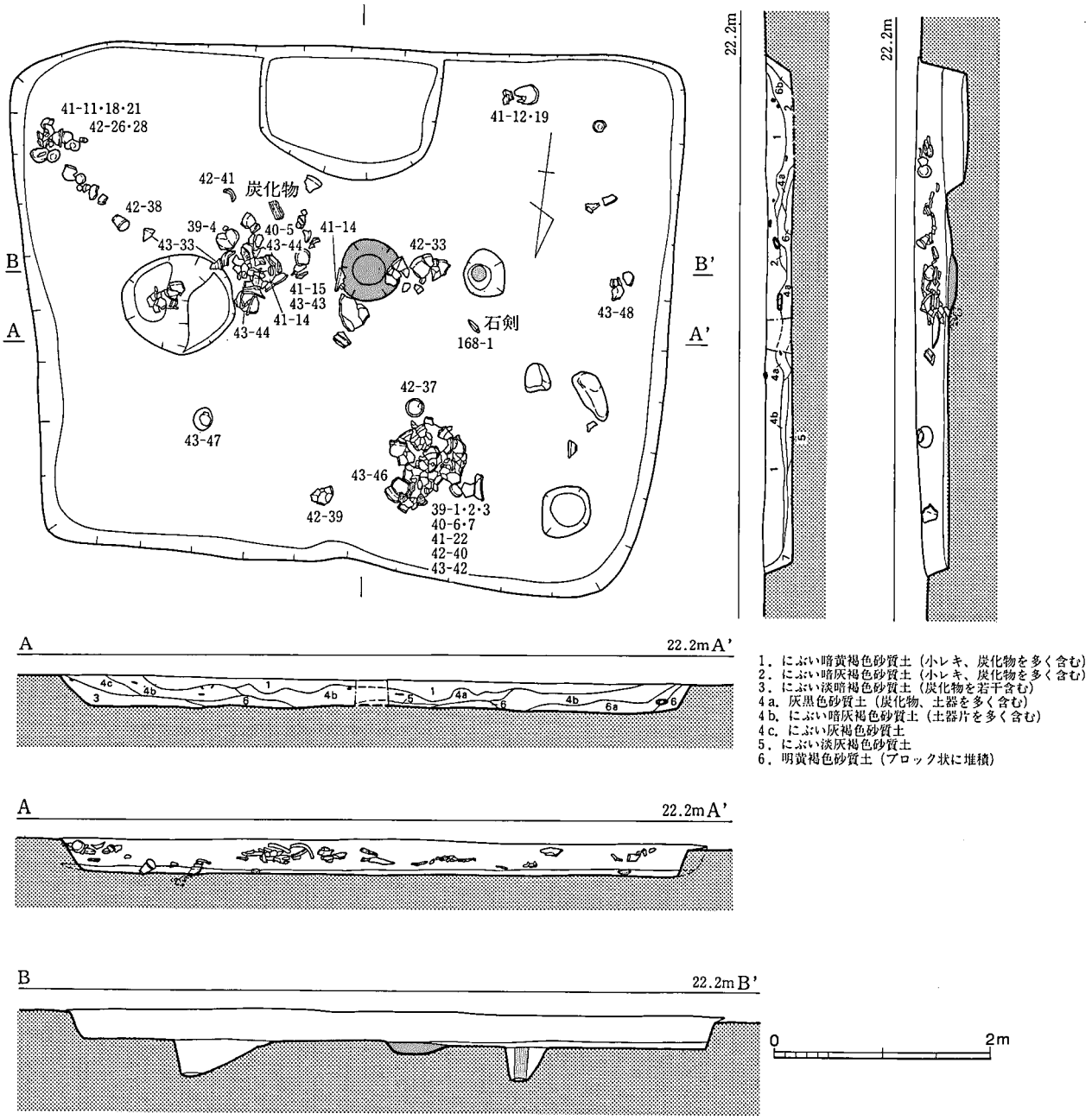
出土土器（第34図）

弥生土器

甕（11）甕の底部か。内外面の調整はナデである。

67号竪穴住居跡（図版９－２、第35図）

調査区中央部分で検出された。69号住居、32号土坑、41号土坑と重複し、69号住居、41号土坑より新しく、32号土坑より古い。平面プランは東西5.3ｍ、南北4.5ｍで隅丸の長方形を呈する。壁は約50cmと残りがよく、立ち上がりは緩やかである。中央に不整な隅丸方形の炉が付設される。深さ５cm程度、掘り込まれ炭化物が集積していた。長軸上に２本の主柱穴が検出された。深さは約45cmである。



第38図　68号竪穴住居跡実測図（1/60）

北壁中央付近には深さ40cm程の不整形な土坑が掘り込まれる。床面下の掘り込み等はない。遺物は弥生土器・投弾・土錘が出土したが平面プラン検出時に32号土坑との重複を見落とし、一緒に掘ってしまったため、住居より新しい32号土坑の土器が混じった可能性がある。

出土土器（図版33、第36・37図）

弥生土器

甕（1～27）1～19は口縁を外側に強く折り曲げる甕。1の内面はナデによりハケメがナデ消されている。10の内面は板状工具によるナデ。21・22は口縁が鋤先状を呈する甕。21は口縁が内傾する。22は口縁端部を角張って仕上げ、外側へ垂れている。20は胴部が大きく開く甕。23・24は口縁部下に三角突帯が貼り付けられる甕。23は外面ハケメの後、三角突帯が貼り付けられ、貼り付け部分の内側に膨らみが見られる。25は甕の胴部。外面の調整はハケメで、二条の三角突帯がその上から貼り付けられる。その部分の内側が膨らむ。内面の調整はハケメ。26・27は甕の底部。底は薄く、内面に指頭圧痕が残る。

手捏土器（28）手捏ねで、高坏の脚部状に成形する。その上の部分は失われていて不明。

鉢（29・30）29は丸い器形の鉢。内外面の調整はランダムなミガキ。30は前者よりややスマートな器形。内外面の調整はミガキである。

丹塗土器

高坏（31・32）31は高坏の坏部。鋤先状の口縁で外側に垂れる。内外面に丹塗が施される。32は高坏の脚部。外面の調整はミガキ。内面の調整は上部が絞り痕、端部近くはナデ。外面全体に丹塗が施され、一部内面に付着している。

壺（33）壺の底部。内外面の調整はナデ、外面に丹塗が施される。

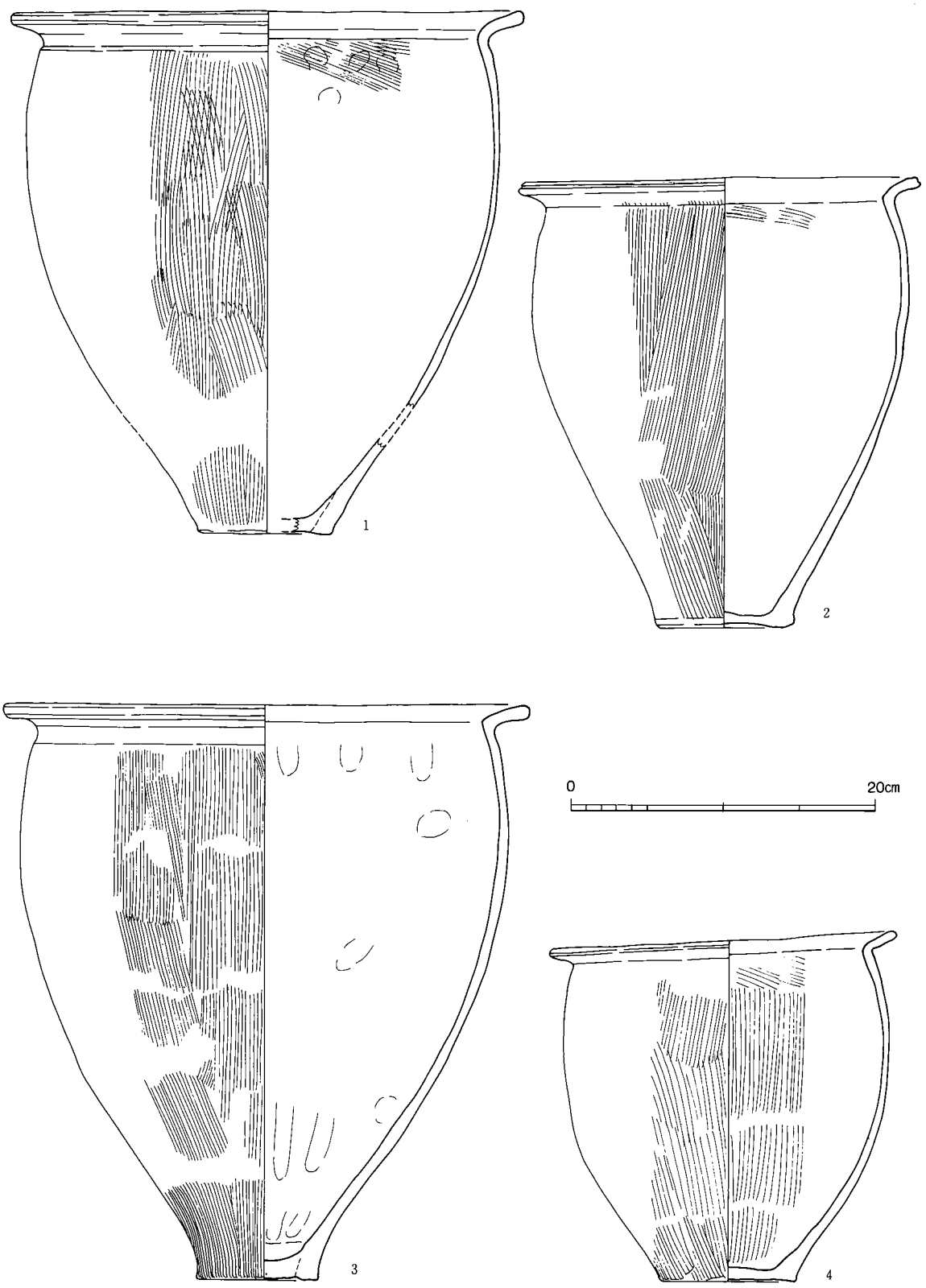
68号竪穴住居跡（図版9－3・10－1、第38図）

調査区中央部分やや西南よりで検出された。70号住居、82号住居と重複し、これらより新しい。平面プランは東西6.0m、南北4.8mのかなり整った長方形を呈する。壁は深い部分で約30cmあり、立ち上がりはやや緩やかである。中央に円形で掘り込みの深さ10cm程度の炉が付設され、内部には炭化物が集積していた。長軸上、炉の東側約60cmの位置には深さ40cmの主柱穴があり、直径10cm前後の柱根も確認されている。炉の西側約1mの位置には、大きなピットが検出されており、主柱の抜き取り跡であると考えられる。このピットの中から土器がまとまって出土しているが、主柱抜き取り後のものであり、この住居に伴うものではないと考えている。南壁際中央部には1.6m×0.8m、深さ0.25mの方形の土坑が掘られている。遺物は、床面から浮いた位置でかなりの量の弥生土器が出土しているが、埋没の過程で廃棄されたものと思われる。また、石庖丁・石剣・土製投弾が出土している。

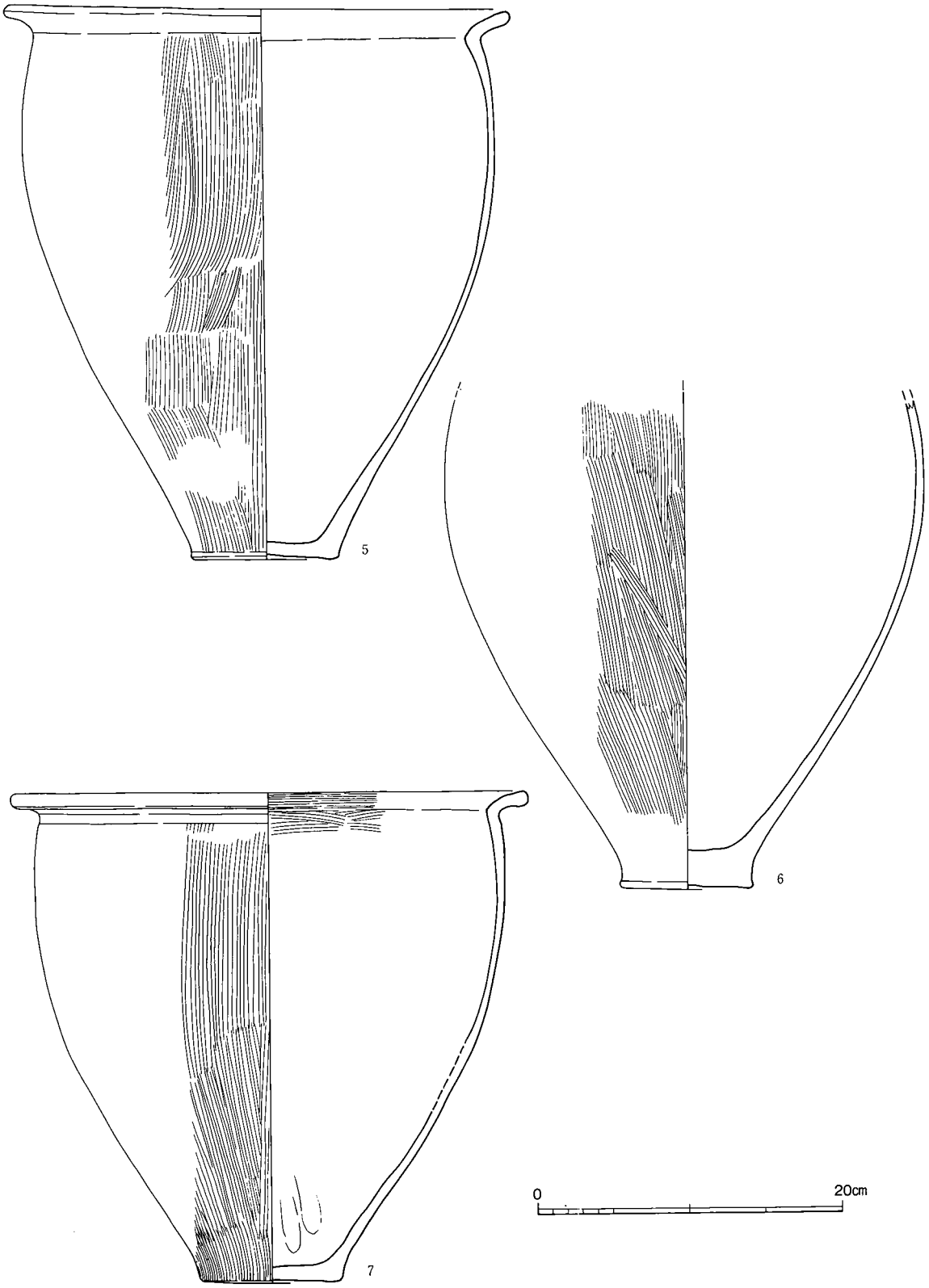
出土土器（図版33～36、第39～43図）

弥生土器

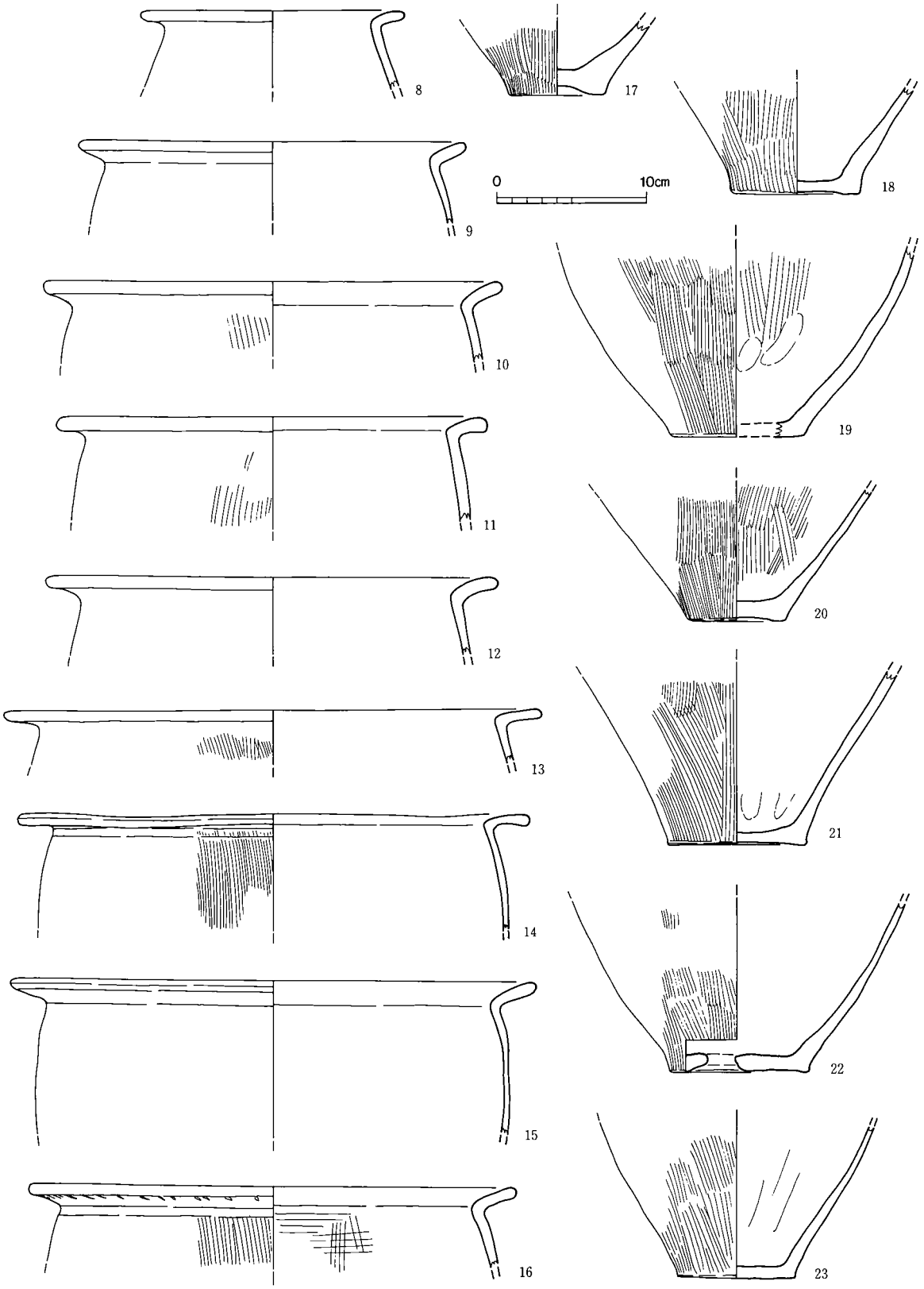
甕（1～32・39・42）1～3・5・7は口縁が外側に折れ曲がる甕である。胴部はあまり張らず、底部はやや大きく薄い。2は下から上方向へのハケメ。6は底部が大きく、樽型に近い器形を呈する甕。内外面の調整はハケメ。6は底部が小さく厚い。底部付近に煤が付着する。8～16・24・25・29～31は口縁端部を丸く仕上げるもの。16にはハケメ工具の原体痕が付く。26～28・32は口縁端部を角張って仕上げるもの。ややはね上げ気味である。17～23は底部。17は上底を呈する。22は底面に焼成後、外側からの穿孔が見られる。39は甕の底部か。器壁が薄く、軽い。42は大型の甕の胴部。最大径付近に2条の突帯が貼り付けられる。断面では外傾の接合痕が観察できた。



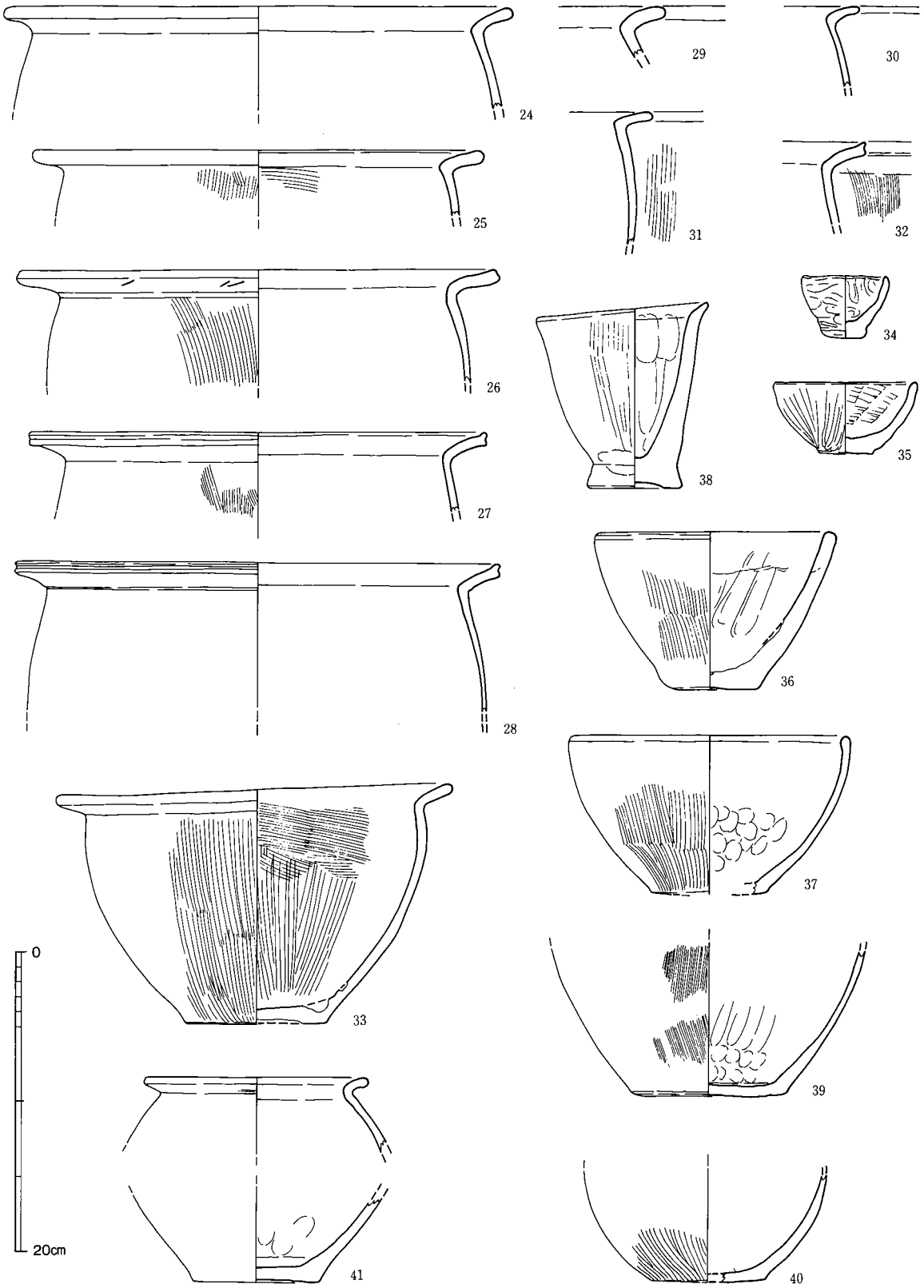
第39図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



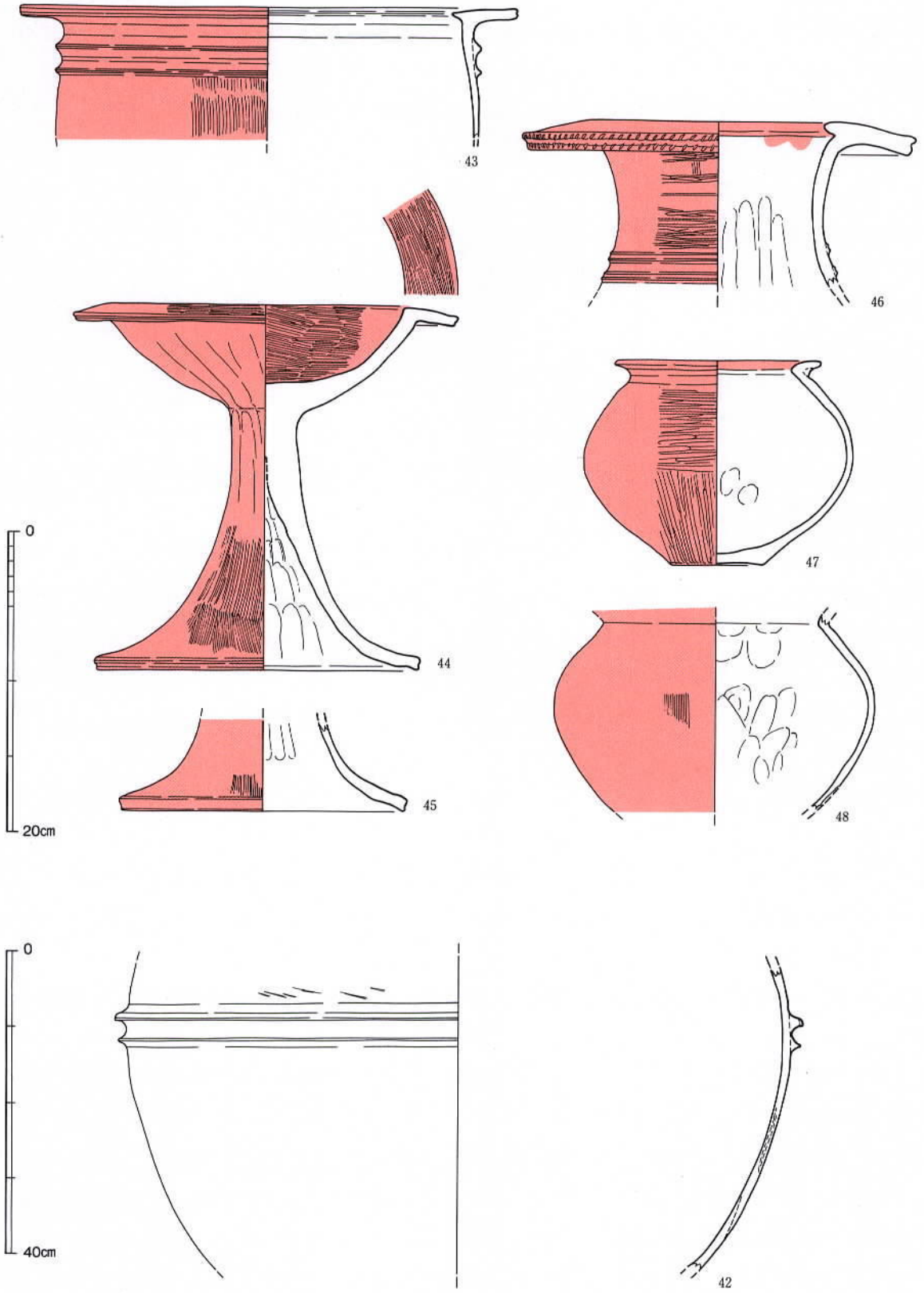
第40図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



第41図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)



第42図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.4 (1/4)



第43図　68号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/4，1/8）

鉢（33～38）33は口縁を外側に折り曲げる。破片により色調が異なっており、焼成時の剝離も見られることから、焼成中に割れた可能性がある。34は底部が厚い小型の鉢。手捏ねによる成形である。35・36は器壁が厚い。37の内面には指頭圧痕が多く残る。

壺（40・41）40はややレンズ状の底を持つ壺の底部。41は無頸壺。内外面の調整はナデ。

丹塗土器

甕（43）鋤先上の口縁を呈する甕。口縁下に２条の三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。外面全体に丹塗が施される。

高坏（44・45）44は口縁が外側に折れ曲がる高坏。口縁端部が外側に垂れる。坏部外面の調整はナデ、内面の調整はミガキ。脚部は外面裾部がハケメ、その他はナデ。内面に絞り痕が残る。45は高坏の脚部。外面はハケメ。外側のみに丹塗。

壺（46～48）46は壺の口縁部。口縁は鋤先状で外側に大きく発達し、垂れる。端部に刻み目を施す。頸部には「M」字型突帯を２条貼り付けている。口縁部付近の一部に丹が垂れる。47・48は無頸壺。47の外面の調整はミガキ。内面はナデ。48の外面はハケメ。内面は指頭圧痕が多く残る。

69号竪穴住居跡（図版10－２、第44図）

調査区中央やや南よりで検出された。67号住居、72号住居と重複し、これらより古い。平面プランは他の住居から大きく切られ、不明であるが南北6.6ｍ、東西5.2ｍのやや不整な長方形を呈する。壁は深い部分で約25cm残っている。床面では炉や壁際の土坑等の施設は付設されない。また、床面からいくつかのピットを検出したが、いずれも主柱穴とはなり得ない。遺物は床面からやや浮いた状態で抉入柱状片刃石斧が出土しているほか、弥生土器、鉄器、砥石・土製投弾が出土している。

出土土器（図版36、第45図）

弥生土器

甕（１～12）１～３・５は口縁部を外側に折り曲げる甕。口縁端部を丸く仕上げる。４は口縁端部を角張って仕上げる。６～12は甕の底部。８・11は樽型の胴部を持つ甕。10は底部がやや厚い。

鉢（13・14）13は鉢である。口縁付近の器壁が厚くなる。外面はケズリとハケメ。内面はケズリ。14は器形が丸い鉢。口縁端部を丸く仕上げる。

器台（15）器台の口縁部から胴部。外面は縦方向のハケメ。内面は強い指頭圧痕の後、一部横方向のハケメ。

手捏ね土器（16）高坏を模して作られている。坏部を失っている。脚部はケズリ調整。他の部分はナデ。

丹塗土器

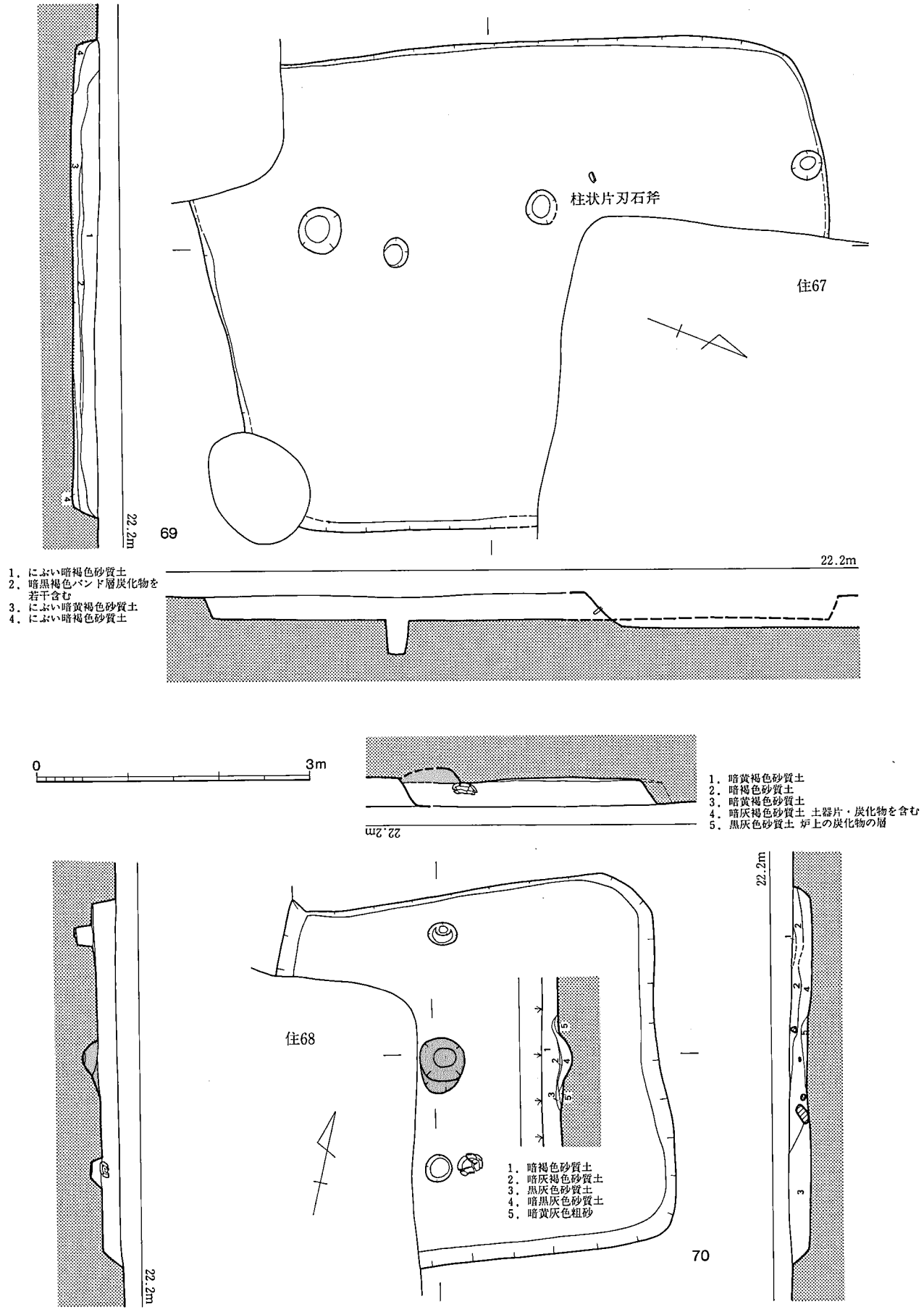
壺（17・18）17は無頸壺の口縁部。端部は角張って仕上げられる。内外面の調整はナデで、丹塗が施される。18は広口壺の口縁部。鋤先状で外側に垂れる。内外面ともにナデ調整で、丹塗が施される。

70号竪穴住居跡（図版10－３、第44図）

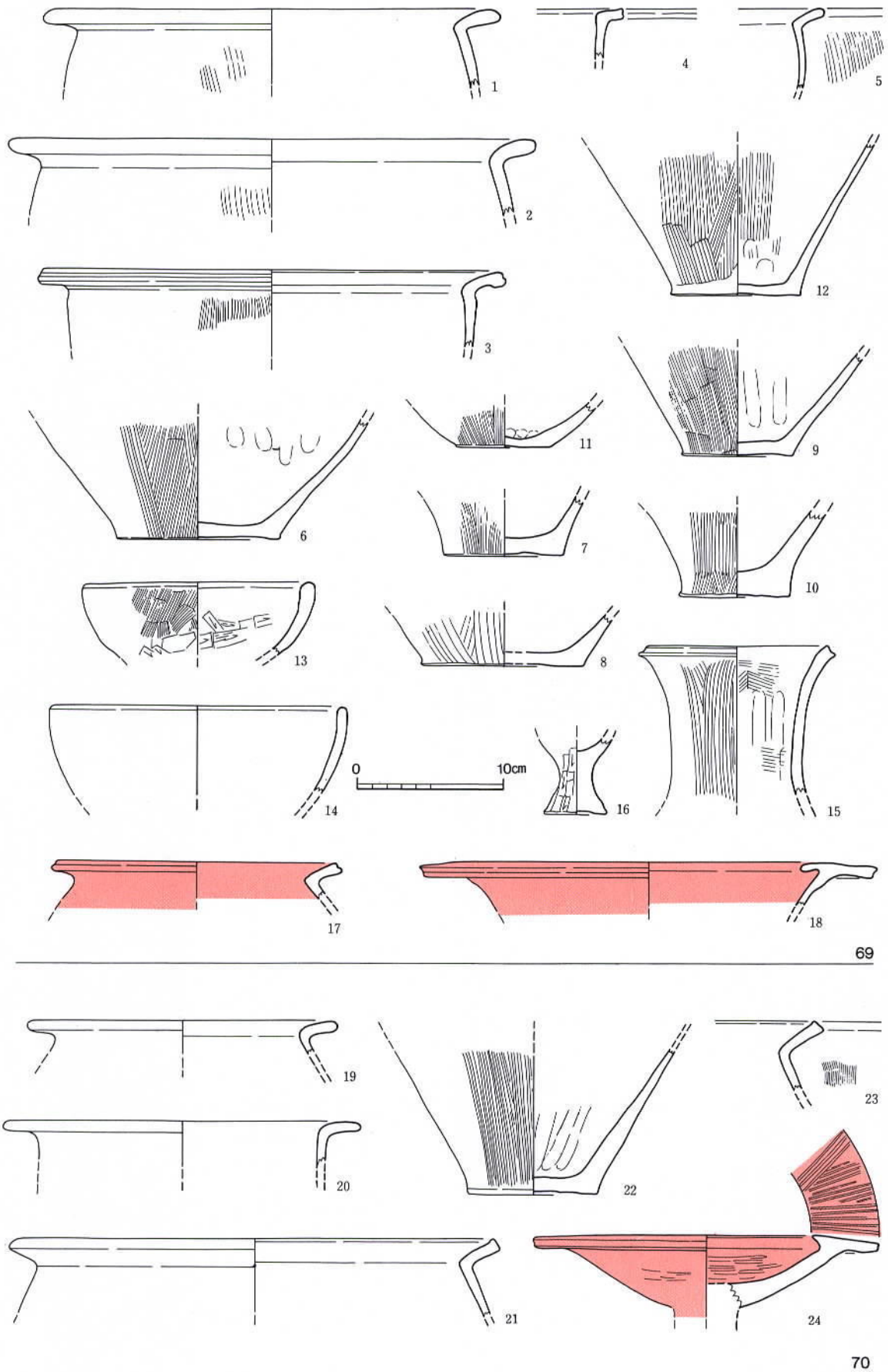
調査区中央部分やや西南よりで検出された。68号住居と重複し、これより古い。平面プランは東西4.0ｍ、南北4.0ｍのほぼ正方形を呈する。壁は深い部分で約30cm程である。中央には炉が付設される。断面の観察では円形の炉の周縁に幅20cm、高さ８cmの土手状の盛土を検出した。炭化物はその土手に覆い被さる状況で堆積している。東西軸上にピット２基を検出しているがいずれも浅い。貼床下の掘り込み等はない。遺物は床面直上で、高坏の坏部が出土しているほか、弥生土器がわずかに出土している。

出土土器（図版37、第45図）

弥生土器



第44図　69・70号竪穴住居跡実測図（1/60）



第45図　69・70号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

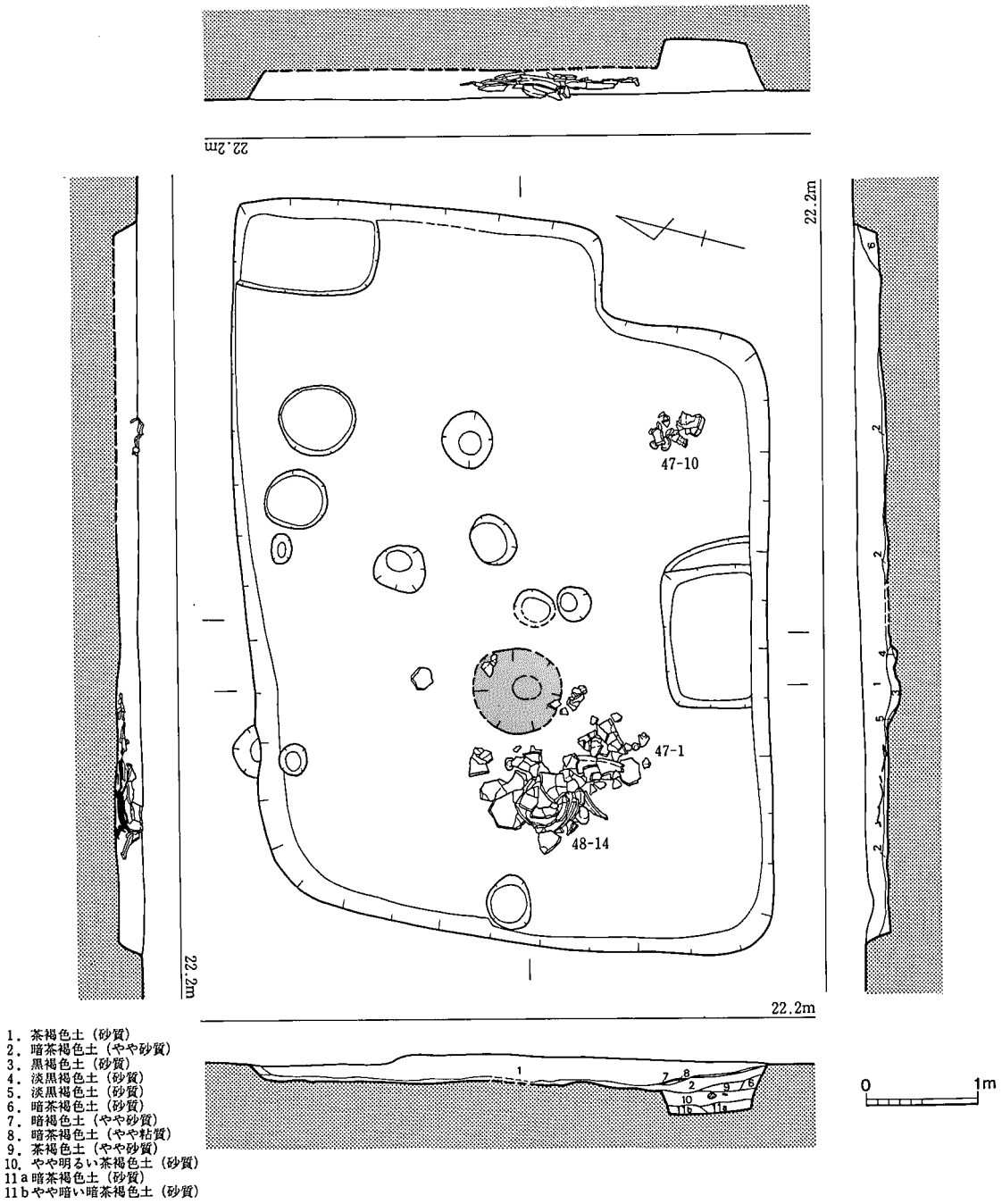
甕（19～23）19・20は口縁を外側に強く折り曲げる甕。口縁端部を丸く仕上げる。21・23は「く」字型口縁の甕で、口縁端部を角張って仕上げ、ややはね上げ気味である。22は底部。わずかに上底である。

丹塗土器

高坏（24）高坏の坏部。鋤先状の口縁は外側に垂れる。内外面の調整はミガキで、口縁上部の平坦面に暗文が施される。

71号竪穴住居跡（図版11－1・11－2、第46図）

調査区中央部南よりで検出した。77号住居、78号住居と重複し、これらより新しい。平面プランは検出時の失敗によりかなり大きくなったが本来は東西5.6m、南北4.6mで、東側部分に約80cmの張り



第46図　71号竪穴住居跡実測図（1/60）

出し部分を持つ。壁は深い部分で25cm程あり、立ち上がりはやや急である。炉は長軸上でやや西よりの部分に付設されるが、床面を下げすぎたために平面プランは不明である。深さ８cmほど掘り下げられ、内部には炭化物が集積している。床面上でかなりのピットを検出したが、主柱穴は不明である。床面を10cm以上掘り下げ過ぎたため、本来の深さは不明であるが、南壁中央壁際で1.4m×0.8mの方形の土坑を検出している。また、北東隅にも1.1m×0.6mの方形の土坑が検出された。遺物は大型の甕片が一個体分、やや浮いた状態でまとまって出土している。他に弥生土器が数カ所でまとまって出土しているが、いずれも埋没の過程で投棄されたものと考えられる。また、投弾、砥石が出土している。

出土土器（図版37、第47・48図）

弥生土器

蓋（１・２）１は蓋のつまみ付近。つまみ部分は厚い。２は大型の蓋。口縁端部を角張って仕上げている。内外面の調整はハケメ。

甕（３～８・14）３～５・７は「く」字型に近い口縁で、口縁端部を丸く仕上げる。６の端部は角張って仕上げている。胴部はあまり張らない。14は胴部が大きく開く甕。胴部最大径よりやや下に２条の三角突帯が貼付される。底部付近にハケメが残る。胴部に大きな黒斑が付着する。

鉢（９）器形がややスマートな鉢。外面の調整はハケメ、内面には指頭圧痕が残る。

丹塗土器

甕（10・11）10は口縁が鋤先状で外側へ大きく垂れている。口縁上端面には暗文が施される。口縁下と胴部最大径よりやや下の部分に「M」字型突帯を貼り付ける。その部分の内面は貼り付けにより膨らむ。外面の調整は横方向のミガキ。内面はナデである。外面全体に丹が塗られ、内面にもかなりの丹が垂れている。11は甕の底部。外面のみに丹塗。

壺（12・13）12・13は無頸壺。外面に丹が塗られる。

72号竪穴住居跡（図版11－３・12－１、第49図）

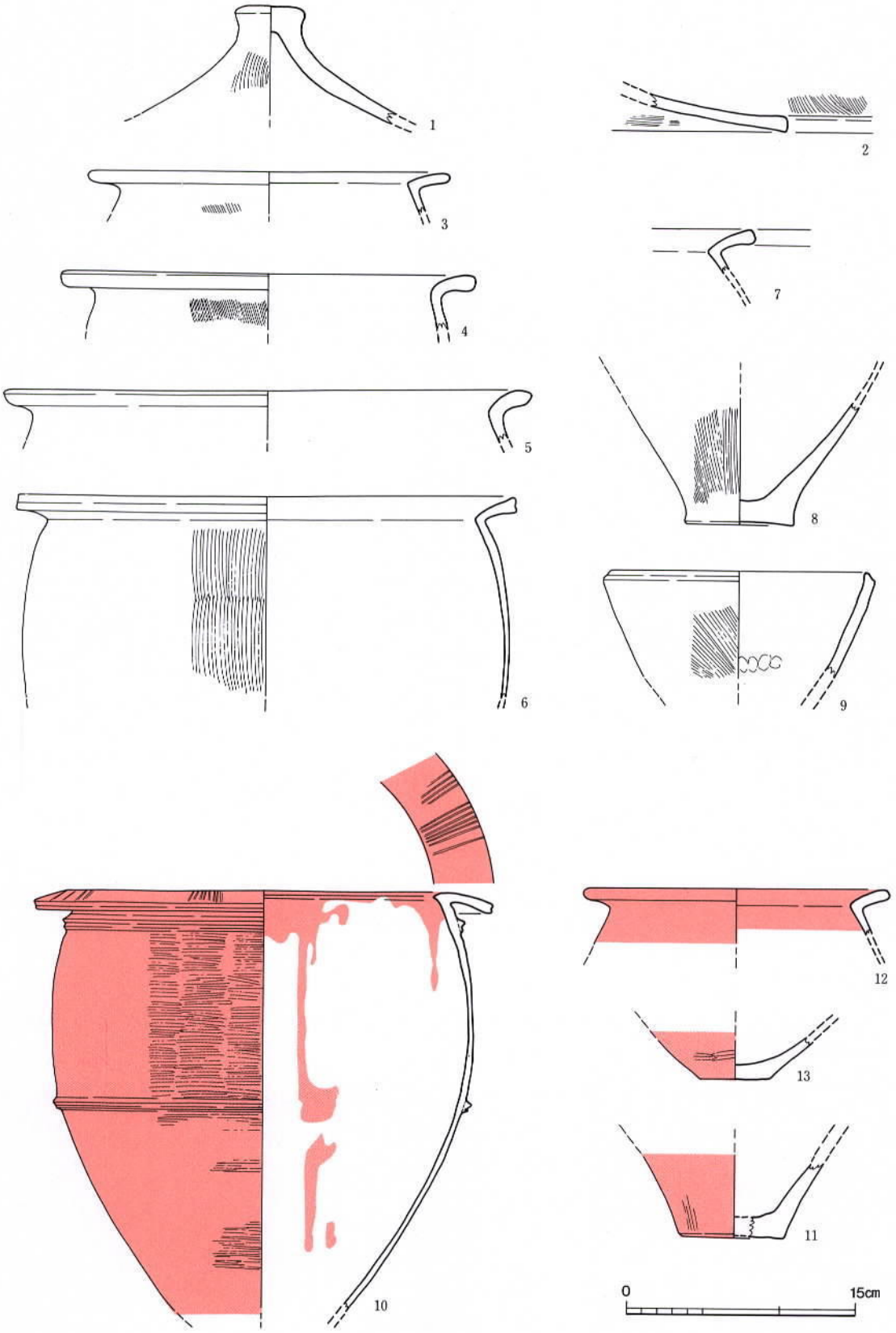
調査区中央部南よりで検出した。69号住居と重複し、これより新しい。平面プランは、検出時の失敗により、大きく掘り間違えているために不明であるが、土層ベルト部分から推測すると東西5.0m、南北4.1mの隅丸の長方形を呈する。壁は深い部分で約30cm残存し、壁の立ち上がりは緩やかである。炉は中央部分に付設され、約70cmの円形で5cm程掘り込まれ、内部には甕一個体（16）が据えられた状態で出土した。その周囲には炭化物、焼土が集積していた。また、炉床付近から焼土塊、円礫２個が検出された。長軸上にＰ－１～Ｐ－４のピットを検出したが、Ｐ－３は直径約20cmの柱根を検出したため、主柱穴とする。その対称となる主柱穴はＰ－１、Ｐ－２のいずれかになると思われる。南壁中央には1.6m×0.6m、深さ10cmの長方形の土坑が掘られる。床面下には炉を中心に深さ約15cmの円形の掘り込みと、その北側には長径1.2m、深さ20cm程の楕円形の掘り込みがある。遺物は床面からやや浮いた状態でかなりの量の弥生土器が出土しているが、埋没過程で投棄されたものである。また、太型蛤刃石斧，砥石（170－40）が出土している。

出土土器（図版38、第50～52図）

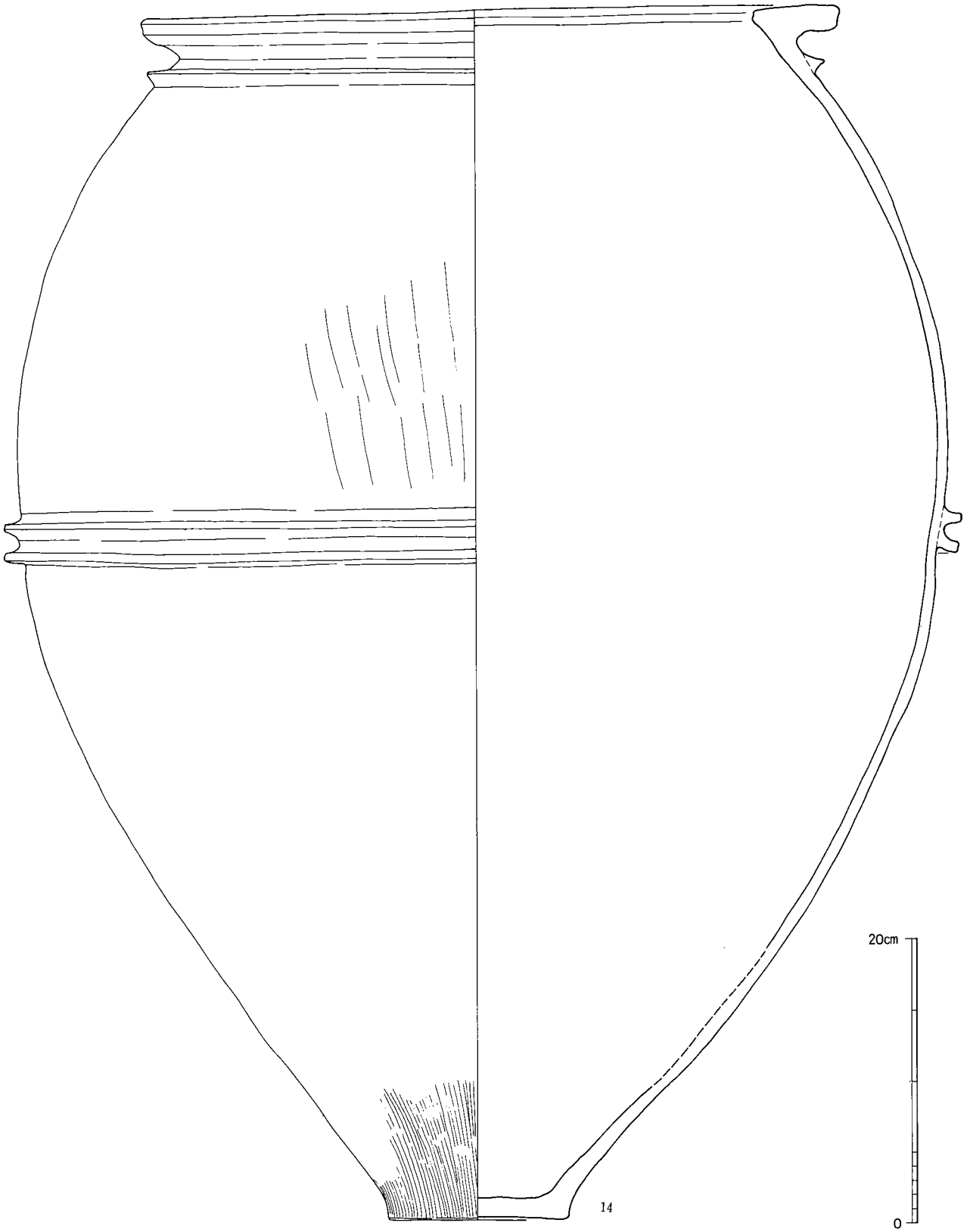
弥生土器

蓋（１）大型の蓋である。口縁端部を角張って仕上げる。外側の調整はハケメである。内側の調整はナデを行う。

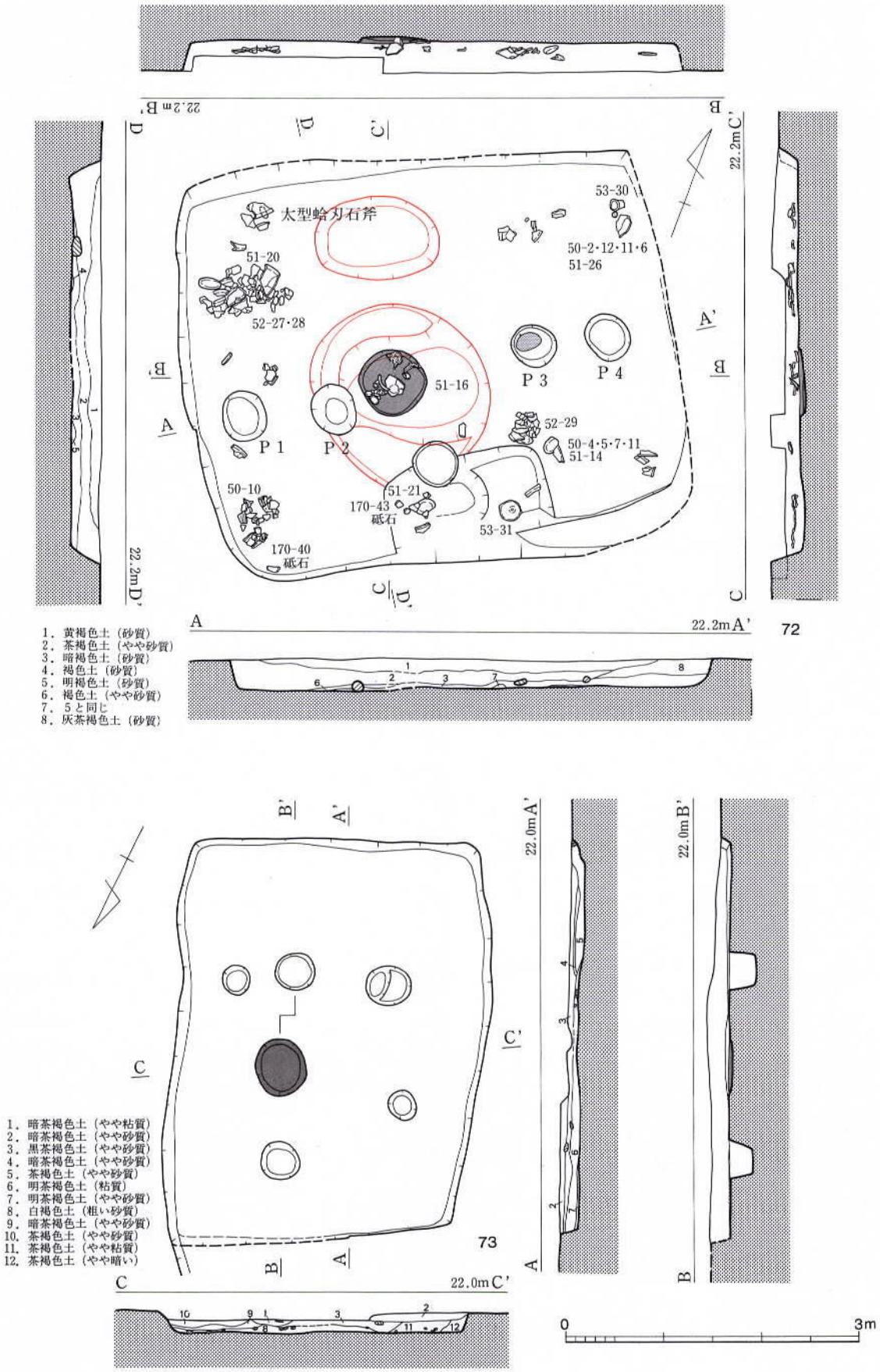
甕（２～27）２～20は口縁部を外側に折り曲げる甕。２～17は口縁端部を丸く仕上げる。９は「く」字型口縁に近い甕。口縁部内面に一箇所刻み目を施す。10・16は底部が大きく樽型を呈する甕。



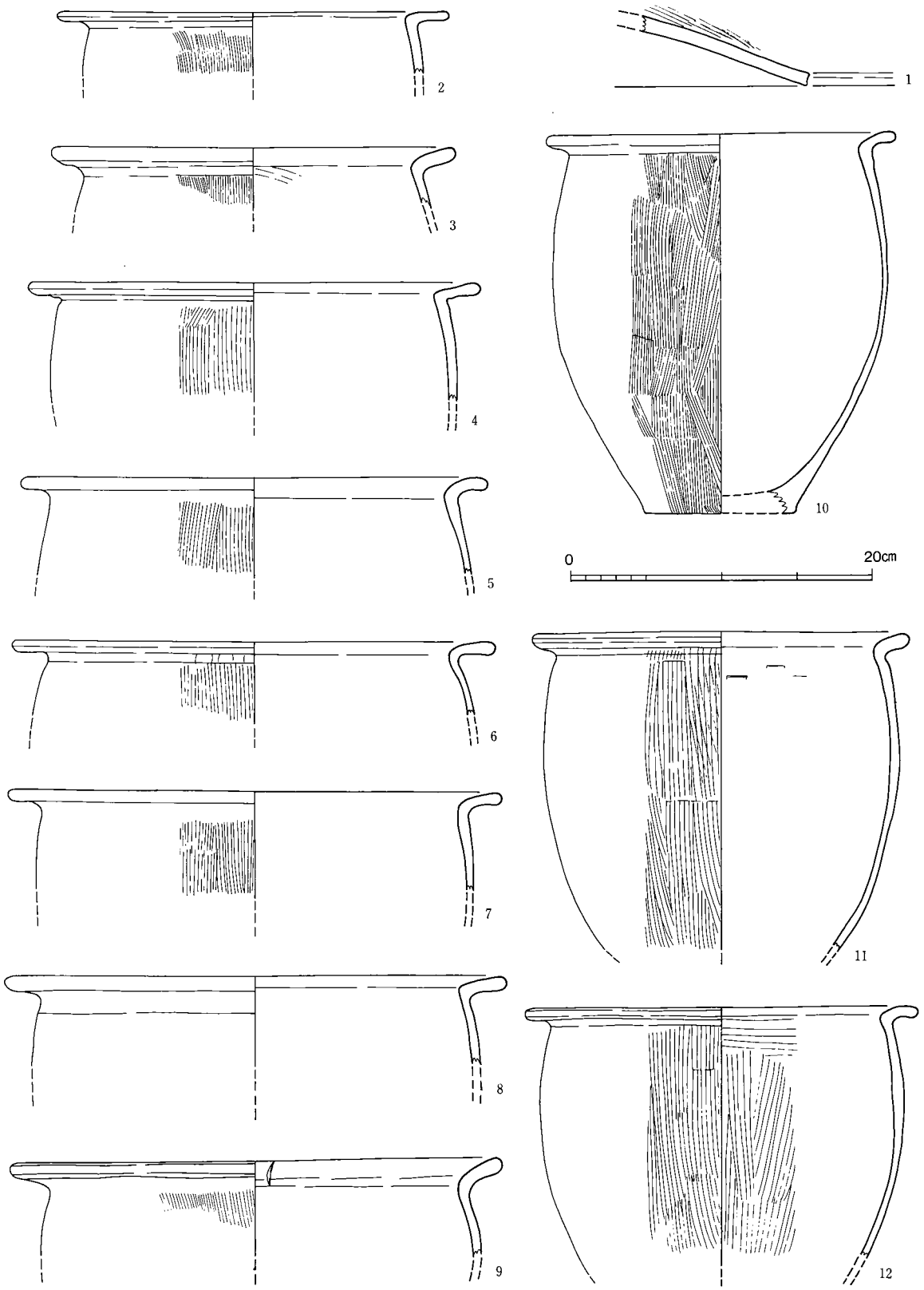
第47図　71号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



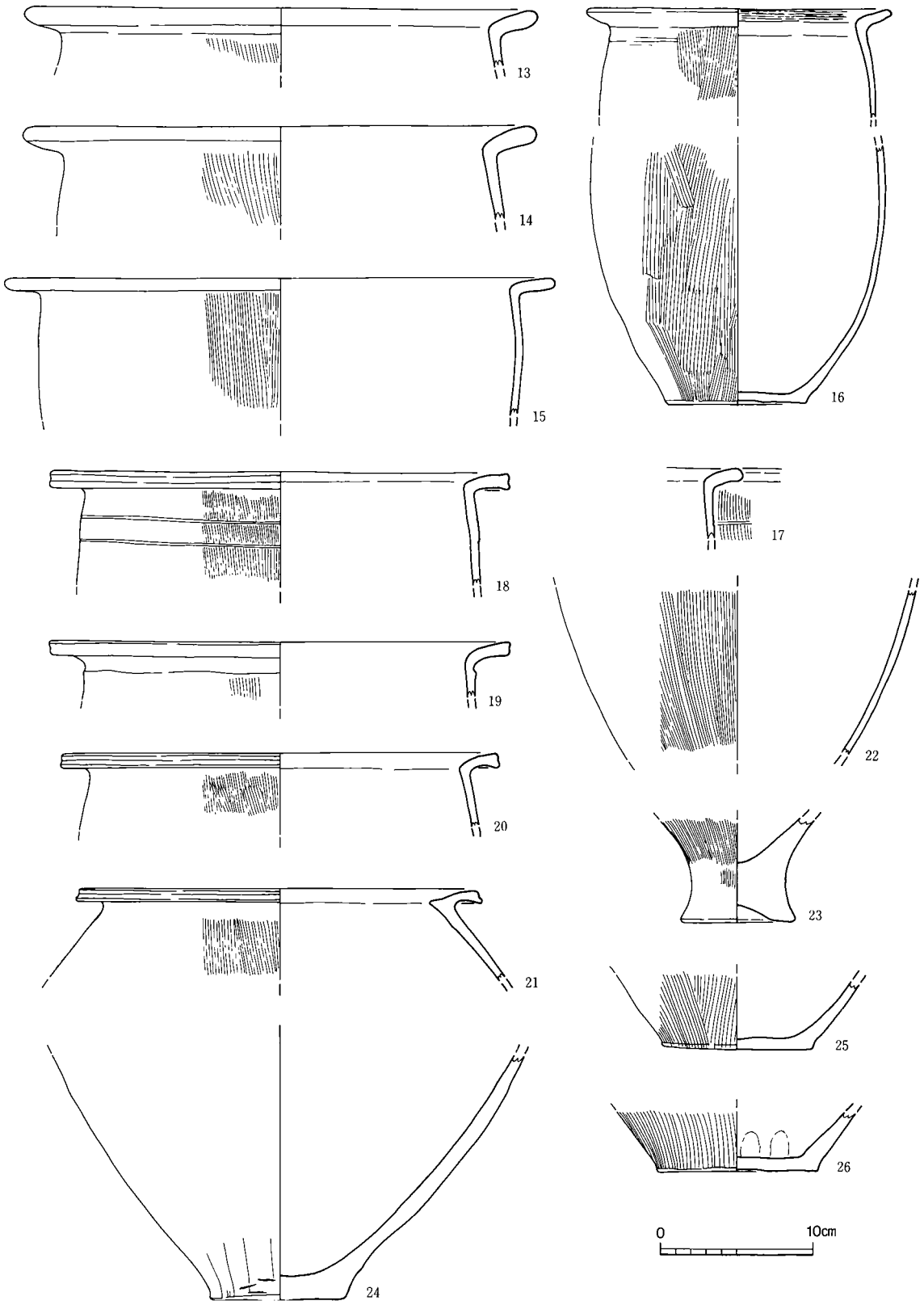
第48図　71号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)



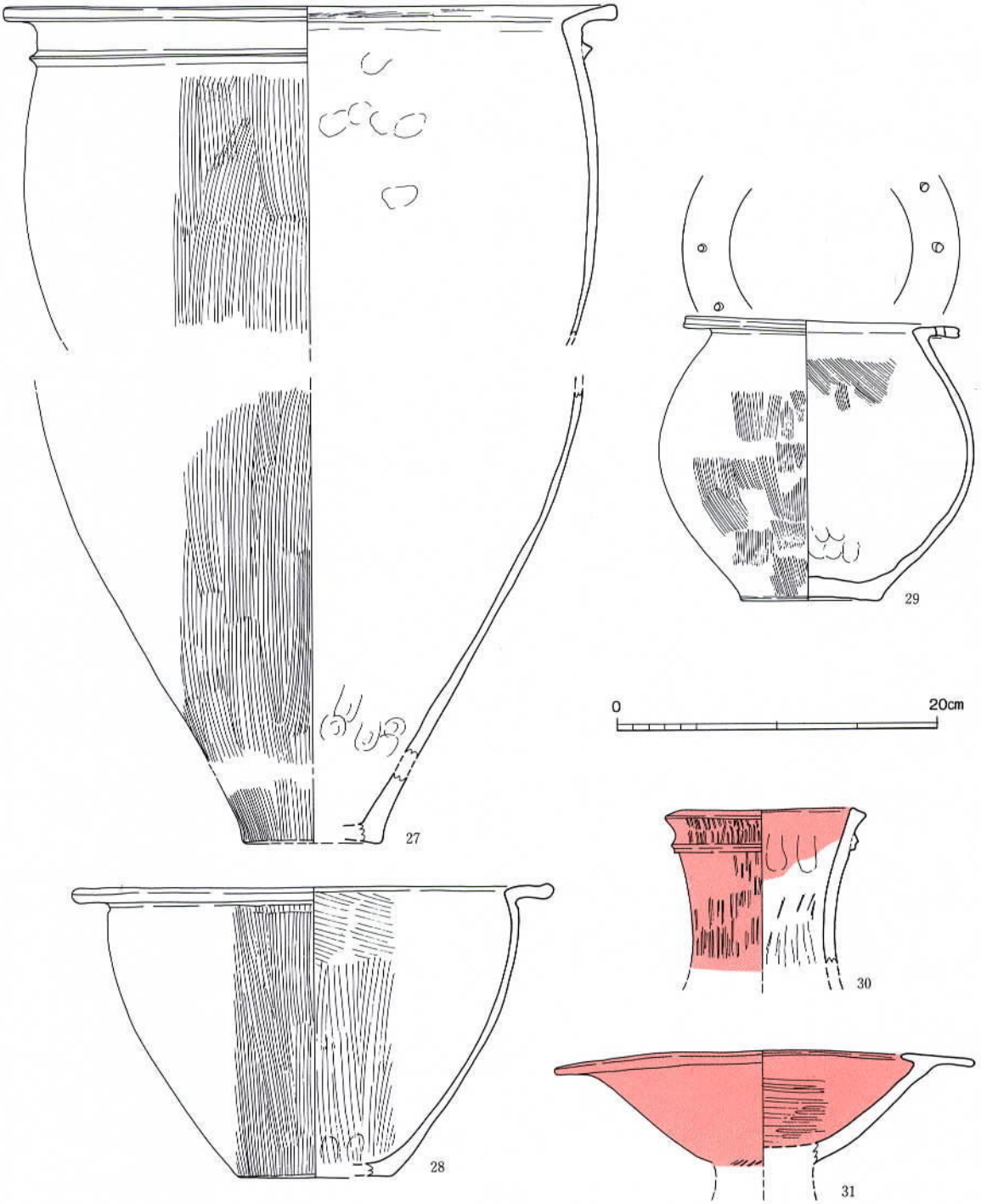
第49図　72・73号竪穴住居跡実測図（1/60）



第50図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第51図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



第52図　72号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）

同一個体であるが接合しない。17は口縁下に一条の細い沈線を巡らす。18～20は口縁部を角張って仕上げる甕。18は口縁下に二条の沈線を施す。全体のつくりは精緻である。19は口縁を強く横ナデしたために口縁下に段が付く。21は胴部が大きく開く甕。22は甕の胴部。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。外面に煤が付着する。23～26は甕の底部。23は古い形態の底部。上底で底部が厚い。底部付近に黒斑が付着する。24の外面の調整は板状の工具によるもの。外面に二次加熱の痕跡が残る。27は同一個体であるが接合しない。口縁下に三角突帯を貼り付け、その部分は内面が膨らむ。外面の調整はハケメ。内面は指頭圧痕が残る。

鉢（28）口縁部が外側に強く折れ曲がる鉢。口縁端部は丸く仕上げ、ややはね上げ気味である。内

外面の調整はハケメ。

壺（29）小型の無頸壺。口縁部に上方から4箇所の穿孔を施す。内外面の調整はハケメ。

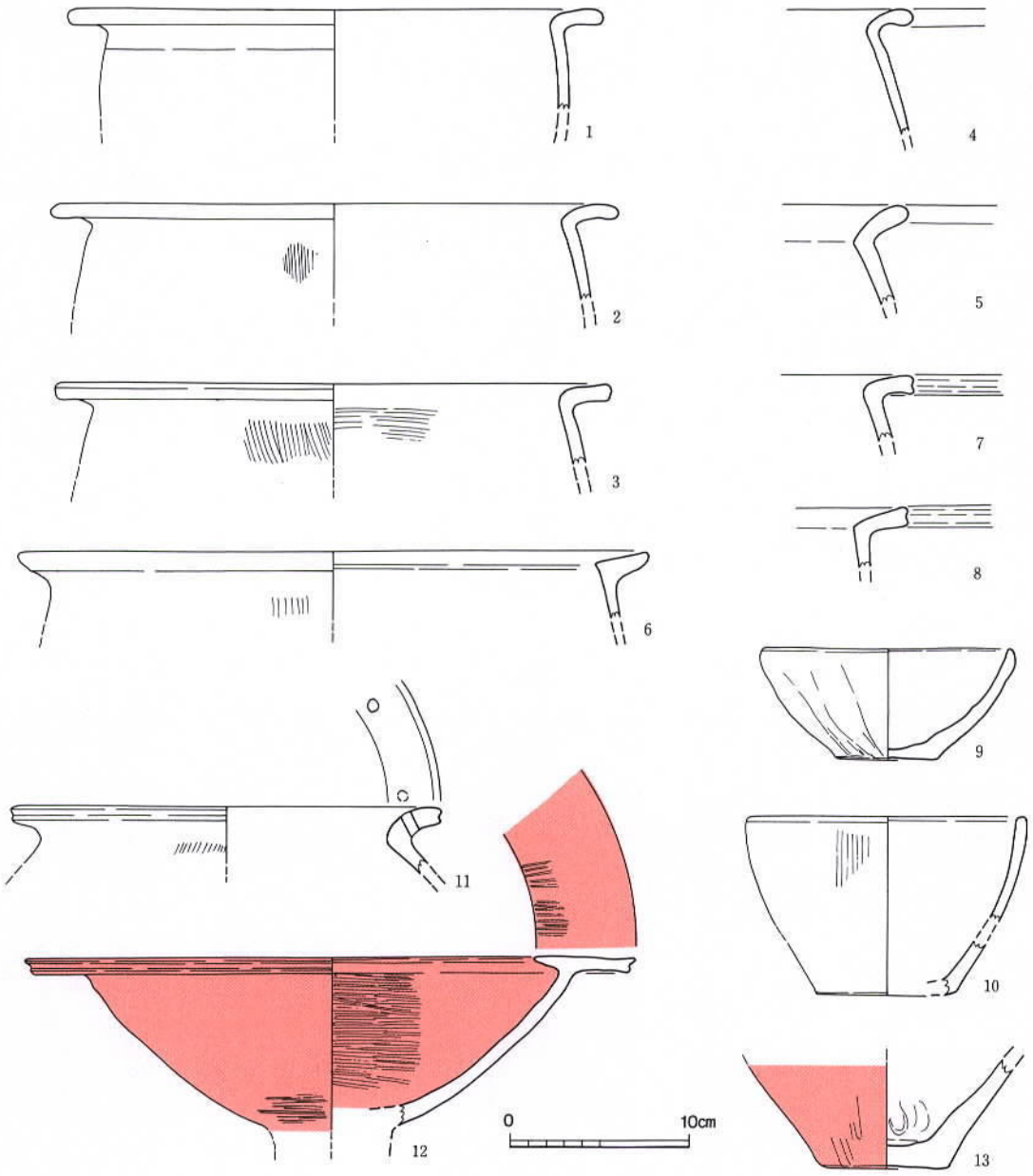
丹塗土器

壺（30）壺の口縁部。口縁部がやや開き気味で端部を角張って仕上げる。口縁下に小さな「M」字型突帯を貼り付ける。外面の調整はミガキ。内面には絞り痕と指頭圧痕が残る。外面は丹塗が施され、内面にも大きく垂れている。

高坏（31）鋤先状の口縁をもつ高坏の坏部。口縁部が歪んでいる。外面の調整はナデ。内面の調整はミガキである。内外面に丹塗を施す。

73号竪穴住居跡（図版12－２、第49図）

調査区中央部やや南よりで検出された。76号住居、78号住居と重複し、これらの中で最も新しい。平面プランは掘り間違えた部分があり、正確ではないが南北4.1m、東西3.1mのほぼ長方形を呈する。



第53図　73号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

壁の深さは約15cmと残りが悪い。炉は中心よりやや東よりに付設される。円形で５cm程度掘りくぼめられ、内部には炭化物等は無いが、わずかに火を受けているのが観察できた。主柱穴は炉の長軸上で約50cm離れた位置にあり、30cm程掘り込まれる。柱根は確認できなかった。床面は掘り下げ過ぎた部分があり、一部で礫層が露出しており、下層の掘り込み等は無い。遺物は弥生土器、砥石が出土している。

出土土器（図版37、第53図）

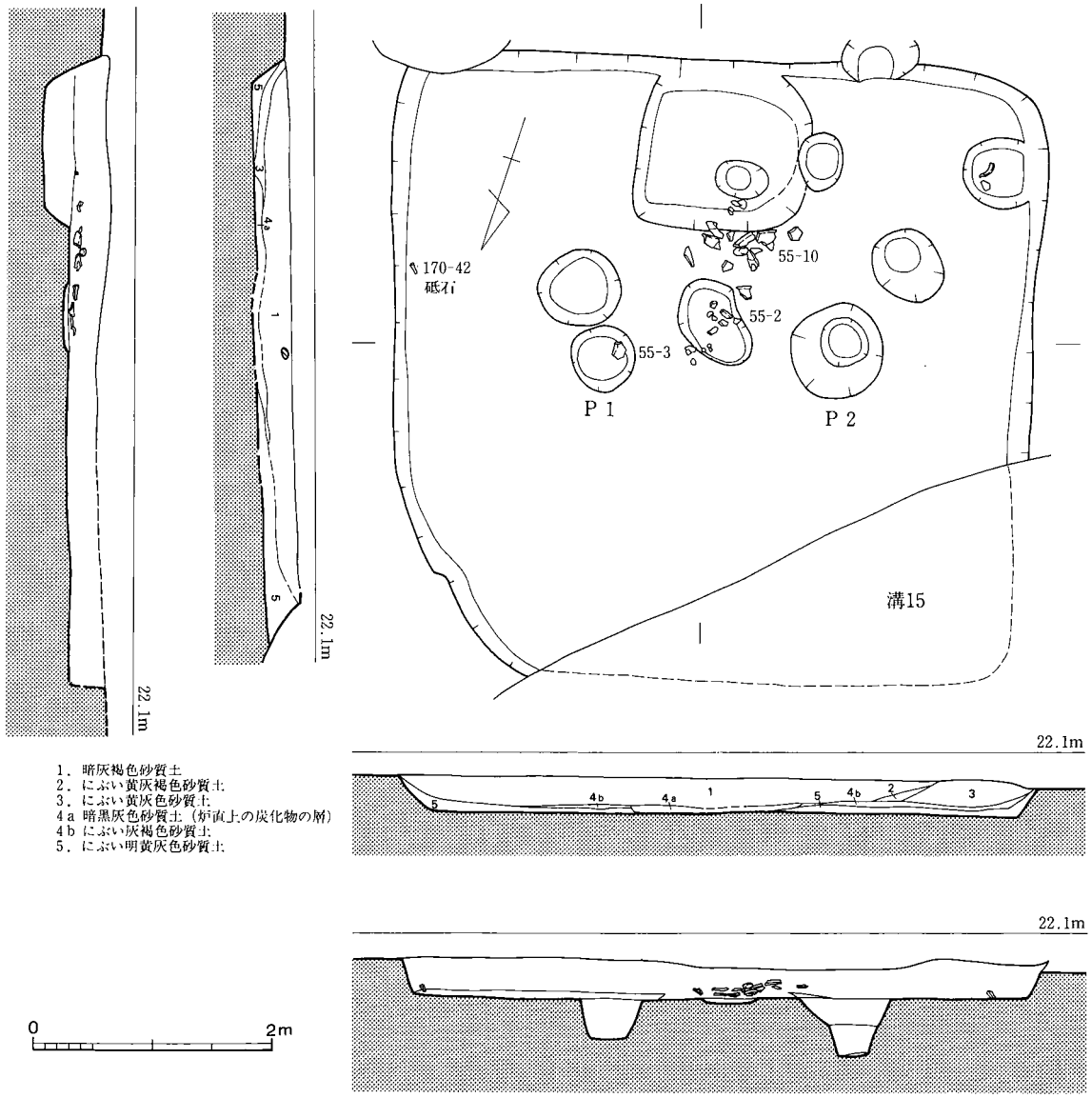
弥生土器

甕（１～８）１～４は口縁を折り曲げる甕で、口縁端部を丸く仕上げる。５は「く」字型口縁の甕。６は鋤先状の口縁を持つ甕。７・８は口縁端部を角張って仕上げる。

鉢（９・10）９は器形が丸い鉢。内外面ともにナデ調整。外面に黒斑が付着する。10は前者よりスマートな鉢。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

壺（11）無頸壺の口縁部。「く」字型に近い口縁で、上方から穿孔が施される。

丹塗土器



第54図　74号竪穴住居跡実測図（1/60）

高坏（12）鋤先状口縁の高坏の坏部。内外面はミガキで、口縁部上端面に暗文が施される。

壺（13）壺の底部。外面の調整はハケメの後、ミガキ。内面はナデ。外面のみに丹塗。

74号竪穴住居跡（図版12－３、第54図）

調査区中央部やや南よりで検出した。15号溝、22号溝と重複し、この中で最も古い。平面プランは溝に切られ不明な部分もあるが、東西5.2ｍ、南北5.2ｍの隅丸のほぼ正方形を呈する。壁の深さは約40cmで立ち上がりはやや急である。中央部わずかに南にずれた位置に炉が付設される。炉は長径約80cmの楕円形で5cmほど掘り込まれる。内部には炭化物がわずかに集積する。床面からは数基のピットが検出された。柱根は観察できなかったが位置や深さから主柱穴は東西軸上にあるＰ－１、Ｐ－２と考えられる。Ｐ－２からは赤色顔料がわずかに検出された。南壁中央には1.4ｍ×1.2ｍの隅丸方形の土坑が掘り込まれている。床面下層の掘り込み等は無い。遺物は弥生土器がまとまって出土している部分もあるが、いずれも浮いており埋没過程において投棄されたものと思われる。また、砥石（170－42）が出土している。

出土土器（図版37、第55図）

弥生土器

蓋（11）口縁を角張って仕上げ、やや下方へつまむ。内外面の調整はナデ。

甕（１～７・９・10）１～３は口縁部を外側に折り曲げる甕。４・６・９は胴部が大きく開く甕。９は鋤先状の口縁を呈する。５は口縁部がはね上げ気味で口縁下に三角突帯を貼り付ける。７は甕の底部。10は甕の胴部で、三角突帯が貼り付けられる。

壺（８）壺の口縁部で、鋤先状の口縁を模したのか口縁が厚くなっている。

丹塗土器

蓋（12）小型の蓋。上方からの穿孔が施され、内外面ともに丹塗。

高坏（13）鋤先状の口縁を呈する高坏の坏部。外面の調整は細かいハケメ。内面の調整はナデである。内外面ともに丹塗が施される。

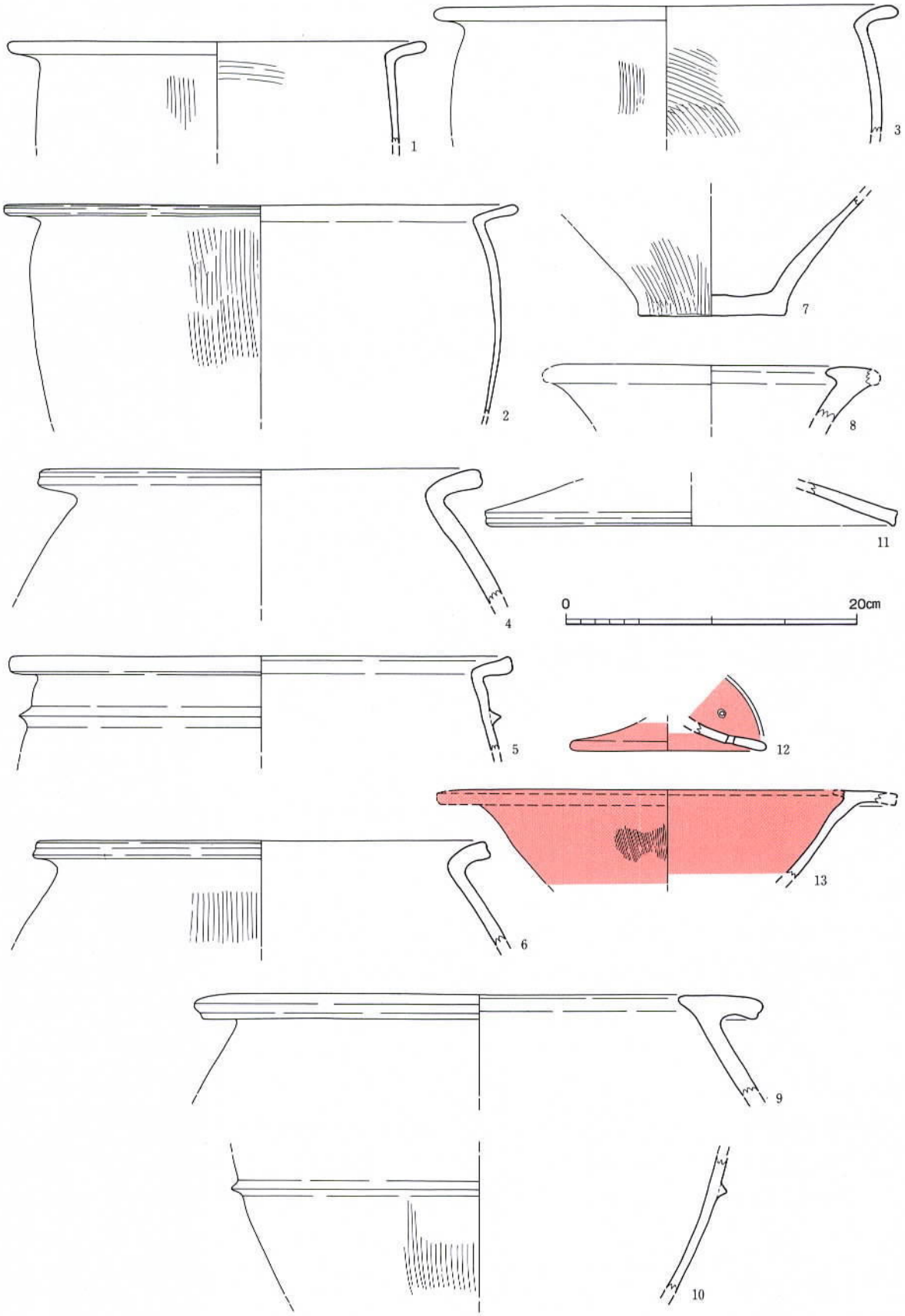
75号竪穴住居跡（図版13－１、第56図）

調査区中央部やや東南よりで検出された。平面プランは東壁をはっきり検出できなかったために一部不明な部分もあるが、東西5.2ｍ＋α、南北4.3ｍのやや崩れた長方形になると思われる。壁は深いところで約30cm残っており、壁の立ち上がりはやや急である。中央部に直径約70cmのほぼ円形の炉が検出された。内部に炭化物が集積する程度で、炉床に火を受けたことによる変化は見られなかった。主柱穴は東西軸上に2本検出されているが、柱根は検出されていない。南壁中央には0.6ｍ×0.6ｍ、深さ0.15ｍのほぼ円形の土坑が掘り込まれる。また、北壁にも段の付く大きな土坑が掘り込まれている点が本遺跡の他の住居跡とは異なる。床面下層の掘り込み等は無い。遺物は中心付近からかなりまとまって出土しているが、いずれも床面からは浮いた状態であり、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

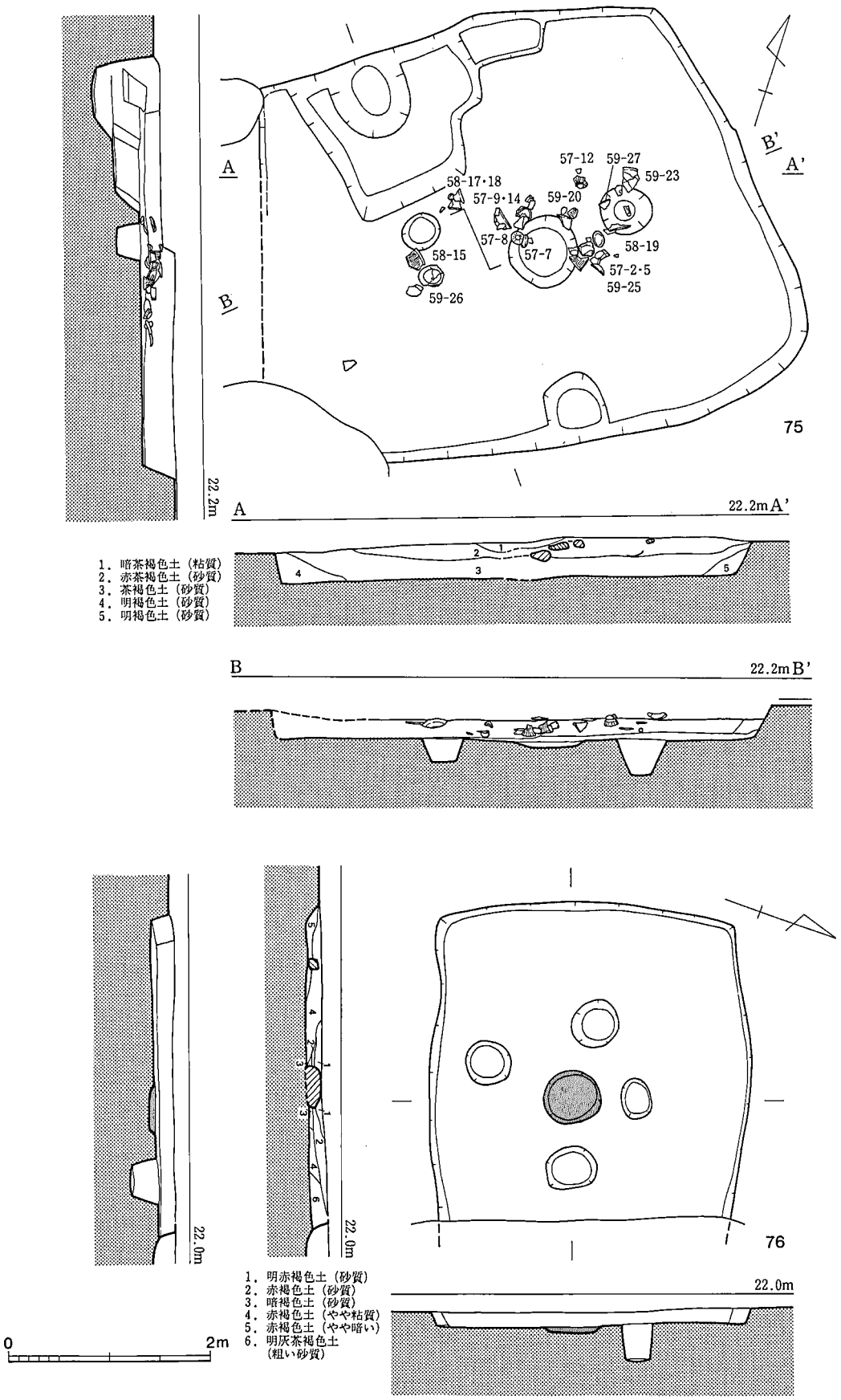
出土土器（図版39、第57～59図）

弥生土器

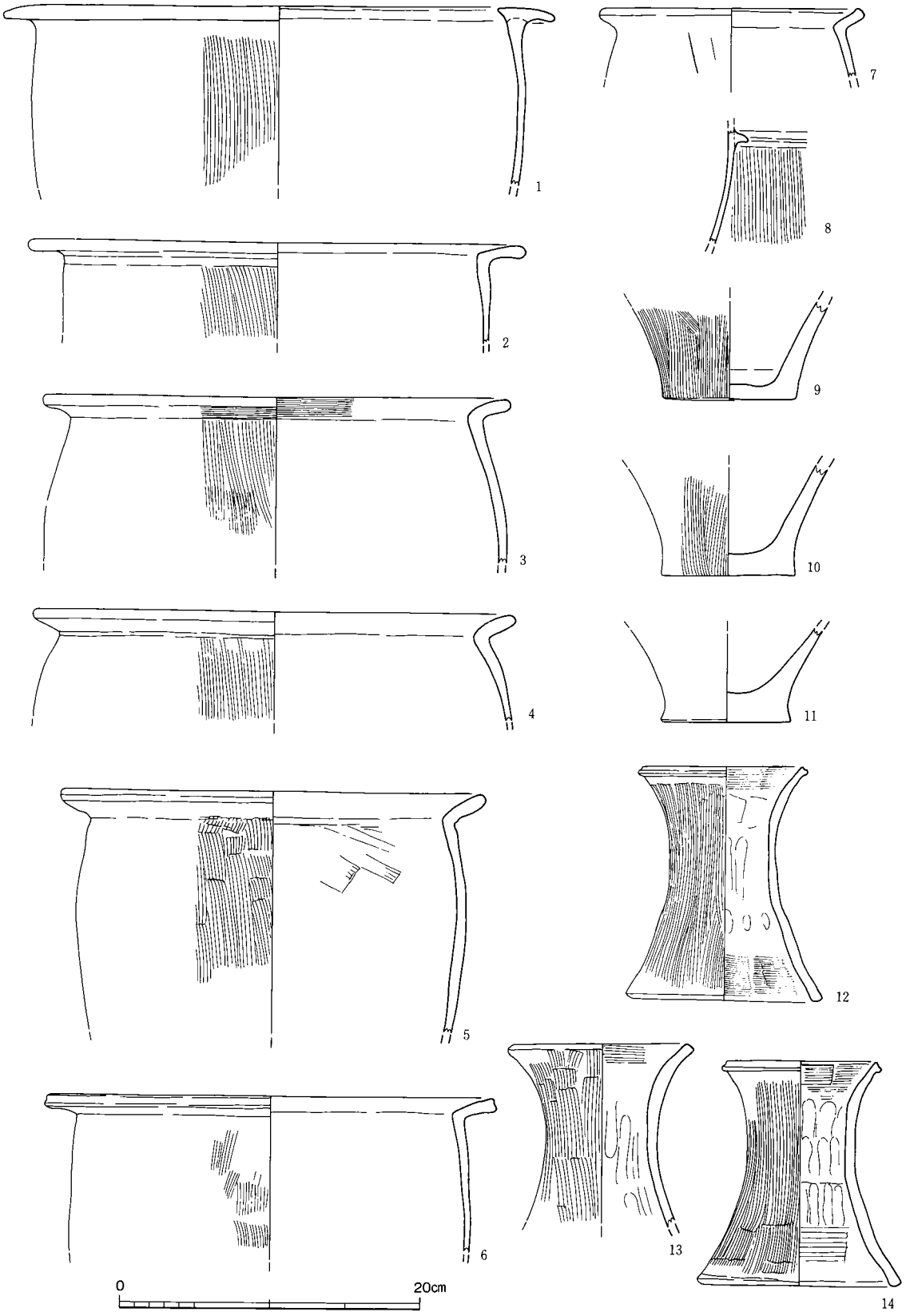
甕（１～11・15～22）１は鋤先状の口縁を呈する甕。２～５は口縁端部を丸く仕上げる甕。６・20は口縁端部を角張って仕上げる甕。15は口縁部内面に刻み目を施す。20は口縁下に一条の沈線を施す。７は「く」字型に近い口縁を持つ甕。21・22は口縁をややはね上げ気味に仕上げ、口縁下に三角突帯を貼り付ける甕。22はハケメを三角突帯の横ナデが切っている。８は甕の胴部。外面はハケメの後、



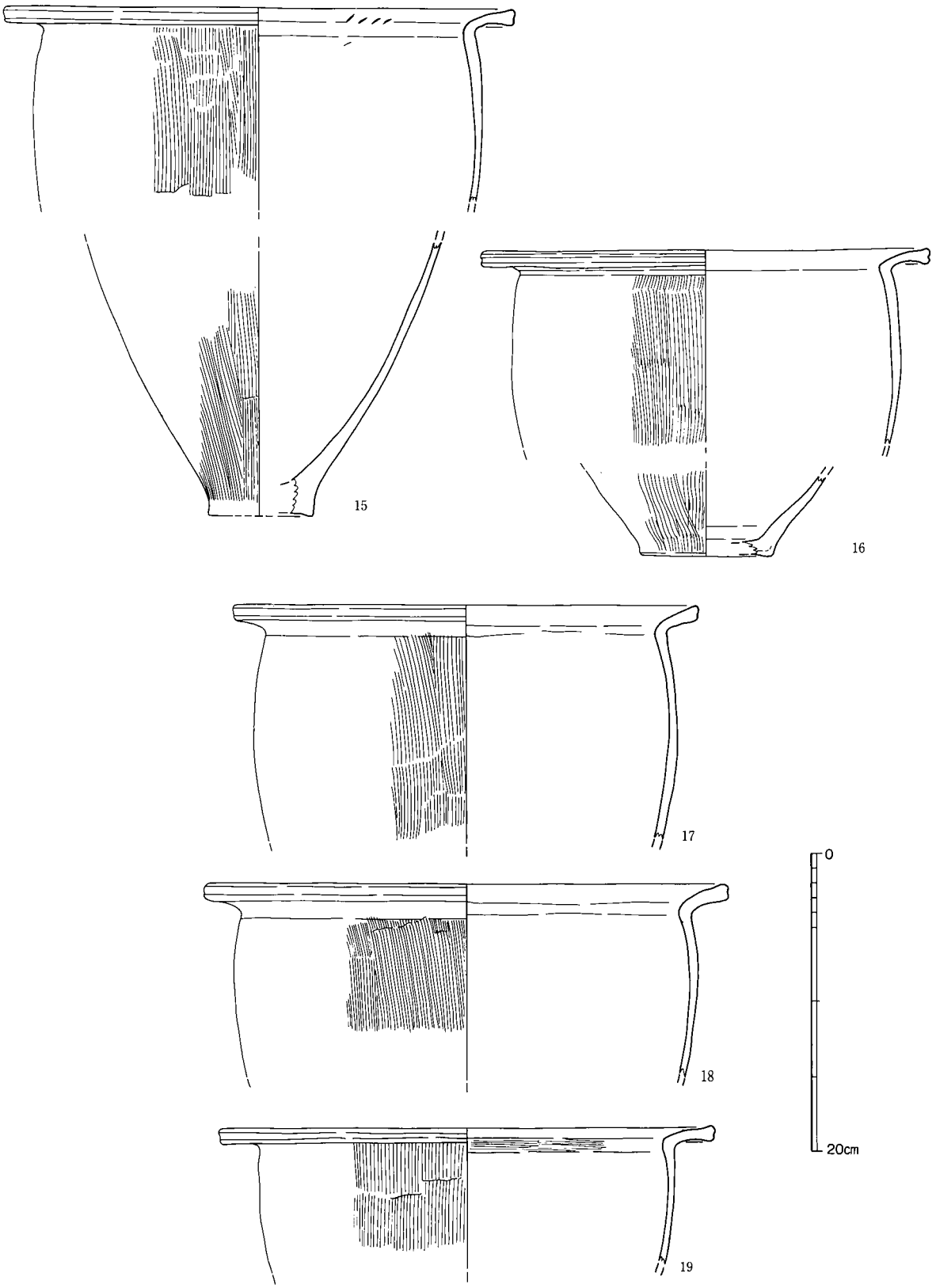
第55図　74号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



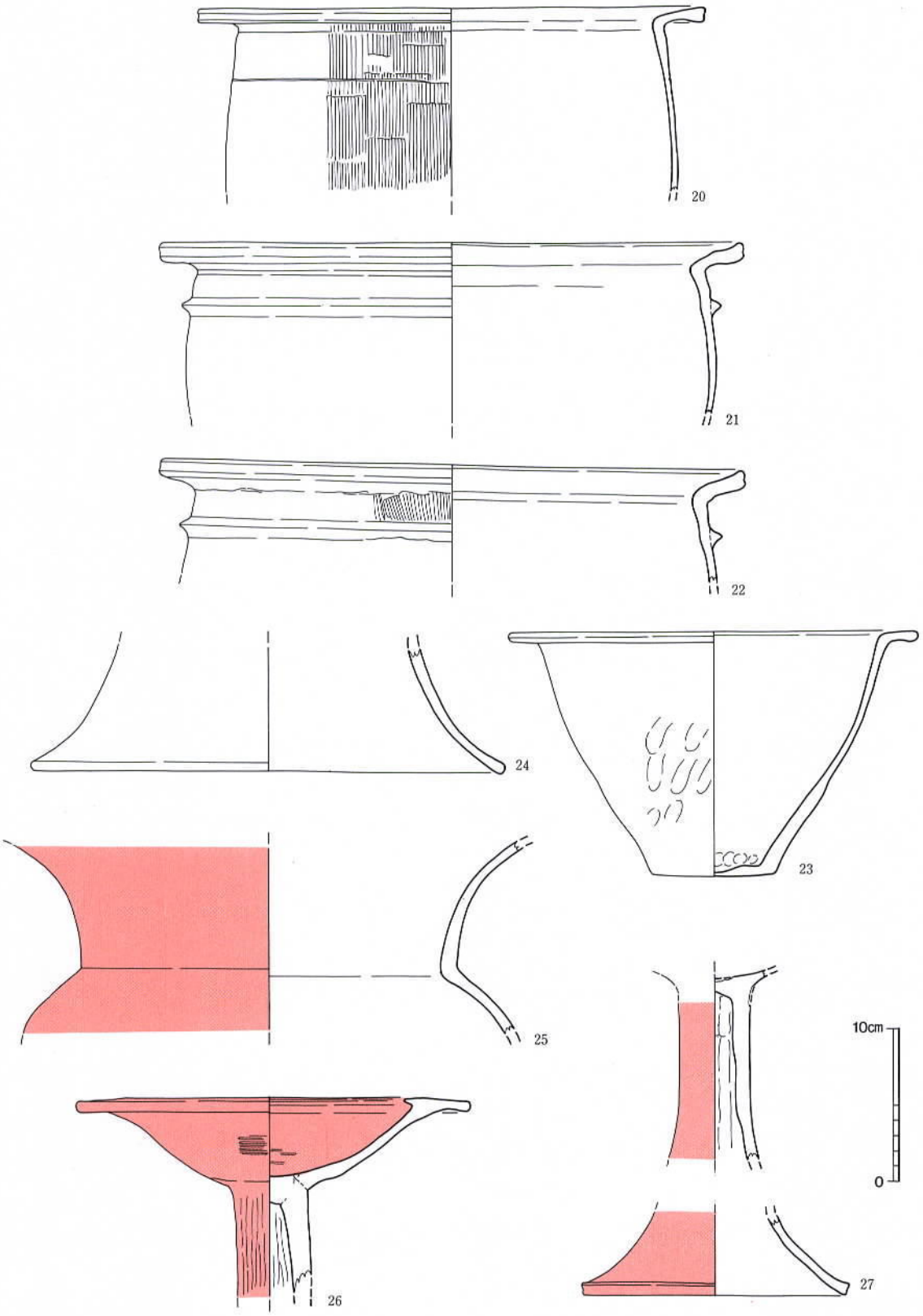
第56図　75・76号竪穴住居跡実測図（1/60）



第57図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



第58図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)



第59図　75号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)

垂れ気味の三角突帯を貼り付ける。９～11は甕の底部。

鉢（23）胴部があまり張らない鉢。内外面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。

高坏（24）高坏の脚部か。内外面の調整はナデ。

器台（12～14）12～14は器台である。いずれも上部のほうがやや大きく開く。外面の調整は縦方向のハケメ。内面の調整は強い指頭圧痕の後、上下端部に横方向のハケメを施す。

丹塗土器

壺（25）広口壺の肩部付近の破片。外面はミガキか。内面の調整はナデ。外面のみ丹塗。

高坏（26・27）26は鋤先状の口縁を呈する高坏。内外面の調整はミガキ。27は高坏の脚部。内面に絞り痕が残る。外面は摩滅して調整は不明であるが、丹塗が施される。

76号竪穴住居跡（図版13－２、第56図）

調査区中央部やや南よりで検出された。73号住居と重複し、これより古い。平面プランは、東西3.1m＋α、南北3.2mの方形になると考えられる。壁の残りは悪く、深さ15cm程度である。中央部には直径約50cmの炉が付設される。内部はあまり焼けていないが炭化物がかなり多く検出された。床面からはピットが４基検出されたが、東西及び北側にある３基のいずれかが主柱穴となると考えている。床面は一部礫層が露出している部分があり、下層に掘り込み等はない。遺物は弥生土器が僅かに出土している。

出土土器（第61図）

弥生土器

甕（１・２）口縁部を外側に強く折り曲げる甕。胴部はほとんど張らない。外面の調整はナデ。内面の調整はナデである。

77号竪穴住居跡（図版13－３、第60図）

中央部南よりで検出した。71号住居、78号住居、81号住居と重複しこれらの中で最も古い。平面プランは東西3.8m、南北3.8mのひし形を呈する。壁は深い部分で25cm程度残る。中央部やや西よりに直径約50cmの円形の炉が付設される。炉の深さは5cm程で炉床に被熱による変化は見られず、炭化物が溜る程度である。炉に東西に2基のピットを検出しているが、いずれも深さ10cmもなく、主柱穴になるとは考えにくい。床面下層は部分的に10cm程度掘り込まれている。遺物は弥生土器が部分的にまとまって出土しているが、いずれも浮いた状態であり、埋没過程で投棄されたものと考えられる。また、遺構検出時に81号住居との切り合いを間違って掘ったために81号住居の遺物が混じった可能性がある。そのほか、埋土から石庖丁が出土している。

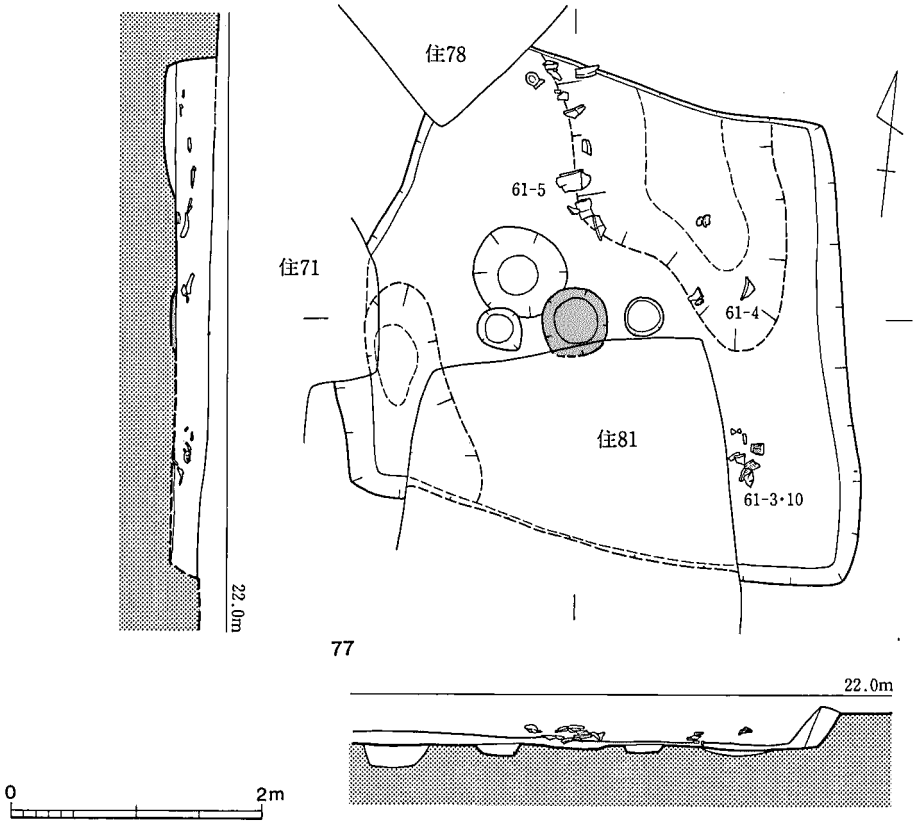
出土土器（図版37、第61図）

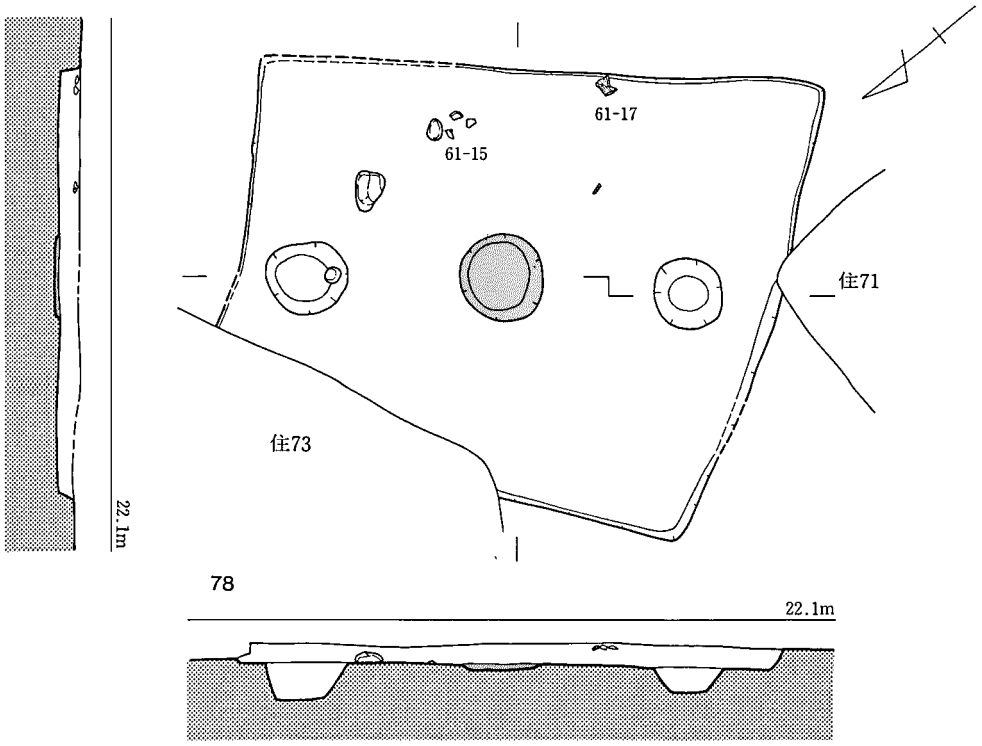
弥生土器

蓋（３）口縁部を角張って仕上げる大型の蓋。内外面の調整はナデ。

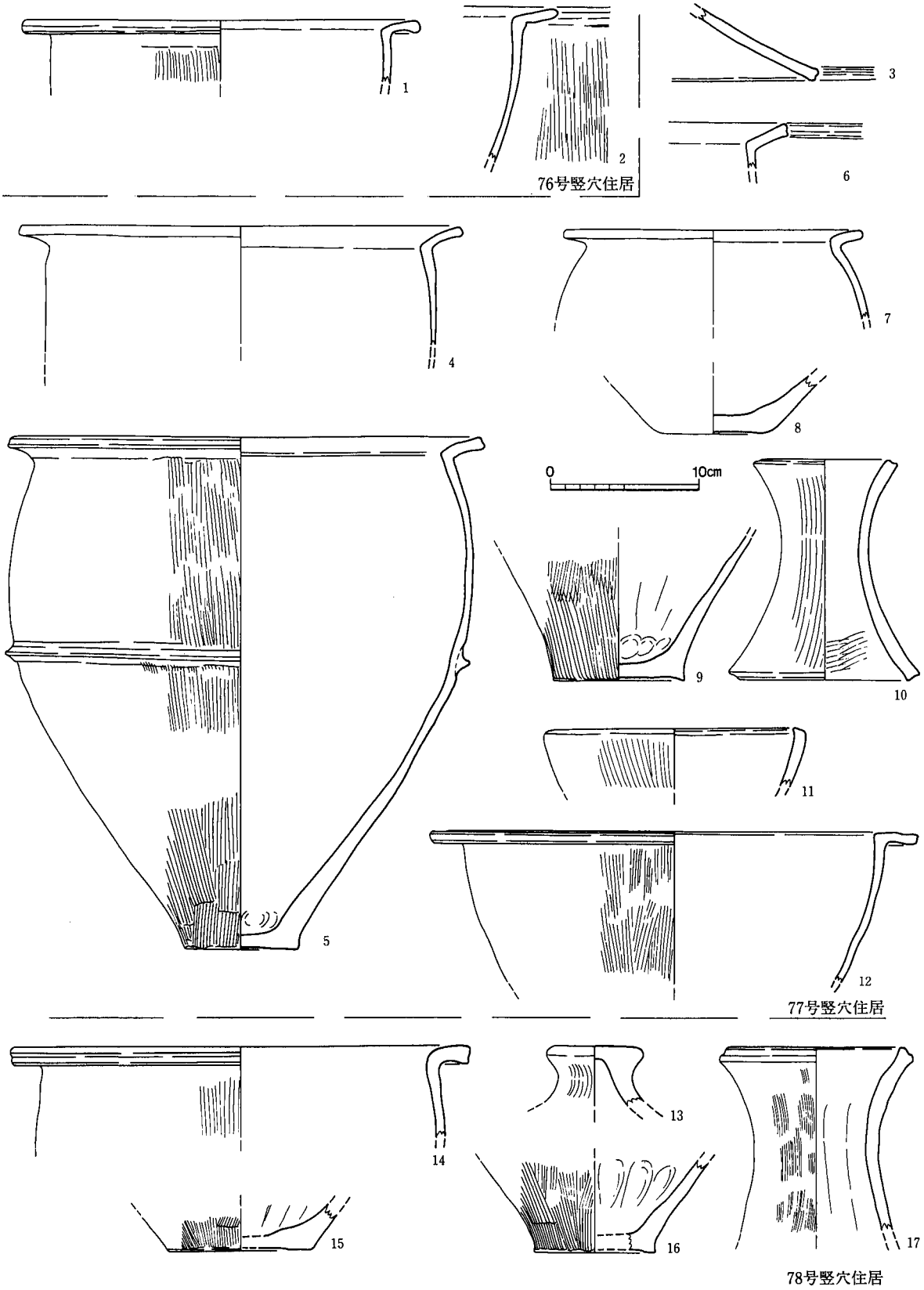
甕（４～６・９）４～６は口縁を外側に強く折り曲げる甕。端部を角張って仕上げる。５は胴部がやや張り、最大径よりやや下がった位置に三角突帯を貼り付ける。外面の調整は下から上方向へのハケメ。突帯部分の内側には貼り付け時の膨らみがある。９は甕の底部。わずかに上げ底気味であるが底は薄い。

鉢（11・12）11は小型の鉢。口縁部はやや角張って仕上げ、内側につまむ。外面の調整はナデ。内面の調整はナデである。12は口縁部を外側へ強く折り曲げる鉢で、端部はやや垂れる。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。





第60図　77・78号竪穴住居跡実測図（1/60）



第61図　76・77・78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

壺（７・８）７は無頸壺の口縁部。内外面の調整はナデ。８は壺の底部。内外面の調整はナデ。

器台（10）上下端ともに大きく開く器台。口縁端部は角張って仕上げられ、外面の調整は縦方向のハケメ。内面の調整はナデの後、下端部は横方向のハケメ。

78号竪穴住居跡（図版14－１、第60図）

中央部南寄りで検出した。73号住居、71号住居、77号住居と重複し、77号住居より新しく、その他より古い。平面プランは南北4.2ｍ、南北3.5ｍのやや不整な方形を呈すると思われる。中央部には直径約60cmのほぼ円形の炉が付設される。５cm程掘り込まれ、内部からは炭化物がわずかに検出されるが、炉床に被熱による変化はない。主柱穴は炉から約90cm離れた位置に検出された。壁際の土坑、床面下層の掘り込み等は確認できなかった。遺物は床面からわずかに弥生土器の甕の底部が出土した。その他の遺物はいずれも浮いた状態のものである。また、土錘が出土している。

出土土器（第61図）

弥生土器

蓋（13）蓋のつまみ。頂部は薄い。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデ。

甕（14～16）14は口縁を外側へ強く折り曲げる甕。15・16は甕の底部。いずれも底は薄い。

器台（17）口縁がやや開く器台。口縁を角張って仕上げる。外面はハケメ。内面は強い指頭圧痕が残る。

79号竪穴住居跡（図版14－２、第62図）

調査区中央部西南寄りで検出した。15号溝と重複し、これより古い。平面プランは南北5.8ｍ、東西5.3ｍで菱形を呈する。壁の残りは悪く、深い部分でも10cm程度である。炉、壁際の土坑、床面下の掘り込み等は確認できなかった。床面ではＰ１～Ｐ10のピットを検出したが、いずれも柱根は検出できず、主柱穴は不明である。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

出土土器（第64図）

弥生土器

甕（１）口縁部が強く外側に折れ曲がる甕。端部を丸く仕上げ、外面の調整は粗いハケメ。

80号竪穴住居跡（図版14－３、第62図）

調査区中央部北西寄りで検出した。64号住居、102号住居、106号住居、59号溝、60号溝と重複し、106号住居より新しく、その他より古い。平面プランは他住居に切られるが南北6.2ｍ、東西4.4ｍの南側が細くなる台形を呈すると考えられる。壁の深さは40cmである。南北の長軸上やや西よりに直径約50cmの円形の炉が付設される。炉は３cm程くぼむ状態で、わずかに炭化物が集積している。長軸上、炉から1.1ｍ程離れた位置に主柱穴２本が検出された。いずれも深く掘られているが、柱痕は確認できなかった。壁際土坑、床面下層の掘り込みは確認できなかった。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第64図）

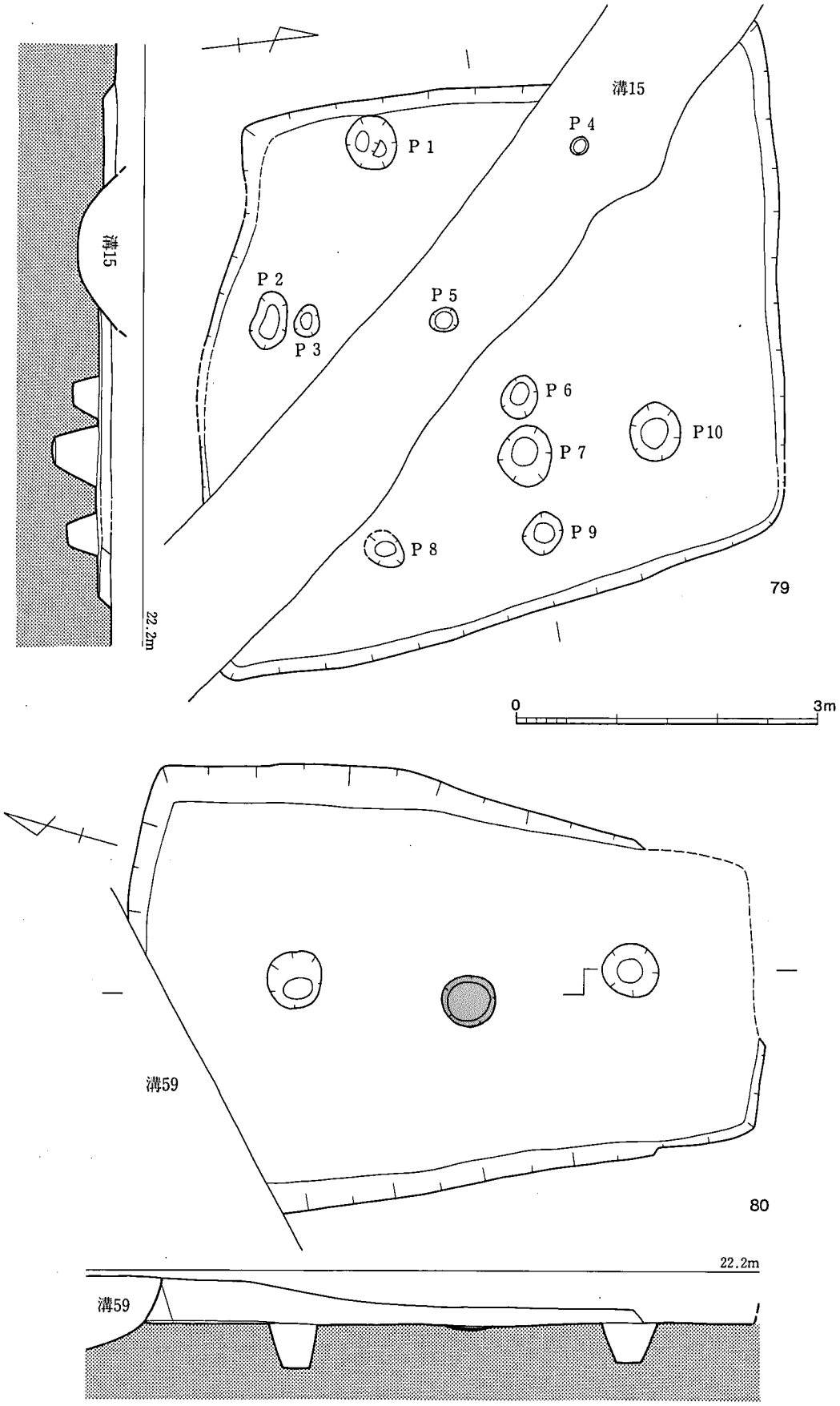
弥生土器

蓋（２）大型の蓋。口縁端部を角張って仕上げる。内外面の調整はナデ。

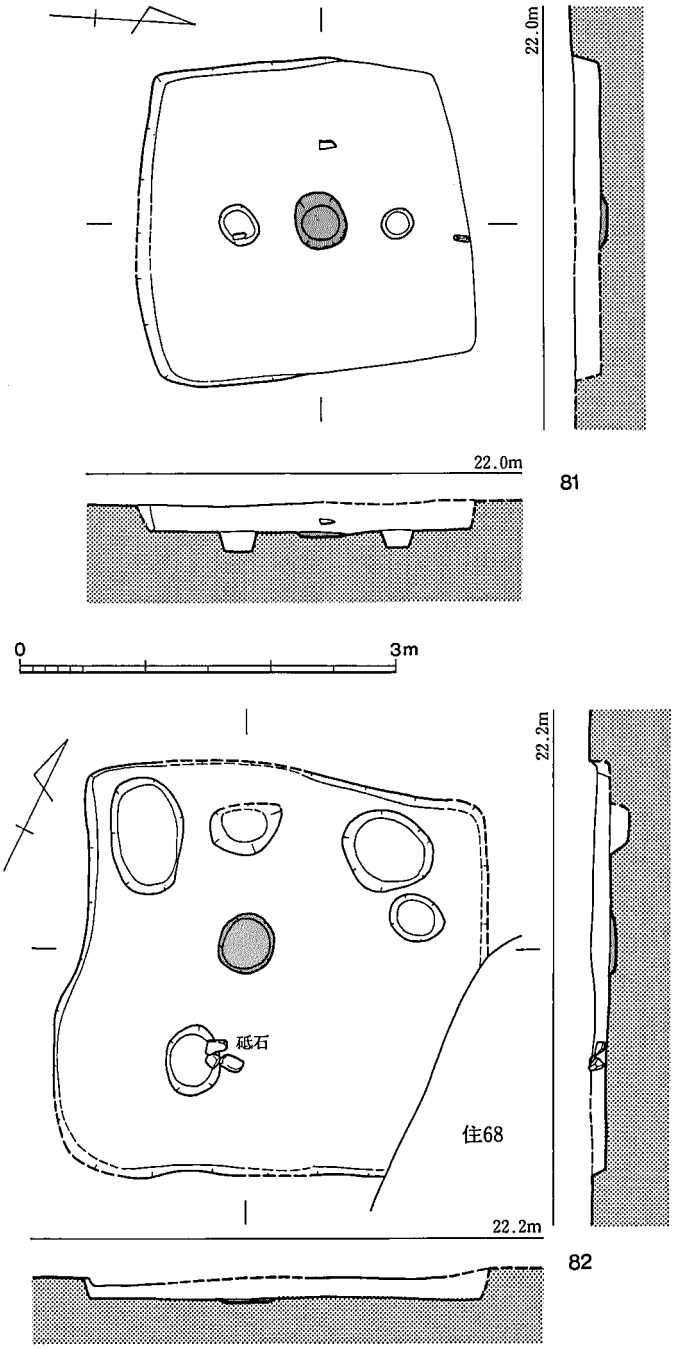
甕（３）口縁を外側に強く折り曲げる甕。口縁下に三角突帯を貼り付ける。

81号竪穴住居跡（図版13－３、第63図）

調査区中央部南西寄りで検出した。77号住居と重複し、これより新しい。平面プランは南北2.6ｍ、東西2.5ｍのほぼ正方形を呈する。壁は深い部分で20cm程であるが、77号住居との切り合いを間違えためにに北側半分をほとんど掘り下げてしまって残っていない。中央部に炉が付設されるが、円形に約



第62図　79・80号竪穴住居跡実測図（1/60）



第63図　81・82号竪穴住居跡実測図（1/60）

5cm掘り込まれ、炭化物がわずかに集積する程度で、焼けた痕跡はない。南北軸上に深さ約15cmの主柱穴2基が検出された。いずれも柱痕は確認できなかった。壁際の土坑、床面下層の掘り込みは確認できなかった。遺物は弥生土器がやや浮いた状態で出土している。

出土土器（第64図）

弥生土器

器台（4）器台の脚部。小片のため、径は不明。外側の調整は縦方向のハケメ。内側は強い指頭圧痕の後、下端部付近の横方向のハケメ。

82号竪穴住居跡（図版15－1、第63図）

調査区中央部やや南西寄りで検出した。68号住居と重複し、これより古い。平面プランは南北3.2m、東西3.4mのほぼ正方形を呈する。壁の深さは15cmほどである。南北軸上やや西よりに円形に約5cm掘り込まれ、炭化物がわずかに集積する程度で、焼けた痕跡はない。南北軸からややずれた位置に主柱穴2本を検出したが、柱痕は確認できなかった。壁際の土坑、床面下層の掘り込みは確認できなかった。遺物は弥生土器、砥石が出土している。

出土土器（図版40、第64図）

弥生土器

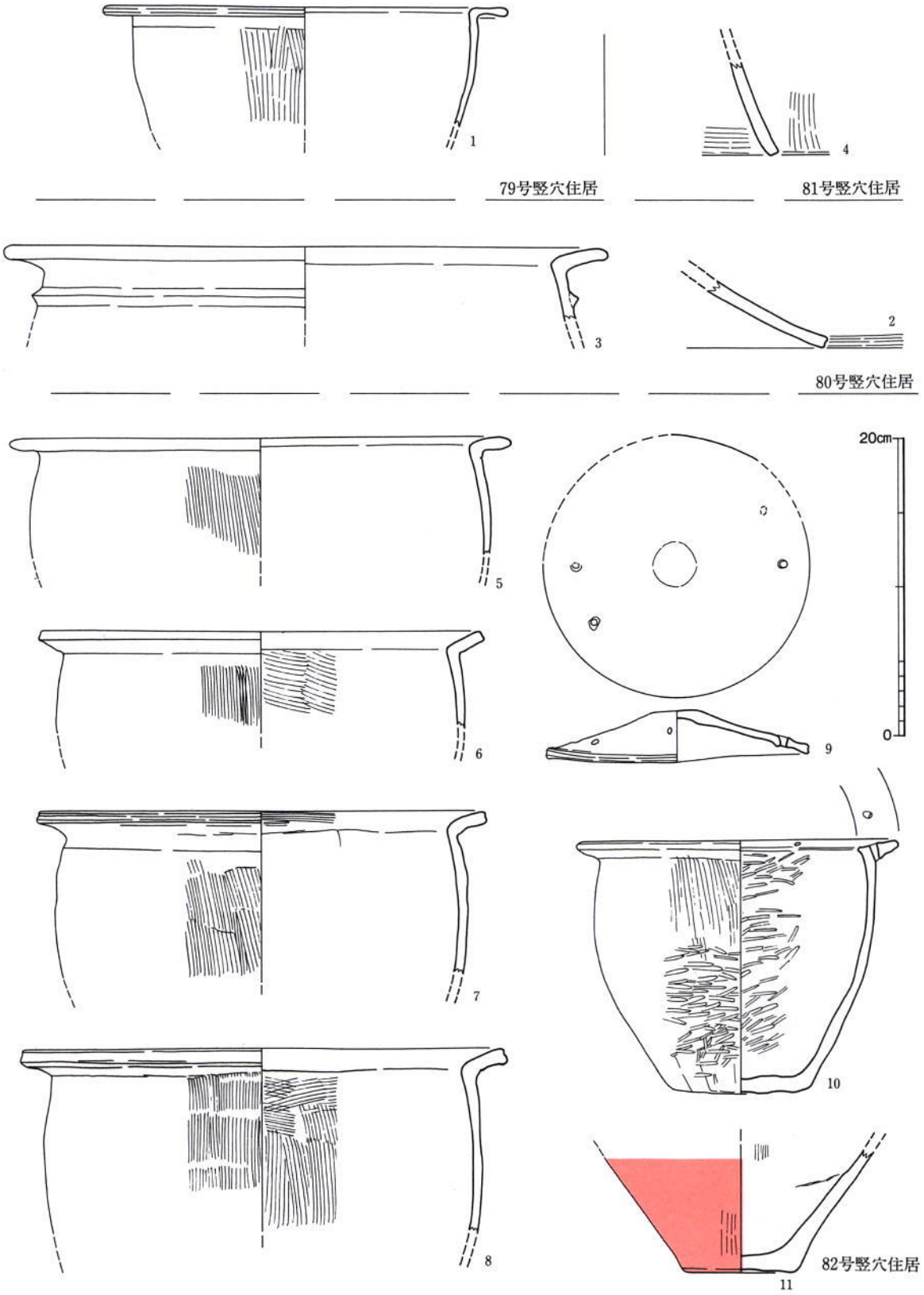
甕（5～8）5は口縁部を外側に強く折り曲げる甕である。端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメを施す。内面の調整はナデ。6～8は口縁端部を角張って仕上げる甕である。内外面の調整はハケメが施される。

蓋（9）小型の蓋。器高は低く、天井部は薄い。口縁部は焼き歪む。口縁付近には2孔ずつ対面に上方から穿孔される。

鉢（10）やや鋤先状を呈する鉢。内傾する口縁部に上方からの穿孔が施される。外面はハケメの後、ミガキ。内面はミガキ調整。

丹塗土器

壺（11）壺の底部。やや上げ底気味である。外面はミガキの後、丹塗を施す。内面はハケメの後、ナデ。接合痕が残る。



第64図　79・80・81・82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

83号竪穴住居跡（図版15－２・15－３、第65図）

調査区西側、中央部分より一段低い位置で検出された。また、13号溝と直接の重複はないが、位置的な関係から13号溝より古いと考えている。壁の深さは深い部分で約25cmあり、立ち上がりは緩やかである。平面プランは東西5.0ｍ、南北3.7ｍの長方形を呈する。中央部には直径約80cmのほぼ円形の炉が付設される。深さは約20cmで、内部には炭化物が多く含まれており、他の住居と異なる。炉から東側約70cmの位置に主柱穴を検出した。深さ50cmと深めに掘り込まれる。それと対応する西側の主柱穴を検出しようとしたが、検出できなかった。南壁際中央には深さ15cmの土坑が掘り込まれる。床面下層は、わずかに貼床と思われる土を取り除いた直下は、全面礫層となっており、他の施設はまったく確認できなかった。本住居は焼失住居であり、プラン検出時から大量の炭化物を含んでいたが、床面からはかなりの炭化材が検出されている。また、弥生土器も床面からほぼ個体ごとにまとまって出土している。

出土土器（図版40、第66図）

弥生土器

甕（１～６）１は口縁部を強く外側に折り曲げる甕。胴部はあまり張らず、底部はやや厚い。外面の調整はハケメ。内面は指頭圧痕、ナデのほか、わずかにハケメが見られる。外面には煤が付着している。２・６は底部が大きく、胴部が樽型を呈する甕。２の外面の調整はハケメ。内面全体に指頭圧痕が残る。６の口縁端部を角張って仕上げている。３は口縁部が外側に折れ曲がり、胴部があまり張らない甕。４は甕の底部。板状工具とハケメにより内外面の調整が施される。５は胴部が大きく広がる甕。６は底部が大きく樽型になる甕。

鉢（７・８）７は口縁外側に強く折れ曲がる鉢。外面の調整はハケメ。内面はナデの後、口縁付近はケズリ。８は大型の鉢。外面の調整はハケメで口縁との境にハケメ原体痕が残る。

84号竪穴住居跡（図版16－１、第65図）

調査区西側、中央部分より一段低い位置で検出された。10号溝の盛土の下から検出され、これより古い。時期的に近接し、軸を同じにする83号住居と同時期ではないかと考えている。壁はわずかに10cm程残る。平面プランは東西5.8ｍ、南北4.1ｍの隅丸の長方形を呈する。中央部にわずかに炭化物が集積した場所がある。炉と考えられるが、ごくわずかに掘り込まれる程度である。長軸上に深さ約30cmの主柱穴２基が検出されている。柱痕は確認できなかった。東側主柱穴の北側にも中央の炉と同様に炭化物の集積した部分が検出された。南壁際の中央には深さ約20cmの土坑が掘り込まれる。床面下層は、わずかに貼床と思われる土を取り除いた直下は、全面礫層となっており、他の施設はまったく確認できなかった。遺物は弥生土器、石庖丁が出土している。

出土土器（図版40、第67図）

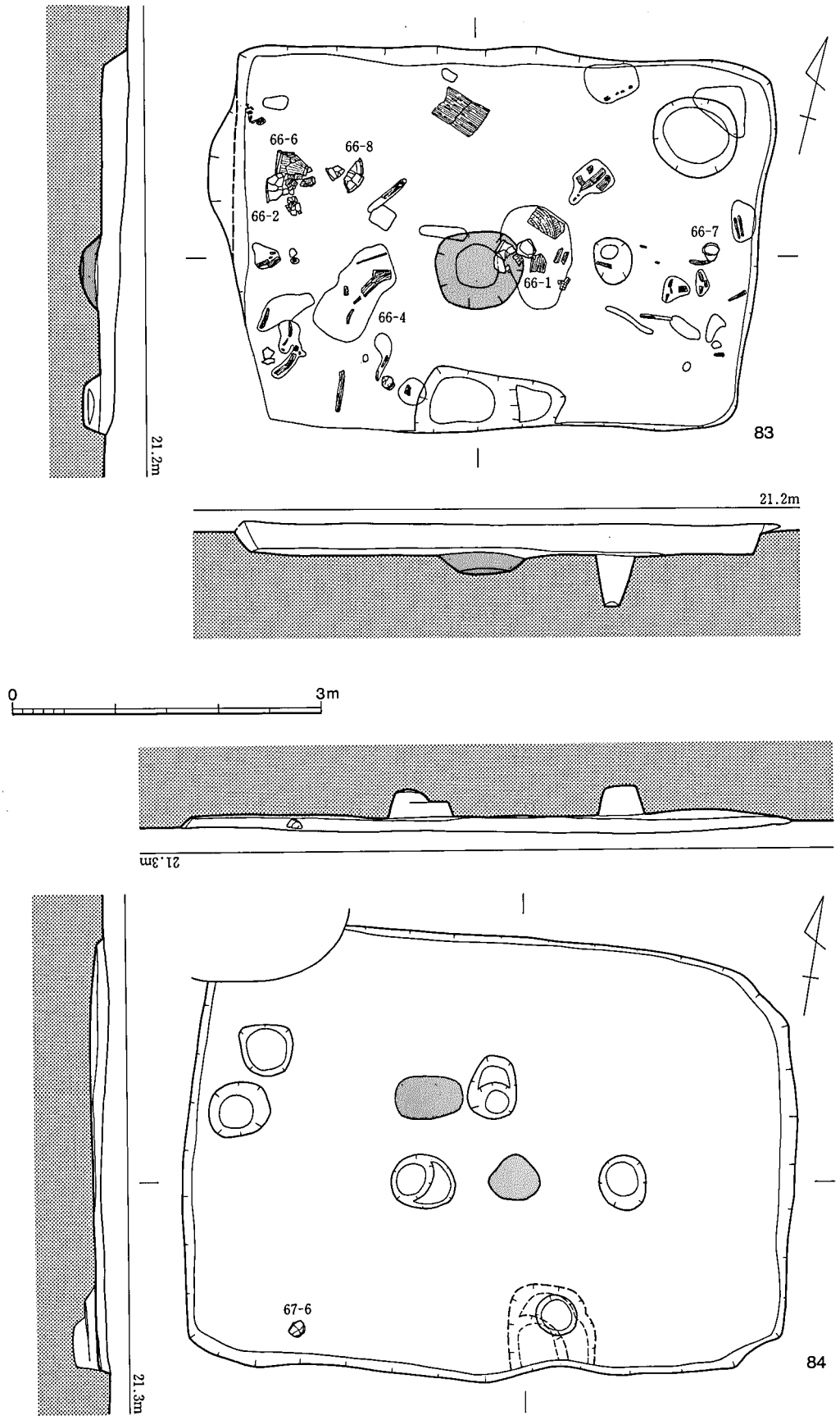
弥生土器

甕（１～５）１～３は「く」字型口縁で端部を角張って仕上げる甕の口縁部。３の口縁と胴部の境には突帯が貼り付けられる。４・５は甕の底部。いずれも外面の調整はハケメ。

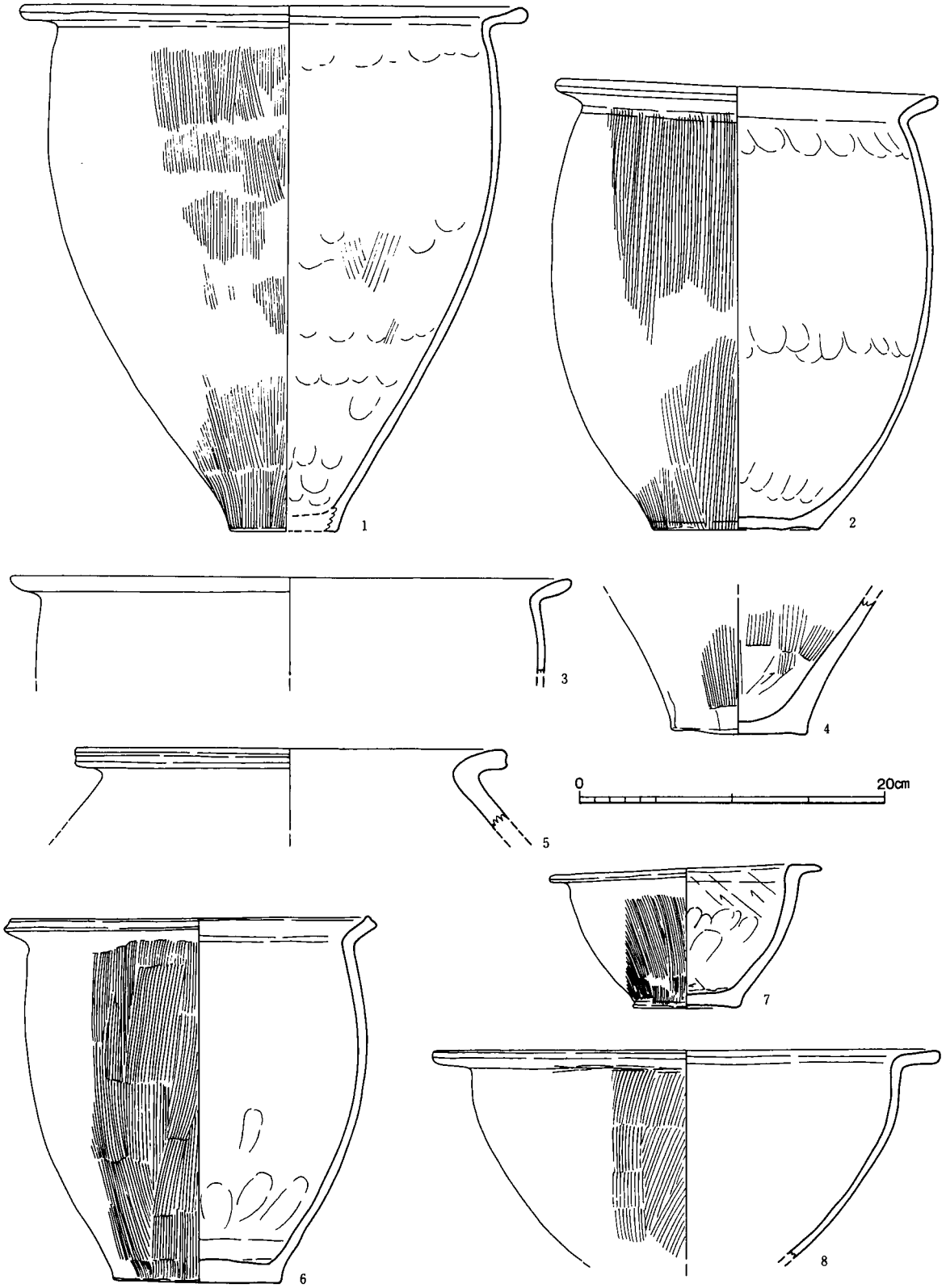
丹塗土器

壺（６・７）６は無頸の壺。口縁部は外側に強く折り曲げられる。口縁部には上から穿孔が行われる。胴部最大径の部分には台形の突帯が貼り付けられる。その部分の内面は膨らむ。外面全体と内面口縁付近に丹塗が施される。７は丹塗の無頸壺。外面の調整はミガキで内外面ともに丹塗が施される。

85号竪穴住居跡（図版16－２、第68図）



第65図　83・84号竪穴住居跡実測図（1/60）



第66図　83号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

調査区の東南部で検出した。86号住居跡、13号溝と重複し、これらより古い。平面プランは東西5.0m＋α、南北4.6m＋αである。壁は深い部分で約40cm残存する。中央やや南よりに炉が付設される。炉は略楕円形で深さ20cm程掘り込まれる。炉跡をはさむように北側と南側にそれぞれ炭化物の広がりが確認された。炉の東側に主柱穴1基が検出された。砂礫層直上に厚さ1.5～3cmほどの黄褐色微砂の層があり、これが床面とおもわれるが、厚さが薄いため礫が露出する状況であった。遺物は弥生土器、石庖丁、砥石が出土している。

出土土器（図版41、第69・70図）

弥生土器

甕（1～20）1・2・4～9は口縁端部が丸く仕上げられる甕。1は小型で胴部が張らない。3・10～12は口縁端部を角張って仕上げる甕。3ははね上げ気味の口縁で胴部が大きく張る。10は口縁下に三角突帯を貼り付ける。13は鋤先状の口縁を呈する甕で、胴部が大きく張る。14～18は甕の底部。17は上底で厚く、古い形態である。19・20は底部が大きく胴部が樽型を呈する甕。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

壺（21）鋤先状を呈する広く壺の口縁部。肩部との境に小さな三角突帯を貼り付ける。

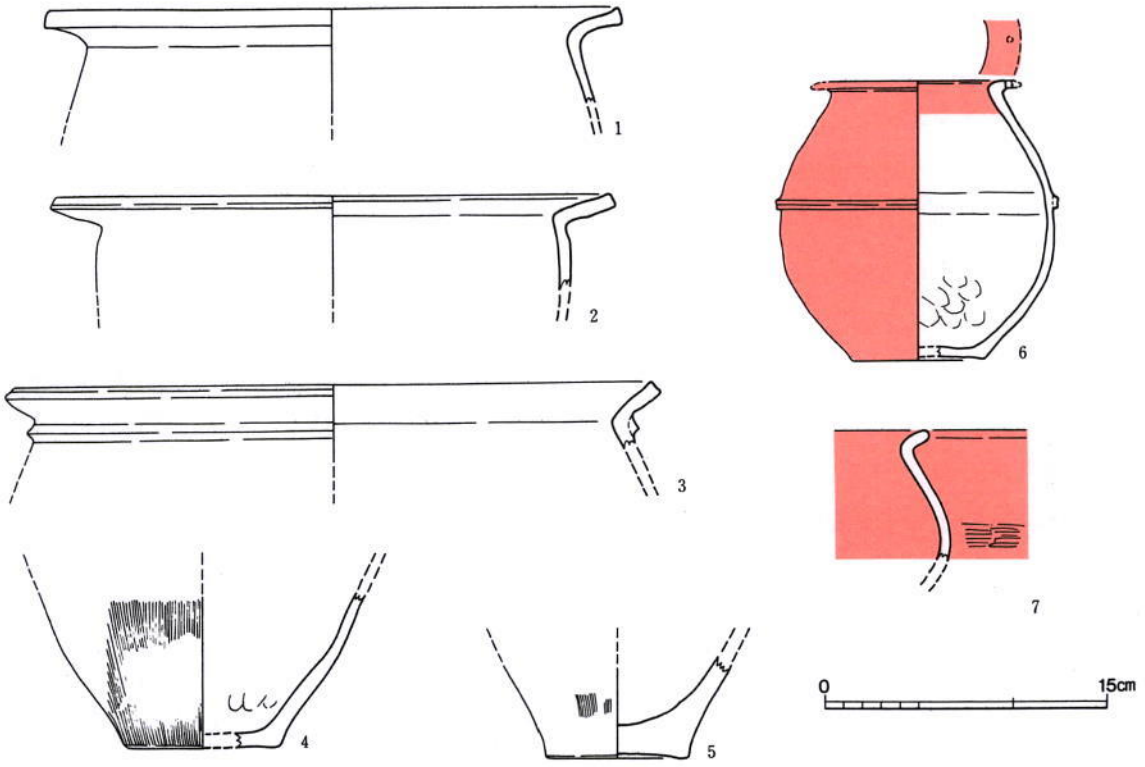
高坏（22）高坏の脚部か。内外面の調整はナデ。

器台（23～25）23～25は器台である。上部の方が大きく開く。外面の調整はハケメ。

丹塗土器

甕（26）甕の底部から胴部。外面は粗いハケメ。内面はナデ。外面のみに丹塗を施す。

壺（27～29）27は外側へ直線気味に開く壺の口縁部。外面はミガキ。内面はナデである。内外面ともに丹塗が施される。28・29は無頸壺。28は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。内外面ともに丹塗を施す。



第67図　84号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

高坏（30）鋤先状の高坏の口縁部。内外面ともにナデ調整で丹塗を施す。

筒形器台（31）脚部の破片。透かしが4箇所に開けられる。外面はナデの後、ハケメ。

86号竪穴住居跡（図版16－３、第68図）

調査区の東南部で検出した。85号住居跡と重複し、これより新しい。西半部分は調査区外にのびる。平面プランは東西4.4ｍ＋α、南北4.0ｍである。北壁は85号住居との切り合いを間違えたために残っていない。炉は長軸上に付設される。楕円形で深さ14cm程掘り込まれ、内部には炭化物が集積している。炉跡に南接する掘り込みは砂利が堆積しており、他のピットとは様相が異なる。炉の東側に主柱穴１基を検出している。南壁のほぼ中央には屋内土坑があり、川原石が階段状に検出された。土層からは確認できていないが、意図的に設置されたものと考えている。埋没状況、床面の状況とも、85号住居跡と同様である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版42、第71～75図）

弥生土器

甕（１～14・16～49）１～14・16・21～23は口縁を外側に折り曲げる甕。「く」字型口縁に近いものもある。２は外面に粗細の２種のハケメを用いる。17～20・24～26・28～38は口縁端部を角張って仕上げる。「く」字型口縁ではね上げ気味になるものが多い。27は胴部が大きく張る甕。39は甕の底部から胴部である。上端部は口縁部との接合痕を残すが内面に粘土紐を押し付けている。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。40～49は甕の底部。44は上底でやや古い形態を残す。

鉢（50～53）50～53は鉢。器形は丸い。50は口縁部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ。

壺（15）無頸壺の胴部。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。

器台（54～56）54～56は器台である。いずれも上下端部を角張って仕上げ、上部の方が大きく開く。外面の調整は縦方向のハケメ。内面の調整は強い指頭圧痕の後、上下端部は横方向のハケメ。

丹塗土器

甕（57～61）57～59は鋤先状の口縁を呈する甕で、口縁下に「M」字型突帯を貼り付ける。57は口縁外側端部に刻み目を付ける。外面のみ丹塗。58は口縁部上端面と口縁と突帯の間に暗文を施す。内外面ともに丹塗を施す。59は口縁外側端部に刻み目を付け、口縁部上端面および口縁と突帯の間に暗文を施す。外面のみに丹塗を施すが、内面にも垂れている。60は鋤先口縁で胴が大きく張る甕。内外面の調整はナデ。外面は丹塗か。61は甕の底部である。外面の調整はハケメ。内面の調整はハケメとナデである。外面のみに丹塗を施す。

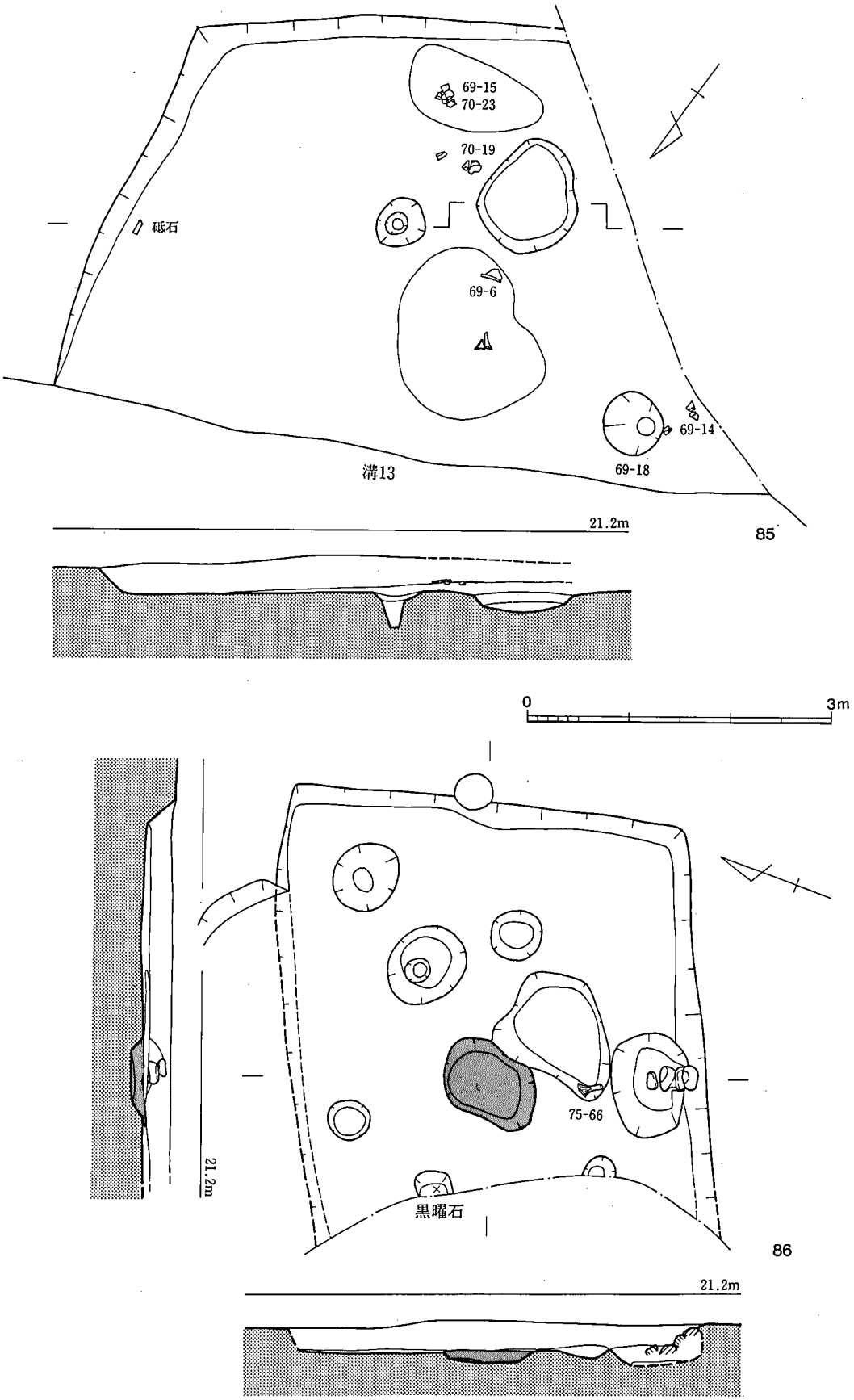
壺（62～64）62～64は無頸壺。いずれも内外面ともにナデ調整で、外面のみ丹塗である。

高坏（65・66）65は高坏の脚部。内外面の調整はナデで、外面のみに丹塗。66は鋤先状口縁の高坏。外面の調整はハケメとナデ。坏部内面はミガキ。脚部内面は絞り痕が残り、ナデ調整。外面と坏部内面に丹塗が施されるが、内面にも一部付着している。

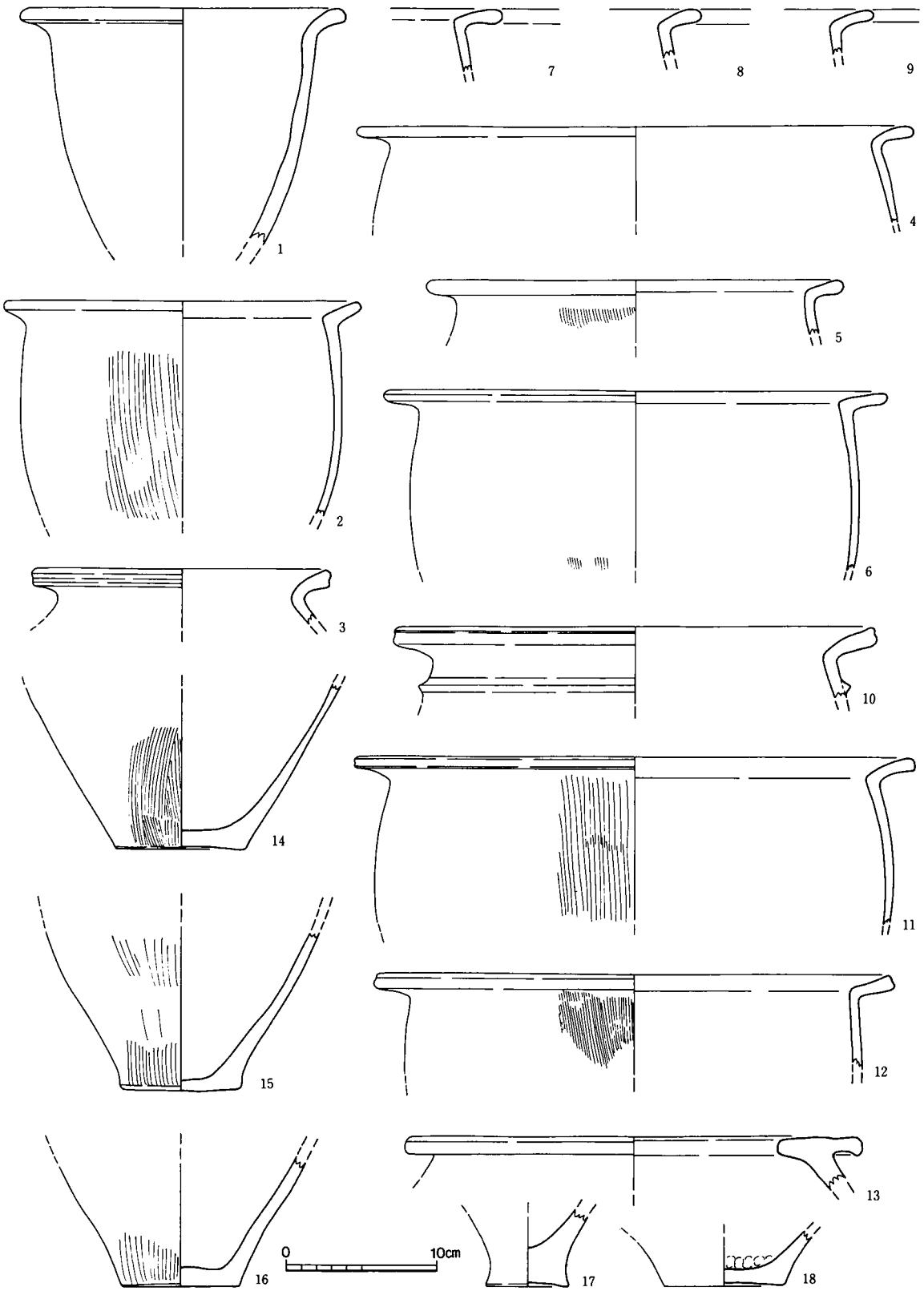
鉢（67）鉢の口縁か。直線的にわずかに広がり、口縁端部を角張って仕上げる。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデである。内外面ともに丹塗。

87号竪穴住居跡（図版17－１、第76図）

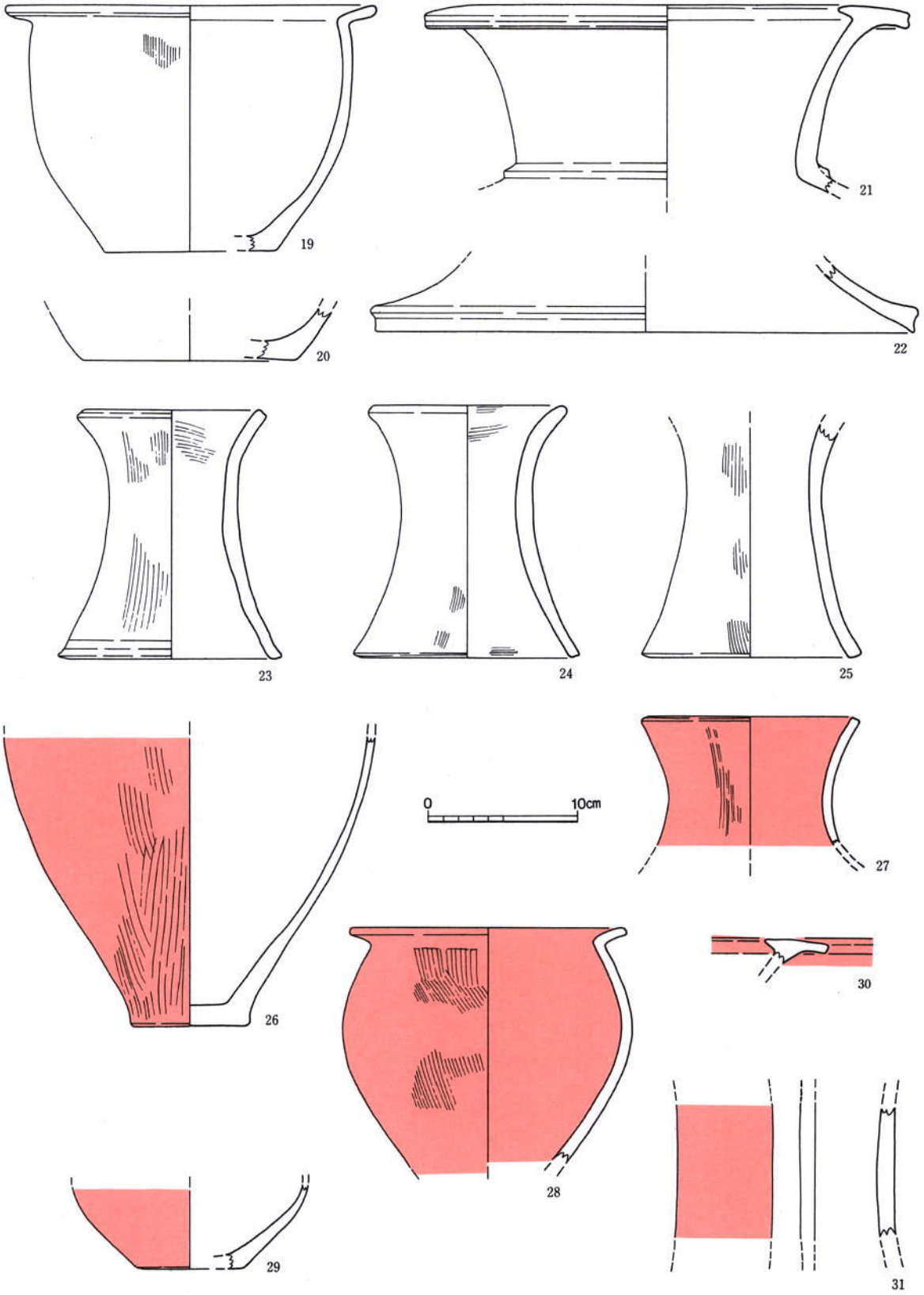
調査区西側、中央部分より一段低い位置で検出された。10号溝の盛土の下から検出され、これより古い。時期的に近接し、軸を同じにする83号住居と同時期ではないかと考えている。平面プランは東壁部分を掘りすぎてしまい、正確ではないが東西6.1ｍ、南北4.0ｍの長方形を呈する。長軸上の中央部南よりに長径約60cmの楕円形の炉が付設される。15cm程礫層を掘り込んでおり、内部には炭化物が



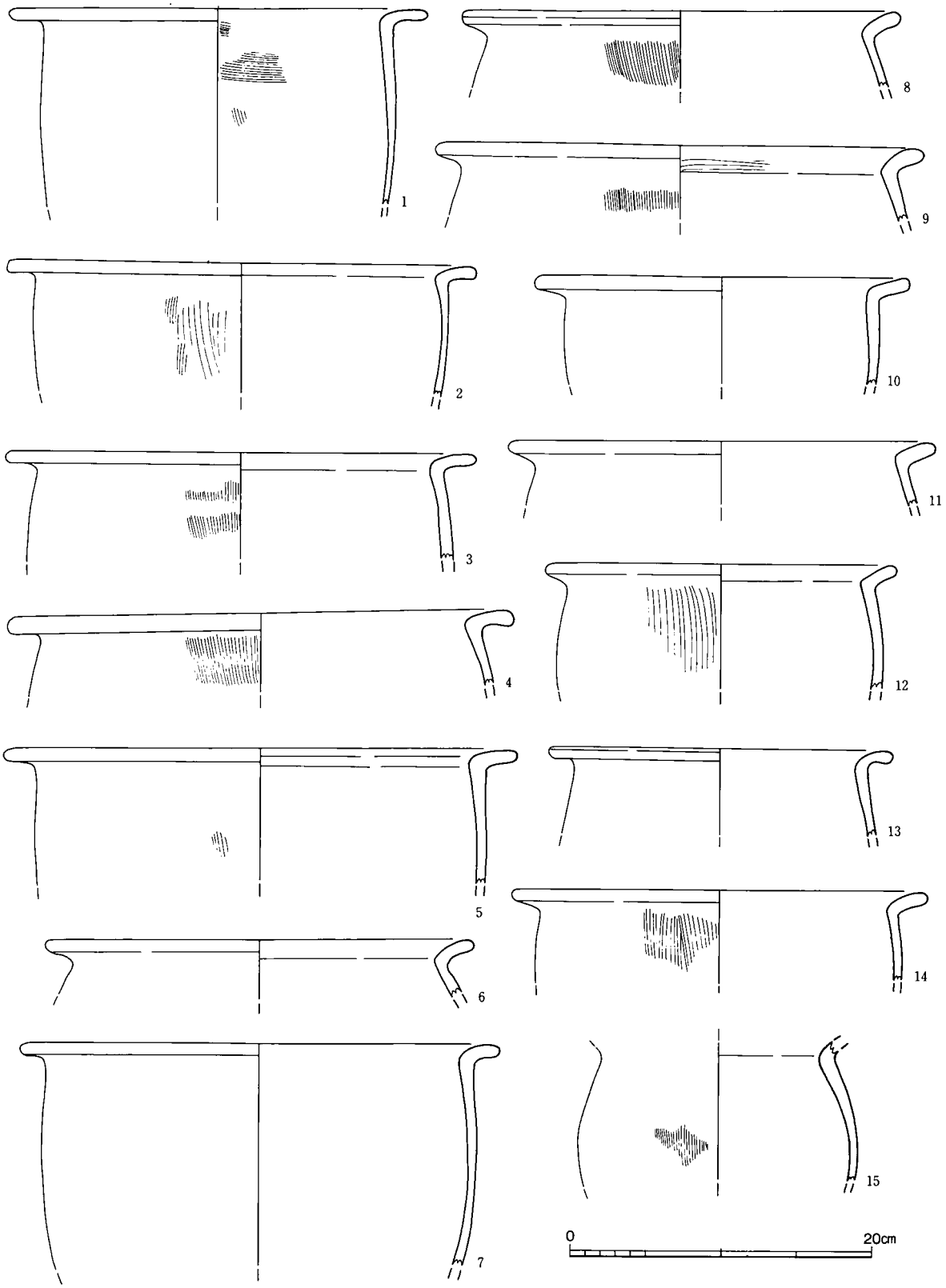
第68図　85・86号竪穴住居跡実測図（1/60）



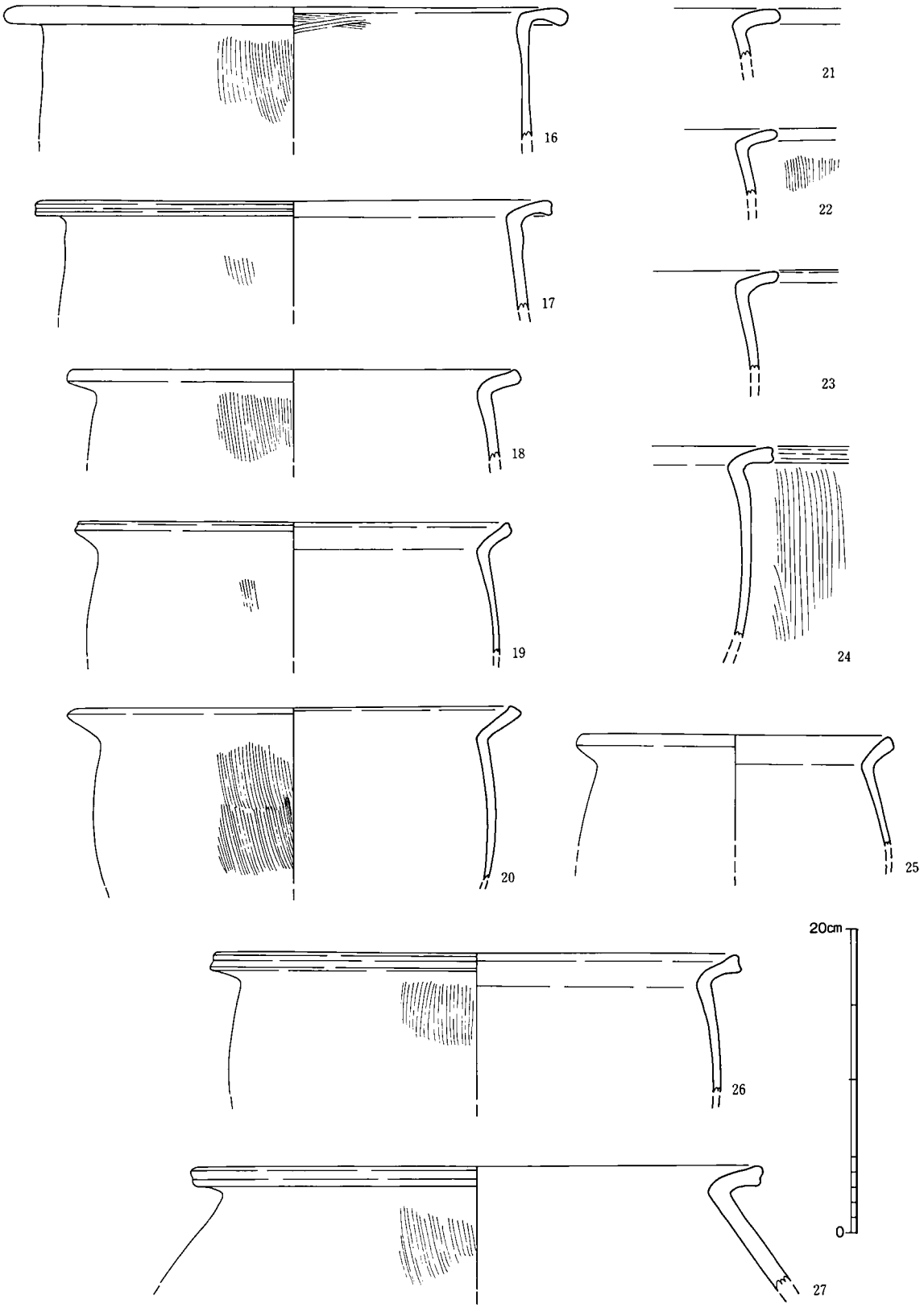
第69図　85号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



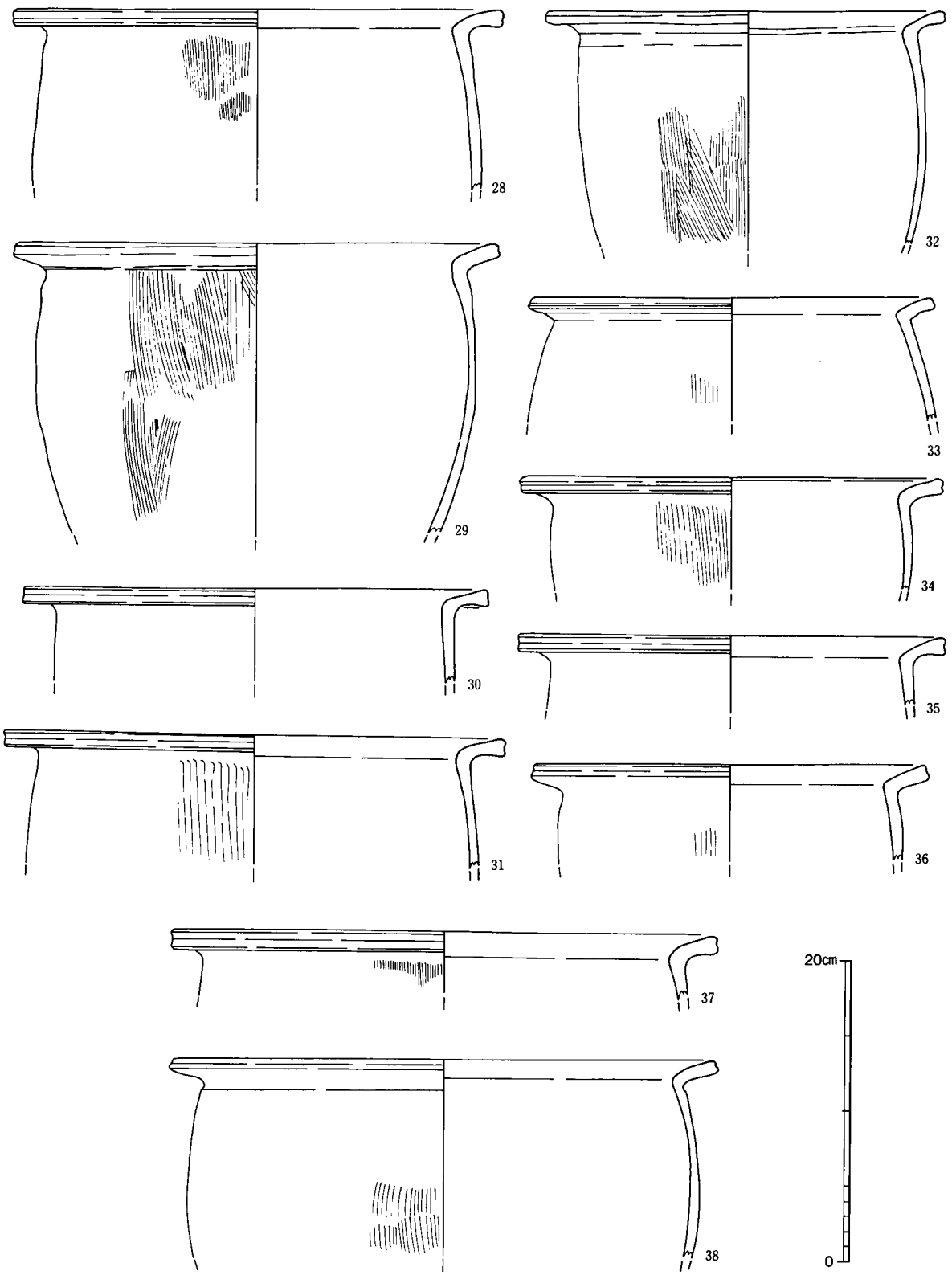
第70図　85号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)



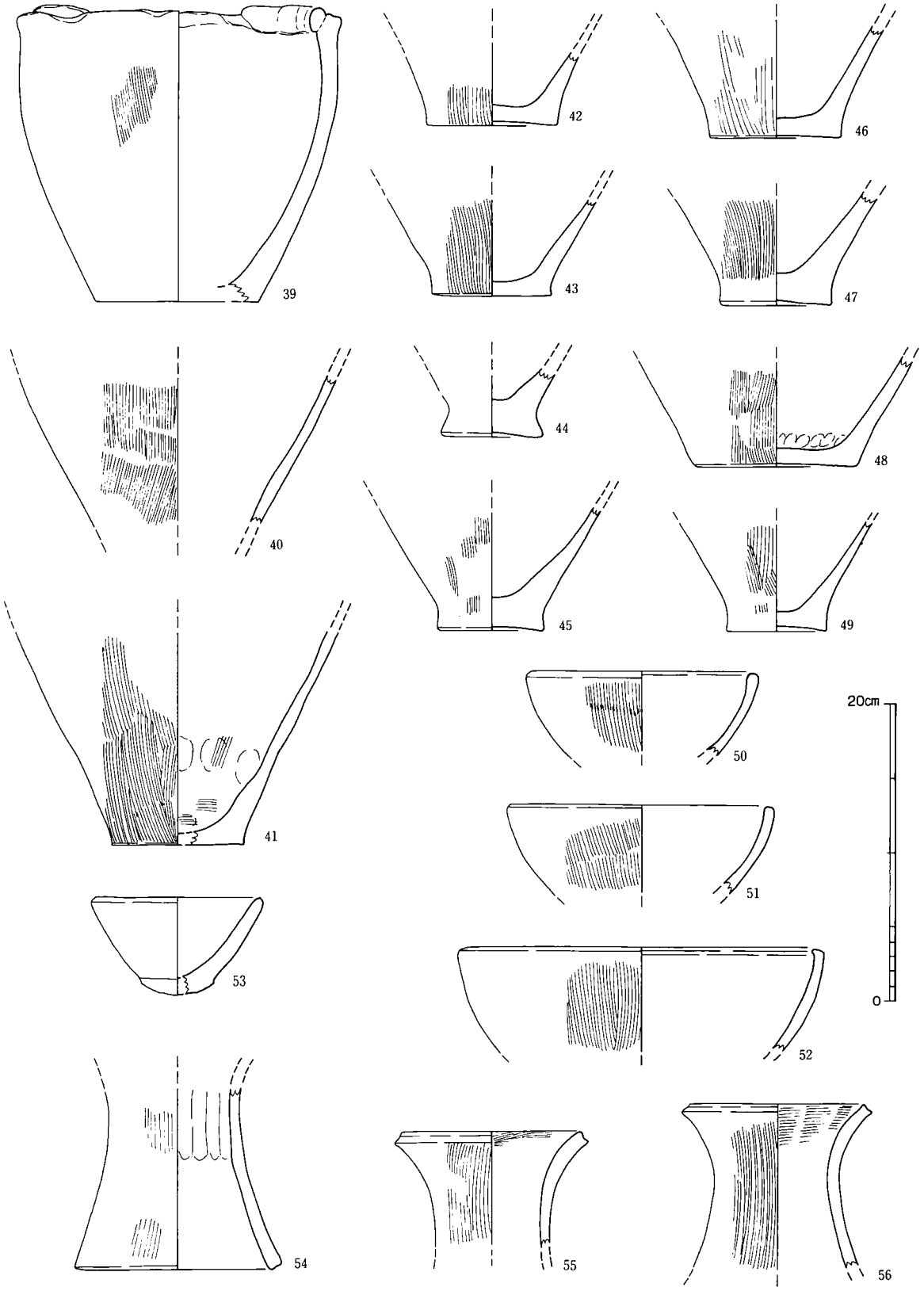
第71図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



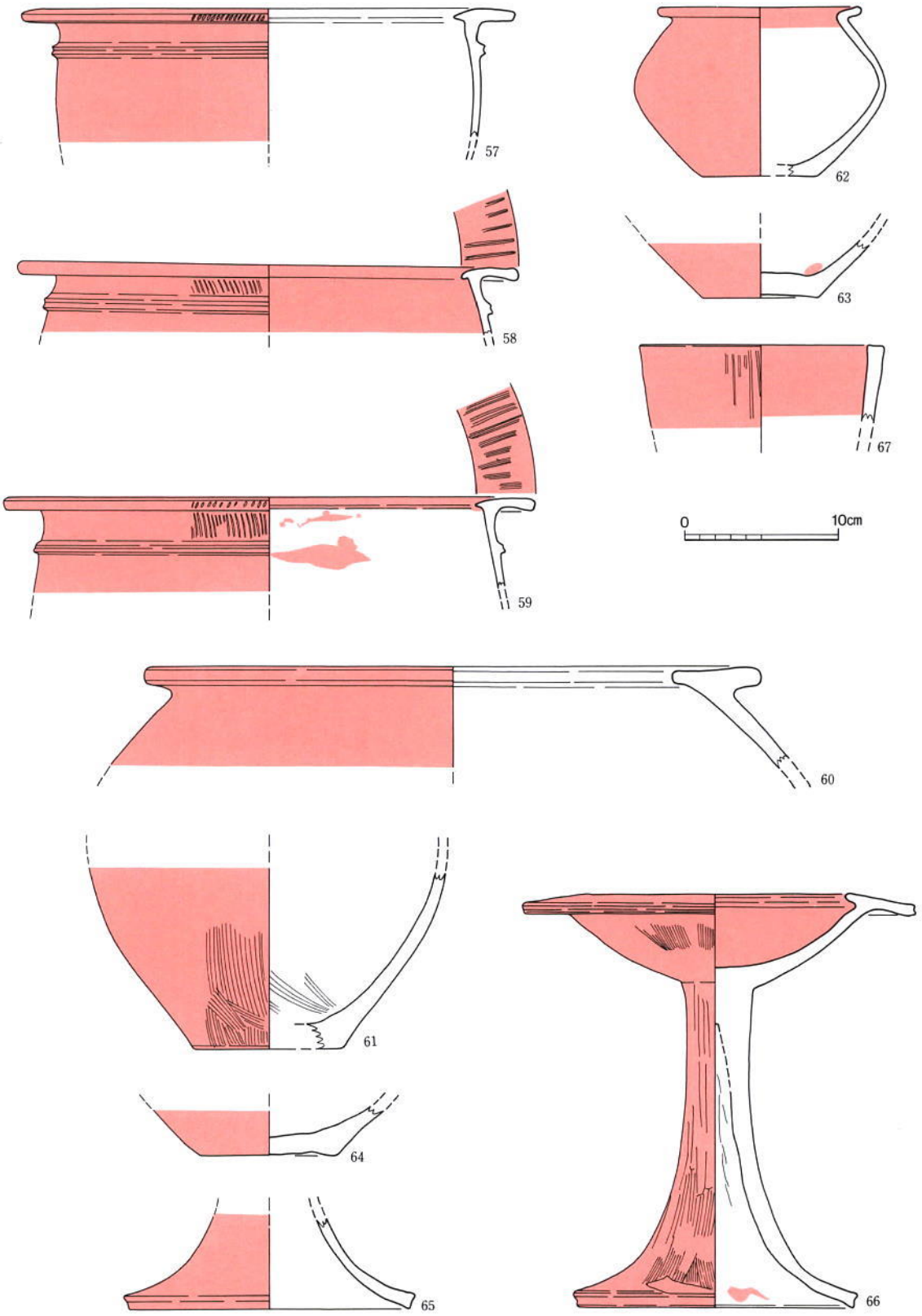
第72図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



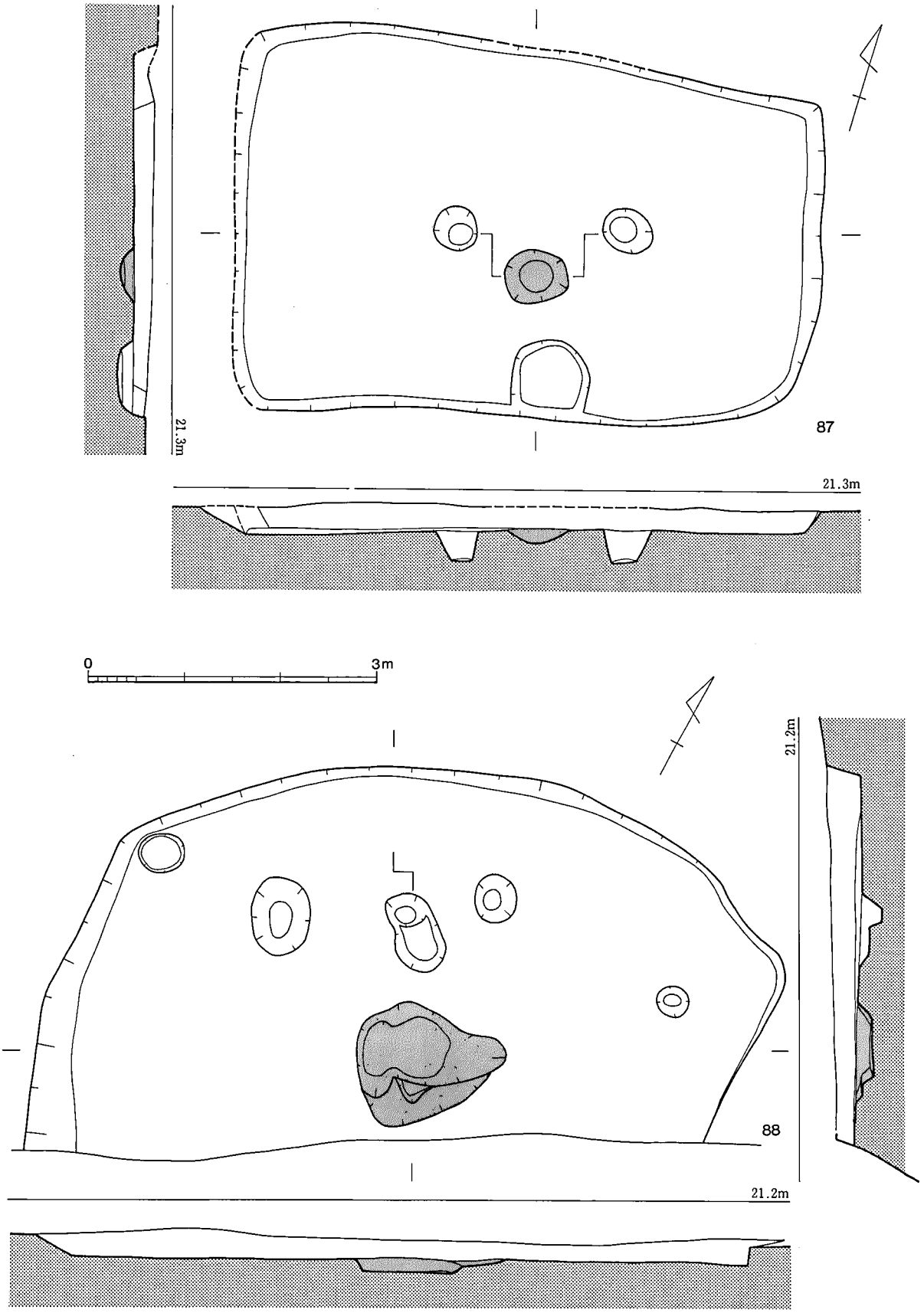
第73図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)



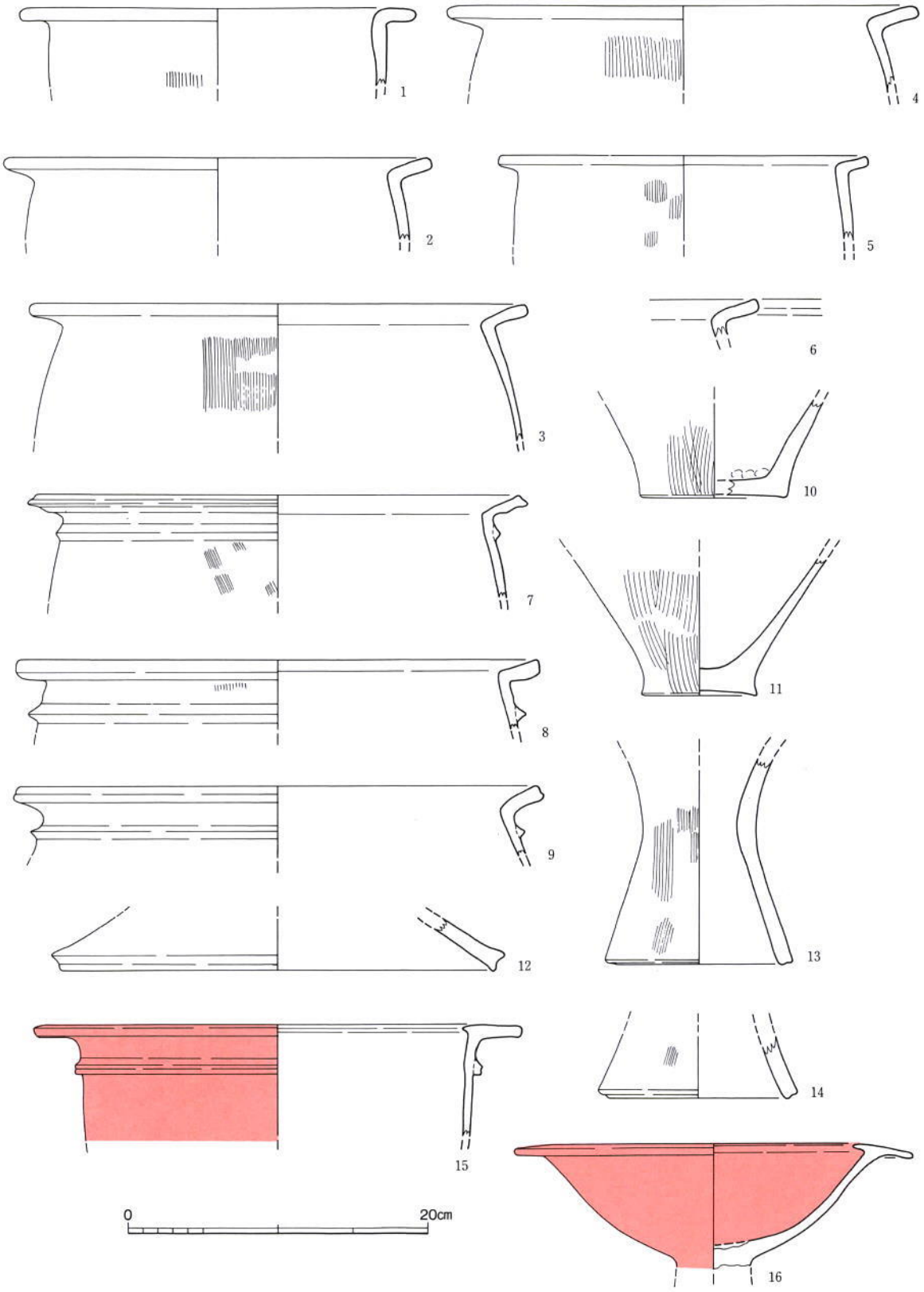
第74図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）



第75図　86号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/4）



第76図　87・88号竪穴住居跡実測図（1/60）



第77図　87号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

集積していた。長軸上には深さ約30cmの主柱穴2基が検出された。いずれも柱痕は検出されていない。南壁際の中央には深さ約15cmの土坑が掘り込まれる。床面下層は、わずかに貼床と思われる土を取り除いた下は、全面礫層で、他の施設は全く確認できなかった。遺物は弥生土器、投弾、砥石が出土している。

出土土器（図版43、第77図）

弥生土器

甕（1～11）1～6は口縁を外側に強く折り曲げる甕。7～9は口縁下に三角突帯を貼り付ける。10・11は甕の底部。

高坏（12）高坏の脚部か。内外面の調整はナデ。

器台（13・14）13・14はあまり大きく広がらない器台。外面はハケメ。内面はナデ。

丹塗土器

甕（15）鋤先状の口縁を呈する甕の口縁部である。口縁下に垂れ気味の「M」字型突帯を貼り付ける。外面のみに丹塗を施す。

高坏（16）高坏の坏部。鋤先状の口縁部で、外傾する。内外面ともに丹塗が施される。

88号竪穴住居跡（図版17－2、第76図）

調査区の東南部で検出した。13号溝、18号溝と重複しこれらより古い。平面プランは壁を掘り誤ったためはっきりしないが東西7.6m、南北3.9m＋αである。炉は中央やや南よりに付設される。15cmほど掘り込まれ、炉床は砂礫層となる。主柱穴とおもわれるピットは炉跡の南側にずれた位置にある。床面は礫が露出しており、85・86号住居跡にみられたような黄褐色土の貼り床は確認できなかった。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版43、第78図）

弥生土器

甕（1～3）1は口縁を外側に折り曲げる甕。2ははね上げ気味の口縁。3は口縁下に突帯を貼り付ける。

鉢（4）器形の丸い鉢。摩滅のため調整は不明。

106号竪穴住居跡（図版17－3、第79図）

調査区中央部の東端で検出された。80号住居、59号溝と重複し、これらの中で最も古い。平面プランは東西7.2m、南北4.5mの長方形を呈し、本遺跡の中でもっとも大型の住居である。壁は深さ40cm程残っているが、壁の立ち上がりは緩やかである。長軸上の中央部南よりに直径約40cmの円形の炉が付設される。わずかに掘り込み、内部には炭化物が集積する。長軸上に2本の主柱穴が確認できたが、柱痕は確認できていない。床面下層には掘り込み等はない。遺物は弥生土器が出土している。

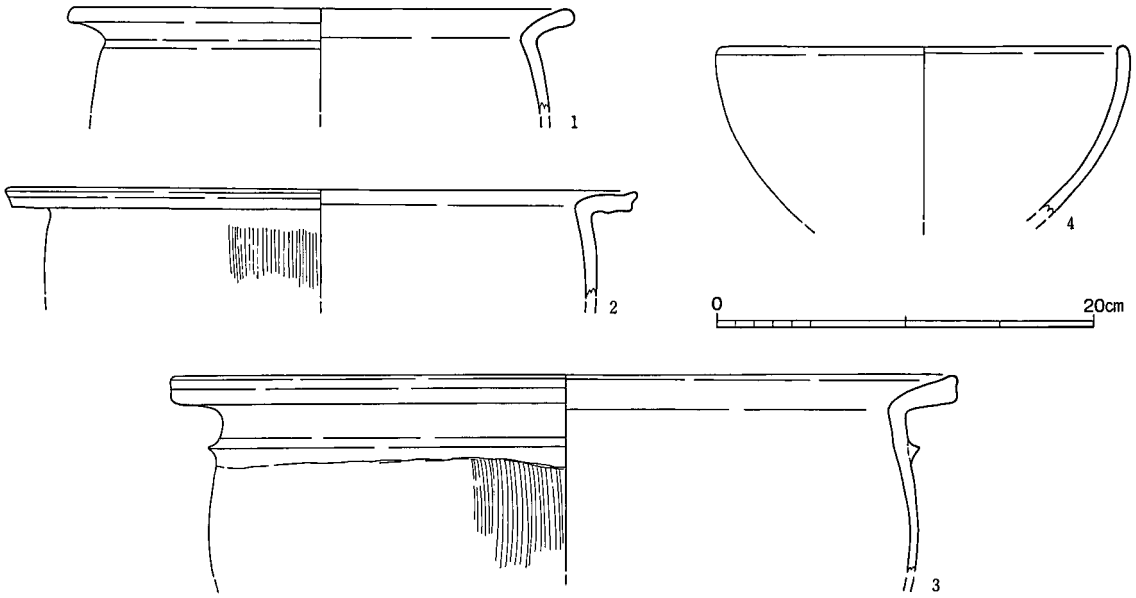
出土土器（図版43、第80～82図）

弥生土器

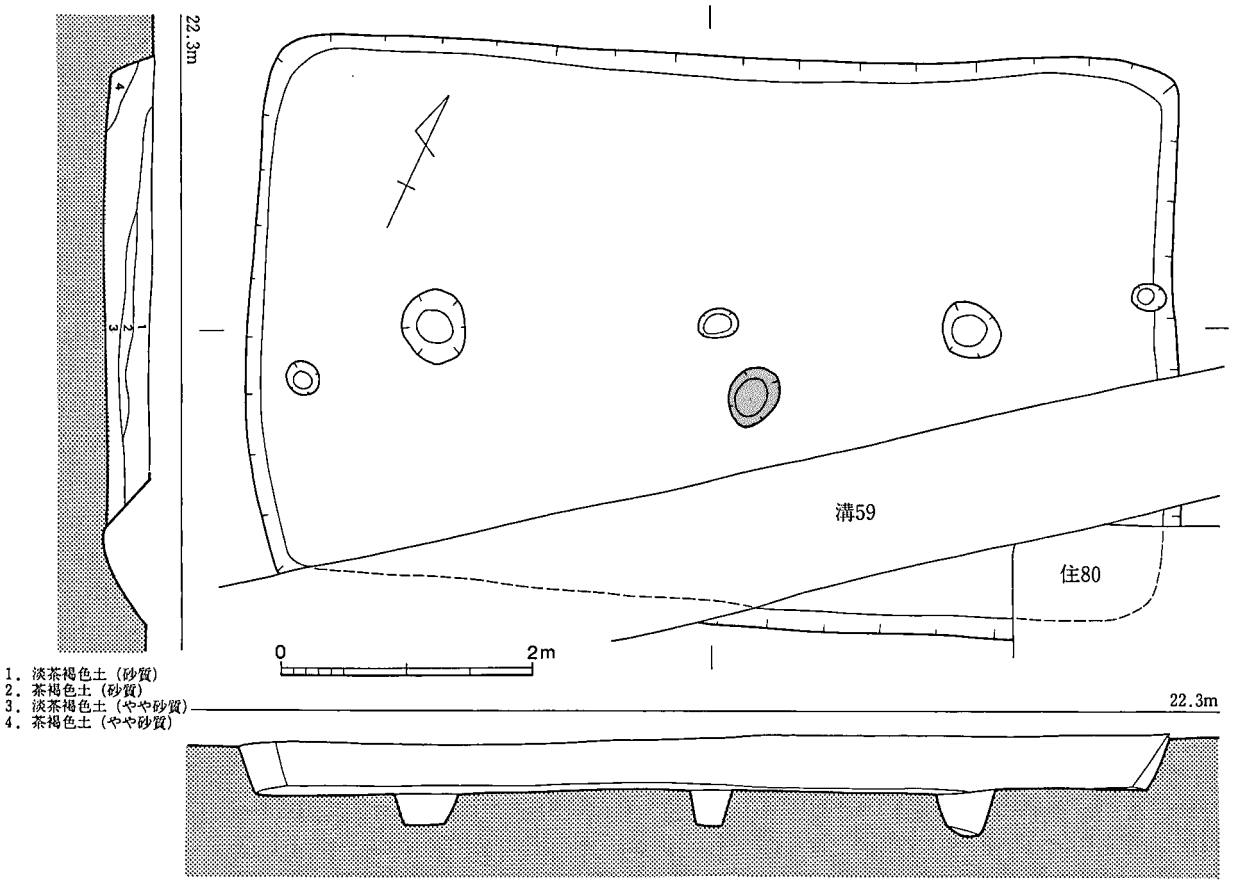
甕（1～22）1～12・18～22は口縁部を外側に折り曲げる甕。いずれも口縁端部を丸く仕上げる。6は胴部に焼成前の修正痕が観察できる。12は口縁部内面に刻みを入れる。18は同一個体であるが接合しない。外面の調整はハケメ。内面は底部付近がナデ。それ以上はハケメである。19は口縁部内面に刻目を付ける。20～22は口縁下に三角突帯を貼り付ける。

丹塗土器

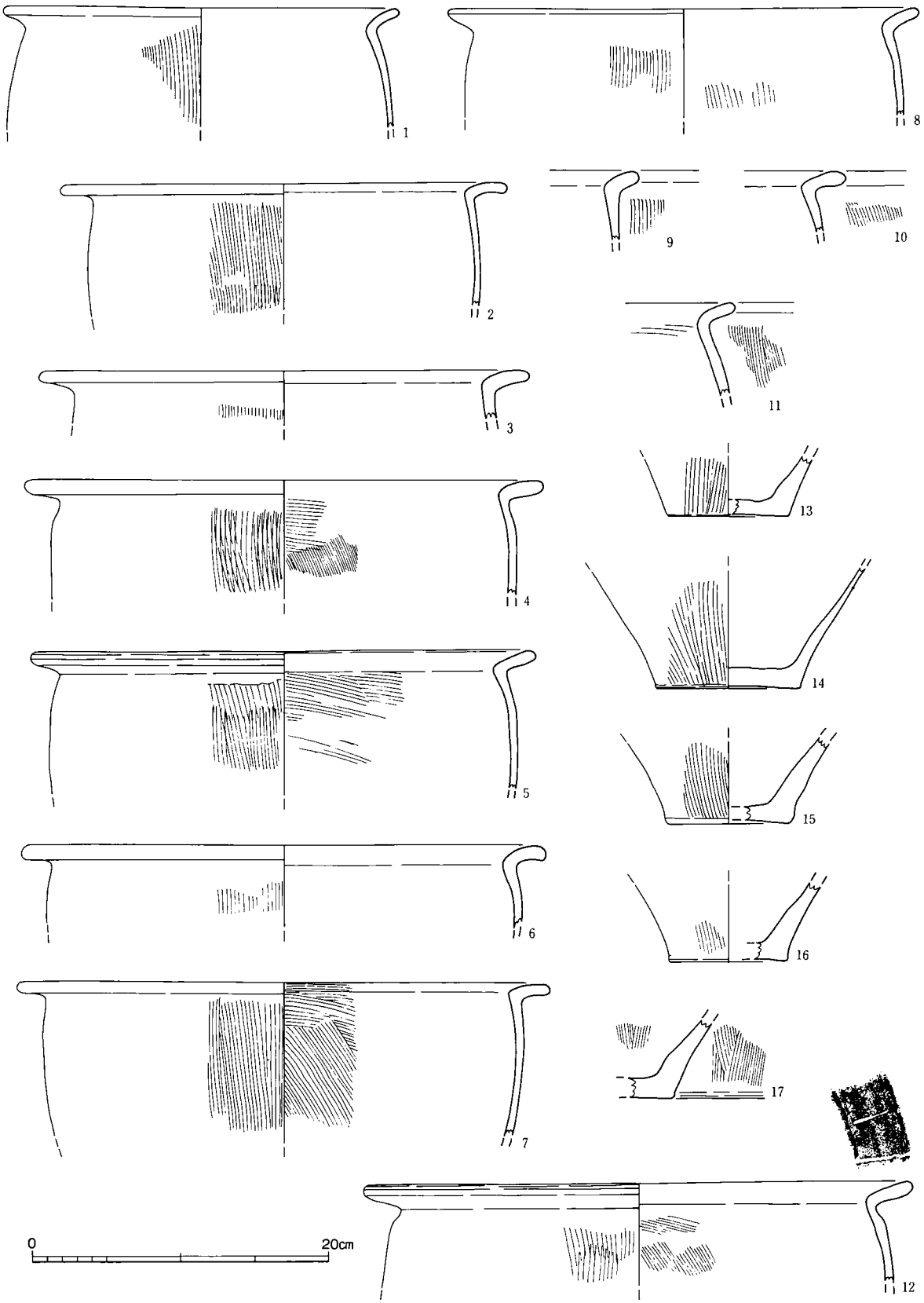
甕（23）鋤先状の口縁の甕。内外面ともに丹塗。



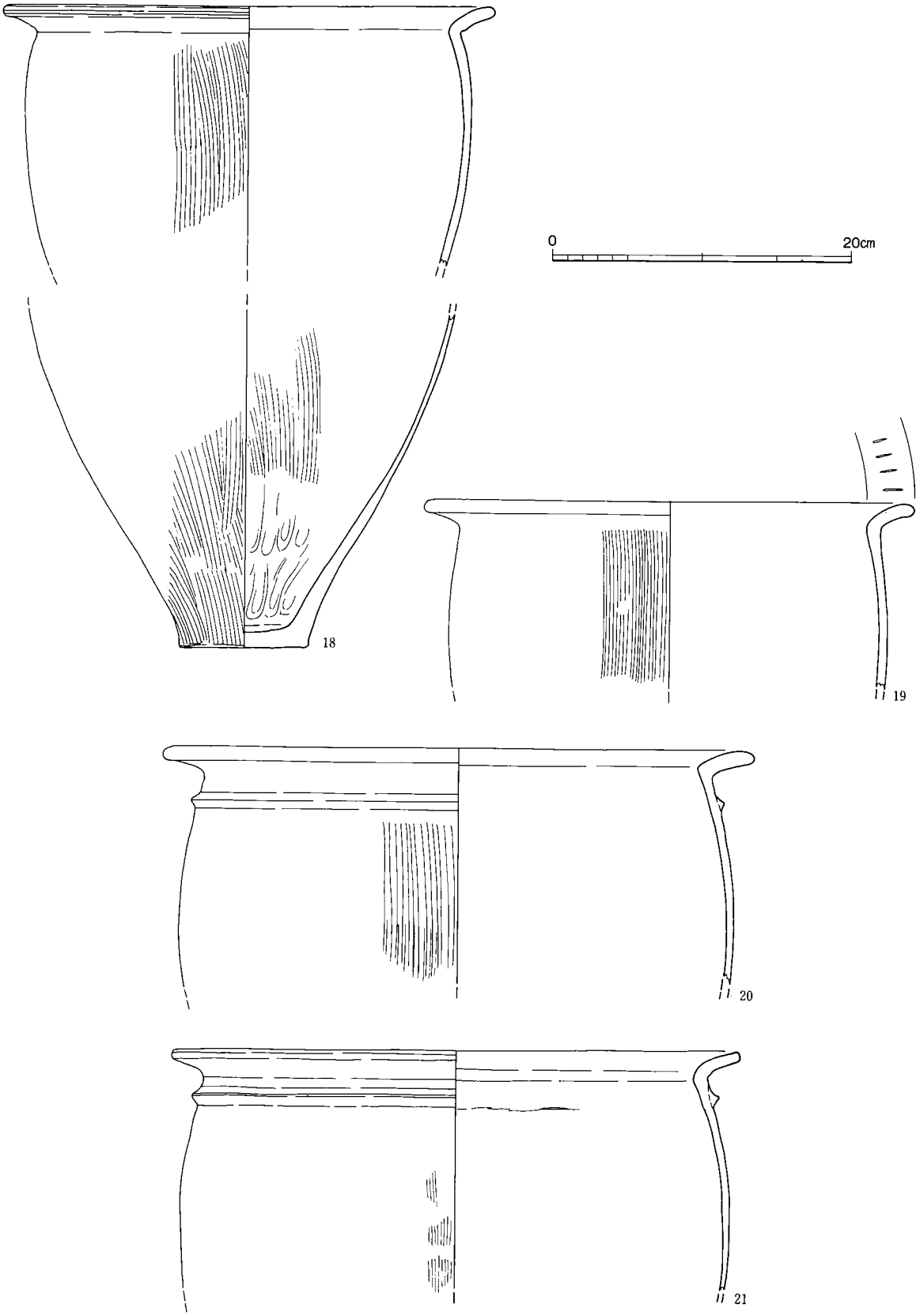
第78図　88号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第79図　106号竪穴住居跡実測図（1/60）



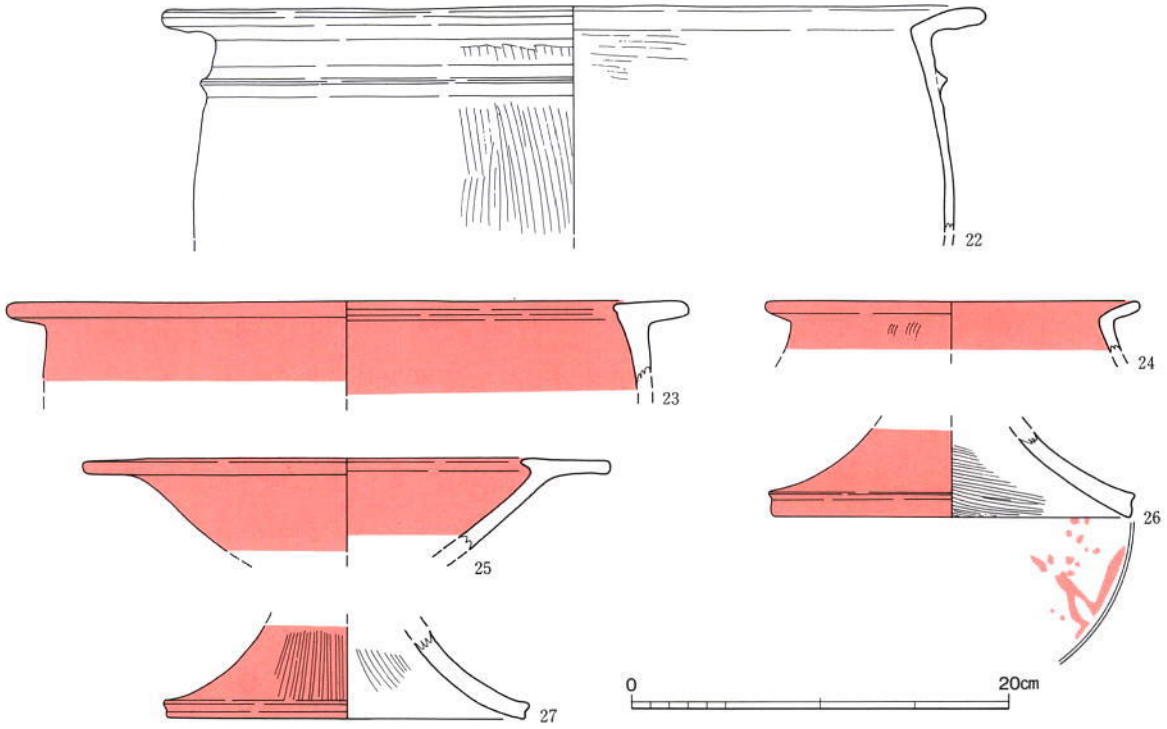
第80図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



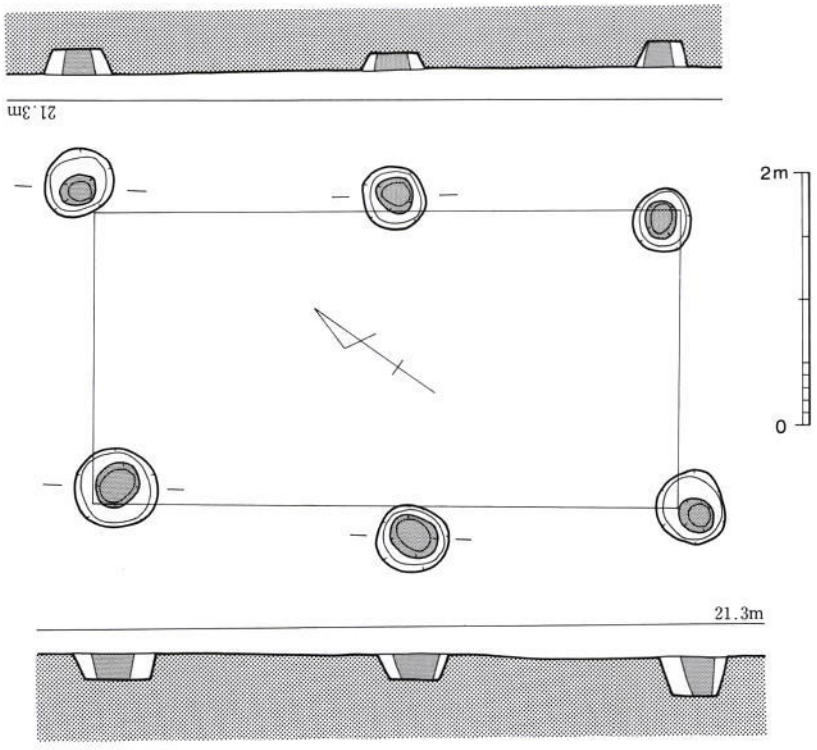
第81図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)

壺（24）無頸壺の口縁部。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデ。内外面ともに丹塗。

高坏（25～27）25は鋤先状の口縁部を持つ高坏の坏部。内外面の調整はナデで、丹塗。26・27は高坏の脚部。26の外面はナデ、内面は横方向のハケメ。外面は丹塗で、内面に垂れる。27の調整は内外面ともにハケメ。外面のみに丹塗を施す。



第82図　106号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）



第83図　6号堀立柱建物実測図（1/60）

3　掘立柱建物

6号掘立柱建物（第83図）

調査区の東端部中央付近で検出した。規模は1間×2間で、主軸方位は北から34°西に振れる。柱穴は径46.0～66.0cm、深さ14.0～33.0cmである。土器小片が出土しているが、図化できなかった。

4　土坑

2号土坑（図版18－１、第84図）

調査区中央北部の１号溝の底で検出した。東西0.8ｍ、南北0.7ｍ、深さ0.14ｍの不整円形土坑で、内部には甕片がまとまって埋没しており、周囲にも散乱していた。埋土は暗褐色粘質土で、一括埋没と思われる。

出土土器（図版44、第85図）

弥生土器

甕（１～５）１は口縁から体部中位までの破片である。「く」字型口縁で端部が外反し、口縁の下位は口縁部の強いナデのため肥厚する。内外面ともタテハケ調整し、外面は所々斜ハケメが残る。口縁部はナデで仕上げ、体部外面は二次加熱を受けて器壁が剥落している。復元口径25.8cm。２は口縁から胴部中位が残るもので緩やかに屈曲する「く」字型口縁を有する。口縁端部はやや肥厚して丸く収め、頸部は強いナデのため器壁が薄くなる。外面はタテハケ調整の後に口縁付近をナデで仕上げる。内面は摩滅が激しく僅かにハケメが観察されるが、ナデで仕上げると思われる。復元口径28.4cmを測る。３は口縁から胴部上位が残るもので、口縁は強く屈曲する「く」字状をなし、端部は肥厚して丸く収める。体部は外面に粗いタテハケ、内面にやや細かい斜のハケメが全体に観察できる。内面口縁部下位にはヨコハケが残る。口縁付近はヨコナデ調整で、復元口径33.0cmを測る。４は胴部下位から底部が残存する。外面は摩滅が激しいがタテハケが観察でき、内面と外底部はナデで仕上げる。外底部から体部外面には１ヶ所黒斑がつく。底部は屈曲部が肥厚し中央は薄く、焼成後に穿孔して甑としたと思われ、周囲が破損する。底径9.0cm、穿孔部径1.7cmを測る。５の底部片は体部外面をタテ・斜のハケ調整し、外底部を粗いナデで仕上げる。内面は体部をタテナデ、底部をヨコナデで仕上げる。底部は平底で厚みを持ち、端部はシャープである。外面は二次熱を受け炭化物が付着する。復元底径9.4cmを測る。

壺（６）壺の底部片である。内外面とも摩滅が激しいが、縦方向に工具の原体痕が見えるため工具によるナデ仕上げと思われる。外底部はナデである。また、底部には黒斑が付着している復元底径4.0cmを測る。

12号土坑（図版18－2、第84図）

調査区南西端で検出した不整楕円形の土坑である。長軸220cm、短軸145cmを測る。底面はほぼ水平であり、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は暗黄褐色微砂の単一層である。遺物は小片で図化できなかった。

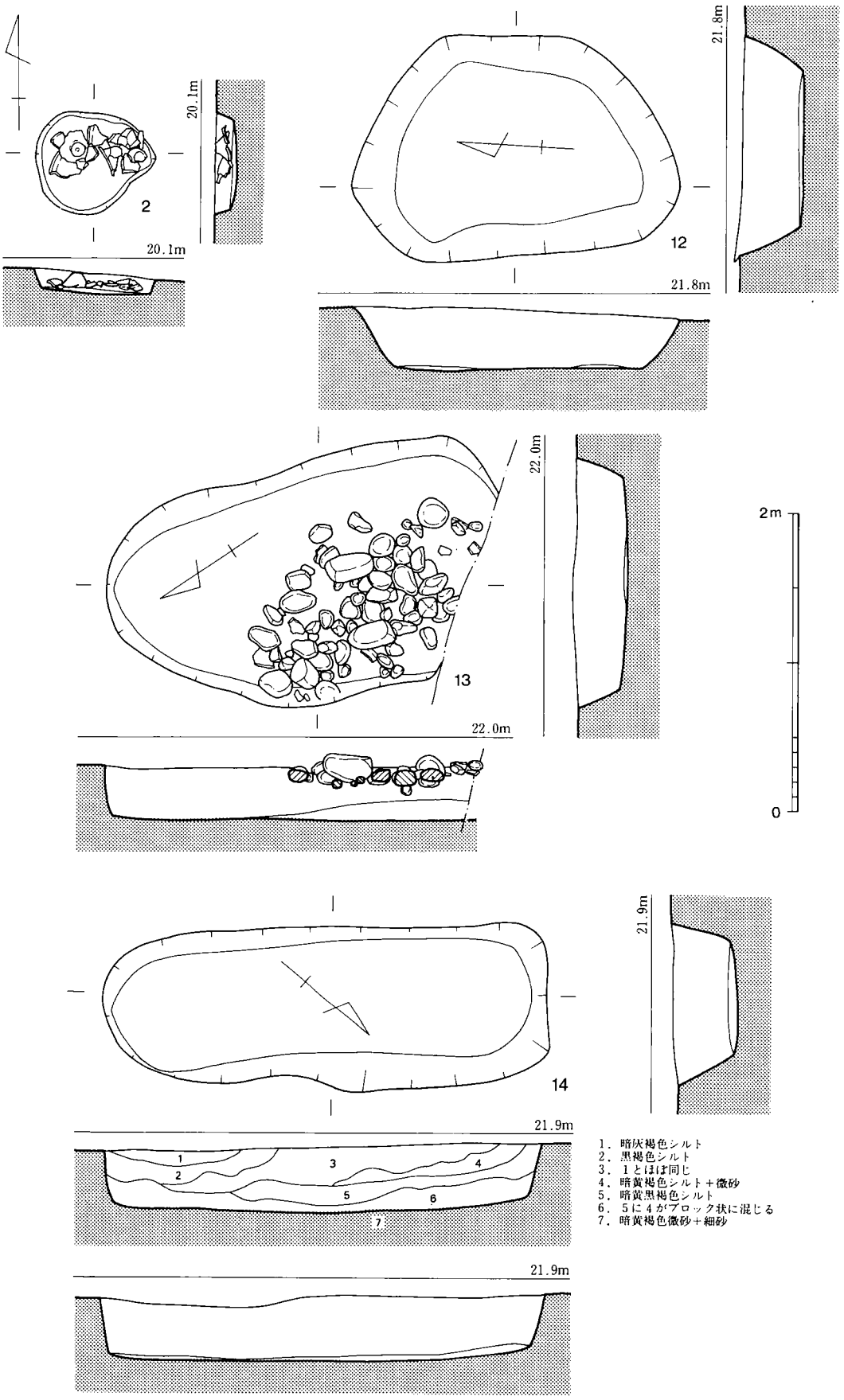
13号土坑（図版18－3、第84図）

調査区南西端で検出した楕円形の土坑で40号竪穴住居跡を切り、東端は調査区外へと続く。検出できた部分では、長軸240cm、短軸160cmを測る。底面は北東側が若干高くなるものの、それ以外はほぼ水平になる。深さは北東側で22cm、中央で35cmを測る。中央から南東側にかけて、多量の河原石を検出したが、床面からは25cm程浮いている。土坑埋没過程で投棄されたものだろう。覆土は暗黄褐色微砂の単一層である。

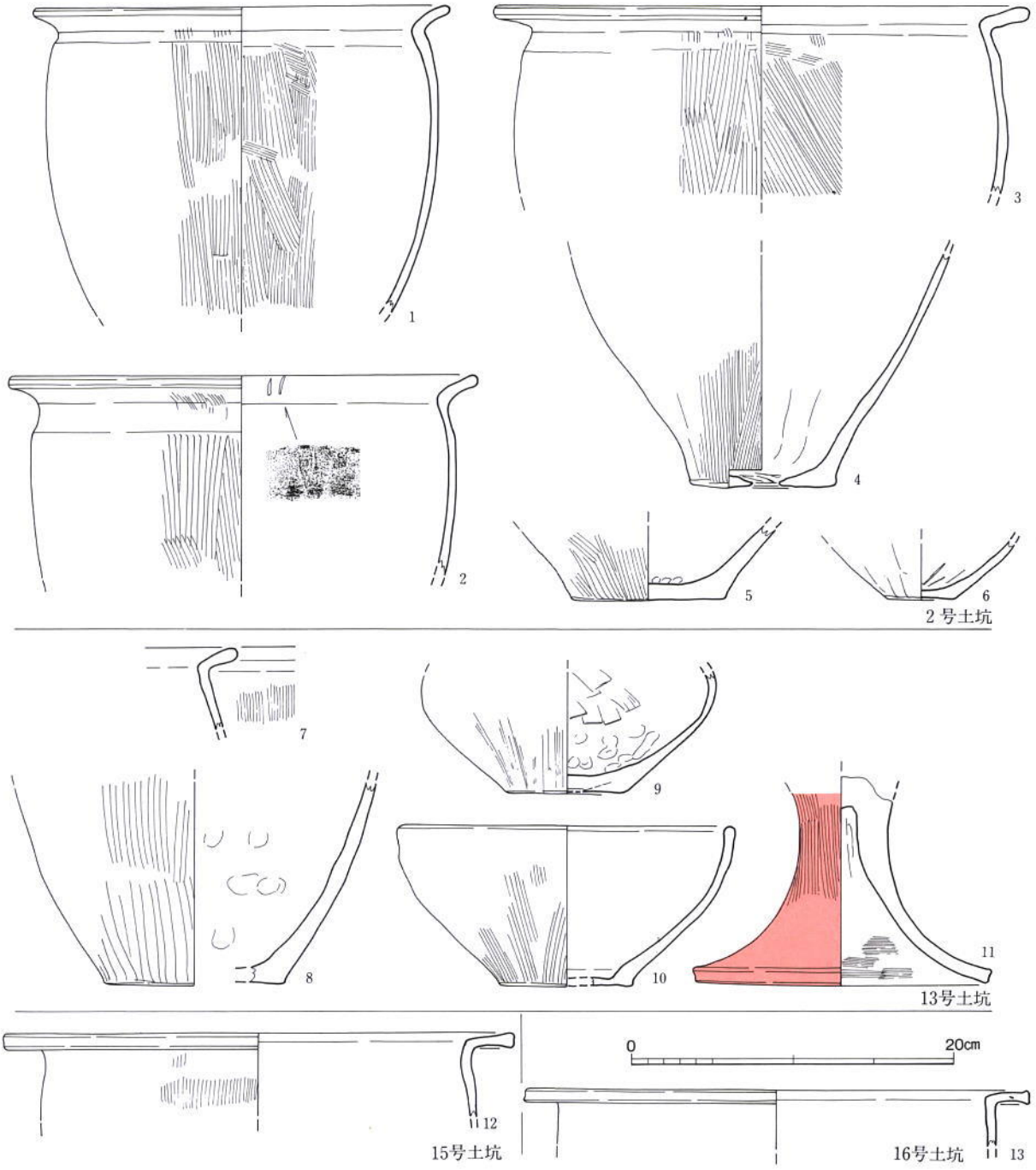
出土土器（図版44、第85図）

弥生土器

甕（７・８）７は「く」字型に近い形態の甕の口縁部である。端部は丸く仕上げられる。外面の調



第84図　2・12～14号土坑実測図（1/40）



第85図　2・13・15・16号土坑出土土器実測図（1/4）

整はハケメ、内面の調整はナデである。8は樽型の甕である。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデで、多数の指頭圧痕が残る。外底部に黒斑が付く。

壺（9）無頸壺になるとおもわれる。外面の調整はハケメ、内面の調整は下半部がナデで指頭圧痕が残り、上半部が板状の原体によるナデである。底部から体部下半にかけて黒斑が付く。

鉢（10）口縁端部を丸く仕上げる鉢である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。底部から体部にかけて黒斑が付く。

丹塗土器

高坏（11）高坏の脚部である。外面は摩滅してハケメが観察できる。内面の調整は上半部がナデ、下半部が細かいハケメである。

14号土坑（図版19－1、第84図）

調査区南西端で検出した長方形の土坑で、41号竪穴住居跡、19号土坑を切る。長軸295cm、短軸110cmを測り、主軸を南東－北西方向にとる。底面はほぼ水平で、深さ45cmを測る。覆土は黒褐色シルト系であり、弥生時代のものとは明らかに異なる。土層図を観察する限り自然堆積の様相を呈す。遺物は土器片が出土したが図化できなかった。

15号土坑（図版19－２、第85図）

調査区南西端で検出した不整楕円形の土坑で、41号竪穴住居跡を切る。長軸220cm、短軸160cm、底面はほぼ水平で、深さ55cmを測る。覆土は黄灰褐色系の細砂がほぼ水平に堆積する。遺物は少ない。

出土土器（第86図）

弥生土器

甕（12）口縁部が外に強く折れ曲がる。端部は肥厚させ、やや角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

16号土坑（図版19－３、第86図）

調査区南西端で検出した不整形の土坑で、41号竪穴住居跡を切り、17号土坑に切られる。遺存する部分では長軸260cm、短軸155cmを測る。底面は中央がやや深くなっており、深さは70cmを測る。覆土はレンズ状に堆積する。

出土土器（第85図）

弥生土器

甕（13）口縁部が外に強く折れ曲がる。端部は上方に若干つまみあげる。外面の調整はハケメの後ヨコナデ、内面の調整は摩滅により不明である。２次加熱のため、内外面赤変している。

17号土坑（図版20－１、第87図）

調査区南西端で検出した不整楕円形の土坑で、16号土坑を切る。長軸270cm、短軸155cmを測る。底面は中央付近がテラス状に高くなり、逆に西側、東側は深くなっている。深さは西側で20cm、中央で15cm、東側で25cmを測る。遺物は西端からまとまって出土しているが、細かく破砕しており投棄された状況である。

出土土器（図版45、第87図）

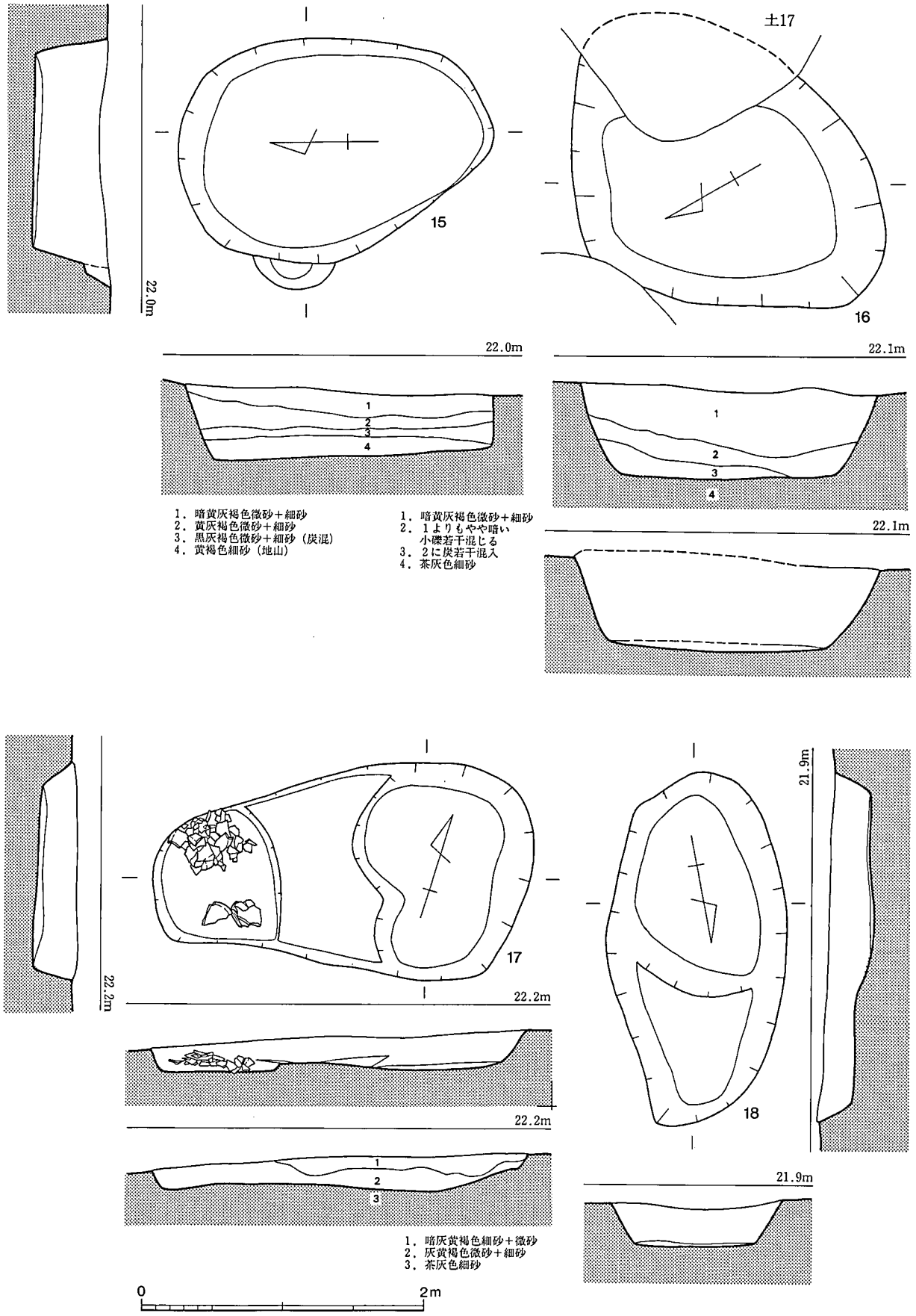
弥生土器

甕（１～４）１は「く」字型口縁で、端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。２は小型の甕である。口縁部は「く」字型口縁に近く、緩やかに屈曲する。端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。底部から口縁部にかけて黒斑が付く。また、２次加熱により赤変している部分がある。化粧土がわずかに残る。３は「く」字型口縁で、端部は上方につまみあげ気味である。外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁部がハケメ、胴部はナデである。４は「く」字型口縁に近く、緩やかに屈曲する。口縁部直下にわずかに下を向く三角突帯を貼付する。内外面ともに摩滅が進んでおり、調整は不明である。

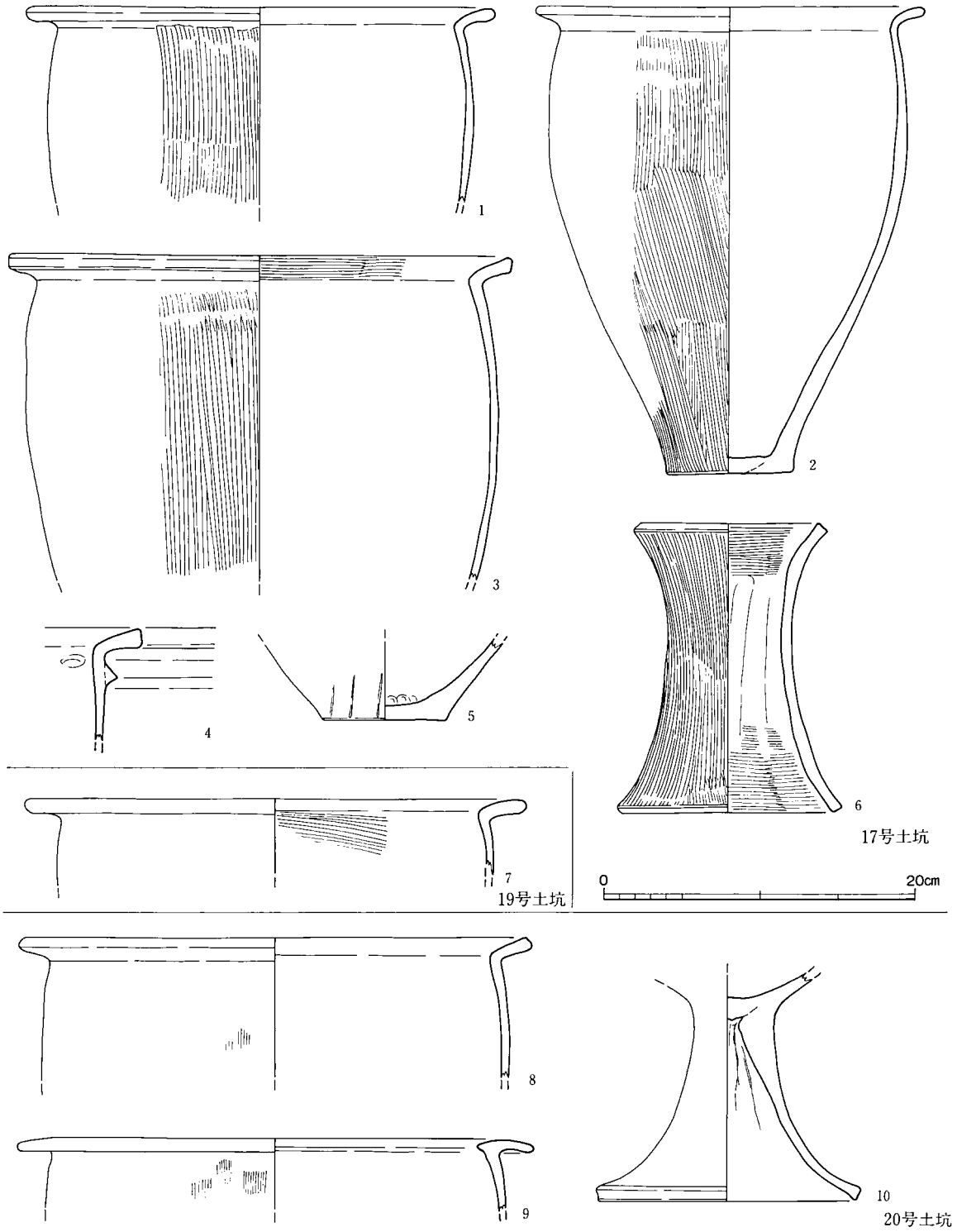
壺（５）底部の完形である。内外面ともに摩滅が進んでいるが、外面に板状工具の原体痕、内面に指頭圧痕がみとめられる。

器台（６）器台の完形である。口縁端部はつまみあげ気味に、裾端部は角張って仕上げている。外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁および裾近くがハケメ、中間部をナデ上げている。中間部外面に２ヶ所黒斑がつく。

18号土坑（図版19－１、第86図）



第86図　15～18号土坑実測図（1/40）



第87図　17・19・20号土坑出土土器実測図（1/4）

調査区南西端で検出した不整楕円形の土坑である。長軸250cm、短軸125cmを測る。底面は北側がテラス状に高くなる。深さは北側で20cm、中央で35cm、南側で30cmを測る。遺物はない。

19号土坑（第88図）

調査区南西端で検出した楕円形の土坑で、40号竪穴住居跡を切り、また19号土坑に切られ北端を失う。長軸160cm、短軸125cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは40cmを測る。

出土土器（第87図）

弥生土器

甕（７）「く」字型口縁に近く、外に強く折れ曲がる。端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁部直下がハケメ、以下はナデである。

20号土坑（図版20－２、第88図）

調査区南端で検出した不整形の土坑で、北西側を13号溝に切られ失う。遺存する部分で長軸280cm、短軸180cm、底面は北西側がテラス状に高くなっており、深さは北西で25cm、中央で35cmを測る。覆土は水平堆積に近い。

出土土器（図版44、第88図）

弥生土器

甕（８・９）「く」字型口縁に近く、わずかに内湾する。端部は若干肥厚させ、角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。９は鋤先状口縁で、端部が下垂する。外面の調整はハケメ、内面は摩滅により調整不明。

丹塗土器

高坏（10）脚部端部はつまみ出している。坏部から脚部にかけて内外面ともに摩滅が進んでおり、坏部外面はわずかに丹が残るが、内面は調整不明。脚部は内外面ともに丹塗りを施し、外面にわずかにミガキがみとめられる。内面の調整はナデである。

24号土坑（図版20－３、第88図）

調査区東端部北寄りで検出した。南北に長い不整形のプランを呈し、北側が一段深く掘り込まれる。埋土は上層が暗茶褐色砂質土で、下層が茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器が上層の暗茶褐色砂質土から出土している。

出土土器（図版45、第89図）

弥生土器

甕（１～６）１～５はいずれもわずかに内湾し、端部をつまみ上げる口縁で、胴部の張りは弱い。１は摩滅が進んでおり、内外面とも調整不明である。２～４の外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。５は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。口縁直下にやや下向きの三角突帯を貼付する。底部はやや上げ底で、体部の最下部を強いヨコナデで仕上げる。体部外面の中位に煤が付着する。６は５と同じくやや上げ底である。外面の調整はハケメで、体部最下部をヨコナデする。内面の調整はナデで、底部近くに指頭圧痕と板状工具の原体痕が残る。

25号土坑（第90図）

調査区中央付近で検出した。54号住居と重複し、これより新しい。平面プランは東西1.2ｍ、南北1.0ｍの楕円形を呈する。南側が一段深くなっており、最深部で約20cmを計る。遺物は弥生土器の甕がかなり浮いた状態で出土しているが、埋没過程で投棄されたものであろう。

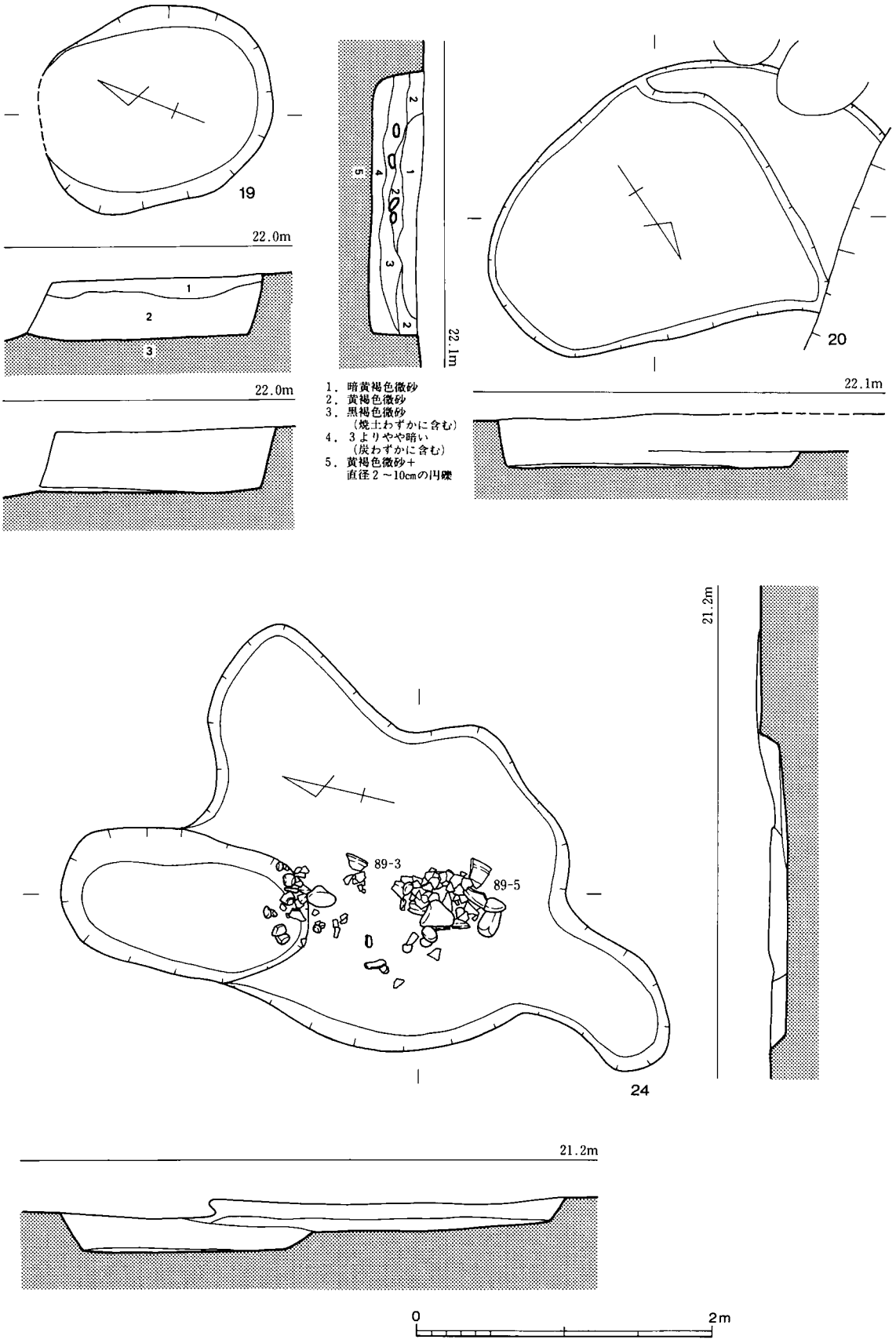
出土土器（図版45、第89図）

弥生土器

甕（７）樽型に近い胴をもつ甕である。底部、体部ともつくりは薄い。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。

26号土坑（第89図）

調査区中央付近で検出した。平面プランは東西2.0ｍ、南北2.0ｍの略円形を呈する。壁の深さは約20cmで、立ち上がりは緩やかである。中央に深さ15cmのピット１基を検出した。貯蔵穴か。遺物は弥生土器が少量と投弾が出土している。



第88図　19・20・24号土坑実測図（1/40）

出土土器（第89図）

弥生土器

甕（８・９）８は「く」字型口縁で、端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。9は甕の底部でやや上げ底である。外面の調整はハケメで、体部最下部をヨコナデで仕上げる。内面の調整はナデである。

壺（10）底部片である。外面の調整はナデか。内面の調整はナデである。

27号土坑（第90図）

調査区中央部分東側で検出した。65号住居と重複し、これより新しい。平面プランは南北3.5ｍ、東西1.6ｍの不正な楕円形を呈する。深さは最深部で約40㎝、床面は礫層が露出している。遺物は弥生土器がわずかに出土している。

出土土器（図版45、第89図）

弥生土器

甕（11・12）11は口縁を短く折り曲げ、端部は丸く仕上げる。胴部は張らないようである。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。12はやや上げ底で、底部、体部ともつくりが薄い。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕を残す。

28号土坑（図版21－１、第91図）

調査区中央付近で検出した。平面プランは東西2.3ｍ、南北2.4ｍの不整な円形を呈する。壁の深さは約40㎝で、立ち上がりはやや緩やかである。中央に深さ20㎝のピット1基を検出した。貯蔵穴か。遺物は弥生土器がかなり浮いた状態で出土しているが、埋没過程で投棄されたものであろう。

出土土器（図版45、第92図）

弥生土器

甕（１～４）１は「く」字型口縁で、端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。２・４はともに内湾気味の口縁で、端部を若干つまみあげる。２の外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。４は摩滅により調整不明。３は口縁端部をつまみあげる傾向を示すが、２・４とは異なり口縁部は外反する。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。５は平底で、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

丹塗土器

高坏（６）口縁端部に沈線様のくぼみをもつ素口縁である。体部中ほどに三角突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りを施す。摩滅して外面はハケメが観察できるが、内面にはミガキが残る。

29号土坑（図版21－２、第90図）

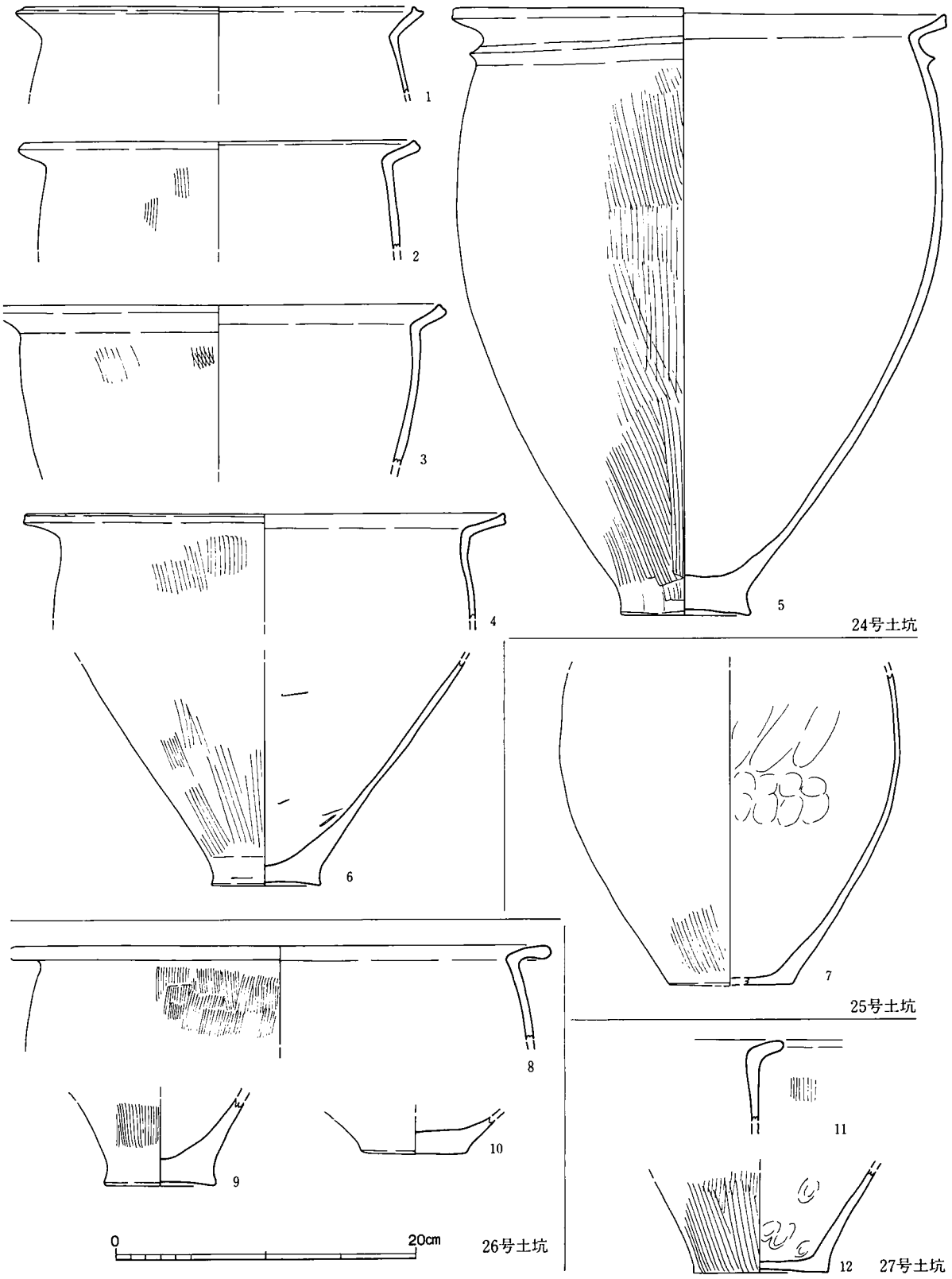
調査区東端部中央付近で検出した。南北1.5ｍ、東西1.2ｍの長方形プランを呈する。深さは最深部で14.0㎝を測る。埋土は上層が黒褐色砂質土で、下層が黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

30号土坑（図版21－３、第91図）

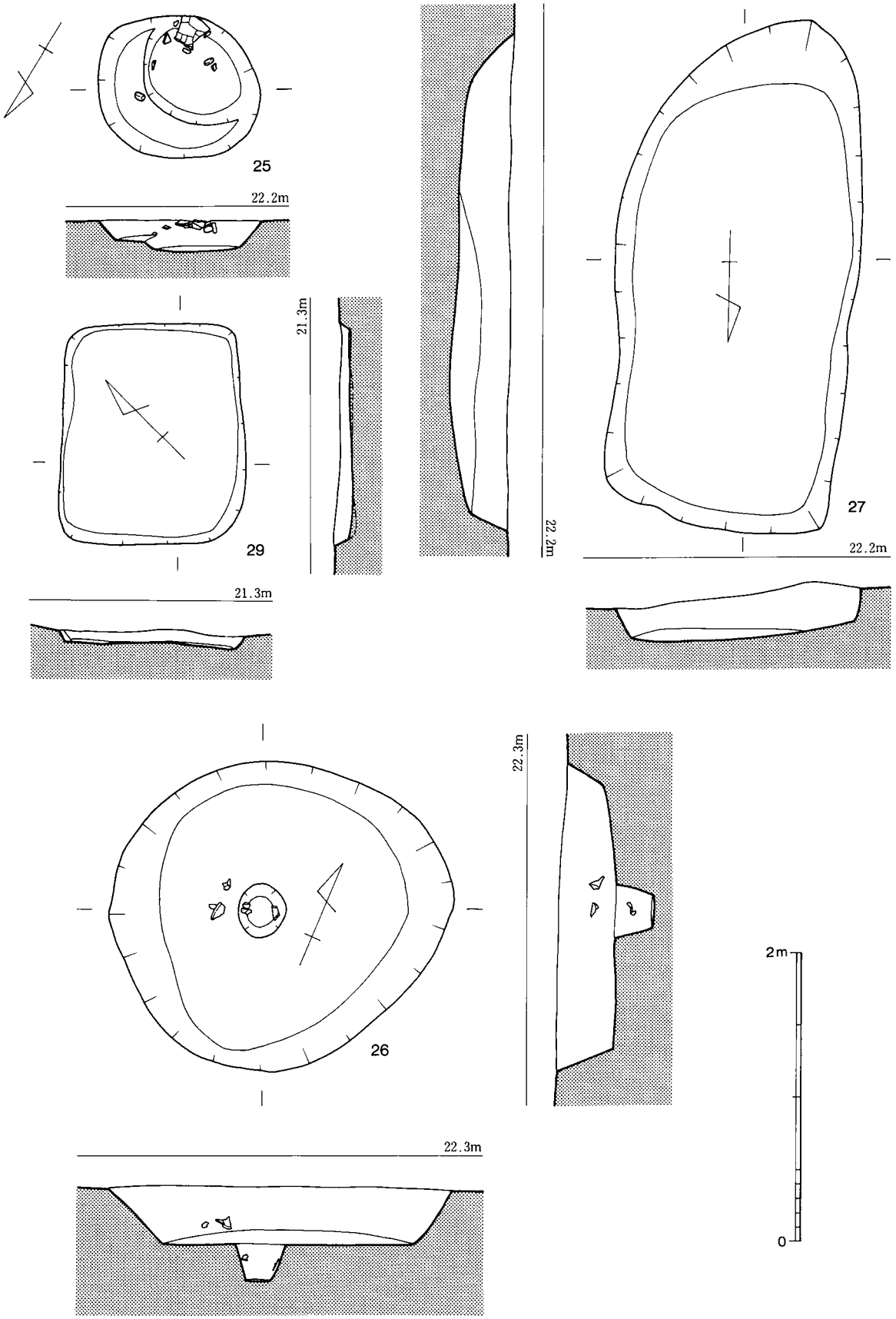
調査区東端部南よりで検出した。南北4.3ｍ、東西3.6ｍの不整な楕円形のプランを呈する。深さは、最深部で約12㎝である。遺物は最上層の暗茶褐色砂質土から多量の弥生土器が川原石と流入しているが、同様の状況は85・86号住居跡でもみられる。下層の黄褐色砂質土からは遺物は出土しなかった。河川の氾濫によって生じた土器溜とおもわれる。ほかに、土製投弾と黒曜石片が出土している。

出土土器（図版46、第93～97図）

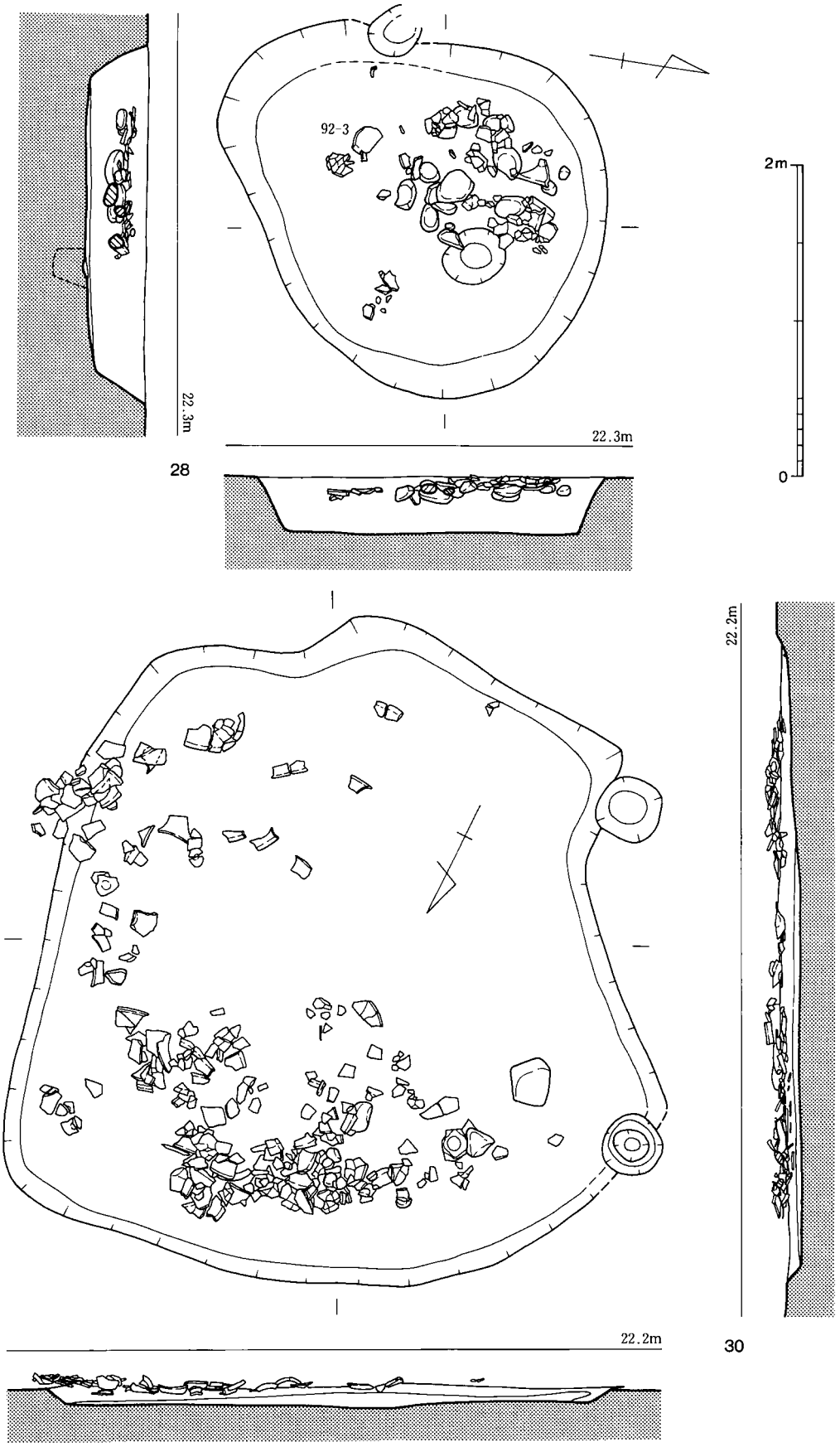
弥生土器



第89図　24～27号土坑出土土器実測図（1/4）



第90図　25～27・29号土坑実測図（1/40）



第91図　28・30号土坑実測図（1/40）

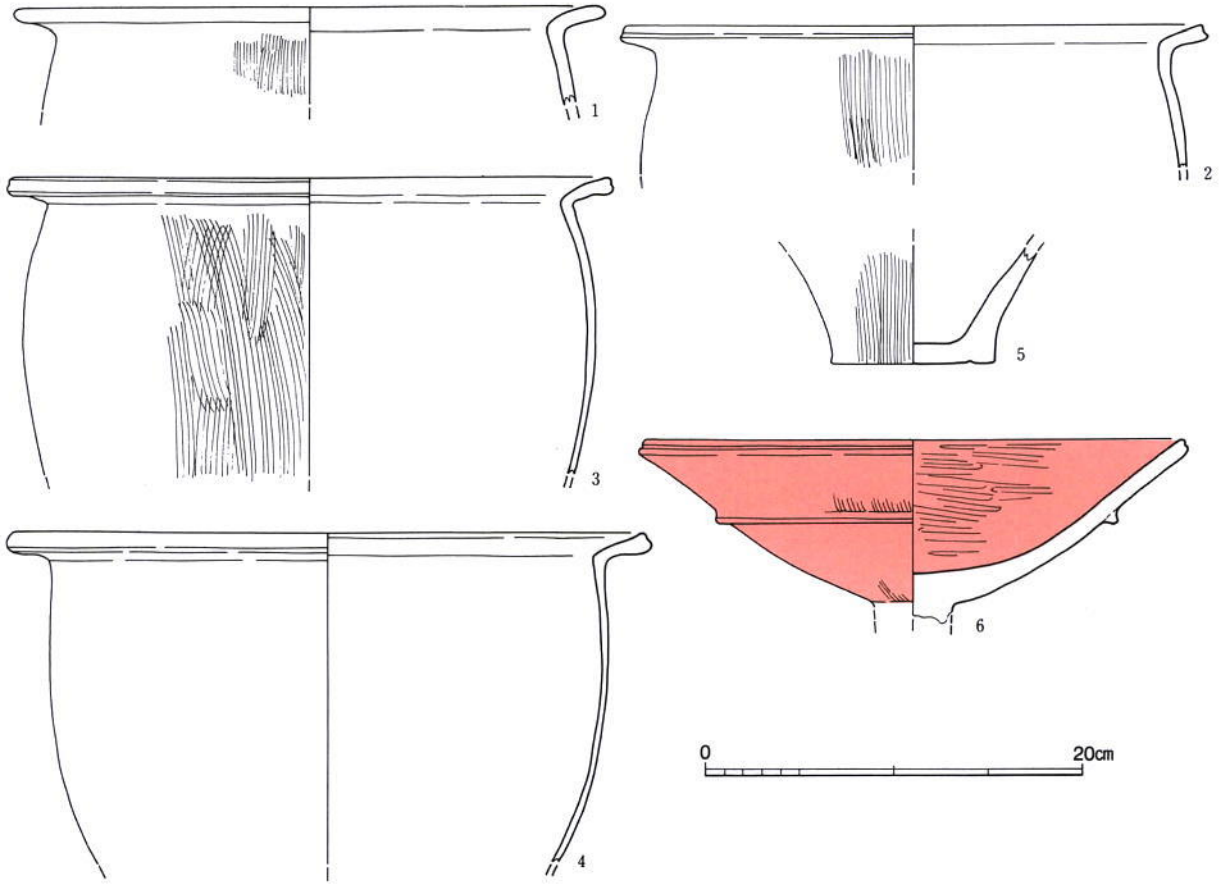
甕（1～41）1～32は「く」字型口縁ないし、それに近い形状の口縁である。1～18は端部を丸くあるいは角張って仕上げる。19～32は端部をくぼませるが、24・27は端部をつまみあげている。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。1・2・20は口縁の折れ曲がりが弱い。4は内面の口縁直下を、20は口縁部内面をハケメ調整する。5・10・14は化粧土を施す。2・11・13・16・25・26・31は2次加熱による変色がみとめられる。33･34は大型の甕である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。34は胴部上位に「M」字型突帯を貼付する。また、胴部下位は破片ごとに色調が異なるため、焼成に失敗した可能性がある。35～41は底部片である。36はやや上げ底であるが、他は平底である。38は摩滅が進んでおり、調整不明だが、他はいずれも外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。40はハケメが粗く、内面に指頭圧痕が多数残る。41は樽型の胴部をもち、底部、胴部ともに器壁は薄い。内面に指頭圧痕が残る。

鉢（42）底部が残存しないが、胴部の傾きから鉢とした。口縁は強く折れ曲がり、丸く仕上げた端部が下垂する。外面の調整はハケメ、内面の調整は摩滅により不明である。

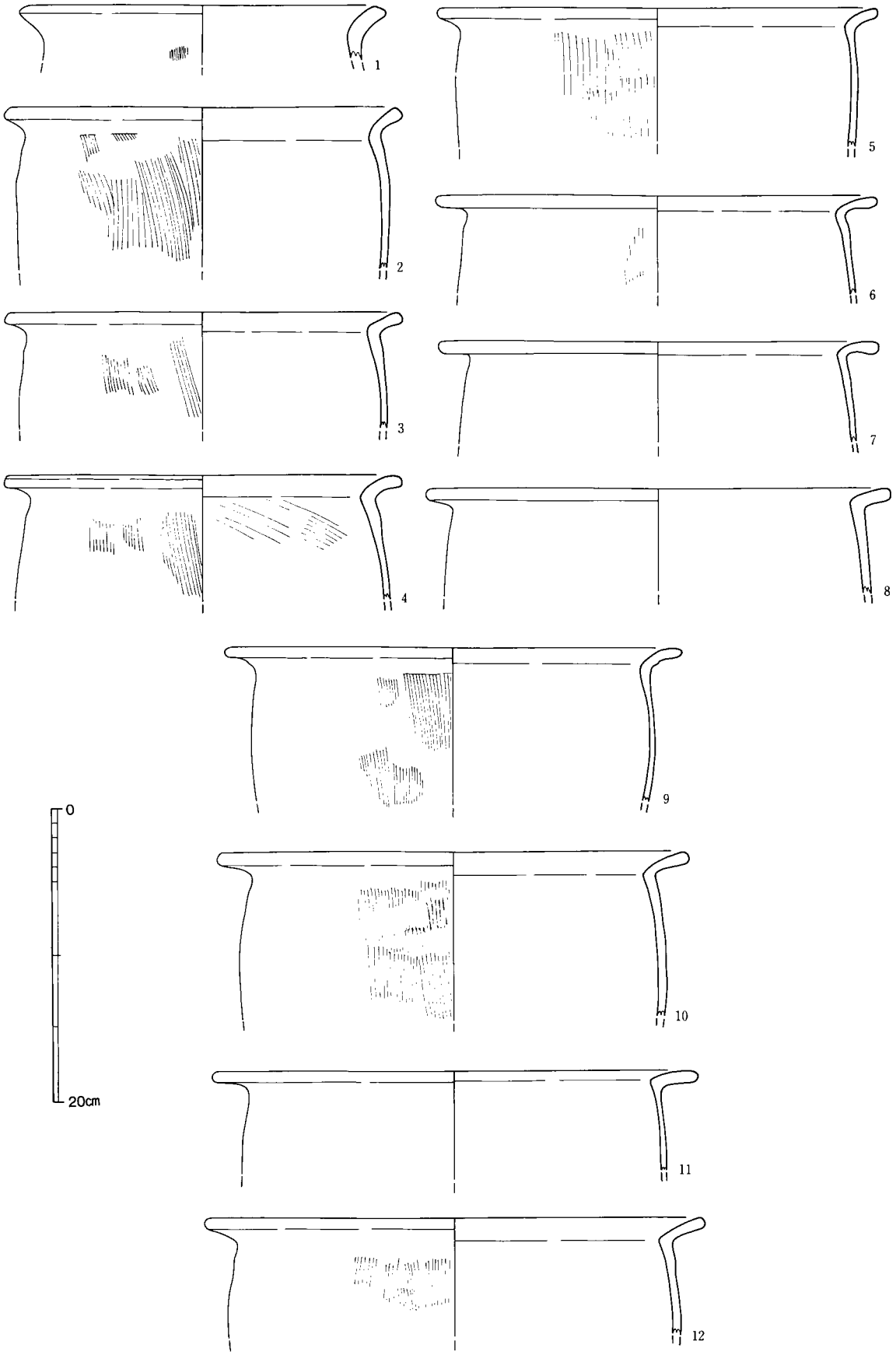
手捏ね土器（43）口縁部の小片である。内外面とも調整はナデで、外面は圧痕が残る。

丹塗土器

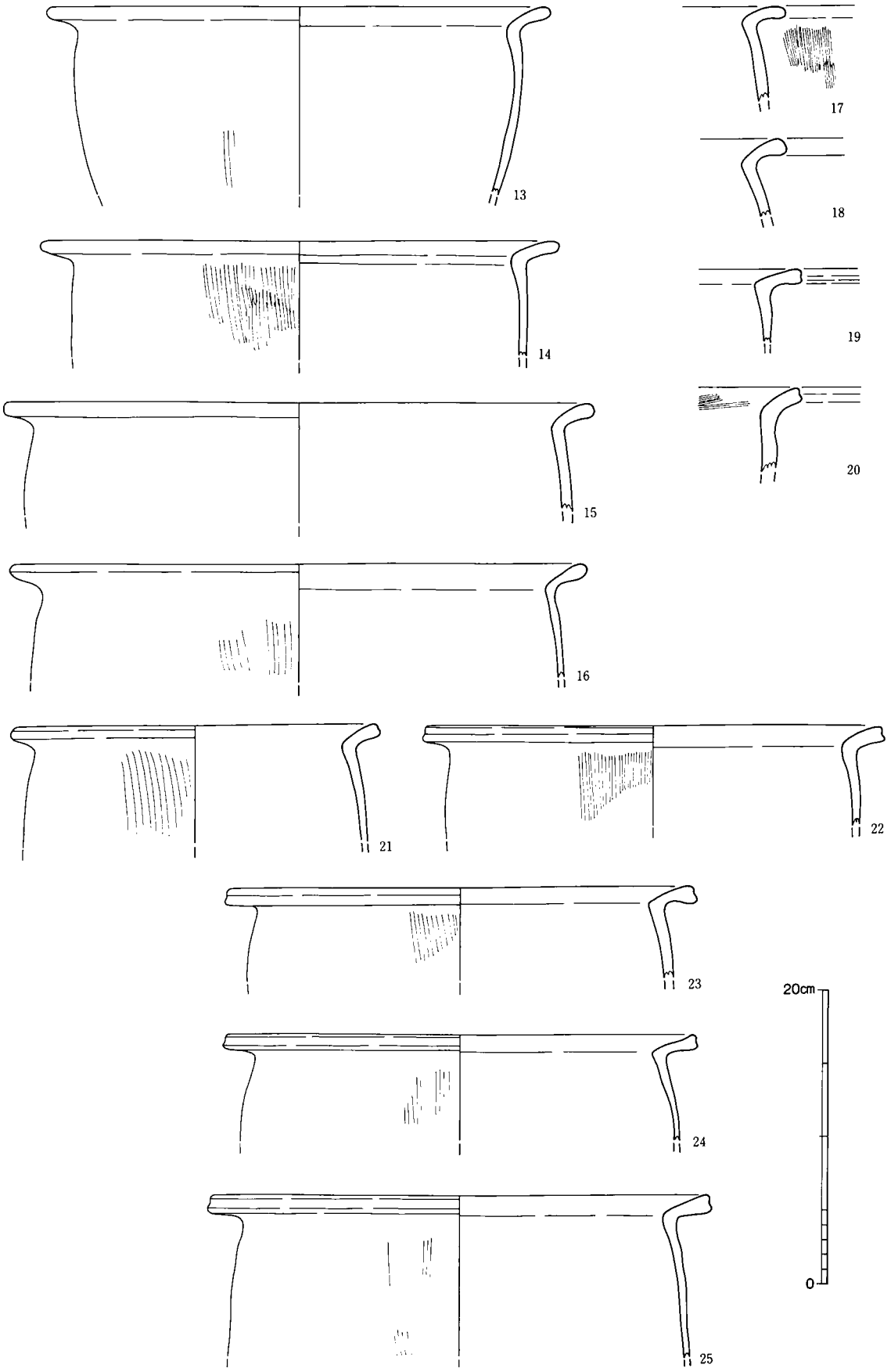
甕（44～47）いずれも口縁端部が下垂する鋤先状口縁である。44・45は口縁端部に刻み目があり、内外面とも丹塗りを施す。46は口縁下に「M」字型突帯を貼付し、外面と口縁部内面に丹塗りを施している。47は口縁下に「M」字型突帯を貼付し、内外面に丹塗りを施している。口縁部内面にはミガキがみとめられる。



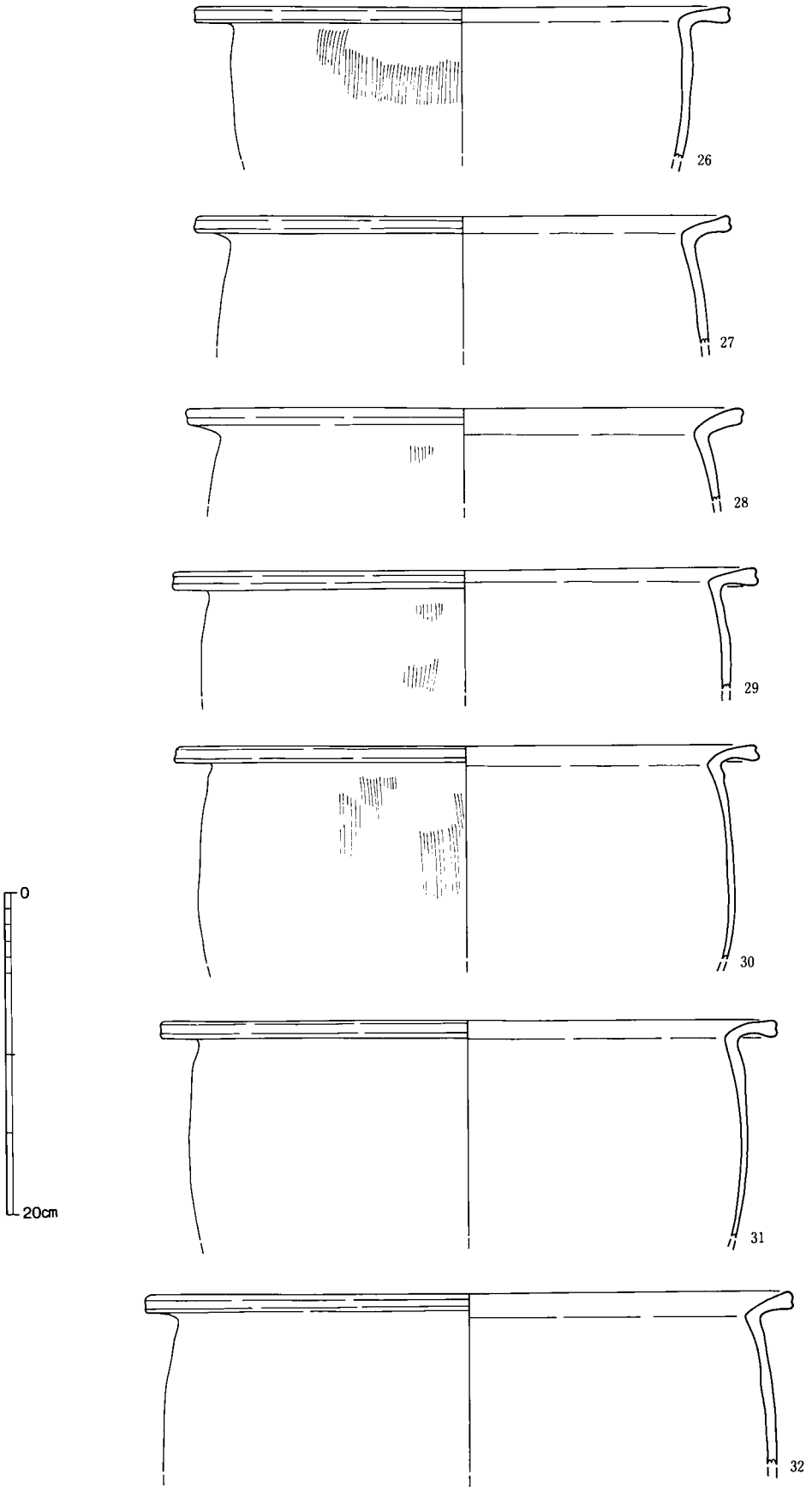
第92図　28号土坑出土土器実測図（1/4）



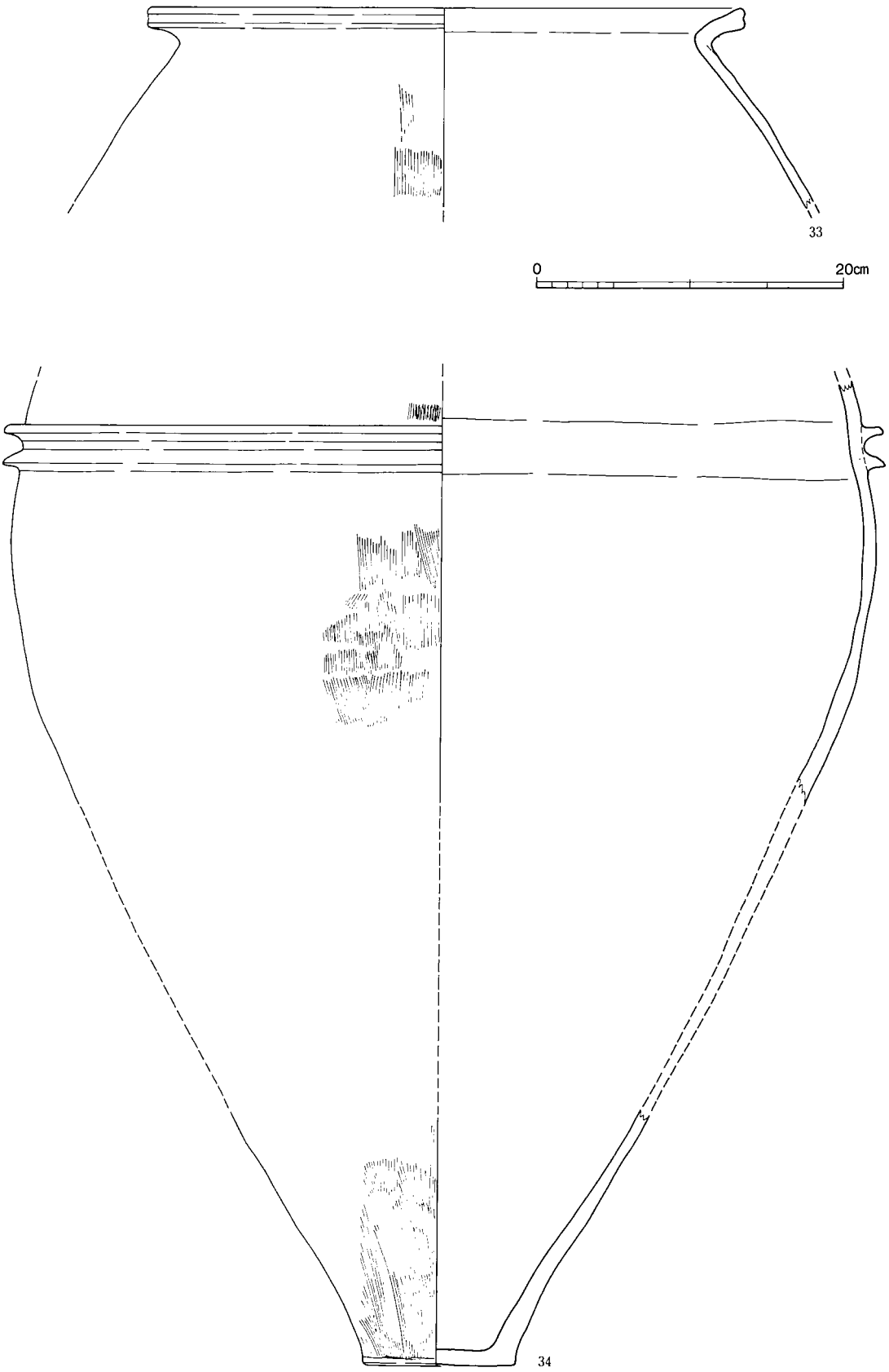
第93図　30号土坑出土土器実測図．1 (1/4)



第94図　30号土坑出土土器実測図．2 (1/4)



第95図　30号土坑出土土器実測図．3（1/4）



第96図　30号土坑出土土器実測図．4（1/4）

31号土坑（第98図）

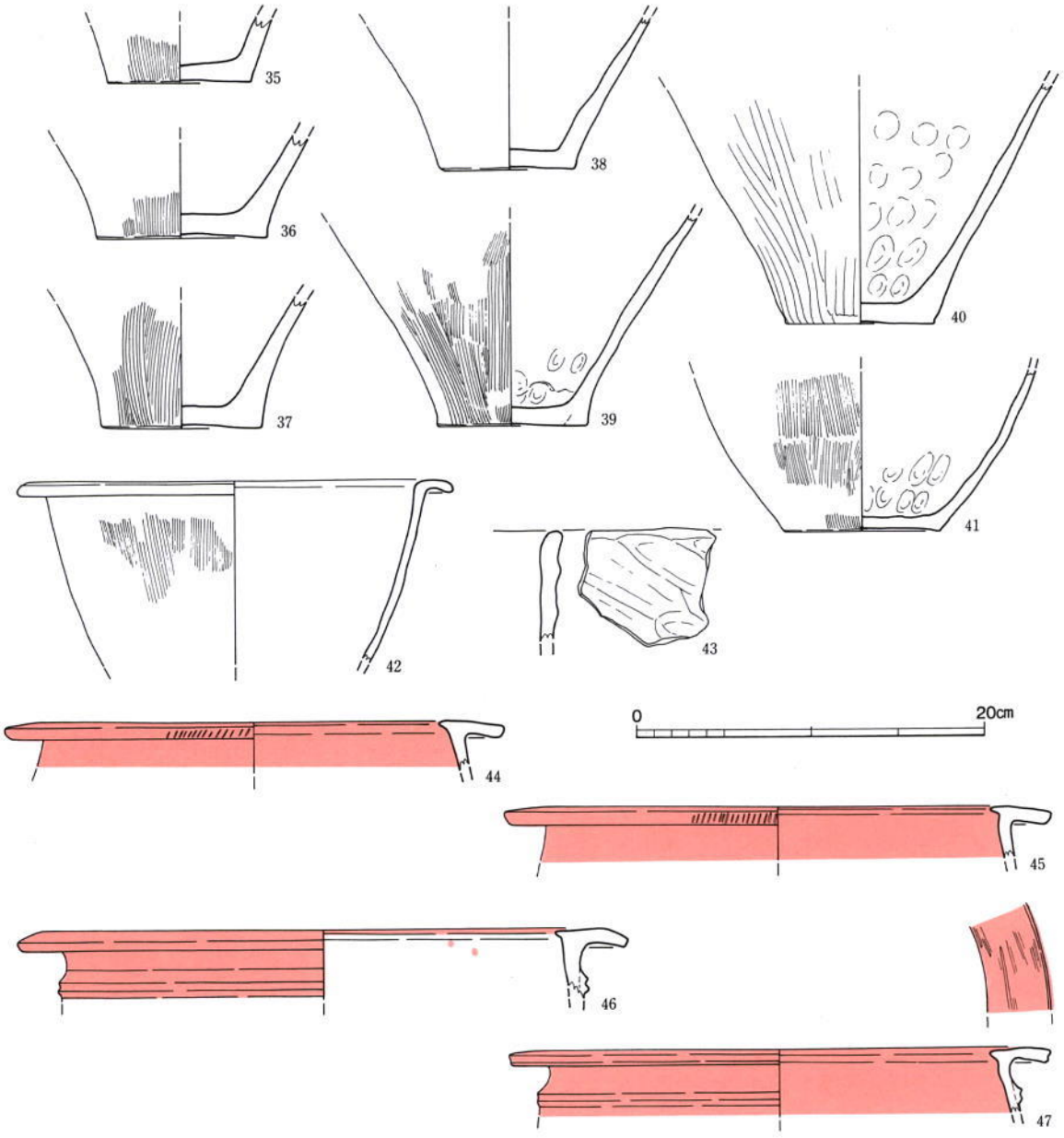
調査区中央部やや北よりで検出した50号住居、60号住居と重複し、50号住居より古く、60号住居より新しい。平面プランは南 北4.0m、東 西2.2m の隅丸の長方形を呈する。壁の深さは35cm程で、立ち上がりは急である。床面は平坦であり、西側でピット1基を検出した。弥生土器が出土している。

出土土器（第99図）

丹塗土器

器台（1）

器台の脚部片。外面の調整はナデ、内面の調整はハケメ。外面のみ丹塗りで暗文を施す。



第97図　30号土坑出土土器実測図.5（1/4）

32号土坑（図版22－1、第98図）

調査区中央付近で検出した。67号住居と重複しており、これより新しい。遺構検出時に67号住居との切り合いを間違えたために、平面プランは不明である。住居の土層観察用のベルトから別の土坑であると判断した。遺物は弥生土器の甕一個体が据えられた状態で出土している。

出土土器（図版47、第99図）

弥生土器

甕（2～4）2は口縁を強く折り曲げ、端部を丸く仕上げる。調整は内外面ともに粗いハケメである。3は底部・体部とも非常につくりが薄い。外面の調整はハケメ、内面の調整は軽いナデで、指頭圧痕が残る。外面に暗赤褐色の部分がわずかにあり、丹塗りか化粧土を施していたとおもわれる。4はほぼ完形である。口縁を強く折り曲げ、端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメで、その後口縁部から下がったところに沈線を一条めぐらせる。内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。外面には全体的に煤の付着がみられ、また、体部に黒斑が付く。

33号土坑（第98図）

調査区東端部北よりで検出した。平面プランは東西2.7m＋α、南北2.5mの方形プランを呈すると思われる。深さは約10cmである。遺構上面から炭化物がわずかに検出された。遺物は弥生土器と黒曜石片が出土している。

出土土器（第99図）

弥生土器

甕（5）口縁部の折り曲げは弱いが、屈曲部の稜ははっきりしている。端部をつまみあげ気味に仕上げる。調整は内外面ともにナデである。

34号土坑（図版22－2、第98図）

調査区東端部南よりで検出した。長径1.6mの楕円形プランを呈する。深さ6～10cmと浅く、埋土の状況は30号土坑と同様である。遺物は弥生土器が出土している。河川氾濫時に生じた土器溜りとおもわれる。

出土土器（第99図）

弥生土器

甕（6～8）6は口縁部の折り曲げが弱く端部をくぼませる。調整は内外面ともにナデ。7は「く」字型口縁に近く、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。8は大型の甕で、鋤先状の口縁部は端部をくぼませる。外面の調整はハケメ、内面の調整は摩滅のため不明。

35号土坑（図版22－3・23－1、第100図）

調査区東端部南よりで検出した。南北2.3m、東西1.3mの楕円形プランを呈する。北側はテラスとなっており、南側が一段深くなる。最深部で40cmを測る。埋土は上層が暗褐色砂質土、下層が暗灰褐色砂質土である。遺物は弥生土器が大量に出土している。

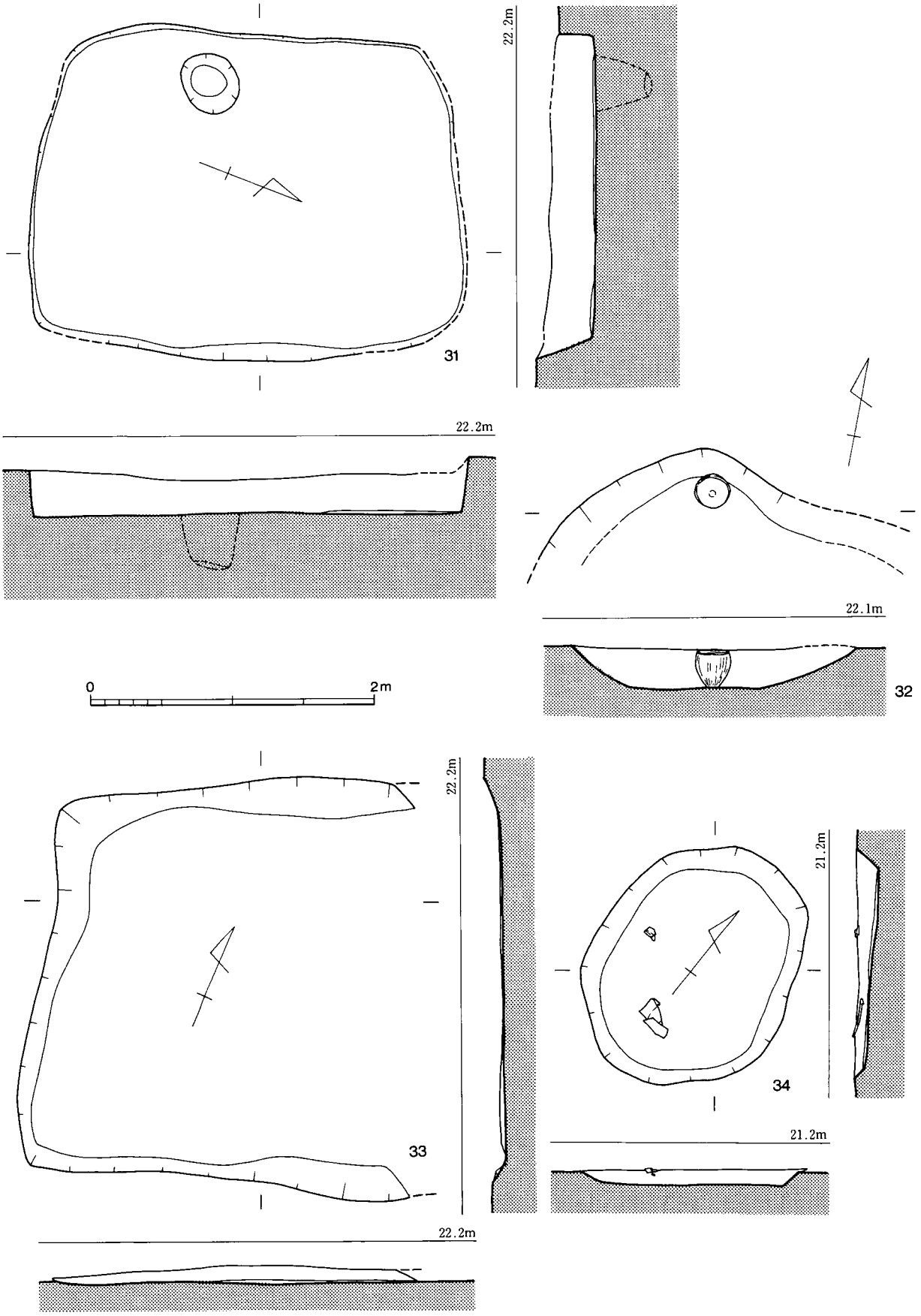
出土土器（図版47、第101・102図）

弥生土器

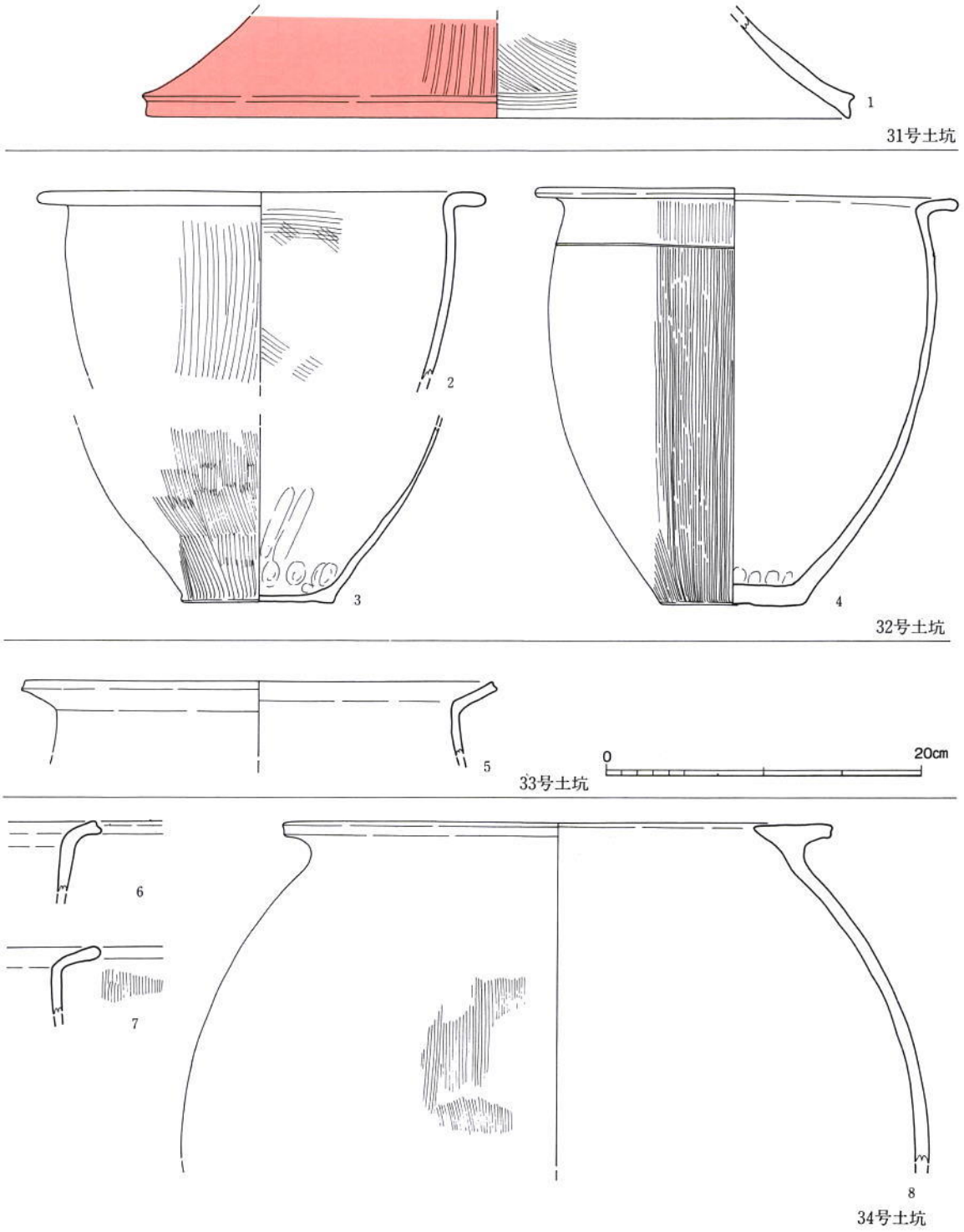
甕（1～14）1～12は「く」字型口縁ないし、それに近い形状の口縁である。1～8は端部を丸く仕上げ、9～12は端部をくぼませる。1・3は外面の調整は粗いハケメで、内面の調整は口縁部をハケメで仕上げ、以下はナデである。2・4は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。5・8は口縁の折り曲げが強く、外面の調整はハケメ、内面の調整は摩滅のため不明。鉢の可能性がある。6・7は外面の調整はハケメで、内面の調整はナデ、口縁部直下がハケメである。摩滅して判然としないが、口縁部もハケメ調整したとおもわれる。9～11は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。12は端部をつまみあげる。口縁部よりやや下がった位置に三角突帯を貼付する。13・14は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。どちらも2次加熱により赤変する。

鉢（15・16）15は小型の鉢である。端部は丸く仕上げ、調整は内外面ともにナデである。16は端部をやや角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで指頭圧痕が残る。

器台（17～20）いずれも器台である。17は口縁端部をつまみあげ気味に、裾端部は角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、口縁近くのみハケメ調整する。18も口縁端部をつまみあげ気味に仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。19の外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁および裾近くがハケメで、中間部はナデである。指頭圧痕が残る。また、口縁端部、裾端部もハケメ調整する。20は外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁および裾近くがハケメ、中間部はナデである。



第98図　31～34号土坑実測図（1/40）



第99図　31～34号土坑出土土器実測図（1/4）

36号土坑（図版23－２、第100図）

調査区東端部南よりで検出した。18号溝と重複し、これより古い。平面プランは南北3.3m、東西1.9mの不整形である。埋土は上層が茶褐色砂質土、下層が暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器が上層から出土している。

出土土器（図版48、第103図）

弥生土器

甕（１～２）１はやや上げ底の底部である。外面の調整はハケメで、体部最下部をヨコナデする。

内面の調整はナデである。２は摩滅が著しく、内面に指頭圧痕が残るのみで調整は不明である。外面が２次加熱により赤変する。

丹塗土器

甕（３）鋤先状口縁で、端部はくぼませる。口縁からやや下がった位置と、体部中央に「M」字型突帯を貼付する。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。外面と口縁平坦部に丹塗りを施し、体部外面の下位にミガキが残る。

37号土坑（図版23－３、第100図）

調査区東端部南よりで検出した。平面プランは東西が残存部分で4.3m、南北2.7mの不整な三角形を呈する。攪乱により西端を失っている。埋土は上層が暗褐色砂質土、下層が茶褐色砂質土で、この２層間、中央付近に炭化物を含む黒褐色砂質土が堆積していた。弥生土器が上層から出土している。

出土土器（図版48、第103図）

弥生土器

甕（４～11）４～９はいずれも「く」字型口縁に近く、口縁端部を丸く仕上げる。７が摩滅のため調整不明だが、ほかは外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。10・11は底部片で、10の外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。11は外面の調整はハケメで、体部最下部をヨコナデで仕上げ、内面の調整はナデである。

鉢（12）口縁は端部を丸く仕上げ、やや下垂する。摩滅により調整は不明である。

丹塗土器

高坏（13）鋤先状口縁だが、端部がややはね上がる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。内外面ともに丹塗りを施す。

38号土坑（図版24－１、第104図）

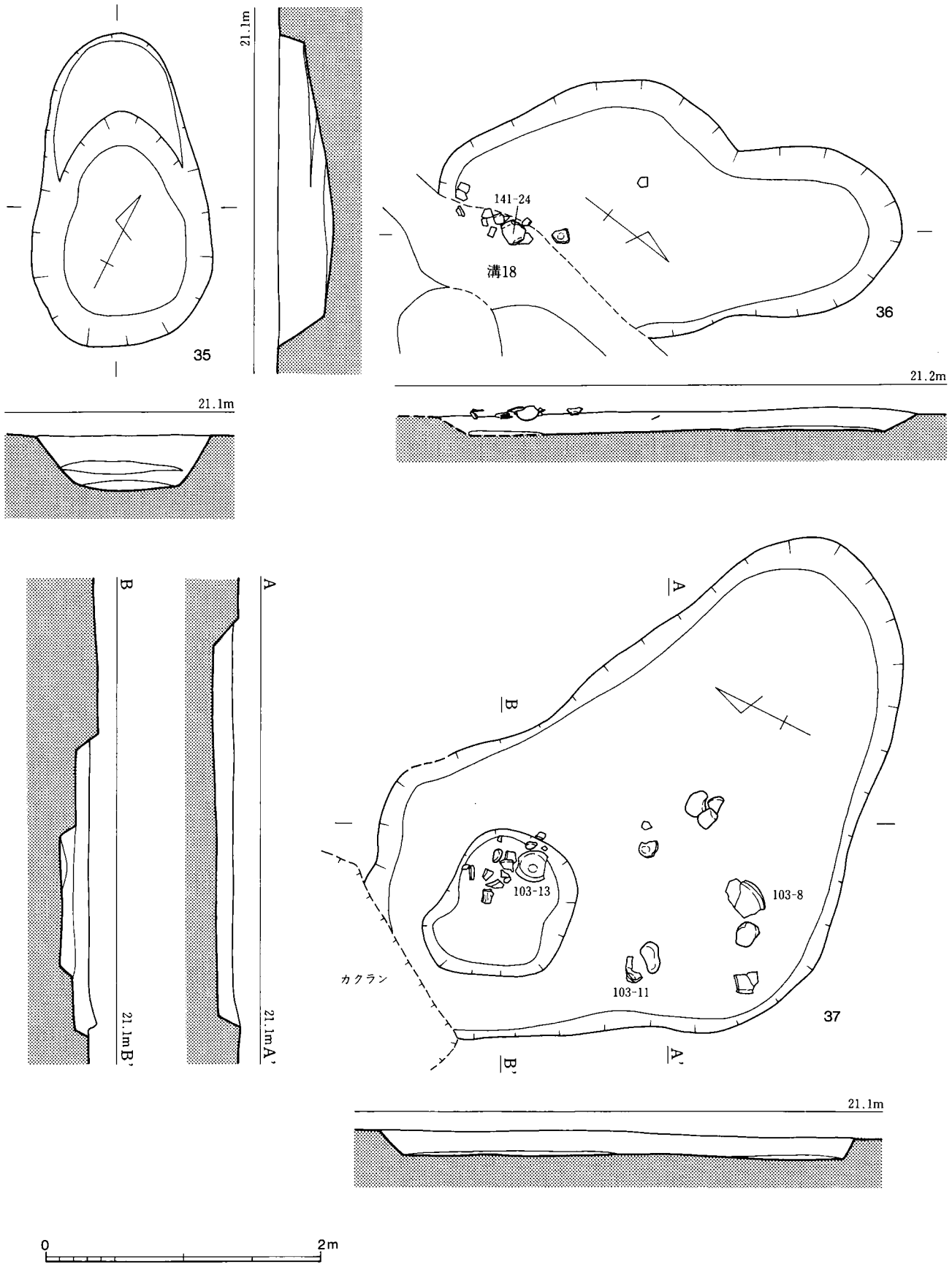
調査区東端部南よりで検出した。18号溝と重複し、これより古い。長軸5.0m、短軸2.7mの不整形のプランを呈する。深さは最深部で約40センチを測る。埋土は上層から暗茶褐色粘質土、暗茶褐色砂質土、黒褐色砂質土、粗砂まじりの灰褐色砂質土がレンズ状に堆積していた。遺物は弥生土器が最上層から出土しており、埋没過程で投棄されたものとおもわれる。

出土土器（図版48、第105・106図）

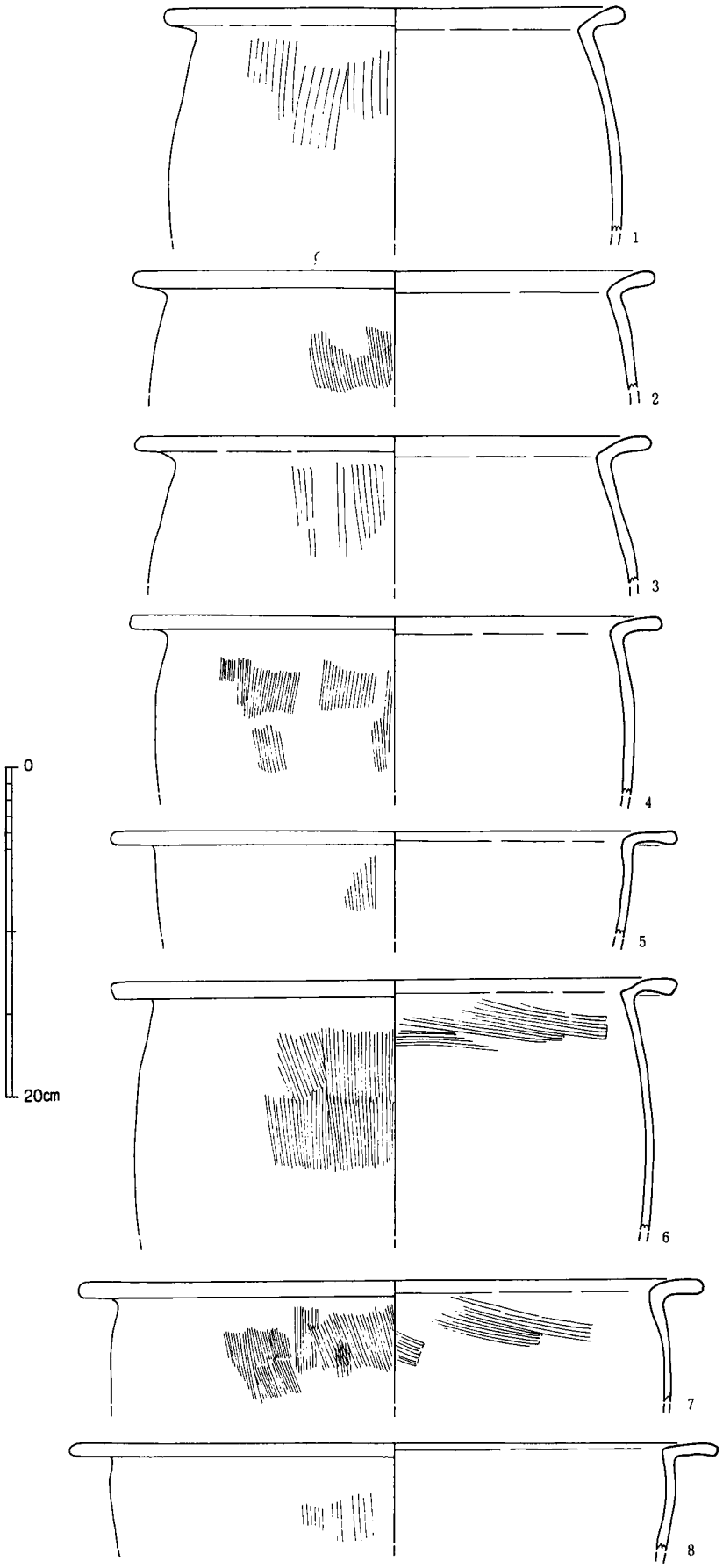
弥生土器

甕（１～13）１～４は「く」字型口縁に近い形状で、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。２・４は内面口縁部直下をハケメ調整する。また、２は化粧土を施す。５は口縁部を強く折り曲げ、端部をつまみあげたように仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。６も口縁部を強く折り曲げるが、端部はくぼませる。摩滅により、調整は不明である。７は端部をわずかにくぼませる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。８は口縁部の折り曲げは弱く、端部をつまみあげる。調整は内外面ともにナデである。９～13は底部で、いずれも外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。11がやや上げ底で、内面にコゲツキが残る。13は内底部を一定方向にナデ調整したため、波板状に跡が残る。

鉢（14・15）14は小型で、端部を尖り気味に仕上げる。底部と体部の境は丸みを帯びる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。体部内面に粘土塊が貼り付けられているが、ちょうどその部分で器体が剝離している。乾燥時に生じたひび割れを補修したものか。15は端部を角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はハケメ後ナデである。外面に丹ないし化粧土を施



第100図　35～37号土坑実測図（1/40）



第101図　35号土坑出土土器実測図．1（1/4）

したとおもわれる。

支脚（16）器壁が厚い。外面はナデ調整だが凹凸が多く、内面は穿孔しただけで調整していない。

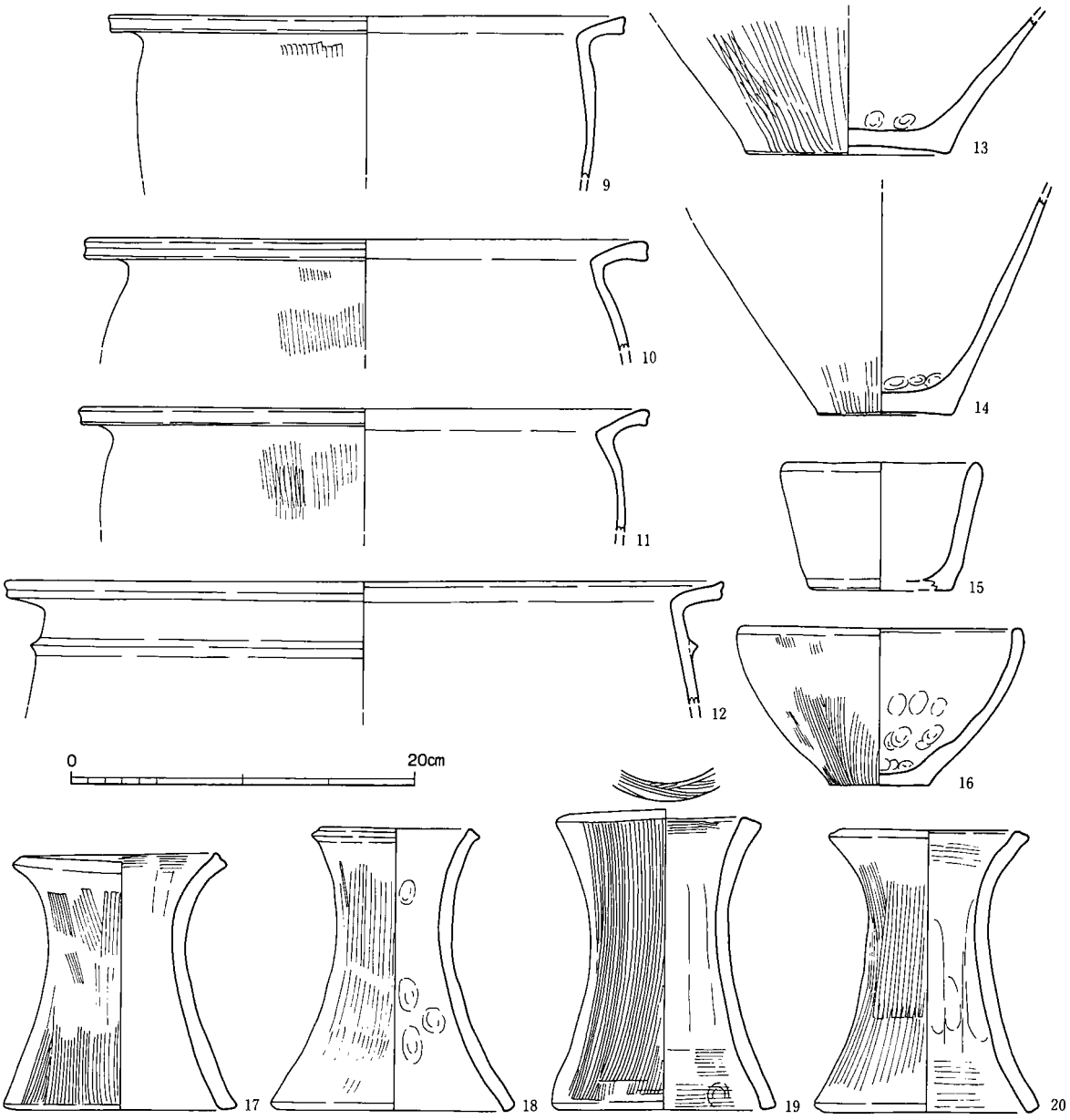
丹塗土器

壺（17）無頸壺である。調整は内外面ともにナデで、外面および口縁部内面に丹塗りを施す。

高坏（18）鋤先状口縁で、端部はわずかにはね上がる。体部中央よりやや上に三角突帯を貼付する。外面の調整はハケメで、内外面丹塗り。内面にはミガキが残り、平坦部には放射状に暗文を施す。

39号土坑（図版24－2、第104図）

調査区東北部分で検出した。13号溝と重複しこれより古い。平面プランは南北2.6m＋α、東西1.8mの長方形プランを呈する。南北にテラス部分があり、中央が一段深く掘り込まれ、深さ40センチを測る。埋土は上層が茶褐色砂質土、下層が暗茶褐色砂質土で、最上面に多量の川原石が流れ込んでいた。遺物は弥生土器が出土している。



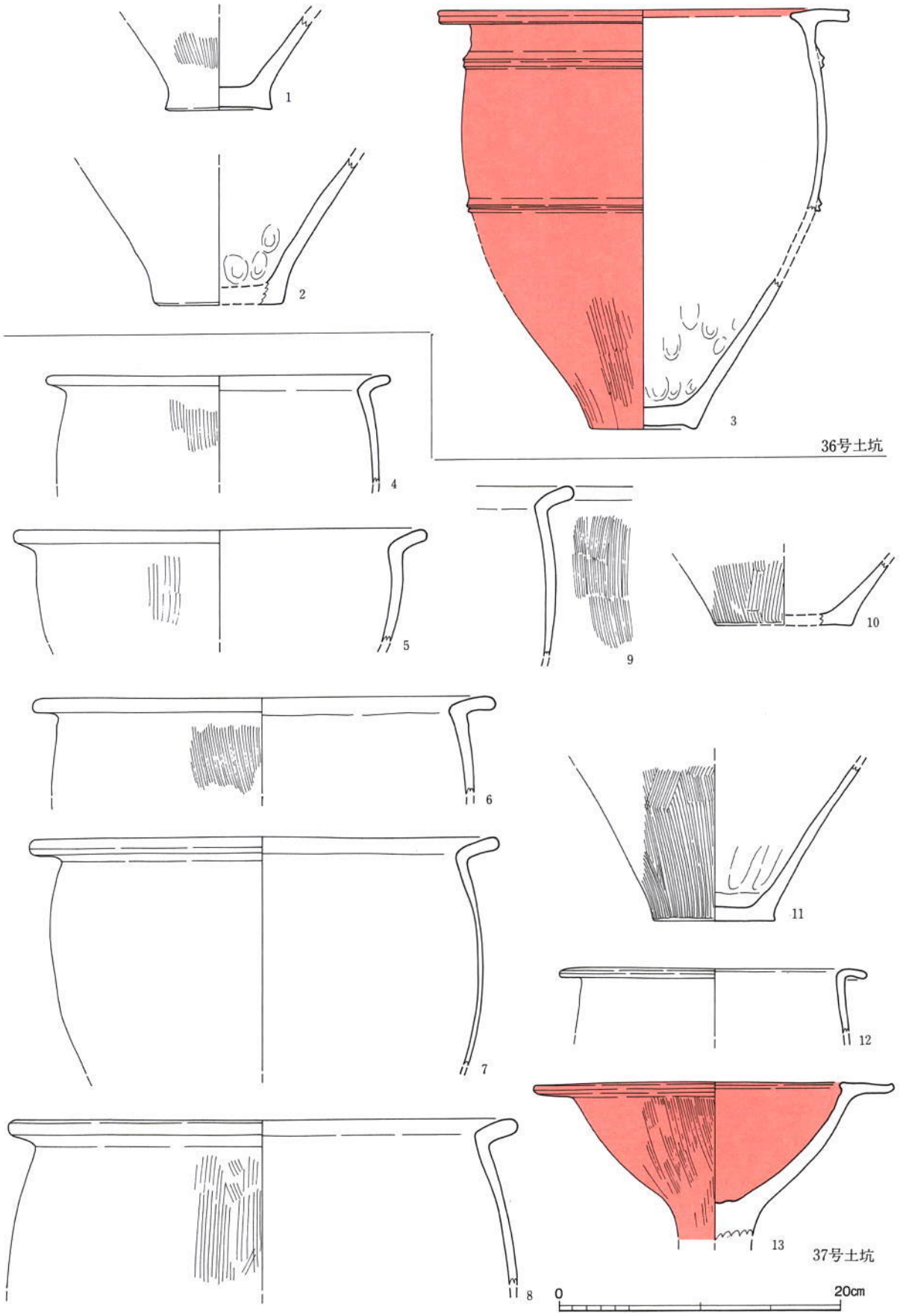
第102図　35号土坑出土土器実測図. 2 (1/4)

出土土器（図版49、第107図）

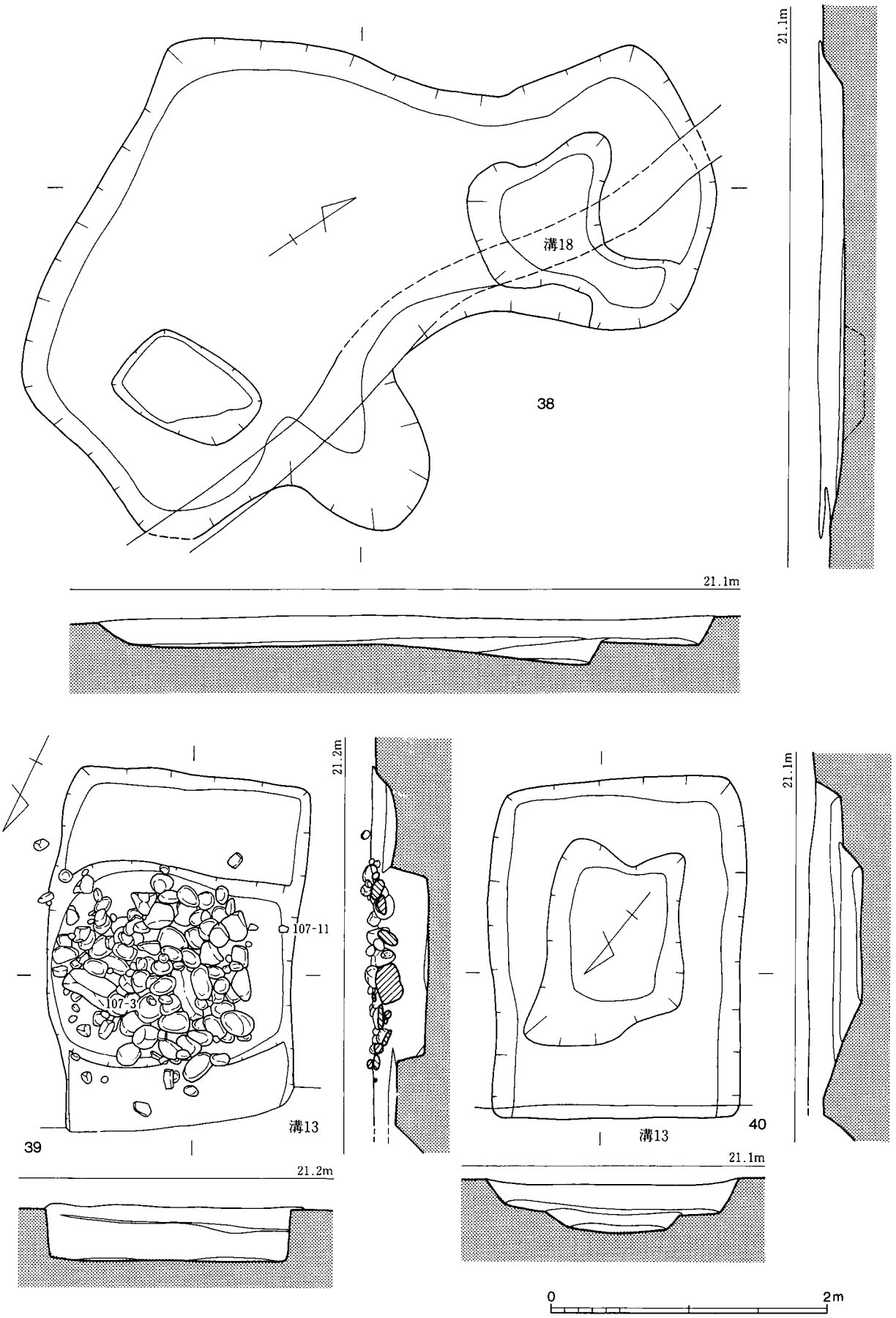
弥生土器

甕（1～9）1は小型の甕で、口縁部の折り曲げが弱く、端部を角張って仕上げる。体部は張らない。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデである。2・3・5は口縁端部を丸く仕上げる。調整は、2が内外面ともにナデで、3は摩滅により調整不明である。5は内面口縁部直下をハケメ調整する。4も端部を丸く仕上げるが、内面屈曲部の稜がはっきりしている。外面の調整はハケメで、内面の調整はナデか。6は端部をわずかにくぼませる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。7は端部を沈線状にくぼませる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。8はやや上げ底の底部で、調整は内外面ともにナデであるが、欠失する体部外面はハケメ調整とおもわれる。9は樽型の甕の底部である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

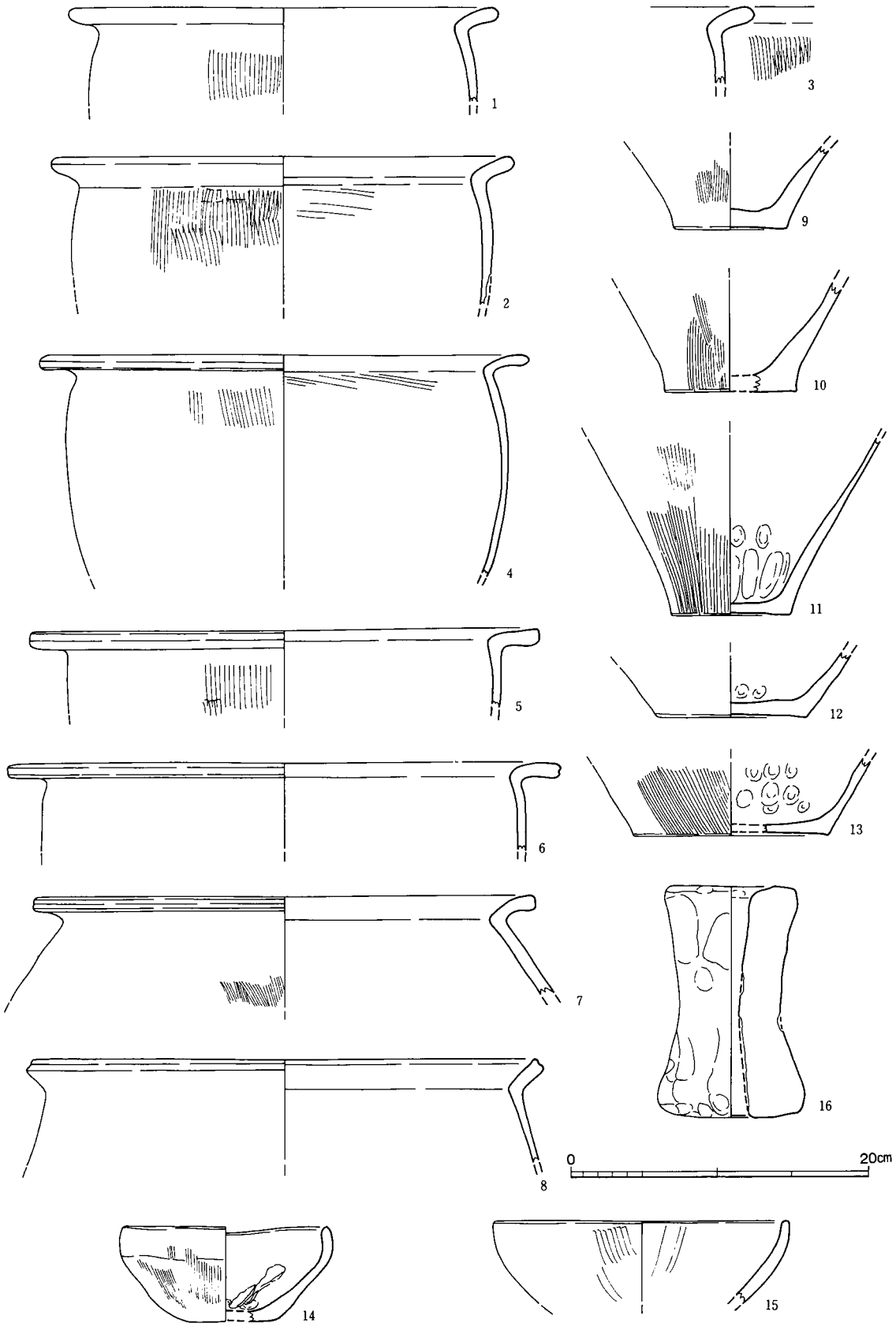
壺（10）器台の裾部の可能性もあるが、ここでは広口壺とする。口縁端部はくぼませる。摩滅によ



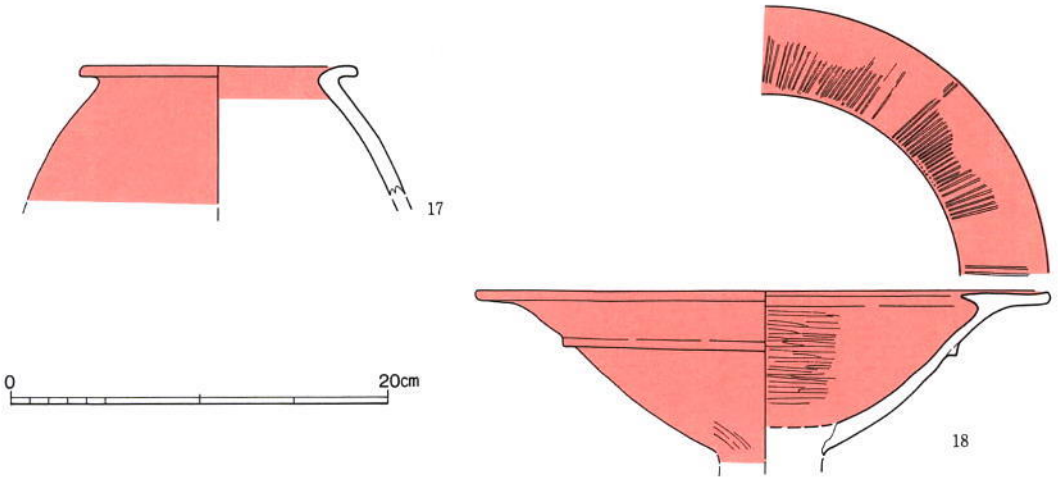
第103図　36・37号土坑出土土器実測図（1/4）



第104図　38～40号土坑実測図（1/40）



第105図　38号土坑出土土器実測図. 1 (1/4)



第106図　38号土坑出土土器実測図. 2 (1/4)

り判然としないが、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデか。

丹塗土器

壺（11）無頸壺である。口縁端部をややくぼませ、底部に焼成後穿孔している。内面の調整はナデで、指頭圧痕が多く残る。外面と体部内面上位に丹塗りを施し、ミガキが残る。

高坏（12）鋤先状口縁で、三角突帯を貼付する。外面の調整はナデで、内外面とも丹塗りを施し、内面にはミガキが残る。口縁平坦部には放射状に暗文を施す。

器台（13）筒型器台の脚部である。外面のみ丹塗りを施し、内面の調整はナデである。

40号土坑（図版25－３、第104図）

調査区東北部分で検出した。13号溝と重複しこれより古い。平面プランは南北2.45m、東西1.75mの長方形プランを呈する。中心部分が一段深く掘り込まれ、深さ37cmを測る。39号土坑の東側に近接し、平面プランも類似することから何らかの関連があると考えられる。埋土は上層が茶褐色砂質土、下層が暗茶褐色砂質土でレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版49、第108図）

弥生土器

甕（１～４）１は「く」字型口縁に近い形状で、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。２は口縁部の折り曲げが弱く、端部はつまみあげる。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデである。３は口縁端部をつまみあげ気味に仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。４は大型の甕で、口縁端部はくぼませる。外面の調整はハケメで、内面の調整はナデである。体部中央付近に貼付された突帯が剥離している。また、体部に黒斑が付く。

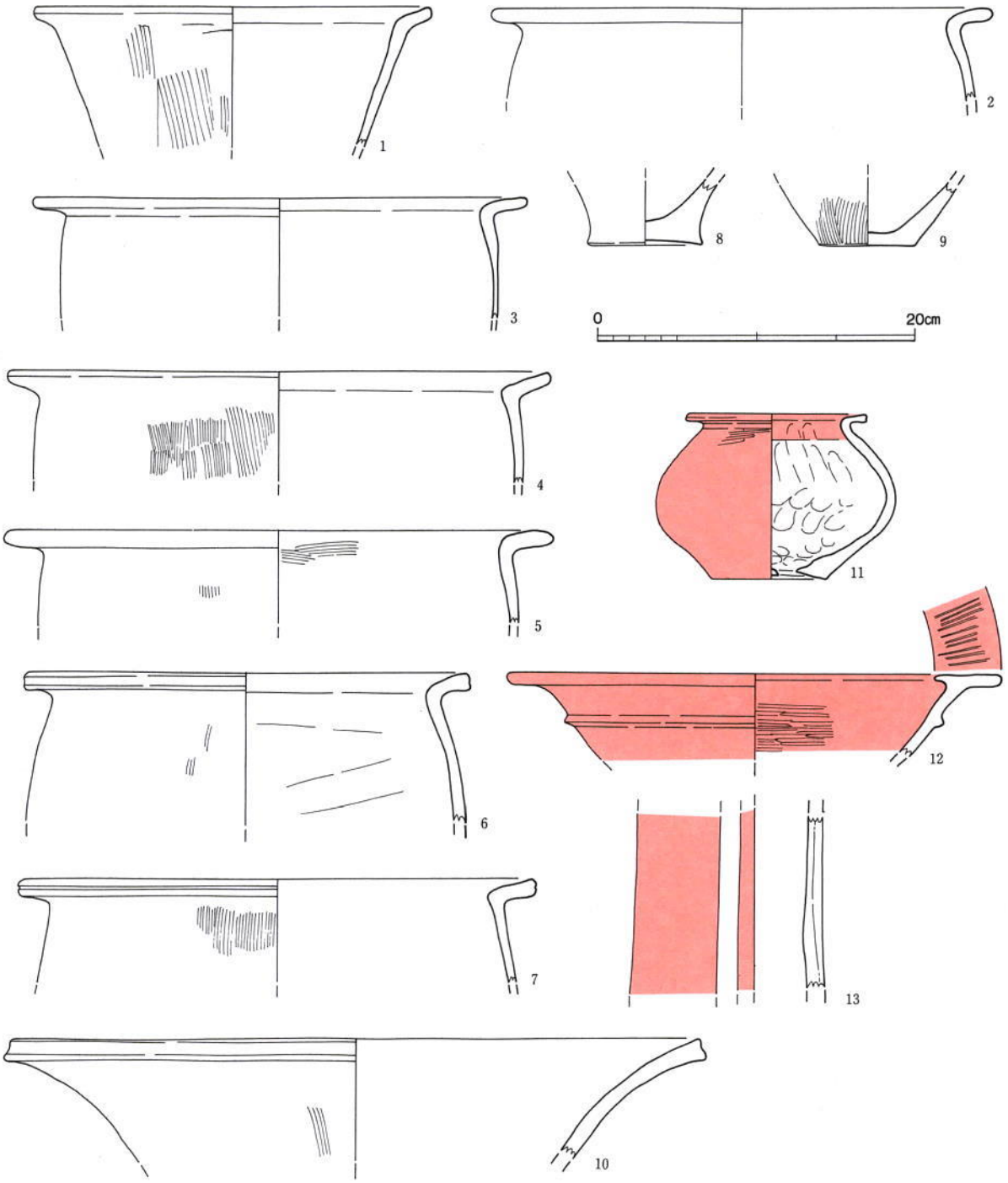
壺（５）小型の無頸壺で、口縁端部は丸く仕上げ、やや下垂する。調整は内外面ともにナデである。

丹塗土器

甕（６）鋤先状口縁で、端部はやや下垂し、刻目を施す。内外面ともに丹塗りを施し、内面にはミガキが残る。また、口縁平坦部には放射状に暗文を施す。

41号土坑（第109図）

調査区中央部付近で検出した。55号住居、67号住居と重複し、これらより古い。平面プランは南北2.5m、東西3.0m＋αで、床面は東に向かい深くなる。深さは最深部で約40cmを計る。遺物は弥生土



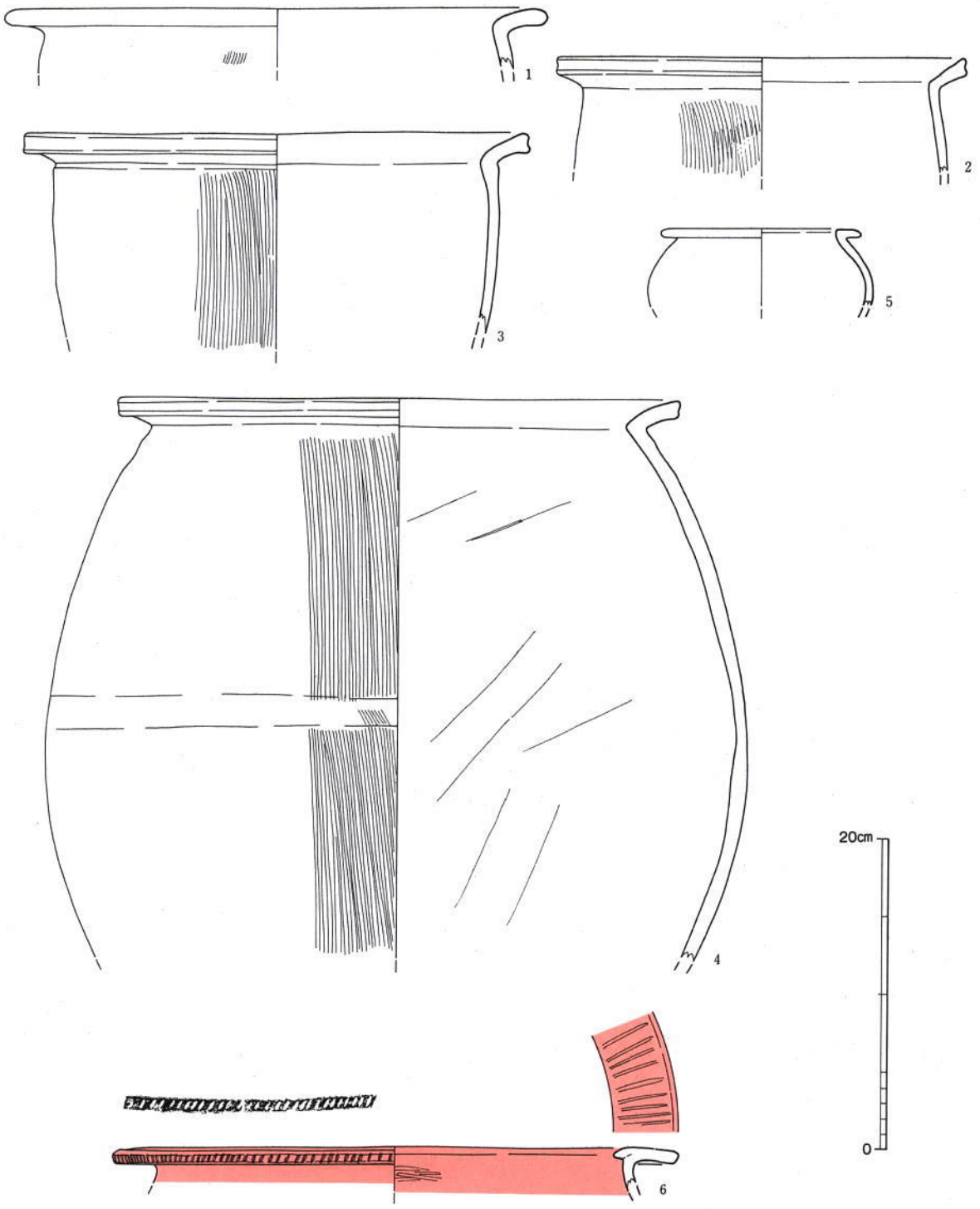
第107図　39号土坑出土土器実測図（1/4）

器が出土している。

42号土坑（第109図）

調査区中央部付近で検出した。52号住居と完全に重複し、これより古い。平面プランは東西3.0m、南北2.3mの楕円形を呈する。北東部を除き、ほぼ全周にテラスが付き、中央部が深くなる。深さは最深部で25cmを計る。遺物は弥生土器の甕がかなり浮いた状態で出土しており、埋没過程で投棄されたものである。

出土土器（図版49、第110図）



第108図　40号土坑出土土器実測図（1/4）

弥生土器

甕（1・2）1は「く」字型口縁に近い形状で、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。2はほぼ完形である。「く」字型口縁に近く、端部は丸く仕上げる。調整は内外面ともにハケメである。内面には指頭圧痕が残る。また、内外面ともに化粧土を施す。体部外面は2次加熱により赤変あるいは黒変しており、一部煤が付着する。

鉢（3）端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメで、内面の調整はナデか。指頭圧痕が残る。

43号土坑（第109図）

調査区で一段下がる西側部分の東端部で検出された。平面プランは東西1.0m、南北0.7mの楕円形を呈する。深さは西側が深くなり最深部で約45cmを計る。遺物は弥生土器が浮いた状態で出土している。

出土土器（図版49、第110図）

弥生土器

甕（4～6）いずれも「く」字型口縁に近く端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。6は口縁部から下がった位置に三角突帯を貼付する。

丹塗土器

壺（7）無頸壺とおもわれる。底部はやや上げ底である。外面と体部内面上位に丹塗りを施す。外面の調整は細かいハケメで、体部下位は縦方向に、後に一定の間隔をおいて横方向にミガキを施す。内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。

44号土坑（第109図）

調査区東端部北よりで検出した。平面プランは約0.6mの略円形を呈する。深さは約10cmを測り、焼土と炭が多量に堆積していた。住居に伴う炉跡と考え周辺を精査したが、住居跡は検出できなかった。遺物は出土していない。

45号土坑（第111図）

調査区東端部北よりで検出した。長径0.85mの楕円形プランを呈する。44号土坑同様、多量の焼土と炭が堆積していた。この土坑も住居に伴う炉跡と考え周辺を精査したが、住居跡は検出できなかった。遺物は出土していない。

46号土坑（図版25－3、第111図）

調査区中央部やや南西よりで検出した。平面プランは東西1.3m、南北1.3mの不整な円形を呈する。壁に深さは25cmほどで、中央部が凸レンズ状にわずかに深くなる。大きさや形状から貯蔵穴かと思われる。遺物は弥生土器が出土している。また、堅果類の種子がまとまって出土している。

出土土器（図版49、第112図）

弥生土器

甕（1～4）1～3はいずれも「く」字型口縁に近い形状である。1は口縁部の折り曲げが弱く、端部を丸く仕上げる。2は口縁端部を丸く仕上げ、外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデである。口縁部直下に粘土の継ぎ目が残る。体部の一部が2次加熱により赤変する。3は口縁端部をやや角張って仕上げる。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデである。4はやや上げ底の底部である。外面の調整はハケメで、内面の調整はナデか。内面全体と外面の一部に煤が付着する。

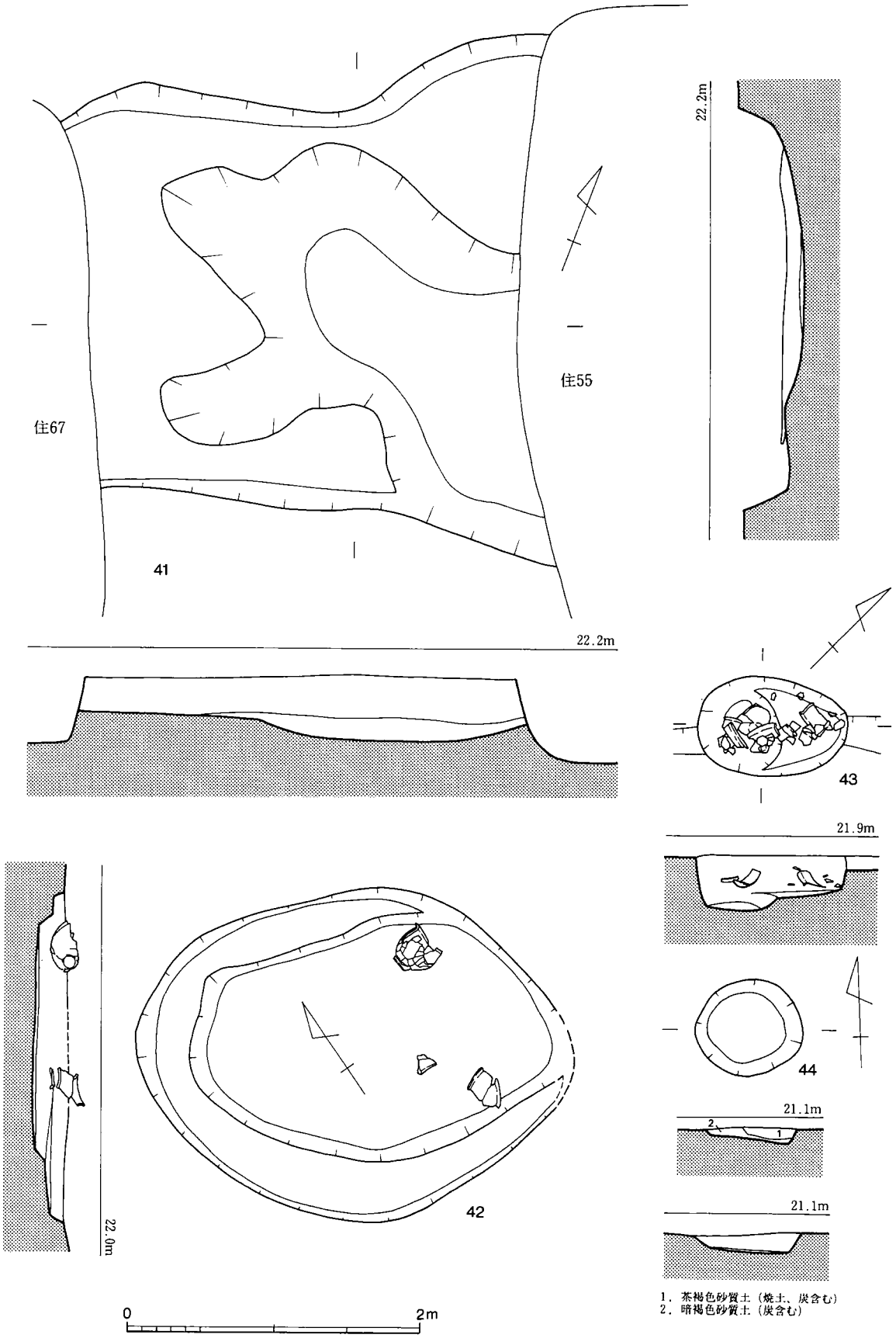
鉢（5・6）5は端部をやや角張って仕上げる。調整は内外面ともにナデである。底部から体部にかけて黒斑が付く。6は口縁部の折り曲げが強く、端部はやや角張って仕上げる。また、底部は薄い。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。2次加熱により赤変、黒変する。

丹塗土器

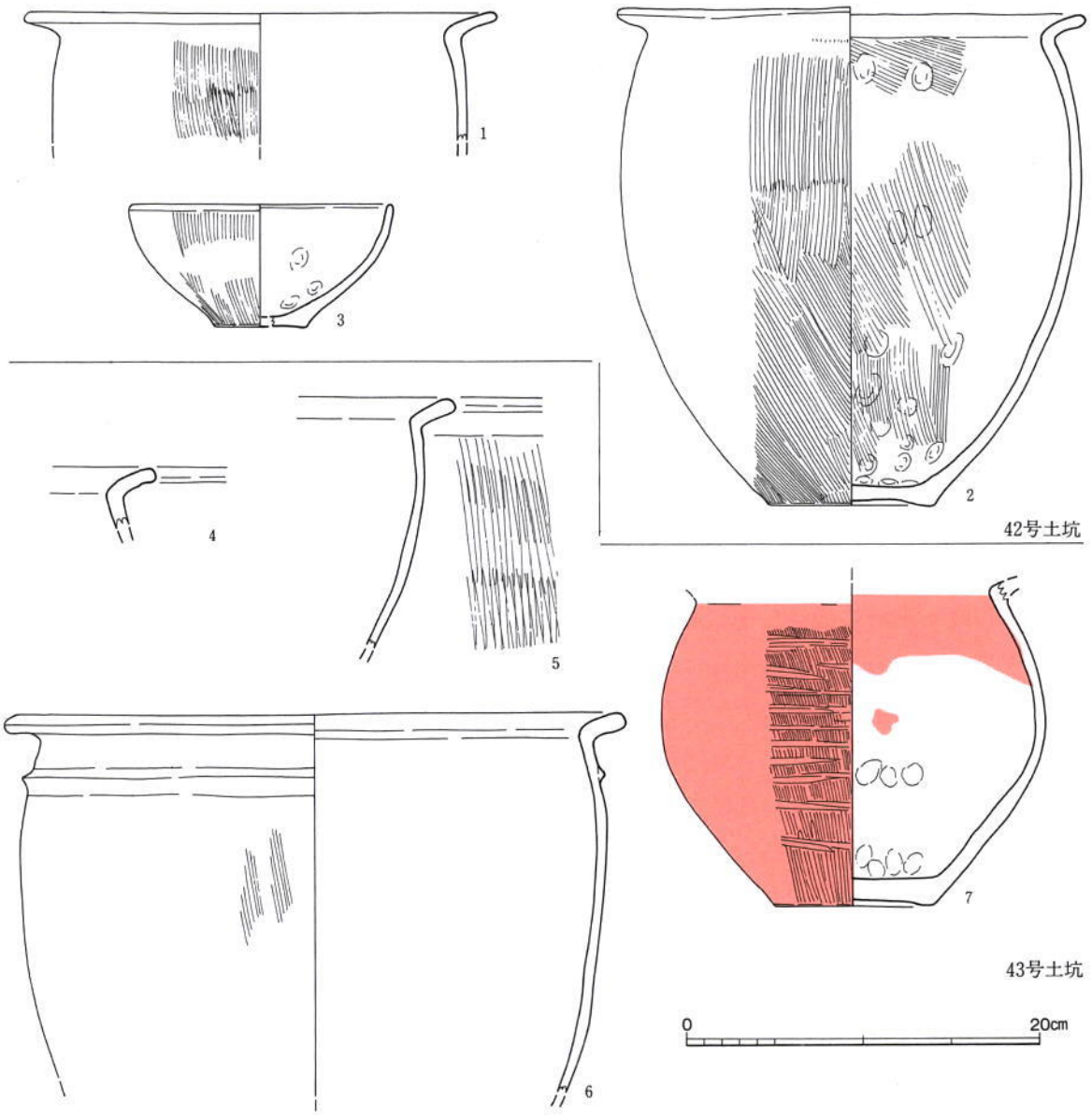
甕（7）鋤先状口縁で端部に刻目を施す。口縁部よりやや下がった位置に「M」字型突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りで、外面の一部にミガキが残る。また、口縁部平坦部に放射状に暗文を施す。

47号土坑（第111図）

調査区西側で検出した。平面プランは南北4.0m、東西8.0m＋αの不整形を呈する。深さは最深部で50cm程である。遺物は弥生土器と、石庖丁、砥石、投弾が出土している。



第109図　41～44号土坑実測図（1/40）



第110図　42・43号土坑出土土器実測図（1/4）

出土土器（図版50・51、第113～117図）

弥生土器

甕（1～28・43）1～10は「く」字型口縁ないしそれに近い形状で、端部を丸くあるいは角張って仕上げる。2の調整は内外面ともにナデか。10は口縁部よりやや下がった位置に三角突帯を貼付する。摩滅により調整は不明である。この他は、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデ。11は口縁端部をつまみあげ気味に仕上げる。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はナデである。12は口縁部を強く折り曲げる。端部は角張り、下方に突出気味に仕上げる。13もまた口縁端部を角張らせ、下方に突出気味に仕上げる。ともに外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。14は端部をややくぼませる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。15～19は端部をつまみあげる。15は口縁部が内湾する。16は端部が下垂気味である。19の外面の調整はナデ、内面の調整はハケメである。他はいずれも外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。20は大型の甕である。口縁端部は肥厚させ、ややくぼませて仕上げる。調整は内外面ともにナデである。21～28は底部片である。21はやや上げ底で、外

面の調整はハケメ、内面の調整は摩滅により不明である。22の外面の調整はハケメ、内面の調整は底部がナデ、体部がハケメか。底部付近が2次加熱により赤変する。23・24の外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。25は外面の調整はハケメ、内面の調整は摩滅により調整不明である。2次加熱により、一部赤変している。26は底部がほとんど残存していないため、その形状は不明である。外面の調整はハケメで体部最下部をナデで仕上げる。内面の調整はナデである。27・28は樽型の甕の底部である。27の外面の調整はハケメであるが、ほかは摩滅により調整不明である。43は胴が大きく開く甕である。口縁は鋤先状を呈し、直下に小さな三角突帯を貼付する。胴部最大径よりやや下に2条の三角突帯が付く。底部付近のみにハケメが残存する。胴部に大きな黒斑が付着する。

壺（29～32）29は広口壺である。鋤先状口縁で、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。頸部と体部の境の貼り付け部分で剥離している。30～32は無頸壺である。30は口縁を上方につまみ上げ気味に仕上げる。外面の調整は摩滅により不明、内面の調整はナデ。体部下位に黒斑が付く。31は端部をやや角張って仕上げる。外面の調整は摩滅により不明、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。体部中位に黒斑が付く。32は端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

器台（33）口縁と裾の端部はつまみあげ気味に仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデ。

蓋（34）大型の蓋である。口縁端部は角張って仕上げる。つまみ部は中央をくぼませる。外面の調整はハケメ後ナデ、内面の調整はナデである。

丹塗土器

甕（35～37）鋤先状口縁で、端部に刻目を施す。口縁部よりやや下がった位置と体部中央付近に、ハケメ調整後「M」字型突帯を貼付する。内面の調整はナデである。外面と内面口縁部に丹塗りを施し、ミガキが残る。外面口縁部直下から突帯の間に縦方向の暗文を施す。口縁部平坦部には放射状に2本一組の暗文を施す。36は上げ底で、体部中央付近に「M」字型突帯を貼付する。外面のみ丹塗りを施し、ミガキが残る。内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。37はわずかに上底である。外面のみ丹塗りを施しミガキが残る。内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。

壺（38・39）無頸壺である。どちらも口縁端部は丸く仕上げる。調整は内外面ともにナデで、さらに丹塗りを施す。40は素口縁の広口壺である。口縁端部はくぼませるように仕上げる。頸部と体部の境に三角突帯を貼付する。外面のみ丹塗りを施し、一部ミガキが残るが、摩滅して調整時のハケメが観察できる。内面の調整はナデで、頸部に指頭圧痕が残る。

高坏（41・42）ともに鋤先状口縁である。41は口縁部下に三角突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りを施し、内面にミガキが残る。口縁部平坦部には放射状に暗文を施す。42は口縁端部をくぼませて仕上げる。坏部は内外面に、脚部は外面のみに丹塗りを施す。内面にはミガキが残るが、外面は摩滅により調整時のハケメが観察できる。脚部内面の調整はナデで、しぼり痕が残る。

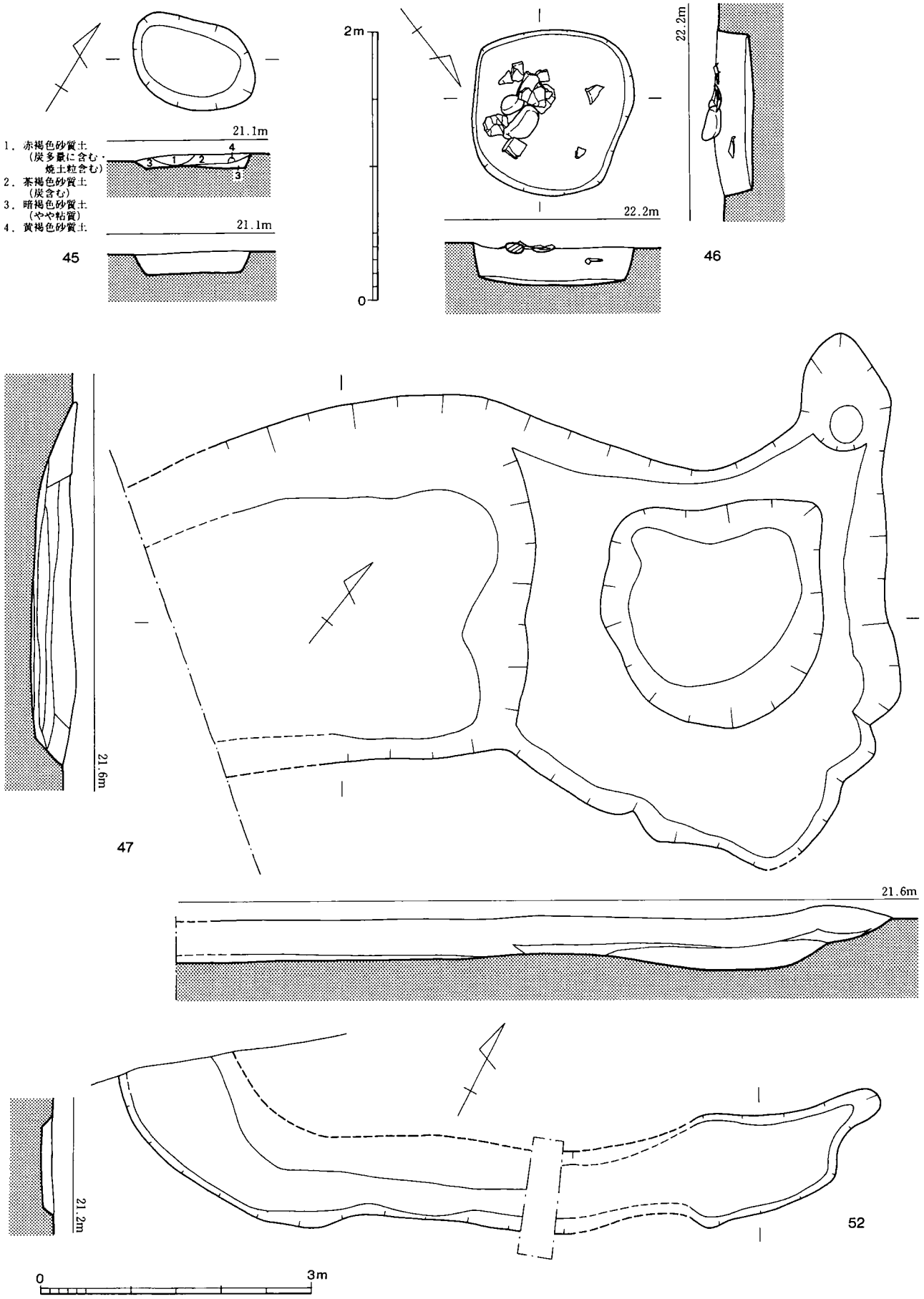
49号土坑（図版26－1、第118図）

調査区北西部で検出した。26号溝と重複し、これより新しい。平面プランは東西4.5m、南北2.9mの隅丸の長方形を呈する。壁の深さは約10cmあり、床面は平坦である。中央部やや東よりに深さ約15cmのピット1基が検出された。弥生土器と磨製石鏃、石庖丁、砥石、不明石製品が出土している。

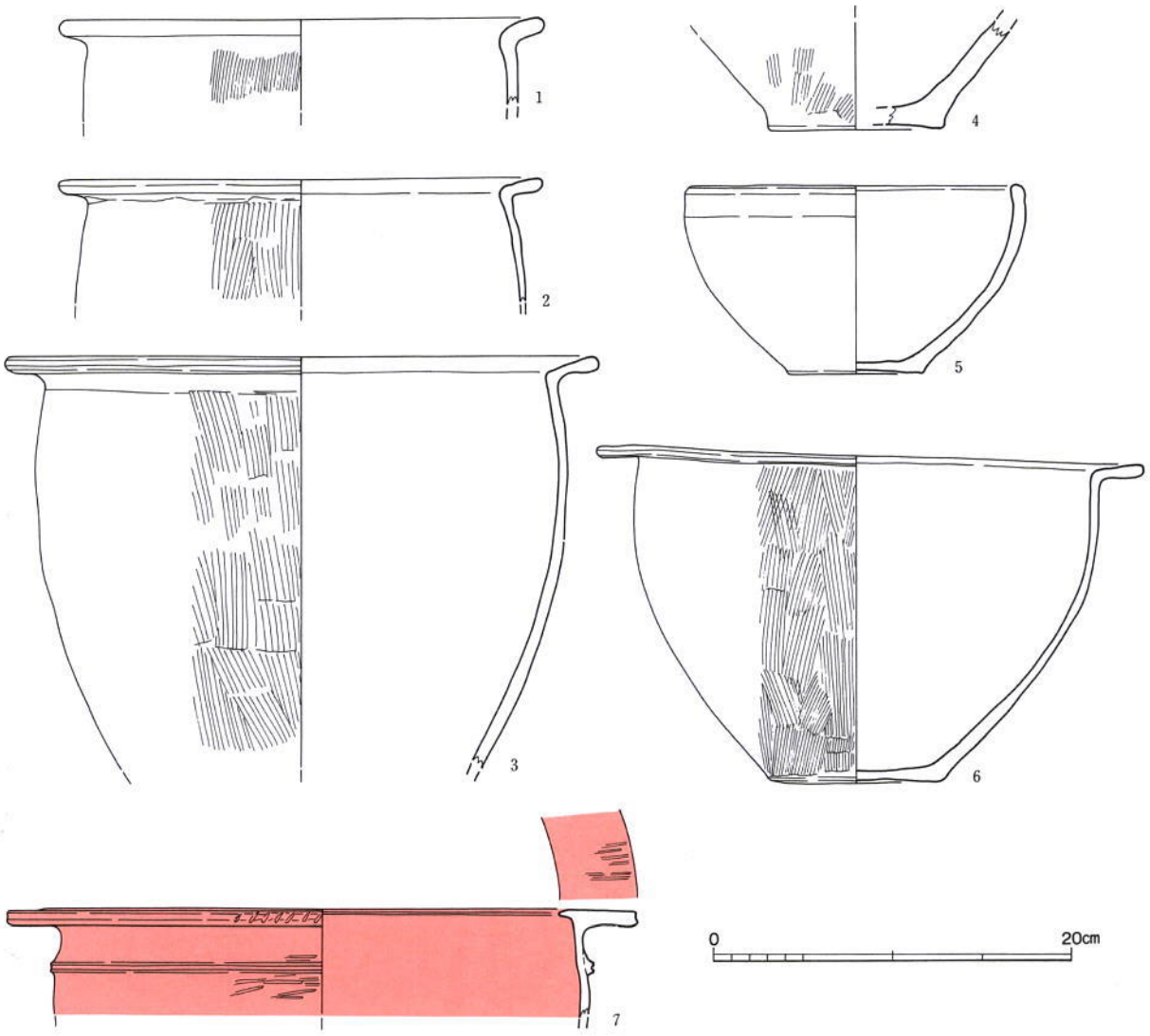
52号土坑（第111図）

調査区東端部中央付近で検出した。13号溝と重複し、これより古い。幅0.7m、長さが残存部分で5.5mの溝状のプランを呈する。深さは10cmである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第119図）



第111図　45～47・52号土坑実測図（44・45は1/40、47・52は1/60）



第112図　46号土坑出土土器実測図（1/4）

弥生土器

甕（1～3）いずれも底部片である。1・3は外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。2は摩滅により調整不明である。

54号土坑（図版26－2、第118図）

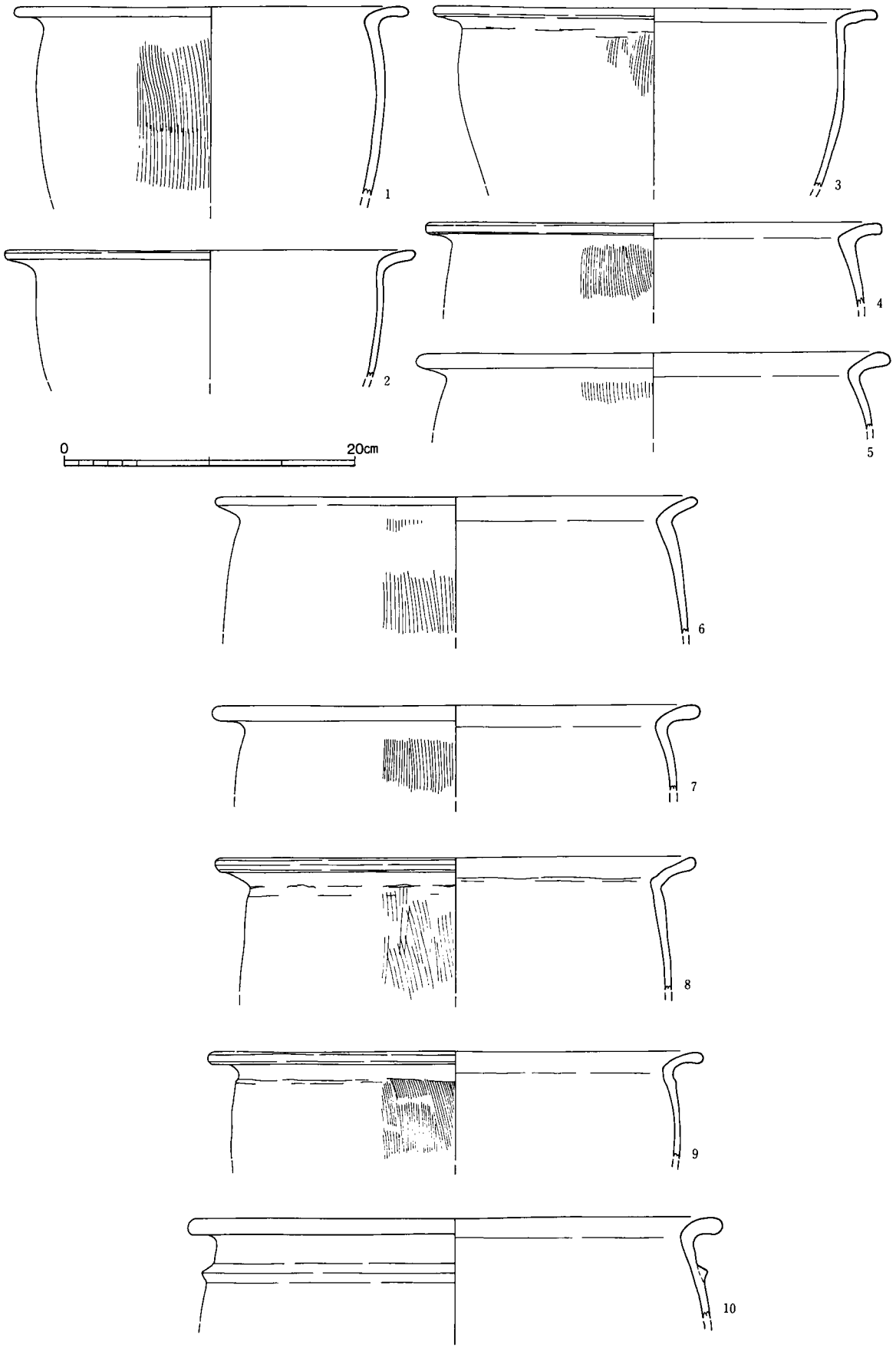
調査区東端部中央付近で検出した。長軸2.7m、短軸1.3mの楕円形プランを呈する。深さは16cmである。遺物は出土していない。

56号土坑（図版26－3、第118図）

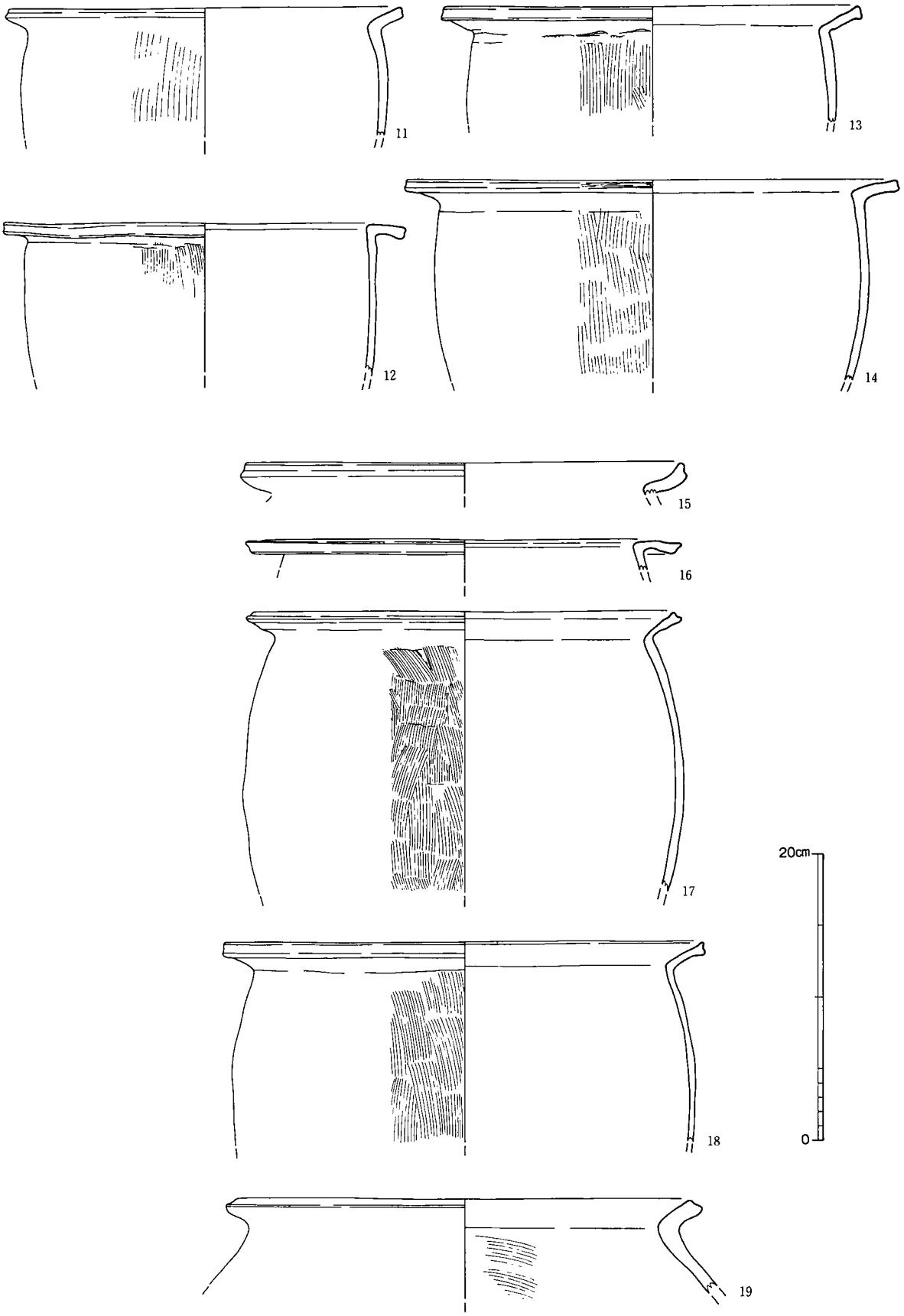
調査区北東部で検出した。10号溝の盛土の下から検出され、これより古い。平面プランは幅1～1.2m、長さ6.3mの三日月状を呈する。57号土坑の斜面下側を弧状に取り囲み、埋土もほぼ同様であることから、57号土坑に関連する遺構の可能性もある。中央が溝状に深く掘り込まれ、東西両側のほぼ全体に段がつけられる。深さは最深部で約40cm。遺物は弥生土器片と磨製石鏃が出土している。

57号土坑（図版26－3、第120図）

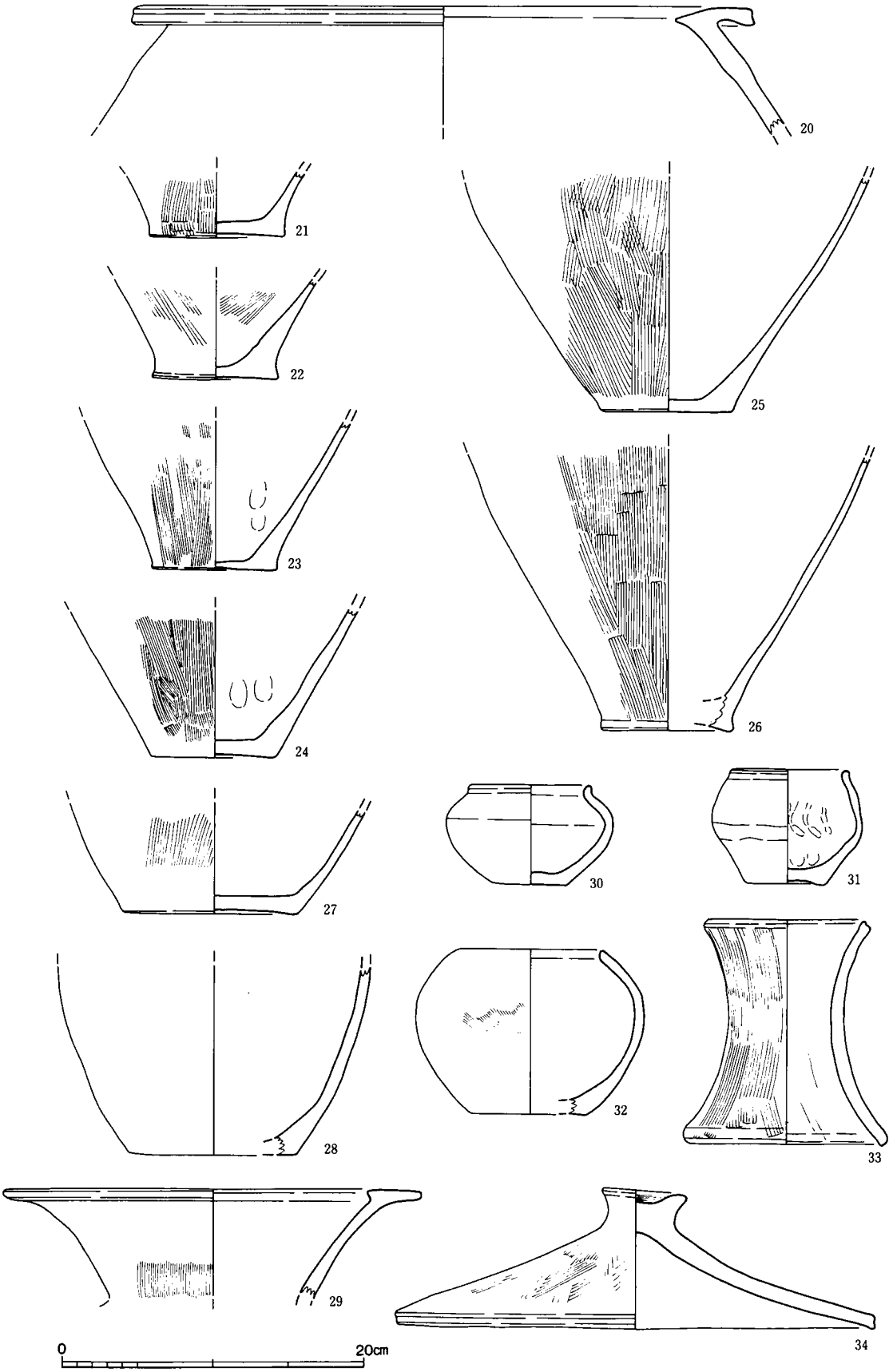
調査区北東部で検出した。10号溝の盛土の下から検出され、これより古い。上記のことから56号土坑との関連も考えられる。平面プランは東西4.4m、南北3.2mの楕円形を呈する。深さは約30cmである。南東付近床面からは炭化物の集積が見られ、その上に円礫1個が据えられたような状態で検出さ



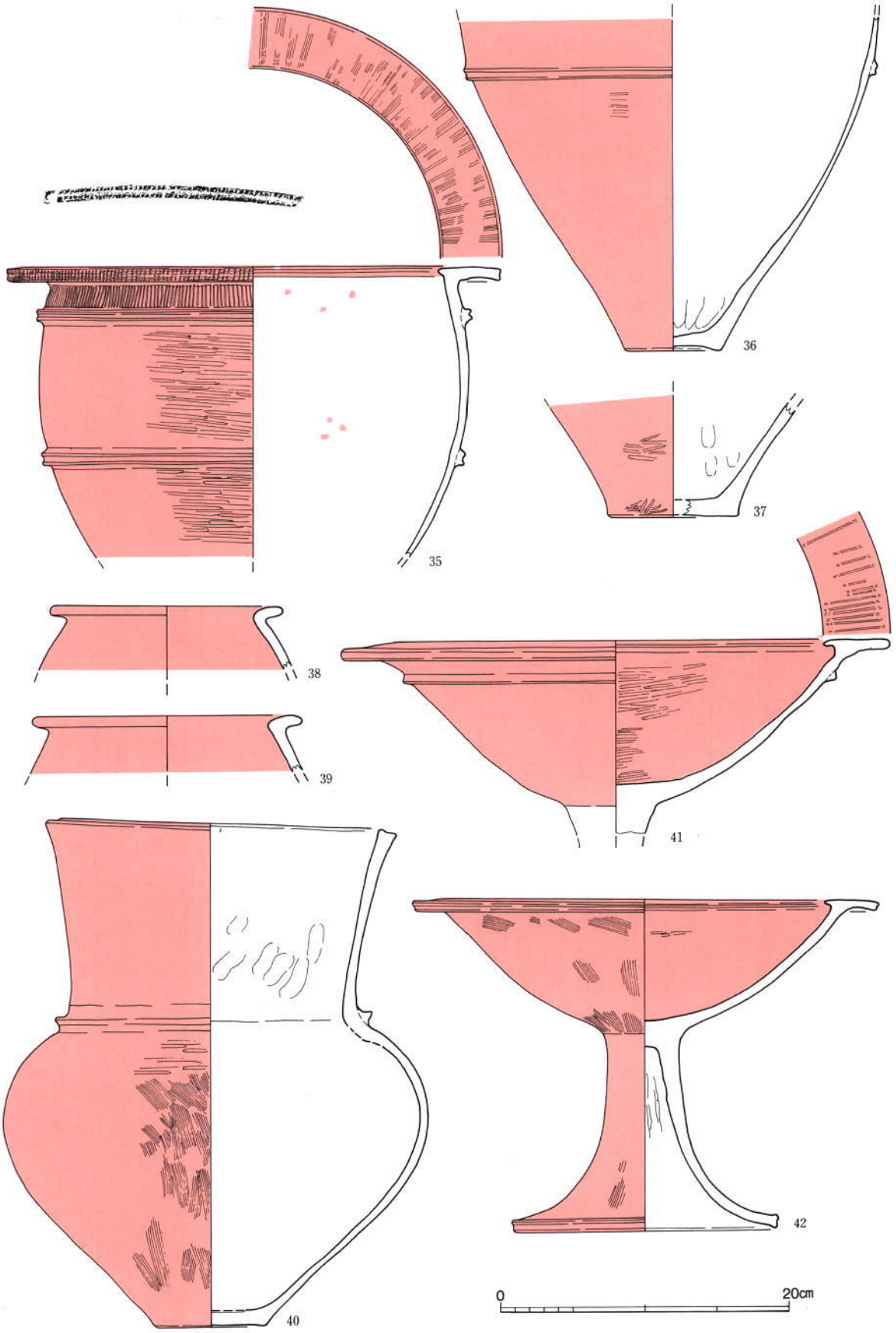
第113図　47号土坑出土土器実測図．1（1/4）



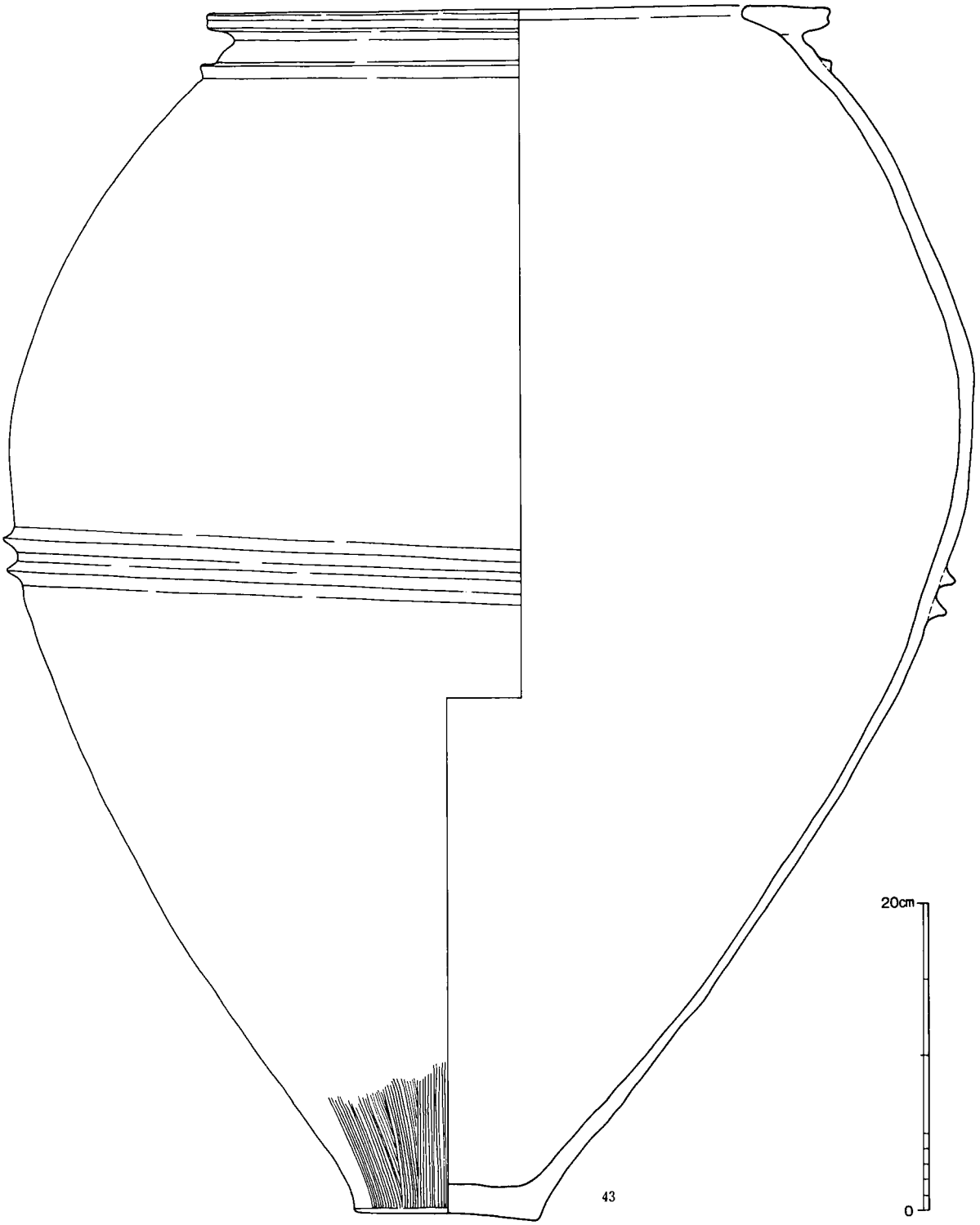
第114図　47号土坑出土土器実測図．2 (1/4)



第115図　47号土坑出土土器実測図．3（1/4）



第116図　47号土坑出土土器実測図．4（1/4）



第117図　47号土坑出土土器実測図．5（1/4）

れた。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第119図）

弥生土器

甕（4）「く」字型口縁に近い形状で、口縁端部をつまみあげる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

壺（5）わずかに上げ底の底部片である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

丹塗土器

甕（6）鋤先状口縁で端部は下垂する。また、刻目を施す。口縁部よりやや下がった位置に「M」字型突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りを施し、外面にはミガキが残る。

59号土坑（第121図）

調査区中央部やや南よりに検出した。108号住居、109号住居、60号溝と重複し、これらより古い。平面プランは南北5.8m、東西は調査区外に延びており不明であるが、9.2m＋αの方形を呈すると思われる大形の土坑である。調査当初は住居として考えていたが、壁の立ち上がりが緩やか過ぎ、内部に炉、主柱穴となりうる施設もなく、床面も明確でなく、凹凸が著しいため、ここでは土坑として扱うこととした。深さはもっとも深い部分で約40cmである。北壁には深さ15cm程の土坑が掘り込まれ、内部から壺等が出土している。ほかに砥石が出土している。

出土土器（図版49、第119図）

弥生土器

甕（7～13）7は口縁部の折り曲げが弱く、端部は角張って仕上げる。底部はやや上げ底である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。8は口縁端部を丸く仕上げる、外面の調整はハケメ、内面の調整は口縁部がハケメ、体部はナデか。2次加熱により内外面ともに赤変する。9は鋤先状口縁で若干内側に発達する。端部は丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。10は口縁部を強く折り曲げ、端部外に引き出す。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。11は口縁端部を肥厚させ、角張って仕上げる。外面の調整はハケメ、その後沈線を施す。沈線は4本だが、57号竪穴住居跡出土例から、1本の沈線が螺旋状に施されたとおもわれる。12は小型の甕の底部片である。外面の調整は摩滅により不明だが、内面の調整はナデである。13は鋤先状口縁で、端部を跳ね上げ気味に仕上げる。また、平坦部に円形の浮文を貼付する。

壺（14・15）14はわずかに上げ底の底部片で、調整は内外面ともにナデである。15は鋤先状口縁の広口壺である。口縁部が若干ゆがむ。内外面とも摩滅して調整は不明だが、内面には指頭圧痕が残る。

丹塗土器

甕（16）鋤先状口縁で端部をわずかにくぼませる。口縁より下がった位置に「M」字型突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りを施す。

壺（16）広口壺の体部である。中央付近に下向きの三角突帯を貼付する。外面のみに丹塗りを施し、ミガキが残る。内面の調整はナデである。

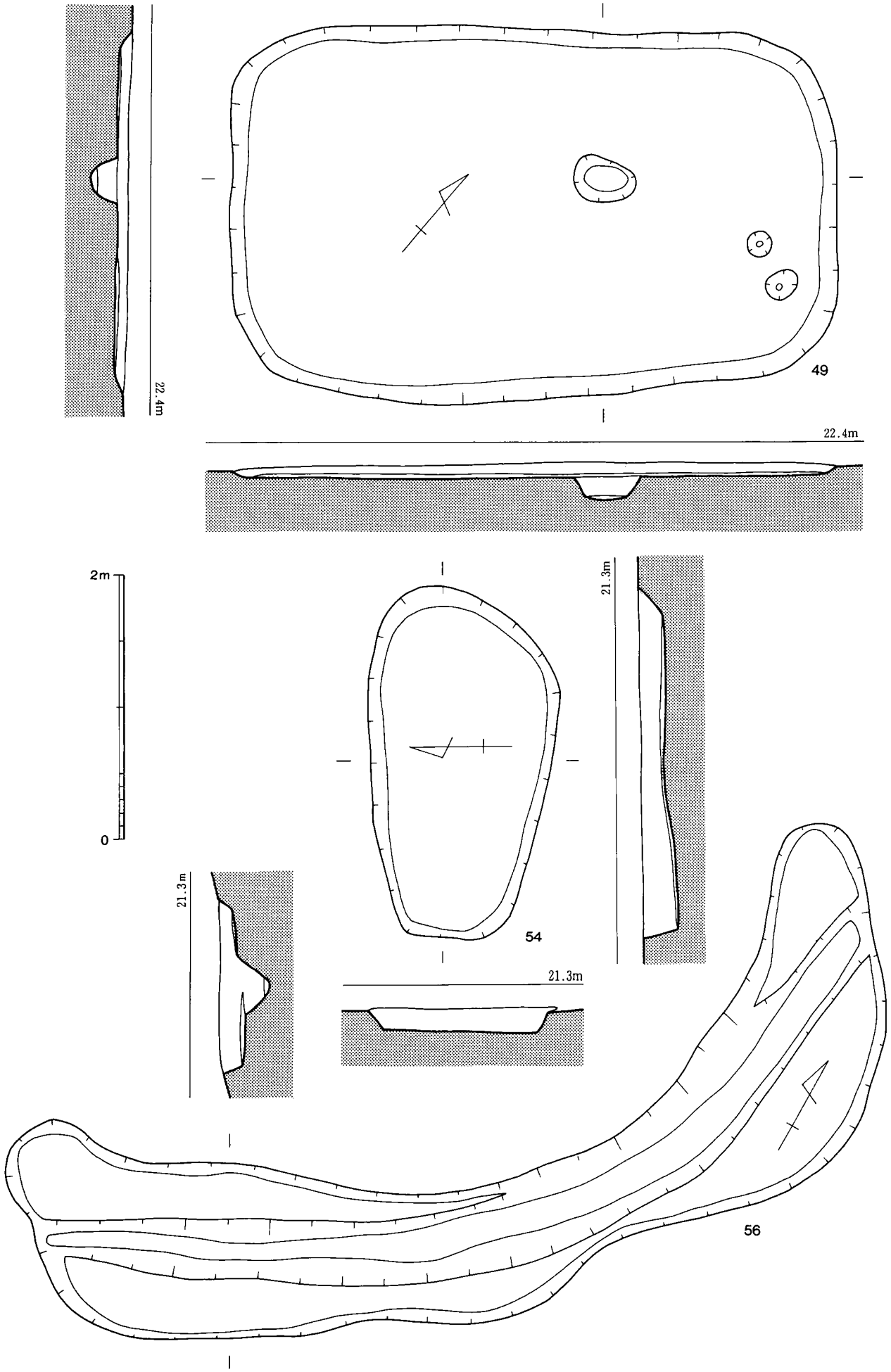
60号土坑（図版27－1、第120図）

調査区西側で検出された。31号溝と重複し、これより古い。平面プランは南北3.6m、東西3.7mの隅丸の三角形を呈する。壁の深さは約60cmで床面は平らである。南壁に土坑が2基掘り込まれ、そのうち東側の土坑からは甕が投げ込まれた状態で出土している。また、東隅からは完形の高坏が倒立した状態で出土している。

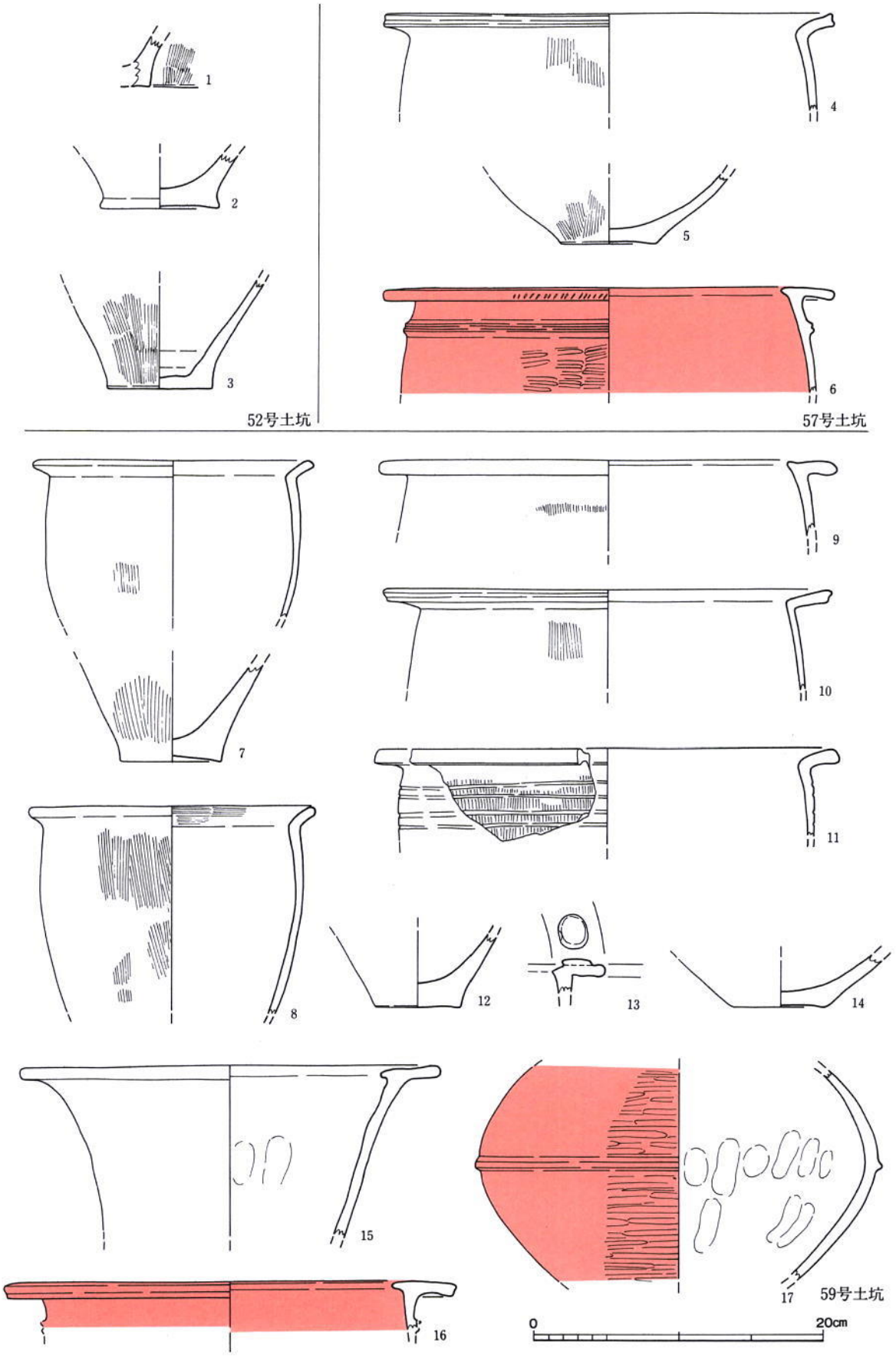
出土土器（図版52、第122～124図）

弥生土器

甕（1～12）1は小型の甕で、口縁部は内湾気味で、底部は平底である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。2次加熱により全体が赤変しており、器壁がはじけている部分がある。2はほぼ完形の甕。「く」字型口縁で端部は肥厚し、丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整は底部がナデ、ほかはハケメである。口縁部内面には刻目が4つある。3は端部を角張っ



第118図　49・54・56号土坑実測図（1/40）



第119図　52・57・59号土坑出土土器実測図（1/4）

て仕上げる。外面の調整はハケメで、内面の調整はナデ。外面に煤が付着する。4は「く」字型口縁に近い形状で、端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメか。内面の調整はナデである。5は口縁部を強く折り曲げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。6は鋤先状口縁で、口縁部よりやや下がった位置に三角突帯を貼付する。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデ。7は口縁端部が肥厚し、わずかにくぼませる。口縁部よりやや下がった位置に三角突帯を貼付する。調整は内外面ともナデである。8は底部片で、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。指頭圧痕が残る。9～12は大型の甕である。9は口縁部が内側にやや突出し、端部をくぼませる。調整は内外面ともハケメ。10は、鋤先状の口縁で、端部をくぼませる。調整はナデである。11は「く」字型に近い口縁で、端部は沈線上にくぼませる。調整は内外面ともハケメである。口縁部は広範囲に煤が付着し、2次加熱により一部赤変する。12は「く」字型に近い口縁で、端部をわずかにくぼませる。体部中央付近に三角突帯を貼付する。底部はわずかに上げ底である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

鉢（13・14）どちらも口縁端部を丸く仕上げる。外面の調整はハケメ、内面の調整はハケメ後部分的にナデである。14は2次加熱により赤変する。

高坏（15）鋤先状口縁で、端部ははね上げ気味に仕上げるが、下垂する。脚部の端部は角張って仕上げる。外面の調整はミガキ、内面の調整は坏部がミガキ、脚部がナデで、工具痕が残る。

蓋（16）大型の蓋である。口縁端部はつまみあげるように仕上げる。つまみ部は中空である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデで、指頭圧痕が残る。内外面部分的に煤が付着し、2次加熱により赤変する。

61号土坑（第125図）

調査区西側で検出された。57号溝、65号溝と重複し、これらより古い。平面プランは南北3.6m、東西4.0mの略円形を呈する。段を付けて掘られ、深い部分で20cmを計る。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版52、第126図）

弥生土器

甕（1）「く」字型口縁に近い形状で、端部は丸く仕上げる。摩滅により調整は不明である。

62号土坑（第125図）

調査区西側で検出された。107号住居、59号溝と重複し、これらの中でもっとも古い。平面プランは東西5.0m、南北は59号溝に切られ不明であるが3.1m＋αの方形を呈するものか。深さは25cm程掘り込まれる。遺物は出土していない。

105号土坑（図版27－2、第127図）

調査区西端部で検出した。182号溝を切る。東西長2.6m、南北長2.0m、深さ0.07mの楕円形プランを持つ。壁は斜めに立ち上がり底部はレンズ状になる。底部分のみが残存しているので、本来は規模が大きいものと思われる。埋土中位に甕片が散乱していたが、接合できるものはなかった。

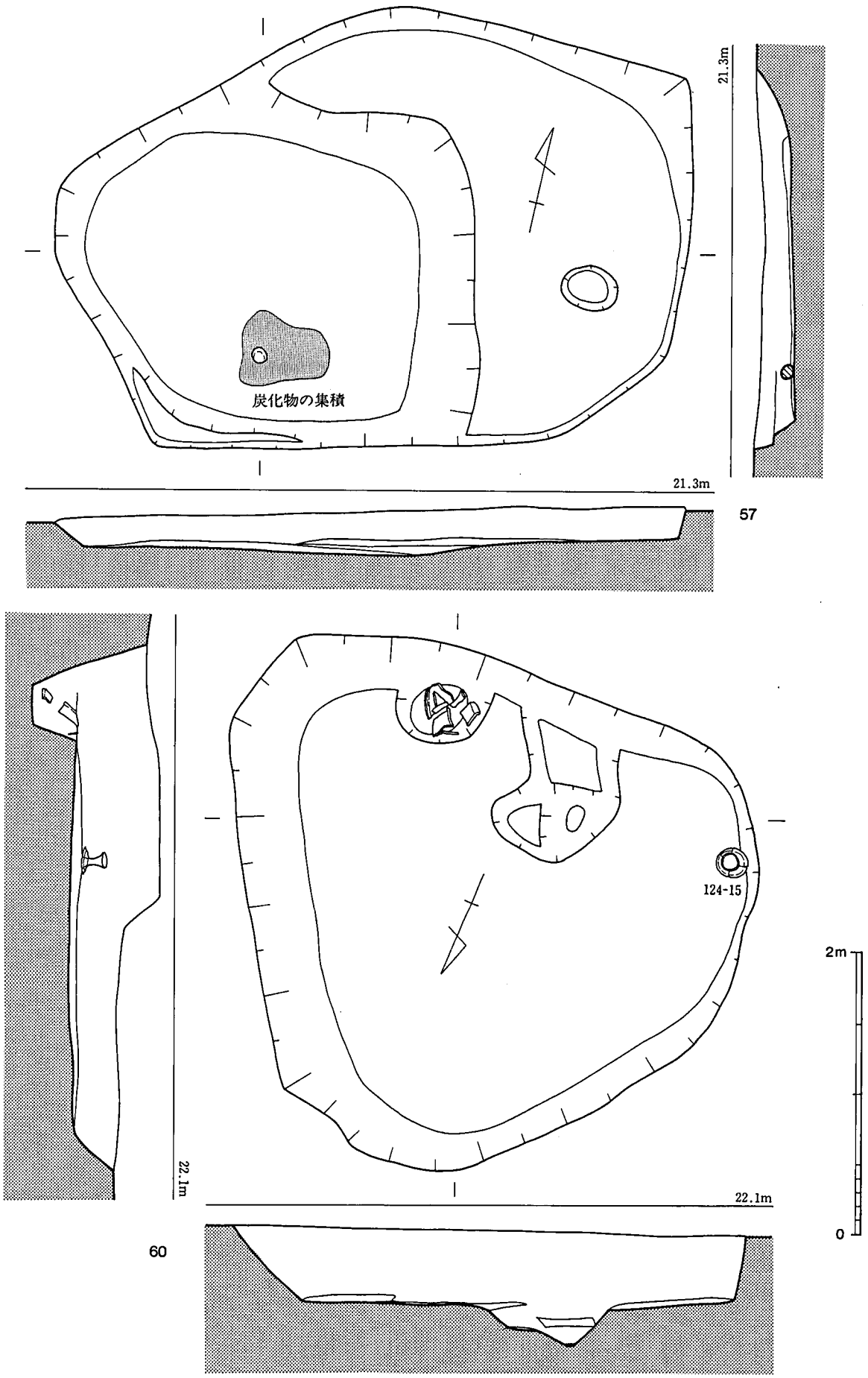
出土土器（第126図）

弥生土器

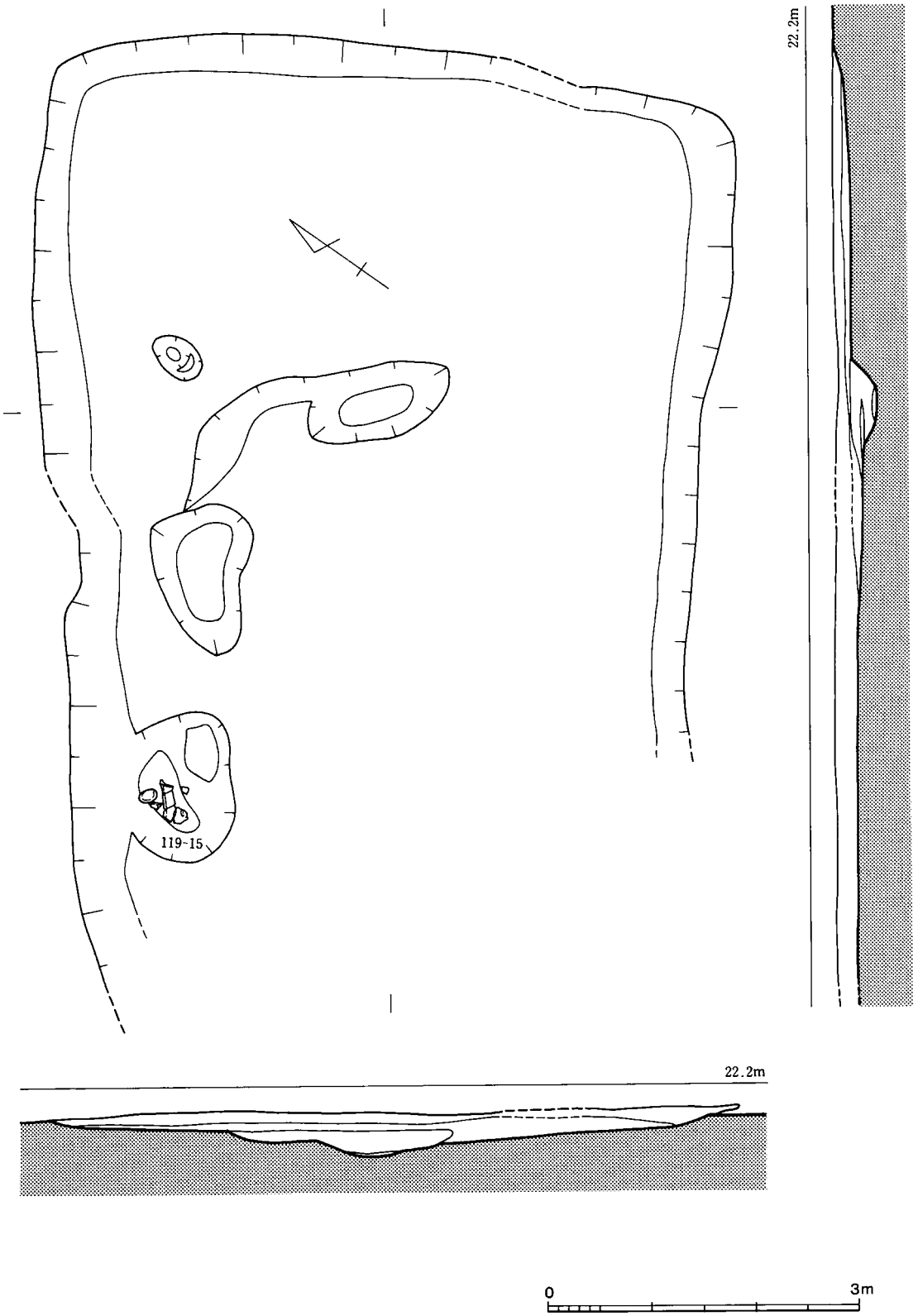
甕（2）胴部上位の小片で、「く」字型口縁になると思われる。外面はタテハケの後に口縁より少し下がったところに断面三角突帯を貼付する。内面は摩滅しているが粗い斜のハケ目が観察できる。

106号土坑（図版27－3、第127図）

調査区西南部の181号溝の西側で検出した。南北1.0m、東西1.1m、深さ0.1mのほぼ円形プランを



第120図　57・60号土坑実測図（1/40）



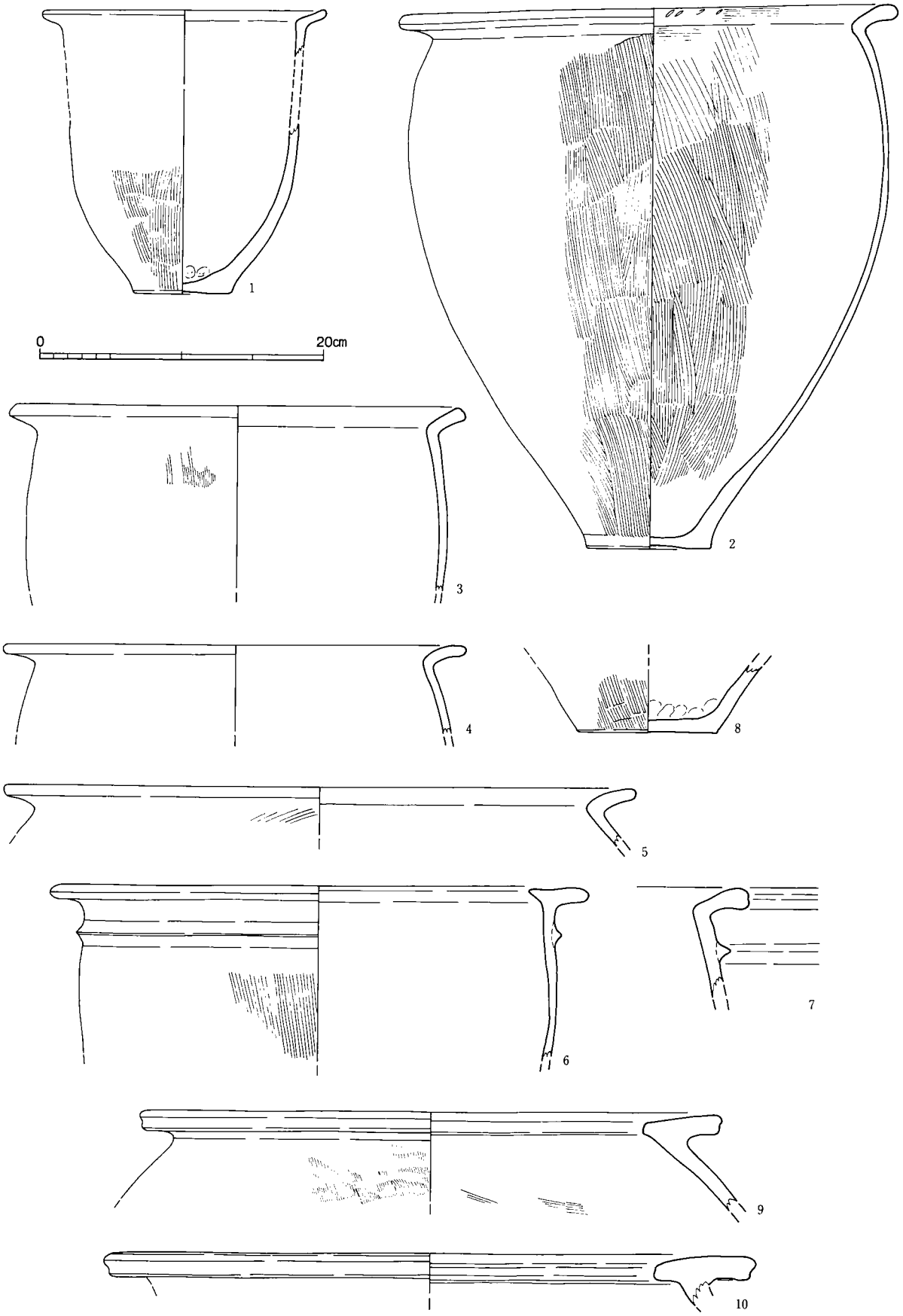
第121図　59号土坑実測図（1/60）

持つ。埋土中位に土器片が散乱していた。

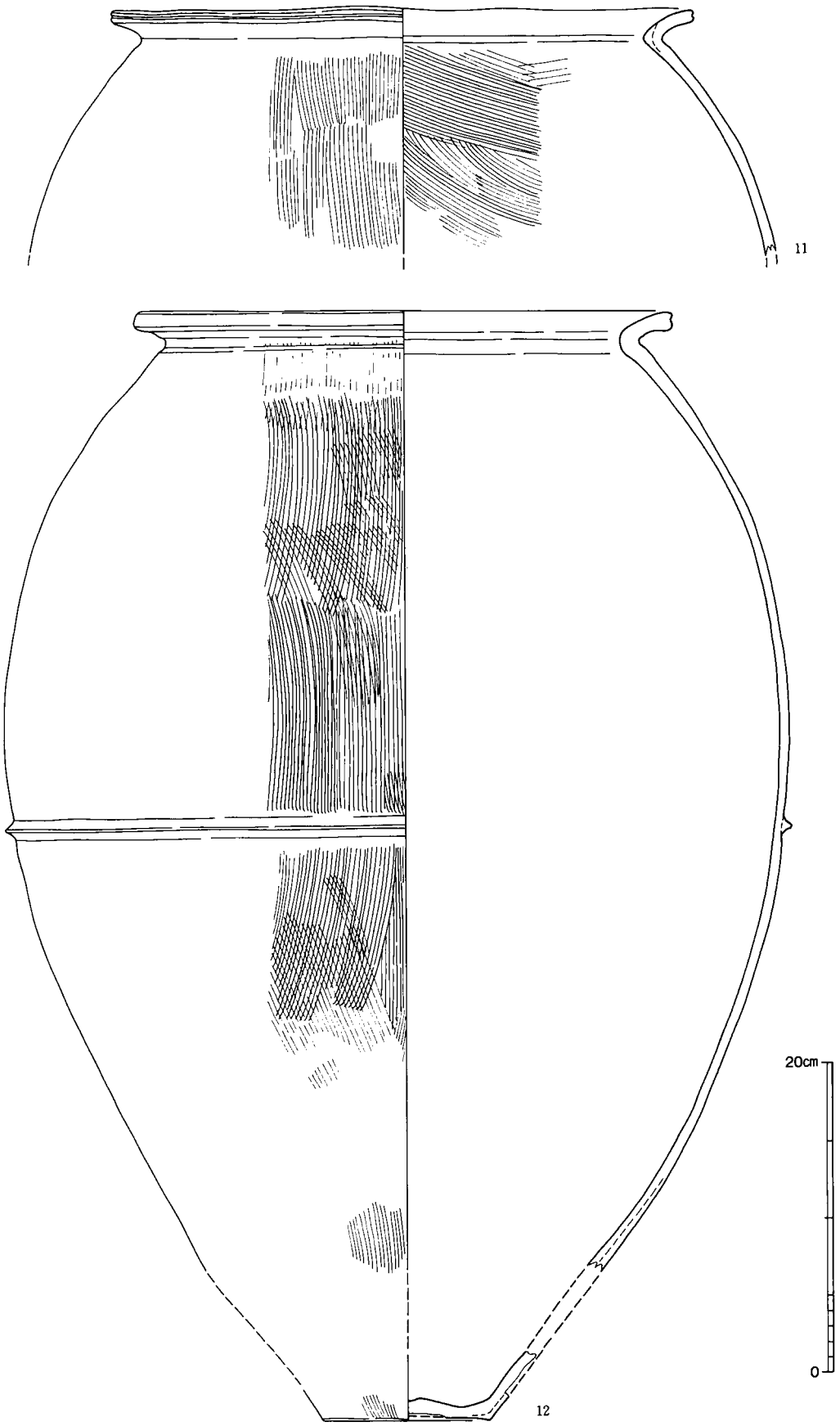
出土土器（図版52、第126図）

弥生土器

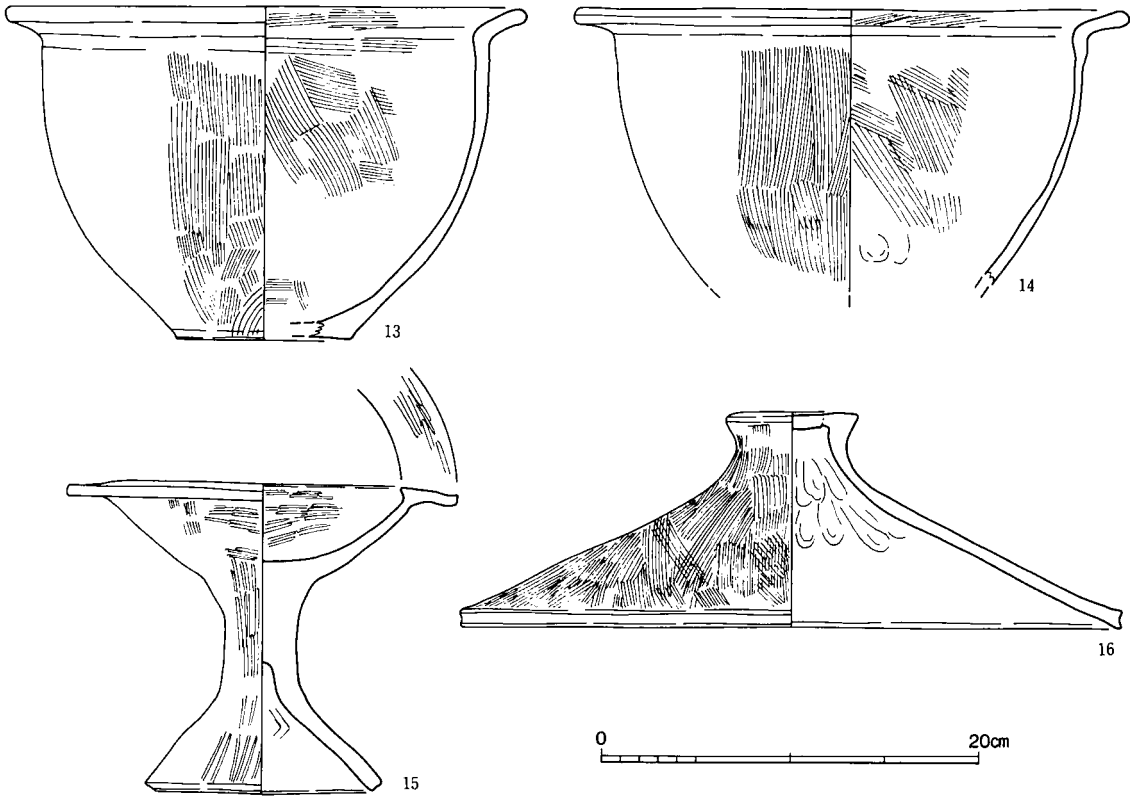
甕（3）強く屈曲する「く」字型口縁を有する甕で、口縁から胴部中位が残存する。口縁端部は肥



第122図　60号土坑出土土器実測図. 1 (1/4)



第123図　60号土坑出土土器実測図．2（1/4）



第124図　60号土坑出土土器実測図. 3 (1/4)

厚し丸く収める。胴部はやや上位に最大径があると思われ、器壁は下位に行くほど薄くなる。外面にはタテハケが観察できる。内面はタテナデで仕上げ、口縁部は強めのヨコナデで仕上げる。復元口径32.4cmを測る。

107号土坑（第127図）

調査区西部、113号土坑の北側で検出した181号溝を切る。南北長1.15m、東西長1.1m、深さ0.18mを測るほぼ円形のプランを呈する。壁は斜めに立ち上がり、底はレンズ状を呈する。埋土は暗灰色粘質土中心である。出土遺物は小片のため図化できない。

108号土坑（第127図）

調査区西北部で検出した、東西1.0m、南北0.9m、深さ0.18mの円形土坑である。底面はレンズ状を呈する。埋土は茶灰色土中心で、埋土から甕片が出土している。

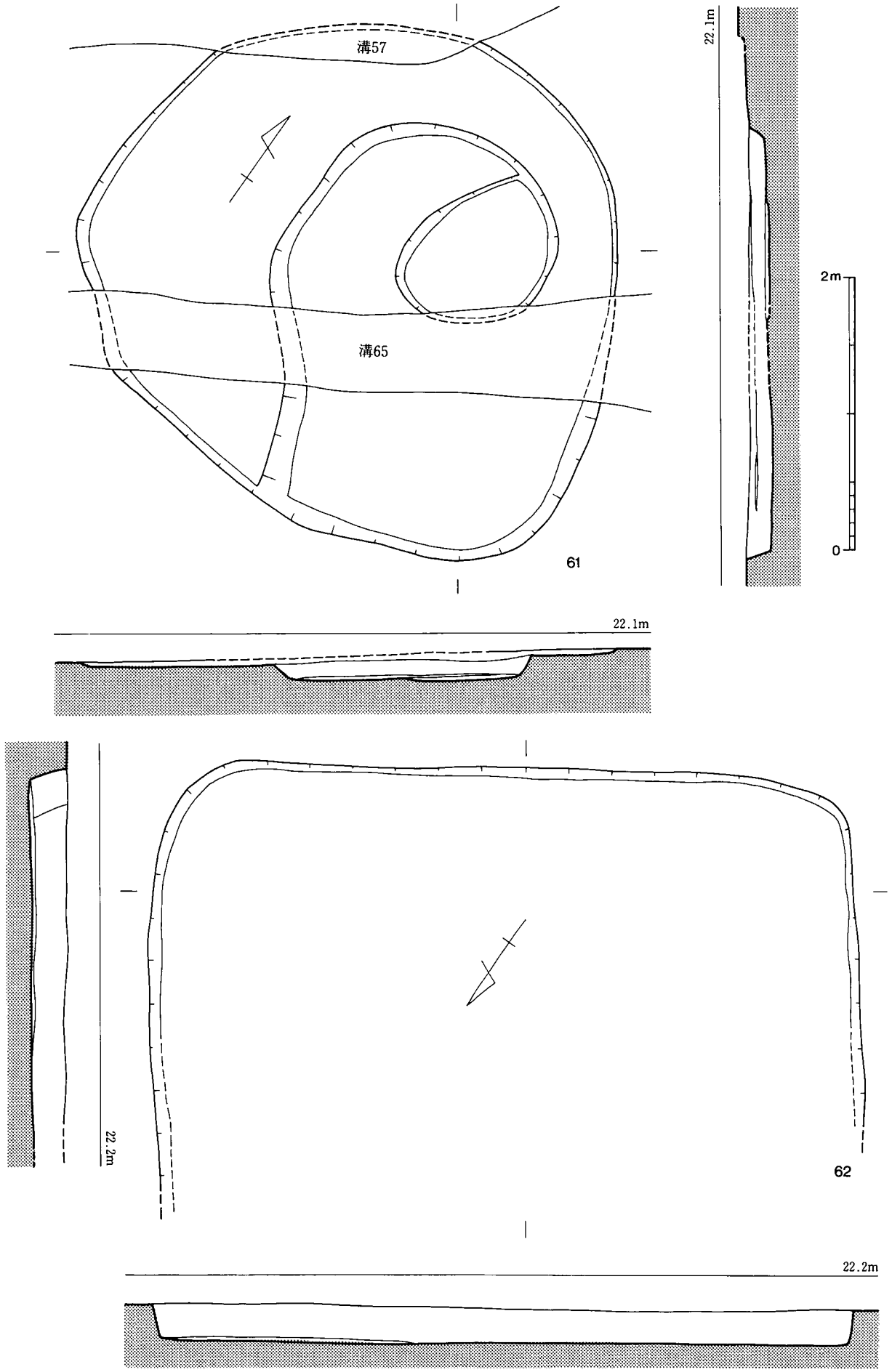
出土土器（第126図）

弥生土器

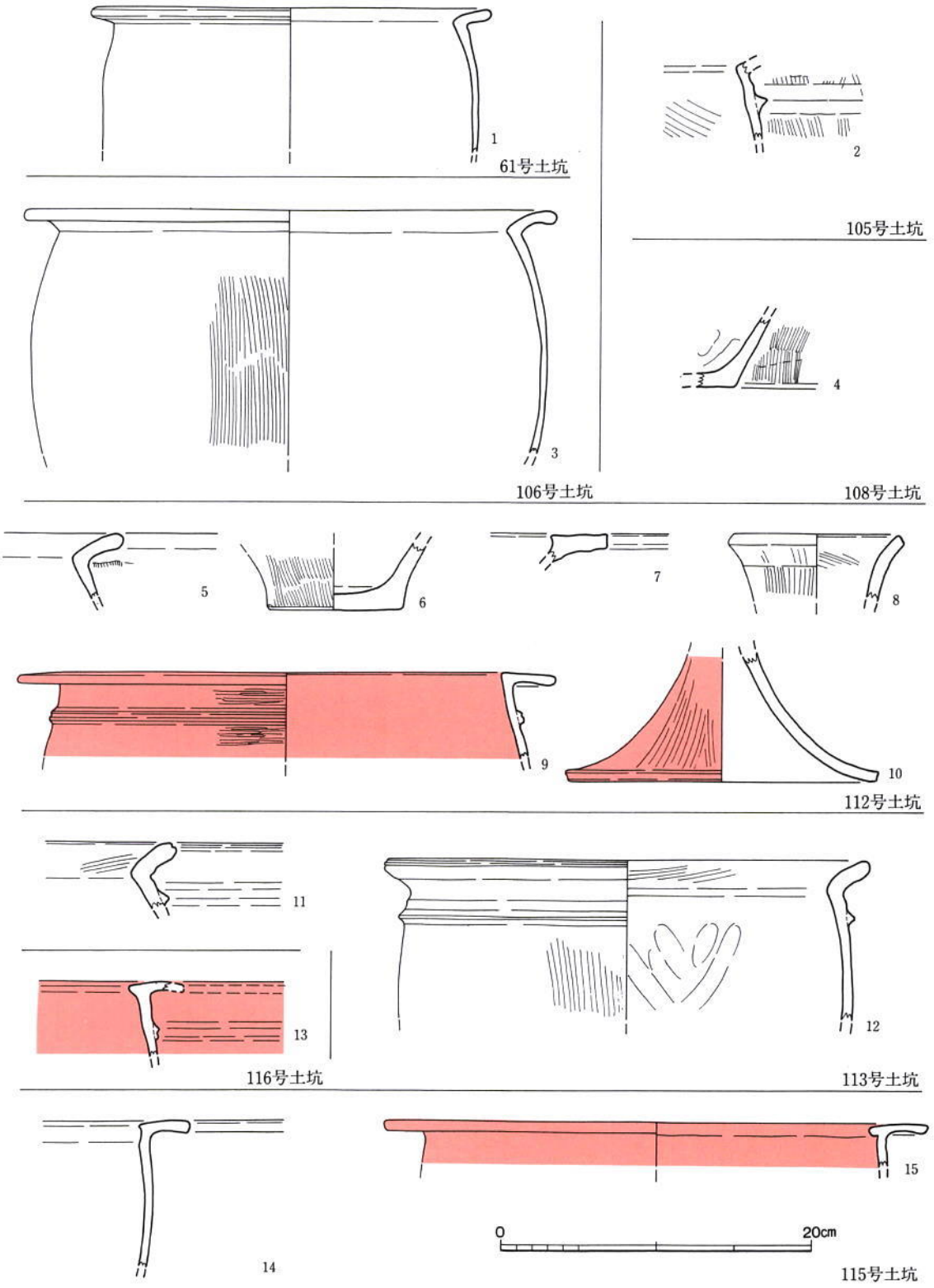
甕（4）甕底部小片。平底で外底部は摩滅が激しいが、外周に沿って強くナデられる。外面はタテハケ、内面には指頭圧痕が残る。器壁は胴部が薄く底部が厚い。

109号土坑（第127図）

調査区西北部の調査区端で検出した。ほとんどが調査区外になるため、全体のプランや性格は不明であるが、ここでは土坑として報告しておく。残存プランは東西0.4m、南北1.65m、深さ0.1mで、コーナーは角を持つ。底面は平坦でピット等に切られる。内部からは弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できない。



第125図　61・62号土坑実測図（1/40）



第126図　61・105・106・108・112・113・115・116号土坑出土土器実測図（1/4）

110号土坑（第127図）

調査区西部の111号土坑南側で検出した。南に細長いテラスを持ち段掘り状になる。別遺構かとも考えたが、埋土に全く変化がないため同一の遺構とした。外形プランは南北1.5m、東西0.85m、深さ0.05m、内部の円形プランは直径0.75m、深さ0.1～0.15mを測る。埋土は暗茶褐色土で、弥生土器片が出土したが小片のため図化できない。

111号土坑（第127図）

調査区西部で検出した。110・112号土坑を切る。長楕円形のプランになると思われる。南北長2.05m、東西残存最大長0.8m、深さ0.2mを測る。弥生土器片が出土したが小片のため図化できない。

112号土坑（第127図）

調査区西部で検出したが、全体のプランは不明である。111号土坑に切られる。残存東西長1.2m、南北長2.7m、深さ0.15mを測る。壁は斜めに立ち上がり底は平坦になるが、土坑というよりは溜まり状の遺構底部付近と思われる。弥生土器と磨製石鏃が出土している。

出土土器（図版53、第126図）

弥生土器

甕（5・6）5は口縁部小片で、全面ナデで仕上げるが、頸部外面に工具木口の当たりが残りタテハケが観察できる。口縁端部は肥厚し、丸く収められる。6は平底の底部片で、外面にはタテハケが残り、内面はナデで仕上げ、外底部は工具によるナデ仕上げする。二次熱を受けて赤変しており、火に掛けられたと思われる。復元底径8.8cmを測る。

壺（7）壺口縁部の小片である。上面は平坦に造られ、ナデのためやや窪む。端部は強いナデで面を造り内側への突出は僅かである。

器台（8）鼓形器台口縁部。外面口縁部付近は工具によるヨコナデのため段がつき、体部は粗いタテハケが残る。内面はタテナデで仕上げ、口縁部下位に斜のハケ目が僅かに観察できる。口縁端部はヨコナデで仕上げる。復元口径10.6cm。

丹塗土器

甕（9）9は強く外反する口縁を有し上面は平坦で端部がやや垂下する。体部外面は横方向に丁寧に磨き、口縁のやや下に「M」字突帯を貼付する。口縁部から内面上位まではヨコナデで丹塗りされるが、内面下位は摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、ナデ仕上げと考えられる。復元口径27.6cm、最大口縁部径34.4cmを測る。

高坏（10）高坏脚部である。外面は丹塗り研磨されるが、僅かにタテハケが残る。内面は摩滅のため不明瞭であるが縦方向の工具痕が僅かに観察できる。裾端部付近にヨコハケが残る。端部付近はヨコナデで仕上げ、端部は強いナデで平坦面を造る。復元底径20.6cmを測る。

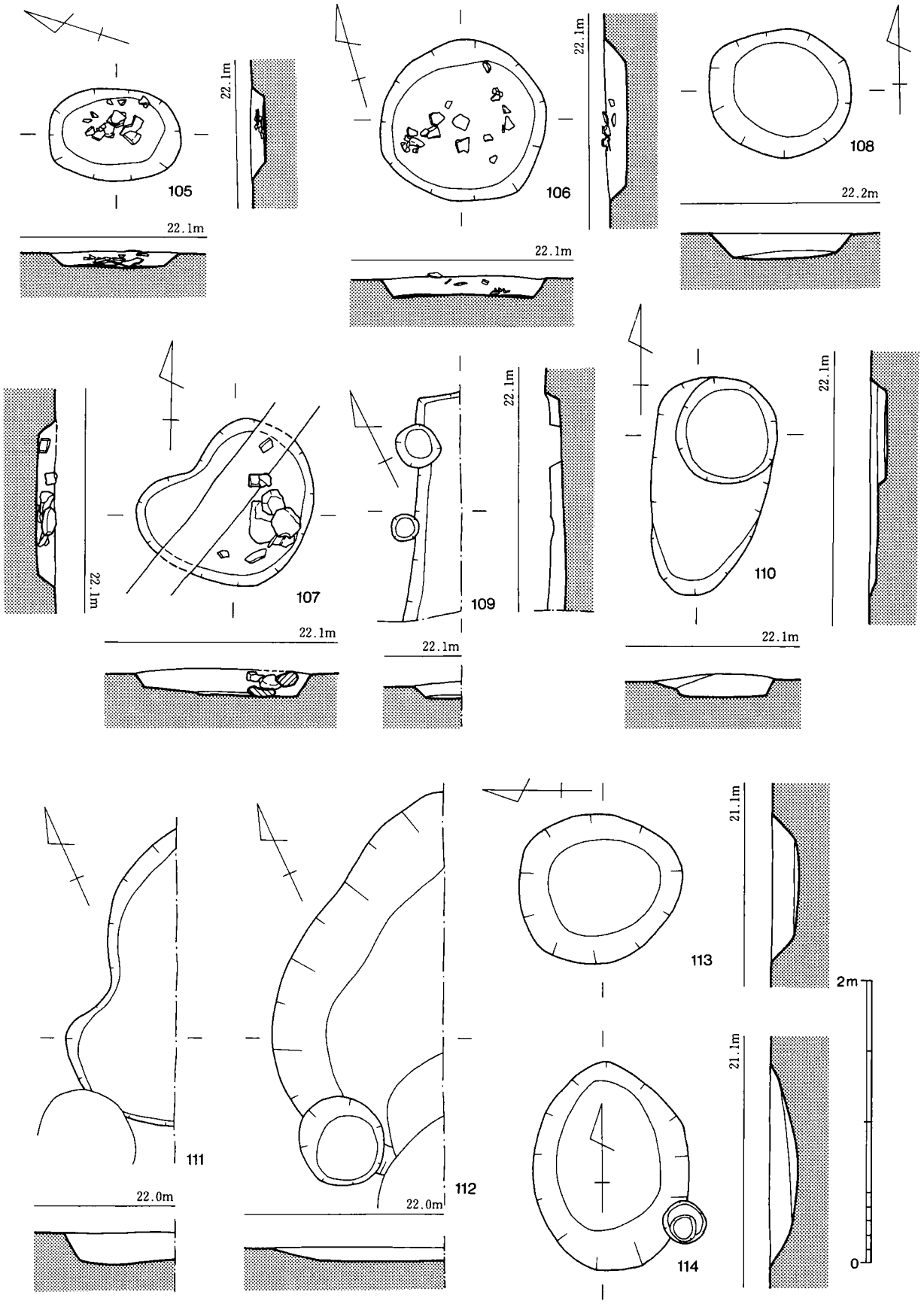
113号土坑（第127図）

調査区西部で検出した。直径1.2m、深さ1.0～0.2mで西北部が窪む不整円形を呈する。181号溝に切られる。埋土は茶灰色土中心で、西北部で礫と甕の口縁片が集中して出土した。礫は据えたものではなく、まとめて寄せた状態であった。

出土土器（第126図）

弥生土器

甕（11・12）11は厚手の甕口縁部小片。強く屈曲する「く」字型口縁で、やや下に断面三角の突帯を貼付する。外面・口縁端部はナデで仕上げ、端部は肥厚させて沈線を巡らせる。口縁部内面は斜のハケ目が残る。12は11とほぼ同型であるが、頸部の屈曲が緩やかである。やや下に断面三角形の突帯を貼付し、体部外面にはタテハケが残り、口縁部内面は斜のハケ目が残る。内面には指ナデの圧痕が残る。口唇部はナデで仕上げ、内面口縁部は工具による擦過で仕上げる。端部はやや肥厚して僅かに内湾し、沈線を巡らせる。復元口径30.2cmを測る。



第127図　105～114号土坑実測図（1/40）

114号土坑（第127図）

調査区西部で検出した。南北長1.5m、東西長1.1m、最深0.2mを測る楕円形プランを呈する。壁は緩やかに立ち上がり底との境は不明瞭である。底はレンズ状を呈し北がやや高くなる。埋土は暗茶褐色粘質土が中心である。

115号土坑（第128図）

調査区西部で検出した。上層の溝に切られ、プランの全容は不明である。残存長軸長1.3m、短軸長1.3m、深さ0.15mの楕円形を呈し、西側にテラスを持つ。壁は緩やかに立ち上がり、底はレンズ状を呈する。上面がほとんど削平されており、底部分のみが残存したと思われる。

出土土器（第126図）

弥生土器

甕（14）甕の口縁から胴部の小片で、逆「L」字型をなす。口縁上面は平坦で、内面はナデによって僅かに内へ突出する。端部は面を造る。摩滅が激しく調整は不明瞭で、口縁部付近内外面にナデが認められるのみである。

丹塗土器

甕（15）甕口縁部で鍬先状をなす。摩滅が激しく端部を僅かに欠くが外面はヨコナデが観察できる。口縁は上部を平坦に造り、内への突出は強い。端部は肥厚させ面を造る。全面に丹塗りが認められる。復元口径27.2cm、口縁最大部径34.8cmを測る。

116号土坑（第128図）

調査区西部で検出した。長軸長1.0m、短軸長0.7m、深さ0.1mの卵形を呈し、上面のほとんどが削平を受けている。壁は斜めに立ち上がり底は若干レンズ状になる。

出土土器（第126図）

丹塗土器

甕（13）丹塗磨研甕の鍬先口縁部で端部を欠く。口縁部はほぼ平坦となり、内面端部が垂下する。頸部下位に「M」字突帯を貼付し、若干ハケ目が残る。内面はナデ調整を施す。

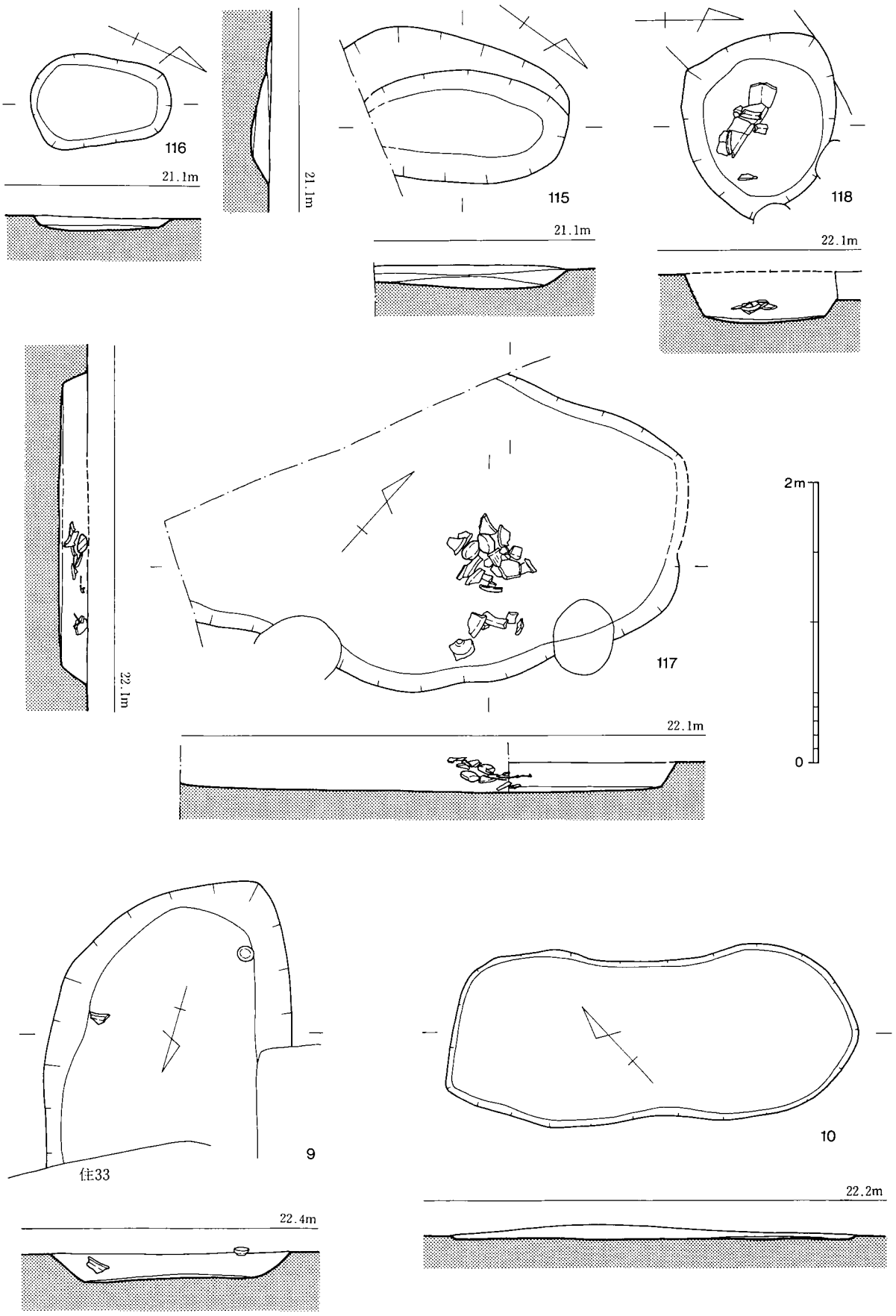
117号土坑（図版28－1、第128図）

調査区西部端で検出した。47号溝に中央部を切られ、また調査区外に広がるためプランの全容は不明である。残存規模は長軸長3.6m、短軸長2.2m、深さ0.2mの楕円形プランを呈する。埋土は最上層が暗灰色土、以下は暗褐色土中心の自然堆積である。ほぼ中央部分には甕破片が礫と共に廃棄された状態で出土した。上面が削平されているため、胴部については接合できる資料はほとんどない。

出土土器（図版53、第129図）

弥生土器

甕（1～13）逆「L」字型口縁と「く」字型口縁のものがある。1は屈曲の強い「く」字型口縁を持ち、外面はタテハケ、内面はタテナデで仕上げられる。口縁はヨコナデで器肉を薄く造り、端部を丸く収める。復元口径21.3cmを測る。2・3は逆「L」字型口縁を持つもので、外面にタテハケが認められる。2は口縁部を肥厚させ胴部は薄く造る。口縁部内面にヨコハケが観察でき、内面は摩滅が激しいがナデ仕上げと思われる。3は外面口縁部下にヨコナデによる稜線が認められる。胴部の器肉は薄く、内面は摩滅が激しいが斜め方向の工具痕が認められる。口縁部上面から外面上部に掛けて煤が付着する。復元口径25・26cmを測る。4～6は「く」字型口縁を持ち、胴部外面にはタテハケ、内面に斜もしくは横方向の粗いハケメが残る。4の口縁は緩やかに屈曲するが、5・6は強く外反し、



第128図　115～118・9・10号土坑実測図（1/40）

口縁の下が若干肥厚する。5の口縁部内面にはヨコハケが認められる。復元口径30.8・30.0・31.4cmを測る。7は緩やかな「く」字型口縁を有し、端部は肥厚させて丸く収める。胴部外面にはタテハケ、内面と口縁部内面にヨコハケが残る。復元口径27.2cmを測る。8は「く」字型口縁を有し、端部を断面方形に造る。外面に細かいタテハケ、内面に粗い斜のハケが残る。復元口径34.4cmを測る。9は緩やかに湾曲する逆「L」字口縁を有し、端部は肥厚させて丸く収める。口縁部のしたには断面三角形の突帯を貼付し、胴部外面から口縁部内面はヨコナデ調整、内面はタテナデ調整で仕上げる。口縁部内面に工具痕らしき傷が認められるが、明瞭ではない。復元口径34.8cmを測る。10・11は逆「L」字に近い「く」字型口縁を有し、胴部外面にはタテハケが認められる。10のタテハケは粗く、屈曲部には指頭圧痕が並ぶ。口縁部はヨコナデ、内面はナデで仕上げる。11は口縁端部を断面方形に造り、屈曲部は肥厚させる。胴部外面のタテハケは細かく、口縁部はヨコナデ、内面はナデで仕上げる。復元口径39.7・44.2cmを測る。12は底部のみの破片で平底。外面には底部付近までタテハケが認められ、一部剝落する。内面も中位が剝落するが、底部付近はナデで仕上げる。底部は二次熱を受けて剝落・摩滅が激しい。底径7.5cmを測る。

器台（14）器台脚部片。外面にはタテハケと斜のハケが残り、端部付近はヨコナデする。内面は中位にタテナデの圧痕が残り、下位には斜のハケ、端部付近には横方向のハケ目が認められる。端部は外面と共にナデられてやや中央が窪む。

高坏（15）鍬先口縁の高坏坏部である。口縁部上面はヨコナデで平坦に造り、外側へ垂下させる。端部は強いナデで断面「M」字状に造り、内への突出は弱い。体部は二次加熱を受けるため外面が大きく剝落し調整は不明である。内面も摩滅が激しく、炭化物が付着している。脚部外面には縦方向の稜線が認められるが、摩滅が激しい。復元口径18.0cmを測る。

丹塗土器

甕（16）丹塗り磨研の甕で、胴部径が口径を凌駕する。口縁部はやや強めに屈曲する「く」字状で、端部を肥厚させて丸く造る。胴部は球形で中位の最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。外面から口縁部内面まで丹塗りを施し、胴部内面と外底部はナデで丁寧に仕上げる。復元口径21.8cm、器高25.5cm、復元底径6.4cmを測る。

118号土坑（図版28－2、第128図）

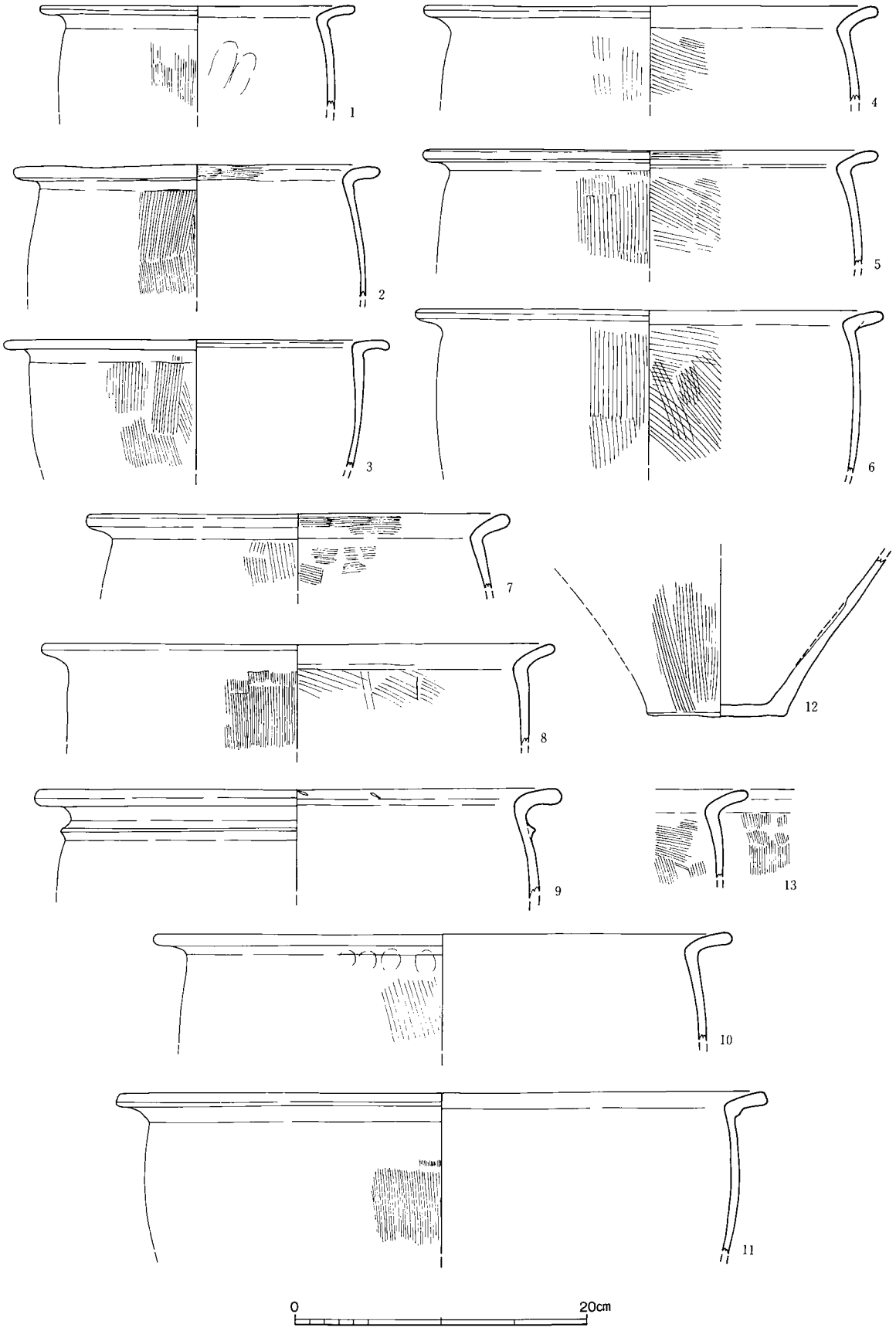
調査区西部端で検出した。47号溝に中央部を切られる。東西長1.3m、南北長1.1m、深さ0.37mの不整円形のプランを呈する。壁は斜めに立ち上がり、底はレンズ状を呈する。内部中位からは割れた甕が廃棄された状態で出土した。上面が削平されているため胴部の接合は不可能であった。埋土は最上層が暗灰色土、以下は暗褐色土中心の自然堆積である。

出土土器（図版53、第131図）

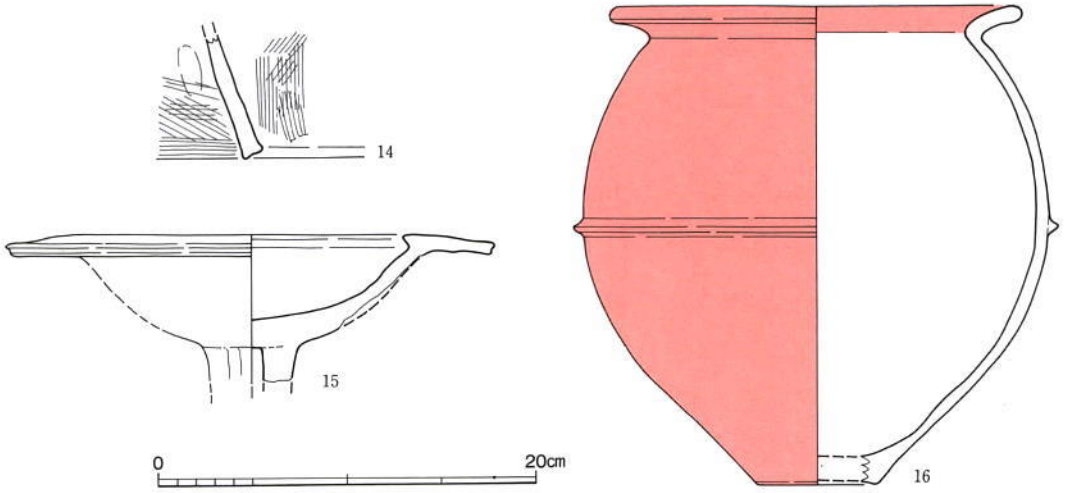
弥生土器

甕（1）底部を欠く甕である。口縁は強く外反する「く」字型口縁を呈するもので、端部は肥厚し丸く収める。器肉の厚さはほぼ均一で、最大径は上位にある。胴部外面には全面にタテハケと下位には斜のハケが認められ、口縁部内面はヨコ・斜のハケが認められる。内面はナデで丁寧に仕上げられ、口縁部外面もナデ調整する。胴部下位は反転復元で、口径31.0cmを測る。

ここで、調査担当者のミスにより報告し忘れた平成8年度調査部分の古墳時代以降の土坑について報告する。



第129図　117号土坑出土土器実測図．1（1/4）



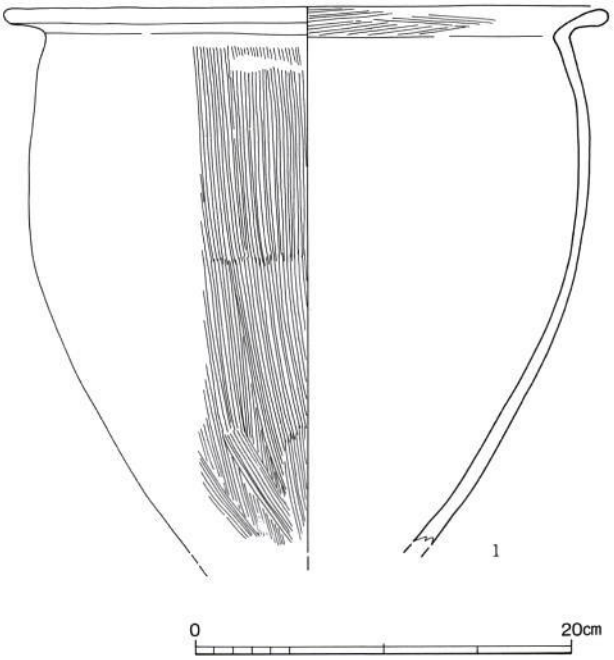
第130図　117号土坑出土土器実測図. 2 (1/4)

9号土坑（第128図）

調査区中央部南寄りで検出した。28号・33号竪穴住居跡と重複し、これらよりも古い。平面プランは東西1.6m、南北1.8m＋αの楕円形を呈する。深さは0.2mである。少量の土師器が出土している。

10号土坑（第128図）

調査区中央南よりで検出した。平面プランは南北1.1m、東西2.8mの楕円形を呈する。深さは、最深部で0.03mである。



第131図　118号土坑出土土器実測図 (1/4)

5　溝

10号溝（図版28－３・29－２、第132図）

昨年度に報告しているとおり、13a号溝の埋没過程で溝としての機能を失わず、古墳時代以降まで使用されていたものと考えている。なお、遺物は盛土内からの出土で厳密に13a号溝の盛土出土のものと区別はできない。弥生土器、土製勾玉が出土している。

出土土器（第133図）

甕（１～７・9・11）１は鋤先状の口縁を呈する甕である。内外面の調整はナデ。２・３は口縁部を外側に強く折り曲げる甕である。口縁端部は丸く仕上げている。４～７は「く」字型口縁に近いものである。口縁端部は丸く仕上げられ、緩やかに外反している。９は甕の底部。ややレンズ状に膨らむ。内外面ともに調整はナデである。11はこの溝出土の他の甕より新しい形態の甕である。「く」字型口縁を呈し、口縁端部は角張って仕上げられる。肩部内外面の調整はハケメである。

鉢（10・12）10はやや深めの鉢である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。12もその他の土器より新しい鉢。甕11の時期により近いと思われる。口縁は直線的に広がり、内外面の調整は横方向のミガキである。

壺（８）８は壺の底部か。やや上げ底気味である。内外面の調整はナデである。

13ａ号溝（図版28－３・29－１、第132図）

調査区の中央付近に位置し、暗茶褐色土層上面（第２遺構面）で検出した溝である。南西－北東方向に直線的に延びており、昨年度報告した第１面の10号溝の下位に位置している。溝幅は上面において約2.8ｍで東に向かうにつれて溝幅が細くなっており、東部は上面が削られているものと思われる。

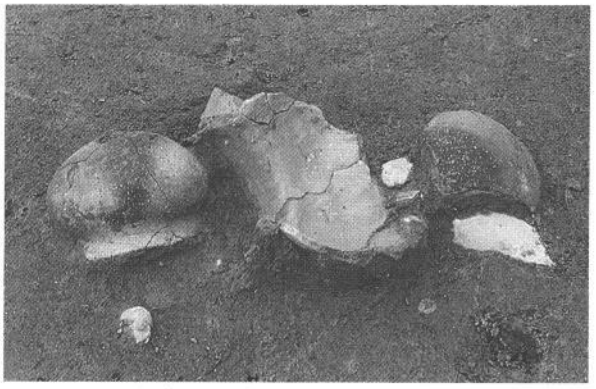
溝の壁の傾斜は緩やかで、深さは遺構面から約0.85cmと浅い。深さを比較すると、南に向かって緩やかに傾斜しており、美津留川の流れと同様に北から南に水が流れていたものと思われる。最下層はシルト層であり、水が流れていたものと考えられる。

この溝の両岸には高さ約30cm、幅2.4mの盛土があり、溝とセットをなしている。この盛土の高さを足すと、幅約4.5m、深さ約1.1mとなる。

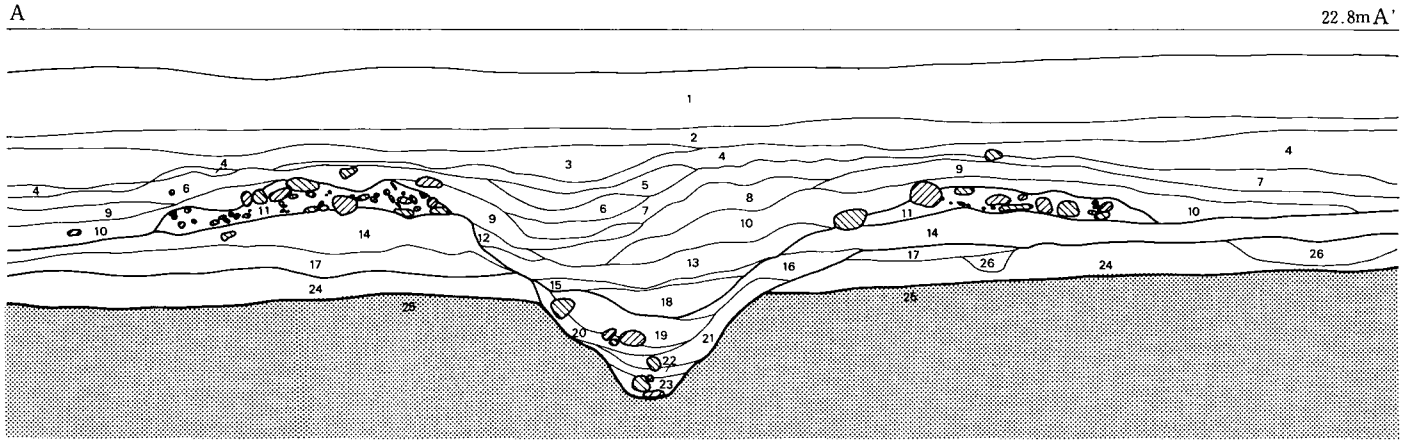
盛土は、基礎となる部分の層に礫が多く混じる。溝の掘削土を用いて盛土を造ったと思われるが、基礎部分に礫が集中することから、単に掘った土を置いただけではなく、盛土の基礎工法の可能性もある。しかし、礫混じりの層は礫敷きと呼べるものではなく土質にも特に粘性も無いので、掘削土を計画的に利用したものと思われる。

この溝の埋土は、東から流れ込んでおり、多くの礫が混入している。おそらく、川の氾濫によって、盛土が崩壊したものであろう。また、本溝埋土の上位と同じ土層が溝の対岸にも見られるので、この氾濫の影響が集落まで及んでいたと考えられる。

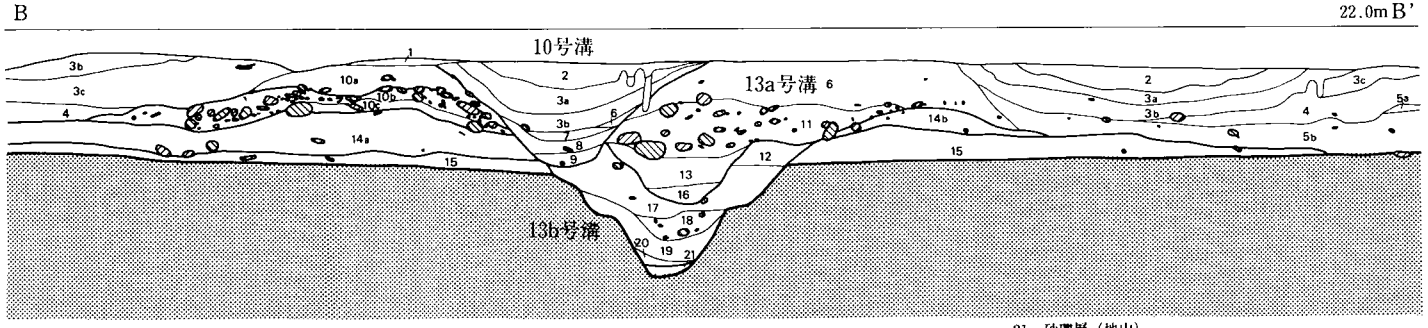
溝13aが切る遺構はないが、セットとなる盛土の下から、85～88号竪穴住居跡、24・33・35・39・40・44・45号土坑、18号溝が検出されている。



13号溝西側盛土上面土器出土状況



1．客土
2．耕作土（圃場整備後）
3．灰褐色微砂（鉄分多く含む）
4．3に6がブロック状に混入
5．暗灰褐色砂質シルト
6．5よりやや暗い
7．9よりやや暗い
8．9よりやや明るい
9．黒褐色シルト
10．黒灰褐色砂質シルト
11．黒褐色シルト＋細砂・粗砂・円礫多量に含む
12．11とほぼ同じ
13．暗茶灰色微砂＋粗砂
14．茶灰褐色微砂（盛土か）
15．17よりやや暗い
16．暗茶褐色微砂
17．黄褐色微砂
18．灰褐色砂質シルト
19．暗灰褐色砂質シルト
20．暗黄灰色砂質シルト（粗砂混）
21．暗灰褐色微砂・粗砂
22．暗灰茶色・微砂・粗砂
23．暗黄灰褐色粗砂＋小礫
24．暗黄褐色微砂（無遺物）
25．暗黄灰褐色微砂・粗砂（円礫多量に含む、無遺物）
26．暗黄灰色微砂



1．明黄灰色土
2．明灰白色土
3a．やや明るい暗黒褐色土
3b．暗黒褐色土
3c．暗褐色土
4．やや明るい暗茶褐色砂質土
5a．暗茶褐色砂質土
5b．茶褐色砂質土
6．ややにぶい暗黒褐色砂質土（盛土の崩落か）
7．にぶい暗灰褐色土
8．暗黒灰褐色土
9．にぶい灰褐色砂質土
10a．淡暗黒褐色砂質土
10b．暗黒褐色砂質土（礫を多量に含む）
10c．暗茶褐色砂質土（礫を多量に含む）
盛土
11．やや明るい暗黒褐色砂質土
12．暗茶褐色粘質土
13．黄灰色砂層
14a．暗茶褐色土層
14b．やや暗い暗茶褐色土
15．暗褐色砂質土
16．灰色砂質土（鉄分を含む）
17．灰褐色砂質土（円礫、指頭大の砂利含む）
18．暗褐色砂質土（円礫・土器含む）
19．黄褐色砂質土（指頭大の砂利含む）
20．茶褐色砂質土（土器含む）
21．砂礫層（地山）

0　3m

第132図　10・13a・13b号溝土層実測図（1/60）

13ｂ号溝（図版28－３・29－１、第132・134図）

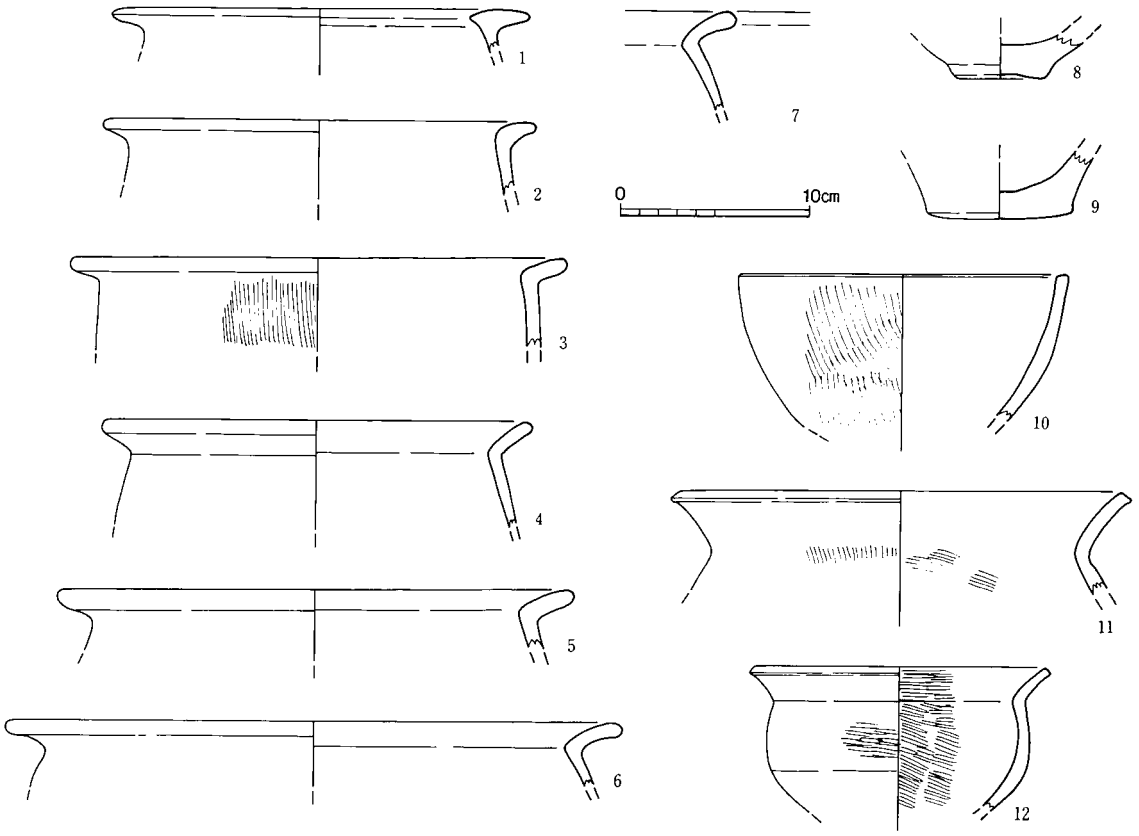
暗黄灰褐色土層（第3遺構面）から掘り込まれている。13a号溝の下位に位置し、幅約2.6m、深さ約1.1mを測る。最底部の断面形態は凹形で、この部分の堆積がほぼ水平で、小礫が混じることから、水が流れていたと考えられる。遺構面からは確認できなかったが、土層から見ると中位で溝の掘り直しが見られる。掘り直しの溝は、暗黄灰褐色土層（第3 遺構面）の上の黄褐色土層から掘り込まれている。

この溝は85・88号住居、39・40・52号土坑を切っている。

出土土器（図版54・55、第135～139図）

弥生土器

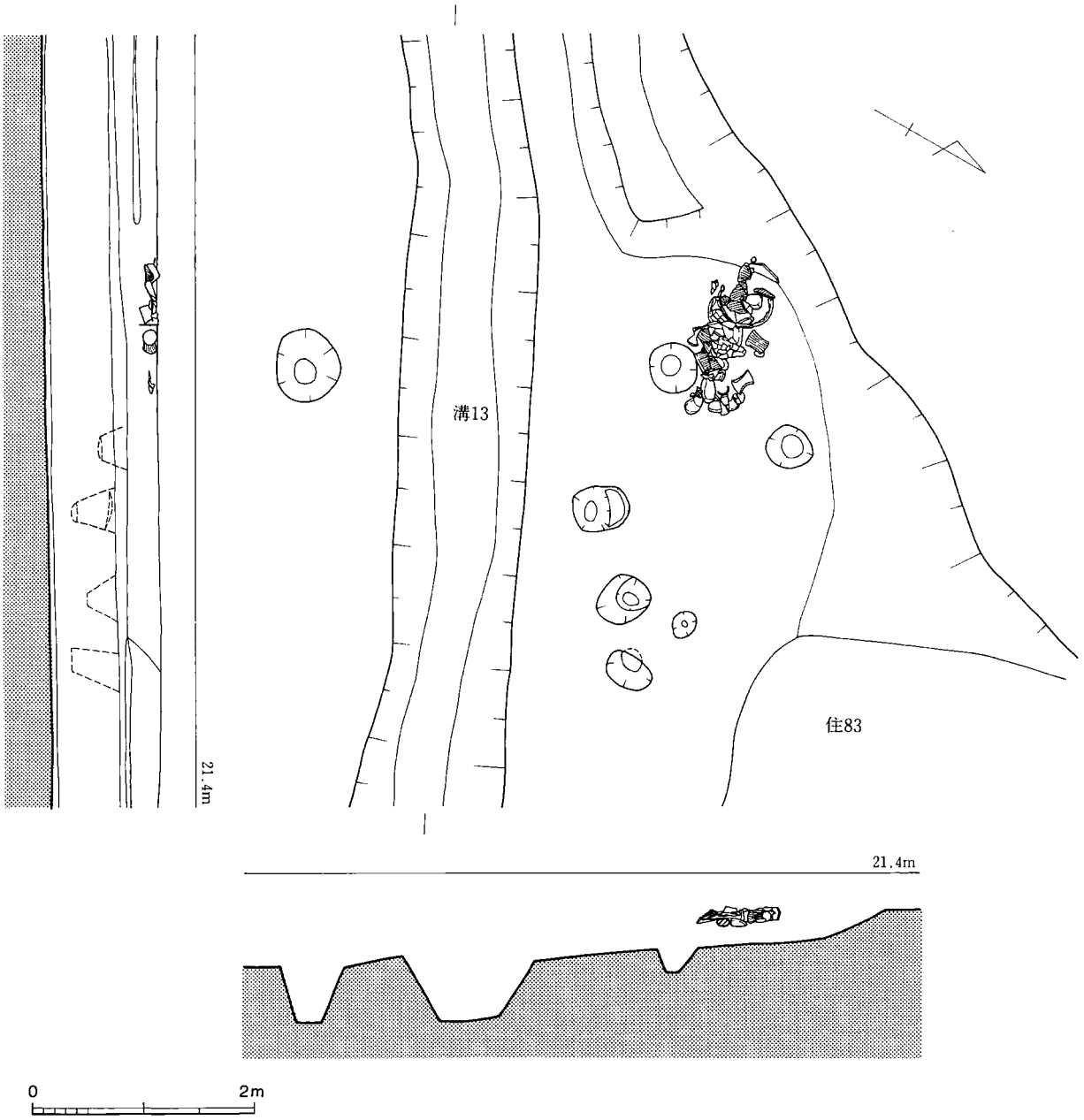
甕（１～８・10～33・54）１は中型の甕。口縁は外側に強く折り曲げられる。外面の調整はハケメ。内面は板状工具によるナデ。外側口縁部下にはハケメを切り一条の三角突帯が貼り付けられる。突帯部分内面は貼り付けによりわずかに膨らんでいる。２も口縁部を外側に強く折り曲げる甕。口縁端部は丸く仕上げられる。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。黒斑が底部の一部に観察できる。３は鋤先状を呈する甕の口縁部。口縁端部は外側にわずかに垂れる。３は外面の調整がハケメ、内面の調整はナデである。口縁部の一部に黒斑が見られる。４・５・31は口縁下に一条の突帯を貼り付ける甕で、貼り付け時に内側部分がわずかに膨らむ。いずれも口縁端部は角張って仕上げられる。４の内外面の調整はナデ。５の口縁端部はわずかにはね上げ気味。口縁直下のくびれた部分に三角突帯が貼り付けられ、外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。外面には化粧土が塗られる。６・７は鋤先状の口縁を呈し、胴部が大きく膨らむ甕の口縁部。いずれも口縁端部は外側にやや垂れ気味である。内外面の調整はナデである。８は中型の甕の胴部である。外面の調整はハケメ。このハ



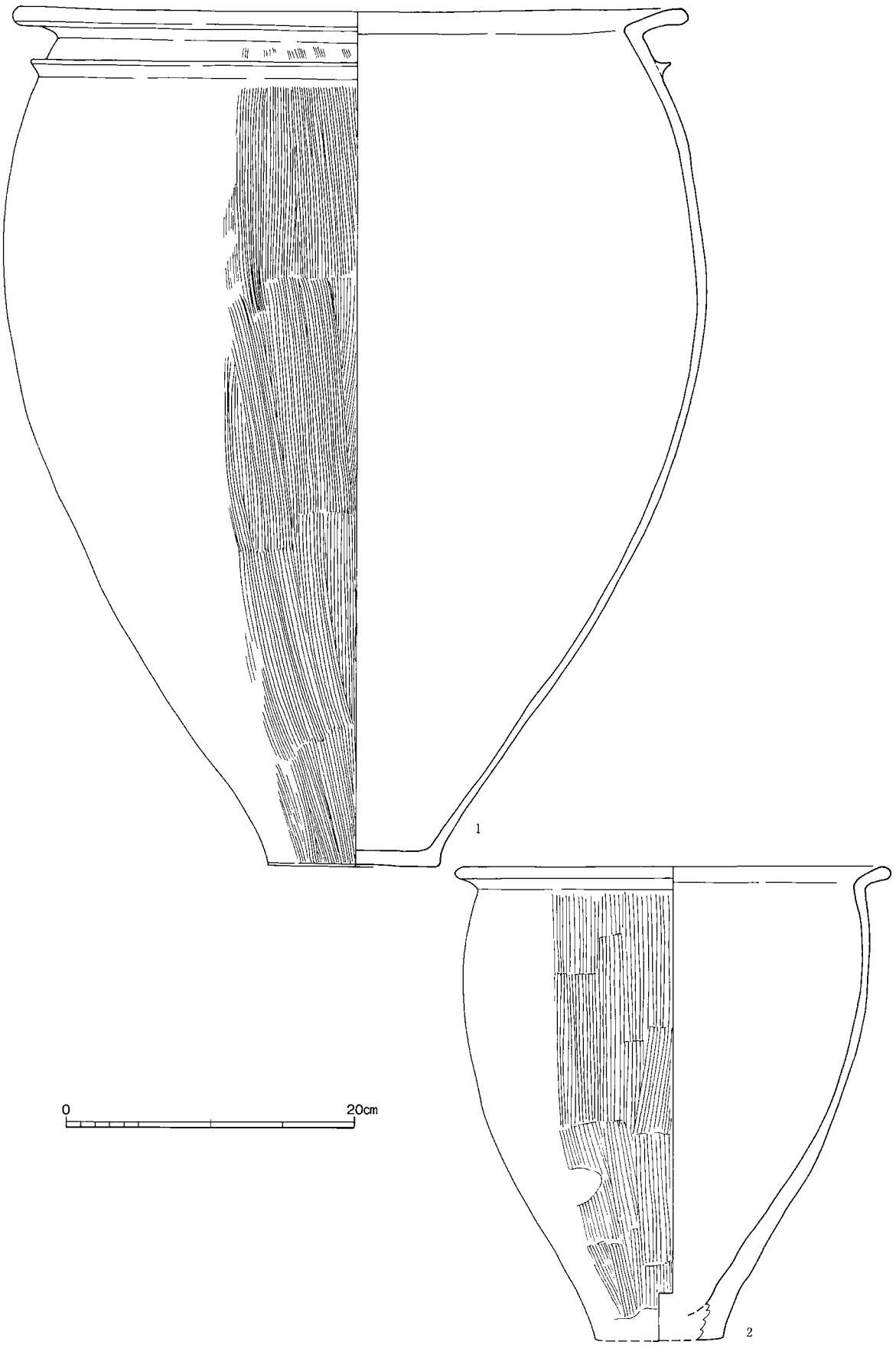
第133図　10号溝出土土器実測図（1/4）

ケメの後に胴部最大径の部分に垂れ気味の突帯が貼り付けられる。貼り付けられた部分の内側はわずかに膨らむ。内面の調整はナデ。10～15・18・23～25・28・30は口縁部を外側に強く折り曲げる甕の中で、口縁端部を丸く仕上げるもの。16・17・19～22・26・27・29は口縁部を外側に強く折り曲げる甕の中で、口縁端部を角張って仕上げるもの。22の外面の調整は縦方向のハケメ、内面の調整は横方向のハケメである。32・33は甕の底部である。いずれもわずかに上げ底気味で厚い。33は外面がハケメの後、底から2cmまで横ナデによってナデ消されている。内面には指頭圧痕が残る。54は甕の胴部から底部にかけての破片である。他の甕より新しい。内外面の調整はハケメである。

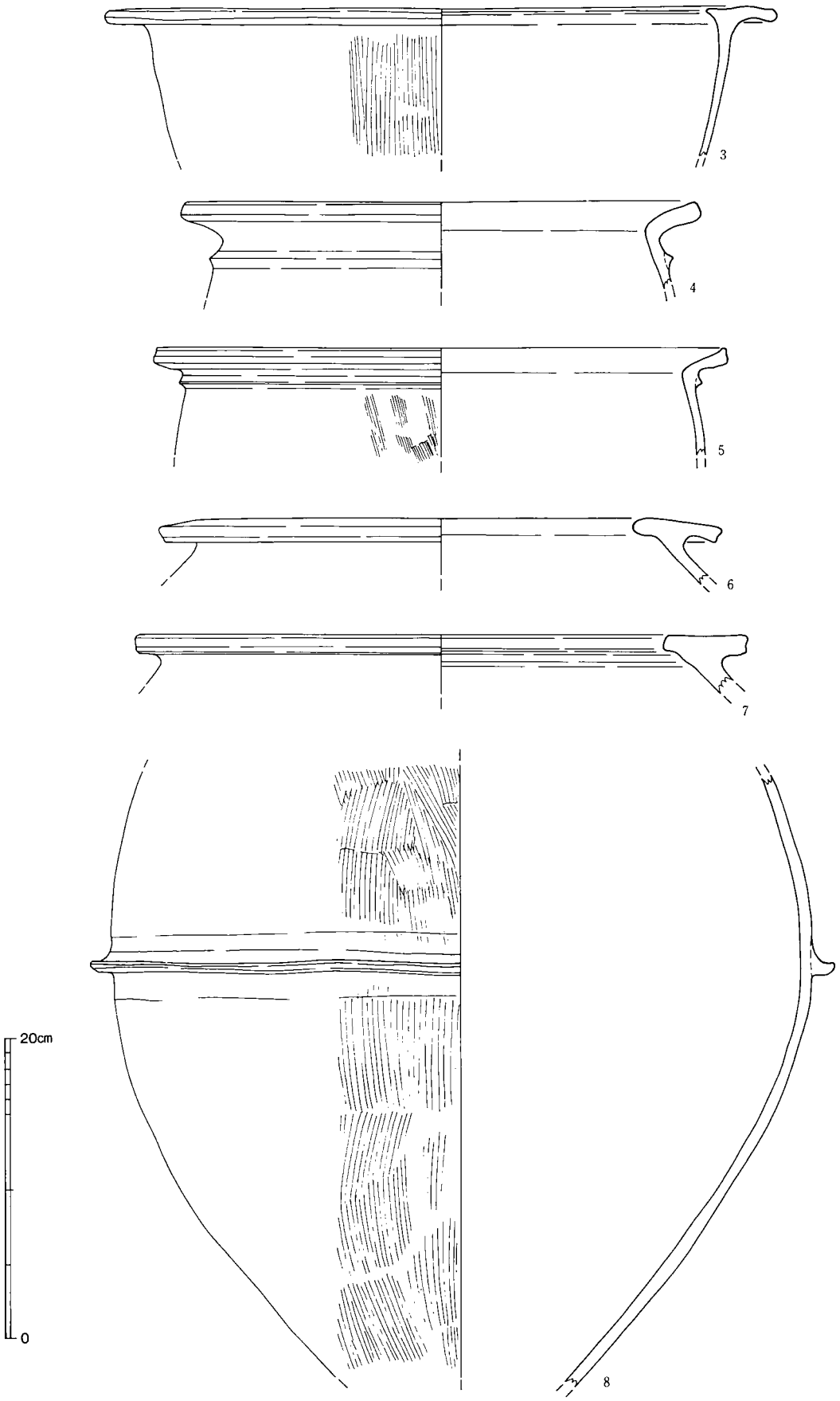
鉢（36～47・55・56）36～42は口縁部を外側に強く折り曲げる鉢。36の口縁部と胴部の境にはハケメの工具原体痕が残る。43～46は小型の鉢。いずれも胴部が膨らみ気味である。47は中型の鉢で他の鉢より新しい。丸みを持つ器形で外面の調整は口縁部付近がタタキ、それより下はケズリ。内面の調



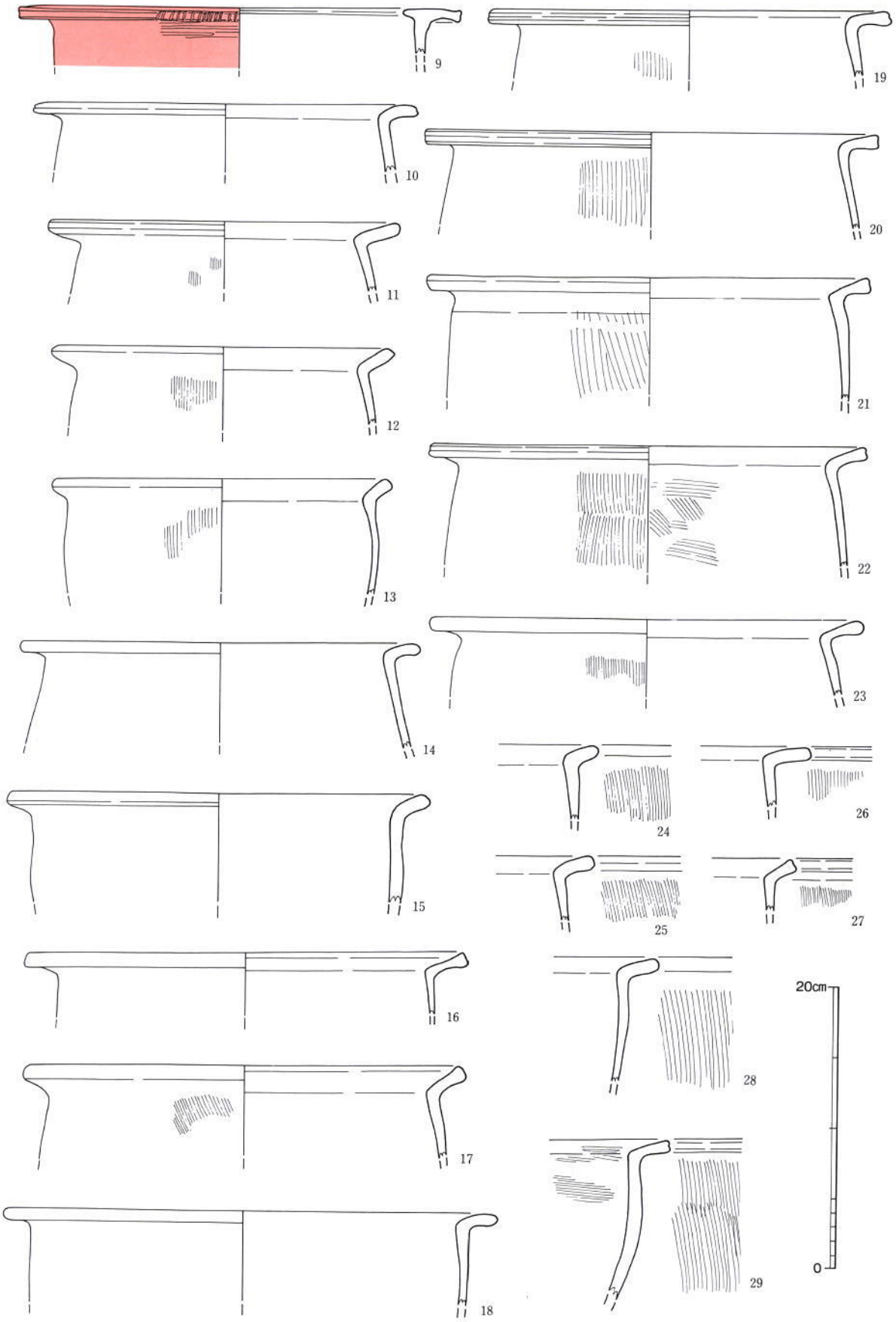
第134図　13号溝西端付近土器出土状況（1/60）



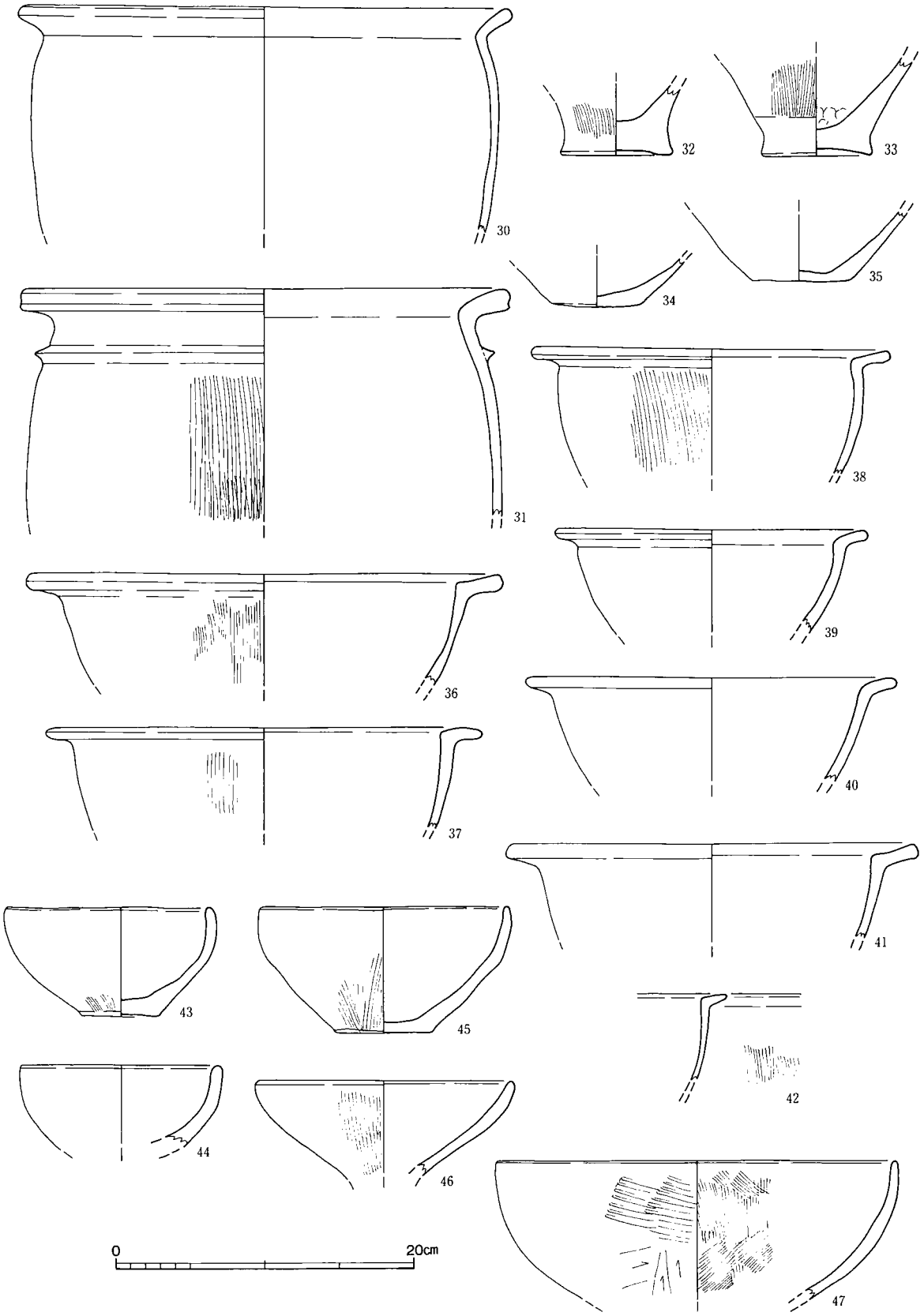
第135図　13号溝出土土器実測図．1 (1/4)



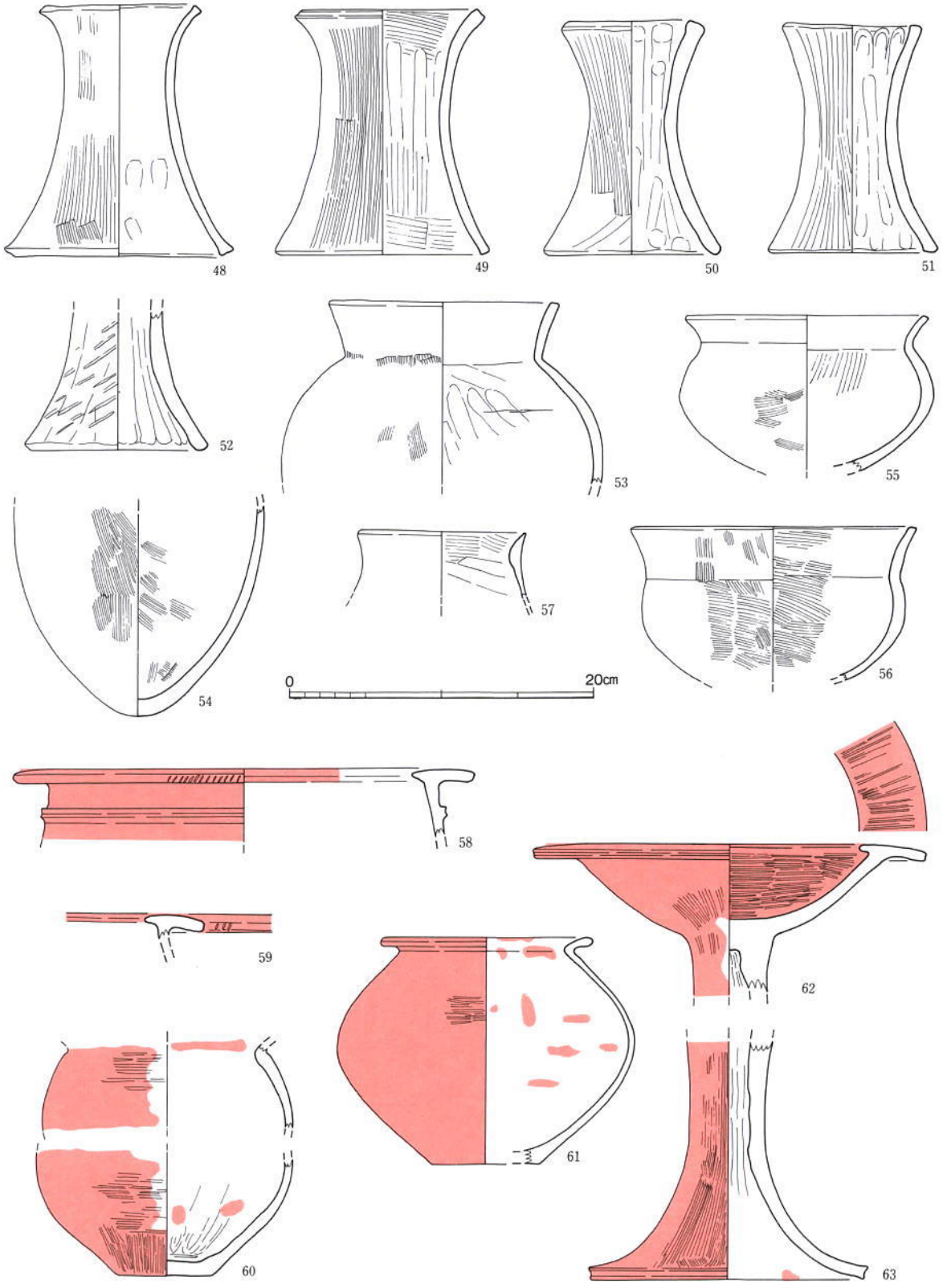
第136図　13号溝出土土器実測図．2（1/4）



第137図　13号溝出土土器実測図．3 (1/4)



第138図　13号溝出土土器実測図．4 (1/4)



第139図　13号溝出土土器実測図．5（1/4）

整はハケメである。胴部には黒斑が残る。

壺（34・35・53）34・35は壺の底部である。わずかにレンズ状に膨らみをもつ。53は口縁が直線的に広がる壺。胴部外面の調整はハケメ。内面は横方向に接合痕が残り、強いナデが施される。

器台（48～51）口縁も底部もあまり広がらない器台。48～52は外面の調整は縦方向のハケメ。内面は全体に強い圧痕が残り、口縁部と底部に横方向のハケメを施している。

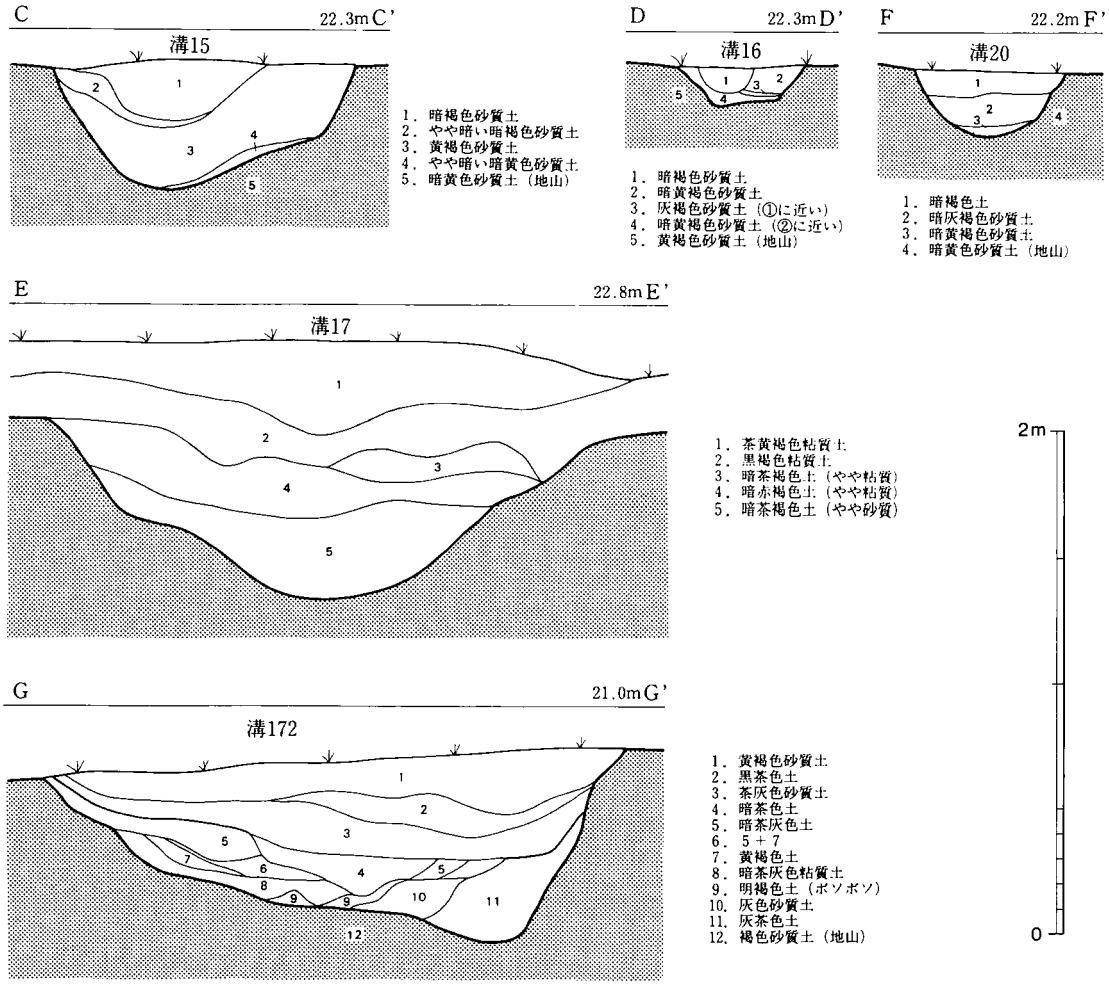
支脚（52）支脚の底部である。外面の調整はタタキの後、ナデ。内面には強い指頭圧痕が残っている。内面に指を入れ、外面からのタタキで成形したものであろう。器表面に二次加熱の痕跡が残る。

丹塗土器

甕（9・58・59）9・58・59は丹塗の甕。鋤先状の口縁を呈し、口縁端部には刻み目をつける。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデ。58は口縁下に「M」字型突帯を貼り付ける。

壺（60・61）60・61は無頸の小型壺。上下は同一個体と思われるが接合しない。外面の調整はミガキ、内面は強いナデ。外面のみに丹塗が施されるが、内面にも一部垂れている。

高坏（62・63）62は高坏の坏部。鋤先状の口縁を持ち、外面の調整はハケメ。内面の調整はミガキである。口縁上端面に暗文が施される。丹は全体に塗られている。63は高坏の脚部。外面の調整はハケメ。内面には絞り痕が残り、脚部付近はナデ。外面のみに丹塗が施されるが、一部内面に付着している。



第140図　15～17・20・172号溝土層実測図（1/30）

土師器

甕（57）混入の土師器の甕。外面の調整はハケメ。内面はケズリで、口縁部付近はハケメ。

14号溝

調査区中央部やや東よりで検出した。調査区外から北東方向に伸び途中で消滅する。

出土土器（第141図）

弥生土器

甕（１～６）１～５は口縁部を外側に強く屈曲させる甕の口縁部。

15号溝（図版29－２、第140図）

調査区中央付近で検出した。北東端は消滅し、南西端は調査区外へ伸びる。幅1.2m、深さ0.5m程度。砂質土がレンズ状に堆積していた。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版53、第141図）

弥生土器

甕（７～16）口縁部を外側に強く屈曲させる甕の口縁部。10はやや新しい傾向をもつ。

壺（17・18）17は壺の底部である。内外面の調整はナデである。18は袋状口縁壺の口縁部である。口縁部最大径に稜線がつく。口縁端部は角張っている。

丹塗土器

壺（19）小型の無頸壺である。口縁部はほぼ水平に強く折れ曲がり、端部を丸く仕上げる。口縁部には上から下への穿孔一つが施される。外面の調整はミガキ。内面の調整はナデ。外面は全体に丹塗が施され、一部内面に垂れている。

16号溝（第140図）

調査区の中央部北よりを東西に走る溝。東側は調査区外に伸びる。西側は９号住居に切られる。幅0.5m、深さ0.15mである。砂質土が堆積していた。出土遺物はない。

17号溝（図版29－３、第140図）

調査区中央部やや東よりを北東から南西方向に走る溝。端部はいずれも調査区外に伸びる。幅2.6m、深さ0.6m。砂質土がレンズ状に堆積していた。遺物は弥生土器、磨製石鏃が出土している。

出土土器（第141図）

弥生土器

甕（20～22）20は口縁部が外側へ強く屈曲する甕の口縁部。21は口縁部下に三角突帯を貼り付ける。貼り付け部分内側はやや膨らむ。内外面の調整はナデ。

丹塗土器

注口土器（23）注口部分のみが出土している。ナデによって仕上げられた円錐形で直径約５㎜の穿孔を行う。外面には丹塗が施される。

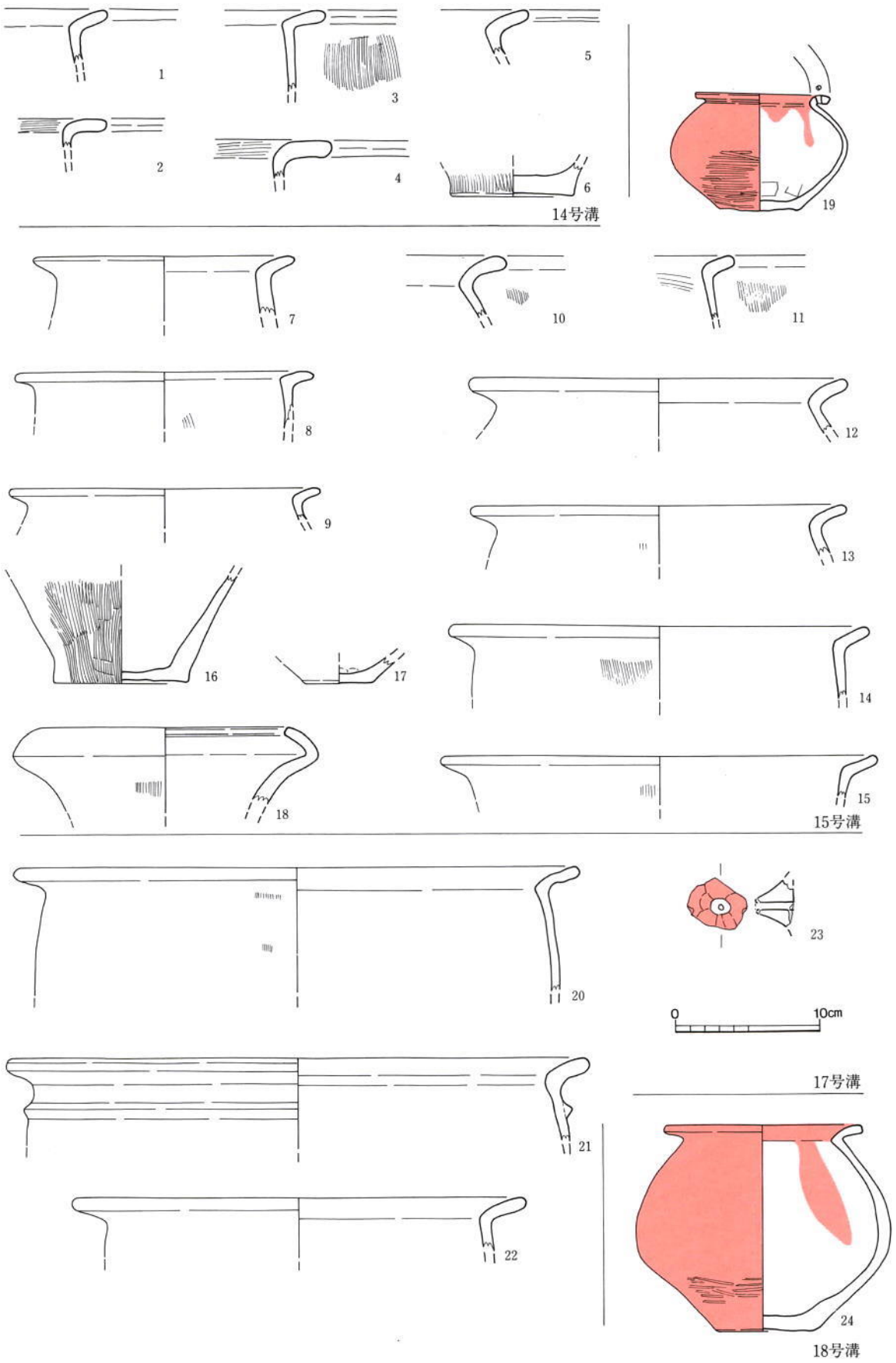
18号溝

調査区東南部分で検出した。13号溝にきられ、88号住居跡、36･38号土坑をきる。幅0.5m、深さ0.17mである。埋土は暗褐色砂質土である。

出土土器（図版53、第141図）

丹塗土器

壺（24）丹塗の無頸壺。やや「く」字型を呈し、口縁端部はやや角張って仕上げる。外面の調整はミガキ。内面の調整はナデ。外面は丹塗が施され、内面の一部に垂れている。



第141図　14・15・17・18号溝出土土器実測図（1/4）

19号溝

調査区東北部分で検出した。24号土坑をきる。幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物はない。

20号溝（第140図）

調査区中央部西よりで検出した。北東から南西に走る。北東端は直角に折れ、消滅する。南西端も消滅する。幅1.3m、深さ0.4mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第142図）

弥生土器

甕（1・2）1は「く」字型に近い口縁を呈する甕。内外面の調整はナデである。2は鋤先気味の口縁を呈する甕である。外面の調整はナデ。

22号溝

調査区中央部やや東よりで検出した。北東から南西に直線的に走る溝。幅0.25m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

23号溝

調査区中央部南西よりで検出した。北西から南東に直線的に走る。南東端は15号溝に切られる。北西端は調査区外に伸びる。幅0.5m、深さ0.15mである。出土遺物はない。

24号溝

調査区東端部中央付近で検出した。北東から南西に直線的に走る。溝18と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.1mである。少量の弥生土器が出土している。

出土土器（図版53、第142図）

弥生土器

器台（3）脚部から胴部にかけて緩やかにすぼまり、口縁部で大きく開く器台。上下端部は角張って仕上げられており、外面は縦方向のハケメ調整。内面は強い指頭圧痕後に上下端部に横方向のハケメを施している。

25号溝

調査区東端部中央付近で検出した。北東から南西に直線的に走る。幅0.4m、深さ0.05mである。少量の弥生土器が出土している。

出土土器（第142図）

弥生土器

甕（4）鋤先気味の口縁部を持つ甕。口縁上部を平坦に仕上げる。内外面の調整はナデ。

26号溝

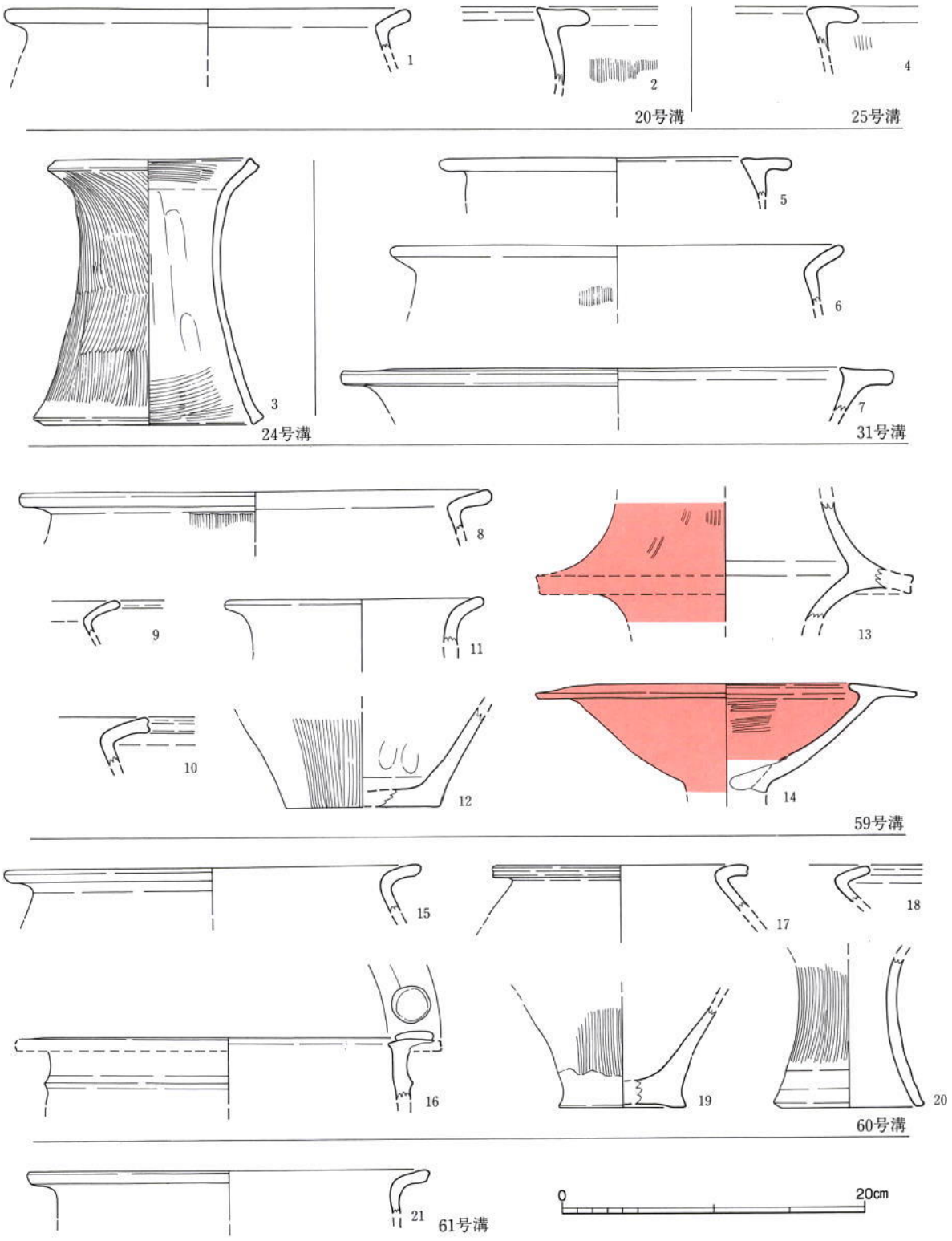
調査区北東端部で検出した。東西方向にやや蛇行しながら走る溝。西端は消滅し、東端は調査区外に伸びる。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

27号溝

調査区東部分中央付近で検出した。北西から南東方向に走る溝。両端とも消滅する。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

31号溝

昨年度、報告した溝であるが弥生土器が出土しているので掲載する。



第142図　20・24・25・31・59・60・61号溝出土土器実測図（1/4）

出土土器（第142図）

弥生土器

甕（5～6）5は口縁を鋤先気味に仕上げる甕。内側への発達は見られない。口縁上部を平坦に仕上げている。6は口縁部を外側へ強く折り曲げる甕。口縁端部を丸く仕上げている。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

54号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。両端部は調査区外に伸びる。幅は0.5m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

55号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端は54号溝に切られ、南西端は消滅する。幅0.5m、深さ0.15mである。出土遺物はない。

56号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端は54号溝に切られ、南西端は調査区外に伸びる。出土遺物はない。

57号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東は56号溝に切られ、南東は調査区外に延びる。幅0.8m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

58号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。東北端は調査区外に伸び、南西部は57号溝に切られる。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

59号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端部は100号住居に切られる。南西端部は調査区外に伸びる。幅0.9m、深さ0.3mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版53、第142図）

弥生土器

甕（8～12）8・9・11は口縁を強く外側へ折り曲げる甕。いずれも口縁端部を丸く仕上げている。10は口縁端部を角張って仕上げており、内外面の調整はナデ。12は甕の底部。平底であまり厚くない。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデで指頭圧痕が残る。

丹塗土器

筒形器台（13）筒形器台の鍔部分である。全体のつくりは丁寧であり、外面の調整はナデの後、暗文が施される。その後、丹塗。内面の調整はナデ。

高坏（14）高坏の坏部。内外方向によく発達した口縁で、外方向にやや垂れ気味である。全体にミガキが施され、後に丹塗がされる。

60号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端は103号住居に切られ、南西端は108号住居に切られる。幅0.8m、深さ0.2mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第142図）

弥生土器

甕（15・16・19）15は口縁を強く外側へ折り曲げる甕。16は鋤先気味の口縁部を持つ甕。口縁下に一条の小さな三角突帯を貼り付ける。貼り付け部分の内面は膨らみが残る。口縁部上端面は平坦で、直径24mm、厚さ5mmの円形の粘土を貼り付ける。19は甕の底部である。上げ底気味でやや厚い。外面の調整はハケメで下端部をナデ消されている。

壺（17・18）無頸壺の口縁部。17は口縁部を強く折り曲げるもので、口縁端部を角張って仕上げる。18の屈曲はやや緩やかで、端部は丸く仕上げている。内外面の調整はナデ。

器台（20）器台の胴部から脚部にかけてである。外側は、ハケメ調整の後、下端部をナデ消し。内面はナデ調整。

61号溝

172号溝に続く溝。調査年度が異なるため、別番号を使用した。

出土土器（第142図）

弥生土器

甕（21）口縁部を強く折り曲げる甕。口縁端部はやや角張って仕上げられる。

62号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端は調査区外に伸びる。南西端は溝に切られる。幅１ｍ深さ0.3ｍである。出土遺物はない。

63号溝

調査区西部分で検出した。南北に走る溝。北端は62号溝に切られる。南端は57号溝に切られる。幅0.6ｍ、深さ0.1ｍである。出土遺物はない。

64号溝

調査区西部分で検出した。東西に走る溝。東端は57号溝に切られる。南端は62号溝に切られる。幅0.4ｍ、深さ0.1ｍである。出土遺物はない。

65号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端部は57号溝に切られる。南西端は調査区外に伸びる。幅0.6ｍ、深さ0.3ｍ。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第143図）

弥生土器

甕（１）口縁部を強く外側へ折り曲げた甕。口縁端部は丸く仕上げられるが、わずかにはね上げ気味である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

66号溝

調査区西部分で検出した。北東から南西方向に直線的に走る。北東端は58号溝に切られ、南西端は31号溝に切られる。幅1.2ｍ、深さ0.3ｍ。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第143図）

弥生土器

甕（２）口縁部を外側へ折り曲げた甕。口縁端部は丸く仕上げる。胴はあまり張らない。内外面の調整はナデである。

172号溝（第140図）

調査区西部で確認した東西溝で、183号溝に切られる。幅0.7～1.2ｍ、深さ0.35～0.45ｍで約21ｍを検出した。埋土は大きく２つに分かれ、上層は黄褐色砂質土・黒茶色土・茶灰色砂質土の互層で、下層は粘質土と砂質土の乱れた層位になる。上層は緩やかな、下層はやや激しい流れが考えられる。出土遺物も小片で摩耗が激しく、図化できる物は少ない。中央部に深さ８cmほどのテラスがあるが、埋土は最上層と変わらない。

出土土器（第143図）

弥生土器

鉢（４）口縁部を外側へ強く折り曲げる鉢。口縁端部はナデにより斜めの平坦面を造り、口縁から

体部へは緩やかに移行する。内外面の調整はナデ。

173号溝

調査区西部で検出した東西溝で181号溝に切られる。幅0.2～0.3m、深さ0.1mの小溝で、緩やかに蛇行する。10.5m分を検出した。

出土遺物（第143図）

弥生土器

甕（5）「く」字型口縁の甕。内外面の調整はハケメである。

174号溝

調査区西部で検出した南北溝で、中途で西南と東南方向の二股に分かれる。西南方向は調査区外へ、東南方向は176号溝に切られて消滅する。幅0.2～0.35m深さ0.15mで約11m分を検出した。遺物は小量小片で図化できない。

175号溝

調査区西部で検出した東西溝。幅0.3m、深さ0.1mの浅い小溝で約2.4mを検出した。

176号溝

調査区西部で検出した北東－南西溝で、途中2ヶ所で途切れ、北東部は182号溝に切られて消滅する。また174・181号溝を切り、108号土坑・175号溝との切り合い関係は不明である。幅0.3～0.45m、深さ0.08～0.25mを測り、約22.5mを検出した。埋土は暗灰色粘質土で、出土遺物は少量小片のため図化できない。

177号溝

調査区西部南端で検出した北東－南西方向の溝である。北東部は消滅し、南西部は調査区外に伸びる。幅0.4～0.6m、深さ0.15～0.2mの小溝で、出土遺物は小片である。

178号溝

調査区西部南端の177・181号溝の間で検出した北東－南西方向の溝で、前述の溝と方位を同じにする。両端部は消滅し、中程が一部土坑状に広がるが、埋土に変化はなかった。土坑状内部には15～40cm大の川原石が詰まっており、据えられたようにも見えるが性格は不明である。本来は別遺構かも知れない。溝は幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mの浅い小溝で、約11m分を検出した。砥石が出土している。

石製品

頁岩製の製品で、図面上部と上面部のみが残存部となる。裏面は剝離しており、他の面は欠損すると思われるが、流転による摩滅が激しく定かではない。上方端部付近は斜めにカットし、一部を高く残す。砥石にも見えるが残存面に擦過痕がほとんど認められず、上方の高まりの用途も不明である。

179号溝

調査区西部の180・181号溝の間で検出した北東－南西方向の溝である。113号土坑・181号溝に切られ、両端は消滅する。幅0.35m、深さ約0.1mの浅い溝で、約4m分を検出した。出土遺物はない。

180号溝

調査区西部で検出した北東－南西方向の溝で緩やかに弧を描き、両端は消滅している。幅0.1～0.4m、深さ0.05m前後の浅い溝で、約4m分を検出した。出土遺物はない。

181号溝

調査区西部で検出した。北西－南東から途中で北東－南西に折れ曲がり、曲がる部分では0.3m程

途切れる。両端部は調査区外に延び、西北部は183号溝に切られる。プランのみから考えると西南地区を区画して途切れ部分は陸橋状にも見えるが、残存状況が悪いため上層では繋がっていた可能性も考えられる。幅0.35m、深さ0.08m程の浅い溝で、約55.5m分を検出した。出土遺物は小片で図化できない。

182号溝

調査区西部で検出した北東－南西溝で、途中で屈曲する。北西端部は消滅し、西南部は105号土坑に切られ、一度途切れてから調査区外に延びる。幅0.4～0.55m、深さ0.05～0.15mの浅い溝で、約11m分を検出した。

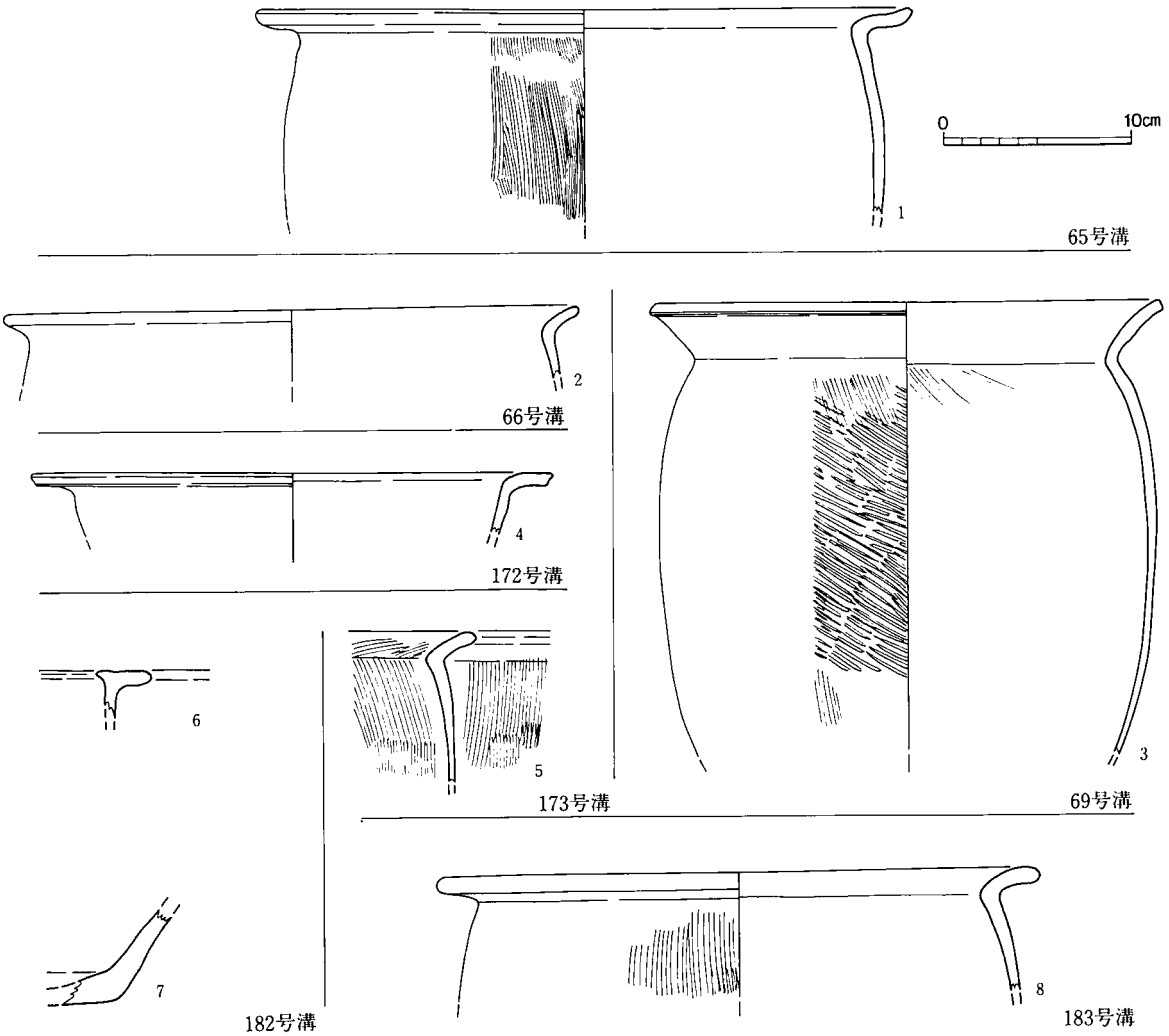
出土土器（第143図）

弥生土器

甕（6・7）6は鍬先状口縁甕の口縁部小片。上面は平坦に造られ中央が僅かに窪む。端部は丸く収め、内への突出は弱く端部が細くなる。全面ナデで仕上げられる。7の底部片は摩滅が激しく、内面のナデ以外は調整不明。全体に器肉が厚く、特に底部を厚く造りレンズ状になると思われる。

183号溝

調査区西端部で検出した北東－南西溝で、緩やかに湾曲する。北東部は上層の69号溝に削平され、



第143図　65・66・69・172・173・182・183号溝出土土器実測図（1/4）

172号溝を切る。南西部は181号溝を切り調査区外に延びる。幅0.7～0.8m、0.15～0.25mで、約8m分を検出した。

出土土器（第143図）

弥生土器

甕（8）甕の口縁部片で、逆「L」字型口縁になる。口縁部を厚く造って上面を湾曲させ、端部は緩やかに垂下する。外面にはタテハケが認められ、内面と口縁部はナデで仕上げる。

6　ピット・包含層出土土器

ピット出土土器（図版55・56、第144～148図）

弥生土器

蓋（1・2）蓋の天井部である。甕用のものと思われる。1は天井部がやや厚くなっており、外面頂部はややくぼんでいる。2も蓋である。天井部の厚さは薄い。外面はハケメ調整。内面の調整は粗いハケメとナデである。

甕（3～64）3～7・23は鋤先状の口縁を持つ甕。8～22・25～41は口縁部を外側に強く折り曲げ、端部を丸く仕上げる甕。8は底部の大きい形態。25は口縁部の内側に刻み目を施す。33は口縁部との境までハケメが施され、原体痕が残る。48～50・54・56～60は口縁部を外側に強く折り曲げ、端部を角張って仕上げる甕。24・55は口縁下に三角突帯を貼り付ける甕。ハケメの後に突帯を貼り付け、その部分の内面が膨らんでいる。51～54は口縁下に複数の沈線が巡る甕。51は口縁端部を丸く仕上げる。沈線間の間隔は一定しない。52･53は口縁下に3条の沈線をめぐらしている。全体のつくりは精緻で焼成もよい。42～47・61～64は甕の底部である。42～44・62は焼成後に外側からの穿孔を行っている。62は穿孔の位置を中心からずらしている。

器台（65）口縁部の方が開く器台。外面の調整は縦方向のハケメ。内面は強い指頭圧痕の後、上下端部に横方向のハケメを施す。

支脚（66）円筒状で脚部が広がる支脚。器壁は厚い。全体に強いナデで形を整えている。

鉢（67）胴部が大きく膨らむ鉢。口縁端部は丸く仕上げられる。外面の調整はナデ。内面はナデで底付近に指頭圧痕が残る。

蓋（68）壺の蓋。口縁部付近に上から下への穿孔が2つある。

壺（69・70）69は口縁部がやや角張って仕上げられる壺の口縁。大きく開き、口縁端部には刻み目が施される。70は外側へ折り曲げる壺の口縁部。内外面の調整はナデ。

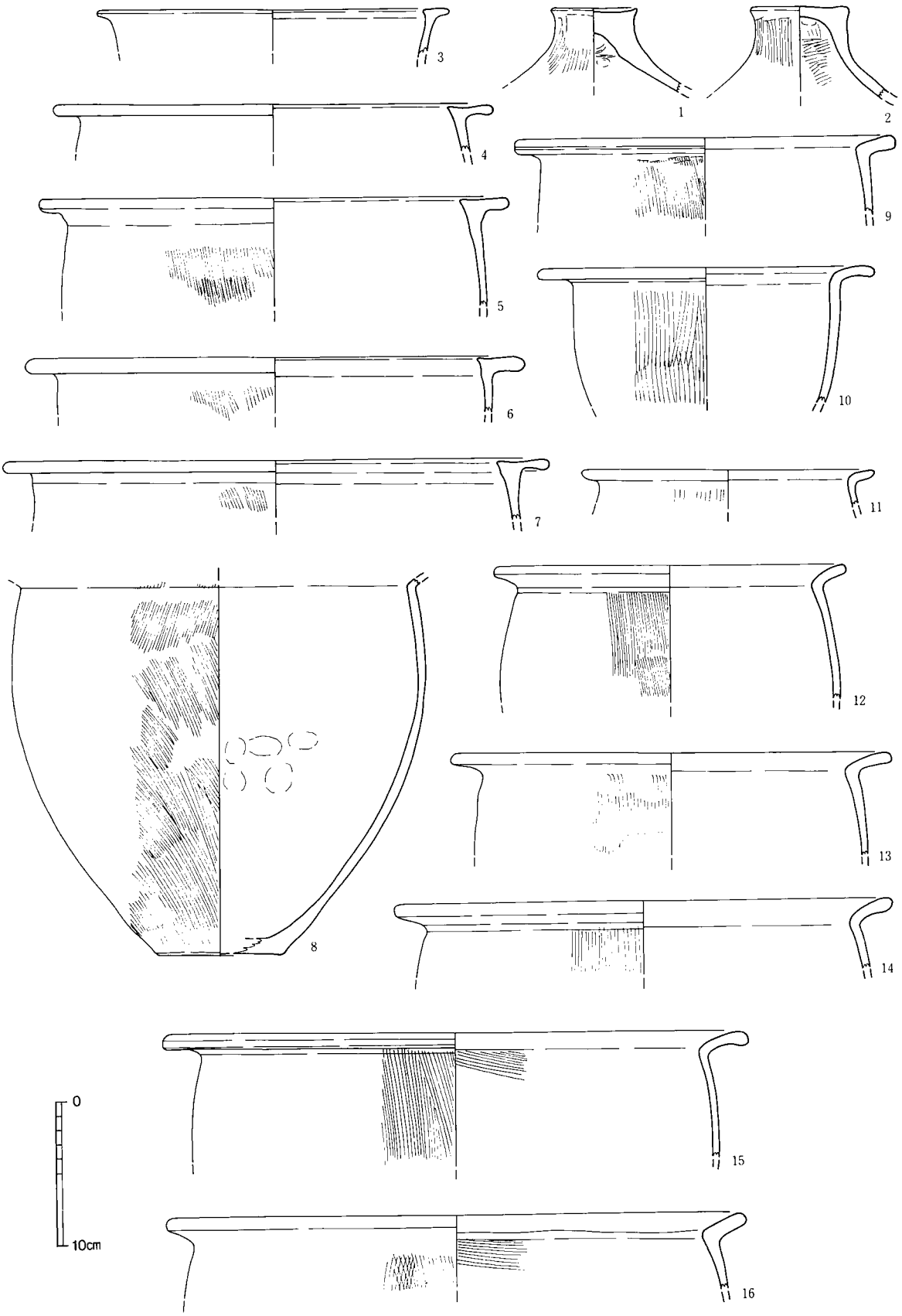
高坏（71・72）71は口縁鋤先状を呈する高坏の坏部。外面の調整はナデ。内面の調整はミガキである。72は高坏の脚部。

丹塗土器

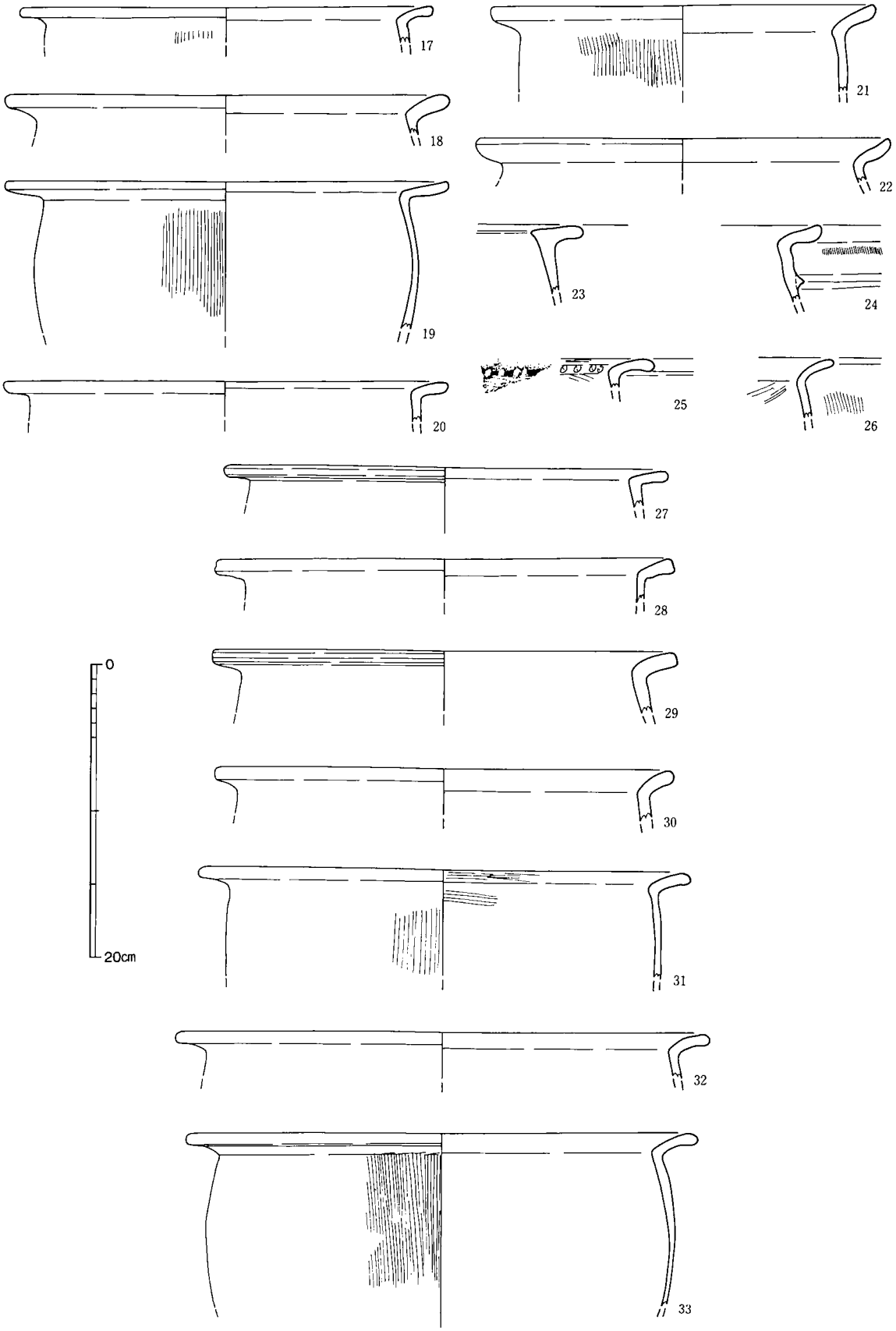
蓋（73）小型の蓋。口縁端部は角張って仕上げられる。内外面の調整はハケメで、外面に丹塗が施されるが、一部内面にも付着している。

壺（74）鋤先状を呈する壺の口縁。内外面の調整はミガキ。内外面ともに丹塗が施される。

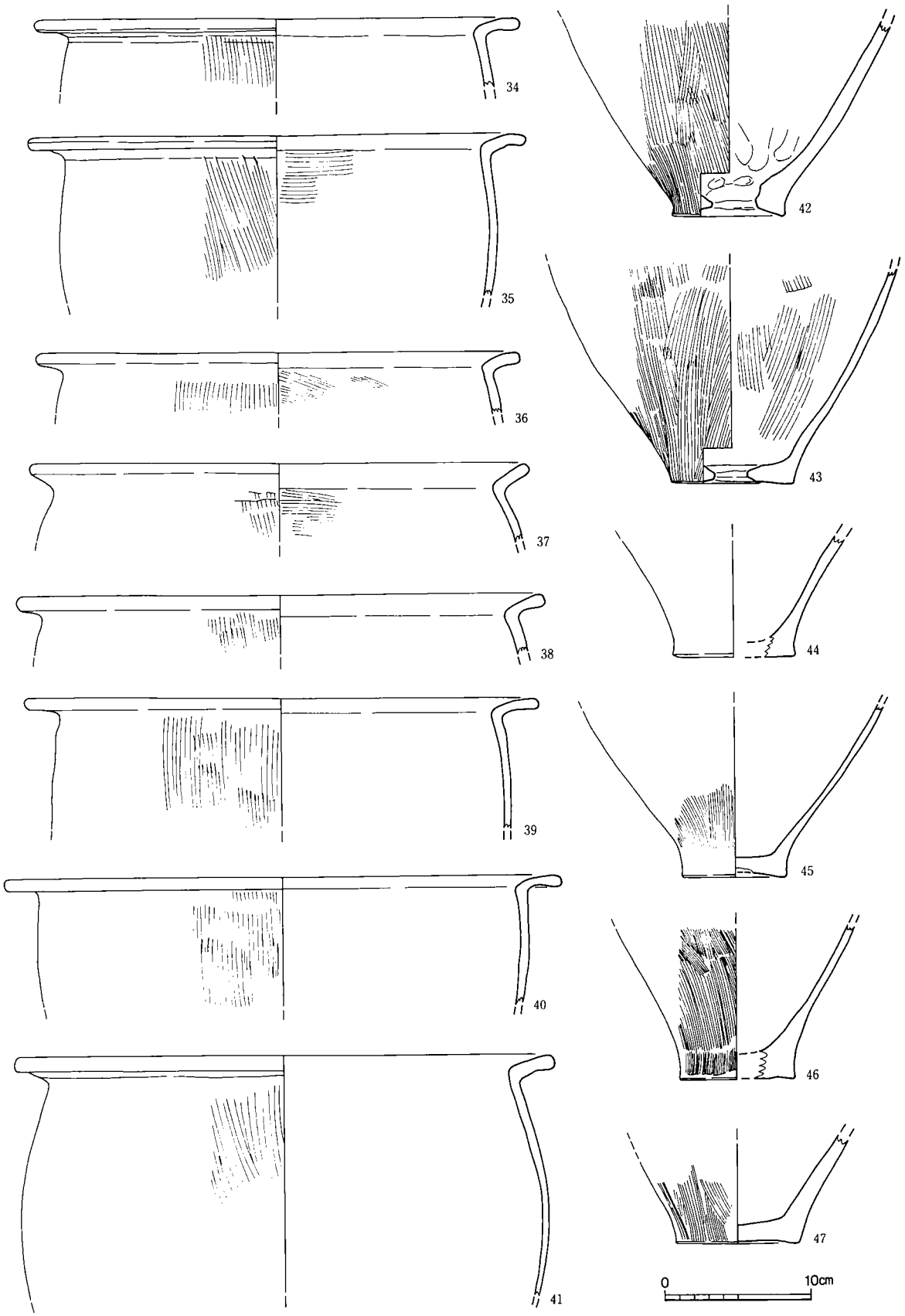
高坏（75・76）75は鋤先状を呈する高坏の坏部である。口縁部は外側に垂れる。内外面に丹塗が施される。76は高坏の脚部である。外面は縦方向のミガキの後、丹塗。内面はナデ、一部ハケメで一部丹が付着する。



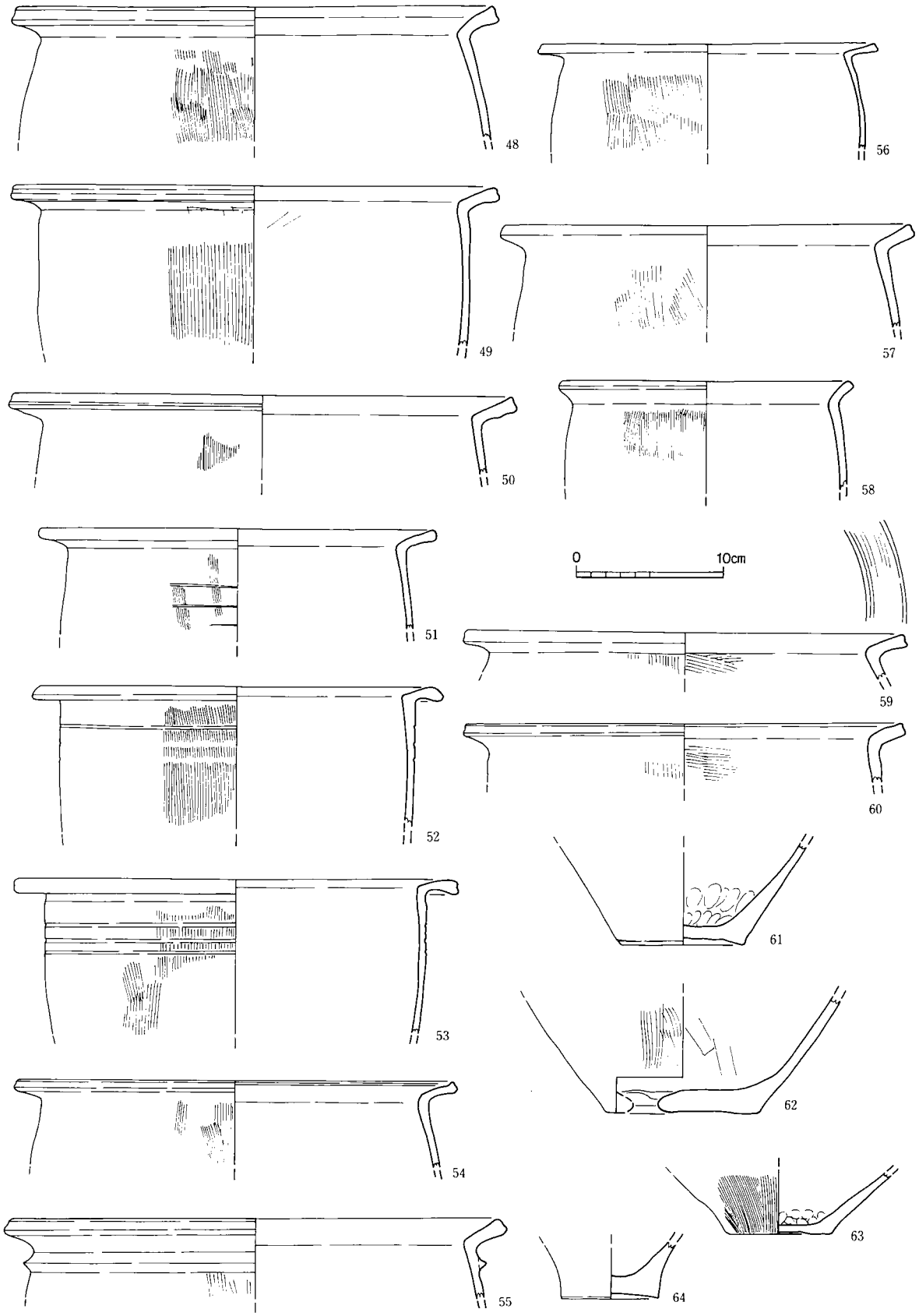
第144図　ピット出土土器実測図．1（1/4）



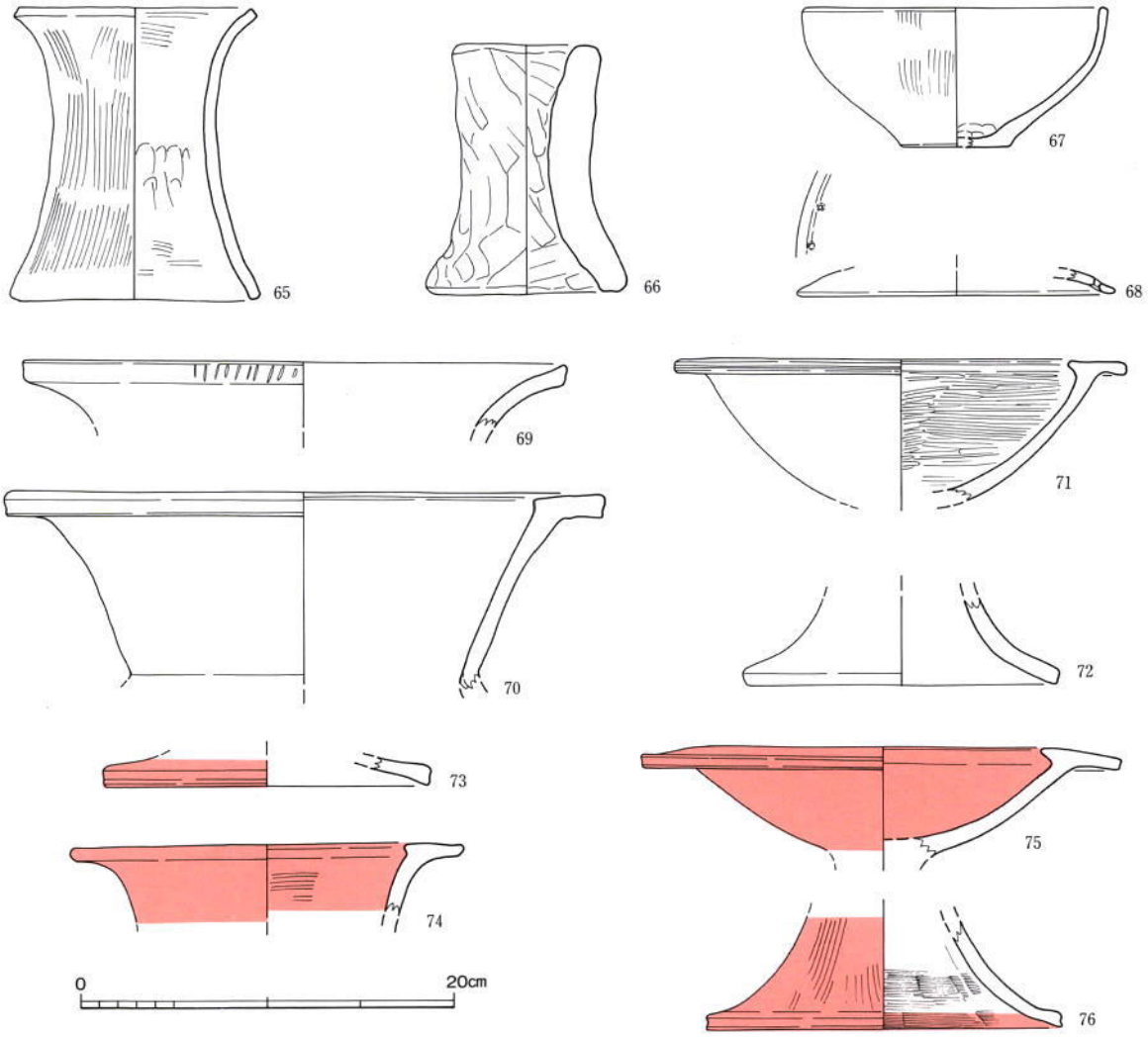
第145図　ピット出土土器実測図．2 (1/4)



第146図　ピット出土土器実測図．3（1/4）



第147図　ピット出土土器実測図．4（1/4）



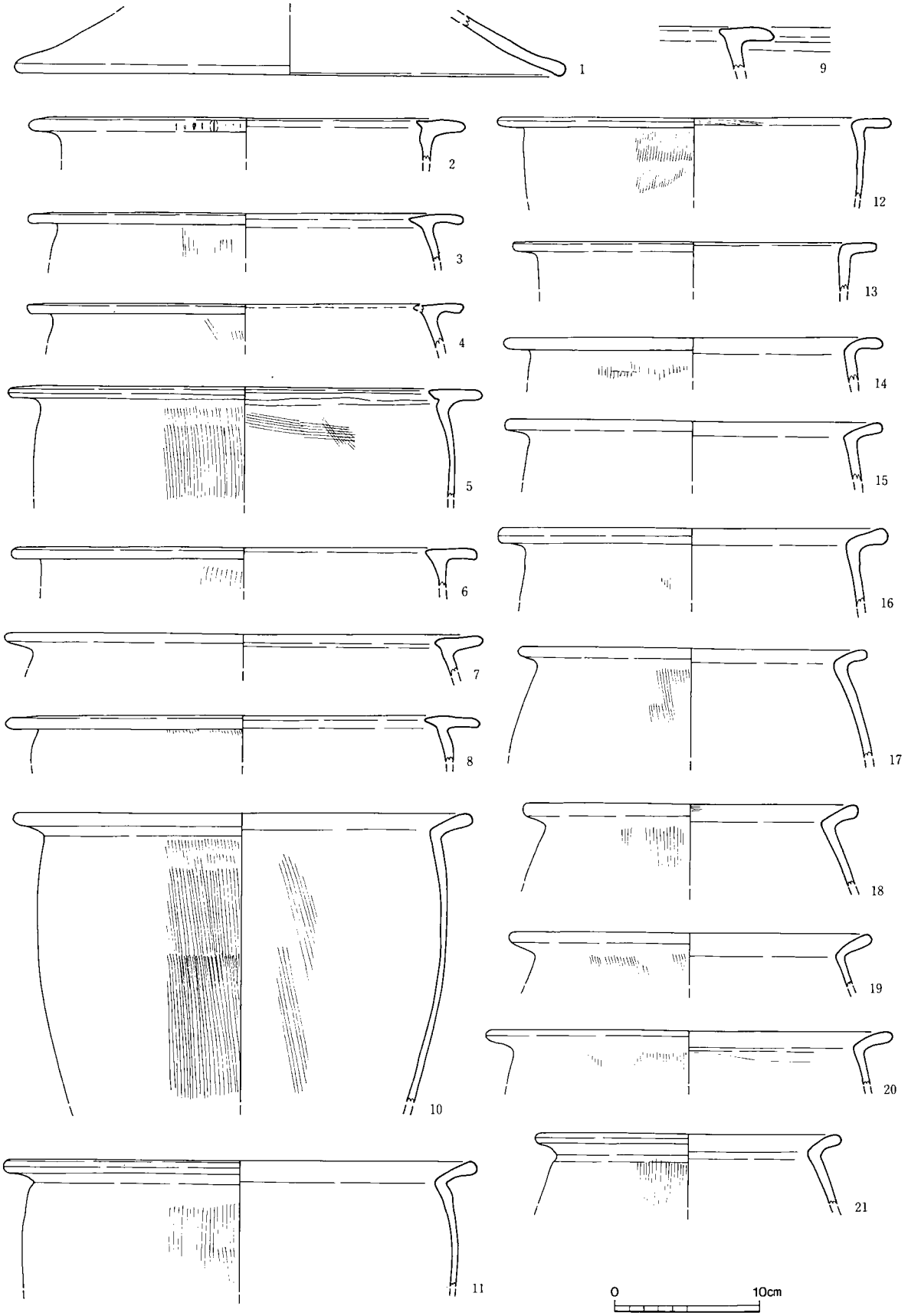
第148図　ピット出土土器実測図. 5 (1/4)

包含層出土土器（図版57、第149～166図）

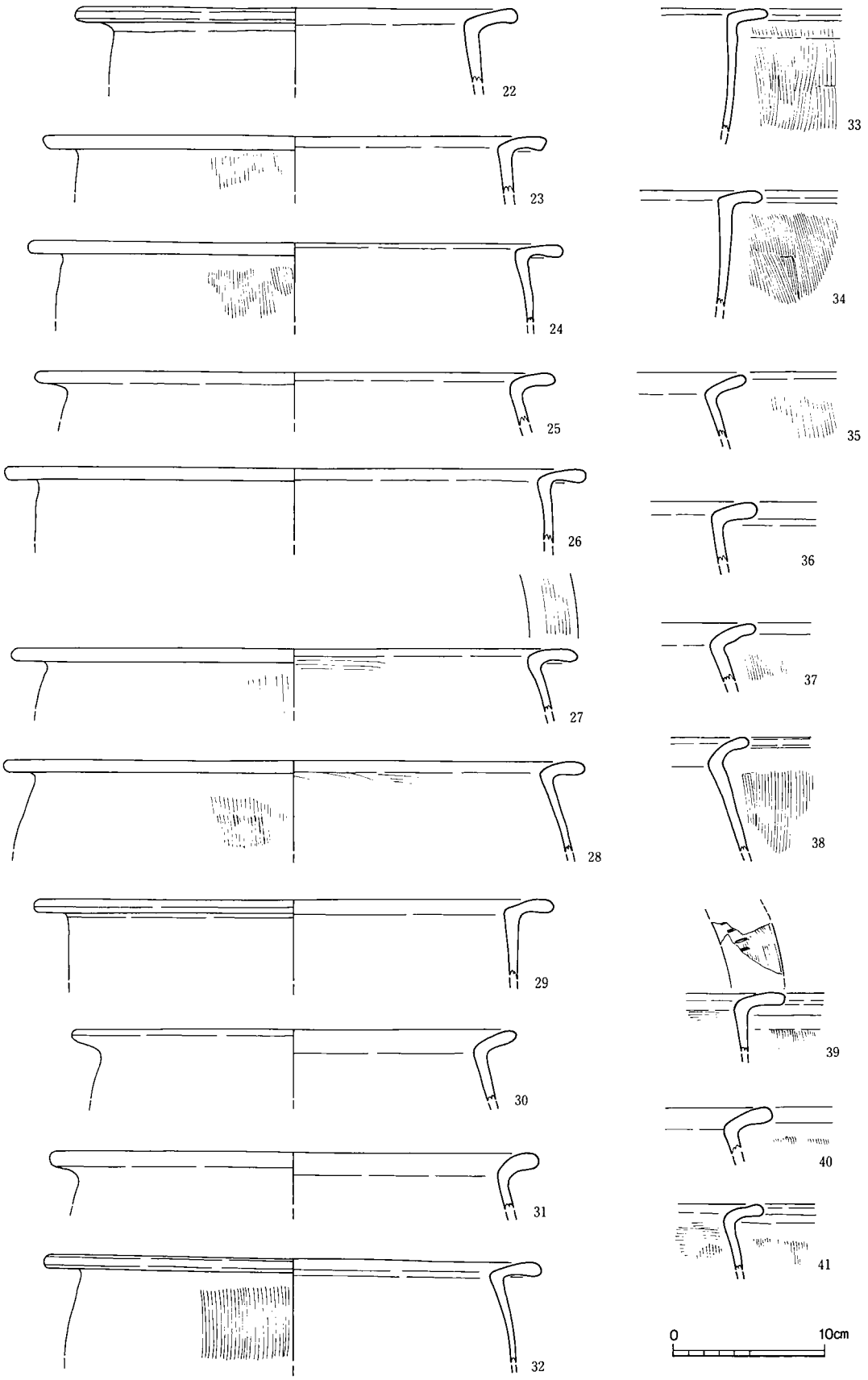
弥生土器

蓋（1）1は大型の蓋である。甕用と思われる。口縁端部が丸く仕上げられ、内外面の調整はナデを施される。

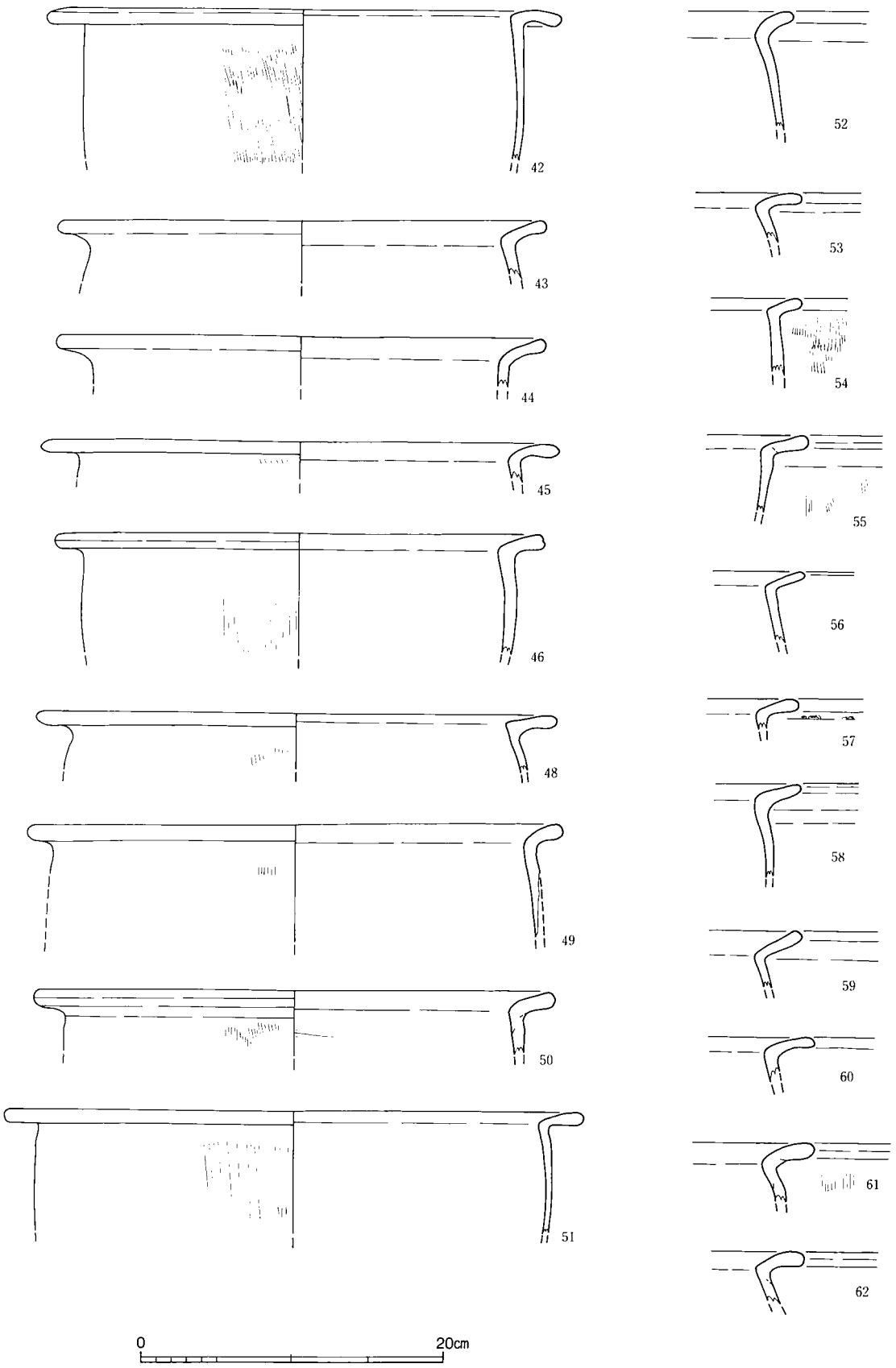
甕（2～205）2～9は鋤先状の口縁部を呈する甕である。2は口縁の外側端部に刻み目を施す。5は鋤先状の口縁部分の接合痕が明瞭に残る。10～104は口縁端部を丸く仕上げる甕である。39・63・68は口縁部上端面に刻み目を施している。57は外面口縁部胴部との境にハケメの原体痕が残る。105～156・163～169は口縁部を角張って仕上げる甕である。116は胴部最大径よりやや下の部分に小さな三角突帯を貼り付ける甕。125は口縁下に3条の沈線を巡らす甕である。157～162・170～176は口縁下に三角突帯がつく甕である。157は鋤先状口縁で、胴部が大きく開く。177・178は鋤先状の口縁部で、胴部が大きく開く甕。179・180は「く」字型口縁の甕。胴部が大きく開く。181・182ははね上げ口縁の甕。181は口縁が内側に突出する。183～199は甕の底部である。185は焼成後、外側から穿孔を



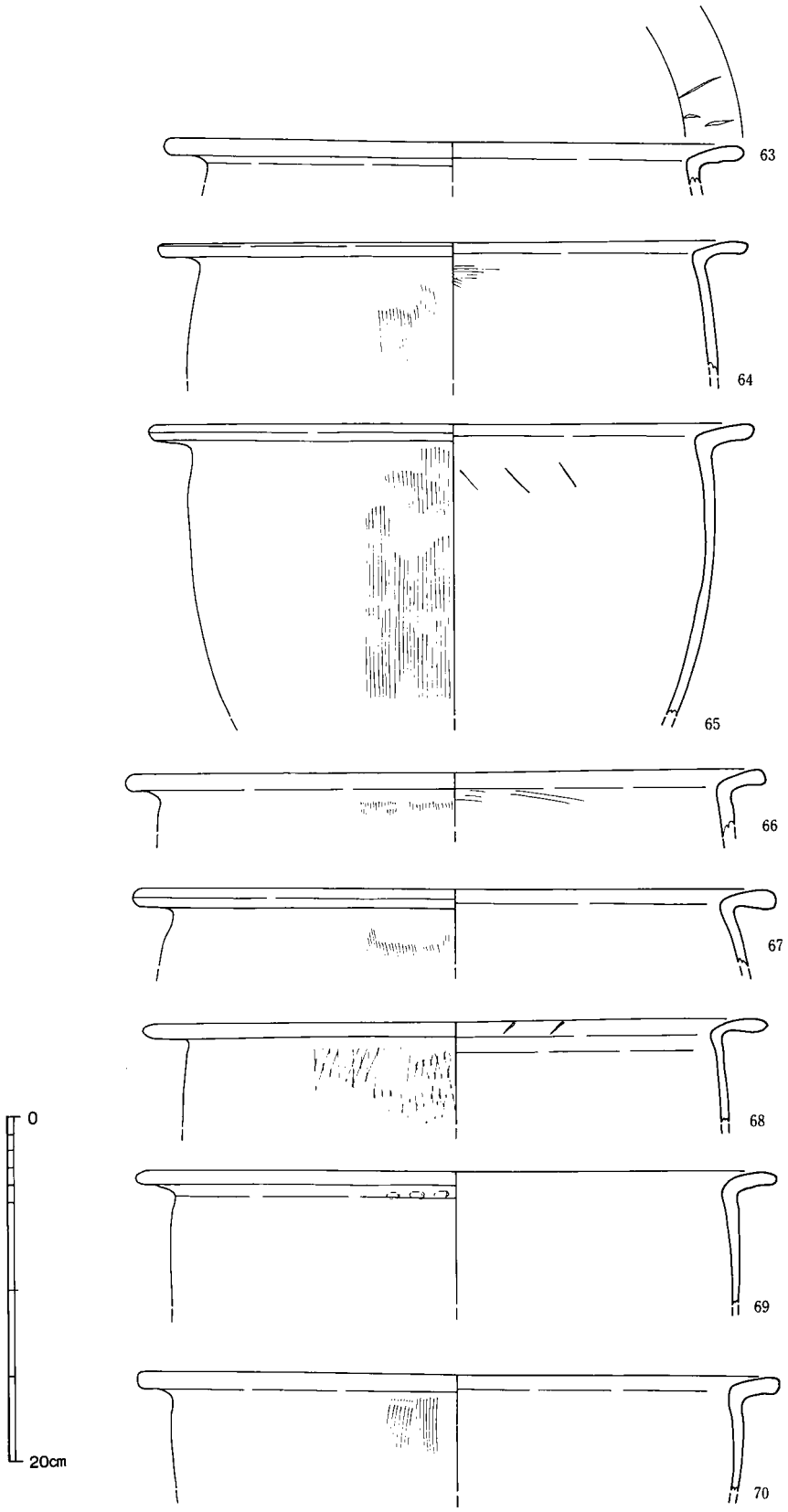
第149図　包含層出土土器実測図．1（1/4）



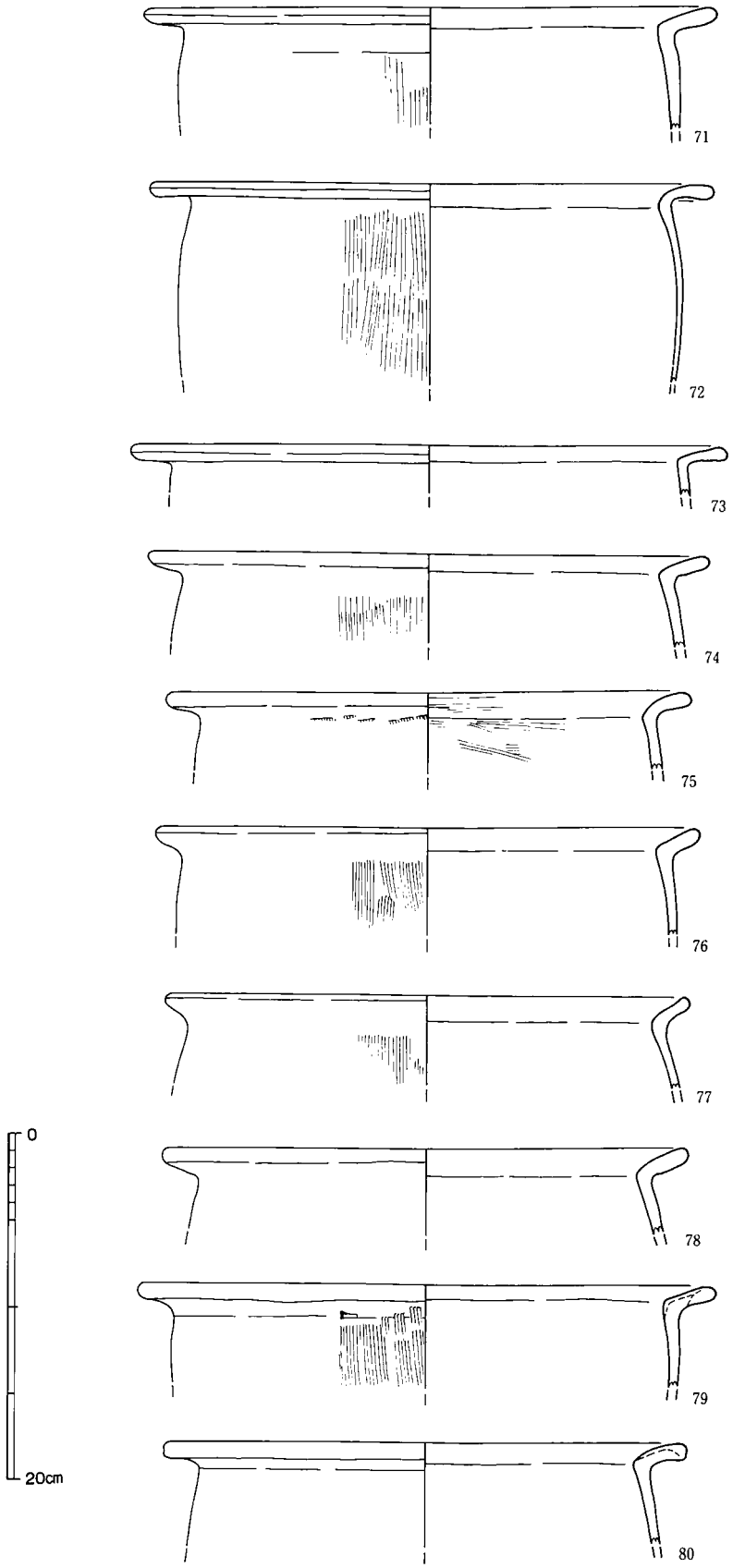
第150図　包含層出土土器実測図. 2 (1/4)



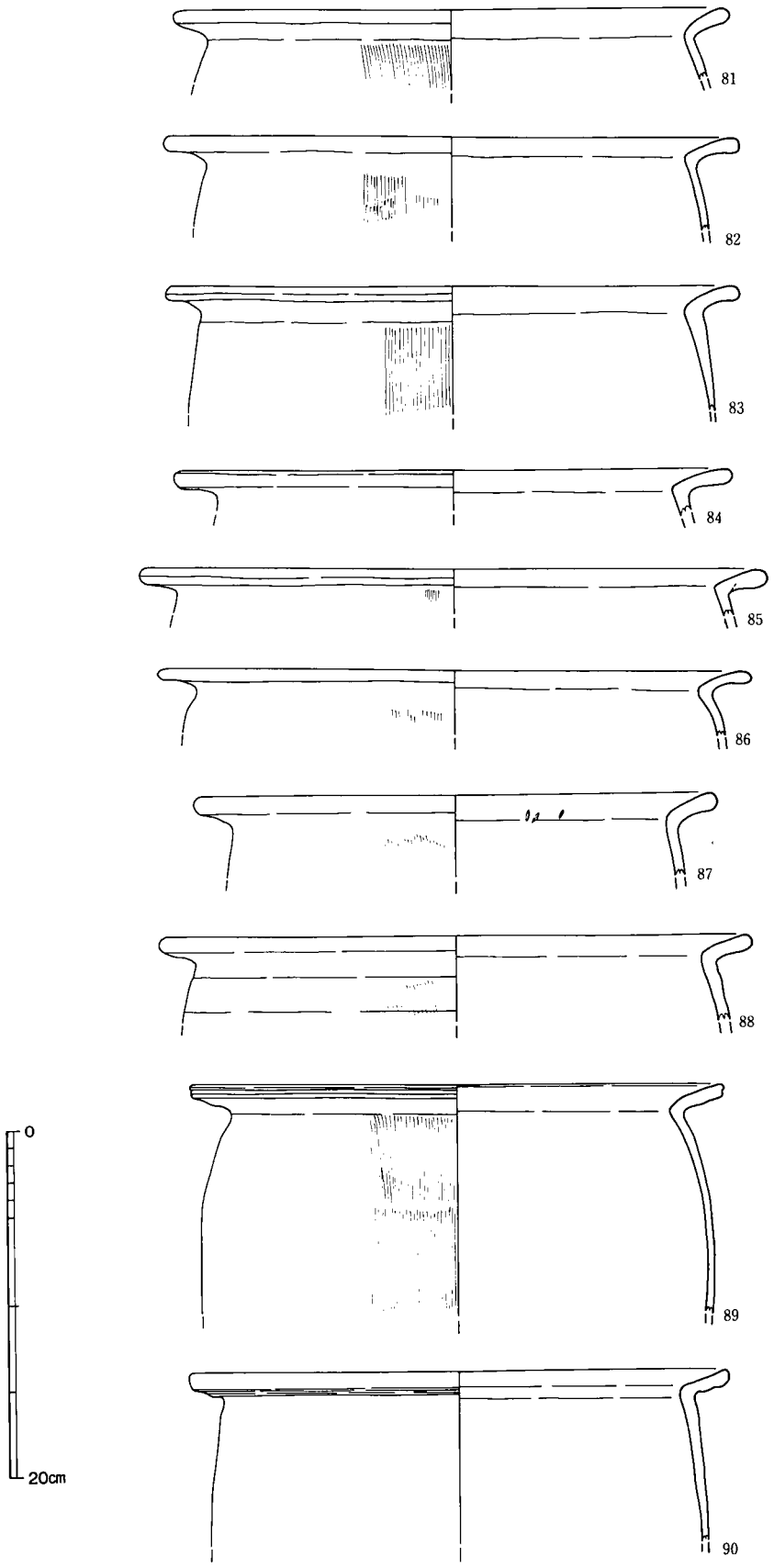
第151図　包含層出土土器実測図．3 (1/4)



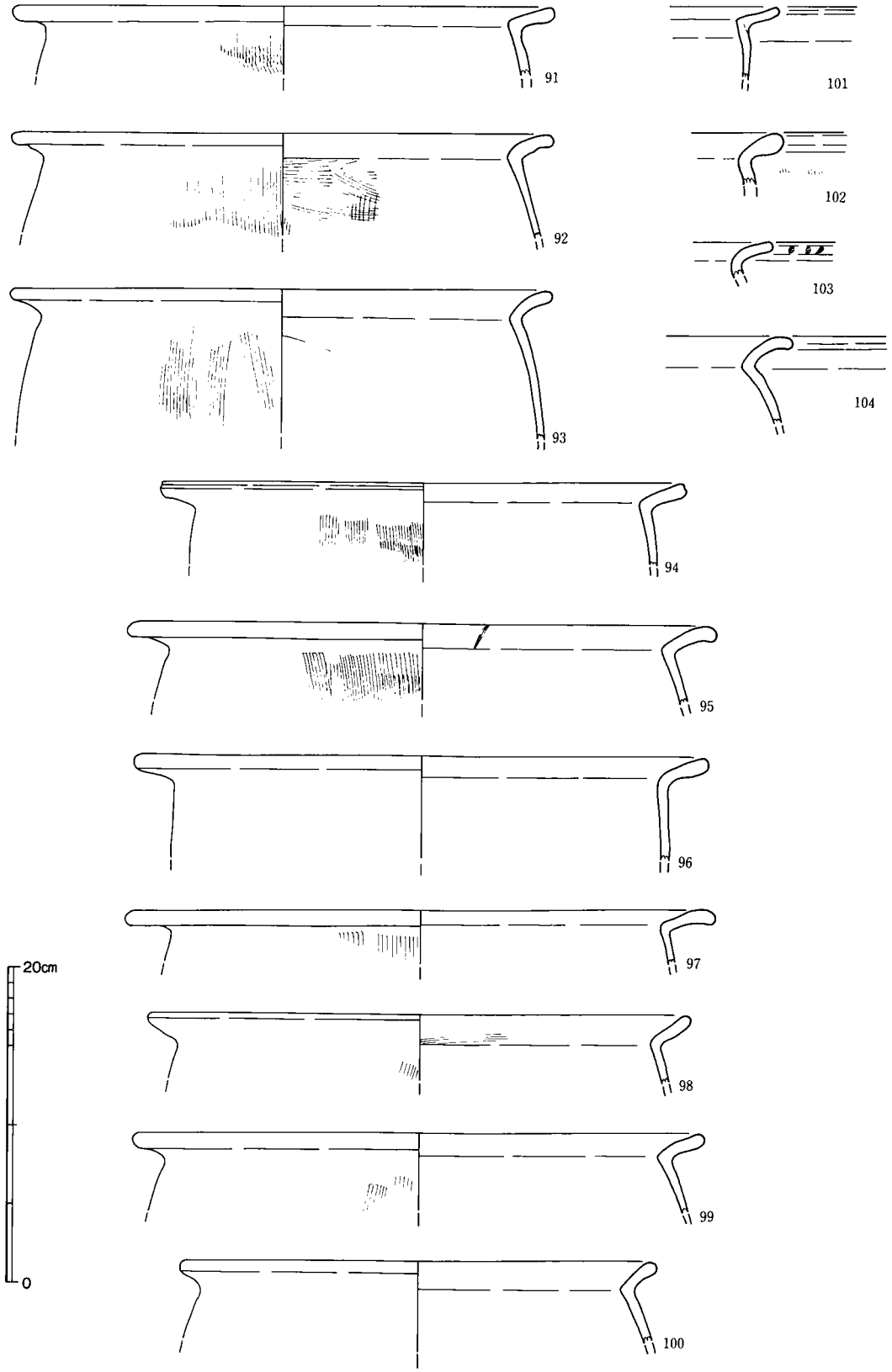
第152図　包含層出土土器実測図．4 (1/4)



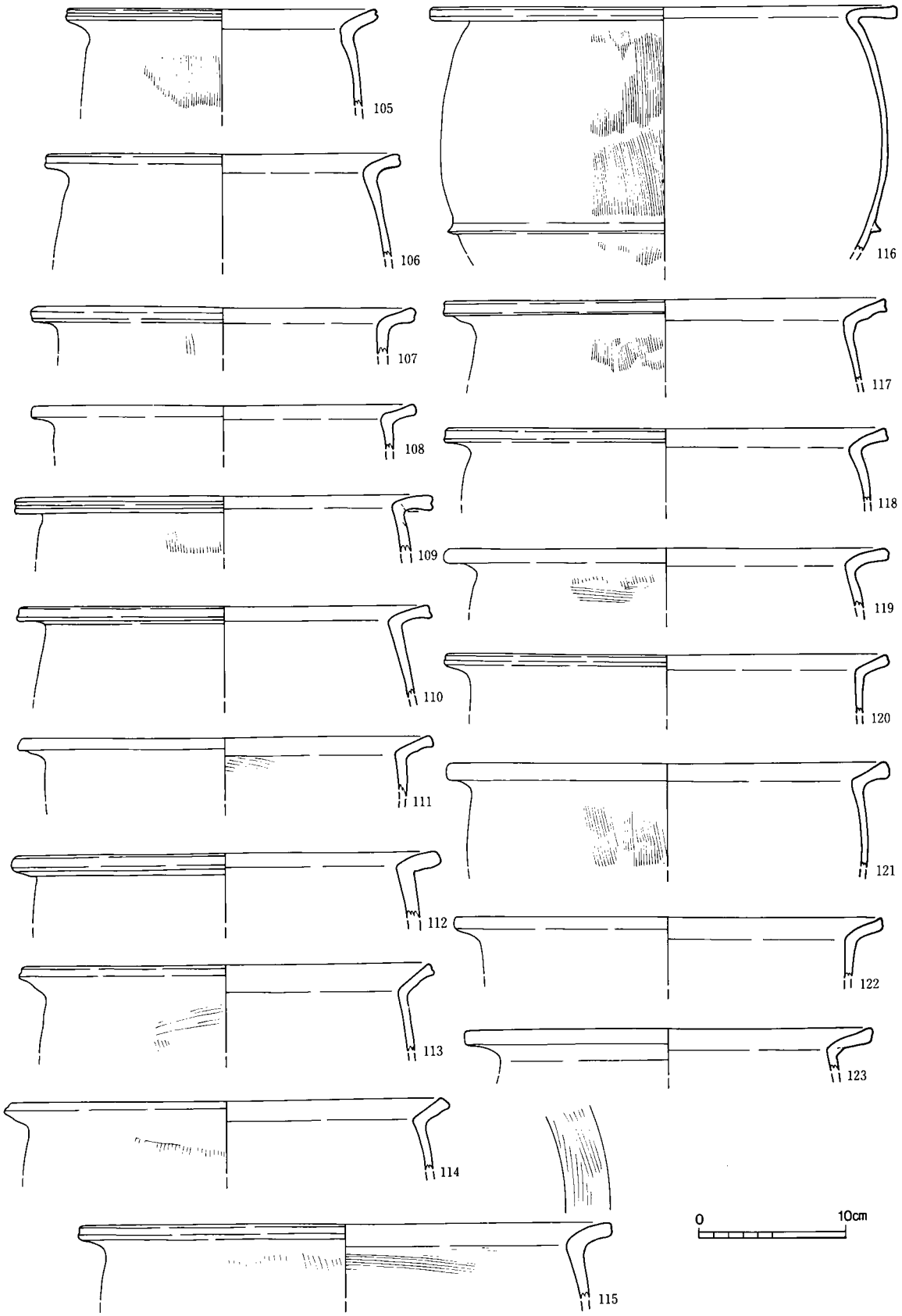
第153図　包含層出土土器実測図．5 (1/4)



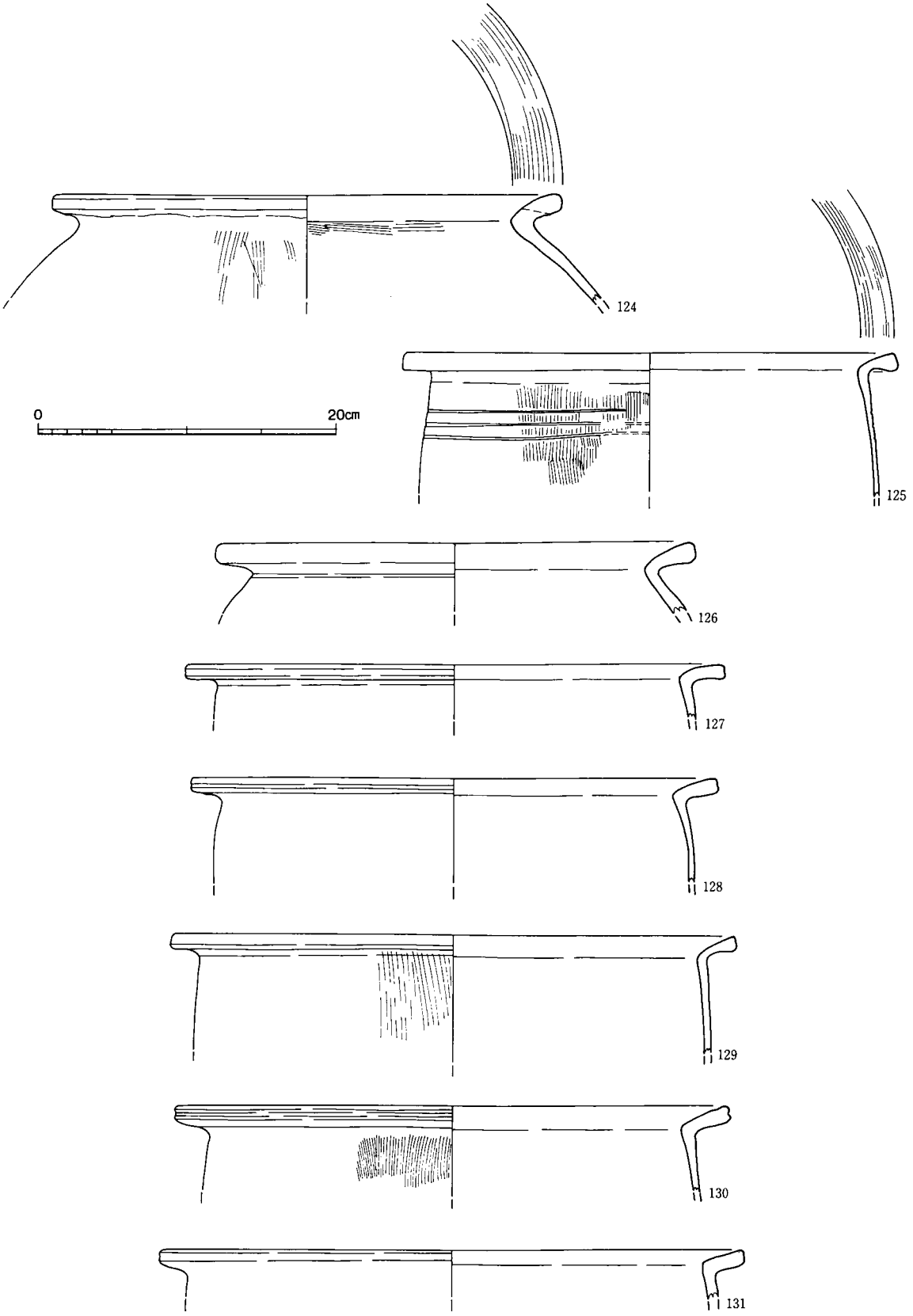
第154図　包含層出土土器実測図．6 (1/4)



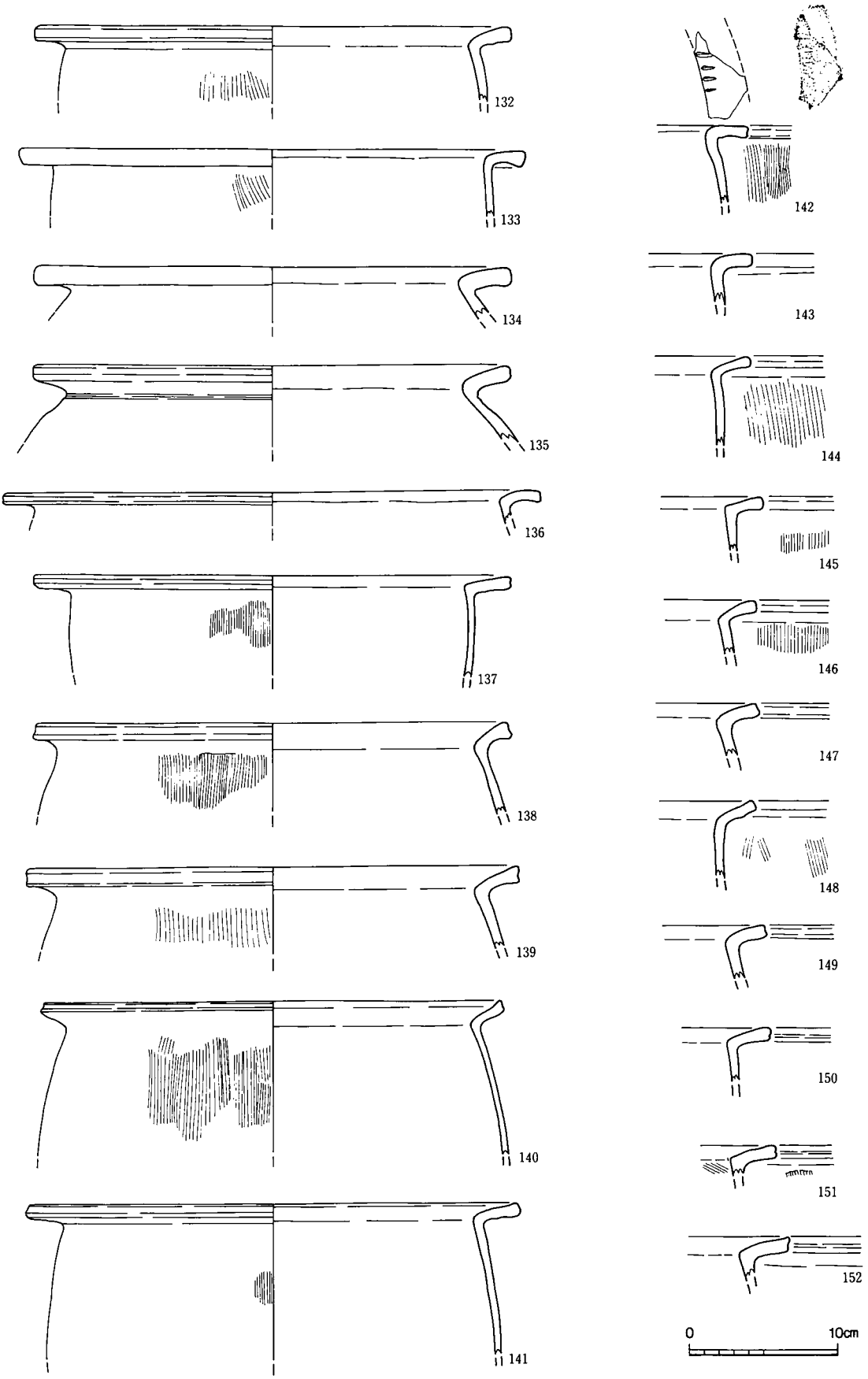
第155図　包含層出土土器実測図. 7 (1/4)



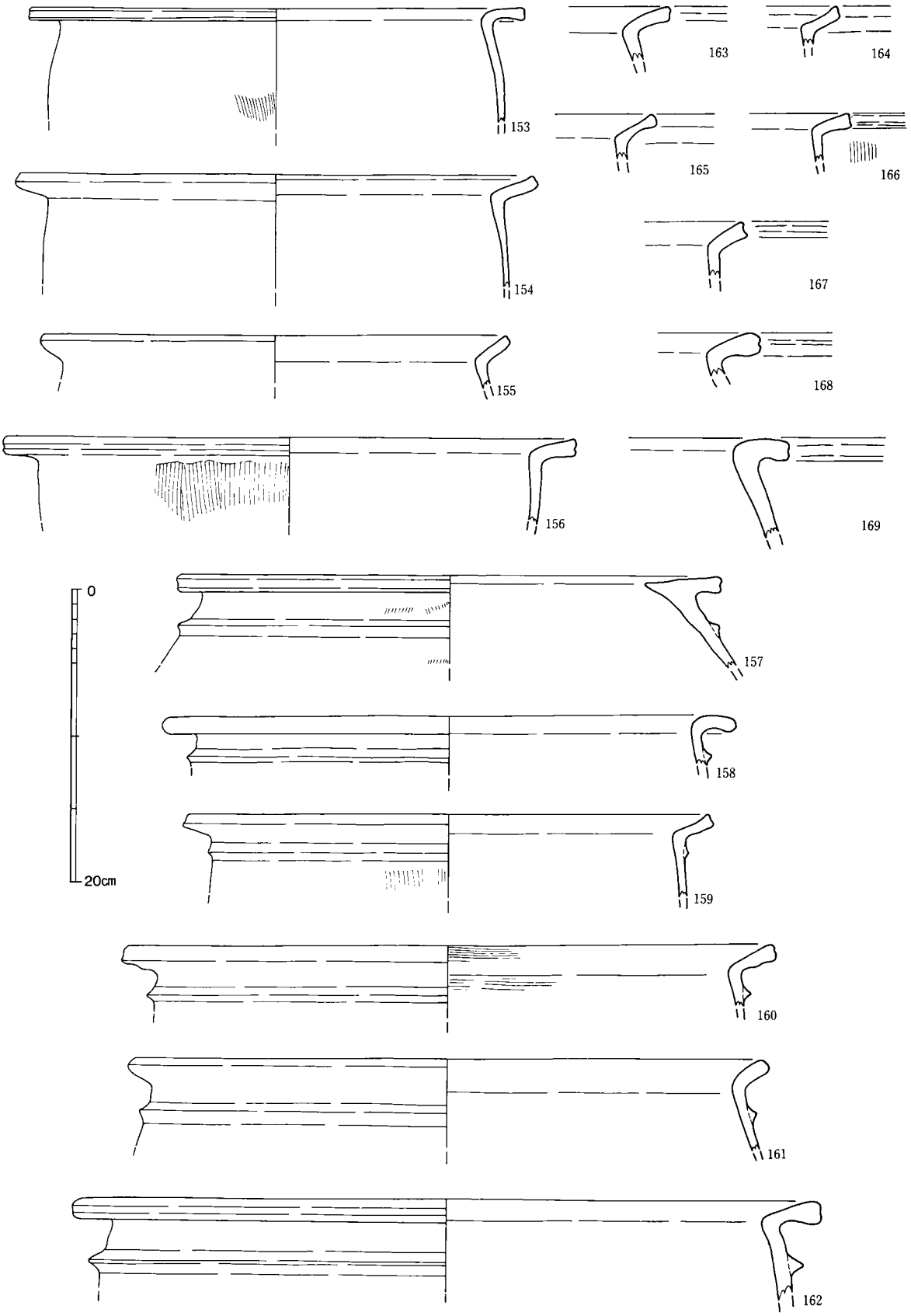
第156図　包含層出土土器実測図. 8 (1/4)



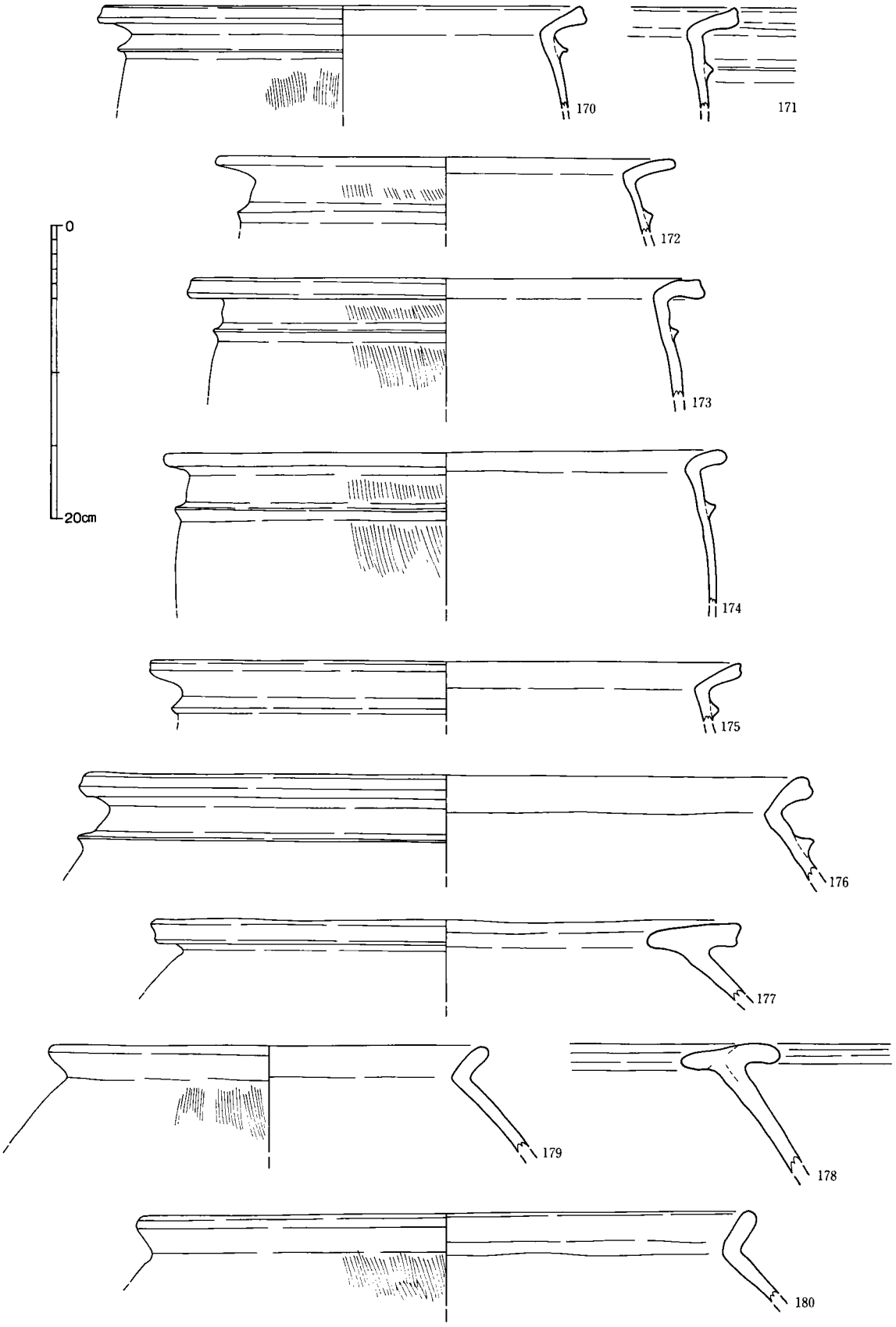
第157図　包含層出土土器実測図. 9 (1/4)



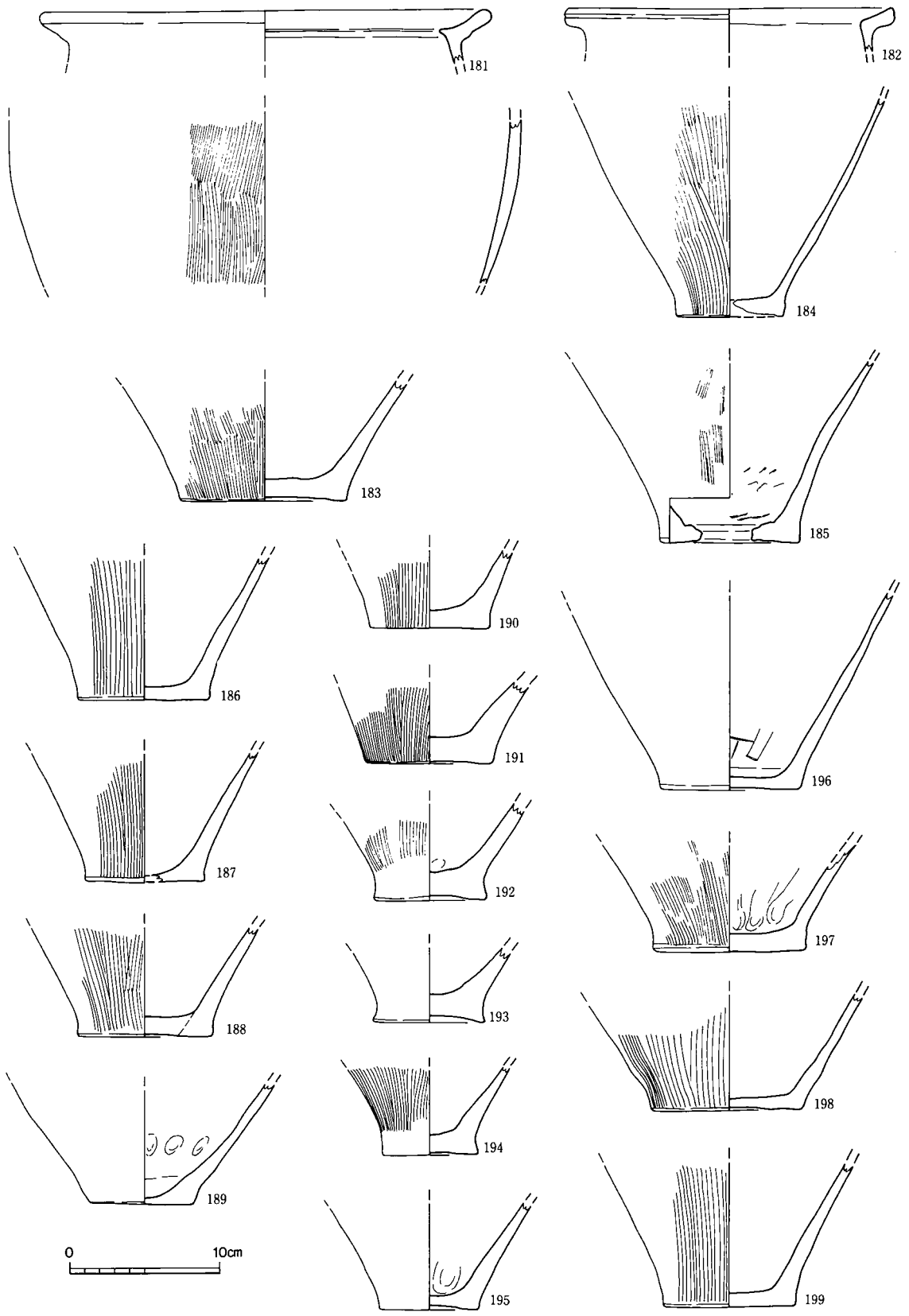
第158図　包含層出土土器実測図.10 (1/4)



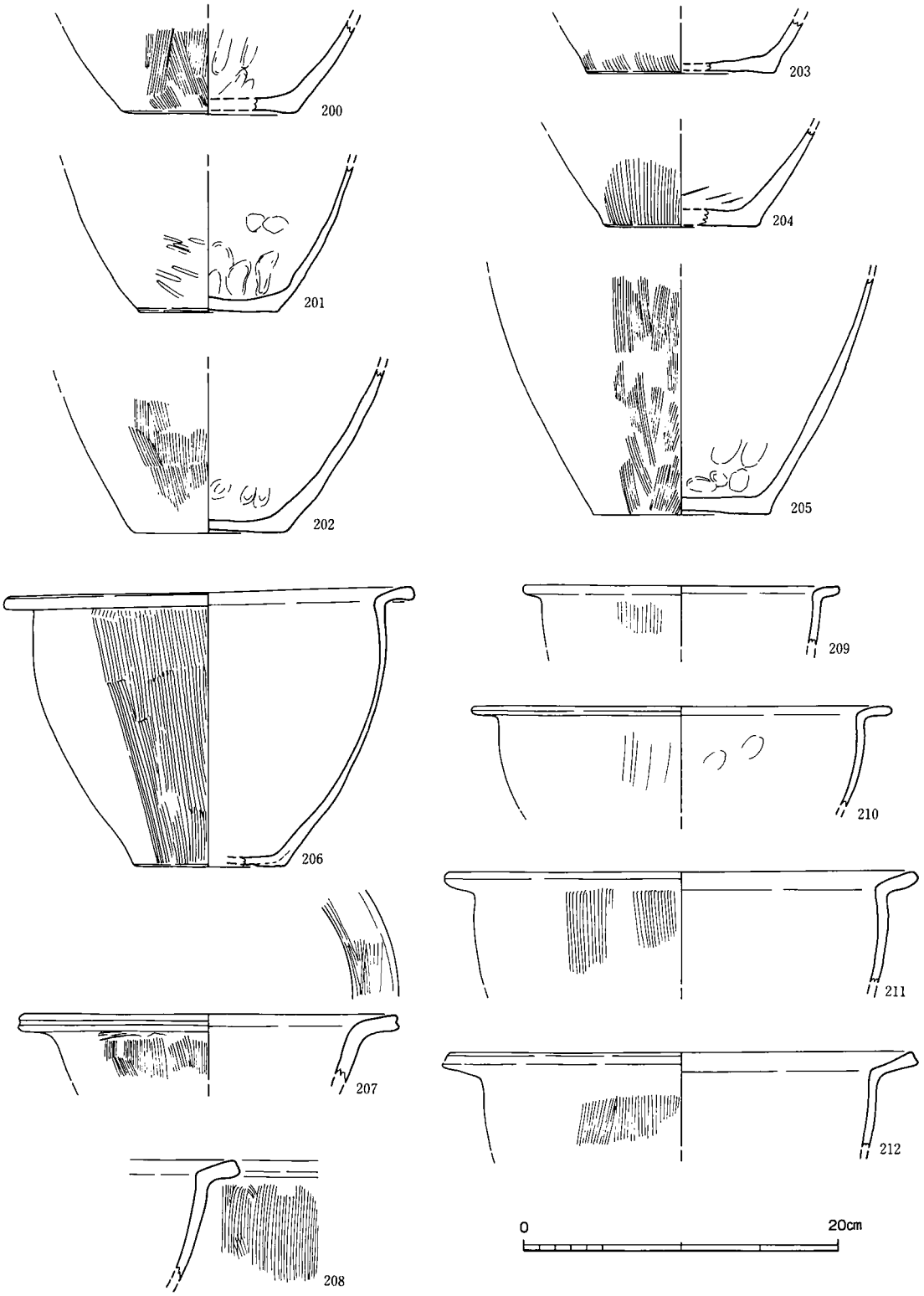
第159図　包含層出土土器実測図.11（1/4）



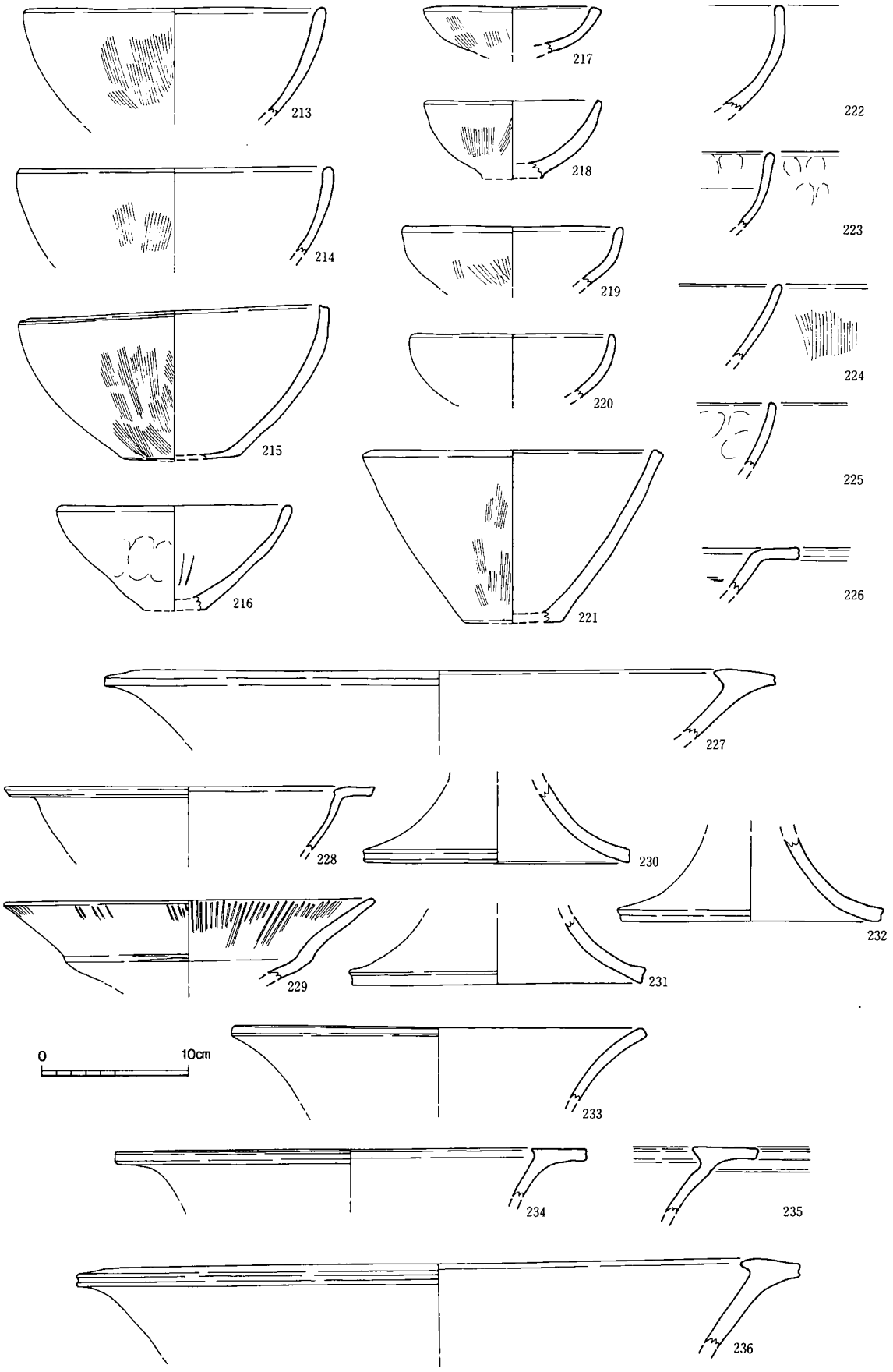
第160図　包含層出土土器実測図.12（1/4）



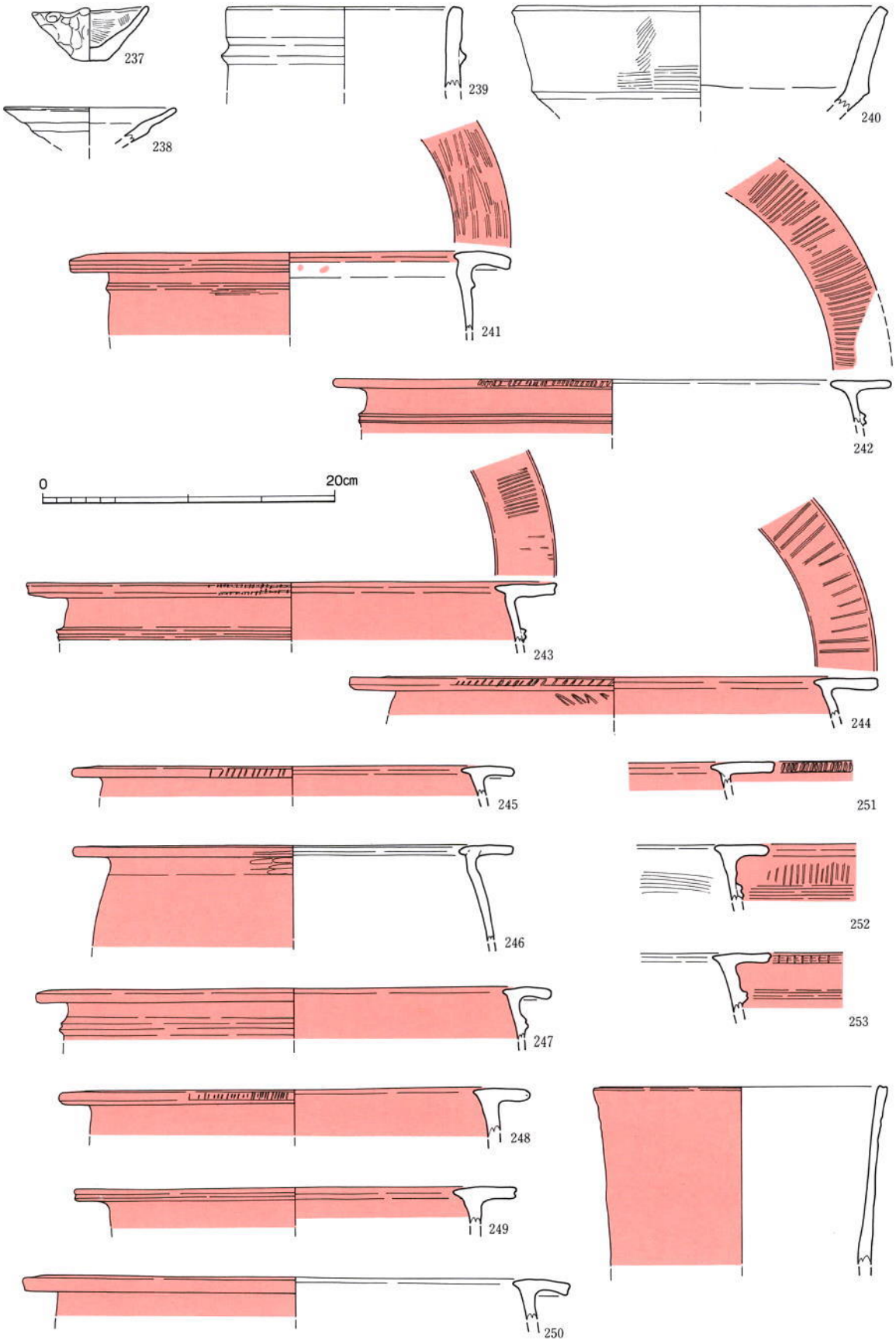
第161図　包含層出土土器実測図.13 (1/4)



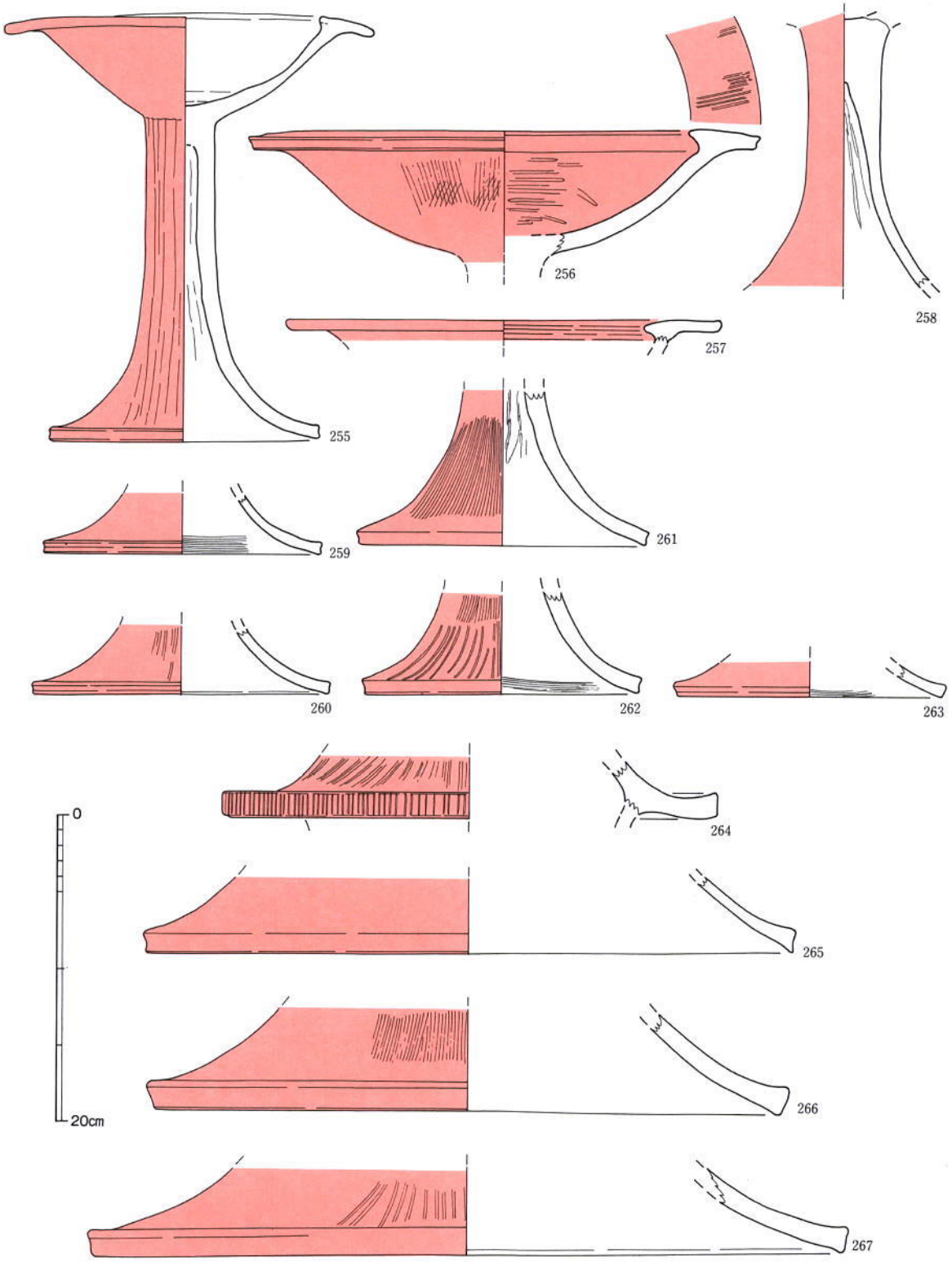
第162図　包含層出土土器実測図.14 (1/4)



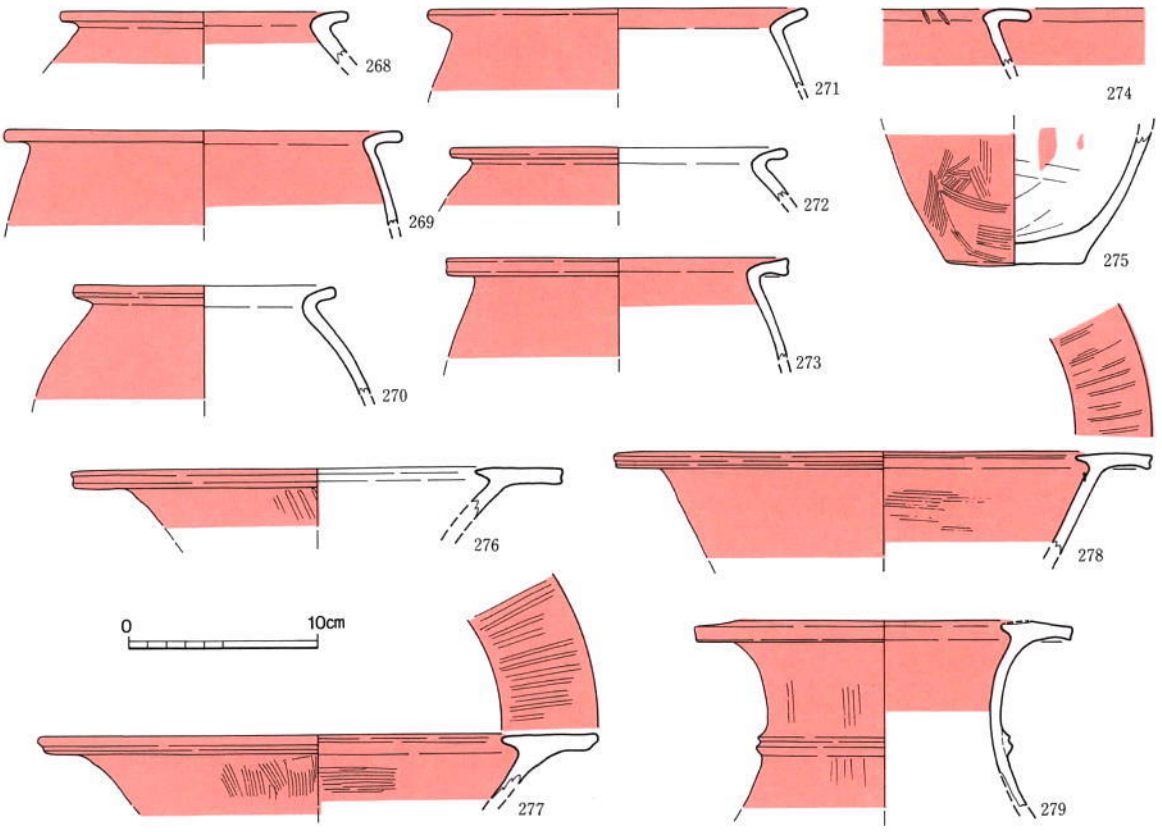
第163図　包含層出土土器実測図.15 (1/4)



第164図　包含層出土土器実測図.16（1/4）



第165図　包含層出土土器実測図.17（1/4）



第166図　包含層出土土器実測図.18（1/4）

行う。193は上底でやや古い形態を呈する。200～205は甕の底部である。いずれも大きく樽型になる甕となるものである。

鉢（206～225）206～212は口縁が外側に折れ曲がる鉢。213～225は小型の鉢。216・221は胴部があまり張らない。その他は丸い器形である。

高坏（226～232）226は口縁が外側に折れ曲がる高坏の口縁部である。227･228は口縁鋤先状を呈する坏部である。229は途中で段が付き、口縁が大きく開くもので、本遺跡の中心的な時期のものよりかなり新しい。内外面の調整は縦方向のミガキである。230～232は高坏の脚部である。内外面の調整はナデを行う。

壺（233～236）233は口縁部が外側に大きく開く壺。口縁端部は丸く仕上げる。234～236は鋤先状の口縁を呈する広口壺。

手捏土器（237）小型で粗いつくりである鉢状に手捏ねで成形する。内外面はナデによる調整で、強い指頭圧痕が残る。

不明土器（239）筒状の口縁部で、端部をやや丸く仕上げる。口縁下に三角突帯を強く押し付けている。その部分の内面は膨らんでいる。内外面の調整はナデ。

土師器

壺（240）二重口縁が大きく崩れた口縁部である。外側にわずかに開く。器壁も厚く、つくりもシャープでない。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

不明土器（238）口縁部か。内外面の調整はナデ。

丹塗土器

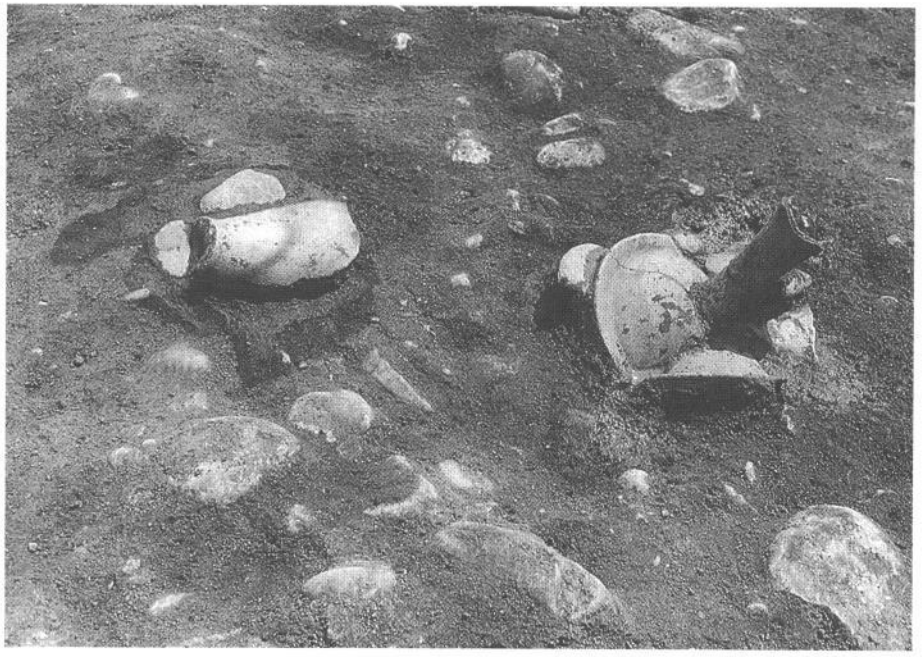
甕（241～253）鋤先状の口縁を呈する甕である。243・244・247・252・253は口縁下に「M」字型突帯を貼り付ける。246は何も貼り付けない。その他は残存していないので不明である。243～245・248・251・253は口縁外側端部に刻み目を付ける。243・244は口縁部上端面に暗文を施す。丹塗は外面のみのものと両面塗るものがある。

高坏（255～264）255～257は鋤先状の口縁を呈するものである。256の口縁部上端面に暗文を施す。外面はハケメである。258は脚部の円筒状になる部分である。内面に絞り痕が残っている。259～263は高坏の脚部である。260・262の外面は暗文が施される。263の外面の調整はハケメである。また、外面のみに丹塗を施す。

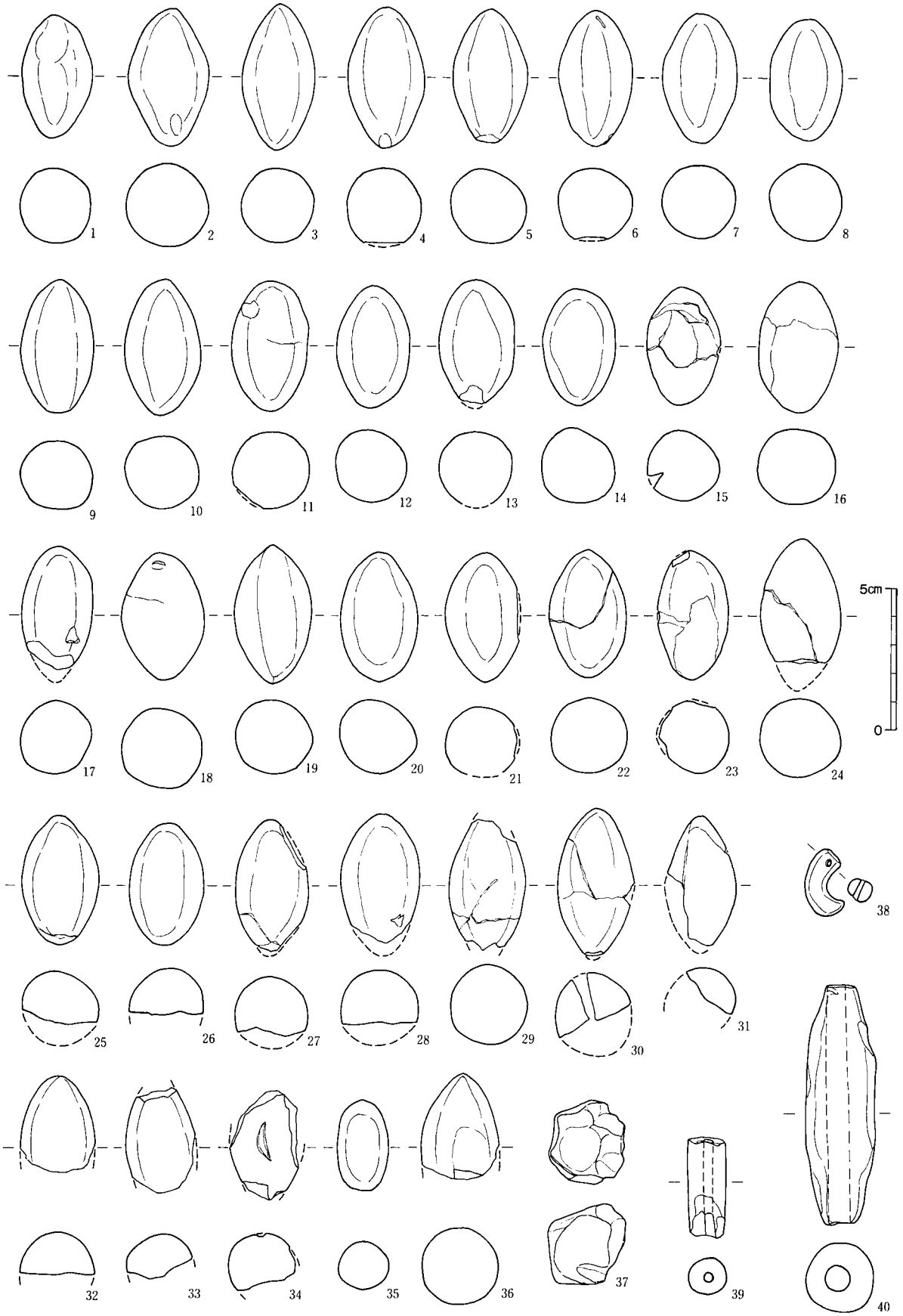
筒形器台（264～267）264は筒形器台の鍔部分である。鍔の外側端部には刻み目が施される。また、鍔上面は暗文が施されるが、下面は、丹塗のみである。265～267は器台の脚部である。266は外面ハケメ調整。268は外面に暗文を施す。

壺（268～279）268～275は無頸壺。275は内面に丹が垂れる。276～278は鋤先状の口縁を呈する広口壺の口縁部。276の外面は暗文。277の外面はハケメ。278の外面はミガキである。279は鋤先状を呈する壺の口縁部。頸部最小径付近に「M」字型突帯を貼り付ける。

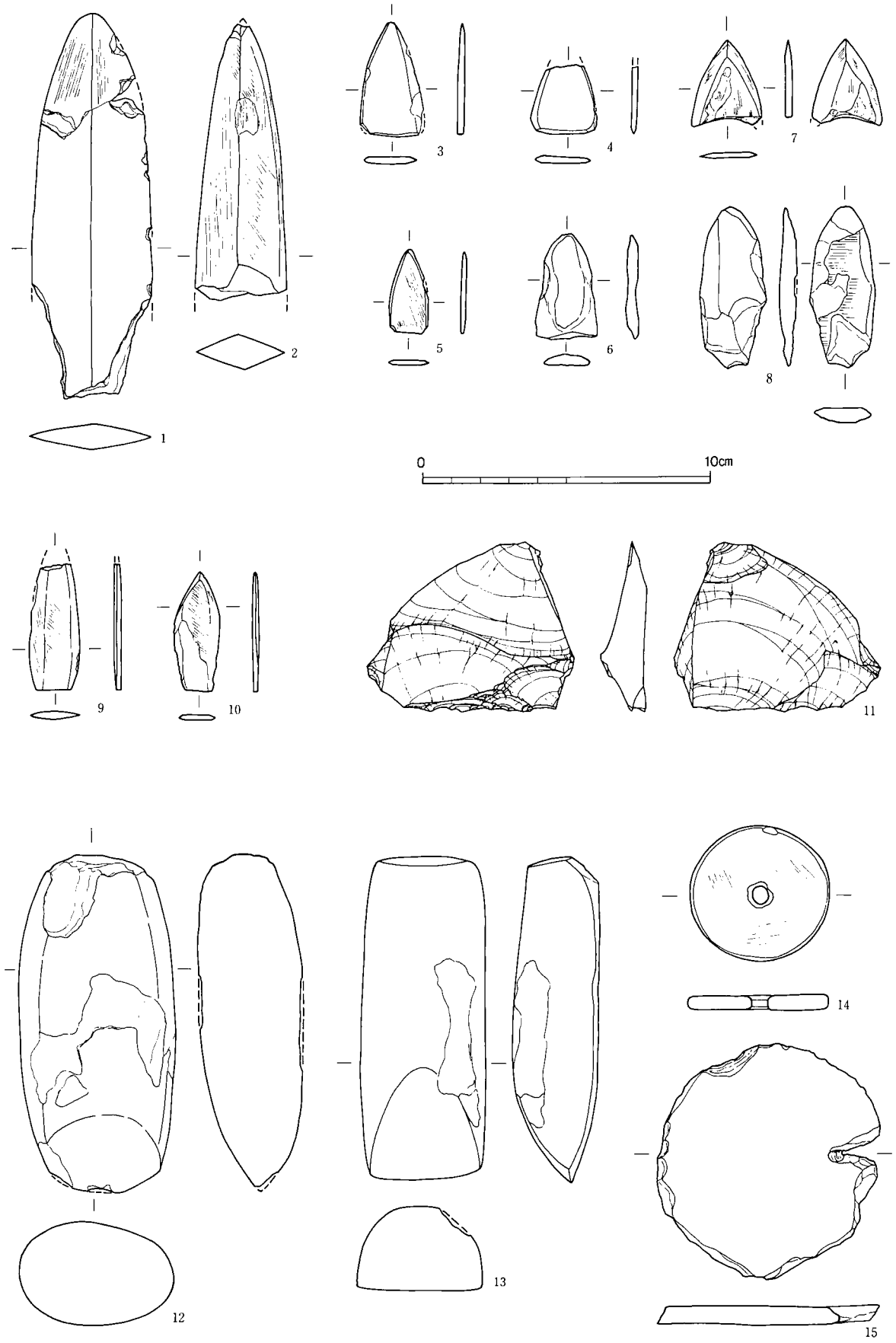
不明土器（254）筒状を呈し、直線状にわずかに開く。口縁端部は角張って仕上げられ、外面は丹塗である。



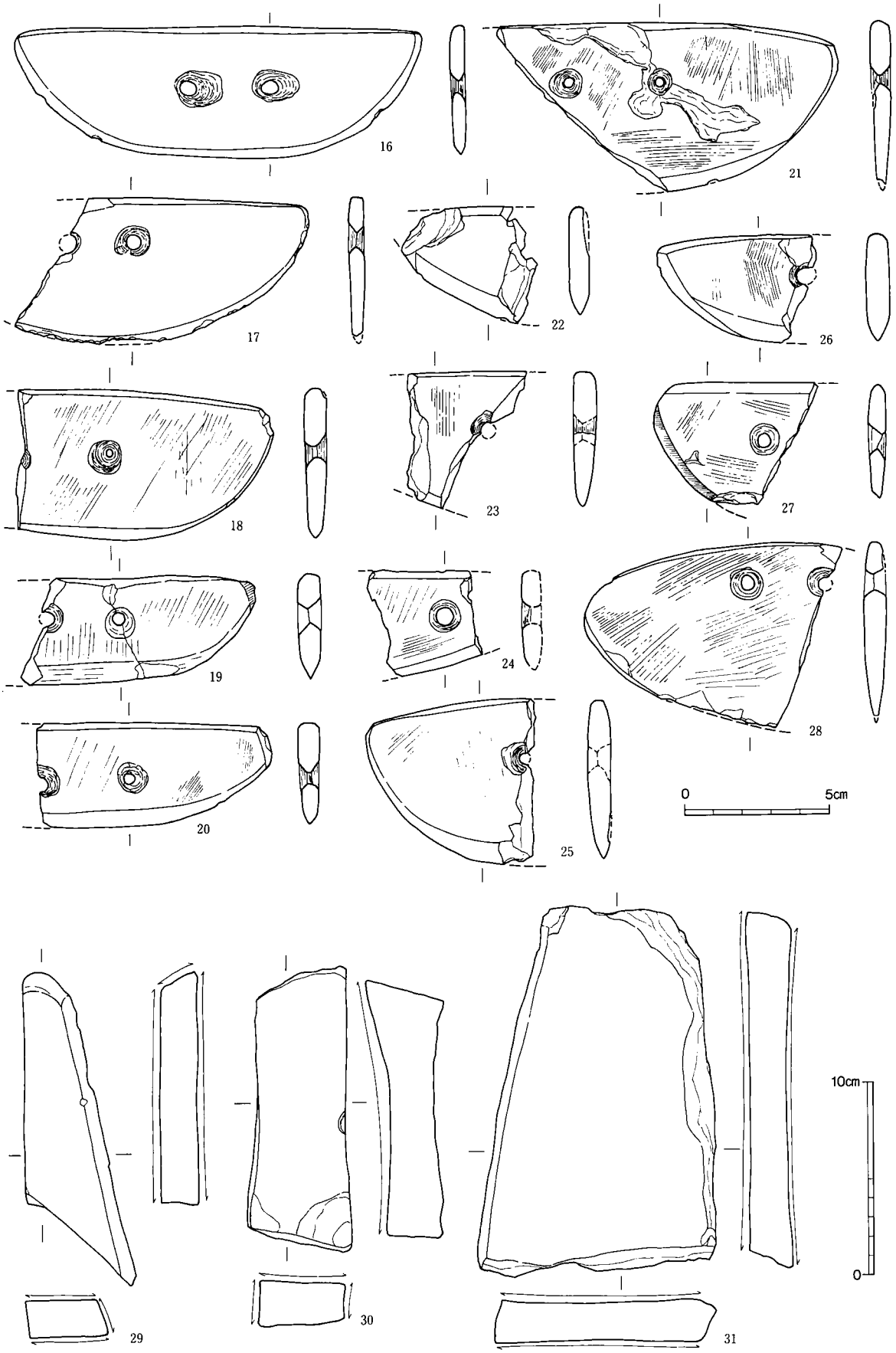
黒褐色土包含層遺物出土状況



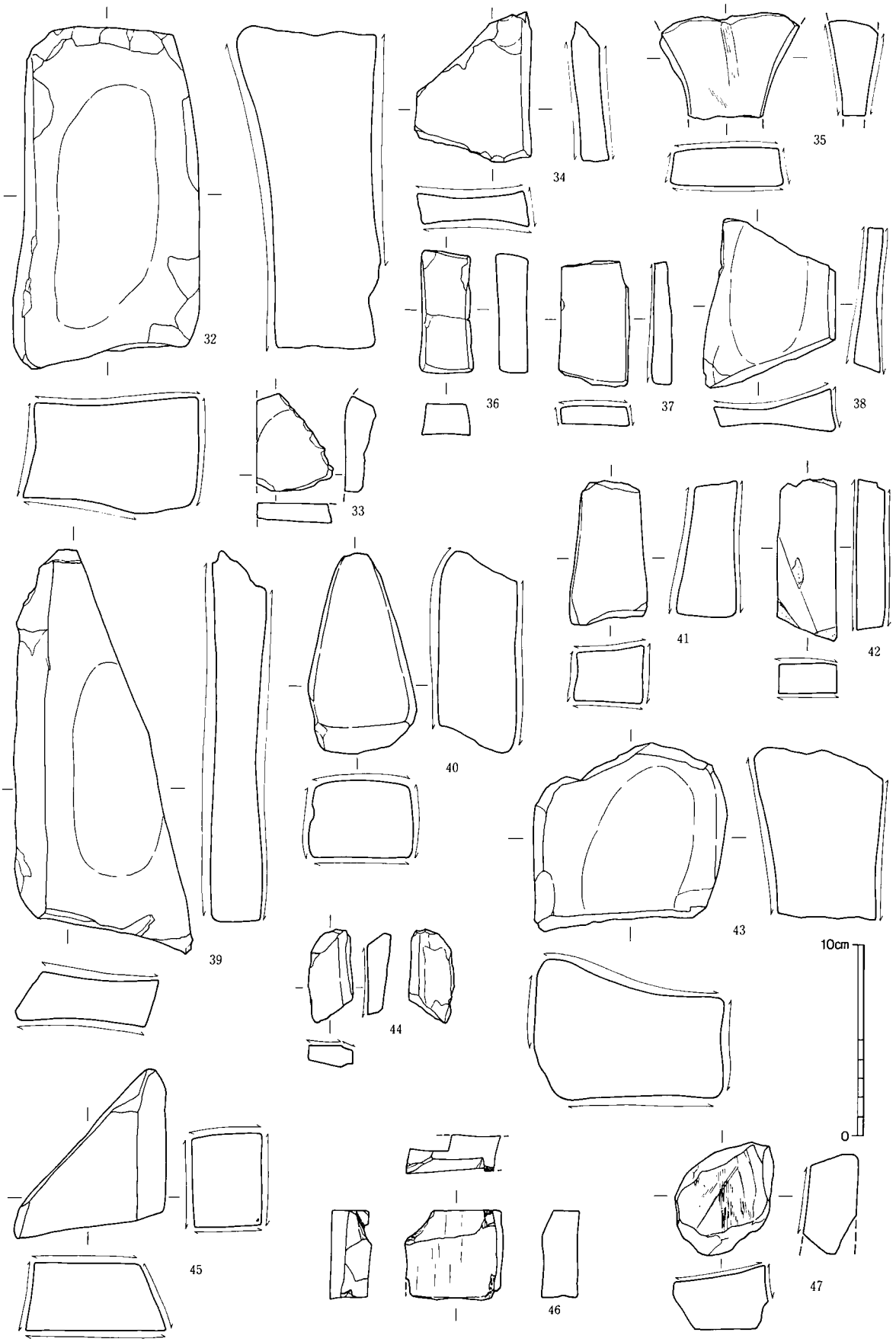
第167図　出土土製品実測図（1/2）



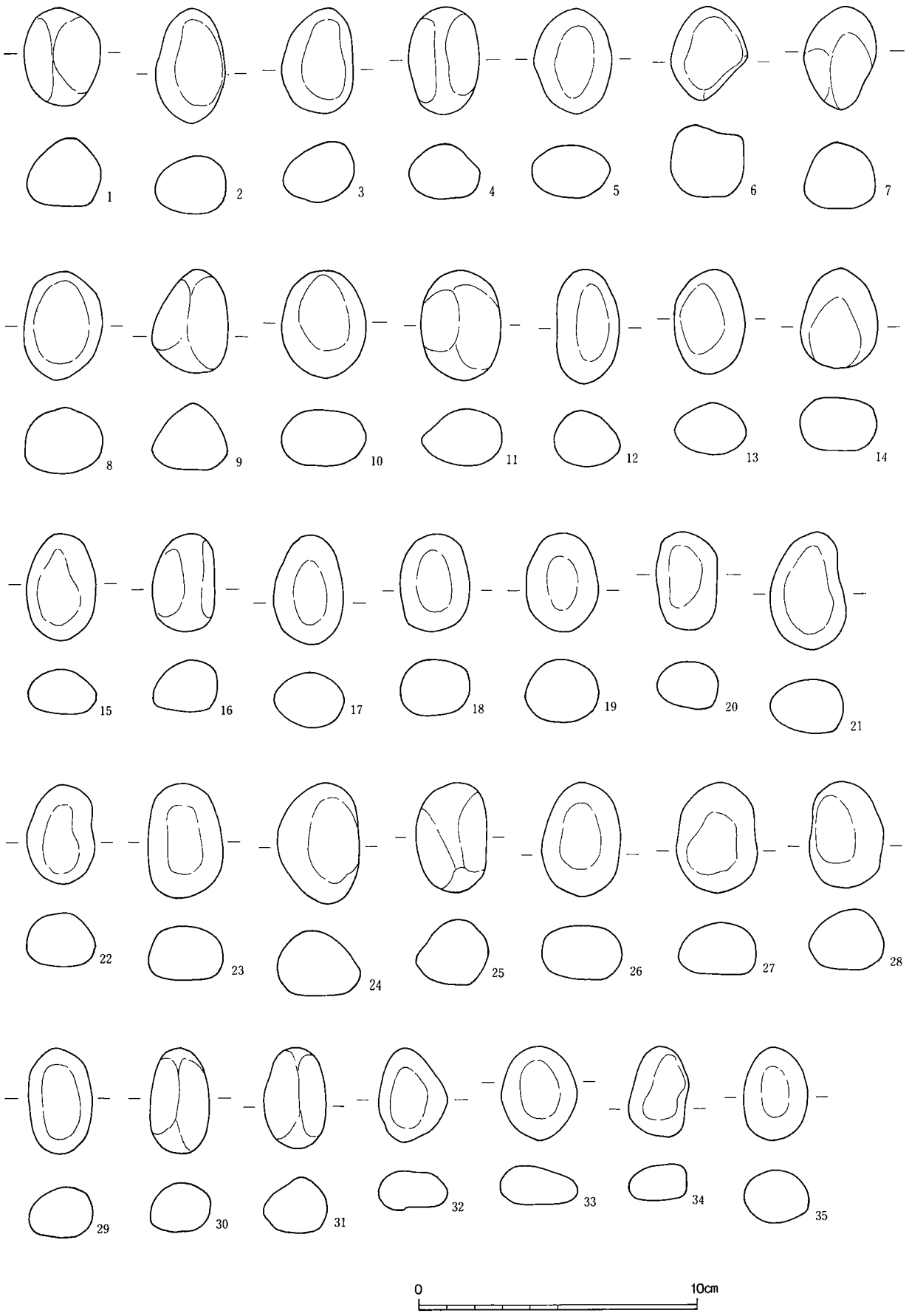
第168図　出土石製品実測図．1 (1/2)



第169図　出土石製品実測図．2（1/2、1/3）



第170図　出土石製品実測図．3 (1/3)



第171図　41号竪穴住居跡出土土投弾状小礫実測図（1/2）

出土土製品実測図

挿図番号	登録番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
第167図7	1	投弾	52号住居	45	26	25	24.6	
第167図8	2	投弾	56号住居	42	26	26	24.6	
第167図17	3	投弾	56号住居		25	25		
	4	投弾	56号住居					1/3
第167図10	5	投弾	56号住居	48	26	25	23.3	
第167図11	6	投弾	56号住居	45	27	27	25.2	
第167図21	7	投弾	56号住居	45	26	25	21.7	
第167図20	8	投弾	56号住居	46	27	26	24.2	
第167図28	9	投弾	56号住居		28			
第167図23	10	投弾	56号住居	46	25	26		
第167図22	11	投弾	56号住居	45	27	26	22	
第167図25	12	投弾	56号住居	46	27			
	13	投弾	56号住居					小片
第167図12	14	投弾	56号住居	43	25	25	22.9	
第167図34	15	投弾	56号住居					2/3
第167図16	16	投弾	56号住居	47	27	26	27.2	
第167図14	17	投弾	56号住居	42	25	26	21.8	
第167図13	18	投弾	56号住居	46	26	27	23.8	
第167図26	19	投弾	56号住居	43	26			
	20	投弾	56号住居					小片
	21	投弾	56号住居					小片
	22	投弾	56号住居					小片
	23	投弾	56号住居					小片
	24	投弾	56号住居					小片
第167図31	25	投弾	67号住居					1/3
第167図33	26	投弾	68号住居		25			1/3
第167図19	27	投弾	69号住居	48	27	25	23.8	
第167図35	28	投弾	71号住居	32	18	17	8.3	
	29	投弾	87号住居					小片
第167図18	30	投弾	26号土坑	44	29	28	25.5	
第167図1	31	投弾	26号土坑	44	24	26	19.4	
第167図2	32	投弾	30号土坑	50	28	28	27.6	
第167図3	33	投弾	47号土坑	52	26	25	24	
第167図4	34	投弾	47号土坑	50	27	27	25.1	
第167図5	35	投弾	47号土坑	48	26	26	23.7	
第167図6	36	投弾	47号土坑	48	26	25	23.2	
第167図24	37	投弾	47号土坑		28	27		
第167図27	38	投弾	47号土坑		26			
第167図29	39	投弾	47号土坑		27	28		
第167図30	40	投弾	47号土坑	54	28			
第167図32	41	投弾	47号土坑					1/3
第167図36	42	投弾	47号土坑		26	27		1/2
	43	投弾	47号土坑					小片
	44	投弾	47号土坑					小片
	45	投弾	47号土坑					小片
	46	投弾	47号土坑					小片
第167図15	47	投弾	包含層	41	26	26	18.1	
第167図9	48	投弾	遺構検出面	47	25	24	21.9	
	49	投弾	遺構検出面					小片
	50	投弾	遺構検出面					小片
	51	投弾	遺構検出面					小片
第167図37		不明	78号住居	28	28	30	14.3	
第167図38		勾玉	10号溝埋土	23	8	8	1.8	
第167図39		土錘	12号住居貼床		14	13	6.2	1/2
第167図40		土錘	67号住居		83	25	25	42.0

出土石製品実測図

挿図番号	登録番号	器種	出土遺構	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材
第168図1	1	石剣	68号住居No.4	13.4	4.1	0.9	61.9	片岩系
第168図2	2	石剣	9号溝壁	9.7	3.2	1.3	37.6	頁岩
第168図3	3	磨製石鏃	13号溝上位	4.0	2.2	0.25	2.8	蛇紋岩
第168図4	4	磨製石鏃	56号土坑	2.4	2.3	0.2	2.3	蛇紋岩系
第168図5	5	磨製石鏃	49号土坑	2.9	1.4	0.2	1.2	蛇紋岩系
第168図6	6	磨製石鏃	17号溝	3.6	2.2	0.4	3.7	粘板岩
第168図7	7	磨製石鏃	112号土坑	3.0	2.5	0.2	1.9	蛇紋岩
第168図8	8	磨製石鏃	58号住居	5.7	2.4	0.6	9.3	頁岩系
第168図9	9	磨製石鏃	廃土中	4.4	1.7	0.3	4.1	片岩
第168図10	10	磨製石鏃	42号住居	4.2	1.6	0.2	2.3	片岩
第168図11	11	不明	58号住居	7.3	5.9	1.6	48.7	安山岩
第168図12	12	太型蛤刃石斧	72号住居No.8	11.8	5.4	3.6	372.7	玄武岩
第168図13	13	抉入柱状片刃石斧	69号住居No.1	11.4	4.4	3.0	275.6	玄武岩
第168図14	14	紡錘車	第三遺構面	4.7	4.8	0.5	23.4	蛇紋岩系
第168図15	15	不明	49号土坑	7.8	8.3	0.6	60.6	頁岩
第169図16	16	石庖丁	49号土坑	14.0	4.5	0.5	54.9	砂岩
第169図17	17	石庖丁	68号住居	10.1	5.0	0.5	42.4	蛇紋岩系
第169図18	18	石庖丁	包含層	8.4	5.15	0.8	54.1	泥岩
第169図19	19	石庖丁	廃土中	8.2	3.6	0.8	34.1	凝灰岩
第169図20	20	石庖丁	85号住居	8.1	3.6	0.7	34.5	凝灰岩
第169図21	21	石庖丁	77号住居	11.8	5.8	0.7	58.1	凝灰岩
第169図22	22	石庖丁	第三遺構面	4.2	4.1	0.7	15.1	片岩
第169図23	23	石庖丁	84号住居	4.1	4.7	0.8	16.2	凝灰岩
第169図24	24	石庖丁	47号土坑	3.6	3.6	0.4	4.8	片岩
第169図25	25	石庖丁	第三遺構面	5.9	5.7	0.8	33.1	凝灰岩
第169図26	26	石庖丁	第三遺構面	5.5	3.7	0.8	19.7	凝灰岩
第169図27	27	石庖丁	表採	5.7	4.2	0.6	20.8	片岩
第169図28	28	石庖丁	第三遺構面	9.0	6.4	0.8	50.7	粘板岩

第169図29	29	砥石	49号土坑	16.2	4.8	2.0	210.3	砂岩
第169図30	30	砥石	85号住居	14.7	5.3	2.4	422.5	砂岩
第169図31	31	砥石	82号住居No.1	19.1	12.4	2.4	1044.1	粘板岩
第170図32	32	砥石	55号住居No.1	17.8	9.0	7.3	1788.3	細粒砂岩
第170図33	33	砥石	73号住居	5.2	4.0	1.1	33.3	細粒砂岩
第170図34	34	砥石	47号土坑	7.7	6.0	1.7	103.6	砂岩
第170図35	35	砥石	廃土中	4.3	6.9	2.3	104.2	細粒砂岩
第170図36	36	砥石	68号住居屋内土坑	6.3	2.6	1.65	50.4	細粒砂岩
第170図37	37	砥石	遺構面	6.5	3.5	1.0	43.3	砂岩
第170図38	38	砥石	71号住居	8.7	6.9	2.1	105.5	砂岩
第170図39	39	砥石	49号土坑	21.0	9.5	2.4	645.2	砂岩
第170図40	40	砥石	72号住居No.1	10.3	5.7	4.1	335.6	砂岩
第170図41	41	砥石	59号土坑	7.4	4.0	3.0	132.7	砂岩
第170図42	42	砥石	74号住居No.3	8.3	3.1	1.5	82.5	粘板岩
第170図43	43	砥石	72号住居No.12	9.8	10.1	7.4	890.7	砂岩
第170図44	44	砥石	69号住居	4.8	2.3	1.2	17.0	細粒砂岩
第170図45	45	砥石	87号住居	8.0	7.8	3.6	264.4	砂岩
第170図46	46	砥石	178号溝	4.7	5.2	1.9	63.8	粘板岩
第170図47	47	砥石	黒褐色土	5.4	4.9	2.7	98.5	細粒砂岩

41号竪穴住居跡出土投弾状小礫実測図

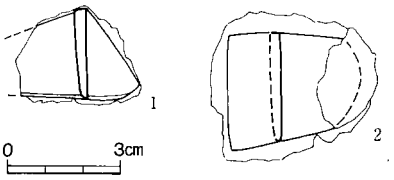
挿図番号	登録番号	種類	出土遺構	長さcm	幅cm	高さcm	重さg	備考
第171図1	1		41号住居	3.4	2.7	2.4	32.0	
第171図2	2		41号住居	4.2	2.5	2.1	28.9	
第171図3	3		41号住居	3.8	2.5	2.1	28.6	
第171図4	4		41号住居	3.9	2.5	2.0	23.3	
第171図5	5		41号住居	3.8	2.8	1.9	28.5	
第171図6	6		41号住居	3.3	2.6	2.5	29.3	
第171図7	7		41号住居	3.1	2.6	2.4	24.4	
第171図8	8		41号住居	3.8	2.8	2.3	31.7	
第171図9	9		41号住居	3.7	2.6	2.4	31.3	
第171図10	10		41号住居	3.9	3.0	2.0	25.8	
第171図11	11		41号住居	4.0	2.9	2.0	32.2	
第171図12	12		41号住居	4.2	2.3	2.0	22.9	
第171図13	13		41号住居	3.8	2.5	1.8	22.4	
第171図14	14		41号住居	3.6	2.8	1.9	24.8	
第171図15	15		41号住居	3.8	2.5	1.6	21.2	
第171図16	16		41号住居	3.5	2.3	1.8	21.5	
第171図17	17		41号住居	4.0	2.5	2.0	25.2	
第171図18	18		41号住居	3.5	2.5	2.0	26.0	
第171図19	19		41号住居	3.6	2.6	2.6	26.7	
第171図20	20		41号住居	3.5	2.2	1.7	20.9	
第171図21	21		41号住居	4.2	2.7	1.9	27.8	
第171図22	22		41号住居	3.6	2.4	2.0	24.6	
第171図23	23		41号住居	4.1	2.7	2.0	34.4	
第171図24	24		41号住居	4.3	2.9	2.3	32.9	
第171図25	25		41号住居	4.0	2.6	2.3	28.6	
第171図26	26		41号住居	4.2	2.8	1.9	25.6	
第171図27	27		41号住居	4.0	2.9	1.9	26.4	
第171図28	28		41号住居	3.8	2.6	2.2	30.6	
第171図29	29		41号住居	3.8	2.3	1.8	20.5	
第171図30	30		41号住居	3.8	2.1	1.7	19.4	
第171図31	31		41号住居	3.6	2.2	1.9	19.0	
第171図32	32		41号住居	3.4	2.4	1.5	12.0	
第171図33	33		41号住居	3.3	2.7	1.4	17.5	
第171図34	34		41号住居	3.2	2.1	1.3	12.2	
第171図35	35		41号住居	3.3	2.3	1.9	18.5	
第171図36	36		41号住居	3.1	2.4	1.7	15.0	
第171図37	37		41号住居	4.7	3.2	1.9	30.5	
第171図38	38		41号住居	3.3	2.8	2.0	24.2	
第171図39	39		41号住居	3.6	2.7	2.5	32.3	
第171図40	40		41号住居	3.4	2.7	2.4	27.6	
第171図41	41		41号住居	3.3	2.0	2.2	18.7	
第171図42	42		41号住居	3.2	2.2	1.9	16.3	
第171図43	43		41号住居	3.3	2.9	1.9	20.7	
第171図44	44		41号住居	3.3	2.4	1.8	17.7	
第171図45	45		41号住居	3.6	2.9	2.3	33.4	
第171図46	46		41号住居	3.2	2.7	2.5	30.3	
第171図47	47		41号住居	3.3	2.7	2.4	29.7	
第171図48	48		41号住居	3.8	2.8	2.0	31.8	
第171図49	49		41号住居	3.5	2.4	1.8	20.3	
第171図50	50		41号住居	3.3	2.5	2.1	22.4	
第171図51	51		41号住居	3.4	2.7	2.0	25.3	
第171図52	52		41号住居	3.5	2.1	2.0	20.3	
第171図53	53		41号住居	3.4	2.5	1.9	17.3	
第171図54	54		41号住居	3.8	2.8	2.3	33.2	
第171図55	55		41号住居	3.2	2.3	1.8	19.7	
第171図56	56		41号住居	3.5	2.3	2.0	20.4	

出土鉄器一覧表

挿図番号	登録番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm		備考
第172図1	1	不明	36号土坑	31.0	25.0	3.0		
第172図2	2	不明	69号住居	46.0	31.0	3.0		

7　補遺

ここでは昨年度報告の『船越高原Ａ遺跡Ｉ』で報告し忘れた土器、鉄器について掲載する。以下、個別に説明したい。



第172図　出土鉄器実測図（1/2）

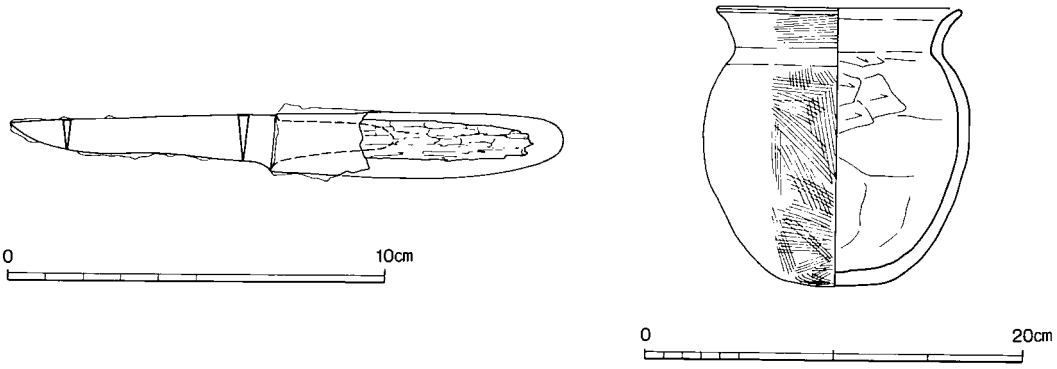
43号竪穴住居跡出土鉄器（図版62第173図）

刀子（１）全長13.75cm、身長7.0cm、背幅0.3cm、身幅1.5cmの刀子である。保湿性に富む土壌に覆われていたため、柄部の木質が良好に遺存している。木質は萎縮しているが、周囲に鉄分が覆着しており、旧状の復元が可能である。

64号土坑出土土器（第173図）

土師器

甕（２）口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。胴部は球形に近く、底部は平たい。外面の調整はハケメ、内面の調整はヘラケズリである。



第173図　43号竪穴住居跡出土鉄器実測図・64号土坑出土土器（鉄器は1/2、土器は1/4）

Ⅵ　おわりに

船越高原Ａ遺跡の弥生時代の集落は弥生中期後半から末の時期にかけて営まれている。対岸の鷹取五反田遺跡もほぼ同時期に集落が営まれ始め、存続は後期前半までと高原遺跡より長い。両遺跡はともに美津留川の自然堤防上とされる微高地に立地している。この美津留川の本流である筑後川は、古くから流路を大きく変化させており、周辺には旧河川の痕跡である長い谷状の地形をいたるところで見ることができる。支流である美津留川も同様であると考えられ、集落の存続していた弥生時代に現在と同じ場所を流れていたかどうかは不明である。この点を五反田遺跡から見てみると調査区西端部の最も住居が集まっている川岸付近は標高22ｍから急に落ちとなっている。集落が廃絶された後に美津流川の流れによって削られた可能性もある。しかし、高原遺跡側においては自然堤防の最も高くなった部分から川側である東側に向かって１ｍ程、段落ちになった後、緩やかに下っている。その途中の段にも同時期の住居が存在しているため、当時も川がそのまま流れていた若しくは谷状の地形であったことが分かる。このことから両集落が地形によって隔てられた同時期に存在する別々の集落であったと考えることが妥当であろう。

高原遺跡においては一部（42・62・83～88号住居、Ｂ群とする）が一段低くなった部分に存在しているが、大半の住居（Ａ群とする）は標高22ｍ以上のもっとも高くなった部分に集中している。数多く起こった洪水等の難を避けるためか、少しでも高い場所を選んでいる傾向がうかがえる。また、弥生時代の集落は中央部より南側に集中しており、北側では同時期の遺構がまったく見られないことから、集落域は南側の現在の下古賀集落内に展開するものと思われる。

今回、43棟の竪穴住居跡を報告しているが、東西を軸にとり、東西軸６ｍ前後、南北４ｍ前後の大型で中央に炉を配置し、二本柱の住居プランと軸の一定しない４ｍ前後の小型の住居プランに分けられる。いずれもベッド等の施設を持ったものは検出できなかった。この2つのタイプの住居に土器による時期差はほとんど見られないが、住居の切り合い関係からは大型の住居が後出するようである。

また、同時期の貯蔵穴と思われる27・28・46号土坑が集落の中心付近から検出されている。46号土坑から堅果類の種子がまとまって出土している堅果類も食糧として貯えられていたことがわかる。しかし、生業は石庖丁が出土していること等から、東側に広がる後背湿地を利用した稲作が行われていたのであろう。

58・68・71号住居、47号土坑から大型、中型の甕が出土している。これらは日常土器として使用されていたとも考えられるが、甕棺としても使用される可能性のあるものである。58号住居出土の中型の甕は破片で色調が大きく異なる一個体が接合しており、集落内で焼成されたが失敗し、住居内に投棄された可能性が考えられる。また、鷹取五反田の集落内の28号住居から甕棺用に作られたと思われる大型の甕が出土している。以上のことから、日常用、甕棺用のいずれの甕も集落内で製作、焼成されたと思われる。五反田遺跡においては調査区東端部分で甕棺墓群が調査されている。五反田遺跡の集落の人々の墓域として考えてよいと思われる。では、高原遺跡の墓域が何処になるか。川を挟んだ五反田遺跡の墓域に高原遺跡の集落の甕棺が運ばれ、葬られたとは考えにくく、高原遺跡の周辺の微高地に墓域の存在が予想される。

調査区の東側付近から多くの溝が検出された。切り合いからはほとんどの溝が弥生時代の住居より後出している。ほとんどの溝は幅1ｍもなく現遺構面からの深さも浅く、遺物もほとんど出土しない。

また、昨年度報告分の上面の遺構面においても同様の溝が検出され、陶磁器が出土している。西方にある船越二ノ上遺跡でも同様の溝が数多く検出されており、長期間にわたり同じ目的で掘られた可能性がある。確証はないが水田耕作等に関連するものとして考えておきたい。

調査区東端部で検出された10・13a・13b号溝は、先述の溝と異なり、規模も大きく10号溝までの使用期間を考慮すると、かなり長期間に渡って、掘り直しが繰り返されており、重要な水路としての役目を担っていたものと思われる。

では、最初に掘削された13b号溝の時期については、住居Ｂ群と関係を見ると85・88号住居は直接、溝に切られており、その他の住居も溝のすぐ近くにあり、溝と同時期若しくは溝の掘削後に存在していたとは考えにくく、住居Ｂ群の廃絶後に13b号溝が掘られたと考えるのが自然である。住居Ａ群が営まれている時期に13b号溝が掘削されているかどうかは不明であるが、住居Ｂ群と同様の土器、プランを持つ住居であることを考えると住居Ａ群の廃絶後であろうか。その後、弥生時代後期後半に13a号溝として掘り直しが行われ、その時、土を溝の両側に盛土として積み上げている。この溝は徐々に埋没していったものの、最終的には古墳時代後期以降まで溝（10号溝、昨年度報告）としての機能を失わず、使用されていたと考えられる。

高原遺跡からは口縁下に沈線を巡らす甕が８点出土している。この時期の甕には一般的に沈線を巡らすものはほとんど見られない。57号住居出土の甕は螺旋状に３条巡らすもの、４条巡らすものがある。また、他の２条沈線を施す甕も、破片資料であり、本来は螺旋であった可能性もある。同様のものは五反田遺跡の２号甕棺の２条を螺旋に巡らす甕をはじめ、６号土坑から３点、計５点の破片の出土がある。また、約2㎞西方の船越一ノ上遺跡においても３・８・10・11・12・13号甕棺墓をはじめ、住居、土坑から計12点出土しており、この限られた地域の中での特徴かと思われる。参考に該当する時期に同様の沈線を持つ甕として嘉穂町の原田遺跡4地点や同じく嘉穂町アナフ遺跡で数点見られることを挙げておく。

以上、概観してきたが、高原遺跡の集落が短期間で廃絶されており、また、五反田遺跡も時期的に遅くまで残るものの廃絶される。しかし、周辺はその後も長期間にわたり耕作地として利用されている。これらの集落が何処へ移動したのか。今後の課題である。

図　　版

1　Ⅰ区第 3 遺構面東部分全景
（空中写真）

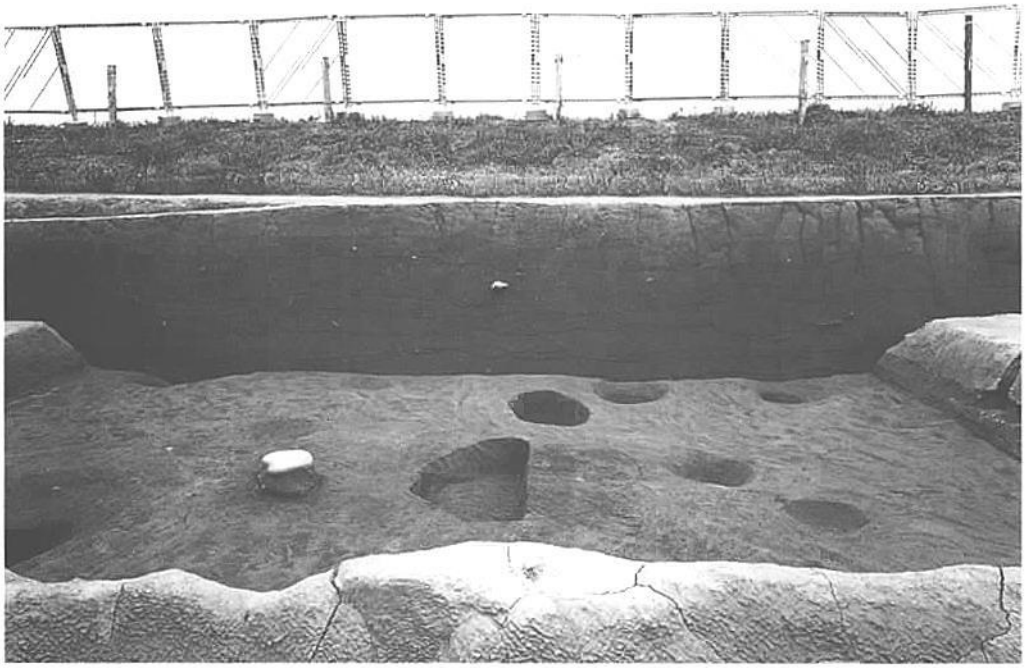
2　Ⅰ区第 3 遺構面西部分全景
（空中写真）

図版 2

1　Ⅰ区第 3 遺構面東部分西半
（空中写真）

2　Ⅰ区第 3 遺構面東部分東半
（空中写真）

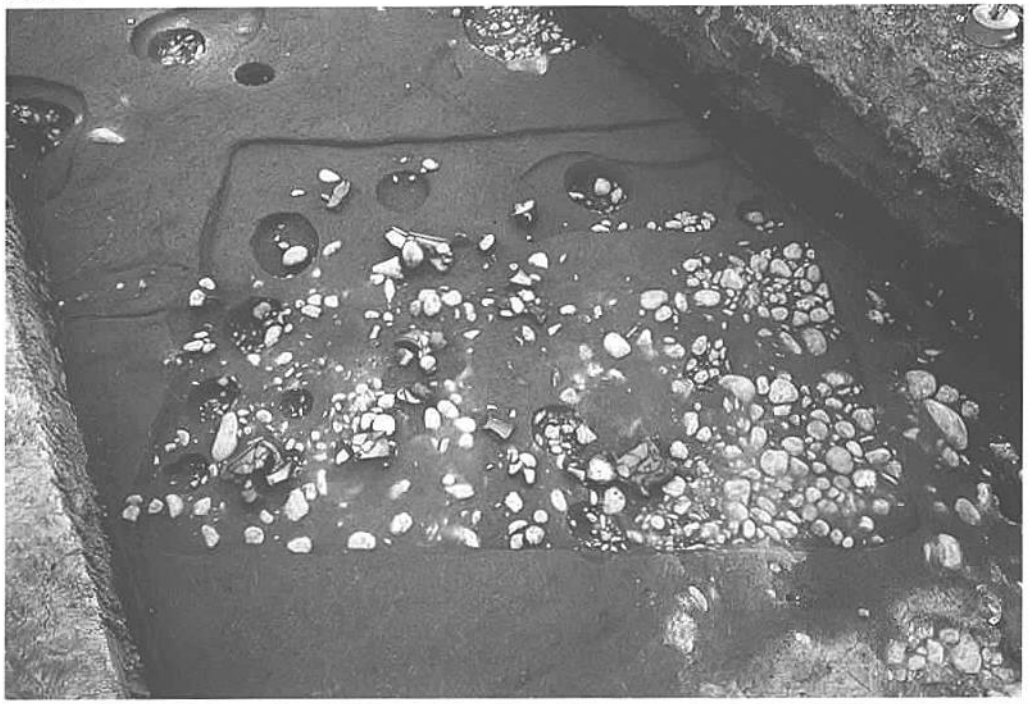
1　37・38・39号竪穴住居跡
（北から）



2　37号竪穴住居跡断面

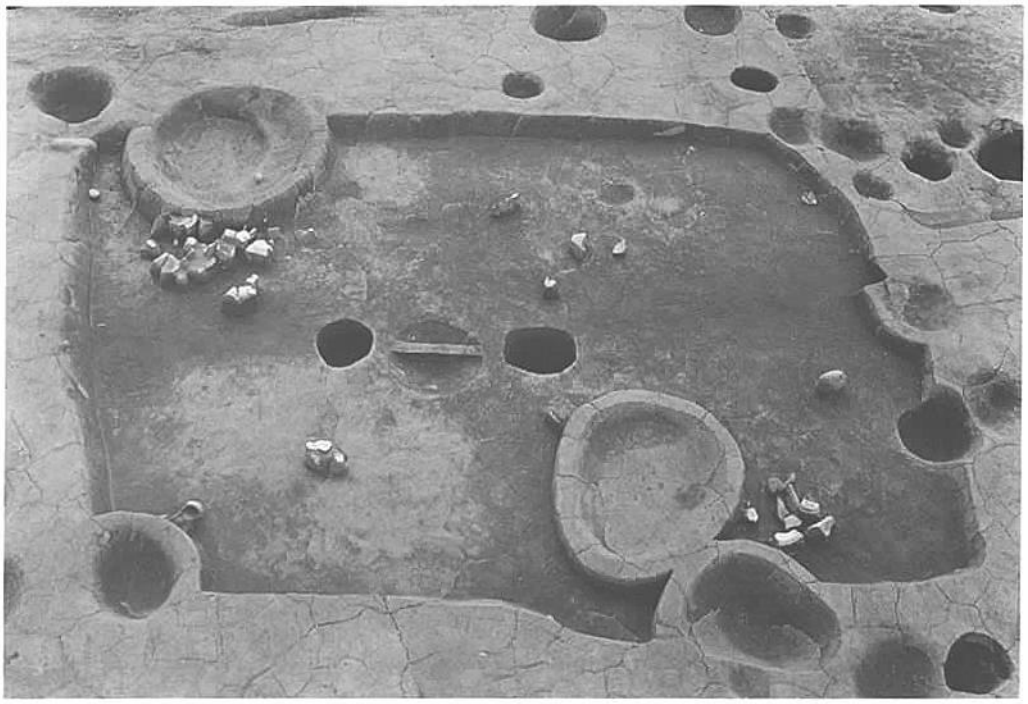
3　40・41号竪穴住居跡
19号土坑（北から）

図版 4

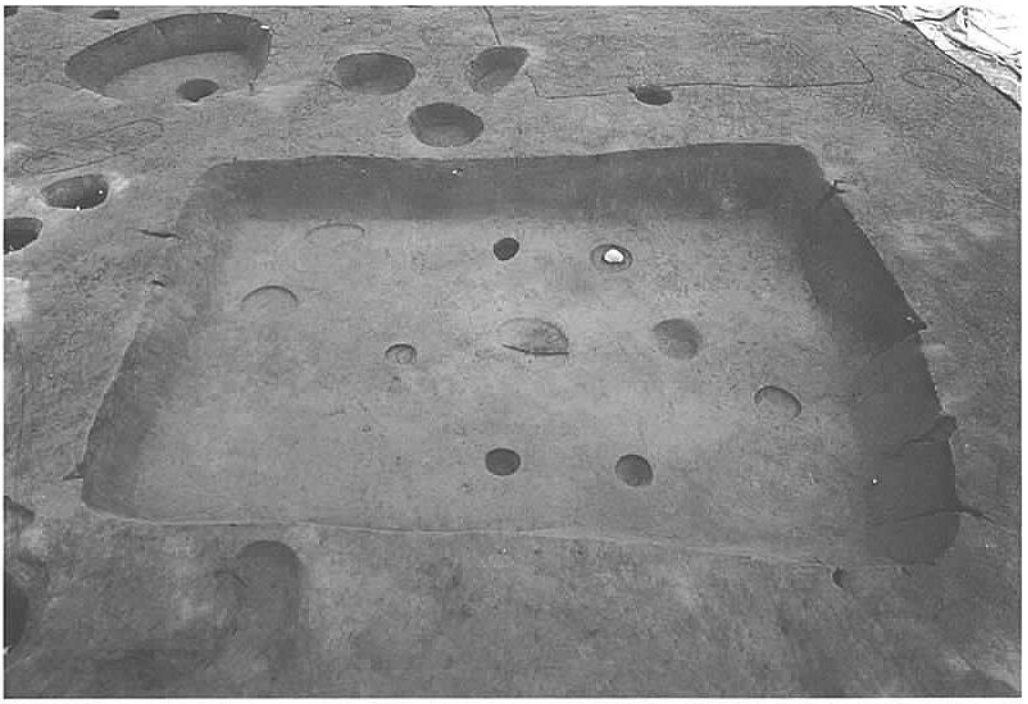


1　42号竪穴住居跡（西から）

2　52号竪穴住居跡（東から）



3　54号竪穴住居跡（東から）



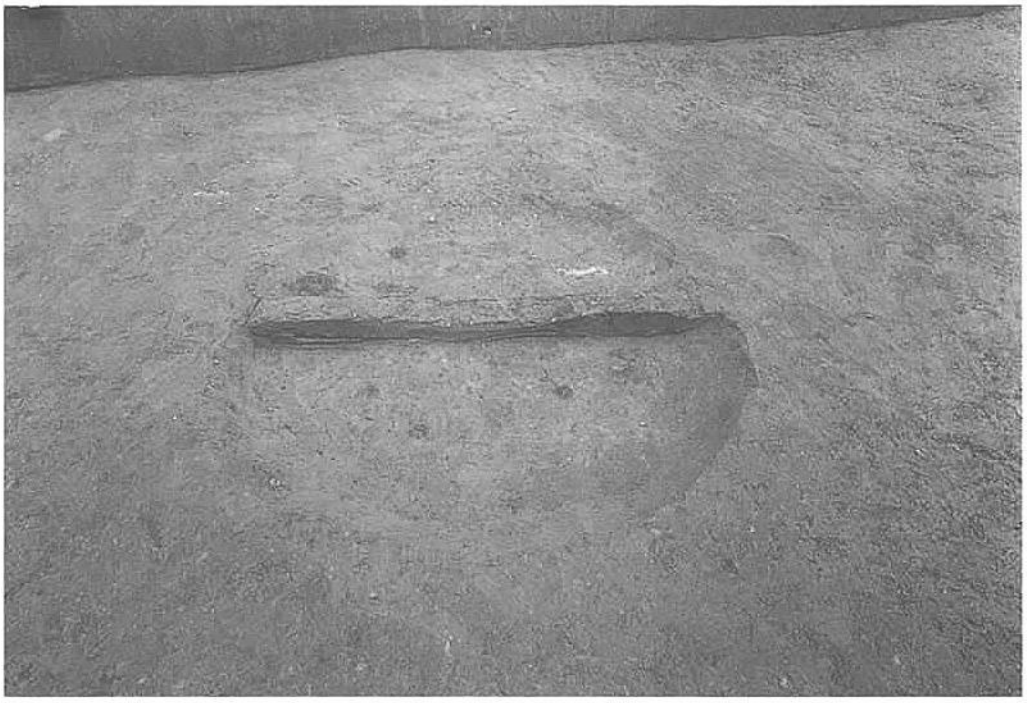
1　55号竪穴住居跡（西から）

2　56号竪穴住居跡（東から）

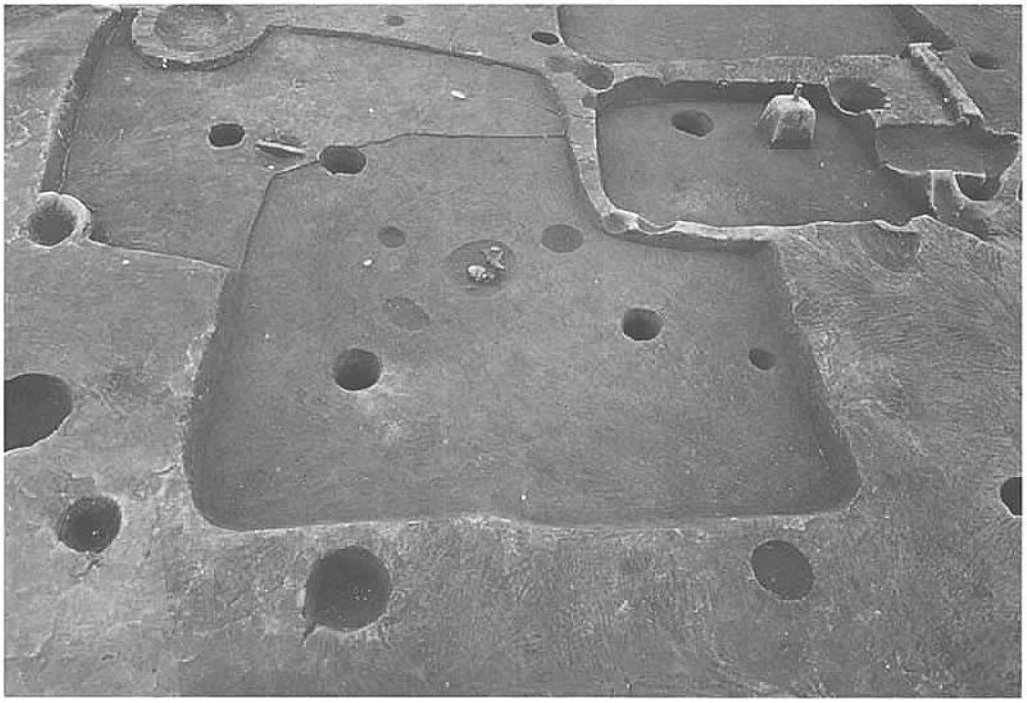
3　57号竪穴住居跡（南から）

図版 6

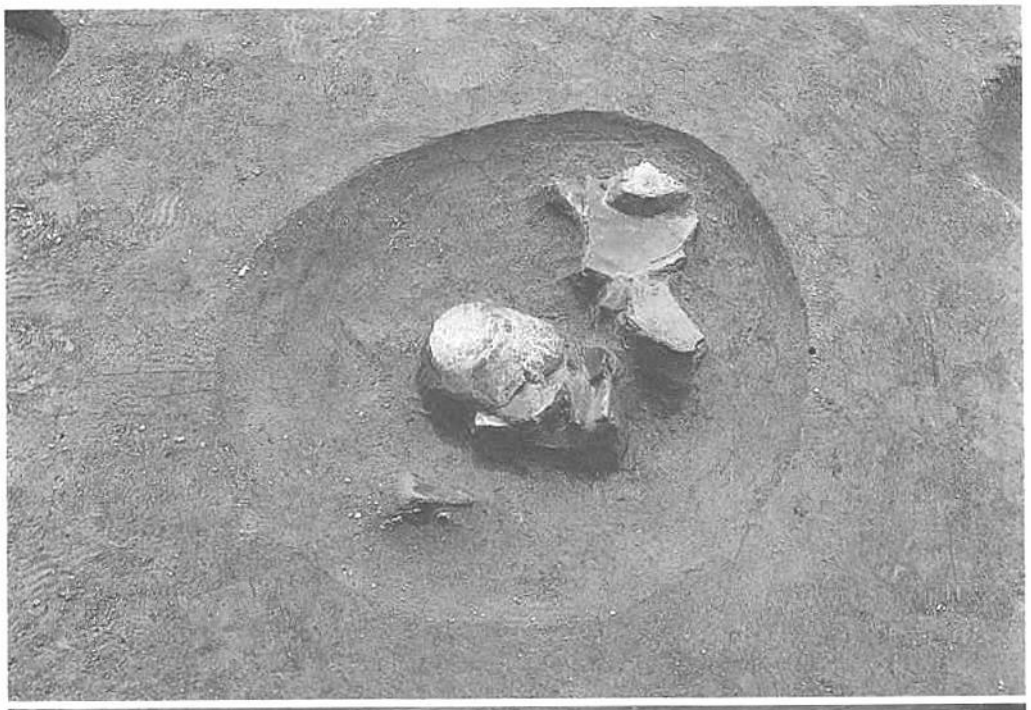
1　58号竪穴住居跡（南東から）



2　58号竪穴住居跡炉
（南東から）



3　60号竪穴住居跡
（北東から）

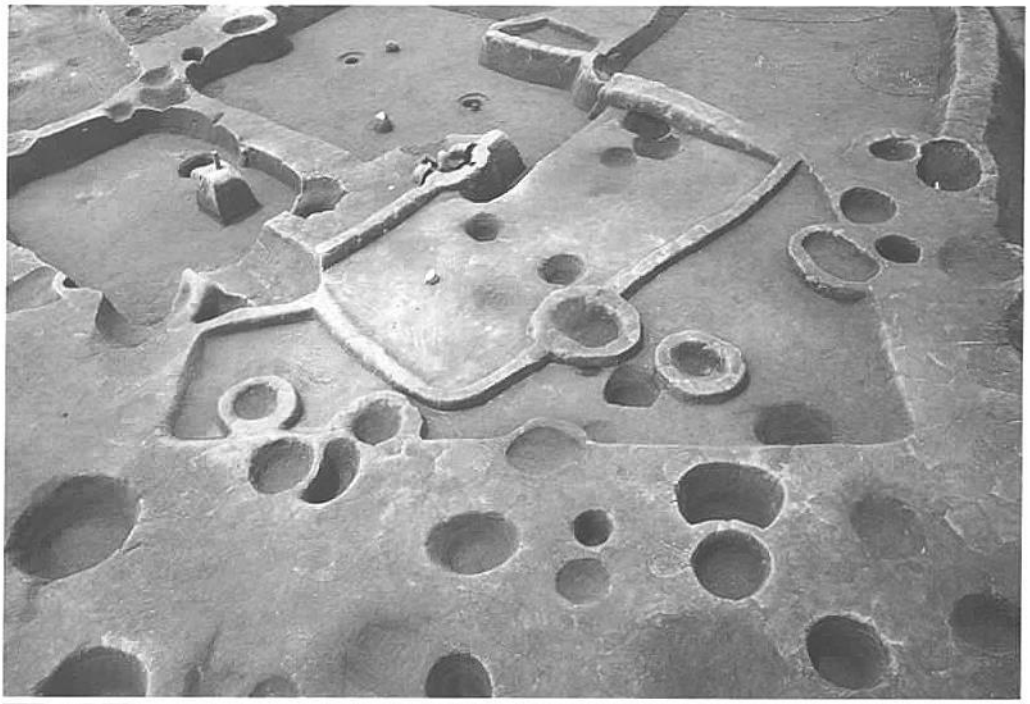


1　60号竪穴住居跡炉
（北東から）

2　61号竪穴住居跡（北から）

3　62号竪穴住居跡（東から）

図版 8



1　63号竪穴住居跡（北から）

2　64号竪穴住居跡（東から）

3　65号竪穴住居跡（東から）

1　66号竪穴住居跡（西から）

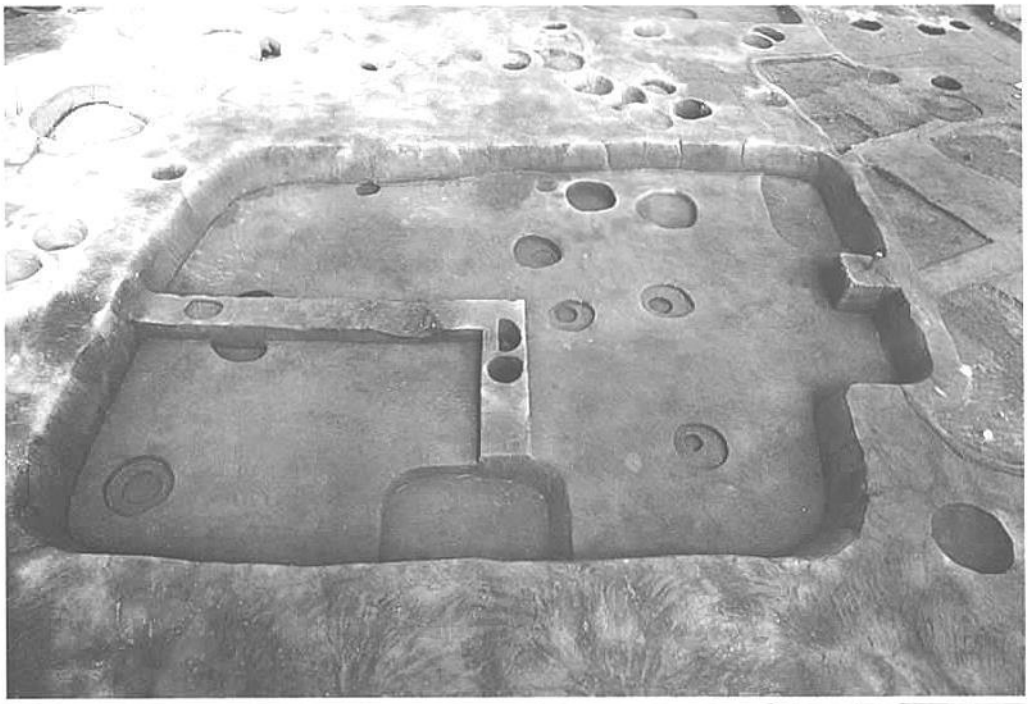
2　67号竪穴住居跡（東から）

3　68号竪穴住居跡土器出土状況（北から）

1　68号竪穴住居跡（北から）

2　69号竪穴住居跡
（南西から）

3　70号竪穴住居跡（東から）

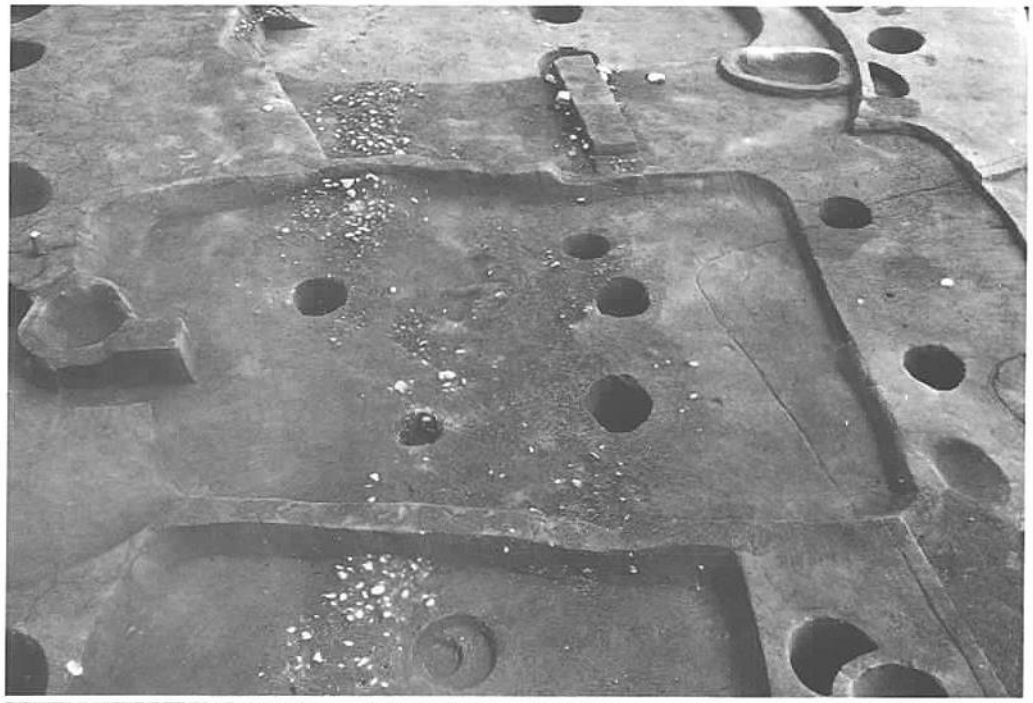


1　71号竪穴住居跡（南から）

2　71号竪穴住居跡土器出土状況（南から）

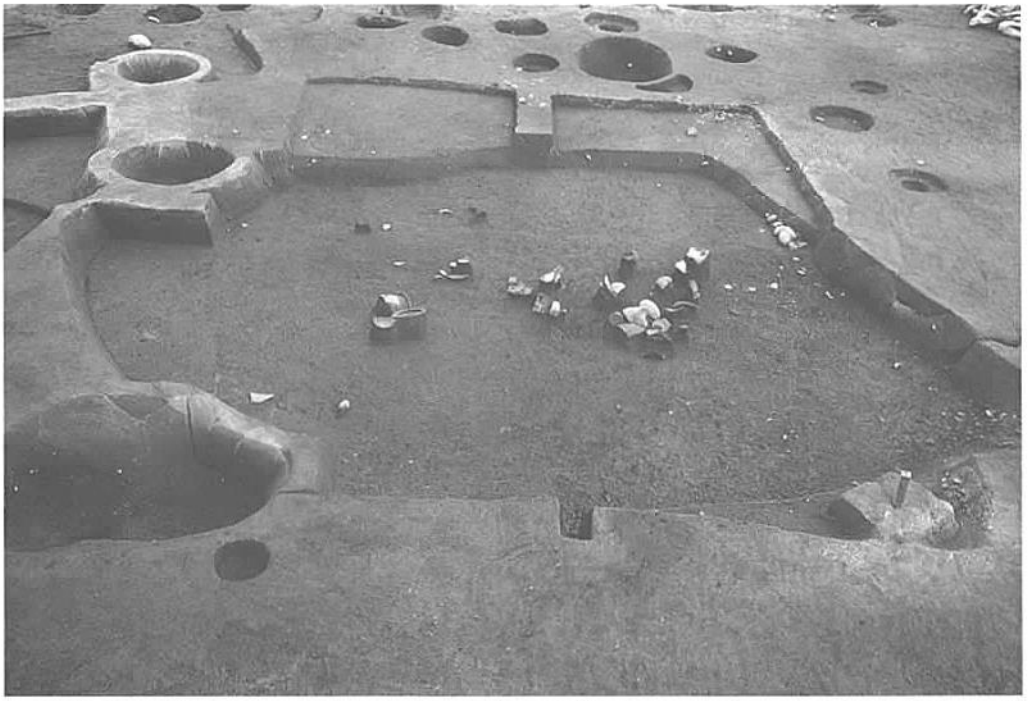
3　72号竪穴住居跡（南東から）

1　72号竪穴住居跡炉
（南東から）

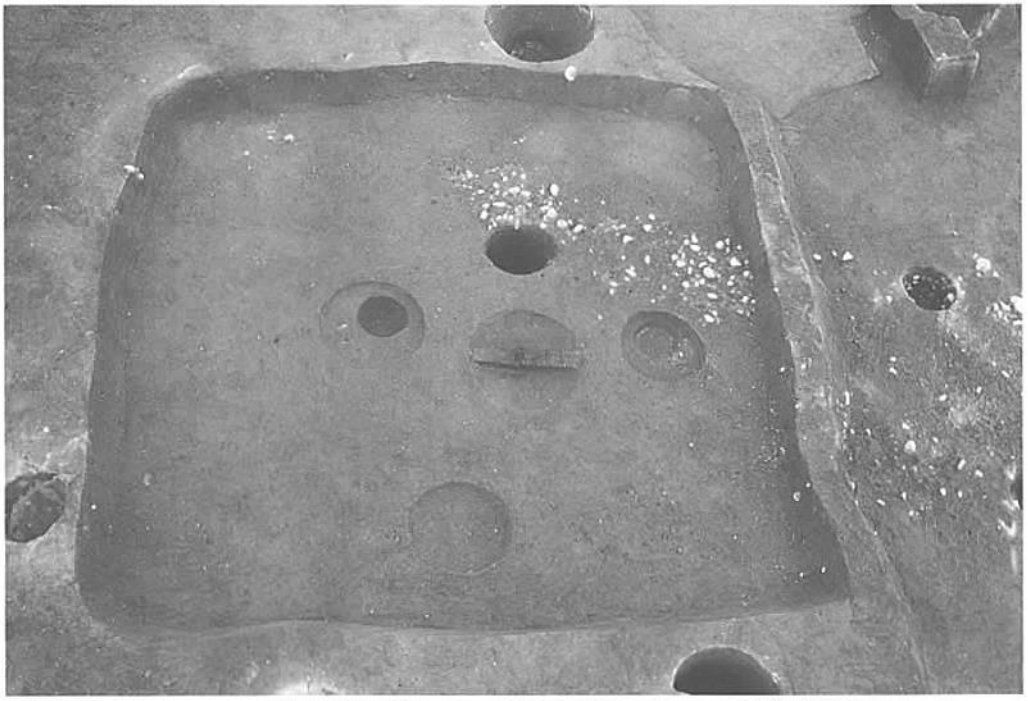


2　73号竪穴住居跡（西から）

3　74号竪穴住居跡（南から）

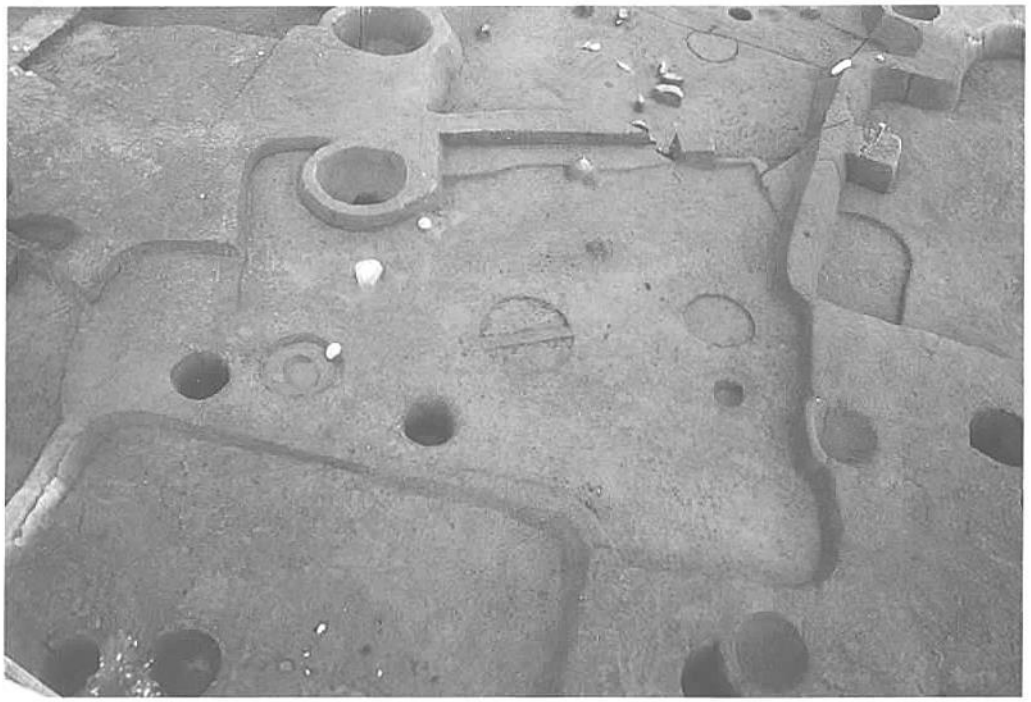


1　75号竪穴住居跡（南から）

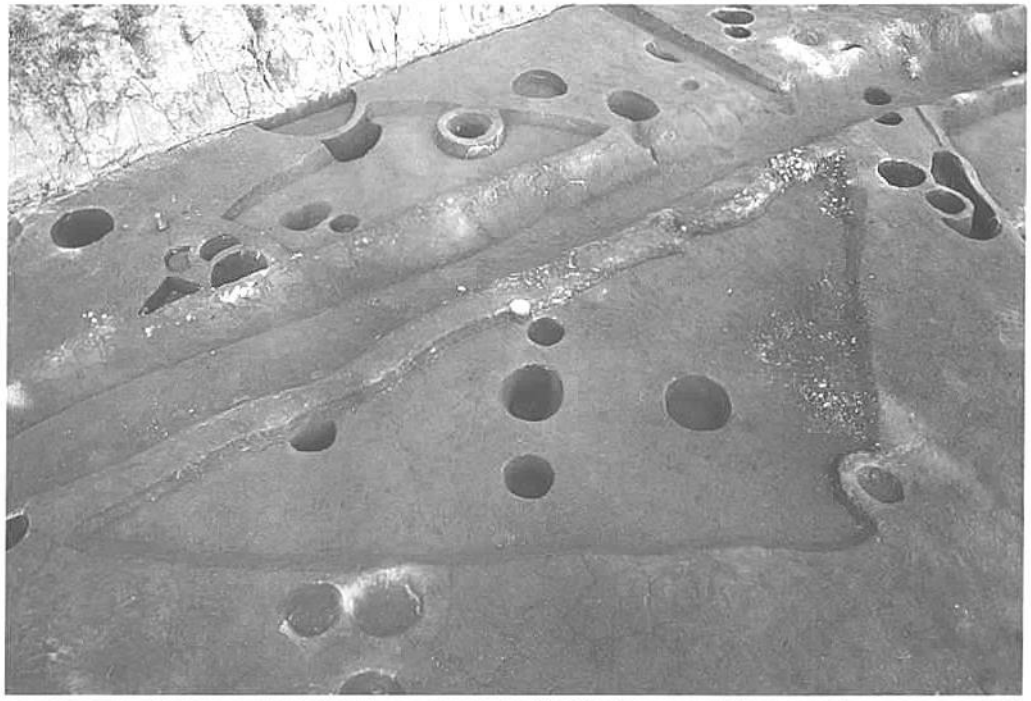


2　76号竪穴住居跡（南から）

3　77・81号竪穴住居跡（南西から）



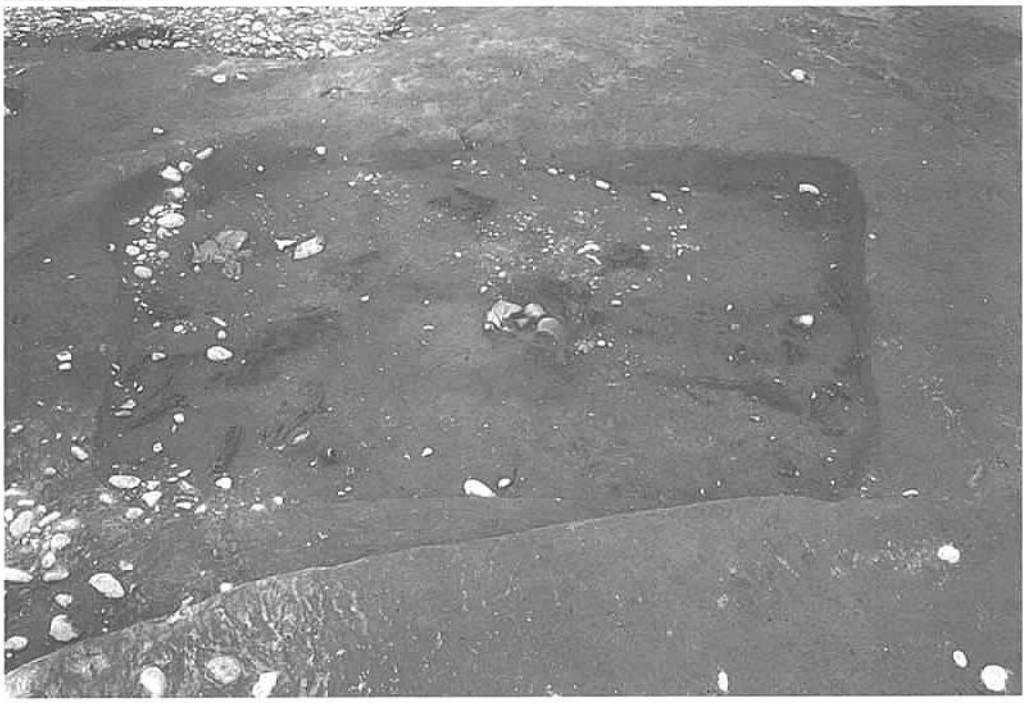
1　78号竪穴住居跡（北から）



2　79号竪穴住居跡（南から）

3　80号竪穴住居跡（西から）

1　82号竪穴住居跡（東から）



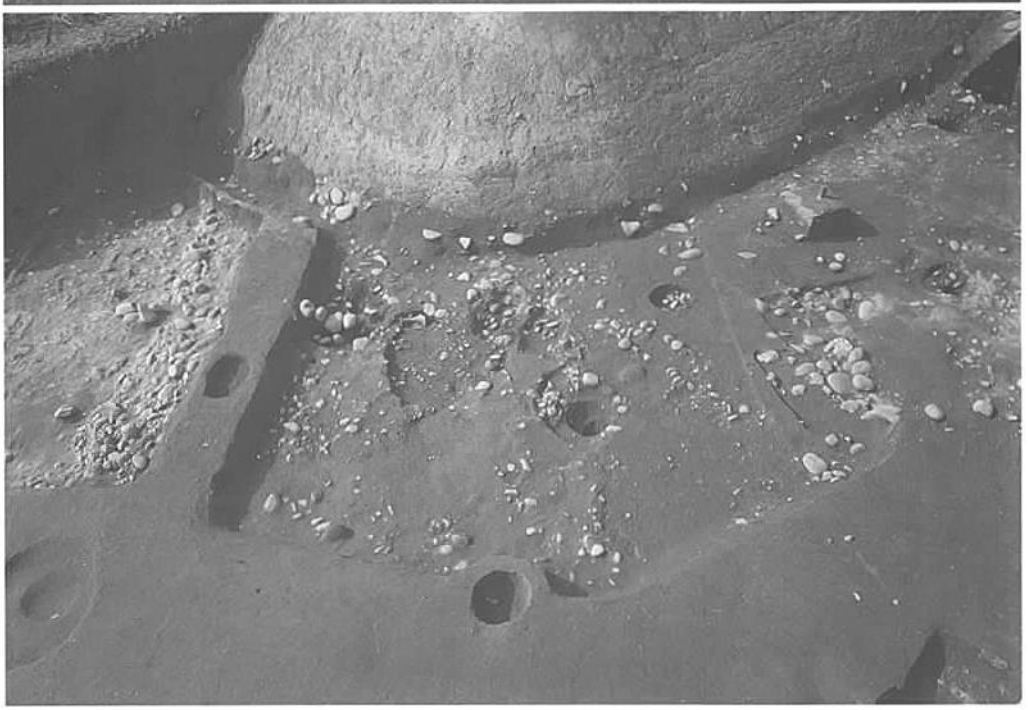
2　83号竪穴住居跡（南から）

3　83号竪穴住居跡（南から）

図版16

1　84号竪穴住居跡（南から）

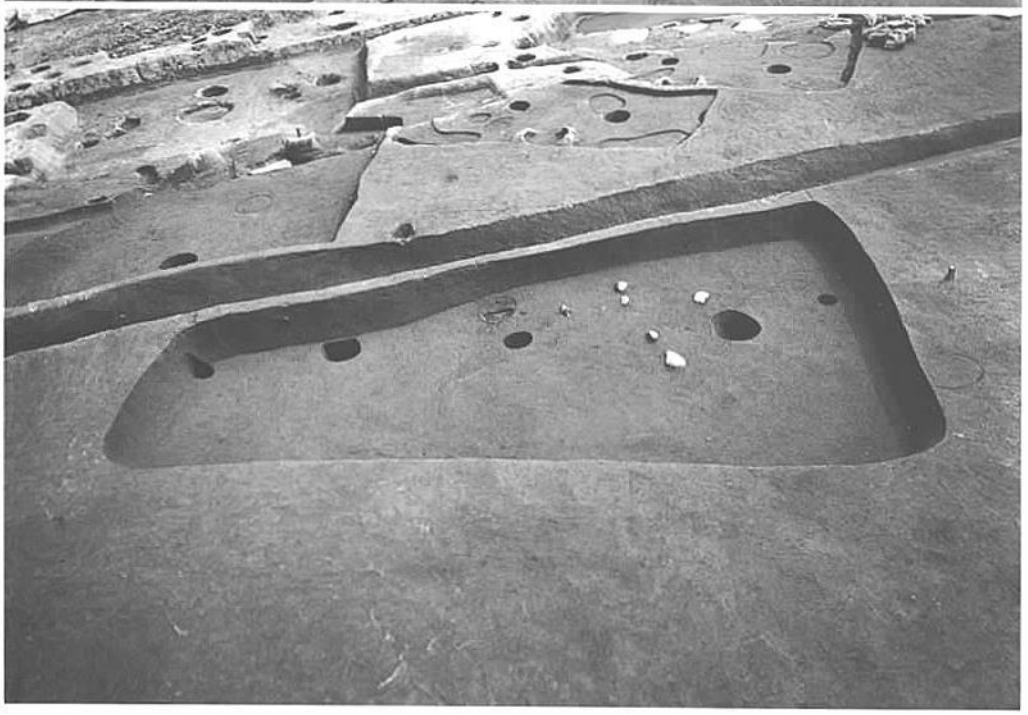
2　85号竪穴住居跡（北から）



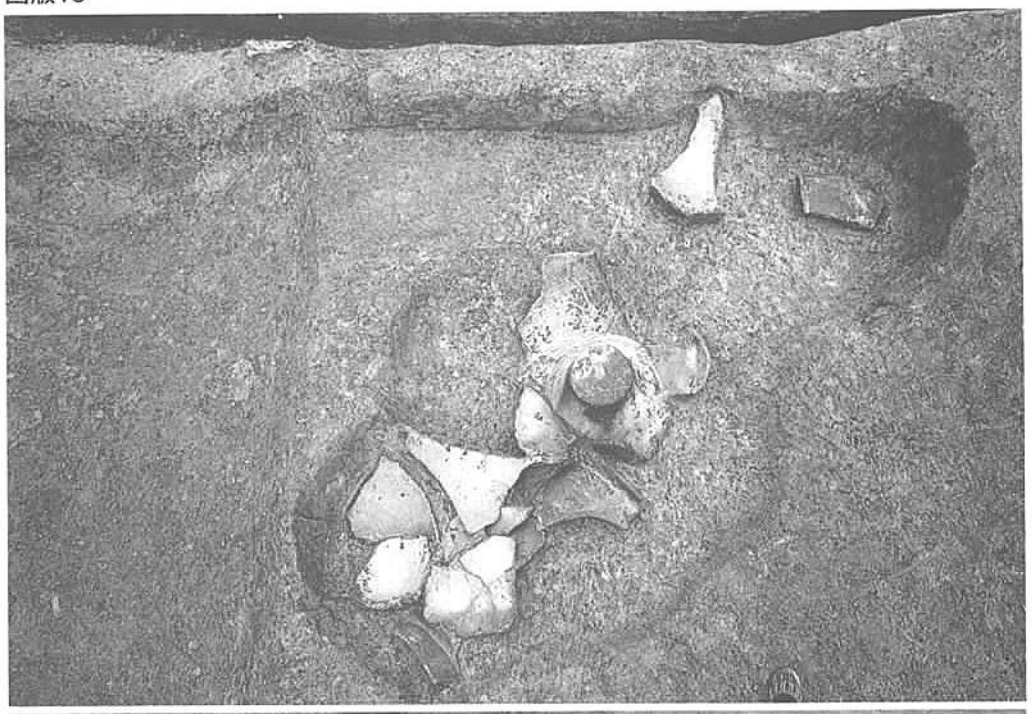
3　86号竪穴住居跡
（北東から）

1　87号竪穴住居跡（南から）

2　88号竪穴住居跡（西から）



3　106号竪穴住居跡（北から）

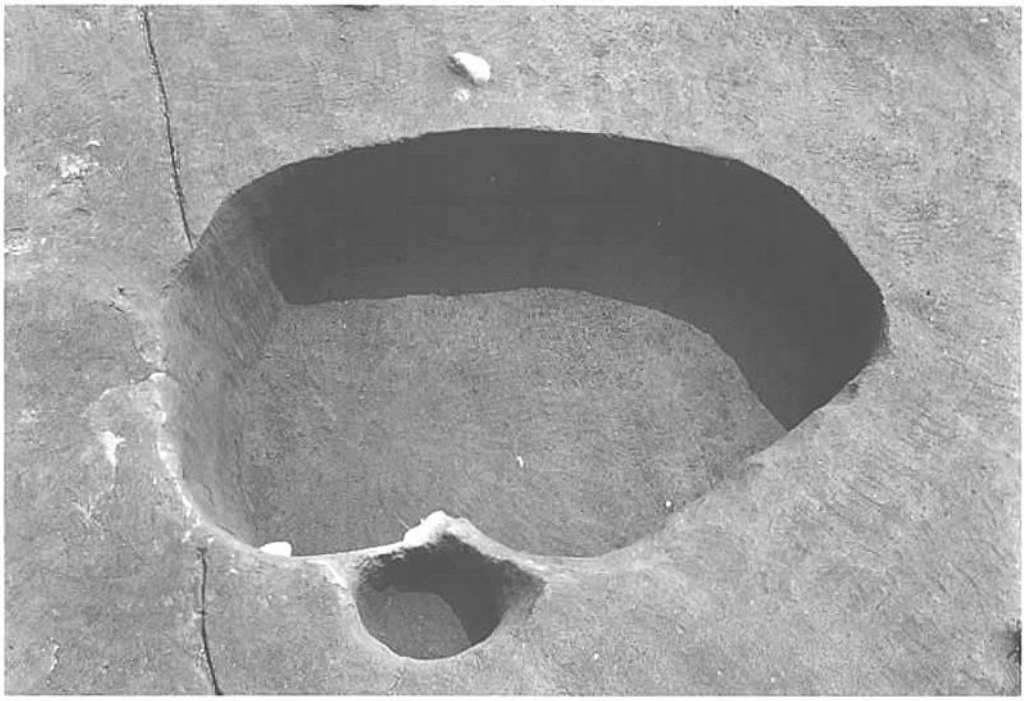


1　2号土坑（東から）

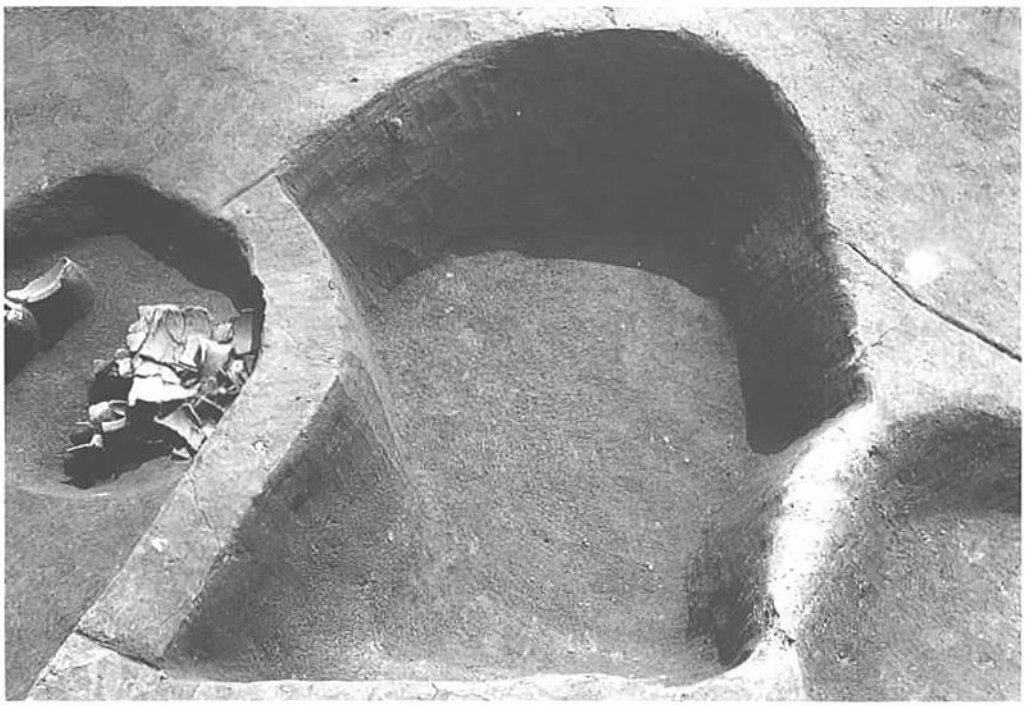
2　12号土坑（東から）

3　13号土坑（東から）

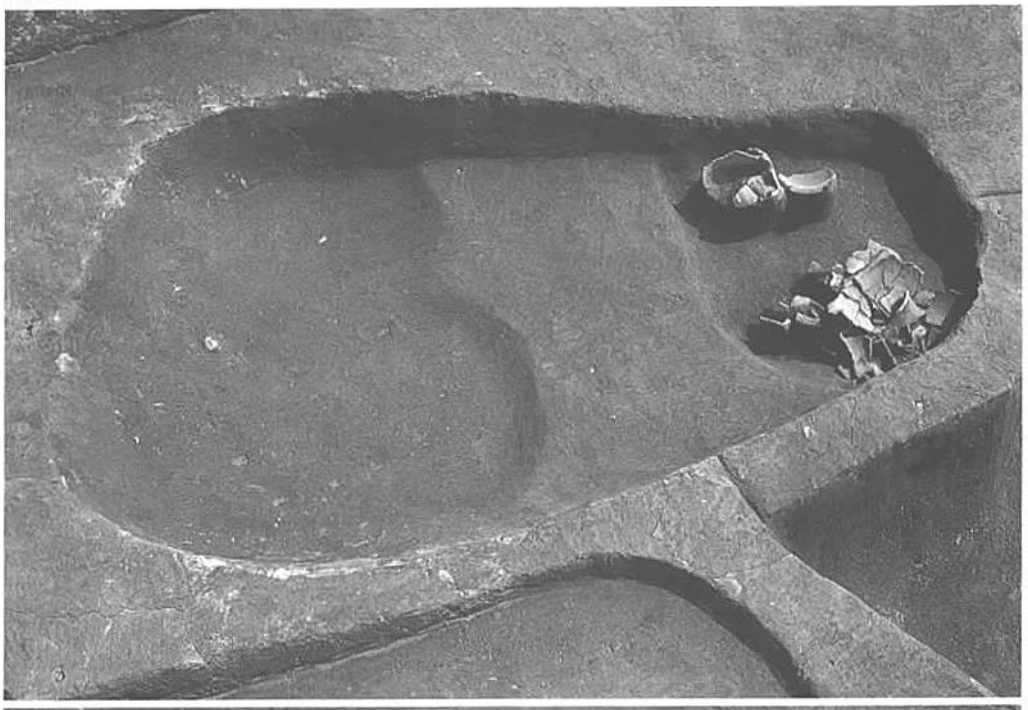
1　14・18号土坑（北から）



2　15号土坑（西から）



3　16号土坑（東から）

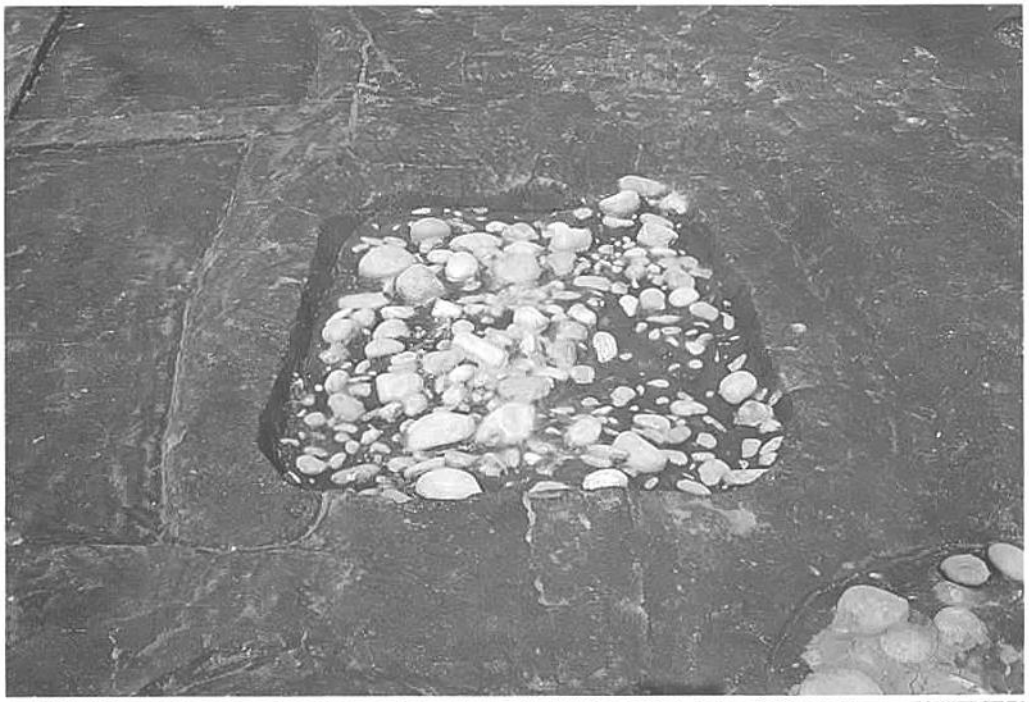


1　17号土坑（北から）

2　20号土坑（北から）

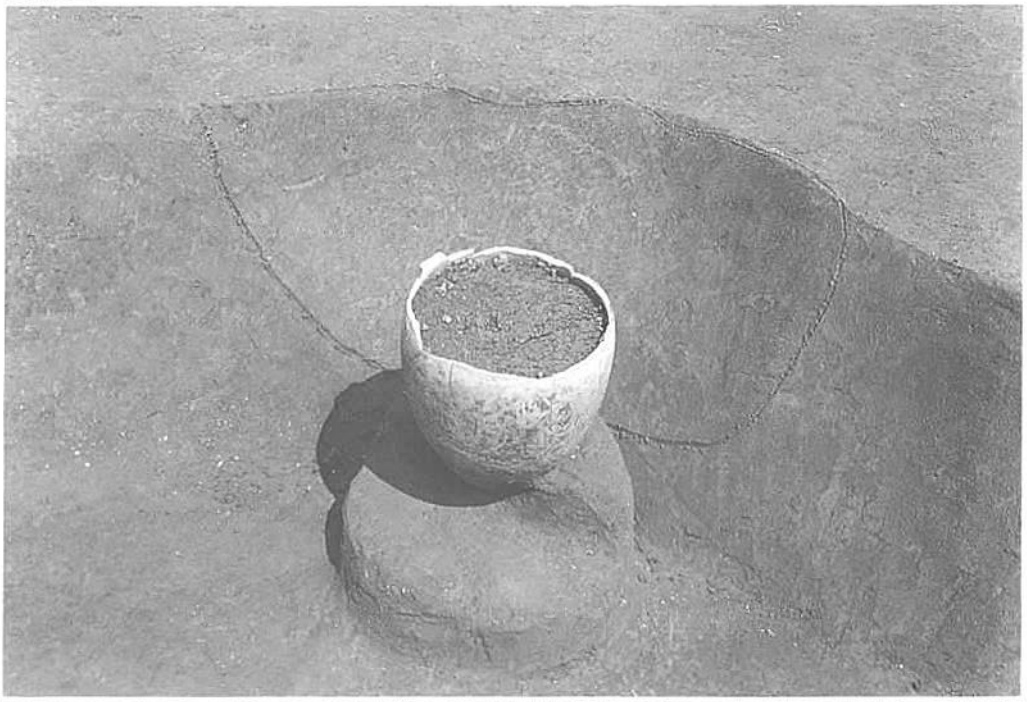
3　24号土坑（東から）

1　28号土坑（東から）



2　29号土坑（南から）

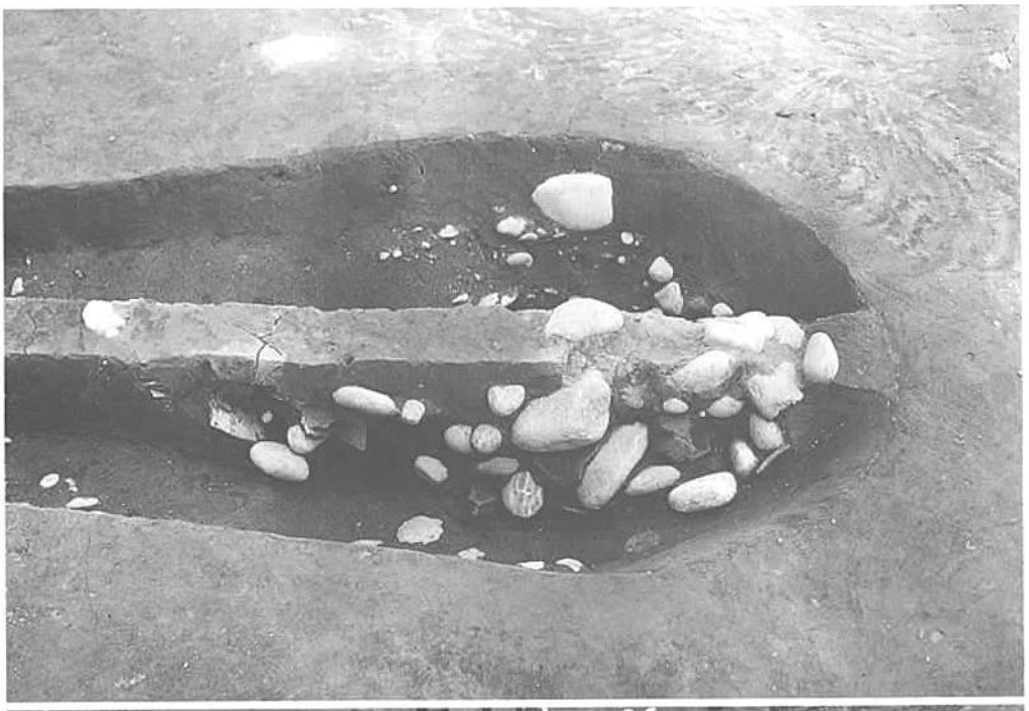
3　30号土坑（西から）



1　32号土坑（南から）

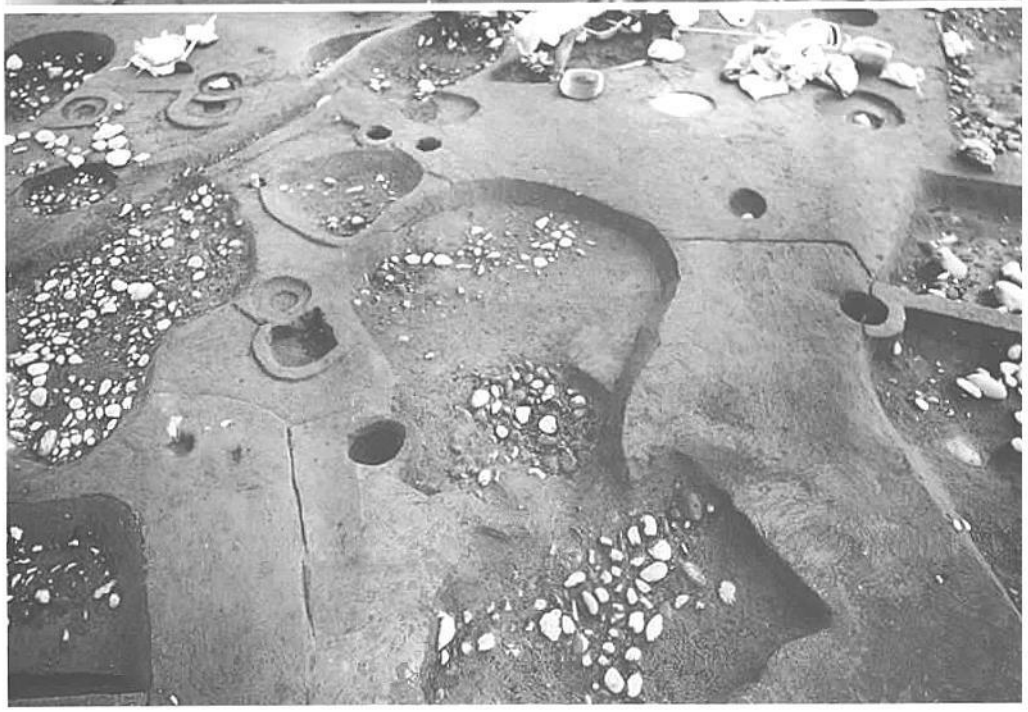
2　34号土坑（西から）

3　35号土坑（北から）



1　35号土坑（南から）

2　36号土坑（北から）

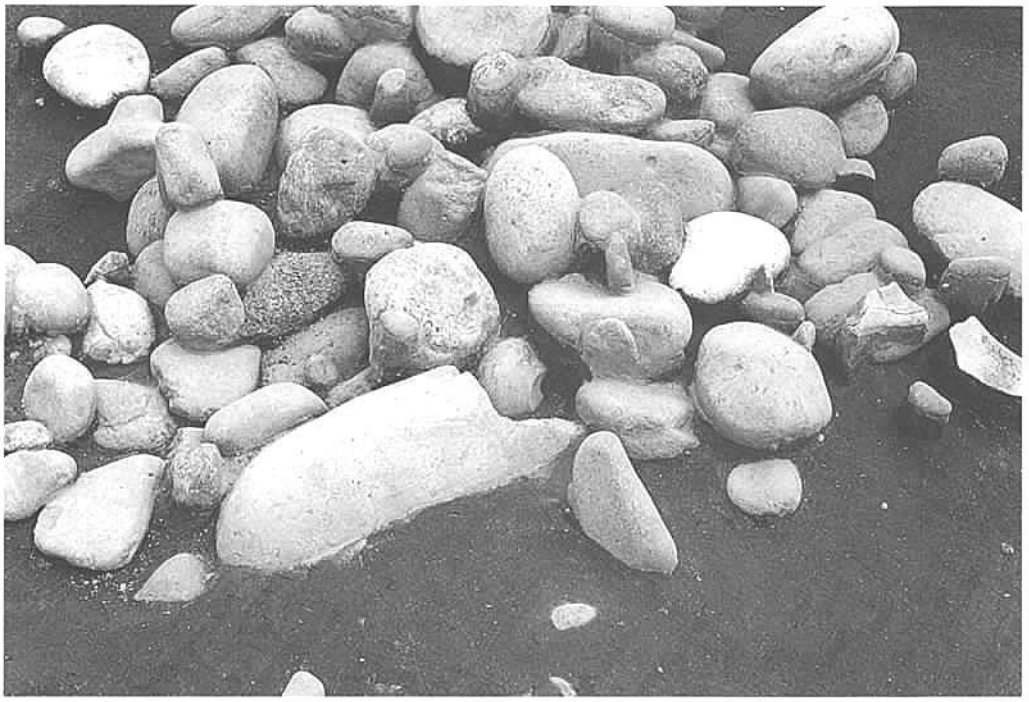


3　37号土坑（西から）

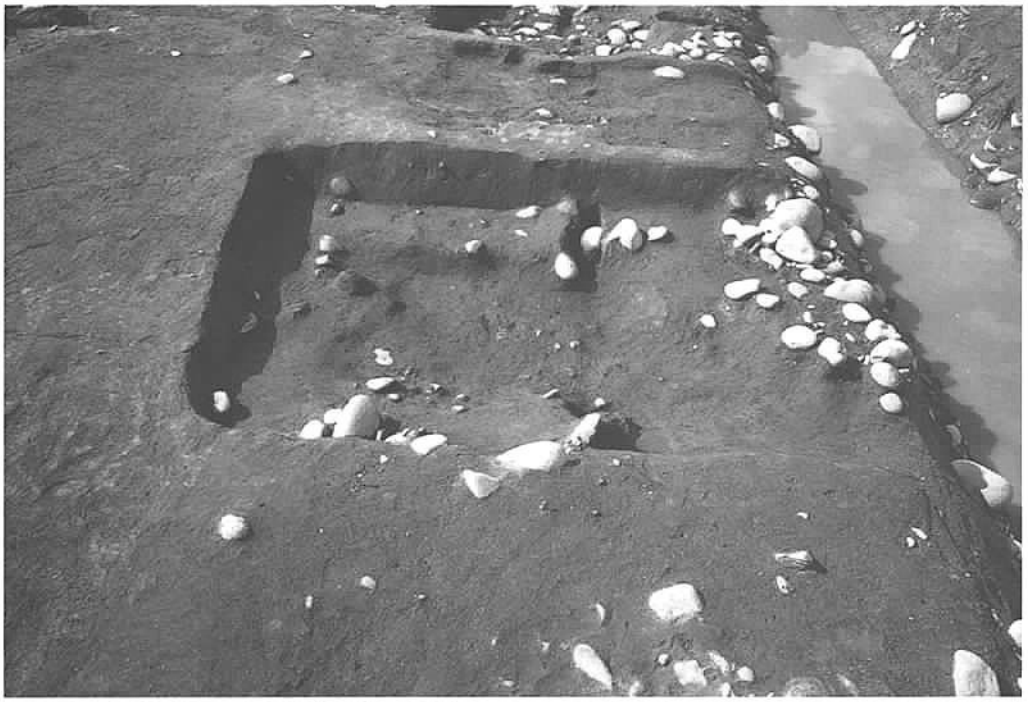
1　38号土坑（北から）

2　39号土坑（南から）

3　39号土坑完掘状況
（南から）



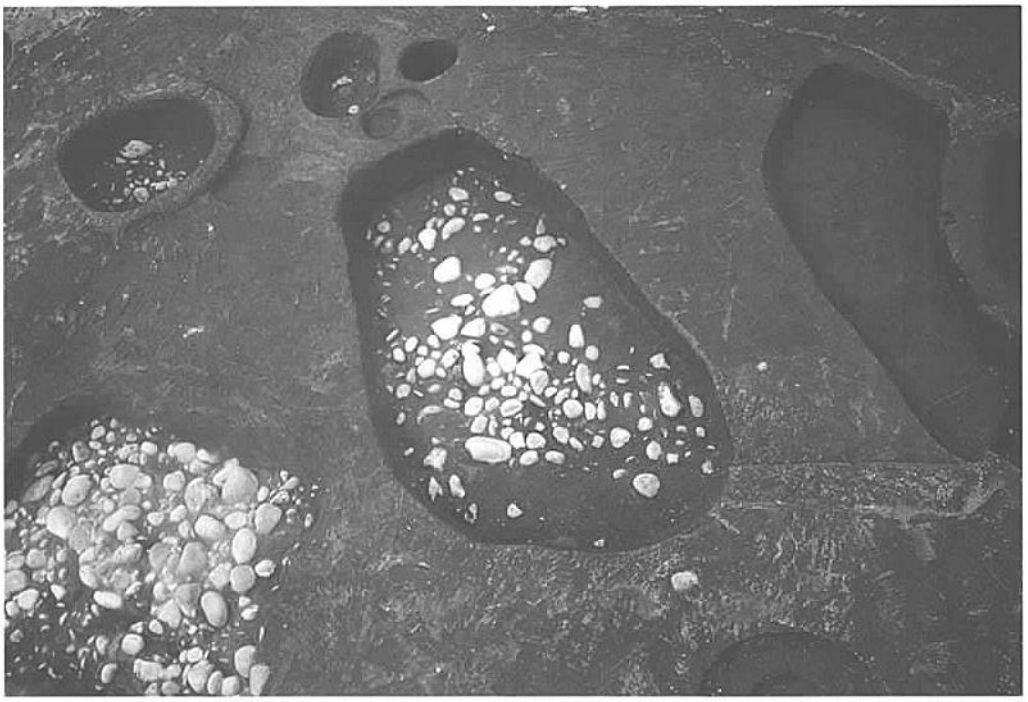
1　39号土坑土器出土状況
（北から）



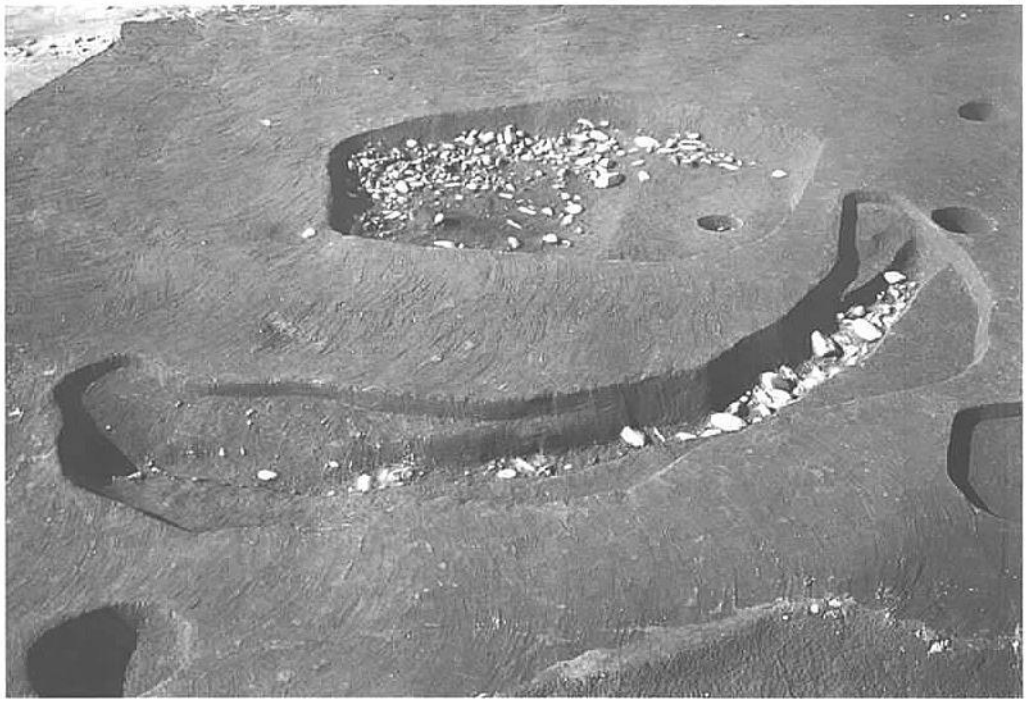
2　40号土坑（北東から）

3　46号土坑（北西から）

1　49号土坑（南東から）



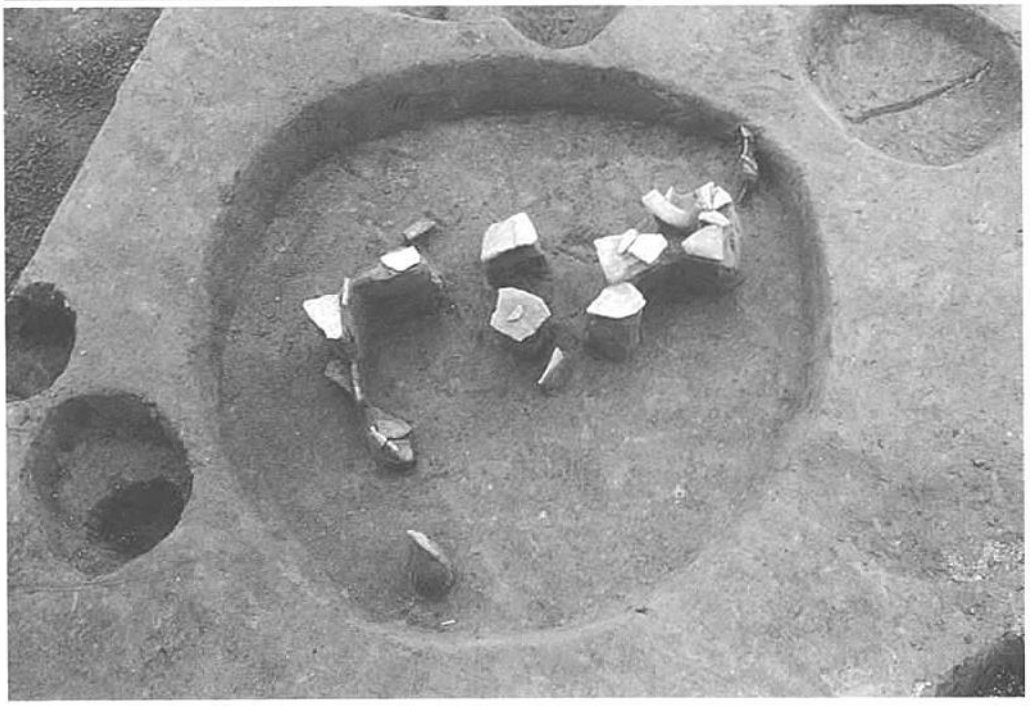
2　54号土坑（東から）



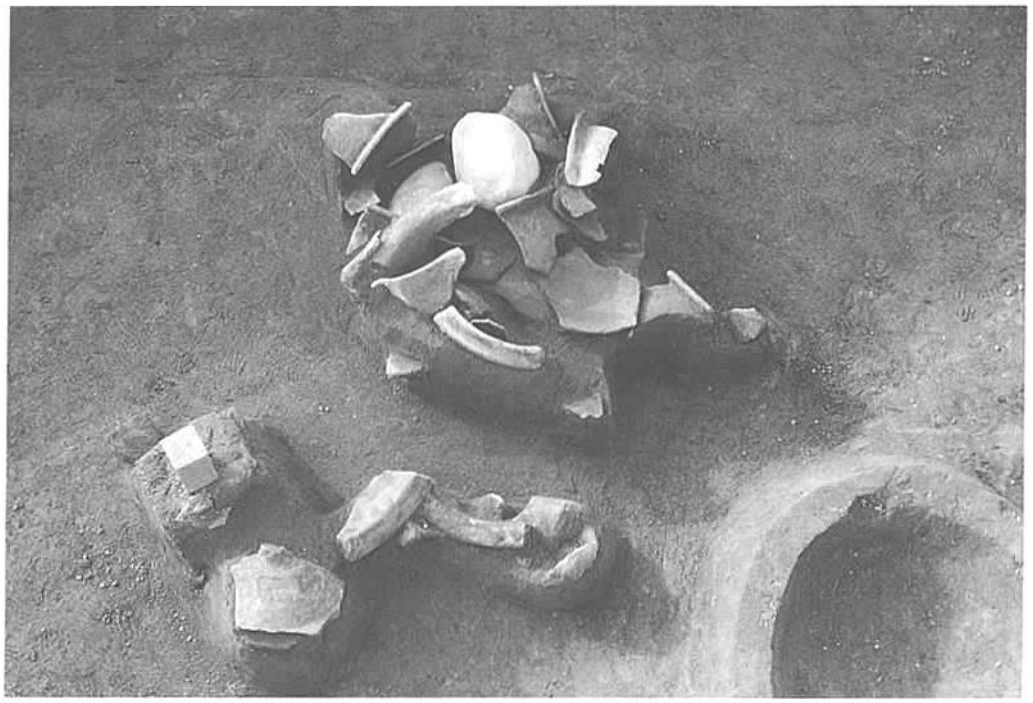
3　56・57号土坑（南から）

1　60号土坑（東から）

2　105号土坑（西から）



3　106号土坑（北から）



1　117号土坑（東南から）

2　118号土坑（南から）

3　10・13号溝北断面
（南から）

1　10号・13号溝南断面
（南から）

2　15号溝出土状況（北から）

3　17号溝断面（南から）

住37-7

住41-13

住37-10

住41-15

住41-10

住54-7

住41-11

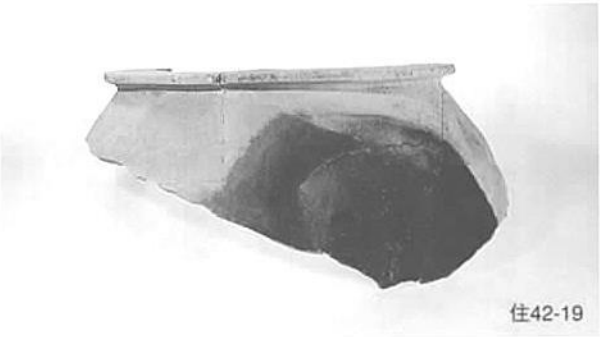
住54-8

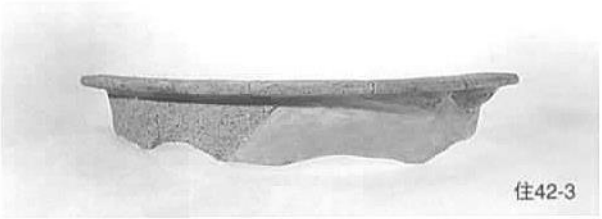
住41-12

住54-15

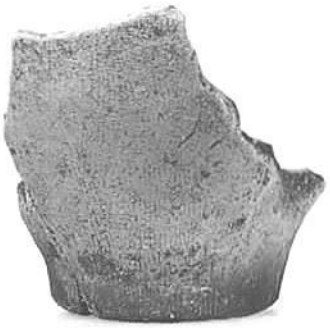
37・41・54号竪穴住居跡出土土器

住42-1


住42-19


住42-3

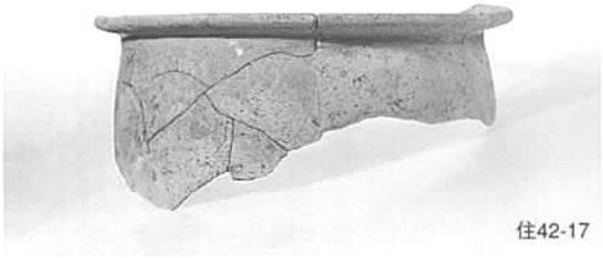
住42-20


住42-11

住42-22

住42-15

住55-2


住42-17

住55-29

住42-18

住55-40

42・55号竪穴住居跡出土土器

住57-14

住62-15

住57-16

住62-18

住58-15

住62-22

住62-23

住62-7

住62-24

住62-9

住62-30

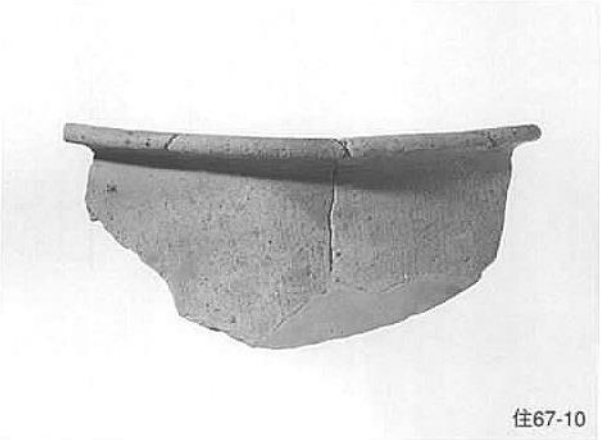
57・58・62号竪穴住居跡出土土器

住64-6

住67-28

住65-10

住67-29


住67-10

住67-32

住67-26

住68-1

住67-27

住68-2

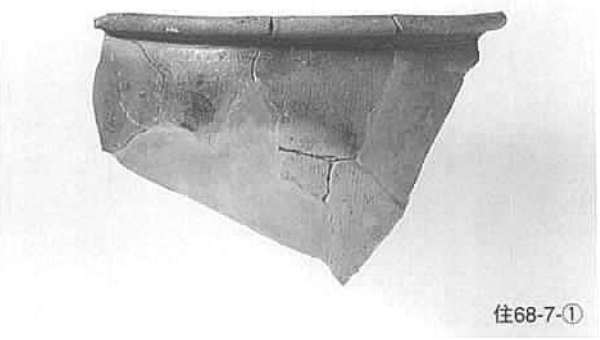
64・65・67・68号竪穴住居跡出土土器

住68-3

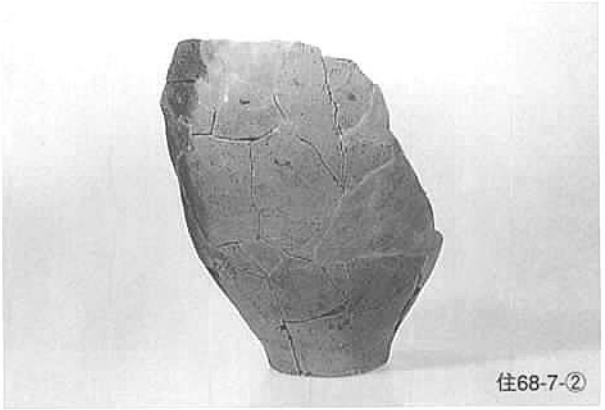
住68-4

住68-5

住68-6



住68-7-①



住68-7-②

住68-14

住68-18

住68-20

68号竪穴住居跡出土土器

住68-21

住68-35

住68-22

住68-36

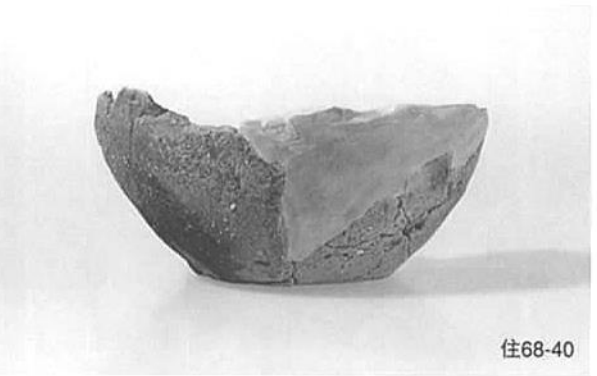
住68-23

住68-38

住68-33

住68-39

住68-34


住68-40

68号竪穴住居跡出土土器

住68-41

住68-42

住68-44

住68-46

住68-47

住69-3

住69-6

住69-9

住69-10

住69-12

住69-16

68・69号竪穴住居跡出土土器

住70-22

住73-9

住70-24

住73-13

住71-10

住74-2

住71-11

住71-14

住74-7

住77-5

70・71・73・74・77号竪穴住居跡出土土器

住72-1

住72-24

住72-10

住72-28

住72-16

住72-29

住72-23

住72-30

住72-26

住72-31

72号竪穴住居跡出土土器

住75-9

住75-15

住75-12

住75-18

住75-13

住75-19

住75-14

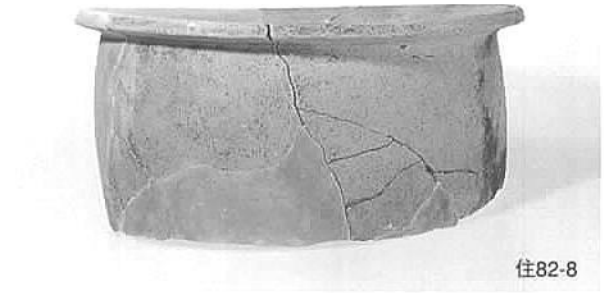
住75-23

住75-17

住75-26

75号竪穴住居跡出土土器

住82-7


住82-8

住82-9

住83-2

住83-6

住82-10

住83-7

住83-1

住83-8

住83-4

住84-6

82・83・84号竪穴住居跡出土土器

住85-1

住85-23

住85-14

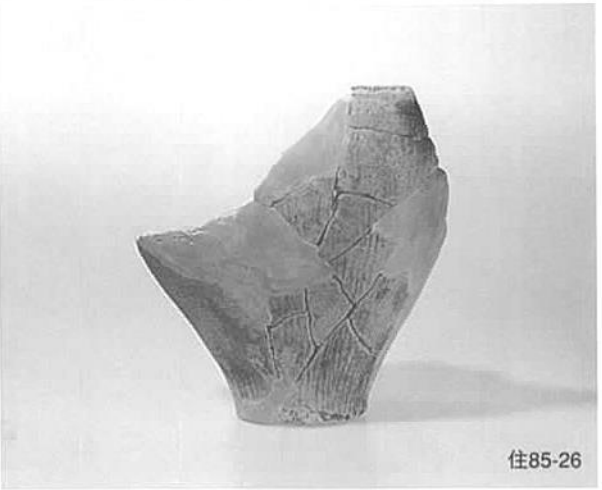
住85-24

住85-15

住85-16

住85-25

住85-21


住85-26

85号竪穴住居跡出土土器

住86-16

住86-32

住86-17

住86-39

住86-20

住86-41

住86-46

住86-27

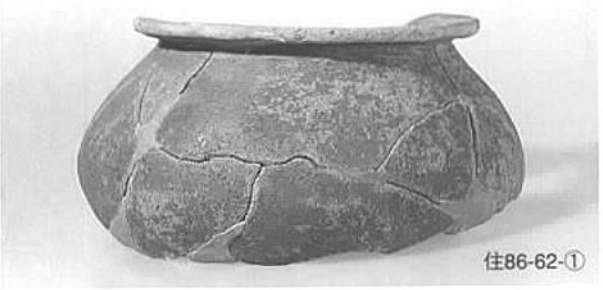
住86-29

住86-54

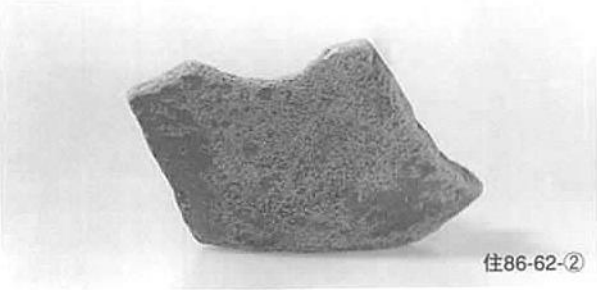
86号竪穴住居跡出土土器

住86-61

住87-16


住86-62-①

住88-4


住86-62-②

住106-14

住86-66

住87-10

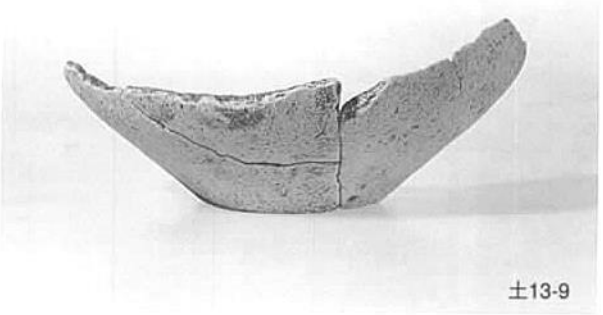
住106-18

住87-13

住106-22

86・87・88・106号竪穴住居跡出土土器

土2-1



土13-9

土2-2

土13-10

土2-3

土13-11

土2-4

土20-10

土13-8

土64-2

2・13・20・64号土坑出土土器

土17-1

土17-2

土17-3

土17-6

土24-5

土24-6

土25-7

土27-12

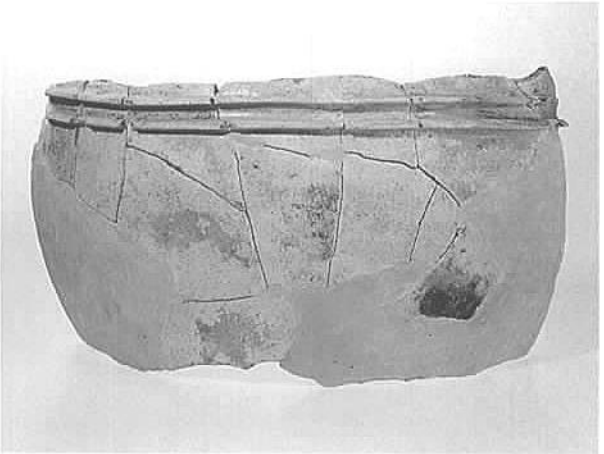
土28-3

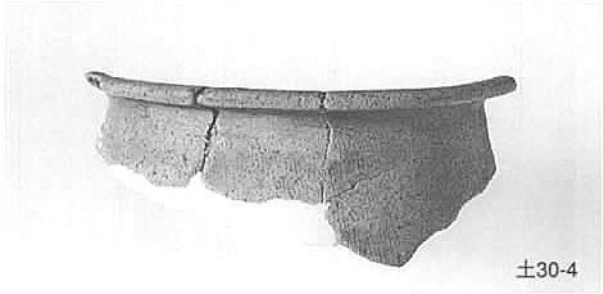
土28-4

土28-6

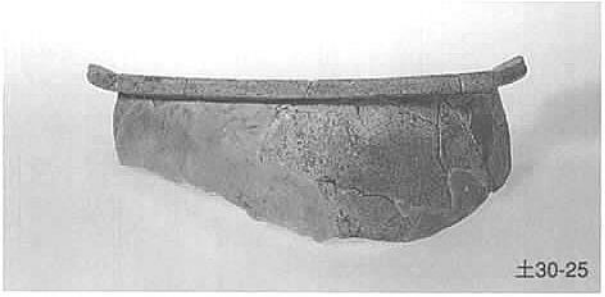
17・24・25・27・28号土坑出土土器

土30-2




土30-4

土30-34


土30-25

土30-39

土30-26

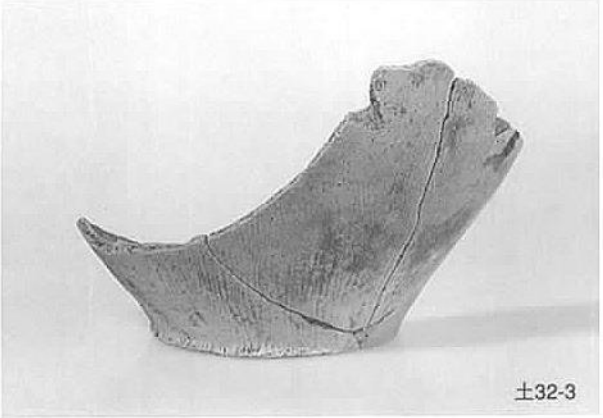
土30-40

土30-30

土30-31

土30-41

30号土坑出土土器


土32-3

土35-13

土32-4

土35-14

土35-1

土35-16

土35-6

土35-17

土35-7

土35-19

32・35号土坑出土土器

土36-3

土38-4

土37-7

土38-11

土37-10

土38-14

土37-11

土38-16

土37-13

土38-18

36・37・38号土坑出土土器

土39-11

土43-7

土40-4

土46-5

土42-2

土46-6

土42-3

土59-8

土43-6

土59-15

39・40・42・43・46・59号土坑出土土器

土47-3

土47-22

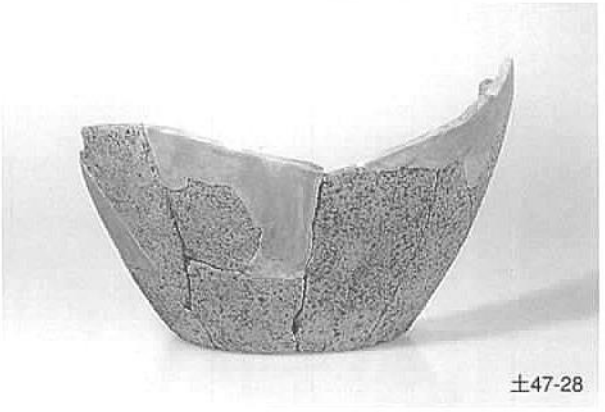
土47-8

土47-23

土47-9

土47-25

土47-10


土47-28

土47-18

土47-30

47号土坑出土土器

土47-31

土47-40

土47-33

土47-41

土47-34

土47-42

土47-35

土47-36

土47-43

47号土坑出土土器

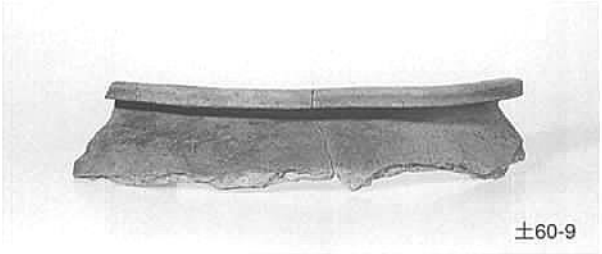
土60-1

土60-11

土60-2

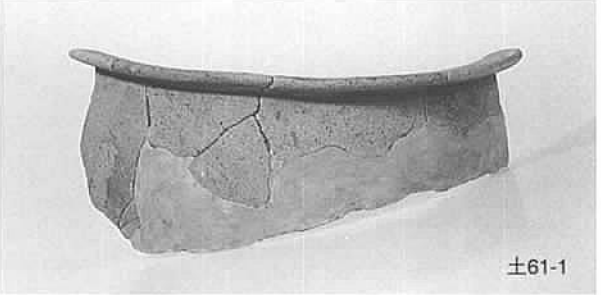
土60-14

土60-15


土60-9

土60-16

土60-12

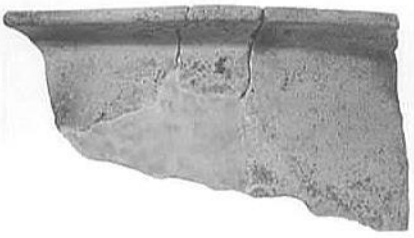

土61-1

土60-13

土106-3

60・61・106号土坑出土土器

土112-9



土117-11

土117-12

土117-16

土118-1

溝15-16

溝15-19

溝18-24

溝24-3

溝59-12

溝59-14

溝69-3

112・117・118号土坑、15・18・24・59・69号溝出土土器

溝13-1

溝13-2

溝13-8

溝13-43

溝13-45

溝13-48

溝13-49

溝13-50

溝13-51

溝13-52

13号溝出土土器

溝13-54

溝13-62

溝13-55

溝13-63

溝13-56

図144-8

溝13-60

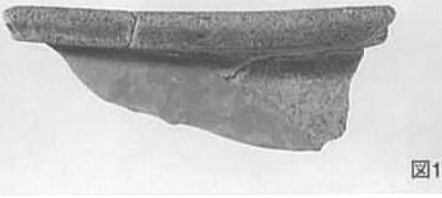


図145-29

図145-33

溝13-61

図145-41

13号溝、ピット出土土器

図146-42

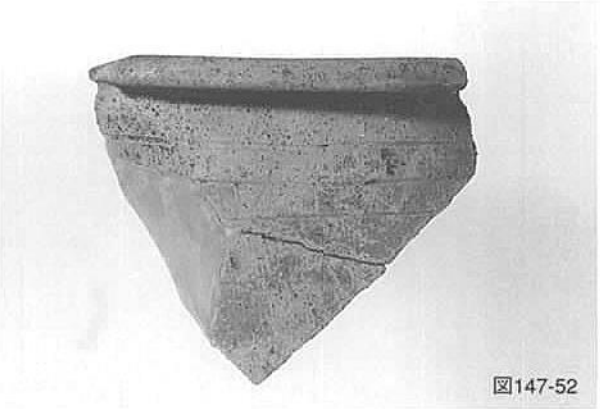


図147-52

図146-43

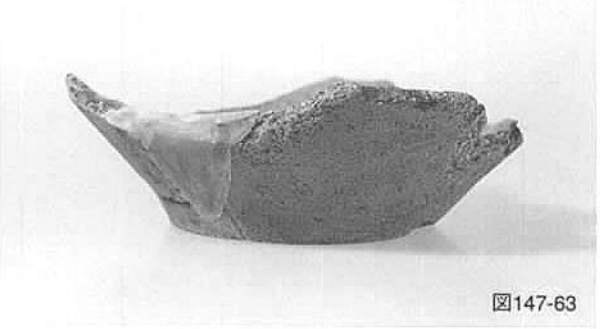


図147-63

図146-45

図148-66

図146-46

図148-70

図148-71

図147-49

図148-75

ピット出土土器

図149-10

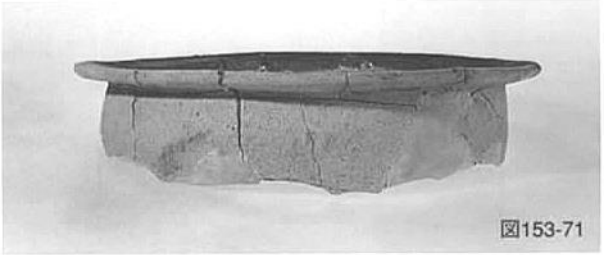


図153-71

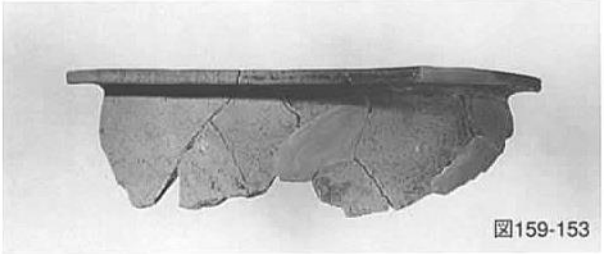


図159-153

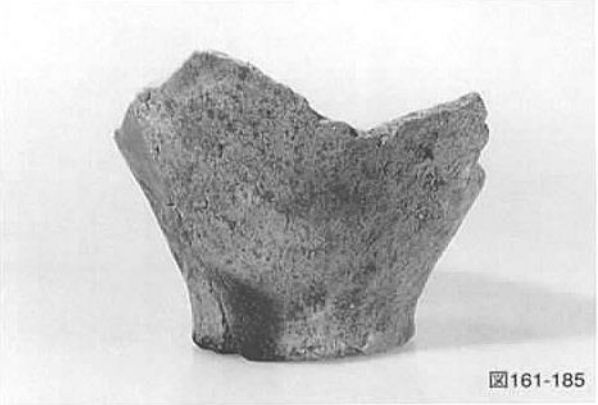


図161-185

図161-196

図162-201

図161-183

図163-213

図163-215

図163-221

図165-255

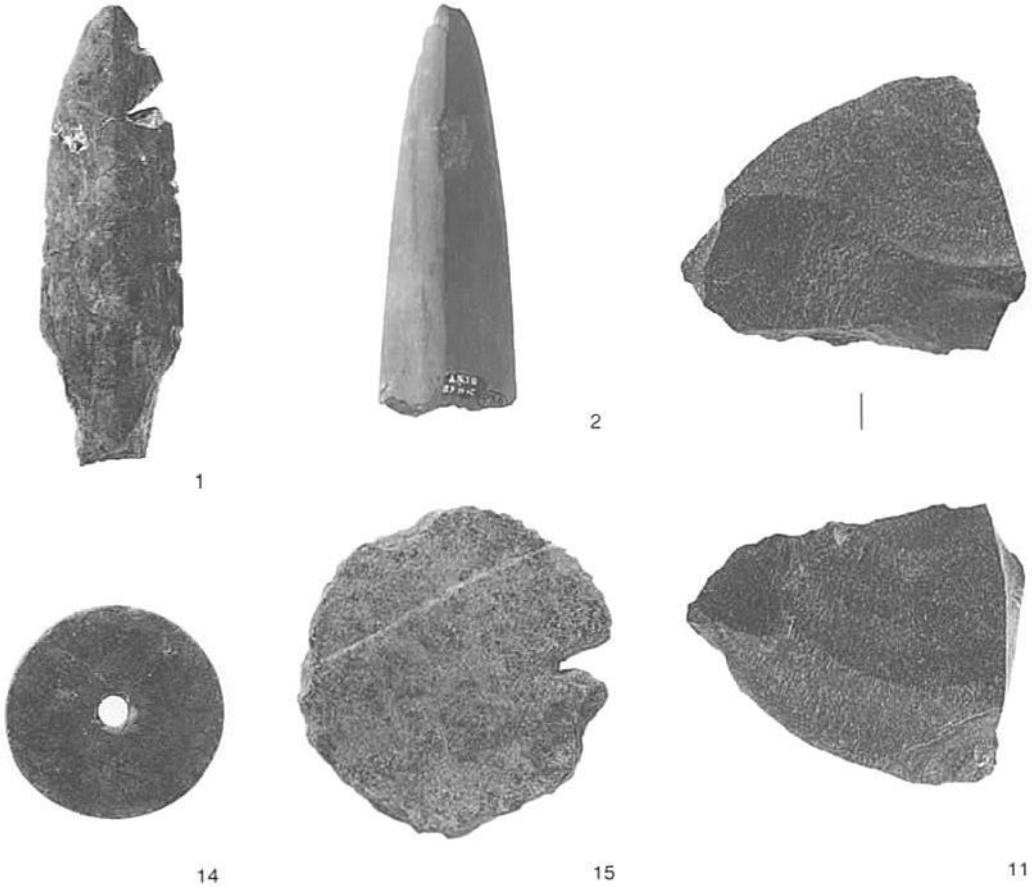
図165-262

包含層出土土器

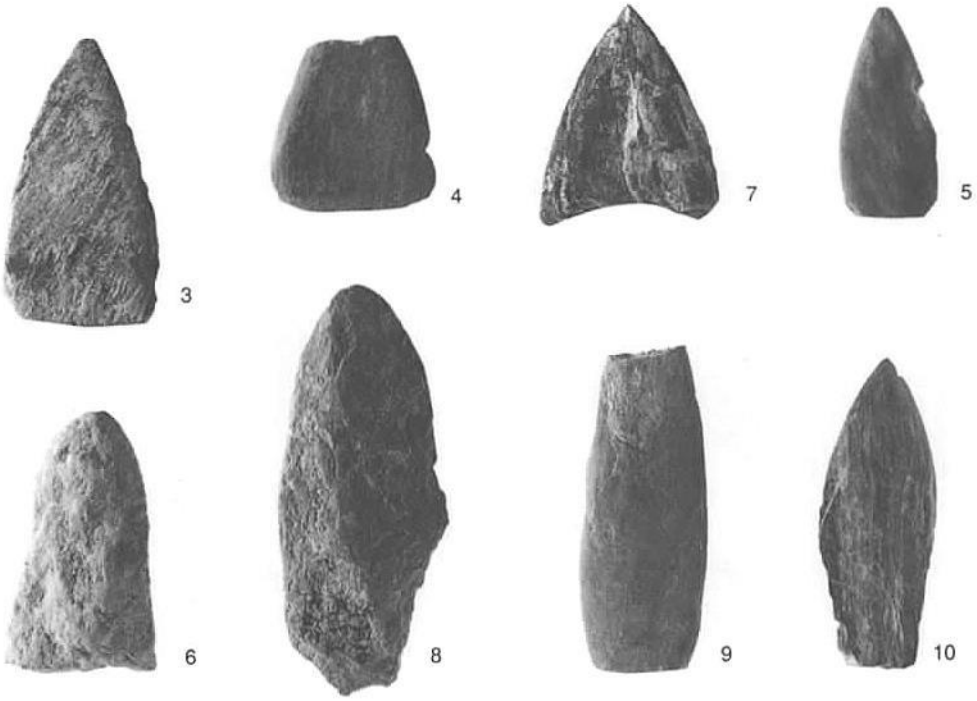
1　出土土製品（1）

2　出土土製品（2）

1　出土土製品（3）



2　出土石製品（1）

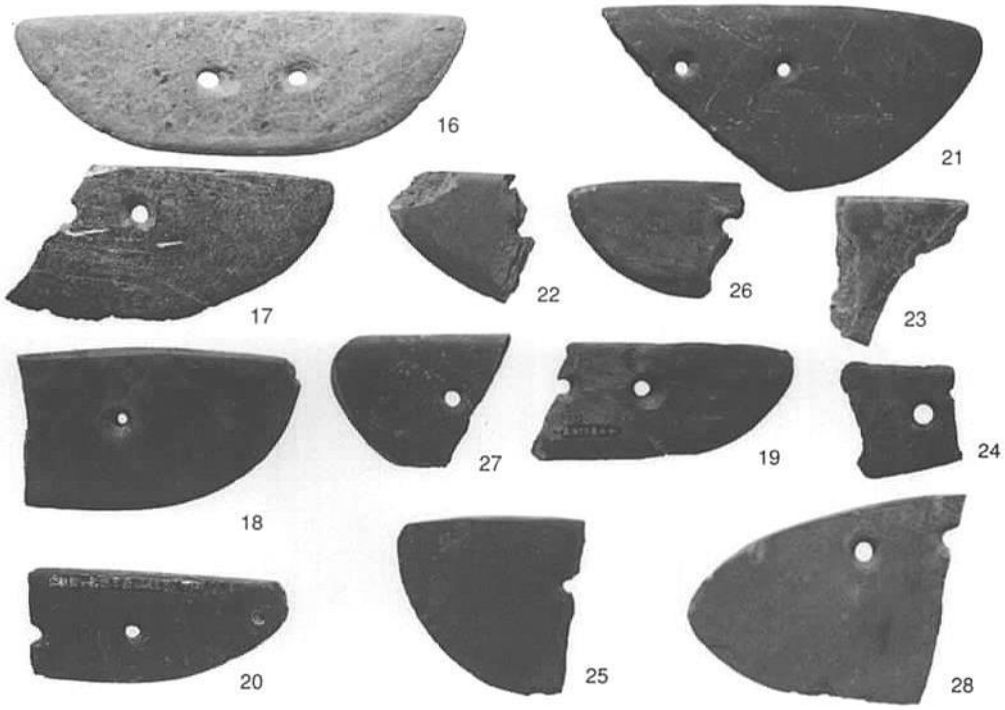


3　出土石製品（2）

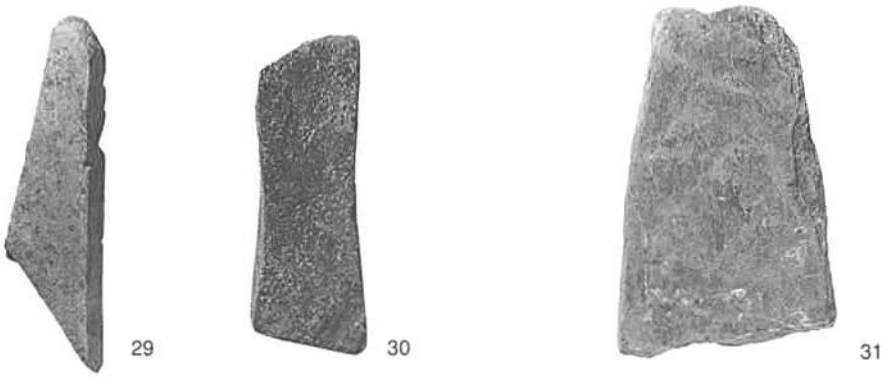
12

13

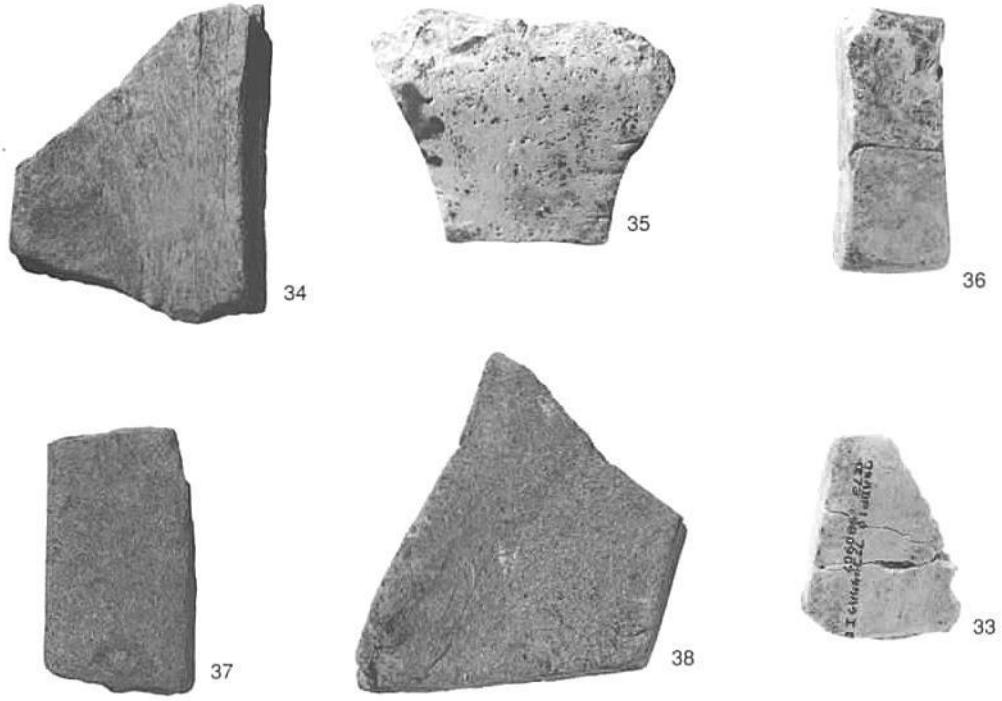
1　出土石製品（3）



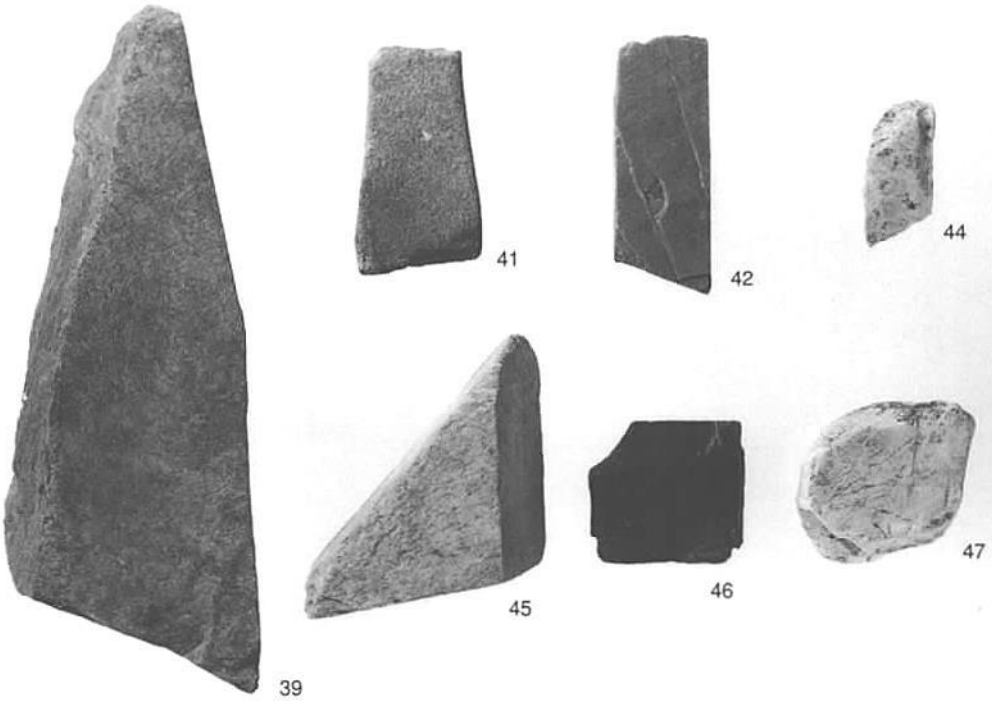
2　出土石製品（4）



1　出土石製品（5）



2　出土石製品（6）

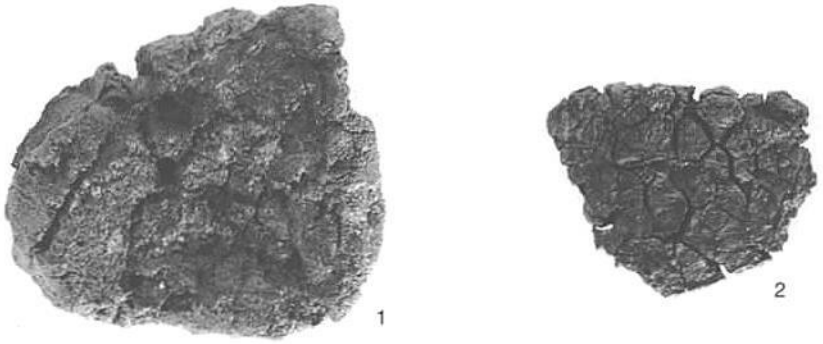


3　出土石製品（7）

32

40　　43

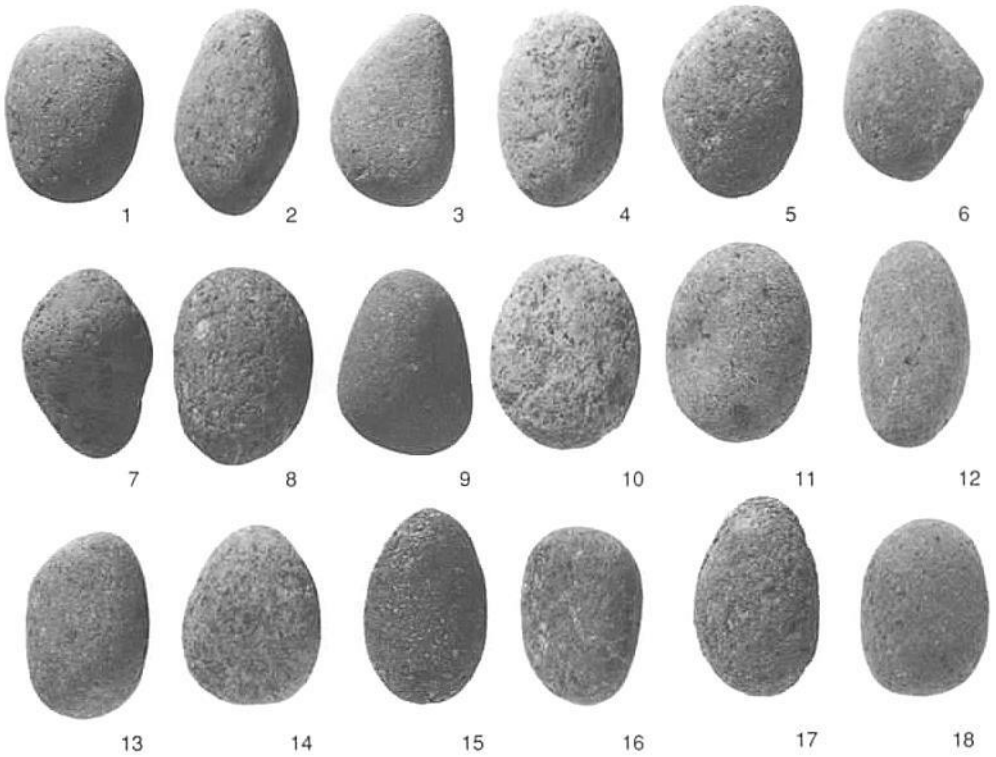
1　出土石製品（8）



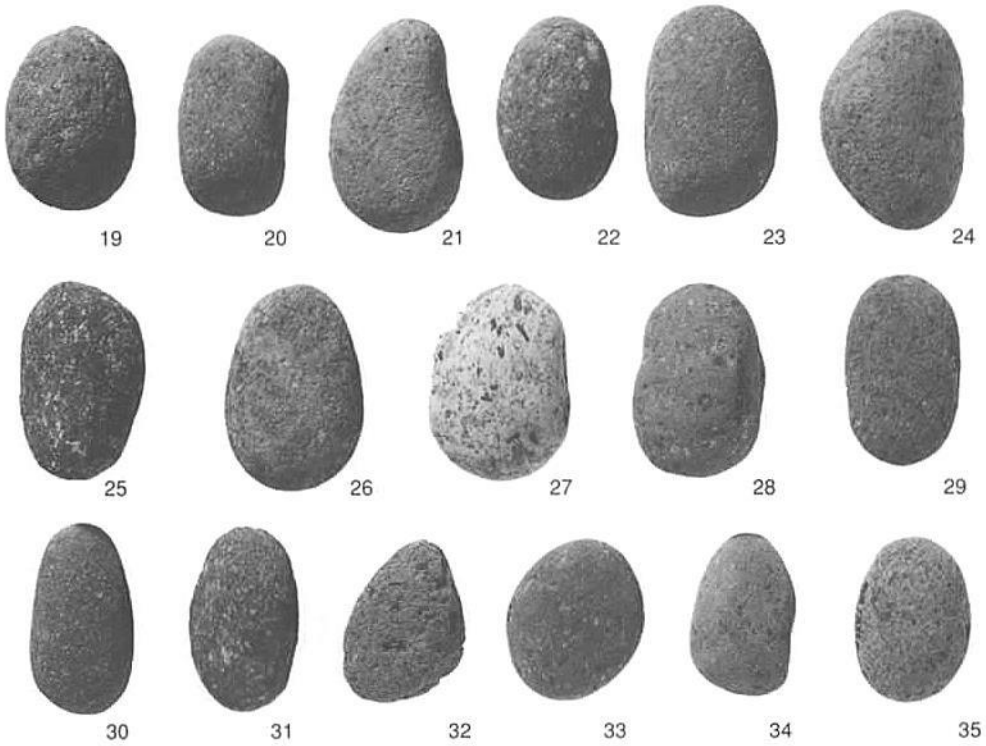
1　　2

住43-1

2　出土鉄製品



1　投弾状小礫（1）



2　投弾状小礫（2）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふなこしたかはらAいせきに
書 名	船越高原A遺跡II
副 書 名	福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査
巻 次	II
シ リ ー ズ 名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第15集
編 著 者 名	秦憲二・齋部麻矢・吉田東明・今井涼子・進村真之
編 集 機 関	福岡県教育委員会
所 在 地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園7－7
発 行 年 月 日	平成13（2001）年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなこしたかはら 船越高原A遺跡II	ふくおかけんうきはぐん 福岡県浮羽郡 たぬしまるまちおおあざふなこし 田主丸町大字船越 字高原・字宇和田 字栗田・字小川原 吉井町大字長栖字 前畑他	40829		30° 20′ 50″	130° 43′ 31″	19950509 ～ 19970320 ・ 19970815 ～ 19980313 ・ 19980428 ～ 19990319 ・ 19990402 ～ 20000328 ・ 20000412 ～ 20001130	10,300m²	道路建設 （一般国道 210号浮羽 バイパス 建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船越高原A遺跡II	集落	弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物 土坑 溝 ピット	弥生土器 石器 炭化材	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 １２	登録番号 10

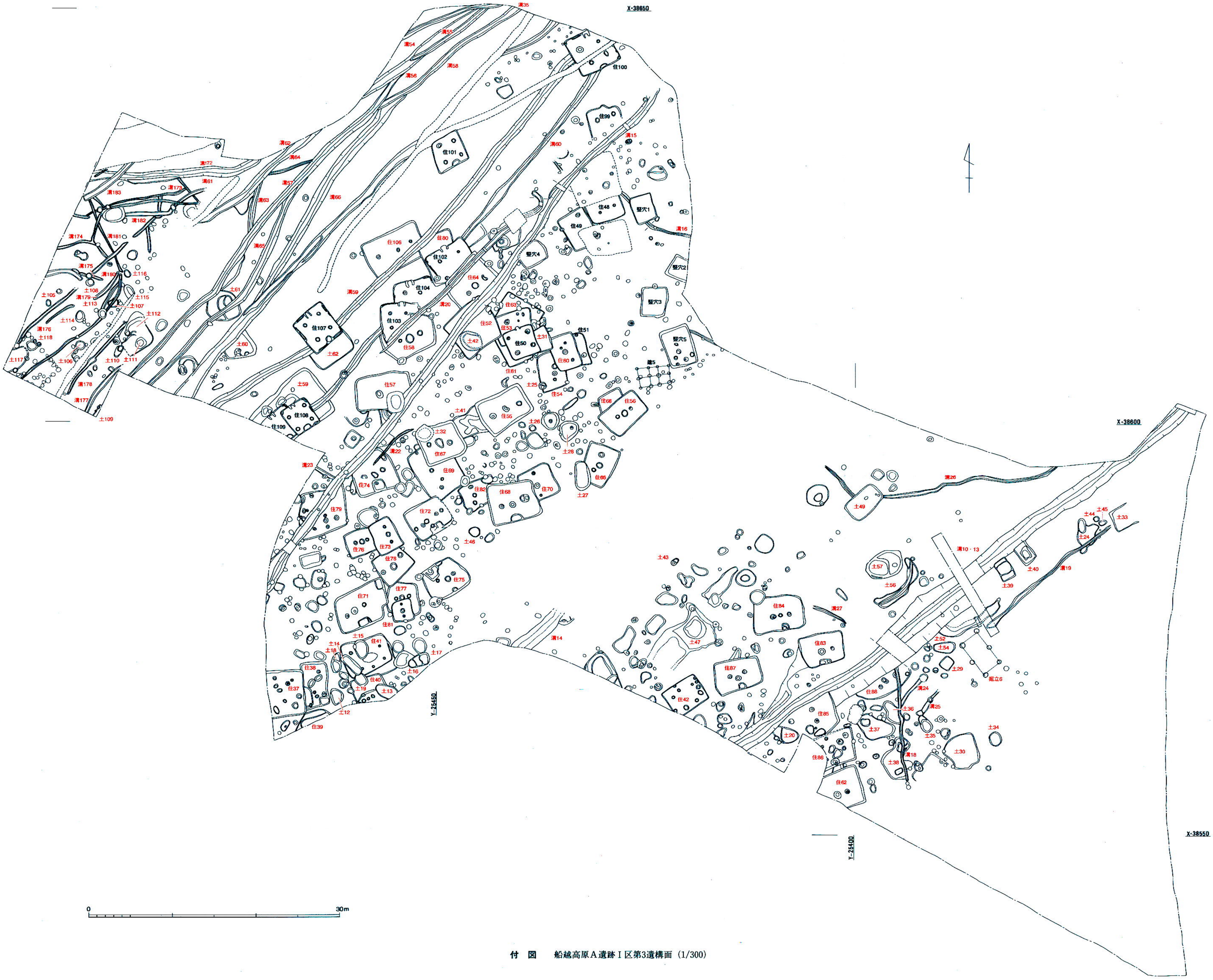
一般国道
２１０号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第15集

船越高原Ａ遺跡Ⅱ

平成13年３月30日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番地７号

印刷　株式会社西日本新聞印刷
福岡市中央区天神１丁目４番１号



付　図　　船越高原Ａ遺跡Ｉ区第3遺構面（1/300）